

魔法少女は俺がやるっ！（T S ・ 絶望魔法戦記）

あきらビット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

つまらない日常にうんざりしていた不良少年は、ある日異世界へ飛ばされる。

そこには一人のポニーテール少女が立っていた。

「あなたは、魔法少女になったの」

そう告げられた彼がおそろおそろ自分の姿を見ると、なんと小学生に、しかも女の子になってしまっているではないか！

その呪いを解くには町中に散らばった災厄の石を七つ全て封印しなければならぬ。

少女の言葉に、少年は戸惑いながらも魔法少女への変身を決意する……。

これは、不良&善良の凸凹小学生コンビが魔法と召喚獣を駆使して巨大な敵や悪の魔法少女たちと戦い、ループする世界から抜け出すというお話です。

※サブタイトルに☆がある場合は挿絵があります。

目次

プロローグ ☆	1
第一石：シャクヤク異世界に立つ!!	10
第二石：まな板の上の猫	17
第三石：コロナ、シャクヤクと	22
第四石：その名は、レイメイ	31
第五石：対決！ゆりなvsコロナ	36
第六石：雷と氷、どっちが強い？	41
第七石：魔法少女になんて絶対になりたくない！	47
第八石：お風呂	55
第九石：魔法少女の取扱説明書？	60
第十石：『ワガママ』	65
第十一石：選ばれたコドモ	70
第十二石：ナミダ、乾かして	75
第十三石：飯は高し食せよ乙女	79
第十四石：寝心地サイアクのふともも	85
第十五石：あばよ、チビチビ	89
第十六石：巨大なハチドリ!? ホバー・ザ・ルヒエル襲来!	94
第十七石：暗い空を見上げて	98
第十八石：夜空、咲く	103
第十九石：鬼退治ごっこ開始!	108
第二十石：飲み込んだ世界を、もう一度	113
第二十一石：明滅する瞳	118
第二十二石：落ちたケモノは赤を見上げる	123
第二十三石：vs 第八番模造魔宝石ダツシユ・ザ・アナナエル編	

第二十四石：魔宝石の能力

第二十五石：登場！爆走天使ももはちゃん

第二十六石：続！爆走天使ももはちゃん

第二十七石：どうしよう！もう正体がバレちゃった!?

第二十八石：なぜ？トップアイドルの脱退会見

第二十九石：アイドルを辞めたシャオメイ

第三十石：シャオメイって一体何者？

第三十一石：目が輝く現象ってなに？

第三十二石：ちっちゃな訪問者

第三十三石：黄金のサメだ！シャクヤクvsダツシュ

第三十四石：見た目に惑わされるな！

第三十五石：ダツシュとゆりなのお姉さん

第三十六石：飛び出せっ、氷の鉄拳！

第三十七石：余裕の勝利!?

第三十八石：反撃の咆哮

第三十九石：追いかけてアナエル

第四十石：式式とダツシュ

第四十一石：vs第十四番模造魔宝石コピー・ザ・ヨムリエル編

第四十二石：これからの禁止

第四十三石：看病するシャクヤク

第四十四石：雪むすめ

第四十五石：夏夢

第四十六石：家族

第四十七石	ももは？それとも別人？	266
第四十八石	急襲のシャオメイ	271
第四十九石	紗華夢 夜紅	276
第五十石	シャドーvsダツシユ	282
第五十一石	ゆりなどシャオメイ	289
第五十二石	藍色の光	294
第五十三石	いきなりランクB!? 恐怖のコピー	299
第五十四石	重装甲コピーvs集束のゆりな	304
第五十五石	完全召喚！ホバーを呼び出したゆりな	310
第五十六石	失われていく輝き	314
第五十七石	二つの走行モード	322
第五十八石	それはやけに生暖かくて	328
第五十九石	あつけないもの ☆	334
第六十石	怒りに染まる瞳	341
第六十一石	時園に迷う二つの魂 ☆	348
第六十二石	謎の眼帯少女、ネームレス ☆	355
第六十三石	一番幸せな最期	360
第六十四石	ああ、わかってるって	366
第六十五石	過去と現在を紡いで、	370
第六十六石	融合開花！ラヴシャイン!?	375
第六十七石	あのとき、俺は—— ☆	380
第六十八石	あの地、この空にさよならを	386
第六十九石	急げ！	392
第七十石	輝け、スノウシャイン！	396
第七十一石	脱皮	403

第七十二石：決着！黒白の魔法少女vs黒白の模魔・完
第七十三石：vs第貳番大魔宝石シロハ・ザ・チューズデイ編

419

第七十四石：この温もりを、いつまでも

第七十五石：お化けなんて

第七十六石：いかないで

第七十七石：ニヤンちくしようめ！

第七十八石：シャオとクロエ

第七十九石：霊瞳

第八十石：仲良しさん記念日

第八十一石：公園に佇む少女

第八十二石：なずな

第八十三石：どうして!? なずなの不思議なスケッチブック

第八十四石：小さな一歩、大きな勇氣

第八十五石：拒絶

第八十六石：一緒にお風呂！

第八十七石：せめて、今日くらいは

第八十八石：おそらく、もう二度と

第八十九石：シャクヤクは正義の味方？

第九十石：あの子って誰？動揺するクロエ

第九十一石：冷たい手

第九十二石：壺式と咆哮

第九十三石：シャクヤクvs墓守の白狐

第九十四石：熱い手

第九十五石：三叉の槍

541

537

532

528

521

517

512

507

501

494

489

482

475

470

463

456

451

447

441

434

430

424

410

第九十六石	：エンジン	を掛ける！	真の変化	アクセル	ランス	546
第九十七石	：壱式	は誰の	手に!?			552
第九十八石	：目覚めた	シロハ、	見上げる	先には		561
第九十九石	：後ろ髪、	引かれて				569
第一百石	：ナミダ					574
第一百壱石	：ピース	とシヤク	ヤク	終		578
第一百弍石	：v s	第九番	模造	魔宝石	ウエザー	・ザ
					ザ	ザザエル
						編
583						
第一百参石	：なずな、					588

プロローグ ☆

日常、それはとても退屈なものだった。だが、それはとても幸福なものだった。いつものような毎日が永遠に続くものだと思っていた。

「……………」

空に昇る巨大な赤い月を呆然と見上げる。雲もないのにフワフワと舞い降りる赤い雪を払いのけ、俺はひんやりとしたベンチから起き上がった。

「あー。悪いが、そのチビ助。もう一度言ってくれないか」
はいた白い息は、すぐさま赤い世界に埋もれてしまう。

目の前に佇む少女は、俺のため息に自分の吐息を重ねながら、ごによごによと呟いた。

「だ、だからね、」

決心したように彼女は笑顔で続ける。

「あなたは魔法少女になったの」

……………。

我ながらバカな夢をみるものだ。

俺にそんな願望があつたなんてね。はは、恐ろしい。

「笑えん冗談だな」

ひらひらと手を振り再びベンチに横たわると、強引に目を閉じてやる。

これは悪い夢だ。そうに違いない。

現実世界に戻ろうとまどろむ俺の頬に冷たいモノが触れる。

「まだ、あつたかいんだね……」

++ ++

幸せの壊れる瞬間なんて、あつけないものだった。

シアワセ——。

それは、ガラスのように透明で解りづらいモノ。

そして、ガラスのように簡単に割れやすいモノ。

割れた破片はそれを越えようとする人をいとも簡単に傷つける。体だけでなく心さえも、それは無残なまでに。その破片に足を取られ、転んでしまわないように。何故なら起き上がるには耐え難い苦痛を伴うから。ああ……。

知らなかつたんだ。こんなにも幸せが脆いものだったなんて。どうして、と笑う彼女を背に、俺は泣いていた。この美しくも醜い世界をただただ呪うしかなかった。

「もう行かなくちゃ」

少女は言った。

「ごめんね」

そう、悲しみを添えて。

＋＋＋

「……ぶえつくしー！」

寒い。

寝返りをうちながら、俺は鼻をグシグシとこする。今何時だ？

……いや。まあ、いいか。

今日もいつものように遅刻して行こう。

むしろ、休んじゃうか。面倒だし。

今更、不良の俺なんか定時きっかりに学校へ行つたところで熱でもあるのかと疑われるだけだろうし。

あー。考えるだけで鬱陶しい。やめだやめ。

とりあえず今はモーレッツに眠い——包み込むような眠気に俺はそのまま身を委ねることにする。

目を閉じ、再び眠りの中へとダイブを……。

「おい、そこのシラガムスメ」

ダイブを……。

「おいってば。おめえはいつまでグースカと他人様の布団で寝てんだ

よ！ その自慢の白髪、真っ赤に染めかますぞコノヤロー！」
朝っぱらからうるさいな。どこのヤンキー女だ。

っーか、ムスメなんざ俺の家に居ないっーの。

親父と俺しかいない、町内一のむさくるしい家族をなめないで頂きたい。

「恐縮だが、隣の家と勘違いしちゃあございませんかねエ。あいにく、ここは男だらけの大父子家庭でね。白髪なのは認めるけれども」

布団をかぶり、そう返す。やがて静寂が部屋を満たした。

案外とまあ、あつさり引き下がったもんだ。少し残念な気もするけれども。

今はとにかく——眠い。

「さてはてと」

言いながら、ぬくぬくと猫のように体を丸める。

うつらうつらとしかけた時——どすん。

なにかが俺の胸の上に……ぐお！

「寝ぼけてんじゃねえよ。そのツラのどこが男だっ——んだ！」

何を。

こいつは、さつきから何を言っているんだ。寝ぼけてんのはお前のほうだろうが。

ああ、頭に来た。

俺は布団から飛び起きると、フワフワと浮かぶそいつをガシッと掴んで、

「せつかくの俺の二度寝タイムを邪魔しやがって！ この、クソ猫が——つて、猫だあ!？」

即座に慌てて放してしまった。

おいおい、こりやあなんのジョークだ。

なんせ俺の前に浮かぶは、ちびっこい黒猫。こいつが喋ったのだというから頭が痛い。

……やべえ、マジで寝ぼけてんのかも俺。

じゃなかったら、なにかの手品か？

そう手で猫の背中辺りを触ってみるが、

「言つとくが、糸なんかで吊るされてねーからな……って、これポニ子
んときにも言つた気がするぜ」

小さな肉球をやれやれと言わんばかりに己の頭にポフツとあて、眉
間にシワを寄せる。

この仕草。この表情。

こいつは、ホンモノだ……。

ファービーのパチモンじゃないことだけは確かだ。

「なるほど。この猫、マスコミに売ったら俺は一攫千金……一生左団
扇で暮らせるといふわけか。ククク、益体も無い女が天から降つてく
るよりも有難いな」

「ぬわあにが、なるほど。だてめえ！ つーか、可愛い顔して物騒なこ
と言つてんじやねえ、このバカシラガ！」

ほほう。

口は悪いが、それもまた愛嬌。キャラ的には申し分ない。これは良
い見世物になるな。

上手くいけば遊園地のマスコットキャラクター的な立ち位置もあ
りうるかもしれん。

とにもかくにも悪は急げだ。

俺はそいつを再び掴むと、勢い良くベッドから飛び降り——つ

「うによえつ!？」

奇妙な鳴き声を発するグニヤとした何かを踏んづけ、

「おわっー」

盛大に転んでしまった。

ジンジンと痛む頭を抑えながら、俺は立ち上がり、そしてギョツと
した。

何故ならば、その踏んづけた物体とは——

「……あううう、痛いよお！ おなか破れるうー！」

どこにでもいそうな女のガキンちよだった。

腹を抱え、ごろごろと辛そうにのた打ち回っている。

なかなかファンキーな動きをするものだ。今時の若者にしては
筋がいい。

ふむ、と。俺はそいつを観察してみたりしてみる。
腰まである長い黒髪に、歳は俺より若いだろう。

いや、それもかなりだ。見たところ小学生くらいに思える。

俺が十四だから——四、五つ下くらいか。

ガラガラ蛇と蜘蛛が威嚇しあっている柄というハイセンスなパ
ジヤマを着たそいつは、涙目で俺を見上げると、

「あううー！ のんびり解説してないで、もつと他になんか言うこと
あると思うよう」

「おお、すまんチビ助。あまりに見事な転げ回りっぷりに見惚れてし
まってな。リアクションの勉強になったよ、いささかに」

いやはや、しかしまあ。なんだ。

「かなり遅れた気がするんだが、一体お前らは何者——もとい、何処の
妖怪だ？ そしてこの少女少女した部屋はなんなんだ。

スイーツなお化け屋敷ブームが到来することを予見しての先取り
なのか」

「よ、妖怪じゃないもん。あと、ここはお化け屋敷じゃなくってボクの
部屋！」

そう女の子座りのままぷいっとそっぽを向くチビ娘。

「そうか。妖怪じゃないもんっていう妖怪か。座敷わらしにも色々な
亜種がいるんだな。また勉強になったよ、いささかにな」

「違うもん！ 人間だもん！」

「もんもんって、お前はモンザムライかよ。安土桃山時代からタイム
スリップでやってきたのか。

どうせなら平成なんつー下らん時代じゃなく、もつと未来にしたほ
うが良かったと思うぞ」

「あうう、ちゃんとしたお話が出来てないような気がするよ。と、と
にかく！ ボクの名前は久樹上（ひさきがみ）ゆりな、だよ。

それに、タイムスリップはボクじゃなくって、キミのほうだと思う
……」

「だろうねえ」

俺は未だ温もりを保つベッドの上に座ると、手の中で黙りこくった

ままの黒猫をゆるりと解放した。

何を考えているのだろうか、そいつは飛び立とうとせず、俺の手のひらの上で少女の顔をジッと見つめている。

「だろぅねって、キミもしかして気づいてたの？」

その少女——ゆりなは立ち上がると、目を丸くした。

「いやあ。正直、さっきまでは頭がぼんやりしてワケがわからなかったが、今になって意識がはつきりしてきたんだ。

ありやあ夢かと思ってたが、お前さんの顔覚えてるぜ。俺に魔法少女どうのって言ってた奴だろ？」

「そう、だっけ」

チビ娘はとぼけるように言う。

む。まさかマジで夢だったのか。

あの時のトンチキな格好をした少女と瓜二つの顔をしている気がしたのだが。

似ているだけか……？

「いや、ポニ子。腹を決めようぜ。こいつが俺たちの目の前で召喚されたのは多分、そういうことなんだろうよ」

「でもでもー。そんな、簡単に巻き込んでいいとは思わないよ。確かに少し魔力は感じるけど、でも『魔法使い』になるってことは……」

「大丈夫さ。このシラガ娘は絡みづらいが、肝は据わっている。魔法使いとしての素質も十二分にあるぜ、ポニ子ほどじゃあねえけどな。

それに、戦力は一人でも多い方がいい」

「……無関係の人なんだよ。ダメだよ、そんなの」

「この世界に、魔力を持って召喚された。これのどこが無関係なんだっつうの。——おめえの気持ちも解るけどよ」

なにやら、やっこさん達で勝手に話を進めてやがるし。

当事者置いてけぼり過ぎるぞ。

ま、どうでもいいがな。

魔法使いだかなんだか知らねえが、テキトーに相槌打って、俺はとつと家に帰らせてもらうだけだ。

手土産にこの、世にも珍しい空飛ぶドル札をぶん捕まえてな。

きつと喜ぶだろうな、親父のヤツ。

「もしかして、あのお婆ちゃんか召喚したのかな……」

「だろうな。あのババアの仕業とみてほぼ間違いないと思うぜ。あまりにもタイミングが出来すぎてるからな。」

どっかの世界から魔法使いになりえそうなヤツを引つ張ってきてやるから、とつととパンドラの箱を封印してくれってことだろう。

それくらい、切羽詰ってるんだろうさ」

「それならそうと、言えばいいのになあ」

「何か考えがあるのかもな。……まあ、あのババアはまともじゃねえから、なんとも」

「あ、つてことはだよ。いっばいある世界の中から選ばれた一人つてことだよな。」

じゃあ、もしかしてもものすつごーい期待の新人さん？」

「キャパシティーに関しては、お前の方が優秀だとは思うが。」

まあ、まだ杖も持たせてねえんだ。どれくらい素質があるのかは正直、見当もつかねえな」

「そつかあ。そういえば、杖つて言ってもボクのしかないよ？」

「ああ、それについてなんだが——」

長い、長すぎる。

暇をもてあました俺は、とりあえずゆらゆら動く黒猫の尻尾をちよいちよいと指で弾いて遊ぶことにした。

ていつ、ていつ。ててていつ。

「だあ、バカシラガつ！ 人が真面目に話してるときに尻尾にジャレつくんじゃねえ！」

すさまじいスピードの猫パンチが俺の左頬を強打した。

っーか、人じゃないだろお前！

「いつてて、よくもやりやがったな、クソ猫お……」

このジャジャ猫め。俺が猫派だからといって下手に出ればこんちくしょう。

「けつ、きつきからクソ猫クソ猫つて。オレの名は——クロエだ。霊獣クロエ。無い頭によく叩き込んでおくんだな」

「ほう。そうかい。化け猫さんにも名前があるとは結構なことだね。んで、クロエさんよお。その霊獣というのは一体なんだね。苗字にしてはいささかに訝しいものだが」

と、俺はからかい気味に言ってみる。しかし。

答えたのは少女のほうだった。

「色々、疑問があつて当然だよ。大丈夫、まとめてボクから説明するよ。ボクもイマイチわかんないところ、あるけど……」

でも、その前にキミの名前を聞かせてもらえると嬉しいな」
澄んだ黒い瞳。無垢な視線が突き刺さる。

ああ——こういうの苦手なんだよな、俺って。

テレビでたまにやるような動物特集なんてものが親父は好きらしく、よく居間で観ているんだが、

俺はあいつらの人を見透かしたような瞳がキライでね。

どうしようもなく胸がモヤモヤして、いつもすぐに席を立つんだ。

「どうしたの？」

ゆりなが俺の顔を覗き込む。

まただ。

胸がチクつと痛み、俺はため息をついた。

そんな目で、あまり見ないでくれとも言えねえし。

「……ああ、そうそう。名前、ね」

まあ、こいつらに本名を明かす必要もないだろう。

どうせ長い付き合いんじゃないんだ。テキストでいい。

俺はフツと視線を逸らすと、小さな学習机の上に置いてある一冊の本に目をとめた。

季節の花図鑑——か。

そいつをパラつとめくりながら、俺は気だるくこう答えた。

「あー。俺の名前は、シヤクヤク。よく、人に珍しいねって言われます。でも覚えやすいように近所のおばちゃんには大好評です。

恐縮だけれども、ヨロシクどうぞして頂ければこれ幸いってなもんで」

しばしの間。

「あんだあ、その妙ちくりんな名前は！ オレの事言えねえだろ！
つーか、お前。今、その凶鑑からとっただろ！」

クロエが毛を逆立てて矢継ぎ早にツツコむ。

いやま、そりや当然の反応だ。

「ええと。それについてはだな、」

言いかけたところで、黒髪少女がずいっと割り込んで、

「ダメだよ、クーちゃん！ ボクは、とっても可愛い名前だと思うも
ん。」

シヤクヤクちゃん……、ううん。しゃっちゃんって呼んでいいか
なっ？」

と。

んな名前あるわきやないのに。フツー信じるかねえ。

それに言いづらくないか、そのしゃっちゃんってのは。妥協して
さっちゃんでもいいんだぜ。

某大手の幽霊様とかぶつちやいるが、さ。

いやはや、まったくもって。なんだろうねえ、この子は。

俺にはどうもこの子がわからない。今までの人生で会ったことな
いのだ、こんな娘に。

——いや、こんな人にか。

だから、この時の俺はどう答えればいいかわからず、アホ面満開に
ただ頷くしかなかった。

「わーい、やったあ！ じゃあ、自己紹介も済んだことだし。かいつま
んで説明するね。ボクたちのこと、魔法のこと、この世界のこと。

そして——キミのことを」

言うと、ゆりなは俺の隣にそっと座り、

そしてゆつくりと……ただどしく話を始めた。

第一石：シヤクヤク異世界に立つ!!

「ある日ね、ボクン家に小さな箱が送られてきたの。

キラキラたくさんの宝石に彩られた、とても可愛い小箱。ええつと、確かこの辺に」

言うのと、ベッドの下からもぞもぞと小箱を取り出した。

ほお……。

ごてごてとまあ、立派なものだな。

「でしょでしょっ！ それでね、一体何が入ってるんだろうって開けてみたら、凄い数の宝石がつまってたの。

赤いのか、青いのか。とつても綺麗な宝石たちがいっぱい。

綺麗だなーってしばらく見惚れてたんだけど、急に爆発したの。どっかーんって」

はて。爆発した割には焦げ痕が見当たらないが。

というか、よく五体満足でいられたな。

そんな至近距離で爆発があつたというのならば、普通無事では済まないと思うのだが。

「ち、違うよ。そういう爆発じゃなくって、なんていうのかなー」。

七色の光が、ぶあくって！ それでそれで、中に入ってた宝石が、ばびゆくんって、……えつと、あのあの」

ぶあく、に。ばびゆくん、ですか。

まるで子どもみたいな説明だな——って、子どもだったな。そういうや。

しょうがねえかと溜め息をついた俺に、ゆりなが慌てて両手を振る。

「ふええくつ。しゃっちゃん、ごめんね！ あうう、クーちゃん助けてええ」

説明係りに任命されたクロエは嫌な顔をするかと思いきや、待ってましたとばかりにゆりなの頭上へと着地すると、

「へっ。だろうと思ってたぜ。しょうがねえな、ここからはオレが説明してやる。」

よおく耳の穴かつぽじって聞くんだな。ええつと、なんだ。そうそうこの箱だ。

こいつは、『パンドラの箱』ってんだ」

パンドラだあ？　こんなちっこい箱がそんな壮大な箱には見えねえぞ。

いささかに、怪しいものだな。

「怪しめ怪しめ。オレだって正直な話、これがあの伝説のパンドラかどうかは半信半疑さ」

けけつと笑いながら、

「だが、このパンドラ——もしくは、パンドラモドキにはあらゆる災害、すなわち『厄災』が詰め込まれていた。

……これはマジだ。そう、伝説の箱そのままにな」

災害か。

地震、雷、火災、みたいなアレかい。

「ああ、そんなところだな。

んで、それらの厄災は『七匹の霊獣』と呼ばれる護り神に一つずつ封印され、箱に詰められていたんだ。

ここ数百年は何事もなくピースの元で保管されていたんだが、何がどう回りまわってか、こいつ——ポニ子んとところに突然パンドラが送られちまったワケ。

そして、

しばらく聞き入っていたゆりながそれに続けて、

「そしてね。ボクがそれを開けちゃって、霊獣さん達みんな散り散りに飛んで行っちゃったんだ……」
なるほどな。

爆発というのは、そいつらが逃げ出した瞬間のことを言ったのか。

「……うん」

こくんと、すまなそうに俯く。

足場を失った黒猫は慣れた動きでゆりなの肩へと移動すると、

「だから、おめえは悪くないっつーの。ピースのヤローがちゃんと見張ってねえから悪いんだ」

ええとだな。

とりあえず『ピース』とやらが何なのか見えてこないのだが。

「ああ、ピースつつうのは詳しく説明すれば長くなるが、端的に言えば魔女だ。この世界で現存する唯一にして最強の魔女。」

これは、ババア本人が言っていたから本当かどうか定かじやねえケド」

あんだそりや？

一人しかいないってんなら、そんなの自動的に最強になるだろ。

「につしつし、ごもつともで。……ま、ただの言い間違いだと思っぜ」
「うくん。ボクは本当にサイキョーだと思っなあ。もし——他にたくさん魔女さんがいたとしても、ね。」

だって、あのお婆ちゃんからあんなすっごい魔法の力をもらったんだから。絶対、ずえつたい、強い魔女さんに違いないよっ」

これはこれは、自信おありなようで。

会ったのかい、そのピースという婆さんに。

「ううん。声だけ、かな」

「滅多に人前に姿を現さないからな、あの婆さんは。出てきたとしても、いつも不気味な面をかぶっていやがるし。」

そーいや、オレでさえ素顔は見たことねえかも。まあ、それは置いてだ。

そのピースから魔力と杖を授かったポニ子は、飛んで行ってしまった宝石を集めなきやいけねえことになったワケ」

ははあ。

なにやら凄い魔女だというのは分かったが、そんなに凄い凄いと云うのならば、そのピースとやらが直々に宝石を探しに行ったほうが早いんじゃないのか。

わざわざ、ペーパーの子どもに魔法伝授なんていう、まどろっこしいやり方じゃなくてよ。

もたもたしてちゃあヤバイんだろ、厄災つつうくらいだし。

「真つ当な意見だな。オレもそう思っぜ。まあ、答えは単純な話だ。」

あのババアは——ピースはまともなヤツじゃない。何を考えてい

るのか分からない変人さ。あいつは自分ではさらさら動く気がないらしい。

だが、ポニ子ひとりじゃあ全ての宝石を探し出すには、さすがに時間がかかりすぎるってことで、

なるほどねえ……。中々に読めてきたぞ。

俺がア、アレかい。そういうことかい。

「明察」

黒猫がニヤリと笑う。

「そう、おめえに白羽の矢が立ったというわけだ。ポニ子とシラガ娘の二人でならスムーズに宝石を集められるだろう、ってな」

あー、予想以上に面倒な話だ。

そんじやま、ここいらが引き際かね。

「へえへえ。そりやあ光荣痛み入る話で。だがね。恐縮だけでも、辞退させてもらおうよ。」

俺ア、ロボットやSF世界なんてものは好きだけだよお、魔法なんてもものには一切ピンともカンとも興味が湧かなくてね。

もう一度ピースという婆さんに選抜し直してもらうことをオススメするさね。

やりたいヤツは沢山いるだろうし。悪いけれどもってことで、そろそろお暇を——」

俺の言葉に、ゆりなが顔を上げた。

「うん。しょうがないよね。……無関係なしゃっちゃんを巻き込むわけにはいかないし。大丈夫だよ、ボクひとりで出来るもん」

うお。またあの瞳だ。やめてくれっての、それ苦手だから。

あと、しゃっちゃんはやっぱり言いにくいだろ。

「……ひつぐ、うう」

って、おいおいマジかよ。

ぼたぼたとゆりなの瞳から大粒の涙がこぼれ始めたところで、耐えきれなくなつた俺は立ち上がって、

「まア。そう悲観しなさんな。すぐに代わりはやってくるさ。次はきつと、俺より男前なペンペン草クン辺りが来るだろうさ。」

そしたら、ペンペンちゃんとかペン草ちゃんとか噛まないような名前前で気軽に呼べるぞ。喜べ。そして笑え。出来たら泣き止め」と。

俺にしちやあ頑張ったほうなんだが。

しかしながら。

「……ひつぐ、しゃっちゃんのほうが可愛いもん。ひつぐ、噛まないもん。ひやっちゃん、うえええん」

いやいや、さっそく噛んでるし。

「あーあ。ポニ子を泣かしてやんの、バカシラガ。しーらね、しーらね。ピースに言ってやる。けけっ」

クロエが茶化しながらふよふよと面白そうに俺の目の前を飛び回りやがる。

「クソ猫オ。ふぎけてねえで、どーにかしてくれよ。男が子どもを、しかも女を泣かしたとくりやあ、親父に申し訳がたたねえって」

言い切った俺だったが。

ん——？　なんだ、この空気は。

さきほどまでケラケラと楽しそうに浮遊していたクロエが突然ストップし、

「……男があ？」

訝しそうな目で嘗め回すように俺の顔を見る。

ついでに、わーわー泣いていたゆりなも、きよとん顔で俺をジイっとなんて見上げている。

「……子どもを？」

「な、なんだよ。俺のツラに何か変なものでも、」

言いかけたところで、そいつらは顔を見合わせてドツと笑い出した。

「にやははははっ！　男が、子どもを、だつてよ！　こいつは笑えるぜっ」

「だ、ダメだよクーちゃん。しゃっちゃんは本気で気付いてないんだよ……ぶっ、あはははー！」

ちよつと、タンマ。マジで何を笑ってるのか理解出来ないのだが。

いやいやいや。そんな、お二人さん。

笑い転げてるどころすまないけどもさ、なにがそんなにツボに入ってたんだって。

さつきまでの涙を笑い涙に変えたゆりなが、うろたえる俺に、

「しゃ、しゃっちゃんの後ろに鏡あるから、それ見てみるといいよ」

鏡イ？

身体をねじると、確かにそこに鏡があった。

「鏡はあるけどもよお。それが、どうしたって——」

時が止まった。

こんなありきたりな表現が精一杯だった。

全細胞がそれまでの作業を中断し、口々に「どういうことだよ……」と騒ぎ立てているかのような。

それほどまでに、鏡の中は狂っていた。

「どうだい、生まれ変わったてめえの姿は。可愛いじゃあねえか、いささかに。ってかあ？　につしつしつ！」

黒猫のからかいにツツコむ気すら起きん……。

「おかしいなーって思ってたけど、本当に気付いてなかったんだね。しゃっちゃんってば」

ああ、そうさ。今の今まで気付かなかった。笑われて当然だったな。

なんて——バカバカしい。

なんて——滑稽な。

くるんとカールしたまつげ。震える桃色の唇。

ふんわりと緩いカーブに整えられた白い長髪。

版權もののネズミがプリントされたガキくさい白のキャミソールに、やたらに丈の短い水色のスカート。

「なんじゃこりゃ」

鏡の中のチビ女が俺の挙動を逐一真似やがる。

シャドーボクシングをすれば、鏡の中のそいつが微笑ましいパンチを繰り返すし、

メンチを切る仕草をすれば、鏡の中のそいつは悩ましげな表情をす

るし——

「つて、なんじゃこりゃああ!!」

両手を振り上げて膝から崩れ落ちつつ、もう一度だけ念のために叫んでみる。

が。

やはりというべきか、

掃除の時間にテンションがあがってふざけちゃいましたと言わんばかりのガキンちよが鏡の中にいた。

ふむ。

少し乱れてしまったスカートと前髪をちよいちよいと直しながら、こほんと咳きを一つ。

「おい、コラアアア! ニヤン畜生オオオオツ! 命が惜しけりや、悪いことは言わねえ。俺様を元の姿に戻せ、いますぐにだッ!」

隣でニヤニヤと笑う黒猫の尻尾をシャカシャカと振りながらすぐんでみるが、

「そいつは無理な注文だな。オレに言われても、こればかりはおめえを呼んだピースじゃねえとさあ」

「だったらピースを呼べ! 俺は男に戻って元の世界に戻るっ。こんなふざけた話があるかよ!」

言うのと、クロエはスツと真顔になって飛び上がり、

「——元の姿に戻り、そして元の世界に帰りたいのなら、いくら探したって方法は一つしかないぜ。」

お前が第二の魔法少女となり、ポニ子と……ゆりなと一緒に散らばった宝石を全て集めることだ。どうあがいても、これしかテメエに道はねえよ」

俺を見下ろしながら、冷ややかな口調でそう告げた。

第二石：まな板の上の猫

こいつは……。

なんて、簡単に言いやがる。

だいたい何故、男の俺がガキ娘の姿に変えられてまで宝石とやらを探さなきゃならんのだ。

ハナっから女を選んで、そいつにやらせりやあいいのに。

魔法少女なんてもんは、女の仕事だろ。

「さつきも言ったが、ピースの考えはオレだって良くわからねえぜ。

これは多分だが、察するに大物になりうるであろう素質さえ備わつてりや、性別はどっちでもいいのかもしれないねえな。

どうであれ、性別を変えるくらい、あのババアだったら朝飯前だろうし」

「だから、どっちでもいいーなら、なんでワザワザ女に変える必要があるんだ。男のまんまでいいだろ。魔法少年ってことでさア」

「あー。言われてみりや、そうだな。うーん。ほら、アレだろ。ピースの趣味。魔法使いは、やっぱり少女じゃないとダメっていうさ」

イヤな趣味のババアだな……。

「自分が歳を食ってるっていうんで、若い女を従えてピチピチエネルギーを吸収しようとしている、とかな。にっしっし！」

ピチピチエネルギー。

「魔法世界の上下関係なんざ、まったくもって知らないけどもよオ。そいつは偉い魔女なんだろう？」

よくそんな口の悪さでやっていけるな。俺がピースだったら、とりあえずお前さんをクビにするぞ」

言いつつ、ゆりなの横へどっかりとあぐらをかいた俺に、

「それは出来ないと思うよ。だって、クーちゃんは特別だもん」

すっかり笑顔を取り戻したゆりなが、自慢げに無い胸を仰げ反らせながら言う。

「じゃ、しゃっちゃんー！」

……ん？

「むーっ！ ボクだって一応女の子なんだからねっ」
ふうん。

イツチヨ前に顔赤らめて、まア。

「わりの、うそうそ。言葉の綾だって。日本語むつかしいアル」

「うー。訂正を要求します！」

謝罪までいかなくて良かったよ。

「オーケイ」

んじや、えーと。

すっかり笑顔を取り戻したゆりなが、自慢げにナイスバディを仰げ
反らせながら――

「そ、そーゆー意味じゃないよっ！」

泣いたり笑ったり怒ったりと。

なんとも忙しい奴だな。

「あっ」

ゆりなが驚いた声を出し、俺の顔を覗き込む。

「な、なんだあ？」

「今、しゃっちゃん笑ったでしょ。とつても可愛かったよ」

にへへーと屈託のない笑みを向ける少女。

……ったく。

俺ばかりが面食らって、どうもね。割に合わん。

そうだな、ここはひとつ。

「なんだ知らなかったのか、俺はどんな表情でも可愛いんだぜ」

耳にかかる髪をかきあげながら言ってる。

ちなみにこの仕草は俺が一番グツとくるヤツだ。

「うんっ！」

って、おい。

「そこは否定してくれて、冗談に決まってるだろうよ。恥ずかしい」

「えへへ。恥ずかしがってるしゃっちゃんも可愛いよ」

「……そりやどーも」

そういえば。さっき、こいつに顔を覗き込まれても胸が痛まなかつ
たな。

どうでもいい話ではあるけども。

「仲良きことは美しきかな。微笑ましいところ悪いが。おめえら、ちよつち窓の外を見てみそ」

唐突に、クロエがシリアスな声色で言う。

「へ？」

二人で外を見やる——と。

朝焼けの中に一匹の蝶々が舞っていた。何故かその羽根は淡緑色に発光している。

「ほよー。光ってるキレイな蝶々さんだ。あはは。やつぱし気になるんだ？

なんだかんだ言つて、クーちゃんつて猫さんだよ。今日のにやんこつてテレビに出てた子も蝶々さんと遊ぶの好きだったし」

クロエはやれやれとばかりにため息をついて、

「バーロオ。おめえさア、羽が光ってるテフテフなんざ現実にいるわきやねーだろ」

「えっ!？」

俺たちは同時に驚いた。

浮遊する猫が存在しているくらいなんだから、光ってる蝶だっていそうなもんだけどな。

「シラガ娘は勘違いしてるみたいだが、オレたちが特別なだけであつて、世界自体は至極真つ当なんだ。

みんな、魔法なんて現実にあるとも知らずに暮らしている。それこそマンガやアニメの世界のものだつて認識さ」

ということとは、俺が元に居た世界とあまり変わらないのか？

「どうかな。まず、おめえがどういった世界に居たかを知らねえし。まあ、自分の目で確かめてみることだな、早速よ」

早速——？

「オレの話きいてたろ。パンドラから逃げ出した七匹の霊獣を魔法でぶちのめして捕獲し、宝石へと再度封印をするつてよ」

逃げ出した霊獣と宝石集めどのはきいた気がするけども、具体的な流れは今初めて知ったぞ。

「じゃあ、今言った。ほら、ポケポケしてねえであの蝶々を捕まえに行
くぜ、ポニ子！」

「ええー!?　せめて着替える時間が欲しいよお。出来れば髪を結う時
間も……」

「んなノンキに構えてる余裕あるわきやねえだろ！」

「は、ほう」

どてらだけでもと、羽織ってバタバタ部屋を出て行くゆりなど黒猫
を見送り、俺は肩をすくめた。

いやはや大変だねえ、魔法少女とやらは。こんな朝早くから出勤だ
なんてき。恐れ入るね。

「さてはてと」

ベッドの中へ入り、ぬくぬくと猫のように体を丸める。

うつらうつらとしかけた時——どすん。

なにかが俺の胸の上に……って、ぐお!

「このやり取りさつきもやっただろ。いーから、おめえも来るんだよ、
バカシラガ！」

二度も踏んでくれやがって。小さい胸が更にへっこんじまうだろ
うが。

「……小さいもなにも、まな板同然じゃねーか」

「むーっ!　あたいだって一応女の子なんだからねっ」

頬を膨らませて、言ってみたり。

「わあっ。漫才ならあとでいくらでも付き合ってやるから、マジで
もう行くぜ」

呆れ口調で返される。

「へえへえ、切羽詰まっているようで」

「放っておいたら、誰かに見つかって大騒ぎになるかもしれないねーしな。
それならまだしも、暴れて町を壊されたりなんかしたらもつと厄介
だ」

厄災を抱える獣、か。

久々のシャバだ。遊びたくなるのも解る。

やむかたなし。

行くしかないってワケねえ、どうしても。

第三石：コロナ、シヤクヤクと

外に出るとゆりなが今にも泣き出しそうな顔で、

「ど、どうしよう、見失っちゃったよお」

せわしなく足踏みをしながら言う。

その足踏みに意味はあるのかと問いたくなるが、その前に黒猫のツツコミが入った。

「あんだと、先に追いかけてろって言ったじゃねーか！」

「だつてえ、一人じゃ心細いんだもん……」

にへへと照れながら、兩人差し指の先端を合わせてモジモジ。

なんともまあ。

現実になんな仕草をするヤツ本当にいるんだな。

「かぁー、なっさけねえ」

やれやれと大きさに嘆くクロエ。

「いやはや、それでも天下のグレート魔法少女かい？」

続いて俺もからかい気味に言ってる。

「はう。ボクは天下でもグレートでもないよ……。この前なつたばっかだし、魔法だつて全然知らないもん」

そう、うな垂れるゆりなに俺は肩をすくめた。

うーむ。マジメに返されてしまうと、なんとも。

「つつーか、ポニ子を責めてんじゃねえ、おめえがチンタラしていたからだろー！」

突如、繰り出された猫パンチがみぞおちにクリーンヒットする。

へそ丸出しルツクの今の俺にそれは大ダメージなワケで。

誰だよ、キャミソールなんて防御力皆無なもんを俺様に着させた奴はア。

「イテテ、こんのバカ猫お……自分だつてガーガー言ってたクセに」

「いいんだよ、オレは。ポニ子をイジめていいのはオレだけだ、おめえにはまだ早い。いささかにな」

ふんぞり返って言う黒猫に、俺とゆりなは顔を見合わせた。

なんだその、好きな幼馴染の女の子にちよっかいを出したヤツに怒

り心頭のがき大将が胸ぐらを掴みながら言いそうなセリフは。

「……よくそんな例え、瞬時に思いつくよな」

それは賛辞として、受け止めておくことにしよう。

「あ、あのう……。クーちゃん、蝶々さん追っかけなくていいの？」

と、ゆりなの発言にクロエはハツと思いい出したかのように、

「おっと、そうだった。それじゃあここは二手に分かれて探そう。オ

レとポニ子は左へ行く、シラガ娘は右を頼むぜ」

「ほい、了解うけたまわりっ！　しゃっちゃん、見つけたら知らせて

ねっ」

そう言つて、そそくさと二人で立ち去ってしまった。

ポツーンと佇む俺の目はきつと点のようになっていたことだろう。

おいおい、ちよつと待ってくれ。一つ疑問なんだけでもよオ。

見つけたら知らせろつてさア、どういった手段で知らせりやいいんだよ？

心の中で嘆いた後、俺は一人寂しく右の道へと歩を進めることにした。

+ + +

口笛を吹きながら頭の後ろで手を組み、適当に歩き回ってはみるが

「いねえじゃんよ……」

周りを見渡せど、それらしい蝶なんざ一匹たりとも見当たらない。

トンボや天道虫なら山ほど見かけたけどさ。

「やってらんねえ」

俺は公園のベンチに腰を下ろして、空を見上げた。

ゆつくりと流れる厚い雲、暖かい陽光。鳥のさえずりが眠気を誘う。

「なーにやってんだろ、俺ア」

知らん世界に飛ばされて、いきなり知らん道を歩かされて。

魔法少女になれたの、霊獣とやらを捕まえるのだの……よ。

これがロボットに乗って世界を救えとかいう、熱い展開ならまだ気は乗らないでもねエが。

——ん？

そもそも、何故俺はあいつの言うことをマジメにきいているんだ。黒猫の言葉を思い出してみる。

たしかあいつは、俺が第二の魔法少女となり、あのチビ助と一緒に全ての宝石を集めない限り、元の姿および元の世界に戻れないと言っただな。

もしも、それ以外に方法があるとするのならば。

例えば、扉みたいなのがあつて、そこへ入ると現代に戻れるみたいなさ。

そんなもんなくとも、何か情報が掴めるかもしれない。今はちょうど自由に行動出来るし。

あいつらと仲良しごっこをして宝石を集めるなんざ、長つたらしくてやってられんし、それ以上に性に合わん。

「どうせだったら……脱出方法を探ってみるか？」

そう一人呟いたつもりだった。

しかし、その時。

「肯定です。探ってみましょうです」

小さな返事が返ってきた。

ゆるりと視線を下げると、目の前に少女が立っていた。

俺だって今は少女の分類に入るかもしれねえが、その声の主は更に幼かった。

いいところ四、五才あたりか？

今にも眠ってしまいそうなトロンとしたエメラルドグリーン瞳に、

ペリドットカラーのさらさらツーサイドアップ。

やけに袖の長い園児服のようなものを身にまとった彼女は、一旦視線を彷徨させたあと、

「肯定なんです」

もう一度、俺をジツと見つめて言った。

こりゃあ。どう見ても俺に向かっての発言だよなア。

次から次へと——今日は間違はなく厄日決定だ。

さてはて。

「あー、外回りで疲れてるんだ。日本のお父さんは忙しくてなあ。今日なんてまだ一台も契約が取れなくてさ。」

来週までに三台は取って来いなんてムチャ言うんだぜ、まったくもって、現場が見えてねえんだよなデスクワーカー共って奴ア。

とまあ、詰まるところのあっちへ行行って一人で遊んでくれると助かるのだよつつう事だ。しっし」

手を振るジエスチャーを見ていないのか、そいつは眠そうな目をパチクリして、

「パパさんなんですか？ ママさんに見えます」

「ママさんって……んな歳でもねえよ。見てみそ、このピチピチの玉のような肌をよ」

「否定です。コロナのほうがピチピチなのです」

そりやまあ、お前さんに比べたら敵わんて。

「ま、んなこたアビーでもいいワケで」

俺は背後にある、カラフルな遊具を親指で指しながら、

「悪いけれどもよ、チビチビ助。遊び相手なら、そのジャングルジムさんにでも頼んでくれ」

しかし、そいつは動かずにただひたすらと俺を見つめ続ける。

「あんだよ……。言いてえ事あるんなら素直に言ったらどうなんでえい」

「自分はコロナです。チビチビ助ではないのです」

あーそう。

「そりやあ、すまなんだ。じゃあチョココロネちゃん、そろそろおいちゃんはお暇させてもらおうよ」

言って立ち上がり、腰をポンポンと叩いていると、

「コロナです。チョコは入ってませんので、あしからず」

ぼそっと呟き、俺のスカートを掴みやがる。

なんなんだよ。何が目的なんだ、こいつは。

「わかったわかった」

やや乱暴にチビチビ助の頭をグシグシと撫でて、

「あばよ、コロ美！」

そう颯爽と立ち去ろうとするが、一向に前に進めん。振り返ると、コロナが未だに俺のスカートを掴んでいる。つつーか、何だこのパワー。ガキンちよの力じゃねえぞ。

「だあら、なんだってんだよ!？」

俺が語気を荒げると、そいつは一瞬ビクつとしたあと、

「コ、コロナは……喉が渴いたのです」

指をくわえながら、チラツと公園中央あたりの水飲み場を一瞥する。

「ああ？　するつてえと、おめえさん俺にあそこへ連れて行ってもらいてえのか？」

眉をひそめる俺に、コロナはコクンと頷いた。

まあ、確かに水が出る場所はやや高い位置にあるな。

このチビチビ助なら抱っこしてやらなければ届かないだろう。

それくらいなら——そう考えていると、

「……やっぱ、いいのです。否定するです」

急にそいつは首をぶんぶん振って、俺のスカートから手を離れた。

「ごめんなさい、ママさん」

探さないでください、と続けてトボトボと歩き去っていく。

一体なんの心境の変化があったのか。

ま、これで邪魔者は居なくなったな。

邪魔者は——

その時、俺の頭の中に嫌な思い出がよみがえった。

久しく忘れていた、あの吐き気のするようなやり取りがリフレインする。

「……あー、マジ面倒くせエ」

俺はスカートのポケットを探った。

こちらの世界に召喚される前、確か俺はコンビニへと買い物に行くところだった。

そこらへんの記憶が途絶えている為、多分その途中で俺はこちらに召喚させられたのだろう。

だから、確信はあった。

「四百円と、ひいふうみい……三十円か。この世界の自動販売機、日本の金使いりやいいけど」

俺は小銭をもう一度ポケットに押し込み、

「この俺が、センチティブに」

自分の柄にもない行動に嘲笑しつつ、あのチビチビ助を探すことにした。

＋＋＋

程なくしてそいつは見つかった。

そりゃあ、同じ公園内でブランコを一人で漕いでいたからな。探してくれるなと言う方が無理がある。

「おい、コロ美。行くぞ」

声をかけるとそいつはビックリしたように顔を上げた。

「えっ？」

コロナの前に腰を下ろす。その時、一瞬彼女が目をつぶったように見えた。

多分、恐がっているのかもしれない。いや、絶対だな。

そりゃあ前の世界では散々恐がられてはきたが……なんだろうな、この胸の痛みは。

ただの成長痛だと思いたいところだがね。

「ああ、そうか。こうだな」

くるりと回転し、背中を見せる。

「もしかして、おんぶですか？」

「肯定するぞ」

「で、でも」

「乗らねえなら、今日の営業は終わりだ。さつき無線で、空いてるようなら三丁目の山川さんに乗せてくれって頼まれたもんでさア」

テキトーに言うと、

「の、乗るですっー！」

そう背中にダイブを決め込むコロナ。

「軽い軽い」

よっこいせとおんぶし直して、立ち上がる。
さあて、自販機はどこかね。

＋＋＋

その後、なんとか自販機でジュースを買えた俺たちは、先ほどの公園のベンチへと舞い戻っていた。

「うめえーか？」

ついでにと自分の分を買ってきた八十円で二個入りの乳酸菌飲料を叩いた後、訊いてみる。

コロナは両手でペットボトルを掴みながら、

「肯定、ガボガボ。美味しい、ガボガボ。れす」

「いや、無理に声を出さんでもいい。こんな公園のど真ん中で溺れ死んでもらっても困る」

しかしまあ、どんだけ喉が渴いてたのやら。

みるみるうちにボトル内のはちみつレモンジュースが無くなっていく。

やがて、

「けぷ」

と小さなゲップをすると、ペットボトルを下げ、同時に頭も下げる。

「ありがとうございます、ママさん。完膚無きまでに幸せでした」

「いささかに間違えているような気も否めないが、まあ喜んでもらえて何より。」

あと俺はまだママって歳でもなけりやあ、性別でもねえから。そこんところ宜しくってなもんで一つ」

さて、いい加減に時間を食いすぎたな。あのバカ猫にどやされるのもシヤクだし。

そろそろ、ガキのお守りはこれくらいでいいだろ。

「んじゃあ、今度こそあばよチビチビ助」

頭をポンポンと優しく撫で、

「……悪かったな。さっきは恐がらせちまって」

一応言っておく。別に本心ではないからな。

親父に女子供を泣かせるなって言われたからさ、ただそれだけの話だ。

今度こそすんなり帰してくれるだろうと踏んでいた俺だったが、

「ママ、ううん。パパさん」

再びスカートを掴まれ、前につんのめってしまう。

「次はなんだア？ ションベンに連れてってなんざぬかしやがったら――」

やれやれと振り向くと、

「目、目がピカってる!？」

俺はギョっとして半歩さがった。

なぜならコロナの緑眼がライトのように光っていたからだ。

比喩などの表現ではなく、マジで明滅しているワケで……軽くホラーの領域入ってるぞ、こりゃあ。

「……来てください。渡したいモノがあるのです」

度肝を抜かしている俺をコロナがさらりと促す。

来てください、と言われてもなア。

「そう仰られましても。親父に、知らない子どもについて行ったり、物を貰ったりしたらダメと言われてるもんでさア。

いやはや、色々な意味でね。今のご時世」と。

おどけて言ってみるが、

「パパさんには無くてはならない、とつても大切なモノです。お願いです、コロナを信じてみちゃってください。はちみつレモンのお礼なんです」

「そらまたご丁寧に。……どうしてもって、ワケかい?」

首肯を一つ。

「わあーったよ、そんなに遠くないなら行ってみるさ」

だって。そう言うしかねえじゃん。

あんな、どこを見ているのかわからないような瞳で、口を真一文字に結んじやってさ。

逆らったら何をされるか。なんていうのか、アレを感じるぜ。ええ

とアレは――

「ふれっしやあ」

「そうそう、プレツシヤーだ！　って、ちよい待ち。ひよつとしておめえさん人の心が読めるのか？」

嘘だろ、おい。エスパ―少女って奴か？

いや待てよ、もし読めるとしたら。

ふむ。

こいつをさらって一儲けできるかも……いや、その前に帰れないんだっつーの。

「否定しますです。パパさんだから読めるのかもです」

なんじゃそりや。俺の心だから読めるって、どういう意味だよ。

俺が首をかしげていると、そいつは無言のまま踵を返してスタスタと歩いて行ってしまった。

「お、おい！　待ってってば、コロ美！」

慌ててついて行くこうとする俺に、チビチビ助が振り返って、

「あと、コロナのことをお金儲けに使おうなんて考えちゃ、めっです」

そう釘を刺されてしまった。

飛んで喋る猫とエスパ―少女、中々良い金になると思ったのだが。

これはこれは。

第四石：その名は、レイメイ

「ここなんです」

コロナが言っただけで立ち止まった。

「なんですって、言われてもさア」

改めて周りを見渡すまでもない。

こんな何処にでもありそうな森のど真ん中で立ち止まらなくてもな。

もう案内は終わりましたとばかりに伸脚運動を始めたそいつに、

「若いうちからそんな運動してたら、膝痛めるだけだぜ。つーか、ここに何かあるってんだい。そもそもとして、俺に渡したい大切なモノって何なワケ？」

後ろ毛をイジりながら訊いてみると、

「あ。その質問にはコロナがお答えします」

いや、最初からお前に訊いてるんだけどな。

「えと、やっぱり説明するよりこっちはです」

言いながらごそごそとポケットに手をつ突っ込むコロナ。

やがて薄紫色の小さな手紙を取り出すと、俺にホイッと渡して、

「それ、読んで欲しいのです」

ほう。これはこれは。

キラキラに光るハートのシールで丁寧に閉じられている可愛らしい手紙。

とくりやあ、一つしかあるめえ。

「いやはやまさか、これは恋文と呼ばれるモノかね」

そんな、からかい気味の俺の発言に、

「肯定。コロナはパパさんに一目惚れしました。お返事待ってます、その伝説の樹の下で。ずっと、貴方を」

と指差す方向には、古びた切り株しか見当たらないワケで。

「コロ美よ。伝説の切り株なら見つけたぞ」

「では、伝説の切り株に座って手紙の内容を口に出して読んでみちやっして下さい」

相変わらず掴めんチビチビ助だ。

とにもかくにもと、腰を下ろした俺は手紙を読んでみることにした。

「ええと。なになに……字が汚くて読みにくいんだが」

「当店ではクレームを一切受け付けておりません。なにぶんまだ幼稚園児の身でして。お手々があまり言うことをきかないのです」

そりやあ難儀なことって。

しやあねえ、なんとか解読していくか。

「て、天よい舞いあいし、ググツの利子よ今ふだだだび我がもとえ蘇れ——って、どういう意味だコレ」

眉間にしわを寄せながら手紙を舐めるように見る俺に、

「否定です。それは、天よ舞い降りし傀儡の石よ、今再び我が下へ蘇れ……と読むのです」

「なあるほど。天よ舞い降りし、傀儡の石よ。今再び我が下へ蘇れ、か。

言われてみればそう読めなくもないな。というか、口で説明したほうがよっぽど早かっただろうに」

そう苦笑する俺に、

「おやおや。パパさん。今、それを口に出して言っちゃいましたね」

急に声色が変わったコロナにビクつとして顔を上げる。

「いよいよ、この時が」

コロナの眠そうな目が見開かれていた。

心なしか口元が笑っているようにも見える。

「ああ、でもまだダメなんです。あともう一言が無いと、アレは解らない」

な、なんだよ、アレって。

「さあ、パパさん。『靈鳴』と言ってみてください。さんにー
いち、はいアクション」

「……れいめい?」

促されるがままに口を突いて出た言葉、靈鳴。

何だソレ。

つーか、さっきの天より舞い降りしって、もしかして呪文
とかいう類の——

「ぶいつ、大当たり」

コロナがVサインを出したその時、頭上が青く光り輝い
た。

は。
眩しい光に俺はすぐさま手をかざす。が、何だこの強い光

目をつぶっているのにも関わらず、光が我さきにと俺の網
膜へ飛び込んで来やがる。

「パパさん、そのまま左手を前に出してみてください。何か触
れるモノがあると思うです」

何かって。ええつと。

ああ、あつたぞ。これか?

ほんのりと暖かい石のようなモノを掴む。

すると、たちまち光が消えていった。

やがて目の慣れた俺は、その石をじっくりと観察してみ
る。

蒼くて透明な手の平サイズの石。輝き方がガラス細工の
それではない。まさか宝石か?

だが、何と言ったらいいのか。物自体は良いのだが状態が
ボロっちいだ。

ところどころに亀裂が走っていたり、赤いコケが付着して
いたり。あと、やけに長細い藻屑が幾つも巻きついている。

「……ずっと、冷たい海の底に沈んでいたのです。かわいそ
うに」

もしかして俺に渡したい大切なモノって、この靈鳴とかい

う石のことか？

コロナは頷きながら、

「肯定。正式な呼び名は試作型霊鳴石『式式』なんです」

へえ。ご大層な名前だねエ。試作型という部分が、いささかに気にはなるが。

で、この石つころは何の使い道があるんだ？

「それはただの石つころではないのです。さっきの手紙の続き、読んでみちやってください」

草むらから手紙を拾い、続きを読んでみる。

そこには、コロナの字とは似ても似つかないかすれた文字でこう書かれていた。

『式式封印解除の呪文をここに記す——イグリネイション』

「イグリ……ネイション」

呟いたその瞬間、天から青い閃光が降り注ぎ、そして俺の手元を包み込んだ。

「な、な、なんだアア!？」

凄まじい勢いで全身の力が抜けていく。

まるで俺のエネルギーが石に吸い取られていくかのよう……待て待て、こりや本気で立っていらねエぞ。

ちよちよちよ、いや、マジで、吸い取り過ぎだって——

「あ、あうう……」

ペタンとすっかり腰が抜けてしまった俺の手の中に先ほどの石の姿はなく、代わりにヘンテコな蒼い杖が握られていた。

「パパさん、杖の封印解除よくできました。いーこいーこ、なのです」

涙目で見上げた俺の頭をコロナがよしよしと撫でる。

こ、こんにやろおお。何がよくできました、だ！

何か文句の言葉でもぶつけてやろうかと思ったその時、

「魔法少女、おめでとー」

と、もう一度Vサインを決めながら更に気の抜けるようなことを言い放ちやがった。

くる。

無表情づらのクセに満足げな空気がひしひしと伝わって

上手くしてやったり、ってかあ？

ちくしょう……。。

第五石：対決！ゆりなVSコロナ

パキツ。

音のした場所へ顔を向けると、ゆりなが驚いた表情で立っていた。俺の視線に気付いたのか、そいつは慌てて樹の陰に隠れると、

「っ、つくつくほーし。みーんみーん。ほーほーほっほーっ」

また旧式などほけ方を。

っーか最後のそれはセミじゃないだろ。朝によく鳴いてるアレだ、アレ。

「にや、にやははは。バレちゃった」

「ったく。そんなところでコソコソとよオ」

「わ、ごめんなさい。ついビツクリして隠れちゃった。すっごい光が見えたから走ってきたんだけど……」

あのー。しゃっちゃん、もしかしてそれって、杖——だったり？」
おずおずと訊くゆりなに、

「ま、魔法少女……なっちゃんいました」

気の抜けたVサインをしつつ、春なのでと付け足して言うてみる。
何故、春だから魔法少女になるのか我ながらよくわからんが。

「ふ、ふえええええ！　しゃっちゃん、本気なの!?!」

本気もなにも。驚きたいのは俺のほうだったの。

積もり積もった愚痴をぶちまけたいのは山々なんだけれども、その前にちよつと肩を貸してくれ。

こ、腰が抜けちまってさア。

「う、うん。——きゃっ!」

トテトテと走り寄ってきたゆりなが悲鳴をあげて盛大にズッコケた。

「おーい、大丈夫か？」

「だいじよばなあい……。しゃっちゃん、足がちべたくて動かないよお」

涙目で訴えかけるゆりなの足元を見ると、何やら黄緑色の石が足を固めていた。

「それ、コロナの魔法です。つめたくい、氷なんです」
「いやいやいや。」

「なんです、じゃあないだろ。」

「どーいうつもりなんでイ、コロ美。悪ふざけだかなんだか知らねえが、今すぐ魔法を解いてやれって！」

すると、

「否定。コロナは、今からその旧魔法少女さんに宣戦布告します。魔法少女はパパさん一人で十分なんです」

言いながら浮かび上がるコロナに、蝶のような光り輝く羽が生まれる。

おい、マジかよ。もしかしくなくても、これって戦闘体勢ってヤツじゃないのか。

「な、なんでそうなるのーっ!?!」

俺とゆりなが同時に声を張り上げるが、そいつはあっけらかんと、「なんでって、何となくです。なんか貴女を見ているとモヤモヤするのです。とにかく魔法少女はパパさんだけで十分だと判断しました」ど、どこをどう見て、そういう判断に至ったんだお前は。

俺はただ腰を抜かしているだけだぜ、なんとも情けない話だけれども。

「ま。そゆことなので。さっさと死んじやってください」

言った直後、

「待てえええい！　こんの、バカコロナ!!」

凄まじいスピードで飛んできたクロエがチビチビ助の腹へと突進をかます。

不意の一撃にコロナの羽は消え、そのまま地面へと叩きつけられた。

しっかしながら。

止めるためとはいえ、少しやりすぎじゃあないのか。相手は子供だぜ。

「バーロー。姿かたちはどうであれ、オレたち霊獣は、そうやすやすと傷つかないってーの」

「えっ、待て待て。オレたちって事は……。もしかして、お前もあのチビビ助も霊獣ってヤツなのか？」

俺に続いてゆりなも、

「じゃあ、あの子って朝の蝶々さんなの!？」

顔を見合わせる俺たちの間に黒猫がふよふよと入って、ため息まじりにこう言った。

「い、今更、気付いたのかよ……。あいつは三番石であるエメラルドに封印されていた緑蝶コロナだ。

能力は、『水』と『氷』——見た目はチビガキだが、七大魔宝石のうちの一つだからな。油断は出来ねえぜ」

そんな情報を一気に詰め込まれても。なんだよ、七大なんたらって。

「どうやら説明している時間は無いみたいだぜ」

クイツと肉球が指す方向にはむくれっ面のコロナがあひる座りで、「むー、ぽんぽん痛いのです。はちみつレモンが出ちやいそうです」

こつちを睨みつけていた。と言っても、あの眠そうな目だから迫力は皆無に等しい。

それより、もったいないから出すなよ。百五十円もしたんだぞ、根性で飲み込め。そしてお前の血となり肉となる。

「肯定です。パパさん。園児のド根性みせます」

なんてお腹をさすりながら口をモゴモゴ動かしているコロナを背に、

「今のうちだ、杖を呼んで戦うぞ。やれるな、ポニ子。足かせの水魔法はもう解けているハズだ」

ズッコケたままの姿勢でポカーンとしていたゆりなが、ゆっくりと自分を指差して、

「ふえっ。ぼ、ボクがやるの?」

「あつたりめーの酢漬けイカ! このバカシラガは杖はあれども魔宝石を持ってねえんだ、今やれるのはポニ子しかいねえ!」

「……はう」

いやはや、面目ねえ。

しかし、まあ。ここは一つ、先輩のお手並み拝見つてことで。腰を抜かしながらゆるりと観戦させてもらうことにするさね。

「ポニ子の動きをよく見ておけよ、シラガ娘。おめえも遅かれ早かれやってもらうんだからな」

へえへえ。わかりましたんで。

「はうう、なんか緊張するよう。しゃっちゃん、あんまりジーツと見ないで〜」

顔を真っ赤に染めて、ぽりぽりと頬をかくゆりなに、

「あの。巻きでお願いします」

指をくるくる回しながらコロナが言う。

どこで覚えたんだ、そんな業界用語。

「ふあ、ごめんなさい。も、もしかして待つてくれてるの?」

「肯定。一応、フェアでやらないと楽しくないですから。」

あと、コロナは霊獣なので手加減なんてしないでください。本気で来ても大丈夫です。どんとこーい」

それを聞いてホツとしたのか、

「えへへ。そっか、じゃあ全力で頑張るねっ!」

ゆりなはそう言うと、手を高らかに掲げて、

「おいでっ、 霊冥!」

数秒も経たないうちに、黒い宝石が空から飛んでくる。

呼べば飛んで来るって……今時の魔法少女は進んでるんだな。

そして、それを掴むと同時にゆりなはこう叫んだ。

「イグティイレト!」

黒い光がゆりなの手元を包み込む。

ほほう。これは、また。俺のときと呪文が少し違うようだ。

慣れたもんで、宝石をさっさと黒杖へ変化させると流れのままに、

「クーちゃん、お願いっ」

「あいよっ!」

くるんと空中で黒猫が一回転すると、藍色の宝石へと姿が変わった。

ん——宝石?

さつきこの猫は自分を霊獣と言っていたよな。こいつも七大なんとやらだつたりするののか？

するってえと、七匹の霊獣のうち二匹はこの場に居るってことで……なんだか案外すぐ集まりそうだな。

そんなことを考えていると、

「セーのっ」

ゆりなが杖を両手で持ち上げ、宝石へと勢い良く振り下ろした。

その瞬間、割れた宝石の中から黒い大蛇のような稲妻が発生し、ゆりなを頭から喰らう。

なんて、迫力だ。予想以上に派手つつーか、コレ大丈夫なのかよ。

クロエが変身した宝石は割れちまうし、ゆりなは雷に喰われるしで。

唾然としていると、ゆりなの全身を覆っていた稲妻が徐々に小さくなっていく。

「お、おお……」

稲妻が完全に消えると、そこには黒いドレスに身を包んだゆりなの姿があった。

さつきまではパジャマにどてら姿だったのに、いつの間にそんな豪華な衣装に着替えたんだ。

藍色に煌めくオーラがゆりなの体を彩り、時たま黒い稲光がバチバチと周りに発生している。

こりやあ、嘆声をもらしてしまうのも無理はないって。

なるほどな。これが魔法少女、ってヤツ……ね。

「——お待たせ」

さつきまでの調子はどこへやら。

急に凛々しい顔つきになったゆりなは、杖をブンブンと振り回して、

「行くよ」

息をつく間もなく、跳躍した。

第六石：雷と氷、どつちが強い？

「よーし！ 『アイスウォーター』ちゃん、かかってきなさい！」
ふよふよと滞空しながら、

「クロエが魂よ、我に漆黒の雷を宿せっ」

ゆりなが叫ぶと同時に、杖に黒い電流が走った。

何か攻撃を繰り出すのか？

期待をしつつ待つてみるが、

「えーと……しゃっちゃん。それから、なんて言うんだっけ」

「あ、あのなア……」

ったく、俺に訊くなって。

さつきは少しばかり凜々しい顔つきになったなと思ったのだが、いやはや。

「イカズチ？ 憑いてるのはお姉ちゃまなのに。あ、そっか。今回は……」

目は眠そうなままだが、怪訝そうに眉をピクつと動かして、
「分が悪いかもです。だったら、」

自分の手の平に息を吹きかける。

こりやあ、なにしてんだ？

「ふうーっ」

おお。見る見るうちに小さな氷のつぶてが生まれていくではないか。

中々に便利そうな魔法ではあるな。夏場とか特にもってこいだ。
いやいや。それよりも。

ゆりなはさつき『アイスウォーター』とコロ美を呼んでいたな。

多分、察するにクロエから教わった異名とかだろう。

氷と水の使い手らしいからな。

氷に、水か……一体どんなエグい攻撃をするんだろうねエ？

「できた」

やがて完成した氷の塊を握りしめると、コロナが跳躍——いやコレは飛翔と言ったほうが正しいか。

煌めく羽を羽ばたかせて、ぐんぐんゆりなに接近し、

「ほよっ。」

ぼけっと見上げたゆりなの服、胸元を引っ張ると、

「ポイ捨てごめんです」

氷を入れた。

「ひやああああ！ つめたーいっ！」

……そして墜落するゆりな。

「こ、今度は背中のように移動してる！ ひーん、一張羅がビショビショだよ」

なんて落ちたあともドレスをばっさばっさやりながら氷を取り出そうと格闘している。

あー……。

すまないが、ちいっつとばっかし言わせてくれ。

「つて、なんなんだア！ この拍子抜けするようなバトルは！ チビ助、お前それでも魔法少女のプロかつ」

「どうわつてー、魔法出すときの呪文忘れちゃったんだもん。それにプロじゃないしい」

ぷーつと頬をふくらますそいつに、

「……旧魔法少女さん。呪文は、『ほよよん、ぽいぽい、ぽん』なのです。

ちゃんと取り扱い説明書の十三ページに載ってるです。予習しとかなないと、めっですよ」

若干、呆れた口調のコロナが言った。

「つーか取説なんてモンがあるのかい。

「あ。そうそう、それぞれ！ ありがとうアイスウォーターちゃん」

「お礼はいいので。呪文でコロナに攻撃お願いします。ちよつと旧魔法少女さんがどれくらい魔力あるのか確かめてみたいので」

「うん、いーよ。でもちよつと、休憩ね。疲れちゃった」

「……肯定するです。コロナも久々に羽を伸ばして背中が痛いのです」

「にやはは、霊獣さんも大変なんだねー。その羽かっくいーけど、肩

「こつちやいそうかも」

「それもあるですけど、鱗粉が多い日はかゆくてたまらないのが大変です」

「ふえー、そうなんだあ」

なんてほのぼのと談笑し始めたではないか。

こ、こいつらには緊迫感ってモンが足りねエ。

つかあああ！ 魔法少女ってヤツア、こんなんでもいいのかよ……。

+ + +

数分後。

「あのよお、おめえさん方、いつまでダベってるつもりだい？」

痺れを切らし、ため息がてら言ってみる。

すると、コロナがハツとした様子で、

「し、しまったです。危うく懐柔されちゃうところでした。旧魔法少女さんおそるべし。

さあ、休憩終わりです。はやく魔法どーんと来いです！」

立ち上がり、憤然と両手を広げるチビチビ助に、

「え……うん」

立ち上がり、悄然と杖を構えるチビ助。

足元に小さめの黒い魔法陣が浮かび上がった。

いよいよ、マトモな魔法が間近で見られるな。

彼女は一つ深呼吸をした後、

「ぽおーよよん、ぽいぽいー、ぽんっ！ らいらい、『ライトニング』！」

振った杖から、やる気のかけらも感じられない電撃がちよろつと出た。

そいつはコロナを避けるように身をくねらせると、はるか空の向こうに消えてしまった。

なんなんスか今の。

「なーんでイなんでイ、登場は派手なクセに魔法はからつきし、」

俺が言い終えるよりも前に、

「……否定。それ、本気なのですか？」

苛立ちの混じった声に遮られた。

コロナは両手を広げたまま、キツとゆりなを睨みつけている。
あのトロンとした目ではない。

なんか知らんが、口を出せる雰囲気じゃなさそうだ。

「にやはは。ごめんね、あれがボクの本気なんだよう。まだこういうの全然慣れてなくって」

笑いながら頭をかくゆりなに、

「そんなウソで騙されません。貴女の素質からして、あんな魔法――
」。コロナをバカにしているとしか思えません」

「……ううん、バカにしてなんかないよ。きつとキミは霊獣さんだから、ボクが本気で雷を出してもへっっちゃらだったと思う」

でもさ、と付け足してゆりなは微笑んだ。

「痛いよね。いくら霊獣さんは丈夫だって言っても」
「……え？」

コロナの服についた砂埃を優しくポンポンと手で落としながら、
「さつきね、お話してて思ったんだ。どうして戦わなきゃいけないんだろう、こんなに楽しくお喋りが出来るんだもん、きつとすぐに仲良くなれるのになあって。」

クーちゃんからは、霊獣さんとはとっても怖いモノだって教わったんだけど……。そうは思えなかったの、少なくともキミはね」

それじゃあ、あのカミナリは傷つけないためにワザと外したってわけだったのか。

「旧魔法少女さん……」

そう呟くと、俯いてしまった。

おやおや――仕方ねえな。

ようやく腰も落ち着いた俺は立ち上がった、

「ま。ま。霊獣だの厄災だのつつつても、姿が姿だからなア。俺様だつて、こんなちんちくりんに魔法ぶつ放したくねーし。気が引けるってそりゃ」

コロナの頭をペシペシ叩きながら言ってる。

「ば、パパさん……」

「えへへ。しゃっちゃんの言うとおり、ちっちゃいからっていうのも

あるかも。あと……それとなんだか、キミが無理をしてるような気がしたの」

無理って、どういうこった？

俺が訊くと、ゆりなはうーんと考える素振りをみせて、

「なんていうのかなあ。上手く言えないけど、ほんとにアイスウォーターちゃんはボクと戦いたいのかなあって」

ふうむ。

確かに、なんとなくモヤモヤするから、で宣戦布告はオカシイよな。

それに死んじやつてくださいつて言ったワリには、戦わずによくわからん行動ばかりとつていたし。

「ひ、否定です。考えすぎなのです。……コロナは、ただ旧魔法少女さんの力がどれだけあるのか確かめたかったのです。

確かめたらすぐにでも貴女を倒すです」

だよ。

さて、どうするチビ助。

「そつか。でも、ボクはキミに魔法うちたくないし……。じゃ、こうしよーよ！

これからボクが石を集めるときに一緒についてくるの。近くで魔法を見ればボクの力を確かめられるんじゃないかな」

「それって、旧魔法少女さんと契約しろつてことですか？ ……否定です。ヤ、なのです」

と、ぶいっとそっぽを向いてしまった。

だが、ゆりなはニツコリ笑顔で首を振って、

「んーん。ボクじゃなくつて新魔法少女さんの、しゃっちゃんと、だよっ」

杖で俺を指した。

「おいおい、人を杖で指してくれるなよ。お行儀が悪い……つて、えええっ!？」

どどどどどういう意味だ、そいつア！

俺が困惑していると、コロナがこちらに振り返って、

「それなら肯定です。パパさんとなら喜んでです。ふつつかもの

ですが、ヨロシクお願い致しますのです」

丁寧なお辞儀をぶちかましやがった。

いやいやいや、待て待て。

俺にだって選ぶ権利つつもんが……いや、そうじゃなくてだな。

むしろ、それ以前に魔法使いをやりたくねーんだってエの。

「わーいつ、しゃっちゃん、わーい！　これで杖も霊獣さんもバツチリだね、ぶいっ！」

だね、って言われましても。

「だからよオ、俺は……」

「パパさん。旧魔法少女さんに負けないように、コロナと力を合わせて頑張るです。えいえいおー、ぶいぶいっ」

こ、こいつら、人の話を聞きやしねエ。

しかも二人してVサインをかましやがって。

それ、この世界で流行ってるのかよ。

……いやはや。しかしながらに。

いよいよマズいかもしれないな、このままだと……。

第七石：魔法少女になんて絶対になりたくない！

今晩はゆりなの家に泊めてもらうことになった。

つつーか、帰る家はあれども帰り方がわからねエからな。

しばらくは厄介になるしかあるめエ……チビ助の家の人が承諾してくれればの話だけでも。

「ふあー……。もうお日様沈んじやいそうだね。今日はいっぱい歩き回って疲れちゃった」

「へへ。甘いぜ、ポニ子。これからは、もつと動き回ってもらうことになるからな。覚悟しておくんだぜ」

「おっけー。どーんとこーい！ だよっ」

なんていう話をしている黒猫とゆりなの後ろに、両手を後ろ頭に組んでの俺。

そして、その後ろには、

「パパさん。コロナも何かパパさんとお話したいのです」

「……………」

「あ、あんなところにUFOが！ パパさん、UFOっ。未確認飛行物体なのです。パパさん知ってましたか、UFOの略は『うっそー！』

フライング……お盆？』なんです」

「……………」

「間違えたです。さつき飛んでたのはペヤングのほうでした。かやくを麵の下にしてお湯を入れると、かやくが蓋につかなくて美味しいアレです」

よちよち着いてきながら一人盛り上がってる園児。

やれやれだな。

このガキンちよと俺様が契約ねエ……子守の間違いじゃあねえのか。

ほとほと頭がイテエぜ。

「否定。まだ正式な契約は結ばれてないので、パパさんはただいま不完全な魔法少女です。」

でも、簡単なんです。ちよつと呪文を唱えて頂ければ、すぐにでも

コロナはパパさんのものなのです。

あ、どうせなら今歩きながら済ませちゃうです。えっと——」
なんだ、こいつと契約を結ばない限り、俺は魔法使いじゃあないっ
てことか。

……そいつはア、良いことをきいたぜ。

「ごそごそとポケットから何か（きつと呪文が書かれたメモだろう）
を取り出そうとしたそいつに、

「ぎげんなつ、魔法少女なんて誰がやるかってんでえい！ 耳の穴
かつぽじって良く聞きなア。

はつきり言うぜ、俺はおめえさんと契約する気なんざ微塵もありや
しねえ！ そこんところ宜しくつてなもんで一つ、よしなにイ！」

「すごんだ俺に、コロナはしゅんと肩を落としてしまった。」

とぼとぼついてくる姿に若干だが言い過ぎた感が否めないが、いや
はや。

だって、やりたくねーものはやりたくないんだからさ。

……しょうがねえじゃん。

しばらく歩くと、やがてゆりなの家の前に到着した。

「えへへ。ほいじゃあ、しゃっちゃん、アイスウォーターちゃん。
ちよつち待っててね。」

お姉ちゃんに、お泊り会しても大丈夫か訊いてみるから……うわー
いっ！」

そう言って元気に家の中へ突撃していくチビ助。

お泊り会つつーか、一日だけじゃあいささかに困るんだが。

明日にでも元の世界に戻る方法が見つかれば話は別だけれども
よオ……。

俺だって別に好きで居候したいワケじゃねエし。

——ん？

お姉ちゃんって、フツーこういう事は母親か父親に了承を得るもん
じゃないのか？

首をかしげていると、急に扉がバンツと開いて、

「あらあら、まあまあ！　なんて可愛らしいお友達なのでしょう……っ！　天使さんたちなのですよっ、欣喜雀躍ですよっ！」

何とも大げさな人が出てきた。

セーラー服の上にエプロン、片手にはお玉といった姿の女性。

背格好や服を見るに、おそらく高校生くらいだろう。

ゆりなど同じ長い黒髪を後ろで縛っており、目はパツチリとしていて大きい。

大きいといえば、胸がすさまじいド迫力だ。

ははは……俺らとは雲泥の差だねエ、こりや。

「お姉ちゃん、この子がシャクヤクちゃん。ボクはしゃっちゃんって呼んでるのっ。今日泊まってもいいよね」

「えーと、はじめまして、シャクヤクといいます。恐縮ですが今日一日どうか……」

言いかけたところで、ゆりなお姉さんが俺に抱きついてきて、

「あらあらっ！　白くて小っちゃくて、ふわふわな柔らかい髪が可愛らしいですよっ！　もちろん、承知ですよっ」

頭を撫でながら言った。

了承はまことに有難い話だが、ちよいとばかり苦しいぜ旦那……息ができてねエ。

「わーい！　でね、この子がコロナちゃん。小っちゃいけどとってもしっかりしたお利口さんのっ。今日泊まってもいいよね」

「あ。コ、コロナと申しますのです。よよよ、よろし……」

お姉さんは、パツと俺から離れると、

「まあまあっ！　もっと小っちゃくて、ぽよぽよな柔らかかほっぺが可愛らしいですよっ！　もちろん、承諾ですよっ」

今度はコロ美に抱きついて、頬を指でつんつん突きまくりはじめた。

「わーい！　あ、あとついでに。この猫ちゃんは段ボールで捨てられてたから拾ったの。今日から飼ってもいいよね」

おいおい、おめエさん捨て猫扱いされてんぜエ？

俺がクロエに耳打ちをすると、一瞬だがこちらを睨みつけ、

「にゃ、にゃあーん」

ただの猫に徹した。

お姉さんの足にすり寄りながら、必死にゴロゴロと喉を鳴らしている。

ああ、そうか。彼女は一般人だから喋って姿をバラしたらまずいつてワケか。

だが、いくらなんでも。友達を泊まらせるのと、猫を飼うのとは話が別だろうに。

そう簡単に了承なんて――

「承允なのですっ!」

って、オイイイ!

彼女はそれだけ言うと、クロエを抱き上げ、子供をあやすかのようにゆらゆらと揺らし始めた。

「ねーんねーん、ころーりーよ。おこーろーりーよー」

なんとも、まあ……なぜ早々に寝かしつける作業に入ったのか。

よくわからんが、一つ言えることは、この姉にしてこの妹ありつてところだな。

肩をすくめて、ついコロナと顔を見合わせてしまった。

「パ、パパさん。コロナはびっくりなんです。ほっぺがへっこんで戻ってこないのです」

うるうると涙目のコロナに、

「……俺も。自慢の髪が世紀末だぜ」

何故かモヒカンヘアーになっていて髪を戻しながらの俺。

しかたあるめえ、これも宿命と思っねエ。

「にゃはは、やったね二人ともっ! ささ、ボクの部屋に直行っ」

ゆりなが、げんなり表情の俺たちを家に押し込みつつ、

「うっわーい! お姉ちゃんありがとう、だーい好きっ!」

と、言った。

そしてそのすぐ後に、

「お姉ちゃんもなのですよーっ。あ、ゆっちゃん。お部屋に行く前にちゃんと手を洗ってくださいねー」

そう、のんびり口調で返ってきた。

＋　＋　＋

「だーっ、疲れたあ」

「だーっ、疲れたんですう」

部屋に着くなり、ベッドに寄りかかって俺とコロナが盛大なため息をついた。

もちろん、手はちゃんと洗ってきたぜ。

よくわからんゴシゴシの歌なんてもんを歌わされながらな。

「ふえ？　しゃっちゃん達、さつきまで元気だったのに、どーしたの？」

「さつきまでは、な」

ゆりなの頭上に浮かんだハテナマークを手でかき消しつつ、

「いいのかよ、こんな簡単に承諾して。俺たちもそうだけど、クロエの件とかさ。お姉さんお人好しすぎやしねエか？」

「でも、あの方のおかげでコロナたちは屋根のあるお家でグツスリ眠れるのです。感謝感謝なんです」

そりゃあ、そーだけけれどもよオ……。

いつもあんな調子なのかい？

「うん、お姉ちゃんはいつでも誰にでもあんな感じで、とーっても優しいの。ボクの自慢のお姉ちゃんなんだよう。はうー」

なんて周りに花を咲かしている。

「ふうん、羨ましいこって。俺は一人っ子だからよオ。あ、一応お父さんやお母さんに改めて了承を得たほうがいいかもな。」

やっぱり一家の長が知らねエってのはマズイと思うしさア」

そう言うと、一拍置いてゆりなが力なく笑った。

「……にやはは。ウチ、お父さんもお母さんもないの。」

今はボクとお姉ちゃんの二人暮らしなんだ。だから二人とも伸び伸び過ごしてもらってヘーキだよっ」

「あ……。す、すまねえ。余計なこと言っちゃまって」
頭を下げると、

「う、ううん！　いないって言っても、お仕事の都合で海外に行ってる

ただだからっ。

「ごめんね、しゃっちゃん。ヘンな心配させちゃって。あはははっ」とは言うけれども、寂しいには変わりないだろうに。

どちらか片方ではなく、両親そろって海外なんてな。いったい、どんな仕事なのだろうか。

だが、ゆりながあまりにもカラカラと笑うモンだから、

「そっか。わりい、わりい」

俺もつられて一緒に笑ってしまった。

すると、コロナが笑いあう俺たちを不思議そうに交互に見て、

「二人とも、何を謝ってるのですか。楽しそうです、コロナもごめんねゴツコしたいのです」

なんて言うもんだから、またおかしくなって二人で笑ってしまった。

＋＋＋

「……おめえら、楽しそうだな。オレがひどい目に合ってるっーのによお。つたく、あの嬢ちゃん加減つてもんを知らねーのか」

部屋に転がり込んでくるや否や、開口一番グチを放つ黒猫。

「加減って、何かあったのですか。お姉ちゃま」

コロナが訊くと、クロエは気だるそうに肉球で自分の肩をポンポンと叩きながら、

「おう、コロ助。よくぞきいてくれた。あの後、何十もの子守唄を歌いやがったんだぜ。」

それも近所に聞こえるバカデカイ声でよお……恥ずかしいったらありやしねー。

こちらら睡眠通り越して永眠する寸前だったってーのに、おめえらときたら——」

俺とゆりなの驚愕顔に気づいたのかクロエはびくつと毛を逆立てて、

「あ、あんだよ、そのツラは」

「だって、ねえ。しゃっちゃん聞いたよね？」

ゆりながひきつった顔で俺に振る。

「……ああ、聞いたぜエ。しかと聞いたぜエ」
そう。

コロ美は先ほど確かにコイツのことを『お姉ちゃま』と呼んだ。
腕を組み、うんうんと頷いて俺はこう言った。

「クロエ、おめえさんって野郎は……まさかメス猫だったとはなア！
へそが茶を沸かすとは、まさにこの事よオ」
続いてゆりなも、

「クーちゃん、かわいーっ！ メスだったんだあ。わーい、メス猫メス
猫ー！ メス猫クーちゃんっ」

そうはしゃぐ俺らに、

「にやあああ！ メス猫って言うなあああ！ 侮辱の言葉だぞ、て
めーら無邪気にもコノヤロー」

いやはや、言動があまりにも荒々しいもんで。

まさか、メスだったとはな……いささかに信じられねエぜ。

「だから、確かめる必要があるってなもんで」

言つて、グイツとばつかしクロエの足を広げた俺に、

「ば、バカっ！ あにすんだよっ！」

すかさず肉球フックが飛んできた。

「いっひっひ。てめえだつて、さんざん俺の事からかってくれただろ。
そのお返しつてだけの話さ」

頬をさすりながら言つてやったが、どうやらマジらしいな。

この反応——ま、別に本心としちゃあどっちでもいいことなんだ
が。

「うん、どっちでもクーちゃんはクーちゃんだもんね。あはは、でもな
んだか可愛いかも。女の子なのに『オレ』だなんてっ」

ゆりながクロエを高い高いしながら言い、

「可愛いなあ？ 女ならせめて女らしく。もつと、可愛げのある言葉
づかいにした方がいいぜ、いささかによオ」

持ち上げられた黒猫の喉をポリポリかきながら俺が続ける。

対して黒猫は、『けっ！』と尻尾をおつたてて、

「おめーらだけには、ぜつてええええ言われたくねえセリフ！」

と、怒鳴った。
……そりやまあ、ぐもつともで。

第八石：お風呂

しばらくの間、くつろいだ後、

「あ、そーだ。今日はお姉ちゃんがご飯の当番だから出来上がるのに少し時間かかるかも。その前にお風呂入っちゃわない？」

ゆりなの提案に否定するものなどおらず、みんな一様に首を縦に振る。

「へへっ、今日は飛びまくって汗だからなあ。とつとと、さっぱりしてえーぜ」

「肯定。コロナも汗かいちゃったのです。ベトベトなんです」

俺も二匹の霊獣に続いて、

「お、いいねエ。風呂は命の洗濯って言うしな。俺も入らせてもらおうとするよ、慎ましくさ」

さて、そこで問題になるのは誰が一番風呂を獲得するのか、であろう。

まあ。ここはやはり、主であるゆりなで決まりだろうな。

となると、二番手は誰が入るのかという話になるのだが――。

「お風呂だお風呂だ、わーい！ みんなで一緒にお風呂だ、わーいっ！」

ん？

ベッドの上でびよんびよん跳ねるゆりなを見上げて、

「ちよい待ち。みんなで一緒って、どういうこった。銭湯にでも赴くってことかイ？」

そんな俺の質問に、

「んーん。ボクとクーちゃんとしやつちゃんといスウオーターちゃんの四人でウチのお風呂入るの」

あつけらかんと答えるチビ助。

「いやいやいや、忘れてくれるなよ。俺は男だぜ！

姿はこんなチンチクリンになっちまったけど、中身は超が付くほど男なんだってーの」

「ふえ？ 知ってるけど、それがどーしたの？」

そ、それがどうしたのときたもんだ……。

こいつはア、手ごわい。

「え、えーとだな。つまるところの……そうだ、俺は他人と一緒に風呂入るのが苦手なんだよ！ なんつーか、こっぴげずかしくてよオ」

「ふーん？ ボクは全然恥ずかしくないけどなあ」

まだ小学生だとはいえ、ちったあ恥ずかしがってくれよ。

それに四人でなんて窮屈だろう、ゆっくり疲れもとれないぜと付け足すと、

「それもそーだね、ボクん家のお風呂あんまり広くないし。にやははは！」

いやあ、まいったまいったと笑うゆりな。

どうやら何とか説得できたみたいだな。やれやれ。

ホツと息をついてる俺に、

「それじゃあ、もう沸いてると思うからしやつちゃんから入ってきていいよ」

「え、俺からでいいのか？」

「うん、だつて今日はしやつちゃん感謝デーだもん！」

なんだよその、うさんくさいデーは。

クスッと笑った俺に、

「えへへ。気にしないでいいよ、ボクとクーちゃんは後から入るから。観たいテレビあるし……ねー、クーちゃん？」

そう頭上の黒猫に確認をとるゆりな。

黒猫は、あくびをしつつ気だるげに、

「……ああ、そうそう。オレ達は観たいテレビがあるからよ。ゆつくり入ってきな」

なんとなくだが、クロエは反対すると思っただけだな。そんなに面白い番組をやってるのか？

この世界のテレビ……どんなものなのか、いささかに観てみたい気もするが、いやはや。

ここは有難く一番風呂をいただきかせてもらうことにしよう。

「んじや、お言葉に甘えてさっそく入ってくるぜ」

「うんっ！ お風呂は階段を下りてすぐ左だよ。わかんなかったらお姉ちゃんに訊いてね。」

「バスタオルとお着替えはちよつとしてからボクが持つていくからっ」

「何から何までわりいなと言うと、ゆりなはニッコリ笑顔でVサインを繰り返した。」

＋ ＋ ＋

「脱衣所に着いた俺は、服を脱ぎつつ、

「ちっ、使いづれえ体だぜ、まったくもってよオ」

改めて自分の変わりすぎた姿に嘆息した。

「筋肉皆無な白く細い足はフラフラするし、手は言うことをイマイチきいてくれない。」

「イマイチってどんな感じかって？」

「グーとパーを繰り返して出してみるが、頭に描くスピードと反応が大きく違う。」

「気持ちだけが先に行つて、体が追いついてこないって感じかねえ。そういやコロ美のヤツも似たようなこと言つてたっけか。」

「ぽこつと出た腹をベシベシ叩きながら、

「あーあ、俺様の美しく割れた腹筋が跡形も無い……。こんな体、とつとオサラバしてーぜ。だりいつたらありやしねエ」

風呂の引き戸を開くと、けっこう大きめな浴槽が目に入った。

「ほー。こりや、また中々に。俺ん家の風呂よりデカくてキレイだな」とりあえずサクつと体を洗つて湯船につかる。

「こりやあ、イイ湯だぜエ……」

「最初は他人の風呂を使うなんて、と気が引けたが、入ってしまったら遠慮よりも快樂が勝つていた。」

「しみじみ飲めばくつと、くりやあ」

「そう俺が気持ちよく歌い出したときだ、

「それ以上は歌っちゃ、『メツ』なのです」

「ジーツと風呂の戸から顔だけ出して言い放つオリーブグリーンのツーサイドアップ。」

「なーにしてんだア？ そんなところで」

「……………」

無言。

その瞳からなんだかキラキラな星が飛んできたりもしていたが、そいつを全て鼻息で打ち落とし、

「あいわかった。歌わないから、早く出て行っておくれ」

「……………」

それでも無言のまま意味ありげな視線を送ってくる。

「ほれほれ。もう用は済んだんだろ？ あっち行った、しっし」

俺がからかい気味に言うと、そいつはあからさまに肩を落とした。

「…………肯定です」

戸が閉まった。

が、うつすらとガラス戸を通してコロナの影が見える。

しよんぼりと座っちまって、まあ。

こりやまた、まったく。わかりやすいチビチビ助だ。

「おーい、コロ美。一緒に入りてーなら、素直にそう言ったらどうなんでえい」

俺が呼びかけると、待ってましたといわんばかりに戸が開いて、

「やつぱり、パパさんは優しいのです。コロナはもうすでに準備開始してました。ほどきほどき」

髪を解きながら、クール面の園児が現れた。

へえへえ、そりやどーも。

苦笑しつつ俺が頭に乗せたタオルを絞っていると、そいつが浴槽に入ってこようとした。

「おいおい、おめえさん。ちゃんと体を洗ってから浴槽につかりなア」

よじ登ってくるコロナの頭を押さえつけながら言うと、そいつはぶーつと頬を膨らませて、

「はやく一緒に入りたいのです。体は後から洗うです」

「それは否定、ってやつだ。浴槽は家族みんなで使うもんだからなるべくキレイな状態で次の人に回してやらなきやいけねえ。

ま、親父の受け売りだけど。それに、こちとら風呂を借りてる身だ

し、尚更だろうよ」

びつくりしたように俺を見るコロナに言葉が続ける。

「それがイヤなら、一緒に入るのはナシだ。さてはて、どうする？」
意地悪くニヤリと笑ってやる。

すると、そいつはぶんぶんと首を横に振って、

「……やだ、パパさんと一緒に入ります。ソツコーで洗うんですっ」
「いっひっひ。良い子だ」

せかせかと夢中で洗う小さな背中を見ながら俺は思う。

こんな子どもが『霊獣』だなんて厳かな名前を担いで。

まだまだ甘えたい盛りのただのガキんちよに見えるが……。

そして――

湯船に映る見慣れない少女の顔に、

「おめえさんは魔法使いだって、さ」

小さく呟いて、俺は水面を指で弾いた。

第九石：魔法少女の取扱説明書？

「ふああ〜。疲れた体に染み渡るんです、これがまた」

湯に浸かったコロナが年寄りのような声をあげる。

「おめえさん。言いにくいんだけど、なんで俺の上に座ってやるんない。これじゃあ足を伸ばしてくつろげねえぜ」

あぐらをかいた俺の足の上に、ちよこんと正座をしているそいつに言うど、

「そのまま座っちゃうと溺れちゃうんです。結構ここのお風呂深いのです」

「なら、立ったまま入りねエ」

「否定なんです。それだと、ゆつくりくつろげないです」

おい。今まさに俺がくつろげてない状態なんだが。

「……じゃあ、飛びやがれ。羽出して、ちいっとなんか浮きながら浸かりゃあいい」

「それは名案なんです。でも羽を出すとき『うんしょ』ってリキむので、もしかしたらちよつとだけ出ちゃ、」

言いかけたところでコロナ美をひよいつと抱き上げ、

「わーった、わーったって。きたねー。俺の上に座ってもいいから、くれぐれもふんばらねエでおくれ」

「肯定。……えへへ」

嬉しそうに人の足の上ではしやぎやがって、このチビチビ助め。

わざと、ああいうこと言いやがったな。

いやはやに。これじゃあ疲れが取れるどころか、増してしまう。

次は絶対一人で入ろう、変なオプシオンは抜きだ——そんなことを考えていると、

「パパさん。つまんなそうです」

悲しそうな目で俺を見上げながら、

「コロナと入るの、楽しくないですか？」

一瞬ぎくつとしたが、ここはハッキリと言ってやった方がお互いの為だろうさ。

「つまるところまらないで言えば、つまらないかもねえ。あーあ、出来れば一人でゆつくりノンビリと浸かりたかったぜ」

まあこんなところか。

ちと、厳しく言い過ぎたか？

チラリと横目でチビチビ助を見やるが、そいつはあつけらんとした様子で、

「それなら暇つぶしになるものを出すんです」

湯船から左手を突き出し、指パッチン。

すると、ポンツという音と共に何やら冊子のようなものが出てきた。

黒い表紙に、青の蛍光色で『式式所有者専用』と書かれている。

「あんだア？ ゲームか何かの説明書みたいだが」

不思議がる俺に、

「これは魔法少女の取扱説明書なんです。いずれ成る魔法使いの予習がてら、暇つぶしに最適だと思ったのでご用意したのです」

ああ、これがあのととき言っていた取説か。

結構薄っぺらいんだな……分厚くても困るが。

「ま、やるつもりはねーけれども、暇つぶしに読んでみるとするかねエ。ええと、なにに——」

それには七つの項目があり、それぞれこんなことが書かれていた。

其の壺——霊鳴石について——

霊鳴は呼べばいつでもどこでも飛んできます。

式式における封印解除の呪文は『イグリネイション』です。

其の式——魔法使用について——

式式所有者の魔法を使うときの呪文は、

『ぶゆゆんぶゆん ぶいぶいぶう』となります。

慣れれば簡略化することもできますが、最初のうちはなるべく全て唱えましょう。

其の参——使用限界について——

霊鳴の中に入ってる霊薬という液体がなくなると魔法が使えなくなります。

もし使用中になくなった場合は海に戻すか、使用者の心身を休ませてください。

なお、なくなったままの状態でも魔法は使えますが、生命エネルギーを著しく消費しますのでオススメできません。

其の肆——魔宝石について——

魔宝石には二通りあります。

強力な七つの大魔宝石とイミテーションと呼ばれるたくさんのも造魔宝石です。

其の伍——禁止魔宝石について——

七大、模造問わずどれも魔宝石には様々な能力が秘められています
が、

中には絶対に使ってはならない禁断の魔宝石もあります。

例として治癒系の魔宝石は全て禁止魔宝石にあたります。

其の陸——注意事項について——

他人に正体を知られてはいけません。（ただし魔法関係者を除く）

魔法使いであるということをバレないように周りに注意して魔法を使ってください。

其の漆——集束について——

「……ん？」

そこまで読み進めて俺は頭を傾げた。

其の漆（読めねエ）という項目が、説明が無くまったくの白紙だったからだ。

「おい、コロ美。ここ何も書かれてないんだが。どうなってやがるんでい」

両手で湯をすくってひたすら俺の鎖骨にぶつけるといふ、

謎の一人遊びを楽しんでいるコロナに訊ねてみると、

「それはまだナイショなんです。いつの日か文字が浮き上がってくると思うんです」

「あーそう。ま、別にどーでもいいけれどもよ……っどー」

とりあえず反撃に、手で水鉄砲よろしくお湯を飛ばしてやる。

「わっぷ。鼻に入ったです、ツーンと痛いんです」

「いつひっひ。ざまあみそらしど」

と言いつつ、湯船からあがり髪を洗う作業にとりかかるが……どうもあの説明書が引つかかるワケで。

説明はからつきし頭に入っていないからどうでもいいのだが、それよりも『説明書』自体がいささかにねエ。

確か、ピースが保管していたパンドラの箱が手違いでゆりなのもとに送られたんだっけか？

んで、それを開け、中の宝石を飛ばしちまったゆりながそれを集めることになった——魔法使いになって。

つまりそれは偶然の事故ってこった。

それなのに、説明書って。フツーそんなもん無いだろうよ。用意が良すぎるっつうか、これではまるで——

「パパさんの考えてること面白いんです」

シャンプーをシャワーで流しつつ見上げると、コロナが無表情で俺を見下ろしていた。

「面白いってどういうこつてイ。つーか、あんまし俺の心を読んでくれるなよ。いささかに困るぜ」

そうリンスのボトルに手をかけた瞬間、

「……パパさん、一ついいですか」

また声色が変わりやがった。

もしかしたらあの時のように目も光ってるのかもしれないが、無言でリンスをひねりだす。

見ていて気分のいいツラじゃねえし。

「あまり深く考えないほうがいいです。パパさんは、旧魔法少女さんと一緒に散らばった石をただ回収する、ただそれだけの『オハナシ』なんです」

リンスを前髪にちまちま塗りこみながら、

「……恐縮だけでも、俺をそんなに買いかぶってくれるなよ。別になんにも考えてなければ、宝石集め云々も興味ない」

本音だ。

魔法少女？ 誰がそんなモンをやるかって。素質があるか知ら

ねエが、俺じゃなくてもいいだろ。

そう、こいつらとの仲良しごっこなんざさらさらゴメンだ。いつまでもピーチクやってられねエ。

俺は明日にでも元の世界に帰る方法を見つけて、とつとこの世界からトンスラを決め込む。

テメエらの世界はテメエらでなんとかしやがれ、ってヤツ。

「果たして、そう上手く逃げられるですかね」

コロナがくすくすと笑いやがる。

こいつ、目がピカると性格ちよつと悪くなつてねーか？

これはこれは、修正しないと。ケツは若いうちにぶってな。

「うるへー。チビチビのクセに生意気だつての。おしおきが必要だねエ、まったくもって」

言つて立ち上がり、

「……ほへっ？」

ビックリしているコロナを抱き上げてお風呂椅子にストンと座らせる。

「覚悟しろつてなもんで、一つ」

シャンプーを出して、わしやわしやと乱暴に髪を洗つてやる。

「わわ。パ、パパさん激しいです」

「ほーれほれ」

「きやつきや！そこは脇です。く、くすぐったいんです」
ま。

所詮はガキんちよだと思いたいところだが。

こいつの言動抜きにしても、やはりどうも不明瞭な点が多すぎるな。

深く考えるな、とは簡単に言つてくれるが魔法使いになつちまつたら深く考えざるを得ないだろうよ。

だから、これ以上面倒なことになる前に本当に逃げ出さねエと。

——明日が勝負だな。

第十石：『ワガママ』

「九十八、九十九……百、なんです。パパさん言えたですつ」

「よし、エライエライ。んじゃ、そろそろあがるぜエ」

そう風呂からあがった俺達の前に、

「むうー……」

現れたるは、ふくれつつらのゆりな。

そいつは抱えていたバスタオルを不機嫌そうにボフつと俺に渡して、

「しゃっちゃんさー、他人と一緒に風呂入るのイヤなんじゃなかったのお？」

ジトつと見つめられ、いくらか気圧されたが俺は体を拭きながらこう言った。

「あ、ああ。そりやあ苦手だけれども。どしたんだ？ ロボロフスキーハムスターみたいに頬を膨らませちまってさア」

ゆりなのほっぺたを指でつんつん突くと、そいつは反抗的にますますと膨らませつつ、

「だってだって！ アイスウォーターちゃんと一緒に入ってたじゃん！

ボクだって、しゃっちゃんと一緒に入りたかったのに……ずるいもん」

これはこれは。何かと思ったら、そんなことか。

別に俺は一人で入るつもり満々だったワケなのだが。

ま。ここは一丁、宿主のご機嫌を伺っておくことにするかね。

ぷいっとそっぽを向いてしまったゆりなに、

「んな、怒るなって。……じゃあ、ほら。明日はおめえさんと一緒に入るっ！ これでチャラって事で一つさ」

とかなんとかテキトーに言っておけばいいだろう。

どうせ明日には、この家から（というかこの世界から）出て行くワケだし。

すると、予想通りにそいつはケロつとした笑顔でこちらを向いて、

「わーいっ！　しゃっちゃんと一緒に風呂ー！　絶対だよ、約束だもんねっ」

そう言って、小指を突き出してきた。

「指きりげんまーん」

こりやまた、懐かしいっつーか。そんなのやるの小学生のとき以来だぜ。

って、いまの俺はそんなくらいのがきんちよだったか。

なら、ガキはガキらしく振舞おうじゃあねエか。

「へいへい。わーってるって。——約束、な」

俺も小指を出してゆりなの指に絡める。

「指きりげんまん！　ウソついたら、」

流れのままフツーに針千本のーます、と続けようとしたのだが、

「雷千発ぶつぱなーす。はい、指切った！」

「ちよ、ちよ、ちよい待ってって。切るな切るな。針千本だったらまだしも、雷千発っておめえさんが言うとお急にリアルすぎるんだが、おい！」

そう慌てる俺に、ゆりなは八重歯をキラつと光らせ、意地悪そうに、「にやはあ？　どーして慌てるのかなあ。しゃっちゃんが、ちゃー

んと約束守ってくれればいいだけの話じゃあん」

ウツと、たじろいた俺に今度は後ろのチビチビ助が、

「あのですね、旧魔法少女さん。パパさんはさつきお風呂でこう叫んでたんです。

ふははは！　明日にでもこの世界からとんずらバイバイするんだぜエ！　どわれが魔法使いなんてやるんだぜ！

あばよ、このペチャパイキングダムがアアアって。一体、パパさんどうしちゃったのか……コロナはビックリなんです」

お前が一体どうしちゃったんだよ。

つーか、そんな怪しげな語尾つけた覚えねえぞ。

「ひっどーい！　しゃっちゃんだってハイパーペったんこじやん！」
ハイパーペったんこて。

そんな使い方されるとは、ハイパーも思いもよらなかつたろうに。「いやはや。今の話のツッコむべき所は胸のことじゃあ無いと思うの

だけでも。

ていうかだな、コロ美。おめえさん変な話しないでくれよな。誤解しちまうだろ」

言うだけ言って、我関せずとばかりにゴシゴシとジジイの乾布摩擦よろしく体を拭いているコロナに苦言を呈してみるが、

「変な話もなにも、ホントのことなんです。パパさんはコロナたちを見捨てて逃げる気まんまんだったのです」

ち、ちいっとばっかし言い方に刺々しさが感じられるのは気のせいかね。

「えーっ!? しやつちゃん、霊鳴呼んだとき『魔法少女なっちゃいました、春なので』とか、

『ここは一つ、先輩のお手並み拝見ってことで』とか言ってたから、やる気あると思ってたのにな」

「んな、四ヶ月も前の話を蒸し返されてもよオ」

「今日のお話だもん！」

「大体さア、おめえらがコロ美と俺を契約させるうんぬんで盛り上がってるとき、ちゃーんと俺は魔法使い自体をやりたくねえって抗議してたんだぞ」

「そ、そんなの聞いてなかったもん……。ぶううう」

「ったく。ほれほれ、若いのにそんな顔すんなって。眉間にシワを寄せる度に幸せが逃げちまうって親父が言ってたぜ」

グリグリとゆりなの眉間を指でこすってやる。

「そんなのより、しやつちゃんが逃げちゃうことのほうが大問題だよっ」

幸せを、そんなのよりって言い切ってしまうなんて。

なんていうか、こういうところが子供だねエまったく。

と、肩をすくめて苦笑いしていた俺に、

「——幸せなんて、そんなので十分だもん。いらないもん。しやつちゃんが一緒に居てくれる方が絶対いいもん」

そう言って俯くチビ助。

こりゃあ……冗談を言って逃れられる雰囲気でもないか。

まあ、何故だか気に入られているようで悪い気はしないのだが、だからといって付き合う義理もない。

一日や二日の旅行とは違うんだ。

何が起こるか分からないし、いつ終わるかも分からない魔宝石集めなんざ、正直やってられん。

いつまでもこの世界にとどまって、親父に心配かけたくねエし。

中学のダチに会えなくなるのもキツイ。返してもらってないゲームもあるしさ。

そういやケンカでケリをつけてねえヤツもいる。(ただいま四勝五敗)

負け越しのまま逃げたら、あのヤローになんて言われるか。

そんなこんなで、俺もいささかに忙しいワケで。

なーんて、ガキのこいつに言ってもピンとこないだろうさ。

だから、俺は少々強引だが子供相手に納得させるためにはこれがベターだと思い、こう言った。

「悪いけれども、俺にも色々事情があるんだって。おめえさん方が切羽詰ってるつーのは、よくわかるけれどもよオ……。」

ま、あんまり『ワガママ』言わねエでくれると助かるってワケで」その瞬間だった。

あきらかにゆりなの動揺していく様が見て取れた。

「ワガママ——?」

瞳孔が開き、先ほどまでの元気ハツラツ少女とは思えないような無表情に変わっていく。

目の光がサツと消え、どこか遠くを見ながら、

「ごめんなさい……言わないから、もうボク、『ワガママ』言わないから」

「え?」

「ちゃんと良い子になるから、ボク、ワガママなこと言わないから。だから、だから、だから——」

気が抜けたようにペタンと座り込むゆりな。

「大丈夫か、どっか具合でも悪いのか?」

どうしたらいいのか狼狽している間にも、ゆりなの呼吸が荒くなつていく。

胸を押しえて咳き込む彼女に、何も出来ず呆然と立ちすくむ俺。

「けほつ。え、えへへ。ごめんね、しゃっちゃん。ボクは、だ、大丈夫だから、先にお部屋戻っていいよ……けほつ、けほつ」

「お、おいつー!」

「……パパさん。コロナたちは大人しく立ち去るべきだと思っうんです」

「んなこと言ったって、放っておけねえだろ!」

そう振り向いた俺の目の前に、どこか悲しげな表情をしたクロエが現れた。

「あーあ。アレを言っちゃまったか。いつ出てもおかしくなかったからな、しゃあねえか。

コロ助の言うとおり、おめえらは部屋に戻ってな。あとはオレがなんとかすつから」

いつもの事だというような軽い調子で言った後、

「——シラガ娘。ポニ子にもう『あの言葉』を言わねえでやってくれ。すまねえ、ワケはいつかちゃんと話すからさ……」

背を向けたまま、黒猫はそう呟いた。

第十一石：選ばれたコドモ

その後、ゆりなの部屋で髪を乾かす俺たち。

小さなピンクのドライヤーを髪にあてつつ考えることといえば、やはりさっきの事だ。

「ありやあ……一体、なんだったんだ。おめえさん、なにか知ってるかい？」

再びに、俺の組んだあぐらの中へと陣取ったコロ美に訊いてみると、

「コロナもわからないんです。お姉ちゃまは『あの言葉』を言わないでほしいって言ってたのです」

あの言葉――

これはおそらく『ワガママ』というワードで間違いないだろう。

俺が『ワガママを言うな』と言ったから、ああなってしまった……と考えるのが妥当か。

だけでも、そんなたかだか言葉一つであれほどまでに辛そうに咳き込むか？

「コロナはトラウマの仕組みという番組をテレビで観たことあるのです。もしかしたら、その言葉がそれを――」

「刺激した、って？」

いやいや、まさか。まだ十にも満たない若さでそんなものあるはずも無い。

フツのどこにでもいそうな子供に見えるゆりなに、『トラウマ』だなんてそんなもの。

「パパさん、本当にそう思ってるんですか？ 子どもだから傷つかないで、何を言われてもヘーキだと、そう思ってるのですか？」

ジツと見上げてくるコロナ。

む。

やけにつつかかってくるじゃねエか。

「……まどろっこしいねえ、何が言いてエんだ」

「コロナは、旧魔法少女さんよりチビチビなんです。だけど、大人と一

緒でちゃんと傷つくのです。

パパさんに契約断られて怒鳴られたときとか、パパさんにコロナと一緒に風呂はつまらないって言われたときとか……ちやつかりと傷ついてるんです」

げっ。

何食わぬ顔しているから平気なんだろうと思っていたのだが、マジでか。

「マジなんです」

ありや、まあ。

なんて返していいものやら、ドライヤーの風を冷風に切り替えながら、そう考えあぐねていると、

「でも、コロナは傷ついてもすぐに治るんです」

「そりゃあ、どういうこつてイ?」

という質問に一瞬だけ俯いたあと、

「それは——パパさんが、その後すぐに優しくしてくれるから、なんです」

そう頬を染めて俺のパジャマをぎゅっと握った。

「あんだそりゃあ! ははっ、わけわかんねーヤツう」

ぷつと吹き出した俺に、コロ美は珍しく怒った表情で、

「む。む。コロナは真面目なお話をしてるんです。つまり、コロナが言いたいことは、傷ついても癒してくれる人がいればいいと思うんです」

「ふうん。そういうモンかねエ」

イマイチよくわかってませんといった俺の流し的なリアクションを不服そうに、

「あのですね。パパさんはさつき、旧魔法少女さんがフツーのおバカそんな子どもだから傷つかないって言ってましたよね」

いや、おバカそうなどまでは言ってねエけれども。

「でも、逆に子供だからこそ傷つくようなことがトラウマたる原因だとしたら?」

そして、もしあの人が『いわゆるごく一般の普通の子ども』じゃな

いとしたら?」

「……さてはて。言ってる意味がよくわかんねエなあ」

「パパさんなら分かるハズ——ううん、きつともうとつくに気付いてるハズなんです。彼女の心の傷に、そして彼女と自分とのある共通点に」

へえ、これはこれは。

人の心の中に土足で踏み入ることのできる、スンバラシイ能力の持ち主だけある。

「いやはや。それは俺の心ん中を覗き見たから、だからそう断言できるってワケかい?」

少々おどけて言ってみるが、

「パパさんの言葉を借りると、コロナの能力をそこまで買いかぶって欲しくないんです。

少しだけ、パパさんだけの考えが読み取れるというだけでその奥底までは届かないのです」

「だったら、どうして俺の全てを知ったかのような、」

訊こうとしたが、俺はすぐさま口を噤んだ。

何故なら、コロナがああ光った眼で、ニイっと不気味に笑いながら俺を見上げたからだ。

「それは——ピース様を選んだ『コドモ』だから、なんです」

「ど、どういうこっちゃ。答えになってんのか、そりやあ。もっと具体的に言ってくれよ」

「肯定。つまり、それはですね——」

スツと息を吸って言葉をためるコロナ。

ごくぐりと喉が鳴る。

……ピースか。あの唯一にして最強の魔女だとかいうふざけた婆さんが選んだ子ども。

俺は当然として、やはりゆりなも故意に選ばれた子ども——そういう事なのか?

いよいよキナ臭い話になってきたもんだ。

そう、神妙な顔をして待っていると、

「へっくち！ ……なんです」

ガクツ。

なんとも間抜けなクシャミに一気に脱力してしまう俺。

「あらら、鼻水出てんぞ」

「あ、う」

鼻水をズルズルとすすろうとしたそいつに、

「こら。ちゃんと鼻をかまないと中耳炎つう、こわい病気になっちゃうんだぜ」

ティッシュを二、三枚取り出して鼻にあててやる。

「ほら、チーンて」

「ちーん」

「ん。キレイキレイなった…って、つまりそれはへっくちなんですつつーのは、どういう意味なんでえいコロ美イイ！」

うがーとすごんだ俺に、コロナは鼻を真っ赤にして、

「ごめんなさいです。今のクシャミで何言うか忘れちゃったんです。

えっと。パパさん、コロナの髪も乾かして欲しいのです。風邪ひきそうなんです、いささかに」

「ったく、興奮めたアこのことだな。あと、さりげに俺の口癖マネしてくれるなよ」

「おっけー。恐縮なんです」

「……コロ美、おめえワザとか？」

「ぶいっ」

いや、どうしてそこでVサインが出るんだよ。

ホント意味不明なガキんちよだ。もしかすると、今時の幼稚園児はみんなこんな感じなのか？

だとしたら全国の保母さんに同情しちゃうぜ…。

そう頭の中で嘆いていると、またもやコロナが大きなクシャミをかました。

「あー、もう。しゃあねえなあ。俺様が乾かしてやんよ。チツ、めんどくせエめんどくせエ」

「やたっ」

「前向けー、前」

「肯定なんです！」

と、前を向いたはいいが、ぴよんこぴよんこと跳ねるもんだからたまらない。

「はしやぐなつて」

ドライヤーをオンにしながら、

「ほら、ジツとしてなア。動くときヤケドすんぞ。つか、霊獣サマとやらも風邪をひくモンなのか？」

カラダ丈夫なんだよな、確か。

クロエ曰く、ちよつとやそつとのことじゃあケガしないとか言ってたよーな。

「肯定。ケガはしてもすぐウニョニョつて治るんです。でも病気は普通にしちやうのです」

「あーそう、ウニョニョっスか。お客さん不気味な体してるんスね」

「はい。不気味な体なんです」

そんな美容院のようなヘンテコな会話をしつつ、コロナの髪を乾かしているとき、

後ろのドアがカチャッと開いた。

「ん？」

振り向くと、まだ周囲に湯気を立ち昇らせているゆりながソーツと顔を覗かせていた。

第十二石：ナミダ、乾かして

「お、ゆりな。早いねエ、もうあがったのかい」

うんっ、と笑顔で返されるものだとはかり思っていたのだが、しばしの沈黙のあと、

「……あ」

と言つて後ずさり、そして、

「うっっ」

目に涙を浮かべてボタンと扉を閉めた。

どしたんだ？ と首を傾げている俺に、

「きつと、パパさんとどう顔をあわせていいのかわからなくて困ってるんです」

なるほど。別に、気にしちやあいねーのに。

——いや。あんなこと言ったんだし、気にしなければいけないのは俺のほう、だよな。

「パパさん。コロナのさつきのお話覚えてるですか？」

「ウニョニョつてケガが治るんですって話？」

「否定。ウニョニョじゃないのです。傷ついても、癒してくれる人がいればつてくだりなんです」

「ああ、それ」

癒してくれる人って、言われてもねえ。

少なくとも、今日チビ助と会ったばかりの俺にそんな大役は務まらねーな。

だけど。まあ、なんだ。モヤモヤすんだよな。

癒す云々は正直ピンとこねエけど、あいつにはちやんと謝らなきやいけないな、つていうモヤモヤ感。

ま。ウダウダ考えていても埒があかねエし。

立ち上がり、ぐいーつと伸びをしながら、

「うしっ、あとは自分で乾かせるな？」

コロナの頭をぼんぽんと叩いて、ドライヤーを渡す。

そしてドアの前に立ち、言ってみる。

「おーい、チビ助やーい。お前さんも早く髪乾かさないと風邪ひいちまうぞ」

いなかったりして。だとしたら恥ずかしいコトこの上ないが。

「しゃ、しゃっちゃん。えっと、その、ボクね。あのあの……」

お、いたいた。

ゆりなの声が聞こえやすいように、背中をドアにぴったりとくっつけて、

「あー。ゆりなき、さつきはゴメン、な」

「……えっ?」

「なんつーか、イヤなこと言っちゃまって。悪気は無かったっていうか、ありゃ、これイイワケか。その——とにかくゴメン。もう言わない」「ううん。違うもん、しゃっちゃんが謝ることなんて全然ないよ。」

ボクの方こそ急におかしくなっちゃって、だからしゃっちゃんに謝らなきゃいけないって思ってる……」

「じゃあ、おあいこ」

「でも、」

「めんどくせーから、おあいこ」

「う、うん。ありがと、しゃっちゃん」

ドア越しに泣き声が聞こえてくる。

ホント、泣き虫なヤツ……。

「あのさア。髪、乾かしてやるよ。特別サービス、俺けっこう上手いんだぜ。さつきコロ美で実験したし」

聞いた途端、頬を風船のように膨らませたコロナにごめんなポーズをとった後、

「だからまあ、もう泣くのはやめてさ。笑ってこうぜ。お前さんはそっちのほうが、しっくりくるっつうか——まあ、なんていうか、」

言いかけたところで、急にドアがバツと開いた。

「しゃっちゃん!」

体を支えていたモンが無くなった俺は一瞬倒れそうになるが、すぐさま支えられた。

というよりも、抱きしめられたつったほうがコレは正しいのか。

「……な、なんだよ、ジャーマンスープレックスでもかまます気かい？」
そんな俺の冗談に、

「にやはは。違うよーだ。チョークスリーパーだもんっ」
ポヘツと首を絞められた。

全然痛くは無かったのだが、そっちがその気ならと、

「いっひっひ。やったな、こんにやろー。ジャイアントスイングすっぞー！」

「バリアするし！」

「甘い甘い、俺の世界じゃあ投げ技はバリア貫通なんだぜ！」

「えーっ、そんなのずるい。今はこっちの世界だもんっ」

「秘儀、チョーク抜け！」

ゆりなの腕からするりと抜け出し、

「さーて、覚悟しろってなモンで……」

そう振り返って、俺は目を見開いた。

あれ、コイツ。

「むー。こうなったら霊冥呼んじやおっかなあ」

よく見ると結構――

「しやつちゃん？」

「あ、ああ……。いや。ていうかお前、ずりいぞ。プロレスごっこで霊
鳴呼んだら反則負けだっつうの」

「あ、そっか。反則負けになっちった。にやはは！ やっぱ、しやつ
ちゃんと一緒にいると楽しいなあ」

屈託の無い笑顔を向けるゆりな。

俺は少し肩をすくめたあと、

「ん。やっぱそっちの方がチビ助っぽい」

と、ついボソっと言ってしまった。

「え、しやつちゃん何か言った？」

「なーんも。ほれ、それより髪乾かさねーの？」

「乾かすー！ わーい！ アイスイーターちゃんわーい！」

バンザイして、何故かコロナを抱き上げるゆりな。

無表情のままブンブンとなすがままに振り回されるコロ美。

せつかく綺麗にセットしてやった髪がボツサボツサになって……ト
ホホとこめかみを押さえる俺、といった構図だ。

やれやれ、しかしまあ。

ああ言っただいいが。

ちと、こいつの場合、元気すぎるのも問題かもしれないな。

第十三石：飯は高し食せよ乙女

「はいっ、どうぞ召し上がれなのです！ 今日はいしゃっちゃんちゃん
と、ころこっちゃんのために腕によりをかけて作ったです……っつ」
テーブルに続々と置かれていく料理を前に俺は啞然としていた。
「え、これ全部お姉さんが作ったんですか？」

訊くと、ゆりなお姉さんは飛びつきりの笑顔で、

「はいっ。お二人に喜ばれるよう、どの料理が良いか三思九思しての
結果ですっ」

その結果が、この天を穿つようなタワー盛りご飯ですか。

こりゃあ、白飯だけですぐに満腹になっちまうぞ。

一つ一つがパーティ用かと思える程の量のおかずも凄まじいけれ
ども……。

隣に座っているコロナも額に汗を浮かべて、

「こ、コロナは見るだけでお腹いっぱいになってきたんです」

右手に持った箸がふるふるカタカタと震えている。

俺はそいつの肩をちよんと突付いて出来るだけ小声で、

「おい、コロナ。お姉さんのあの顔を見てもそれが言えるかい？」

「……………うっ」

満面の笑み。

両手をギュツと握って、キラキラと目から星を飛ばしまくってい
る。

星マシンガン十発ごとに俺とコロナを交互に見ているワケで。

そりゃ、あんな期待された表情で見つめられた日には……。

「わ、わーい。美味しそうなんです！ いただきまーすっ」

そう言うしかねーよなア。

俺とゆりなもそれに続いて、

「いっただきまーすっ」

+++++

二十分後。

数多あるお皿の中身は、見事にキレイになっていた。

「にやはは、お姉ちゃんのご飯美味しかったーっ。ボクの大好きなロールキャベツもあつたし！」

ゆりながコップに注がれた麦茶を飲み干して言う。

「あらあら、うふふっ。ゆっちゃんは小さい頃からロールキャベツが好きでしたものね。」

お二人はあの中に何か好きなおかずありましたでしょうか？ なるべく好物に当たる様にと多く作ったつもりなのですが……」

ゆるりと訊ねられるが、俺達はそれどころじゃない。

「う、うっぷ。コロ……美。お前が、答えてくれイ」

まるで漫画のようにでっぷりと出たお腹をおさえながら言う俺と、肯定、なんです。えっと、こ、好物以前に、ご飯だけでポンポンがパン、という状況……なのです」

まるで漫画のようにぽっこりと出たお腹をおさえながら言うコロ美。

そうなのだ。

俺とコロナは茶碗に盛られたタワー飯を平らげるのがやっとで、おかずまで手を出せずにいた。

とすれば、なぜ皿の中身がキレイになっているのかという疑問が出てくるのだろうか——なんてこたアない。

「あれ、しゃっちゃん達おかず食べてなかったっけ？」

「えっ！ も、もしかして私達だけで食べてしまったのでしょうか……」

と。

きよとん顔を見合わせる姉妹。

何を隠そう、彼女達が猛スピードで食べていたというオチだ。

そりやあもう凄まじい光景だったぜ。

笑顔のままパクパクモグモグと、華奢な体のどこへそんなに入るのかと問いたくなるくらいだ。

見ているだけで腹いっぱいとはまさにあの状況だな。最上級の例だろうよ。

「なんという、なんということでしょう……。では、ただいますぐに作

り直しますっ！ 悔悟憤発ですっ！」

「い、いや、大丈夫ですからホント！ お気になさらずっ！」
青ざめた顔で即答する俺に、

「……けっぷ」

こっそりとおくびで答えるコロナ。

「あう。ごめんね、しゃっちゃん。ボク、みんなとご飯食べるのが楽しくって、全然気付かなかったよう」

ゆりながそう言つて、申し訳なさそうに背中を丸くする。

まーた、そうやってすぐに謝る。

謝る必要なんざ微塵もねエつてのに。

「ふっ、構わんぜ。俺のことは気にせず、いっぱい食べて大きくなるんだぞ、ゆりな。摂取した栄養は最大限に活かすんだ」

「え。う、うん……。がんばってみるっ」

「頑張りすぎて怪獣なみになられても困るケドな」

「わっ、怪獣がつくいーっ。がお、がおー！」

「ハ、ハハ。あんだけ食ったのに、元気っすね……」

あいててて。

腹痛のときによくわからん掛け合いなんてするもんじゃねエな。

そう力無く笑う俺に、

「ゆっちゃんとしゃっちゃんちゃん。とても仲良しさんなんですな。かなり前からお友達なのですか？」

頬杖をつきながら、微笑むお姉さん。

「ええ、まア……」

本当は今朝初めて会ったばかりなんだけれども。

そう言うワケにもいかねえし。

「えへへ。ずっと前からお友達だもんね。仲良し、仲良しー！ が
おー！」

「——そ、そうだな。っておいコラ、人の耳を噛むなって」

「がおおーん！ がるるるー」

「もはや怪獣じゃなくてただのライオンだろそれ」

残り少ない体力から搾り出したチョップをかましてやると、そいつ

は何が楽しいのか、

「にやはは。殴られちったー。きやいんきやいーんっ」

と、小走りで食器を洗いに行ってしまった。

「つか、動物キヤラをやるならやるで、ちゃんと統一してくれよな。

「あ。コロナも洗うんです。食べたらキレイキレイするのです」

隣のツーサイドアップが言って、ぴよんと椅子から飛び降りる。

「そうだな。んじゃ、俺も腹ごなしに手伝うとするかねエ。」

手を広げて待つコロ美に渡そうと、俺たちの食器を重ねていると、

「ん？ なんだこれ。『ももはせんよう』だあ？」

「コロナの使っていた、ちんまいピンク色の箸にそうマジックで書かれていたのだ。」

「ひらがなだから分かりづらいが、これは多分『ももは専用』という意味か？」

お姉さんが俺の手元を覗いて、

「あらあら。ゆっちゃん、もっちゃんの小さい頃のお箸だって、懐かしいですねーっ」

「エプロンを後ろ手に結んでいる最中のゆりなに声をかける。」

「それ、コロナちゃんについてボクが戸棚の奥から見つけたんだよー。ももちゃんってば、ピンク色のもの全部に『専用』って書いてたもんね。」

「ボクのケシゴムの裏にも書かれてたっけ。にやははっ」

それを聞いたゆりなは後姿のまま、とても懐かしそうに答えた。

「あの、ももはさんって誰なんですか？」

「コロナの疑問に俺も続ける。」

「もしかして、もっとご兄弟がいらっしやるとか？」

「実はもう一人いる一番下の妹が使ってる、みたいな。」

「んーん。違うですよー。もっちゃんは、ゆっちゃんの幼馴染さんなのですよ！」

桃色なサラサラの髪と白い肌がとても可愛い子なんですよ。このお箸は、幼稚園の頃もっちゃんが遊びに来てたときによく使ってたんです。

でも——年長さんになる頃には、もう使われなくなっちゃったんですけどね……」

寂しそうに俯いてしまうお姉さん。
なにやらこれは。

これ以上聞いているはイケナイ雰囲気のような。

「そ、そうですか——」

どう話を切り替えたらいいものかと食器をコロナに渡しつつ考えていると、

「何故なら、大きくなったもつちゃん専用お箸があるからなんですつ」
ドギヤーンと取り出されたピンク色の箸には、これまた『続・ももは専用』と書かれていた。

「今もつちゃんが使ってるのこれですよね、ゆっちゃん」

「うんっ。昨日もそれ使ってたもん」

「え……。昨日もっ？」

するってえと、今でもちよくちよく遊びに来てるってことかい？

「ちよくちよくっていうより——毎日です。四歳の頃から今までずっと、ですっねっ」

食器を運び終えたコロナの頭を良い子良い子と撫でながら、事も無げに微笑むお姉さん。

毎日って。

しかも四歳の頃からとなると、ゆりなが九つとして五年間ってことになる。

いやいやいや。

フツウ、かなりの迷惑もんだぜ、そりゃあ。

一晩宿を借りる身の俺が言えたモンじゃないけれどもさ。

「ぜんっぜん、です！・むしろ一日でももつちゃんがいらっしやらないと、とても不安です。悲しいです。がっかり、なのです。

きつと、しやつちゃんちゃんと、ころこつちゃんも彼女と会えば自然と仲良くなれるハズです……っっ」

「そ、そうですかねエ」

「え。コロナも、ですか？」

「そうですともっ！ だって——」

あまり乗り気でないといった雰囲気の俺たちをいっぺんにギュツと抱きしめ、

「お二人ともこんなに、こんなに可愛くてイイ子なんですから。」

イイ子同士はすぐにお友達になれること間違いなしなのですつ。

肝胆相照、ですつ」

お姉さんは全てを包み込むかのような優しい声で言った。

この人は、どうして。

一度会っただけのどこの馬の骨ともわからないヤツにここまで柔らかな言葉をかけるのだろうか。

いや——

この姉妹は、か。

いささかに苦手だな……この温もり。

俺はお姉さんの腕からするりと抜け出して、

「す、すんません！ 俺、あの捨て猫の様子が気になるんでっ」

そそくさと階段をかけあがった。

第十四石：寝心地サイアクのふともも

部屋に戻ると、捨て猫もといクロエが学習机の上で毛づくろいをしていた。

「おろ。遅かったじゃねーか。ポニ子とコロ助は一緒じゃねえのか？」

「もうしばらくしたら来ると思うぜ……。あたたた」

急に走ったもんだから、腹が悲鳴をあげやがる。

「その様子つつーか腹を見ると、例のアレを喰らったみたいだな」

あの山盛り飯のことを知っているのか。

ベッドにドカツと座り、一息つく。

「ああ。喰らったぜ、二重の意味でなア」

「けけっ、うめえこと言うじゃねーか。ポヨ子の飯、美味かったか？」

「白飯しか食えなかつたけれども。炊き方はかなり上等なモンだったぜ。丁度いい硬さで。てか、ポヨ子ってどういう意味なんでイ」

「んなの決まってるだろー？ ぽよよしてるから、ポヨ子。性格と体と、二重の意味つつうヤツでさ。にっしっし」

「……おまえさんなア。エロ親父みたいな反応に困る発言、謹んでくれるの。俺はこれでも中身は健全な中学生男子なんだぞ」

「はっ。よく言うぜ。てめーはそんじよそこの鼻水たらした中学生とは違うだろ」

「これはこれは。買いかぶってくれるねエ。恐縮だけでも、ここは素直に喜んでおこうかね」

「飄々としやがって。ジジくせえのはどっちなんだか。ま、だからこそピースに選ばれたのかもな」

またその話か。

選ばれしもの、うんたらかんたら。耳にタコだって。

コントローラーのAボタン連打で会話を飛ばしたいくらいだね、まったくもって。

「わりーけれども、」

言いかけたところで、黒猫が跳躍。

音も無くベッドに飛び移り、俺の膝の上で丸くなる。

「なんだ。暑苦しいぞ、毛皮ヤロー」

「けけけっ。シラガ娘、おめえは腹いっぱい動けねえんだろ。だつたら大人しくオレを可愛がりやがれ。満足したら退いてやんぜ」

俺は小さく舌を打った。

「口やかましい猫だなまったく」

実に腹立たしい食肉目小動物の背中を撫でようとして、俺は止まった。

何故なら、クロエが驚いたような顔で俺を見ているからだ。

「なんでエい。俺様の顔に飯粒でもついてるのかイ？」

「あ。いや——な、なんでもねえよ」

「……変なヤツ」

なんでもないとされると気になるのは何でかねえ。

しかしながら、と俺はクロエの背中を撫でながら思う。

このバカ猫と一緒にいるときは、なんつーか気が楽だ。

言葉遣いが俺に似てぶつきらぼうな為か、気安く軽口が叩ける。

他の女性陣はいささかに、どうもな。(二応こいつも女だったか)

コロナはただひたすらに面倒だし、ゆりなは少し慣れたが、やはりまだ苦手だ。あの瞳が。

そして、ゆりなのお姉さん。彼女が一番厄介だ。あのほわほわとした温かさが——心底キツイ。

「なあ、シラガ娘よ」

「はーいつ。なあに、クーちゃん？」

俺のここ半年で一番の茶目っ気に、

「き、気持ちわりい声だしやがって。大体、オレをクーちゃんと呼んでいいのは、ポニ子だけだぜ」

「へえへえ。そうかいそうかい、そいつは残念だねエ」

そんなことよりと、黒猫が俺に向き直る。

「さつき何を言いかけてたんだ？ わりーけれども、の続き」
ああ。すっかり忘れてた。

「まあ、アレだ。散々コロナには言ったのだが、やっぱし俺ア、魔法使いなんざやる気しねエから。」

どうせ首を突っ込んだら、間違いなくべらぼうに面倒なことになるだろうし。だからその前に——」

「この世界から逃げ出す、ってか？」

俺の台詞を先回りした後、クロエは器用に腕を組んで瞑目した。

「……言ったハズだぜ。元の姿に戻り、そして元の世界に帰りたいのなら、いくら探したって方法は一つしかない、と」

未だ目を瞑ったままのそいつに、

「——最悪、姿はチビガキのままでもいい。とりあえず、俺ア俺の世界に帰ってエって話。明日か、出来れば今夜にでも俺はこの家を出る。」

このままズルズルと引き込まれるのは勘弁だ。行動しないよりはマシってな。何か戻れるきっかけを掴めるかもしれねエし」

ま。姿に関しては、本当に最悪の場合だけでも。」

「そうか。わかった」

てつきり怒鳴られるかと思っていたのだが、猫は悟ったように頷いて、続ける。

「お前の呪いを解いて、元の世界に戻してくるようオレがピースに掛け合ってみるぜ。」

——抜け出すときはなるべくあいつらにバレない方がいいだろうな。

夜中、タイミングを見計らってオレが声をかける。その隙にこの家から出るぞ。いいな？」

「そ、そりやありがたい話だけれどもよ。一体どういう風の吹き回しなんでイ？」

こいつにとっては俺が魔法使いにならないと困るんだろ？

だったら逃走に協力的になるのは、いささか不可解に思えるが。単純にこの猫の考えがわからんな。

「……猫であるが故の、気まぐれなもの。そう思えばいい」

俺の疑問符に、淡い笑みを返す黒猫。

そいつは一つ大きい伸びをしたのち、再び丸く寝なおして、

「ケツ、硬え太ももしやがって。誰かさんに似て寝心地サイアクだ
ぜ、ったくよ」
と、口角を上げた。

第十五石：あばよ、チビチビ

「しゃっちゃん、本当に下でイイの？　ボクのベッドで寝てもいいのに」

ベッドの脇に布団を敷きつつ、ゆりなが俺に訊ねる。

「宿を借りてる分際でご主人様のベッドを占領するワケにもいかねーって。それに、寝ぼけてまたお前さんの腹を踏んじまうかもしれないえし」

「ふええ。それはもうゴメンだよ……。思い出したらお腹ズキズキしてきちゃった」

「いっひっひ。そりゃあ、ただの食い過ぎ。あんだけ腹に詰め込めば痛くもなるって、フツウ」

「えー？　いつもより控えめに食べたのに。まだまだ余裕で食べられるよーつと、ほい！　お布団出来たよ、しゃっちゃん」

「おつ、さんきゆう。こりゃあ、寝心地良さそうだ」

完成した布団に胡坐をかく。

やはり、これだね。ベッドより布団のほうがしっくりくるぜ。

にしても、やけにフワフワとしていて肌触りが良いな。なんの柔軟剤を使っているのかね。

「……うげっ、こんなところにも書いてやがる」

マクラの右片隅に、『ももは専用』の文字を見つけ、即座に裏返す。

こいつ、いくらなんでも書きすぎじゃないのか。

ほつといたらこの家ごと乗っ取られる勢いだぞ。

「どつたのー？」

ベッドに腰掛けて首を傾げるゆりなに、

「いや、えーつと。アレだ。なんつうか、見事な食べっぷりだったなあってきつきの思い出して。はは。

すげえよな、あの量。お前さんの小さな体のどこに入ってるんだって不思議でならないぜ」

「へへへ。それなら、もうなくなっちゃってるよ。だって、ボクのお腹はブラックホールだもん！　にゃーんちって」

パジャマをめくり、腹をポンポコと叩いて笑う。
う、うーむ。

あながち冗談に聞こえないところが、恐ろしい。

「そういえば、クーちゃんとアイスウォーターちゃん遅いね」

「散歩行っただっけか。すぐ帰ってくるつつつてたのに、何やってんだかねえ」

「なんか、思い出話に花を咲かせてくるんです、とかアイスウォーターちゃん言ってたよ」

「ふうん。思い出話ねえ。というか、イマイチあいつらの関係性が分からないぜ。」

コロ美はクロエのことをお姉ちやまつて呼んでたけれども……どう見ても似てないよな?」

「あはは、やっぱしゃっちゃんもそう思う? 性格全然違うもんね。」

クーちゃんは怒りんぼなイメージで、アイスウォーターちゃんはトロンと眠そうなイメージ」

「そうそう。それ以前に、猫と蝶々だしな。元からして別モンすぎるって話さ。姉と呼んでるけど、きっと本当の姉妹じゃないだろうよ」

とはいえ、それは『霊獣』という特殊な枠で考えると違うのかもしれないけれども。

霊獣。

当たり前の話だが、謎の多すぎる存在だな。

「ふにゃ……あ」

大口を開けてあくびをするチビ助。

時計を見やると、まだ九時手前だが。

いやはや、小学生にはツライ時間かもしれないな。

眠いのかと訊ねると、うん、と頷いて、

「にはは……。いつもはとっくに寝てる時間だから。」

でも、クーちゃん達待たなきや。それにしゃっちゃんともっとお話ししていたいし——」

そう言つて、『ふにゃああ』と再びデカイあくびをかます。

限界だろうな、こりゃ。

「話なんざ、明日でもたくさん出来るって。もう寝ようぜ。少しだけ窓開けてりゃ、あいつらも勝手に入ってくるだろ」

「うん、そうだね。それ採用っ。じゃあ電気消しちゃうよ」

「おうよ。おやすみ」

「おやすみっ！ また明日いっぱい遊ぼうね」

「……ああ、また明日な」

紐が引っ張られ、電気が消される。

代わりに点いた橙色のナツメ球を見上げながら、俺は小さくため息をついた。

また明日、か……。

今夜これからクロエがピースに直接口添えをしてくれる。

スムーズに事が進めば、男の姿に戻れてそのまま家に帰してもらえらるだろう。

楽観的な予想かもしれないけれども。一人で脱出を試みるよりは遥かに可能性があるハズ——

そうなれば、俺とゆりなの明日は別々の明日になる。

あっさりと。

もう二度と交わることのない平行線へ。

＋ ＋

「起きろ、バカシラガ。時間だぜ」

耳元で囁かれ、俺は不機嫌に目を開けた。

マクラもとに座っていたのは俺よりも不機嫌そうに腕を組む黒猫だった。

もぞもぞとそいつの隣に置いてあるピンクの蜘蛛さん時計を引き寄せてみる。

「……なんでエい、なんでエい。まだ夜中の二時じゃねえか。つぎ起こしたら、猫じゃらしの刑に処すぜ。にゃんちくしょうめい」

そう寝なおそうとした俺に、

「ほー。じゃあテメエはこのまま魔法使いをやるってことでいいんだな。あいわかった、おやすみ」

ガバつと飛び起きる。

あ、あぶねえ！

「待った、待った！ いやあ、すっかり寝ぼけててさ。謝るからピース
んところへ連れてつてくれよ。なあつてば、プリチーなチョコチップ
マフィンちやあん」

「うげええ。わーつたから、気持ち悪い声出すなつて。ほれ、さつさと
ついて来やがれ」

「いつひつひ。オーライ。わかりましたんで、つと……アレ？」

ホツと胸をなでおろし、布団から出ようとしたところで、腰に違和
感。

タオルケットをそーつとめくつて目を凝らすと、そこにはコロ美が
眠っていた。

俺のパジャマを左手でガシツと掴みながら、右手の親指をちゅぱ
ちゅぱと吸ってやがる。

「チツ。コロ美のやつ、人の布団の中に勝手に入ってきやがつて。ど
うりで暑苦しかったワケだ」

「……すーすー」

やれやれ。

あどけない寝顔だけ見れば、ただのどこにでもいそうな人間の子ど
もなんだが。

「どーした？」

「わりい、ちよつち待っておくんま」

言いつつ、起こさないようにとチビチビ助の指を一本一本外してい
く。

「い、良い子だから、とつとと離しやがりましたようねエ」

最後の指を外し、やっと解放される。

んじや、行こうかねと立ち上がった時、

「パパさん……」

げっ、起きちまった？

「ダメ、なんです。そんな市役所前でソーラン節を踊ったらみんなの
迷惑なんです……むにやむにや」

って、おい。

なんて変な夢を見てやがるんだ、このガキんちよは。

市役所前でソーラン節って、どんな新手の抗議なんだよ。

「にしし。よっぽどコロ助に気に入られたみたいだな。さつきもおめえの話ばかりしていたぜ。そりやもう楽しそうによ」

「あーそうかい。こんなガキに好かれたところで、別に嬉しくもなんともねエけど」

首をこきこき鳴らし、今度こそと部屋を出ようとするが、

「へっくちつ、なんです」

またあの珍妙なクシャミ。

「ったく、だからあまり長時間ウロチヨロ出歩くなって言ったのによオ。」

布団をかけ直し、背中をぽんぽん叩いて言ってやる。

「ばあーか」

一応、ついでに。

「……あばよ、チビチビ」

第十六石：巨大なハチドリ!? ホバー・ザ・ルヒエル襲来!

部屋を出ると、クロエは隣の物置部屋へと手招きした。
とはいえ、キレイに片付いてるけどな。

「この部屋にはベランダがあるんだ。抜け出すには最適ってワケ。よし、こっちだ」

と、器用に戸をガラツと開けると、ぴよんと飛び降りてしまった。
「お、おい！」

そりゃ、お前さんは猫だから簡単に飛び降りられるのかもしれないエけど。

俺は普通の人間だぜ。

しかも今は小学生レベルだから普通以下だぞ。

「……行けるかな」

二階程度ならと、下を覗いてみるが——いや、これはコワイって。
「あにしてんだあ、行くぞバカシラガ。男は度胸だろ?」

「バカ猫が! 今の俺は弱い女の子だぞ、コルア」

「けっ、女の子つつうなら代わりの愛嬌を用意しろってーの」

ぶつくさ言いながら、しつぽをクネクネと凄まじい勢いで回すクロエ。

「なあ、シツポ遊びはいいからよ、」

言いかけて俺は固まった。そりゃ固まりもするさね。

なんせ、いきなり闇色の光に包まれたかと思うと、巨大化したんだからな。

こう見ると、もはや黒猫ではなく、黒虎と言ってもいい迫力だ。
しっかし、まあ。

空は飛ぶわ、喋るわ、デカくなるわで。

もうこいつ一匹で全部の石を集められるんじゃないのか。

俺がそんなことを考えていると、そいつはフンツと鼻で笑って、

「今のはシツポ遊びじゃねえよ。巨大化の魔法陣を描いてたんだっつ

の。

オラオラ、いつまでもアホ面かましてねえで、背中に乗りな」

＋＋＋

何度か振り落とされそうになって、（その際に聞こえた意地悪な笑い声から察するに、おそらくあれはワザとだな）

着いた場所はいつぞやの公園だった。

暗く、赤い満月が俺たちを見下ろしている。

「そのベンチに座って待ってな。連絡はつけてある。もうじきピースが姿を現すはずだぜ」

言われたままに腰をかけ、そして横目でチラッと黒猫に視線をうつす。

とつくに元の姿へと戻っているクロエ。

あとは待つだけだと、芝生に寝転がり、毛繕いなんて始めていやがるが。

なんともまあ。

こちらら緊張してるってえのに。ノンキなもんだ。

「お前さんさア。ピースサマつつーのはエライ奴なんだろ。いいのかわよ、んな氣イ抜いてて」

そこまで言っと思ひ出す。

似たようなこと前にも言ったような。

？
「そういうばゆりなが『クーちゃんは特別だもん』とか言ってたっけ？

「けけけ。別にいいんだよ。オレはピースの——」
と。

クロエがゆるりと顔を上げた瞬間のことだった。

突如、凄まじい突風と共に、けたたましい空襲警報のような音が鳴り響く。

いや、警報音にしてはいささか歪んでいるというか——

「な、なんだ？ 近くで火事でも起きたのかねエ……」

そう黒猫に話しかけたが、そいつは俺の声が聞こえていないのか、独り言のように、

「模造石ホバーだと!? なんだって、この時間に、このタイミングで！」

なんのこっちゃ。

取り込み中、申し訳ないけれども。もぞーせきホバーってのは、なんでイ?

「百聞は一見にしかず、あれを見なあー！」

「んあ?」

肉球の指す方向。

俺の座っているベンチの真後ろ、はるか向こうの上空に――

そいつは存在していた。

「な、な、な、なんだよアレは!? 鳥の……いや、知ってるぞあの鳥。

そうだ……ハチドリだ! ハチドリの化け物!」

先ほどのクロエの巨大化なんざ、甘っちょろいものだったと痛感する。

その何十倍もの超巨大なハチドリが、夜空の下で悠々と羽ばたいていやがったんだからな。

頭上には赤黒く明滅している不気味な光輪――そして顔には鈍色の鉄仮面をかぶっている。

その仮面の奥の目が金色に光ると同時に、再びあの空襲警報のような音……鳴き声を発した。

「そうだ。あいつは『第六番模造魔宝石ホバー』と言う石だ」
石だと。

ウソだろおい……それって、まさか。

「そのまさかだぜ。あのホバーは、パンドラの箱から飛び出した七大魔宝石……すなわち、

オレやコロ助の下に敷き詰められた数多の石――模造魔宝石ってやつの一つだ」

「ってこたあ、やっぱアレも同じように捕まえなきゃいけないってことかよ」

「ああ。だが――コロ助のときのように話し合いで、とはいかないぜ。模造石どもには心がないんだ。

むしろ話が通じない分、七大よりあいつらのほうが危険とも言える。ただ、単純に暴れまくるんだからな。それこそ、サルのように。見境もなく」

言つて黒猫は鬼のような形相で飛び上がり、

「これ以上喋っている暇は無い。ポニ子を起こしに行く。今、ホバーと戦えるのはあいつだけだ」

そして、こう続けた。

「おめえはそこで待つてな。あと少しでピースはやってくる。

さつき話した様子だと、お前を逃がしてやってもいいって流れだったからな。気が変わってなきや多分大丈夫だと思うぜ。

……じゃあな、シラガ娘。あの世でまた会ったらお札にノミ取りくらしいしてくれよな、にっしっし」

飛び去っていくクロエの背中には諦めが見えていた。

そりやそうさ。

だって、あんな巨大な化け物相手に、あんな小さな子ども一人であんなに一人でな。

——たったの、一人でなんて。

そこまで考えて俺は頭をかきむしった。

「ハッ！ 馬鹿馬鹿しい。この世界から抜け出すには今しかないんだ。

所詮、一日ぼっちの付き合い。あいつらがどうなろうとしたこつちやねえなア」

そうだ。

災いでも何でも、勝手に起きて勝手に滅べばいい。

チビ助やバカ猫やコロ美が死のうが生きようが心底どうだっていい。

こんなワケわからん世界なんて、もうウンザリだね。

俺は家に帰って、ゆつくりのんびりと寝直させてもらうことにするぜ。

……そうだろう？ なあ、シヤクヤクさんよオ。

第十七石：暗い空を見上げて

クロエが行ってしまったから、俺はせわしなく周りをキョロキョロと見渡していた。

夜中の二時過ぎ、いわゆる丑三つ時というヤツだ。

そんな時間に公園に一人だけという状況でも十分に怖ろしいのに、後方には不気味な鳴き声をあげる怪鳥がいるもんだからたまらない。

「ちきしょう……。は、早く来てくれよ」

両手で耳を塞ぎながら俺がそう呟いたとき、右方向から誰かの気配を感じた。

「おつ。やつと来たか？」

だが、振り向いた先に居たのは、想像に描いていた鷲鼻の魔女なんかではなく——ただの小さな子どもだった。

というか、どう見てもコロナだった。

どこかでズツコケたのか、パジャマがドロドロに汚れており、そして何故か、ヘンテコな蜘蛛のぬいぐるみを大事そうに抱きしめている。

えーと……。一応、訊いてみるけれども。

「まさかとは思うが、お前さんがピースだったってオチじやあないよな？」

ぶんぶんと首を振る。否定の合図。

ま。そりやそうかと頬をポリポリ搔いていると、

そいつは今にも泣きそうな顔で俺に詰め寄ってきた。

「……パ、パパさん。大変なんです、模魔が、でっかいハチドリさんが暴れてるんですっ」

「模魔？ ああ、模造魔宝石とやらの略称かい。そういやさつきから突風を撒き散らしているねエ」

後ろを見ずに親指でさし、俺はなるべく冷ややかにこう続けた。

「だから——。だから、なんだってんだよ？」

睨み付けられたコロナは一瞬ひるんだ後、ぬいぐるみをギュツと抱

きしめて、

「お、お願いなんです……。コロナと契約してください」

契約して、ホバーと戦い、そして石へと封印してくれ。

お前らはそう言うだろうよ、当然。

しかしながら。もう俺は、とつくに帰ることを決意しているんでね。

「恐縮だけでも、断らせていただく。第一、ベテランのゆりなが居るんだろ？ きつとあいつがなんとか凌いでくれるさ。」

それでもまだ魔法使いが足りないってんなら、俺の代わりにもう少し融通の利くヤツを召還すりゃあいい」

「……旧魔法少女さんはベテランなんかじゃないのです。」

なつたばかりで、まだ一つしか模魔を捕まえてないし、全然わからないことだらけで不安だつて。

——ご飯のお片づけのときにそう聞いたんです。最初はコロナも、凄いや魔法使いさんだと思つてたんです。

素質は十二分にあると、思うのです。でも場数を踏んでいないとなると、もしかしたら……」

ゆりながなつたばかりだというのは知っている。

ゆりなが不安がつているというのも知っている。

そして、もしかしたらあのホバーに殺されるかもしれないというのも、

——知っている。

「なあ、コロ美は何であいつを心配しているんだ？ 最初は殺すとか

倒すとか、物騒なこと言つていたじゃねーか」

「別に心配なんかしてないのです。あの人を見るとモヤモヤするのは変わってないんです。」

今でも旧魔法少女さんの本気の魔力を確かめたら倒すつもりです」
「だったら、」

どうしてだよ？ と、訊ねようとする前に、コロナは困ったような泣き笑いの表情を浮かべて、

「でも。でもでも——あの人からあつたかいご飯を頂きました。あつ

たかいお風呂も貸してもらいました。

あつたかいお布団も敷いてもらいました。そしてこのぬいぐるみさんも……」

何かのキャラなのだろうか、存在感バツグンのヘンテコな蜘蛛のぬいぐるみ。

気になってはいたのだが。ゆりなからの借りモンだったのか。

「さっき……貸してもらったんです。居なくなった。パパさんを探したら、『しゃっちゃん』は多分もう二度と帰って来ないと思う。」

でもね、本当にしゃっちゃんの事を想うなら、ワガママ言っちゃダメだよ』って言って、そして、この子を、貸してくれたんです」

後半はすでに声になっていなかった。

俺らが出て行くこうとしていたあの時、ゆりなは起きていた。

邪魔をせずに。コロナをあやしつけて。

俺が『ワガママ』を言わないでくれといったあの約束を——精一杯に守って。

本当は心細く、一人では不安だったのに。

「……そうだったのです。ワガママ言っちゃダメだった。パパさんを困らせたらダメだった。だから、もう邪魔しないんです。ごめんなさい、パパさん。」

一日だけだったけど、いろんなことがあってコロナは楽しかったんです。まるで、本当の——」

言い淀んだコロナの背中から光り輝く羽が生まれる。

「ううん、なんでもないので。じゃあ……パパさん、お元気で」

「……あ、ああ」

小さなバイバイをして、ふらふらと飛び去っていくコロナ。

その方向は、模魔であるホバーが居る方向だった。

きつと、ゆりなに加勢する気だろう。

「いやはち」

昨日のゆりなとコロナの弱々しい戦いを思い出す。

あんなボケボケコンビがハチドリに化け物に勝てるのは到底思えねえけれども。

ま。俺には――

「関係ない、よな」

そう呟いたとき、後方からホバーの鳴き声が聞こえた。

振り向くと、黒い稲妻が――ゆりなの放ったであろう稲妻がホバーを捕らえていた、

が。

すぐさまそれを弾いて、暴れるように翼を振る。その動作から一瞬遅れてこちらまで強風が襲ってくる。

「こ、こんなに離れていてもこれかよ……」

近くにいるチビ助なんて、ソツコー吹き飛ばされてしまうだろうな。

まったく。序盤の敵とは思えない、どうしようもない相手だ。

一つケラケラと笑った後、俺は暗い空を見上げて、

「なーにやってんだろ、俺ア」

昨朝と同じ公園の中。

昨朝と同じベンチで。

昨朝と同じセリフを。

ただ一つ、昨朝と違うところはと訊ねられたのならば、

それは――

「来やがれっ、霊鳴!!」

凄まじい速度で飛来する霊鳴を掴むと、そいつは待つてましたと言わんばかりに光り輝いた。

「おお、暖つけえ。こりゃあホットの缶コーヒーを買うまでもねえな。タダで使えるホツカイ口とくらア」

言った直後、これまた凄まじい速度で冷えていく霊鳴。同じくして光も消えていく。

期待して飛んで来てみたらそれかいとのツツコミが聞こえてきそうな即時対応だな、おい。

「ウソだつっの。そろそろ出番近いからウオーミングアップやっといた方がいいぜ、試作型ちゃんよ」

すぐさま熱を取り戻し、ピカピカと光る霊鳴。なんつーか、まるで

生きてるかのような石だな。

ふむ。

「石だけに意思を持つ……なんちって」

急激に冷えこむ霊鳴。再び光り方も切れかかった電球よろしく弱々しくなる。

これはこれはいささかに、と喜んでいる場合でもない、ってね。

さあて、さてと霊鳴をパジャマの胸ポケットに押し込んで、

「そんじゃま。正式採用型ちゃんには負けないように、気合入れて行くぞってなもんで……ひとつ！」

第十八石：夜空、咲く

公園を後にして数十秒そこらのこと。

「めっけ」

前方にて空飛ぶ園児を発見。そいつは飲酒運転のような蛇行した軌跡を描いていた。

しつかし、煌々とまあ。ホントよく目立つ羽だな。

おかげ様ですぐ追いつくことが出来たぜつと、コロナの後ろ頭をぼんぼん叩いて顔を覗く。

「遅くすいません、お酒の飲酒検問やつとりますんで。ちよつと息を吐いて……つとと、あんれま。コロ美つてば、なあんで泣いてんの？」
真つ赤に泣きはらした眼。

しかも、涙をグシグシと泥まみれのパジャマの袖で拭ってるもんだから、なんともヒドイ顔になっている。

「……パパさん？ な、なんで？」

と、訊かれるのは百も承知の助だ。

「なんでつてか。じゃあ逆に訊かせてもらおうけれども、コロ美はなんでもホバーんところへ——つうか、ゆりなものもとへ向かってるワケ？」

「それは……」

ぴたりと羽を止めて、俯くコロナ。

つたく。どいつもこいつも大泣き虫だねエ。

ふう、と少し息を吐いた俺はチビチビ助の前に座って、そいつの流す涙を指で拭いながら、

「なんでか当ててやろうか？ 飯の恩、風呂の恩、寝床の恩を返しに行く……そうだろ？ んで、俺もそうすることにした」

「——えっ？」

「借りた恩は十倍にして返してやれつてな。これ、親父の口癖なり」

続けて言う。

「だから、めんどくせエから、まとめて恩返し済ませちまおうぜ。俺ら二人、一緒によオ。ほら……契約すつぞ、コロ美」

「パパさん！」

泣き顔から一転、花が咲いたようなパアつとした笑顔で飛びついてくるのは結構だけれども。

チビ助が手遅れになっちまう前に、パツパと契約の……呪文？ だったかを教えてくれい。

「肯定なんです！ えつと、えつとですね……あつた。このメモに書かれてる呪文を唱えて欲しいのです」

オーケイ。

手渡された小さなメモに書かれている呪文をそのまま読んでみる。

「——我は命ずる。我に忠誠を誓い、真の力を全て我に宿せ」

その途端、俺の足元に緑色の魔法陣が出現し、胸の奥が燃え滾るように熱くなっていく。

「——我は誓う。主に我の全てを捧げんことを。その力、『翠の氷水』を与えん」

コロナがそう答えると、今度は魔法陣から冷たい風が流れ出してきた。

トクントクンと耳にまで聞こえてきそうな心臓の鼓動。

自分の中で新しい命が生まれてくるかのような、奇妙というかくすぐったいカンジだな。

「ん……もしかして終わり？」

「肯定。契約終了なんです。これでコロナはパパさん専用になりました。ぶいっ」

俺専用で。

モロにももはから影響受けやがったな。

「簡単とはきいていたけれども、本当にあっけねエものなんだな……」
「ついでなので、このままのノリで霊鳴の起動、変身もぼんぼんやっちやうんです」

「おつと、起動だったらお茶の子さいさいってなモンで」

胸ポケットから霊鳴を取り出し、こう呪文を叫んでみる。

「……試作型霊鳴石式式、起動っ！ イグリネーションー！」

すると、たちまちに青い光が俺の手元を包み込んでいく。
ウゾウゾと手の中で石が杖へと変形していくのが分かる。

すげえなどという仕組みなんだこりや、と感動する間もなくそれは立派な蒼杖へと変化を遂げた。

ええと、次は……変身だっけか。

昨日のゆりなの変身を思い出してみる。

「んで、アレか。コロ美が宝石にくるりんぱって化けて、それをこの杖でぶち割る、っと」

確かそういう流れだったハズなのだが、そいつは緩やかに首を横に振って、

「否定。それは昔の変身方法なのです。それだと変身自体は早いのですが、あまり強くないんです。」

今の正式な変身への方法は——これの二十ページ参照なんです」

変身の仕方に今とか昔とかあるのか……。

指。パツチン。

ポンツと出てきた懐かしくもない取扱説明書を二十ページ目へとめくり——

「な、なんじゃこりや！ これを叫ばなきやいけねえのか!？」

驚愕ツラを向けると、コロナは何を当たり前のコトをとでも言いたそうな顔で、

「何を当たり前のコトを?。」

「言いやがった!。」

じゃなくて。

「こんな恥ずかしいのなんて絶対イヤだ。恐縮だけれども、他の変身方法を要求する」

「否定。これしかないのです。だいじよぶ、一度言っちゃえば霊鳴の起動みたいにすぐ慣れるんです。」

パパさん、ふあいとっ、ふあいとっ」

ううむ。

グチグチ言ってる時間なんざ、微塵も無いのは解かってるけどよオ。

……ええい、ままよ。

「わーったよ。もうこうなったら、どこまでもやってやるぜ!。」

「肯定！ やってやるんです！」

言って、小さな蝶々に戻るコロナ。そしてそのままくると一回転。

エメラルド宝石へと姿を変えたチビチビを掴み、

「いくぜつ、コロ美！」

なるべく真上に空高くぶん投げる。

説明書によれば、次に呪文を……唱えなければいけない。

息を吸って目をつぶり、俺はゆっくりと杖を掲げた。

「アイシクルパワー！」

手元に冷たい風が流れ出したところで、

「チェインジ、エメラルド！ ビースト——イン!!」

言うと同時に、目の前へと落下した魔宝石をタイミング良く杖で叩き割る。

これで、合っているはず——ごくりと喉が鳴ったその時だ。

粉碎されたエメラルドの破片が光り輝き、瞬く間に俺を包み込む。

「ひ、ひえええ」

一瞬のうちに裸にむかれ、足元に巨大な魔法陣が浮かび上がった。

その中心部から、暖かいエメラルドグリーンの水流が噴き出し、薄緑色の下着が着用される。

いや、別にパンツは変える必要ないだろ……と顔を赤くしていると、今度は雪が舞い上がった。

その雪が俺の足先をクルクルと回るたびに、コスチュームが現れていく。

それはあれよあれよという間に髪先にまでへと到達していった。

なんか髪をやたら引つ張られた気がするな。

まさか髪型までいじくられたのか？
と。

確かめようとしたその時、無理矢理に深い前傾姿勢へと体が持つていかれる。

「あ、あ、あ——」

涙目で背中を見やると——そこには緑色に光り輝く巨大な蝶の羽

が生えていた。

「コロ美と同じだ……面白いぞ、もしかしたら。

試しに背中に力を入れて、空中へ浮くようにイメージしてみる。だがビクとも体が持ち上がらない。

もう一度だ。

「チイッ……飾りじゃねえんだろ？ この羽は！」

「踏ん張ったその途端、羽から凄まじい量の光の粒子が溢れ出し、（というよりリン粉か？）

俺は夜空へと飛び上がることに成功した。

「ふ、ふははっ……やったぞ」

「その全ての工程を終えた時——

暗闇に染まる町並みを見下ろした時——

俺はようやく、魔法使いになった実感が湧いてきた。

自分の姿を改めて確認してみる。

白を基調としたゆりなに負けず劣らずのド派手なドレス。

緑色に煌くオーラがゆらゆらと俺の周りを流動し、時々水色の雪の結晶が発生しては弾けてを繰り返す。

「こ、これが、俺様の——」

沸々とこみ上げてくる力に、思わず笑ってしまう。

「ククク。実に素晴らしい。この力、よく馴染む」

気分を良くした俺は杖を肩に担いで、

「今行くぜえええ、待ってろよチビ助!!」

夜空を蹴り飛ばした。

第十九石：鬼退治ごっこ開始！

「かーっ、ごちやごちやとまあ。勉強みたいでイヤんなるぜ」
向かう間に少しでも暗記しようと、取扱説明書を読み返していた俺の頭の中に、

『パパさん、そろそろホバーのもとへ到着するんです』

コロナの音が響く。

顔をあげると、目の前にハチドリのような巨大な背中が現れた。

「うわっとなっとなっ！」

腰に力を入れて急ブレーキ。

あつぶねえ。そろそろどころか、激突するところだったぞ。

『あう。この状態だと、イマイチ距離感がつかめないんです』

「あれま。そいつは知らなんだ。ま、運転代行ご苦労さん」

それにしても、改めてホバーを見上げてみる。

「うっひゃあ」

こ、こりやあ……いささかに。

遠目で見えていた時と、迫力が桁違いだな。

とうるかフツーに無理だろ、コレ。

「なあコロ美、このドレスってポッケついてねーのか？ 説明書を仕舞いたいんだけども」

『否定。ポッケは無いんです、でもスカート横にポシェットがあると
思うのです』

確かに花のアップリケがついたピンクの可愛いポシェットは
あるんだが……。

いささかに小さすぎるぞ。これじゃあおにぎり一個でいっぱい
じゃねえか。

やれやれ。

どこの世界でもデザイナーとやらは機能性というものを軽視する
節が、

「きやあああ!!」

うおっ。

この悲鳴、ゆりなの声か——！

「やべえ！ どこだ、どこにいる？」

俺は慌てて取説をパンツの中へ押し込むと、即座に羽を広げてホバーの前へと飛び出した。

一瞬、強風が頬を掠める。

下を覗くと、杖にまたがったまま吹き飛ばされていくゆりなの姿が見えた。

マズイ、このままじゃ地面に叩きつけられちまう……！

説明書に書かれていた魔法の仕組みという項目を必死に思い出す。

たしか七大魔宝石に限り、想像力とセンス次第で主体となる能力をどのようなアレンジ出来るらしい。

つまり、俺が割った石はコロナであり、その能力は『水』及び『氷』となる。

しかしながら、水や氷でどうやってゆりなを……。

いや、待てよ。

そういえば変身したあの時に確か——

上手く出来る可能性は低いかもしれないけれども。

「……で、やらずして——」

研ぎ澄ませ、シヤクヤク。

想像だ——

創造しろ——！

「コロナが魂よ、我に翡翠の水を宿せっ」

杖の表面に薄緑色の水が流れ出したことを確認し、

「ぷくゆゆん、ぷゆん！ ぷいぷい……ぷうっ！」

そいつを振り上げて、ゆりなへ向けると俺はこう叫んだ。

「すいすい、『スノードロップ』！」

その瞬間、杖の先から飴玉サイズのガラス玉が次から次へとゆりな目掛けて飛び出していく。

「おおっ、マジで出るとは。こいつはたまげた！」

初めて出した『魔法』に舞い上がった俺は、杖からポコポコ生まれていくガラス玉をひとつ掴みあげて、月光に透かしてみた。

ひんやりとした氷細工のガラス玉。

その中には無数の雪がヒラヒラと舞っている。

月光に照らされている為か、角度を変えると雪が金色にキラツと輝くという、何とも神秘的な玉ところだ。

「ほー、キレイなモンだな。売ったらそこそこ良い金になりそうだねエ、いつひっひ」

なんて満足げにアゴをさすっていると、若干引いた様子のコロナの声が響いた。

『パ、パパさん……。そんな魔法出して、旧魔法少女さんにとどめをさすつもりなんですか？』

「えっ!?!」

ギョツとして見下ろすと、俺の放った飴ちゃんが猛然とゆりなを襲っているではないか。

「あっちゃー……予想外」

「ふえええーん！　なんか変なものも飛んできたようー!」

と、泣き叫ぶゆりなの声が聞こえるか否かのところで俺は空を蹴った。

羽に力を入れて最大限の加速。

「ぶゆゆん、ぶゆん、ぷいぷいぷう！　間に合えっ、すいすい〜!」

スノードロップがゆりなに当たる直前、そいつの前に駆け込んだ俺は、杖を腰に構えて、抜刀よろしく引き抜いた。

「出てみる、アクアサアアベル!」

言った直後、数コンマの世界で杖が水を纏った刀へと変化する。

感動している暇もなく、俺はがむしゃらに刀を振って飴玉を叩き割った。

すると、どうだろう。

割られた飴玉から大量の雪が舞い散り、地面を瞬く間に覆っていくではないか。

「ぎゃっ!?!」

「うおっとー!」

勢い余って積もった雪の中へとダイブする俺とゆりな。

痛てエ……。もつと早く割っておきやあ良かったぜ。

まあ、なんとか膝を擦りむく程度で済んだし、初めてにしては上出来か。

なんて立ち上がった俺の股間あたりでモゾモゾと何かが動く。

「わ。わ。真っ暗！ 怖いよお！」

「ゴラ。人のスカートの中で勝手にお化け屋敷ごっこすんな。遊びたけりゃあ、ちゃんと入場料払いなア」

スカートをめくると、雪からポコッと頭を出したゆりなが不思議そうに俺を見上げていた。

「あ、あれ？ もしかして、しゃっちゃん？」

「もしかしなくても俺だってーの。見りゃあ、分かるだろオ」

「だってだって、その格好……」

口をあんぐり開けながら、体の隅々まで視線を巡らすゆりな。

ああ、そうか。

そういえば、今の俺って魔法使いモードになってたんだよな。

ちよいと自分の姿に照れくさくなつた俺は頭をポリポリかきつつ、「いやあ、チビ助のより露出激しいけれども、これでも結構暖かいんだぜ。この周りのうにようによしたオーラがさ。まるで温泉に浸かっているみたいで、」

と。

快活に舌が回り出したところで、

「どうして——？」

ゆりなが唇を震わせる。

「あのまま、おうちに帰っちゃうのかと思ってたのに。もう、二度と会えないんだって思ってたのに……どうして？」

「んー。どうして、って」

目を潤ませたチビ助の腕をグイツと引っ張って立ち上がらせる。

そいつの鼻頭に乗った雪を一つ払いながら、

「だつてさー。昨日、寝る前に約束したじゃんか」

「……約束？」

「また明日いっぱい遊ぼうねって。だから遊びに来たってワケ。

ちいつとばつかし朝早すぎるかもしれないけれども——」

ニイツと笑って子どものように続ける。

「ゆくりなちゃん、あつそびましょ」

それを聞いた途端、不安そうな表情をたちまち笑顔に塗りつぶすチビ助。

「はーいっ！ 遊ぶっ、しゃっちゃんと一緒に遊ぶーっ！」

当選が確定した政治家のようにバンザイ三唱しているそいつに、
「いっひっひ。ちょうど面白そうな遊びをしているようだねエ。それじゃあ、今日の遊びはアレにしようぜ——」

言いながら、右肩を杖でトントン叩いてニヤリと目配せする俺。

「にっしっし。しゃっちゃんてば、ナイスタイミング。それじゃあ、今日の遊びはアレにしようか——」

言いながら、左手で杖をクルクル回してニヤリと目配せするゆりな。

そして俺らは杖を同時に止めると、

「鬼退治ごっこ!!」

叫んで跳躍。

つまるところのバトル開始というこつて。

第二十石：飲み込んだ世界を、もう一度

あの馬鹿でかい仮面鳥相手にどこまでやれるか分からねエが——
だが、今の俺は魔法使いだ。

テメエがファンタジーなら、こつちだってファンタジー。
演じてみせるさ、ガキどもの幻想を！

「ぷくゆゆん、ぷゆん。ぷいぷいーぷうっ！ 行くぜエ、杖からマシンガン！ すいすい、『スノードロップ』！」

ホバーの周りを飛び回りながら飴ちゃんを放つ俺。

それと同じタイミングで杖にまたがり、飛翔したゆりなが左手をあ
げて、

「ぽくよよん、ぽいぽいーぽんっ！ 行くもん、指からバチバチッ！
らいらい、『ライトニング』！」

人差し指の先から黒い電撃を放つが、素人目でも分かるくらいに
弱々しかった。

以前にコロナに放ったときのような気の抜けた電撃。

直撃を食らったはずなのにまったく気付いてない様子のホバー。

俺の飴ところも大したダメージは与えられなかったようだが——

いくらなんでも、と思った俺は、頭上に浮かぶゆりなに訊ねた。

「どしたんだ？ まさか、相手がハチドリさんだからって手加減して
るんじゃないよな」

「う、ううん。実は、さつき戦ってるうちに霊薬が無くなりかけちゃっ
てて……」

チビ助が言うには、杖の中には魔法の源となる霊薬という液体が注
がれていて、（確か説明書の其の参あたりに書いてあったな）

それが尽きると魔法を出せなくなってしまうらしい。

そしてゆりなは俺と違い、空を翔る羽を持っていない為、杖に乗ら
ないと空を飛べないときたもんだ。

杖を使わずに手から魔法を放つことは一応可能だが、霊薬の消費が
激しいし、それに威力もかなり弱まる。

だけど、模魔を捕獲するには、捕獲呪文の為にある一定以上の霊薬

を確保しておかなければならない。

だから霊薬を節約しようと、さらに威力のない電撃になってしまったというワケだ。

それを聞いた俺は、少し腕組みをした後、ゆりなにこう言った。

「それなら、ゆり人にはチマチマ電撃を与えるよりも捕獲準備してもらったほうが良さそうだな」

「えっ、でも……。弱らせないと捕まえられないし。少しでも魔法撃たなきや」

「いや。それで霊薬切れて肝心の捕獲が出来ませんでしたってオチは勘弁願いたい。

あいつを引き付けて弱らせる役は俺がやる。まだまだたくさん霊薬あるしな」

言つて、手中の霊鳴へと視線をスライドさせる。

それを振ると、柄先の蒼い宝石の中に霊薬がたっぷり入ってるのが分かる。

「う、うん……。しやつちゃん、無理しないでね?」

すいーつと飛んできたゆりなが心配げに俺の顔を覗く。

やれやれとばかりに、そいつにチョップをかましつっ、

「任せなつて。俺だつて、選ばれてここに居るんだ。やってみるさ、程ほどに」

「わかつた。ボク、しやつちゃんを信じるよ」

そう頷くと、ホバー側面のビルへ降り立つゆりな。

目をつぶり、杖を掲げると捕獲呪文の詠唱をはじめめる。

よし——次は俺がホバーを引き付けて弱らせる番だ。

俺は、好き勝手に突風を飛ばしまくっているホバーの後ろへ回り込み、

「おーい、鬼さんこちら! 霊の鳴る方へ!」

ゆっくり深呼吸して、霊鳴に魔力を込める。

とりあえずは、あの鬱陶しい羽を止めるのがベターだな。

とくりやあ、アレをぶちかますしかあるめエ。

「ふうゆゆん、ぷゆん。ぷいぷいー……。ふう! すいすい、『エメラル

ドダスト』！」

振り下ろすと、杖先からモクモクと水蒸気が噴出していく。

そのままの状態を持ち上げると、それはあつという間に空へ昇り、細氷となってホバーを襲う。

俺にやつと気付いたのか、轟音を響かせながら旋回するハチドリ。

しかーしながら、少し気付くのが遅かったようで、見る見るうちに羽が凍っていくじゃねーか。

なんだ？ こいつ、実はただの見掛け倒しだったりして。

これなら、余裕だな——余裕シヤクヤクつてなもんでっ！

自分の魔力の凄まじさにイケると踏んだ俺は、杖にどどん魔力を注ぐ。

それに比例して激しさを増す翠玉の細氷。

「落ちろよ、こんちくしよおおお!!」

俺がもつと魔力を注ごうとしたその時だ、

ホバーの金色の目が一瞬にして真紅に染まり、とてつもない鳴き声を発した。

「な、泣いたって許してやんねー……」

ぞつと、言いかけて俺は驚きおののいた。

魔法をストップし、小さく後退する。

なぜなら鉄仮面の下部分——鳥であればクチバシ辺りが割れたからだ。

いや、割れただけならばそれほど大したことじゃない。

先の鳴き声である振動で割れたという、ただそれだけのことだから。

だが——その仮面の下にあったものが『鳥のクチバシ』ではなく、『人間の口』だったとしたら？

それが、歯列矯正をしているかのような鉄の奇妙な器具をつけていたら？

普通、誰だつて驚愕するつつうの。

俺が呆然と目を丸くしていると、キュイイインという何かが擦れるような音が聞こえてきた。

「なんだよ、なんの音だよ!?!」

ホバーの出している音かと、俺はそいつのあらゆる部分へ視線を飛ばす。

その俺の慌てようを楽しんでいるのか、ニンマリと『笑う』ホバー。冷や汗が流れ落ちる間際、俺はその音が発生している箇所をつきとめた。

頭上の赤黒い光輪。それが高速で回転している音だったのだ。

それで、なにを始めようってんだよ——

ビビるかよ、そんなコケおどし。

なにかをしようたって、そんなの!

俺は再び杖を握り締めると、魔力を込める。

もう一度だ。

あいつの動きは確実に鈍っている。

もう一度、エメラルドダストをぶっ放す!

「ぷーゆゆん、ぶゆん……」

しかし、俺はすぐさま詠唱を中断した。

光輪が、ストロボのような強力な赤い光を発した為だ。

「!?!」

緩慢な動きでハチドリのような口が開かれていく。

その喉奥がチラツと見えた瞬間、俺は自分の『最期』を垣間視た。

脳裏に次々と映し出される俺の死体。

色々な角度から、ありとあらゆる死に様を。

だが、死に様は違えど、状況は皆同じように思えた。

暗い空。佇む仮面のハチドリ。コスチューム姿のまま死んでいる俺。

なんだこりや。意味がわかんねエ。

まさか、そんな。こんなあつけない死なんざ——冗談だろ?

いやいや、よく考えろシヤクヤク。そうだ、これもあいつの攻撃だろう。

つたくよオ。なんて悪趣味で胸糞の悪い攻撃だ。

しかし、恐縮だけでもそんなモノを見せられたところで別に痛く

も痒くもないワケで。
と。

苦笑しつつ顔を上げた時、俺は目が合った。
ホバーと。

いや、正確にはホバーの口の中に存在していた巨大な目玉と――

第二十一石：明滅する瞳

「——っ!？」

あまりの不気味さから悲鳴にならない声をあげる俺。

アイツの『目玉』から視線を逸らそうと何回も試みるが、なぜか逸らすことが出来ねエ。

半ば金縛り状態の俺にホバーが光輪を再びフラッシュユキさせる。

「ひっ—」

まただ、また『最期』の映像が否応なしに頭の中へと流れ込んでくる。

見下ろすホバー。斃れた俺。泣きじやくるコロナ。呆然とするゆりな。唇をかみしめるクロエ。

それらの映像が、なんどもグルグルと俺を嘲笑うかのようにかけ巡る。

さすがに、こうも連続で自分の死体を見せられると気分が滅入ってくるな——

クソつたれ……!!

俺は震える手に鞭打って杖を持ち直した。

「人の中に土足で！　ちくしょうが、正々堂々と戦いやがれ！」

しかしながら、いくらそう叫んだところで聞き入れるハズもなく。

それは壊れたテープのように何回も何回も繰り返し返された。

だんだんと全身が虚脱感に包まれていくのがわかる。

……………。

もしかして、これは本当の未来なのか？

どうあがいたところで俺はホバーに勝てない、結末はすでに決まっているという。

……考えてみりやあ、そりやそうかもな。

何も出来ず、こんな棒立ちでなすがままに攻撃を食らっているんだ。

これが精神攻撃ではなく、普通のカマイタチ攻撃だったら金縛りくらった時点でアウトだしな。

きつと弄ばれているんだろう。まったく、一瞬でも余裕だと笑った俺がバカだったぜ。

大体、こんな巨大なポケモンに最初から勝てるハズ無かったんだってエの。

——ああ。わかった、もうわかったって。白旗あげるから映像止めてくれ。

俺がゆらりと杖を下げた様子に、戦意喪失を見て取ったのかホバーが甲高く鳴いた。

勝利の雄たけびとやらか。ま。もう、どうでもいいことだけれども。

まどろっこしいことは抜きにして、とっとと楽にしてくれや。

そんな俺の願いを叶えるべく、とどめを刺そうとそいつが両羽を持ち上げた、

その瞬間のことだった。

「しゃっちゃんを、いじめちゃダメええええ！」

振り向いた先に居たのは、捕獲準備をしているハズのゆりなだった。

いや、これはゆりな、だよな？

黒檀のような瞳が真っ赤に光り輝いているんだが……。

まるでいつぞやのコロナのような、あの不気味な光り方。

どうしてチビ助が？ 一体なんなんだよ、あの変なライトモードは。

加えて体を纏っていた藍色のオーラや黒い稲光まで赤く変色しているぞ。

——どういうこっちゃ。今、ゆりなに何が起こっているのかまったくワケがわからん。

俺がそう呆けていると、ホバーが蜂のように羽音を立てて旋回をはじめた。マズイ、まさかゆりなを狙おうってのか。

「ダメだ、チビ助！ 捕獲は一旦中止にして逃げろ！」

「……はあ、はあ、はあ」

前傾姿勢になり、肩で息をしているチビ助。俺の声が聞こえていな

いのか？

もう一度逃げるよう叫ぼうとしたその時、ゆりながゆつくりと顔を上げた。

「!?」

……やはりそうだ。

あのどこか遠くを見ているような瞳に、真一文字に結ばれた口。光の色の違いはあれども、コロナのときとまったく一緒だった。

「——あーあ。おいたが過ぎちやっみたいだね、ホバーちゃん」
いつもの口調とは裏腹に冷然とした声。

性格が悪くなった（ように感じた）コロナとは違い、ただひたすらに冷えていた。

危険を察知したのか、ホバーが焦った様子で光輪を回し始める。

あの『最期』を視せる攻撃の予兆……か。

あんなモノ、チビ助に見させるワケにはいかねえと、杖を構えて飛び出そうとした俺に、

「……キミはこつちに来ちゃ、メツだよ」

一瞥もせずにやんわりと拒絶される。

「え？ あ、はい」

『しゃっちゃん』ではなく、『キミ』と呼ばれたことにいささかショックを受けた俺は、言われるがままパタパタと退いた。

なんつーか、ホントに別人のようだな……。

しかしながらと、俺はゆりなとホバーを見比べる。

いやはや。どちらもチカチカとまあ、なんて目に優しくないお二方なんですよ。

罅迫り合いが聞こえてきそうな睨み合いのなか悪いんだが、目がしばしばしてかなわねえ。

目頭を押さえながらそんな緊張感に欠ける愚痴を心の中で展開している。

『パパさん、そんなときは霊鳴から出ている水をすくって目にさせばいいんです。目薬の代わりにもなる優れものなのです』

「おっ、そうなのか。そりやまた便利なこと……ん？」

『ん?』

「つて、コロ美! 今までどこに行つてやがったんでえい。こちらら大ピンチだったつてーのによオ」

薄情な奴だぜと続けようとした俺に、

『ひ、否定。コロナはずーつとパパさんのことを呼んでたんです。あの目から出る精神干渉波は相手の魔力を吸い取るから、

目を見ないように後ろに回りこんでくださいって、何度も呼びかけたのです』

げっ、マジだ。

杖を見ると、さっきは満タン近くまであつた霊薬が半分以下へと減っている。

なるほどな、あの虚脱感はそういうオチだったのか。

『肯定。でも、いくら呼んでもホバーの出す魔力波に邪魔されちゃつてて……今やつと声が届いたんです』

「ホントかあ〜?」

腕を組み、意地悪く言う俺に、

『疑うなんてヒドいんです。ただ——もうちよつと早い段階で声をかけられたんですケド、

今度は旧魔法少女さんが出すめちやくちやな魔力波にびつくりしちゃつて……』

「そうだ! ゆりなのヤツ、一体どうしちまったんだよ。お前さんみたいに目がピカつてやがるし、まるで別人みたいに変わっちゃったんだが」

『ア、アレはですね。えーと、なんて言うですか。うう、お姉ちやまあ……コロナはどしたらいいのかわからないのです』

なんだ? 知つていそうだが、何か言えない事情でもあんのか。

コロナの煮え切らない様子に不思議がつっていると、いきなりホバーの光輪がフラッシュした。

もしかなくとも、これは攻撃の合図だ。対するゆりなは目の明滅速度が急激に上がっている。

ホバーが口を開けたと同時に、ゆりなが気だるそうに片手で杖を掲

げた。

『ウソっ、まさか!? パ、パパさん、すぐに旧魔法少女さんの後ろへ飛ぶんです!』

「どうしたんだよ、んな慌てて……」

『いいから、はりあつぷ! そこに浮かんでると巻き添えくらつちやうんです』

「わ、わかりましたんで」

本当はよく分かっていないが、とりあえず言われたとおりにゆりなの背後へと羽ばたく。

チビ助の背中——前傾姿勢のままだからか、かなり小さく見えるな。

あ、髪に綿ボコリ付いてやんの。取っておかなきゃなと手を伸ばした瞬間、

「あっちつちー!」

凄まじい熱にすぐさま手を引つ込めた。

なんだあ? と目を丸くしていると、そいつの長い髪の毛がふわりと浮き、所々が燃えるように赤く発光していくではないか。

まさか、この現象つて——こちらも攻撃をするぞという合図なのか?

そして、耳を疑うような詠唱が始まった。

「天翔るは閃光の雷。地這うは残酷なる獣——踊れよ、踊れ。夜空の悲鳴に踊り狂え」

な、なんだその怖い文字の羅列は!?

んなヤバそうな詠唱、説明書のどこにも書いてなかったぜ。

ぷゆゆん……じゃなかった、ぽよよんで始まる詠唱とはまったくかけ離れていることに驚いていると、急に空がパツと真つ赤に染まった。

第二十二石：落ちたケモノは赤を見上げる

「おいおい、どんだけだよ」

俺はゆりなの掲げた黒杖の先を見て啞然としていた。

いや、正確には啞然を通り越してもはや笑いまでこみ上げてきている。

ホバーの体躯と同等、いやそれ以上の巨大な紅い雷球。

逆方向に浮かんでいる赤い満月も自分と似た姿にさぞかし驚いているだろう、それほどまでに圧倒的迫力。

だしぬけに凄まじい雷鳴が轟く。

「さあ、汝よ——我が贄となるがいい」

杖を振り下ろした直後、雷球が地響きを立てながらホバーへと向かっていく。

当然気づいているホバーはその雷球に向かって何度もカマイタチを飛ばす——が、すべて届くよりも前に打ち消されてしまう。

いや、これは吸収しているのか？ 風をたらふく食い、さらに大きさを増した雷球が容赦なくホバーを包み込む。

電撃の爆ぜる音とともに断末魔の叫びをあげるホバー。

「あのホバーを一発で仕留めやがった……」

なんて、ムチャクチャな爆発力だ。

コロ美やクロエが何度もゆりなについて『素質』があると言っていたが。

それにしたって、これはいささかに行き過ぎじゃないのか？

……まあ、なんにせよ、だ。

とりあえずホバーが斃れたことに安堵しておこうじゃねえか。

そう俺がホツと胸を撫で下ろしていると、

『——まだ、なんです』

まだ？ もしかして、まだ生きてやがんのかあのハチドリは。

すさまじい生命力だなと俺が感心していると、コロナが言いにくそうに、

『否定。ホバーはとっくに死んでいるのです。あの呪文は、これから

が本番なんです……」

死んでいるのに、本番も何もないだろ？

と思っただが、すぐさま俺は『本番』の意味を知ることになった。

「はあ、はあ、はあああ……ッ！ ヴォルティック、エンドオオオッ！
うううわああああッ!!」

髪全体を真っ赤に燃え上がらせながら目をつぶって絶叫するゆり
な。

その様にビビっていると、だんだんとホバーが浮かびあつていく
じゃねーか。

ぐにやりと首のまがったハチドリを持ち上げるのは、あの直撃した
雷球だった。

「チ、チビ助……なにを、するつもりなんだよ？」

しかし、声をかけても梨のつぶて。

不安げにゆりなの背中を見ていたが、空高く持ち上げられたホバー
が動いたように見えたので、そちらへと視線を向ける。

生き返ったのか——いや。

動いたように見えたのは、雷球が弾けた為にホバーがガクンと落下
したからだった。

そのまま行けば地面へと叩きつけられるハズだ。

……そう、そのまま行けば。

弾けた数多の雷球が落ちていくホバーに何度もぶつかっていく—
—というより、喰らっているようにさえ見える。

落下するよりも前に雷球がぶつかり、そのつどホバーを持ち上げる
もんだから落ちるに落ちられない。

やっとその猛攻が終わったかと思ったら、今度はその雷球が地面へ
と集まっていく。

「あれは、虎なのか？」

合体して出来上がったのは紅い雷獣だった。

それは黒虎モードのクロエに限りなく似ているように見えるが
……。

『肯定。アレは呪文によって召喚されたお姉ちゃまなんです』

「召喚で。そんなもんまであんのか、っていうかオーバーキルもいいところだぞ。」

あの巨大カミナリお化けがクロエってんなら、言って止めさせようぜ。もう終わったから帰って来いってさ」

『……無理、なんです。あの状態のお姉ちゃまは自我を失っちゃってるんです』

おいおい、待て待て。

するつてえと、まさか俺がああクロエを力づくで止めなきやつて流れなのか？

『否定。お話しが出来ないだけで、こちらには危害を加えないんです。ホバーを封印したらそのまま旧魔法少女さんの中へと戻るんです』

「封印？ ああ、そっか。なるほどねえ、これが捕獲呪文つてワケなのか」

『——こんなの、こんなの捕獲呪文なんて言えないのです』

辛そうに言うコロナ。

一応、これでも捕獲は出来るが、このやり方はあまりよろしくなかって事か。

捕獲に良いも悪いもなさそうなものだけでも。

『今からお姉ちゃまがすることを見れば、言ってる意味が解ると思うのです……』

言つて直後、バチバチと尻尾を揺らしていた紅い雷獣——クロエがホバーの喉元に喰らいつく。

そして今度は……うっげ、もうダメだ見てられん。

あまりの惨さに一歩後退して目を背ける俺。

なんと言つたらいいのか。これでは、封印というよりも捕食だ。

俺がげんなりしていると、食事を済ませたクロエがこちらに近づいてきた。

危害加えないって言われても、すげえ恐いんですケド。

強面で威嚇するそいつに、俺は万が一に備えて杖を構える。

「ク、クロエさんっスよね？ 恐縮だけれども、もうちつとばつかしお食事は慎ましくやつてもらえると嬉しいかなー、なんちて」

そう引きつった笑顔で話しかけたんだが、これまた梨のつぶて。俺をサクつと無視したクロ工は、前傾姿勢のままピクリとも動かないゆりなのもとまで歩み寄ると、頬をペロつと舐めた。

そして少し悲しそうに喉を鳴らした後、チビ助の中へと吸い込まれていく。

「……………」

小さくしゃっちゃん、と呟いたゆりなの声を俺は聞き逃さなかった。

「ゆりなー！」

すぐさま駆け寄って、倒れそうになったそいつを支える。

ちよいちよいと指で髪を触ってみるが、もう普段の黒髪に戻っていて熱くない。

「にゃ、にゃはは。くすぐったいよお」

腕の中でトロンと眠そうに俺を見上げるゆりな。どうやら目も戻っているようだな。

髪色も目の色も戻った——あとは。

「わりい、わりい。……えっと。あのさ、俺のこと分かる？」

訊いた俺に満面の笑顔で、

「しゃっちゃんー！」

おお、すつかり元通りだ。

一時はどうなることかと思ってたぜ、とようやく安心した俺に、

「——ねえ、それじゃあさ。しゃっちゃんは、ボクのこと分かる？」

俯きながら言うチビ助。

「え？ 分かるも何も、ゆりなはゆりなだろ？」

「……………うん。そう、だったね」

頷いて、だらんと腕を垂らすゆりな。

「!？」

ギョツとした俺は、即座にチビ助の肩をガツシガツシと揺らした。

「お、お、お、おいしい！ 目を覚ませ、死んじゃダメだつ！」

ええい、こうなったら荒療治だ。ペッシペッシとゆりなの頬を往復ビンタしてやる。

「人生の、楽しいイベントはこれからなんだぞ！　おい、ゆりなああああつ!!」

ガツシガツシ。
ペツシペツシ。

必死に蘇生術を試みている俺の頭の中にコロナの呆れ声が響く。

『……パパさん。旧魔法少女さんはあの力を使ったから、今とても疲れてるんです。』

だから死んだんじゃないかと、ただ眠いだけだと思おうのです』

「え、マジで？」

手を止めて見やると、「ふええええ……」と目をグルグル回していた。

「げ、元気そうで何より」

ともあれ、ホバーは封印された（というか喰われた）ワケだし、

俺もゆりなも何とかケガもなく無事に乗り越えたワケだし、これにて一件落着！

……とはいかないよな、いくらなんでも。

この『魔法少女』、まったくもって疑問が山積みだ。

まあ。これにてを、ひとまずに置き変えて、とりあえずは良しとしておこう。

今はただ——何も考えず、ゆっくりと休みたい。

第二十三石：V S 第八番模造魔宝石ダツシユ・ザ・ア ナナエル編

「早すぎる……。初っ端のホバーといい、気に入らねえな」

黒猫クロエが突然と眩く。

ゆりなの眠っているベッドに背中を預けてうつらうつらしていた俺は、

その言葉にゆるりと顔を上げた。

「……なんでエい、何が早すぎるんだよ?」

しかし、返答は無い。

腕を組みながら再び沈黙を決め込む黒猫に小さく舌を打つ。

またか。さつきからずつとこの調子だ。俺がいくら黒猫に疑問を投げかけようともスルー。

コロナに訊いても、クロエの顔色を伺ってか、困った表情でぬいぐるみを抱きしめるだけだ。

まあ、言いたくないんだつたら別にいいけれどもよ。

他人を勝手に巻き込んでおきながら、説明拒否たあゾツとしねいな。

あれから。

主が眠ってしまった為か強制的に変身が解除されたチビ助を、

ビルの屋上から俺が担いで下ろし(コスチュームパワーのおかげか知らんが重く感じなかった)、

クロエの背中に乗せて爆走帰宅をかました……。といった流れだったのだが。

まず、ここで一つの疑問が生じる。

夜中とはいえ、ちらほら人影が見えていたのにも関わらず、バカに眩しく発光しながら飛んでいる俺や、巨大な黒虎をそいつらが見向きもしねエってのはどういうこった。

新聞配達のおんちゃんとか、ジヨギングしているおっさんとか押し並べて俺たちを無視していたぞ。

そもそもとして、だ。

あの巨大な『ホバー』が現れたというのに、どうしてこの町はこんなにもノンキな朝を迎えてやがるんだ。

フツーだったらば、大騒ぎになってもおかしくないと思うのだけれども。

それと、二つ目の疑問だ。

モチロンゆりなのことである。

コロナにも言えることだが、あの目が光り輝く現象は一体何なんだ？

加えて、まるで別人かのような口ぶりに、凄まじく物騒な呪文。

成りたてだって言ったワりに、あんな呪文を知り、そして扱えるのはどう考えてもありえん。

その時もあったが、アレは『素質』うんぬんの範疇を超えている。ううくむ……。

と、霊鳴石でお手玉をしながら眉間にシワを寄せている俺の目の前に、黒猫がひよいっと現れた。

「いささかに解せないとでも言いたそうな顔だな」

ニヤリと悪そうな笑みを浮かべて言うクロエをガシツと掴んで、

「さつきから何度もそう言っているのだけれども」

いささかにどころの話ではない。にらみ合うこと約三十秒。

黒猫は薄く笑った。それは先ほどの笑みとは違い、どこか諦めた様子にも見える。

「につしっし。か弱い子猫ちゃんに向かって、そんな怖い顔してくれんなよ。」

——わあーてるって。訊きたいことがあんなら、なんでも言ってみそ

やれやれ、やっとその気になったか。

つーか、普通は答えてくれるのが当然なんだけだな。

俺はクロエをポイツと開放すると、ベッドに腰掛けて足を組んだ。

さてはて。まずは何から訊いてやろうか。

「お姉ちやま……」

部屋の片隅で一人遊び（厳密には第二回ぬいぐるみプロレスごっこ勝ち抜き戦）を開催していたコロナが、

ふよふよと飛んできて不安げに黒猫を見つめる。

「心配すんな、コロ助。別に隠すことでもねえし」

「否定。時期尚早だと思っんです。パパさんは咲いたばかり——まだ初心者さんなのです」

「あれだけの魔法を初陣で閃いておきながら初心者、か。まっ、どうせアレについては遅かれ早かれ説明しなきゃならねえんだ。

まとめて言っちゃまったほうが手間が省けていいだろ」

「極否定。と、とにかくダメなんです」

どうしたもんだか、なおも食い下がってくるチビチビに、黒猫がイラッとした感じでヒゲを動かす。

「だあああ。うっせーなあ。オレが良いつつつたら良いんだよ。ほれ、おめえはコイツでゆっくり遊んでな」

と、ゆりなが抱き枕にしていたヘビのぬいぐるみを乱暴にひったくって投げた。

「むむっ」

キラんと目を輝かせ、それをfrisビードッグよろしく華麗に空中キヤツチするコロナ。

さつきまでの抗議はどこへやら、そそくさと部屋の片隅に舞い戻るチビチビを見て俺は大げさに嘆息してみせる。

「いやはや。所詮、子どもだねエ」

そう肩をすくめていると、

「……ふ、ふええっ」

小さな泣き声。

今度はなんだよ、とベッドに視線を向けると、ゆりなが何かを探すように手をさ迷わせていた。

起きたのか？ 顔をのぞいてみるが、どうやら眠っているようだ。悪夢でも見ているのかね。

その様子に黒猫は「あっちゃー」と呟き、チビ助の額にポンツと肉球をあてがう。

「そーいや、ポニ子ってば、何かしら抱いてないと眠れないんだった」
ああ、抱いていたヘビのぬいぐるみが消えたからぐずってたのか。
「これはこれは。こちらも、所詮子どもってワケね」

要は、ヘビのぬいぐるみに代わるような何かしらを抱かせれば泣き止むんだろ。

ふむ、それならば。

ピーンときた俺は、身に着けていた白緑縞のオーバーニーソックスの片方を脱いで、

「よつと。ちイつとばつかし臭いかもしれねエけれども、ここは一つ我慢しておくんなま」

にぎにぎとグーパーを繰り返す手の中へスッポリおさめる。

「……えへへっ」

今泣いたカラスがもう笑うたア、このコトを言うのかね。

そいつのマヌケ面に、ついついつられて笑ってしまう。

「バツカでえ、俺様の靴下とも知らずに安心してやんの」

しっかし、他人の靴下を抱きしめながらニンマリ顔で眠る姿って、
どうなんだろうか。

これがおっさんだったらただの変態だな。

第二十四石：魔宝石の能力

やっと落ち着きを取り戻したゆりなが、再びスヤスヤと寝息を立て始めたところで、

「ありや？ シラガ娘って、そんなモン履いてたっけ」

黒猫が不思議そうに首を傾げた。

「いや。こいつア変身した時にコスチュームと一緒に出てきたヤツなんだけれども。」

これがまた履き心地が良いつつうか、なんとも暖かくてな。変身解いた後、コロ美に言っただけで特別に出してもらったんだ」

「へえ。何だかんだ言っただけで、女の姿もまんざらじゃなさそうだな。にっしっし」

「ばつきやろおい。んなわきやねえだろ。戻れるモンなら今すぐにも戻りたいぜ。」

それはともかく、だ。恐縮だけれども、いい加減に本題へ入らせてもらおうぞ」

とりあえずは最初の疑問をぶつけることにする。

なぜ、あんなに目立つ俺たちやホバーの姿が誰にも見えないのか。

俺の問いに黒猫が尻尾をくねりと動かす。

「ああ、それなら答えは簡単だ。」

シラガ娘は石を割って変身——すなわち魔法使いの衣装に着替えた時点で、魔力を持たねーヤツの視界から消えちまうんだ。

オレやコロ助みたいな七大魔宝石や、ホバーのような模造魔宝石に至っては、そもそも最初から誰の視界にも映らない。これは魔法使い関係者を除いての話だがな」

「待て待て。するってえと、ゆりなのお姉さんはどうなんだよ。」

おめえさん方の姿がバリバリ見えていたじゃねえか。もしかして、あの人は魔法使い関係者なのか？

それと、昨日コロ美を捕まえるってときに『誰かに見つかって大騒ぎになるかも』とかなんとか言っていたじゃねえか。そこんところ、どうなってやがるでエイ」

腕まくりのポーズで矢継ぎ早に質問する俺に、クロエが感心した様子でもう一度尻尾をくねらす。

「ほう。中々、良いところをついてくるじゃねーか。順を追って説明してやるよ。」

とりあえずポヨ子が何故オレたちを認識出来るかについてだが、簡単に言えば仮の姿だからだ」

「仮の姿——ということとは、あの巨大な黒い虎が本当の姿ってことか？」

「ああ。動きやすい人型や小型に化けている時は誰にでも見えるってワケ。」

コロ助が見つかるかもって言った理由も、アレがコロ助の仮の姿——つまり、小型状態だから。

オレみたいな普通の猫っぽい姿ならバレねえが、あいつの場合キラキラ光ってるじゃん。昨日も言ったが、羽が発光してるテフテフなんて、この世界じゃありえねーの」

「あー、そういうこと」

ホバーとの戦いを思い出してみる。

えっと確か……。

俺らはコスチューム姿。召喚されたクロエは色違いだけでも、巨大な虎つつう本当の姿。

コロナは俺と合体中だし、模魔はクロエと同じでバリバリ本当の姿。

なるほど。

だから誰にも見つからなかったのかと領きそうになるが、ここでもまた一つの疑問が浮かんできた。

「そーいや、模魔が暴れた形跡が全然なかったような。あんなに派手に戦闘したつつうのに、町はキレイなまんまだったぞ」

「いや、被害はちゃんんと与えてたぜ。窓の外よく見てみそ」
促されるまま、窓を開けて見てみる。

いや、別段変わったところがあるようには思えないが。

「桜の花びら、昨日より散ってるだろ」

まあ、言われてみれば……。

「だけれどもよオ、アレでこれっぽちの被害っておかしくねえか？
体感風速で言えば、優に十メートルは超えていたぜ」

「オレたちだからそう感じるのさ。魔法使いや魔宝石は魔法の力をダイレクトに受けるからな。」

だが、魔法使いでない人間やこの世界は魔法の力をダイレクトには受けない。ホバーの風の力が百だとすると、オレたちに百、町には十の影響って感じだな」

魔法魔法って、頭がこんがらがってきたぜ。

「ちよい待ち。ええとだな……。じゃあ、たったの十分の一の影響ってんなら、町が壊される心配は無さそうってコトでいいのか？」

「残念だが、心配大ありだぜ。ホバーはランクこそまあまあ模魔だが、能力が能力だからこの程度で済んでるんだ」

ランク？

「そう。オレたち七大を含め、全ての魔宝石には力の目安としてランクがあつて、

ホバーはランクCの中ぐらいな強さの模魔なんだ。だが、能力が『停空飛翔』という、補助的な能力だから影響力がそうでもないってワケ。

これが攻撃的な能力だったら、もっと町への被害がデカくなるし、とーぜん、ランクが高い模魔ほど比例してもっとデカくなる」

はあ。

解つたような、解んねーような。

とりあえず、理解したのは『あのホバー』でたったのランクCだつてことだ。

アレで中ぐらいの強さって——マジだとしたら、かなり気が滅入る話なんだが。

「まあまあ。そう悲観しなさんなって。最初からランクC相手にあそこまでやれたのは凄えことなんだぜ！

場数を踏んで経験値をさらに積みあげ、ランクBもAもきつとラクシヨールラクシヨール」

「つたく。軽く言ってくれちゃってさア」
トホホ……。

と、がつくり肩を落としながら魔法使いになったことを後悔し始めた俺に、

「——言いそびれちゃったが、ありがとうな。オレが思った以上にシラガ娘は良くやってくれたぜ。」

もし、お前が魔法使いになることを決心していなかったら、ポニ子は確実にやられていただろう」

クロエが真面目なトーンで言う。

「……ふんっ」

まっすぐな視線に気恥ずかしくなって、俺は目を逸らした。

こいつが『ありがとう』なんて言葉を口にするとはね、なんだかムズ痒いぜ。

だが——

しかしながらと、俺は思う。

俺が助けに向かわなかつたら、ゆりなは死んでいたと黒猫は言うけれども。

本当に……そうなのだろうか。

思い出される、チビ助のあの気だるそうな前傾姿勢。

深紅の瞳。

燃える髪。

冷たい声。

ホバーをたやすく一撃で葬った『赤いゆりな』

対する俺はといえば、何も出来ずにただやられる一方だった……。

そう——俺は助けてなんかいない。むしろ、助けられたのは俺のほうだ。

意気揚々と飛び出したクセに。

なんて無様で。

なんて無力な。

だからこそ、あの眼の光が気になる——

ゆりなが赤く染まった現象について詳しく知りたい。

いよいよ、それを訊ねようとした、その時だった。
タタタタツ。

なにやら軽快なリズムが耳に入ってくる。

「あんだア、この音？」

と、俺がクロエに顔を向けると、そいつは尻尾をビクンとおつたてて、

「げげげっ、あいつだ！ シラガ娘、今からオレは喋れないただのキュートな猫！ 絶対に話しかけんなよっ。あと、霊鳴は仕舞っつけ。いいな？」

「え？ あ、ああ……」

何が何だか分からないが、とりあえず頷いて霊鳴をスカートポケットへ押し込む。

あいつって誰のことなんだ？

クロエの慌てっぷりにいささか緊張していると、窓がガラガラッと開いて、何者かが部屋へ飛び込んできた。

「にんっ！」

まるで忍者のような——音もないキレイな着地。

桃の香りをはじめながら、短いツインテールがピョコンと跳ねる。

侵入者は俺たちと同じような小学校低学年くらいの女の子だった。

「きゃはっ、久しぶりに美しく決まったっちゃ！」

感激のあまりか何度もジャンプするそいつの後姿をシゲシゲと眺め、やがて俺はポンツと手を打つ。

ピンク色のさらさらな髪、ピンク色のふりふりなワンピース、ピンク色のぱんぱんなナツプサック。

目が悪くなりそうな桃色一色のこの少女。どう考えても——

未だに背を向けて飛び跳ねてるそいつに向かって、俺はこう言ってみた。

「……もしかして、お前さんがウワサの『ももは』か？」

第二十五石：登場！爆走天使ももはちゃん

俺の声に桃色少女がビクツと振り向く。

……ほほう。

へんてこりんな格好をしているワリには、利発そうな顔立ちをしているな。

そいつは大きなエメラルドグリーンの瞳をまします大きく見開くと、

「き、ききさん、誰っちゃ?!」

両手を大きさにバツと広げて、一步左足を踏み出す。

それと同時に、背負っていたナツプサックに縫い付けられている天使のような羽がパタパタと動いた。

きさんの意味がよくわからないが、これはおそらく自己紹介するべき場面だろうねえ。

ま。考えるのもめんどくせえし、アレでいつか。

コホンと咳払い一つ。

「ちよいと、失礼するよ」

どこぞの昭和ヒーローみたいなポーズで俺を指差しているそいつの脇を通り、

ゆりなの学習机の上に置いてある花図鑑をパラパラめくる。

んでもって、気だるく背中をボリボリとかきながら、

「あー。俺の名前は、シヤクヤク。よく人に珍しいねって言われます。でも覚えやすいようにで近所のおばちゃんには大好評です。

恐縮だけでも、ヨロシクどうぞして頂ければこれ幸いってなもんで」

「……………」

当然の如く、しばし間があく。

もちろん、そいつのポカン顔は想定済みだ。さてはて。どんなツツコミが来るのやら。

中々の変人というウワサだ。ここをどう出るのがお手並み拝見といこうではないか。

そう腕組みをしながらニヤニヤ待っていると、

「ほわわあ！ でたん可愛い名前つちや！」

「ずずい〜つと、なんとも古臭いぶりっ子ポーズで俺の顔をのぞいてくるではないか。」

「……そ、そうかい？」

奇行の持ち主とは思えないまさかの素直な反応に、ギョツとたじろぐ俺。

ちなみにぶりっ子ポーズとは、顔のそばで両手を揃えつつグーしているあの忌々しいポーズのことだ。

普段ならば十六文キックをお見舞いしたくなる衝動に駆られるところだが……いやはや、どうも。

このキラキラとした目に覗き込まれてそれどころではないようだ。

ゆりなど似たようなあの純粋な瞳――

やはり苦手だな、ガキ特有の澄んだ目は……ん？

なんだこいつ、瞳の中に花が咲いてるぞ？

いや、咲いてるっていうよりも花の模様が刻まれていると言ったほうが正しいのか。

へえ、こりやすげえや……。もしかしたら、こいつをネタにひと稼ぎ出来るかもしれねえ。

もう少し近くで見ようとして、俺が腕組みを解いて顔を近づけたそのとき、

「いまっ！ ぼでえーがお留守だつちや！」

「!？」

とんでもなくキレイなコークスクリユーブローが俺の鳩尾を抉った。

「……が、がはっ――！」

膝から崩れ落ち、ハッハッと浅い呼吸を繰り返しながらうずくまる俺。

ま、待て待て。突然のコークスクリユーよりも前に、なんなんだその妙に洗練されたフォームは。

このチビ、見た目どおりだったらば小学生だよな。

まさかガキのくせにボクシングジムにでも通ってんのか。マジでそう思いたくなるほど、痛かったんだが。

「つーか、ホバー戦でもこんなにダメージ食らわなかったのに……。涙目で見上げていると、ももはがムスツとした顔で俺に跨ってきた。」

「そんなおバカっち名前あるわけないっちゃ！ 怪しいヤツ……。きさん、ゆりっち目当てのヘンタイやろ？」

「ち、ちげーってバカ。俺ア昨日からここの居候となった身で、名前だつて今流行りの——」

喋ってる途中なのに、そいつはマウントポジションのまま俺のキヤミをグイグイ締め上げて、

「嘘もたいがいにせーよ。さつきだつて、ウチのクチビル奪おうとしたとっ」

「するわきやねーだろ！ 誰が、テメーみたいな可愛くもねえクソガキに——」

「なんちかく！? ウチのどこが可愛くないっちゃ！」

「あいてて！ そ、そういうところがだつ！」

「じゃあしい！ 悪を成敗するのがヒーローの務め——！ ゆりっちはウチを守るっちゃ！」

「うおっち!?!」

振り下ろされるエルボーをすんでのところで避け、俺は眉をピクピク動かした。

「身動き取れない相手にエルボーぶちかますなんて、たいしたヒーローだな。おい」

「フツ。この際、手段は問わないっちゃ……。」「

「どの際だよ!?!」

こんのガキがあ、やらせておけばつけあがりやがって。

親父に女子供には優しくしろと言われてきたが、こいつだけは勘弁ならねエ。

俺はガバツと起き上がると、ももはの両ほっぺをひっ掴んで、

「恐縮だけれども、テメエの体に正しき日本語つうもんを叩き込ん

でやるぜ。ありがたく思いなア」

「き、きさんに、言ひやれたくないっひゃ」

そう反論しながら繰り出されるは、あの鋭いコークスクリュー。だが、一度見ている技だ。この俺に二度目はない。

それをガツと膝小僧でガードし、挨拶がてらのボディブローをその土手っ腹へとぶちかます。

「ふんぎゅっ!？」

どうやら、今だね。

崩壊したマウントポジションから抜け出し、めくれあがったキヤミソールを直しつっ立ち上がる。

「ほれほれ、どうしたあ桃チビヒーローちゃんよお」と。

腰を落としてそいつの反撃を待っていたのだが——待てども一向に起き上がる気配が無い。

心なしか、ナツプサツクの羽が痙攣しているように見える。

もしかして、一発ノックアウトなのか？

なんともはや……期待ハズレも甚だしい。

ふくむ。これでは、いささかも面白くねえな。

まだまだもはで遊び足りない俺は、ピクリとも動かないそいつの耳元でこう囁いてみた。

「……貧乳ここに死す」

どうやら上手くゴングを鳴らしたようで、

「やんのか、こるあああつ!!」

「効果てきめんっ、待ってましたあつてね!」

我ながらすばらしい言葉のチョイスだったなと喜んでる間もなく、猛獣みたいな犬歯をキラリと光らせて飛び掛る桃色少女。

おつとつと。なーんて、素早いんでしょ。

そいつの引っかけ攻撃を避け、ほほうと感心していると、不意に足元をすくわれる。

「す、水面蹴りだど!」

ストーンと尻餅をついた俺に、のしかかるももは。再びのマウントポ

ジションだった。

「きやはっ！ 三下ほど、そうやってすぐに油断するっちゃ」

「……にやろめが」

ムキになった俺は、

「恐縮だけれども、これは余裕というものでな！」

きやつきやと笑うそいつのアゴに渾身の頭突きをかました。

「はううっ！」

たたらを踏んだところで脱出。

アゴをおさえて痛がるももはを見下ろしてニヤリと笑ってやる。

「ククク。油断していたのはどっちかねエ」

「……ううっ。痛いっちゃ、ひどいっちゃああ」

げげっ、泣きそうじゃん——ちとやりすぎたか!?

慌てた俺は、何故かそいつのツインテールを両手でびよこびよこ動かして、

「わ、わりいわりい。痛かったな、ごめんな。……大丈夫か？」

と、顔を覗き込んだ直後だ。

「あぎやっ！」

いきなり目の前に無数の星が現れ、勢い良く散った。

数秒経ってから遅れてアゴに激痛が走る。原因は……ももはの膝蹴りだった。

こ、こいつ、まさか演技をしてやがったのか？

俺の驚き顔に、

「てへっ」

ぺろっと舌を出してのウインク。

俺の頭の中でプチッと何かが切れる音がした。

ほほう……良い度胸してるじゃねえーか。

「こんのクソガキが、もう容赦ならねエ！」

「こいや、こるあああっ!!」

スマートとは程遠い、ケモノじみたそのバトルはすぐさま白熱していった。

頬の引っ張り合いからはじまり、服の引っ張り合いやら、髪引っ

張り合いへとエスカレートする。

.....

どれくらいの時間もみ合っていたのだろうか。

やがてポロ雑巾のようになった俺達は、息を荒げながら共に天井を見上げていた。

い、いやはや、これはどうしたものか。こいつとんでもなくつええぞ。

アツチじゃあケンカすりゃあ連戦連勝で、県内敵なしとまで謳われていた俺だというのに。

そりゃガキの体になっちまったから反応は若干鈍っているだろうよ、でもそれにしたってなあ.....。

女の、しかも小学生相手とやりあつて互角たあ——いささかに泣ける話だぜ。

息が整ってきた頃、ふと隣で大の字になっているももはがこちらを向いて、

「.....でたん楽しかったつちゃあ。こんなに思いつきりケンカしたの、初めてかも」

クスクスと笑った。

「俺も」

本当に——俺も楽しかった。素直にそう思ったから、こちらも笑みを返しておく。

まったく。青春ドラマでよくあるような場面だなと揶揄したいところだが、

どうやら、それよりも清々しい気分が勝っていたようだ。

汗でベツタリとはり付いた髪の毛を引っぺがしながら、俺はお姉さんの言葉を思い出していた。

『きつと、しゃっちゃんちゃんと、ころこっちゃんも彼女と会えば自然と仲良くなれるハズです——』

まあ。

たしかに面白いヤツだ。予想以上というか予想の斜め上というか。それに女にしておくのはもったいないほどタフだし。

仲良く出来るかはわからないけれども——
ももは、か。

天井へと舐先を戻したそいつの顔をそっと盗み見る。
端正な白皙に浮かぶほんのりとした朱。汗で濡れた桃色の髪が、な
んともそれに映えていた。

ほわわあと奇妙な鳴き声をあげながら、気持ち良さそうにパサパサ
とワンピースの中へ風を送り続けるその少女に、一つ思う。

こいつ、よくよく見ればかなり可愛いような。

いや……この場合少し違うな。ああ、アレだ。よくよく見なくとも
可愛い——ただし、喋らなければの話だ。

いわゆる黙っていれば可愛いといったジャンルに属しているのだ
ろう。本当に実在するんだねえ、こういうヤツ
と。

俺はそんな不思議な感動を覚えていた。

第二十六石：続！爆走天使ももはちゃん

「そういや苗字は何ていうんだろうか……この際だ、訊いてみよう。」
「『そういえば苗字って、』」

同時に同じセリフをはいて、これまた同時に顔を見合わせる俺達。
二人でプツと吹き出し、いつの間にか腹を抱えて笑っていた。

「あはははははっ。え〜っと、なんだっけ……苗字だっけ？ ウチの苗字は——天使と書いて、あまつかつて読むっちゃ」

天使ももは。

「変な名前」

そう思ったから正直に言ってみる。

「ムッ。そっちは何てゆーと？」

「俺の苗字は、シヤク」

「え。名前がシヤクヤクじゃなかったと？」

「ああ、アレね。名前はヤクっていうんだ。だから合わせてシヤクヤク。どうぞヨロシク」

「……………変な名前」

「……………そっちだっけ苗字がテンシじゃん」

「あまつかつちや！」

「あまつかつちやももはちゃんでしたか。じゃあ、これからは略してテン子って呼びますんで」

「それ、もう原型をとどめて無いっちゃ……」

「だったら、テンちびって呼んでいいか？」

「ダメえ〜」

「じゃあ、ちびテン？」

「やけん、ダメっち言いよろうが」

「もはや、これまでか……。こうなっては仕方がない。ここはちび貧乳ちゃんもとい、ちび貧ちゃんってことで一つ手を打ってもらおうし
か、」

「やんのか、こるああああっ!!」

なぜか第二ラウンドが始まってしまった。

なんだかんだのすったもんだで、またまた俺たちが髪や服の引つ張り合いをしていると、

「へっぶしっ！」

固まる俺達。

二人で顔を見合わせ、そーつとベッドを覗き込むとゆりなが豪快に鼻水を垂らしているではないか。

「ありやりや。こんなにならしてやがって、恥ずかしいヤツ」

俺が呆れている横で、チビ天が顔をゆでダコのように真っ赤にして見惚れていた。

「ほわわああくっ」

そいつはベッドに上半身を預けての頬杖体勢で、心底愛おしそうに足をパタパタさせている。

おいおいおい。まさか、ソツチの気があんのか？

「ゆりっち、今日も無駄に可愛いつちゃあ。らぶりい」

あつちが鼻水なら、こつちはヨダレときたもんだ。

目の奥の花びらがハート模様になっっているのは、おそらく見間違いないだろうな。どうやら、こりやマジもん決定らしい。

ま、別に人の色恋に口出しするつもりはねーけれども。

っーか、無駄についてそれ褒めてんのかよ……。

なんにせよ。いつまでも鼻水を垂らしたまんまじゃ格好がつかねえ。

「おらおら、どいたどいたあ」

「わわっ、何するつちや！」

「何するって、拭いてやるに決まってるだろ」

ティッシュを二、三枚とってグシグシ拭いてやる。

「ふええっ」

「ふええっじゃねーって。こら、暴れんな。ばっちいツラのまんまでいいのかよ」

それでもなお、手で払おうと抵抗しているそいつに、

「そうは問屋が卸さねえってなモンで、うりうりっ」

「こちよこちよと空いた脇腹をくすぐりまくる。

「にやはははっ、しゃっちゃんってばあ。そんなのでくすぐっちゃダメだよお……」

「どんなのでくすぐってんだよ、夢の中の俺ア」

変な夢見やがってからに……。まあいいや。にへらつと頬を緩めている隙に、サツと拭き取ってやる。

よし。最後の仕上げ完了だ。キレイキレイ。そこで、ふと掛け布団が無いことに気づく。

ああ、そうか。俺たちがもみ合いしてたときに、いつの間にかこいつの布団がはがれてしまったみたいだ。

そりゃクシャミも出るよな。まさか熱も出てたりして。

布団をかけ直しつつ、ゆりなの額に手をあててみる。

ん。平熱平熱。

「うっし。ケンカが続きしようぜ、ももは」

振り向くと、ももはが呆けた顔で俺を見つめていた。

なんなんだ？ 眉をひそめていると、ハツと気づいた様子で、

「あつ。……えつと、その」

「どうしたんだア？」

「ごめんなさい」

謝った。

狂犬のような彼女が、ぺこつとお辞儀をして謝った。

しかしながら、俺だってバカじゃない。学習するさ、一応。

「いつひっひ。まあた、そんな演技をしたところで、もう騙されんぜ」
来るならいつでも来い。カウンターモードで待ってみるが、

「本当に、本当にごめんなさい……。私、ゆりっちのお友達に酷い事を
してしまいました。

ヘンタイだなんて言っつて、他にも酷いことを言っつて、殴ったりし
ちやっつて——」

深々と頭を下げ、手を震わせながら必死に彼女は言葉を紡ぐ。

「わ、私、ゆりっちのことだとすぐに頭に血が上っちゃって、知らない
人がいたので、それで危ないって思っつて、ゆりっちを守らなきやっつて

思って、」

必死に、言葉を。

「なのに、本当のお友達で、とても仲良しきんで、なのに、なのに、嫌われちゃう……。やだ、ゆりっちに、嫌われちゃう。やだ、やだ……。やだよ」

次第に呼吸が荒くなり、咳き込むももは。

まとまりが無い言葉の羅列だけれども——

だからこそ、本当にももはがゆりなのことを想っている気持ちが伝わってきて——

俺は彼女の今にも崩れてしまいそうな姿をどこかで見た気がしていた。

そうだ——あのとときのゆりなだ。

俺が『ワガママ』というワードを発したときのゆりなの取り乱し方によく似ていた。

こいつも。

こいつも——何か心の傷を持っているのか？

まったく、どうしたもんだか……。

俺はうなだれているチビ天のショートツインをびよこびよこことイジリつつ、

「なーに言ってやがるんでえい、ゆりながお前のこと嫌うわけねエツての。」

このチビ助は底抜けのおバカ……。じゃなかった、お人好しだからな。誰も嫌いになんかならねえよ。つーか、嫌いになることを知らなそう。そんなくらいのレベル」

「……ほんと？」

「嘘言つてどーすんだよ。昨日だって、楽しそうにお前の話をしてたんだぞ。お前が幼稚園のころに使っていた箸を戸棚から引つ張り出してさ。」

ピンク色のもの何でも『専用』って書くんだよって楽しそうに教えてくれたんだ」

「え、えへ、えへへ……。そうなんだ。小さいときのお箸、まだとつて

おいてくれたんだ。そつかあ、えへへっ」

ナツプサツクの羽がパタパタとうれしそうに羽ばたく。

やれやれ、どうにかこうにか——落ち着いたようだ。

しっかし、こんなガキに気をつかちまうなんて、俺もどうかしてるぜ。

誰のせいだ。ゆりなのせいか？

めんどくせえことはキライだってえのに。どうしてこう次から次へと——

「あ、あの……」

おずおずと桃色少女が俺を見上げる。

エメラルドグリーン湖に桃の花を咲かせて、そいつは言った。

「しゃくつちさんって、呼んでもいい——ですか？」
……………

俺は腕を組んでゆっくりと首を振った。否定の意。

「そうですよね……あんな酷い事して今更、」

しゅんと顔を下げようとしたそいつの額を指でつついて阻止してやる。

「その他人行儀な敬語をやめて、素で話してくれるんなら構わないぞ。今更、お行儀良くされても気味が悪いだけだぜ」

「わ、私はゆりつち以外にはみんなこんな感じなんです。さっきのは、ついウツカリというか悪者さんだと思ってたので……」

「ふうん。じゃあさ。なんで、ゆりなだったたら素で話すワケ？」

「それは、その、お友達だから、というか……」

「じゃあ、いいじゃん」

「……え？」

「俺ら、ダチなんだからいいじゃん。一回ケンカしたら、どんなやつでもダチ公」

一瞬の間のあと、もじもじと恥ずかしそうに目を泳がせて、

「あ、はい……。えっと、しゃくつち、さん。その、ありがとう(ござい
ます……)」

俯くチビ天。

第二十七石：どうしよう！もう正体がバレちゃった!?

「んにゆるつ、よく寝たよう」

きつと快眠だったのだろう、猫のような伸びをして起き上がったゆりなに、

「ゆ、ゆりっち、おはようっちゃあ……」

「よ、よお。よく眠れたかい、チビ助……」

ゼーハーと肩で息をしている俺たち。

瀕死の状態だった。

「わわっ。ど、どうしたの、二人とも。汗だくだよお？」

ビククリ顔のゆりなに、

「ちよつと、このチビ天とケンカしてたんだ」

言つて、ももはの頬に人差し指をぐりぐりとめり込ませる俺。

「ちよつと、しゃくつちとケンカしてたっちゃ」

言つて、俺の額に人差し指をぐりぐりとめり込ませるももは。

「……恐縮だけでも、指を離してもらえねえかなア」

「……そつちが離したら離すっちゃ」

意地の張り合い。

たがいに火花を飛ばしあう俺たちを交互に見て、

「あれ？　しゃつちゃんとももちゃんつて、いつの間にそんな仲良し

さんになったの？」

「仲良しさんじゃないっ！」

くわつと同時に言い放つた俺らに、ゆりなはニツコリと、

「ほらあ、やっぱり仲良しさんじゃん。えへへっ。二人が仲良しさん

だと嬉しいよう」

本当に——心底嬉しそうなチビ助。

そいつの笑顔にすっかり毒気を抜かれちゃった俺らは、どちらとも

なく指を離すと、

「もう、それでいいぜ……」

「ウチもそれでいいっちゃ」

へ口へ口と答えた。

いやはや。それにしても、いささかに遊びすぎたというか。

第七ラウンドまでは数えていたのだが、その後がどうも記憶に無い。

……………。

自分で言つといてなんだが、第七ラウンドで。どんだけケンカしてたんだよ俺たちは。

「ケンカバカも程ほどにしとかねえとな。身がもたねエ」

「というより、ウチらただのバカかもしれないっちゃ……………」

ぐつ。

ケンカという単語を抜かしたただけなのに、急に響きがカツコ悪くなつたぞ。

まあ。そもそも、あんな服の引つ張り合いにカツコ良いも悪いもねえか。

「ハア……………」

と、ため息。

「にやははつ、ため息までびつたんこだもん。二人ともすごいすごい！」

ベッドに腰掛けて足をブラブラさせるゆりな。

元気だよなア、まったく。

もともとパワフルだけれども、寝起きのためか、さらにパワーが増しているように感じる。

俺は「よっこいしょういちのすけ」っと掛け声一つにチビ助の隣に座り、

「その元気をいささかに分けてもらいたいものだぜ」

苦笑いしつつの冗談。

そう。ただの冗談のつもりだったのだが。

「いいよ。ちょうど溜まり過ぎてて困ってたところだったし。しゃっちゃんにボクの元気、分けてあげるっ」

「へ?」

どういうこつたと首を傾げていると、そいつは俺の頭頂部のアホ毛をむんずと掴んで、

「ほくよよん、ほいほい〜っ……」

詠唱をはじめた。

……つて、詠唱オ!?

「ちよ、ちよ、ちよつと待て!」

「ほんっ! ーらいらい、みにらいとにんぐう〜」

「あでしっ!」

唱え終えてすぐさま俺の全身を電流が駆け巡った。

もちろん、アデシという意味不明な発言はそれによるものだ——言うまでもなく。

いやいや、んなコトはどーでもいい。

「い、いきなり電撃をぶっ放すたア、どういう了見なんでえい!」

そうゆりなに詰め寄ると、そいつは妙にスッキリしたツヤツヤ笑顔で、

「にははっ。寝て起きるとね、いっぱい電気が溜まっちゃうの。だから、放出したの〜っ」

したの〜っ、じゃねえええ!

「お前さんなあ……。俺様が言ったのは元気を分けてくれであって、電気を分けてくれとは一言も言っただねえぞコルア!」

俺の前のめりの抗議に、まあまあとゆりなが両手でおさえる。

「ねーねー、しゃっちゃんさ。ちよつと肩をこうしてみて」

ぶんぶんと右肩を回すゆりな。

「こう、か?」

そいつに倣って肩を回してみると、どういうことだろう。

さつきまでの疲れがウソのように吹き飛んでいるのだ。

肩だけではなく、腰も首も楽になったような気がする。おお、すげえなこりや。マジで快適だぞ。

「ねっ。電気治療っていうみたい。クーちゃんに教えてもらったんだよ、これ。元気になったでしょ〜」

言いながら人差し指と親指で輪っかを作っては離すを繰り返すゆりな。

そのたびに黒い電流がバチバチと糸を引くように現れる。

うーむ。

何気ない仕草なんだろうが、改めて見ると、本当に不思議だねえ。だって、指から電気が出てるんだぜ。なんともアツサリとき。

目の前で実際に見ているから何とか信じられるが、ブラウン管越しだったら一笑に付しているところだ。

どうせ手品とかCGだろうってな。

まったく今更の話だけれども、こんな簡単に出ちまう『魔法』ってヤツあ——いささかに恐ろしいな。

「ぼーつとして、どったの？　しゃっちゃん、もしかして電気足りない？」

指を擦って大量の火花を散らすチビ助。

俺が足りないんじゃないって、足りないのはきつとこいつの方だろう。放電し足りないという意味で。

その放電に付き合っつてやりたい気持ちは山々だけれども、さすがにこれ以上ぶっ放されたら体に悪い気がするぜ。

俺はブルツと身を竦ませて、

「い、いや大丈夫、足りてるって。おかげさまで元気マンマンさ。

……でもよオ、ちよつとした謎なんだけれども。どうして髪の毛なのに電気が通ったんだ？」

確か髪は電気を通さないはず。中一のとときの先公が間違っつていなければ、だが。

そんな俺の疑問にゆりなは少し考える素振りを見せて、

「そうだったの？　んー……よくわかんないけど、しゃっちゃんは『水』だもん。だから髪からでも電気が通ったのかも」

「水う？」

俺が『水』——ああ、そうだった。

水だから電気を通す。小学生でも知っつていそうな、というより本物の小学生が知っつていたこの事実だが……。

しかしながら。

いくら俺がコロ美と契約を交わした『水の魔法使い』だからって、髪まで水になっつちまうのはおかしいだろ。

試しにてっぺんの触角を引っ張ってみる。別にチャプチャプ音も
しないし、普通の髪だ。針金のように硬い点を除いては、だけれども。
そんなことをしていると視界の隅に何やらチョコマカと動くもの
が映った。

「？」

アホ毛を指でハテナマークにひん曲げてよく見てみると——ク
ロエだった。

黒猫が肉球を大きさに振ってヘンテコなダンスを踊っている。

なにしてんだ……コイツ。まさか俺のマジックポイントを吸い取
ろうとしているワケではあるまいな。

腹が減ったから、みたいなノリでさ。

「あつ……！」

それを見たゆりなが、しまったというような声をあげる。

そして、これまたしまったという顔で、

「しゃ、しゃ、しゃっちゃん……！」

「あんだよ？」

「やびやい」

ヤバイを噛んだそいつの指す方向に視線を向ける。

ももはだった。

ぺったんこ座りで俺とゆりなをジーンと訝しそうに見ているチビ
天。

俺は魔法少女の取説を思い出していた。

其の陸、注意事項についての部分——他人に正体を知られてはいけ
ません。

魔法使いであることをバレないように周りに注意して魔法を使っ
てください。

……………。

やびやい。

思いつき魔法の話をしてしまったぞ、オイどうすんだ。話どころ
か、ゆりななんて電撃出しまくりだったし。

注意事項を破ったらどうなるかは書いてなかったから、いささかに

も分からないけれども……。

こういった約束事を破った場合、往々にして痛烈なペナルティが与えられるモンだ。

ペナルティ。

イヤな響きだ……。どうしたものか、と。俺がいよいよ真面目に悩み始めたとき、

「ゆりっち、しゃくっち——」

ももはの呼びかけにドキンと心臓が飛び跳ねる。

だ、大丈夫。平静を装うんだ。俺が小声でそうチビ助の脇をつくと、そいつは「うん、わかった」と小さく頷いて、

「も、ももちゃんなあに？」

頬をピクピクさせながら言うゆりな。

「ち、チビ天どうしたよ？」

眉をヒクヒクさせながら言う俺。

「……………」

むしろ怪しき全開だった。

ややしばらくして、ももはが言葉を続ける。

「もしかして二人って、魔法使い——」

ダメだ、完全にバレてる。

終わりだな……。

俺が諦めのため息をついていると、

「——ゴツコしてるっっちゃ？」

キレイにずっこける俺たち。

折り重なって倒れている俺らの上に、チビ天がピヨコンと乗っかってきて、

「二人だけなんて、ずっこいっ！　ウチも一緒に魔法使いゴツコしたいっっちゃ」

背中をポカポカたたき始めた。

ははは……。いやはや、冷や汗かいて損したぜ。

どうやら魔法使い関係者でないコイツには、ゆりなの出した電撃が見えていなかったらしい。

多分——ももはの目にはただのゴツコ遊びにしか映っていないかったのだろう。

そう。

元気を分けてあげると、ゆりながいきなり俺のアホ毛を掴んで、変な呪文を唱える。

そんでもって俺は大きなりアクションをとった後、なんで髪から電気が通るんだという質問をする。

そんな、ただのゴツコ遊び。

ただのではなく、どう考えても意味不明なゴツコ遊びだった。

俺がもしチビ天の立場だったら、恐縮だけれども今日はこの辺で休憩しますねと後ずさりしたくなる、そんな遊び。

まあ、なにはともあれ、バレていないように良かった良かった。

あやうく初日でいきなり正体がバレる、というヘツポ魔法使いのギネスに載っちまうところだったぜ。

んなもんあるのか知らねえが。

第二十八石：なぜ？トップアイドルの脱退会見

『七時五十七分！ 七時五十七分！』

やにわに聞きなれない機械声が部屋中に響き渡る。

今度はあるだよ。また変なヤツのおでまして流れか。

こちららチビ天だけで腹いっぱいだってエのに……。

今度はどういうジャンルのヤツだろうか。

あの声からして、そろそろロボットあたりが来るのかもしれない。

青いタヌキ型ロボット、みたいだな。そうだとしたら魔宝石集めがか

なり楽になるな。

んで、あわよくば元の世界に戻してもらったりなんかしちゃってさア。

そんな妄想をしつつ部屋を見渡してみるが——俺たち以外、誰もいねえ。

「あいたくー！」

俺の背中で駄々をこねていたチビ天が叫んで飛び降りる。

「ん？ あ、いたーって、誰か見つけたのか？ どこだどこだ」

キヨロキヨロする俺に、

「にやはは。しゃっちゃんてば、ボクと同じ間違いしてるー。それ方
言でねー、こつちで言うところのしまったくって意味なんだって」

「なんでえい、そうなのか。紛らわしいヤツ」

そんなやり取りをしていると、ももはがワンピースの左胸について
いる懐中時計をひっぺがして、

「ゆりっちい、ゆりっちい、もう八時になるっちやあー！」

印籠よろしく俺たちに向ける。

まあ、たしかに八時手前だけれども。いったい何を焦っているんだ
？

ぴよんぴよんとその場で足踏みを繰り返すそいつを見て、

「ほい、了解うけたまわりっ！」

威勢良くゆりなが立ち上がる。

どこから取り出したのだろうかろうりモコンをバツと掲げると、

「セブンズフラッシュユ・スイッチオン！ ……ポチつとにや」

盛大な掛け声と共にボタンが押され——ベッド脇の壁に設置されているテレビが起動した。

……起動したってどうか、ついたってどうか。なあにを騒いでんのかと思つたらテレビかよ。

あきれている俺の隣に、ゆりな、ももは、クロエが続々と寝っ転がる。

テレビの前で川の字のように並んだそいつらは口々に、

「はっちじく、はっちじく。仮面モリガーのじつかんくつ」

「わーい。今日は凶悪怪人モリボーとの決着だよね」

「にやあーん！」

「あ、くろつちー！ ふう姉ちゃんに飼つても大丈夫って許可もらえたつちや？」

「ぶいっ。これで心置きなく一緒にいられるよう」

「ほわわあ、良かったつちやあ」

「にやんっ」

楽しそうに騒いでいやがる。にしても、仮面モリガーとはまた。

俺の居た世界にも似たようなモンがあったような。

おおかた内容の察しはつくが、一応訊いてみる。

「なんでえい、仮面モリガーってえのは」

「んとねく、色んな森をバイクで走るのが趣味の女の子が、その森を汚す悪い怪人さんを仮面モリガーに変身してやっつけるお話なの！」

ああ、やっぱりそんな感じのやつか。

「でつたんカツコいっつちや！」

言つて変身ポーズを決めるももは。

よほど好きなんだろうねえ。

「ボクはその前にやってるセガレンジャーのほうが好き……つて、もう終わってるじゃん！」

ももちゃあん、いつもは七時半に起こしてくれるのにい、どーしてええ、なにゆえええ」

どんよりと恨めしそうなツラで迫るチビ助に、

「ご、ごめんっちゃー！　しゃくつちと喧嘩しててすっかり忘れてたっちゃー」

テヘへと、平謝りのチビ天。

普通ならばこのまま流すような別にどうでもいい場面だけれども。ふむ。

あえて遊んでみる勇氣。

「ゆりな……っ！　こいつを、こいつを責めないでやってくれイ。全部、俺が悪いんだ！　責めるなら俺だけにしてくれ！」

ももはを抱きしめて頭を撫でまくってみる。

「ひいっー!？」

「責めさせはしない！　嫌なことから全て、俺がお前を護ってみせる……っ」

「だ、だったら今すぐ手を離して欲しいっっちゃあ、気持ち悪いっっちゃー！

でたん嫌なことっっちゃー！」

「わ。わ。しゃっちゃんとももちゃんてば、ハイパー仲良しさんっ。いいな〜いいな〜っ」

「ほわわあつ!?!　ゆ、ゆりっちい、これは誤解っっちゃー！　ウチの一番は、その、あの……」

「五階だつてえ？　恐縮だけれども、ここは二階だぜ」

「わーい、しゃっちゃん上手い！」

「よせやい、照れるじゃねえか」

「つて、いい加減に離れろっっちゃー！」

すぱこーんとピコピコハンマーで殴られた。

いってて。

んなもん、どこに隠し持ってたんだよ。

「こんなこともあるーかと、ナツプサツクの中に常備してるっっちゃー」
ナツプサツクの羽が自慢げに羽ばたく。命名、どや羽。

てか、こんなこともあるうかとつて。普通こんなこと無いと思うのだけれども。

「だいたいさー、わざわざピコハン出すなんて面倒くさくねえか？
さっきの喧嘩みたいに素手でツツコミ入れりゃあいいのによオ」

頭をさすりつつ言う俺に、

「だ、だって。それは……」

急に顔を赤くするももは。

「()によ()によ。もじもじ。」

「それは？」

「お……だち……だから」

聞こえねえ。

「あんだってえ？」

「だ、だから、おとも、だち……だから」

ぷぷっ！ なんじゃそりや。つまるところの、あれか。

お友達になった俺へのツツコミはピコハンで、なるべく痛くないようにしよう——そうコイツの中で決めたということか。

なんともまあ……可愛いじゃねえの。

いささかに面白くなってきた俺は、気づかないふりをしてもう一度、

「あんだってええ？」

「うう、そのね、しゃくつちが、お、お友達だからあ、」

「聞こえねーなあ、貧乳だと声量まで少なくなっちゃうものなのかなあ、不思議だなあ——」

「オイ、待てやこるあああつ!!」

その後、お友達向けではない強烈なビンタが飛んできたのは言うまでもない。

+++

「しゃっちゃん、大丈夫？」

「やーん。あちき、もうダメかもお」

「も、ももちゃん、どーしよう。しゃっちゃんのキャラが変わっちゃった！」

「……もう一発いつとくつちや？」

「すまん。今、ちようど治ったところだ」

話を戻すが、ゆりなは戦隊モノの方がお好きなようで。

モリガーに続いて、これもどんなもんか訊いてみることにした。

「えつとねえつとね、セガレンジャーはね、七光戦隊セガレンジャーって言つてねー。」

前にやってた癒着戦隊アマクダレンジャーの子どもが主人公で、」

「オ、オーケイ、もう大体わかりましたんで」

とても嫌なネーミングだった。

つかセブンスフラッシュって掛け声の元ネタはもしかしなくてもコレだな……。

やがて仮面モリガーが始まる。

なんてことはない、やはり俺が居た世界のヒーローモノと相似している子ども向けな番組。

つまんねえな……。ふと二人と一匹に目をやるが、そいつらは一様に口をあんぐりとあけている。

これほど夢中を表しているアホ面もないだろう。

やれやれ。

チビ助やチビ天はともかく、どうしてクロエまでそんな食い入るように――

ピロンピロン。

聞き覚えのあるチャイム音がテレビから聞こえてきた。見やると、速報テロップが出ている。

えーと、何々……。

『セブンスプロジェクト所属の人気アイドルユニット、ハッピーラピッドメンバーであるシャオメイさんが本日付けで緊急脱退を発表』

って、何かと思つたらアイドルの卒業かよ。

メンバーが捕まったつうならまだ解るが、たかだか卒業ごときでこんな速報が流れちゃうなんてね。

まったく、大げさな話だ。

「たまったもんじゃねえよなア。好きな番組にこんなくだらねえテロップ流されちゃあさ」

俺も経験があるからよくわかるぜ。

人が気分良くサッカー中継を観ているとき、しかも盛り上がってる

場面に限って速報テロップが邪魔をしやがる。

せつかくの興が削がれちまうんだよな、ありやあ。

「どこぞの誰かが当選確実とか知ったこっちゃねえってのに、きつと共感を得られるだろうとそう思ってたのだが、

「ウソ!? ゆ、ゆりっち、ニュースに変えてもらえるっっちゃ?」

「う、うん」

ゆりなが青ざめた顔でチャンネルを回す。

隣のチビ天は戸惑いを隠せないといった表情。

あんなに楽しそうに観ていた番組をそっちのけってことは……も
しかしてそれ以上にこのアイドルが好きなのか?

俺の問いに、

「好きっっちゃね! てか、ハピラピが好かん子なんて、たぶん居ないと
思うっっちゃ。

ウチら小学生の憧れの的やもん。しかも、しかも、シャオっちは

ハッピーレッド!」

「ハ、ハッピーレッド?」

「うん。七人組のアイドルでそれぞれ色があるの。虹の七色ね。で
ね、レッドはリーダーの色なんだよ。

めっちゃんこ凄いアイドルのハピラピのリーダー、しかもこの前の
人気投票でダントツ一位のシャオちゃんがいきなり抜けるんだもん。

もく、モリガードころじやないよう……」

「やけん、脱退理由がどーしても気になるっっちゃ」

し、真剣だねえ。

こいつらチビどもをここまで熱くさせるアイドルとは——いささ
かに気になるぜ。

「あ、ももちゃんニュースはじまるよつ。緊急会見だつて」

「ううう、とつくにエイプリルフールは過ぎてるのに……。観るの怖
いっっちゃあ。ゆりっちい、お手てえ」

ももはが涙目で差し出した手を、

「ほいほい」

いつものことだとばかりにギュツと握るゆりな。

おいおい、ホラー映画じゃないんだからよオ……。
おつ。ようやく会見が始まるみたいだ。

第二十九石：アイドルを辞めたシャオメイ

大勢の記者が集まる中、現れたのは——小さな少女だった。どう見てもゆりなと同年代の子どもに見えるが……。

そこで俺はポンと手を打つ。

あー、ももはが言っていた小学生の憧れの的って、そういうことか。ハッピーラピッドとやらは、小学生アイドルのユニットってワケね。

もつと年上、ハタチくらいのアイドルかと思っていたが——いやはや。考えてみりやあ、いい年こいてハッピーレッドは無いよな。

アイドルのリーダー、ハッピーレッド——か。

しかも人気ダントツトップのシャオメイ。

うーむ、どんなツラをしているのだろうか。マジで気になってきたぞ。

引きではよく見えんな。

と思っていたらタイムミング良くカメラが寄った。

「ほほー」

これはこれは。

シャオメイという少女は赤く長いツインテールという髪型に、切れ長の綺麗な黒い目をしていた。

まるでアイドルになるために生まれてきたかのような、完璧に整った顔。

たしかにそこいらのガキとは雲泥の差の容姿だ。芸能人オーラが満ち満ちているというか。

なるほどね。こりやあ、人気が出ないほうがおかしいぜ。

しかしながら——

ちよいとぼつかし、目の下のクマが濃すぎやしねーか？

茶や青グマといった類じゃなくて、超絶真っ黒だぞ。

ハッピーレッドというより、どちらかといえばアンハッピーブラツクみたいなの。

まさかこの世界で流行りのメイクだったりして——いや、んなわけねーか。

まあ、普通に疲れているんだろうな。

やはり、アイドルつつうもんは並大抵の仕事じゃなさそうだ。

それも大人気アイドルでリーダーとくりやあ、なおのこと。

おそらく脱退の理由はストレスがひどいとか、体が持たないとか、そんなところだろう。

勝手にそう理由をつけて納得していると、シャオメイの隣に立つ小太りのおっさんが口を開いた。

「本日は大変お忙しい中、急なお声がけにも関わらずお集まり頂き誠にありがとうございます」

だからだと前口上を続けた後、ようやく本題に入ったのだが……。

そいつがまあ、トップアイドルにあるまじき内容だった。

要約すると、三日前からシャオメイが突如辞めると言い出してきかなかったらしい。

最初は冗談かとあしらっていたが、次々に仕事をすっぽかすわ、出たら出たでファンに暴言を吐くわで大変。

辞めるにしても、なんとか『ラストコンサートで卒業』という形へ持っていく、綺麗に終わらせてやりたい。

そう思った小太りのおっさん……セブンスプロの社長が説得を試みたが、それでも聞く耳持たず。

もはや、どうしようもない。やむなく、こういった会見を開くに至った、というワケ。

社長が必死に頭を下げ、記者の質問が飛び交うつつこの状況で、シャオメイは俯いての終始無言——無視を徹底していやがる。

その態度に、徐々に会場がヒートアップしていく。

「うーん。シャオちゃんて、こんな怖いカンジの子だったっけ……」

「うんにゃ。クールでカッコいい子ってイメージやけど……。ちよつと様子がおかしいっちゃ」

「やつぱももちゃんもそう思う？　どーしたんだろう。どっかお体悪いのかな」

だよなあ。子どもでも、さすがにこれはおかしいって思うよな。だって色々なアイドルが乱立している中でこいつはそのトップに君臨しているんだろ？

それがこんな尻切れトンボなひでえオチでいいのかよ。俺の世界だったら、ファンが暴動起こすレベルだぜ。

まったく——何を考えているんだろうな、このシャオメイってヤツは。

「あ、ゆりっち。シャオつちが動いたっちゃー！」

もものはの言うとおりで、今まで頑なに下を向いていたシャオメイがゆっくりと顔を上げていく。

「ほんとだ！　なんか言うのかも」

慌てて音量を上げるチビ助。

だが、その行為に反して音が段々と消えていくではないか。

「おーい、音なくなったぞ。ボタンの押し間違えかい？」

「そ、そんなはずはないと思うけど——」

シャオメイの顔が上がりきり、そして目が合う。

え。

目が合う……？

その時だった。

「!?!」

ゾクつとする寒気。

まるで心臓を掴まれたかのような息苦しさに襲われる。

隣、ゆりなに目を向けるとそいつも苦しそうに胸を押さえている。

こ、これは、この息苦しきは——なんだ？

俺の視線に気づいたゆりなは、自分も何がなんだか分からないというように首を振る。

「ほわ？　ふ、二人ともどうしたっちゃや？」

口をパクパクと開閉していた俺たちにももはが不安げな声をかける。

「……………っ!!」

答えようにも声が、出ねえ。

金縛り状態。

体に喝を入れてくれるよう、チビ天に目配せをしようとするが、どうしても視線がシャオメイへと吸い込まれる。

(な、なんなんだ、この不快感は……)

再びそいつと目が合う。

「ひっ!？」

光という光を失った暗い瞳。

死を孕んだソレに耐えられなくなった俺は、震える体を無理やり動かした。

なんとかベッドから後ずさり、ヨロヨロと立ち上がることに成功する。

こ、これでもうあいつの目を見なくて済む——
だが。

画面の向こうのシャオメイが再び顔を上げていく。

まるで俺が見えているかのように。

まるで俺を追っているかのように。

ゆっくりと。

そして、やがて。

目が合う——

微笑をたたえた唇の間でねっとり舌が動き、その少女は何かを呟いた。

「——」

同時にクロエが毛を逆立てて威嚇をする。

こいつには聞こえたのかもしれない。

音が消失しているため、俺には何て言ったのか分からなかったのだが。

そんなことはもうどうでも良かった。

何を言ったかなんて、そんなことは。

ただただ、ひたすらに気味が悪い。

ゴクツ、と。

恐怖で渴ききつた喉を湿らせたとき、そいつは満足げに舌なめずり

をした。

その表情は、とてもひどく——美しかった。
この世に生きるモノとは、思えない程に。

第三十石：シヤオメイって一体何者？

「なんなんだよ、あのガキは」

部屋から抜け出した俺は洗面所に腰を落ち着かせていた。

乱暴に顔を洗った後、鏡に映る未だに見慣れない少女にそう訊ねてみるが、そいつは疲弊した顔でただ息を荒げているだけだ。

ちくしょう——まだ心臓がドクドクと波打ってやがる……。

「よお、シラガ娘。どうした？ 顔が青いぞ」

おどけた口調。

鏡越しに視線を送ると、洗濯機の上にクロエが乗っかっていた。

「どうしたも何も……。あいつ——シヤオメイってガキは一体何者なんでエい。あいつと目が合った瞬間、動けなくなっちゃった」

「につしつし。そりゃアレだ。恋、ってヤツかもしれないねえぞ？」

「茶化すなって。そんなんじゃないよオ……なんついたらいいんだ、ありやあ」

どう言えいいのか分からん。

胸が締め付けられるあの奇妙な感覚——もちろん恋などではないのは確かだ。

ならば——恐怖か？ いや、違う。

単なる恐怖かといえど、そうでもないような……。

俺が説明に窮していると、

「……引かれているんだよ。お前たちは、あいつにな」

黒猫が眉間にシワを寄せて言った。

引かれているって——どういう意味だよ？

「シラガ娘がピースに選ばれた強力な魔法使いだという何よりの証拠ってワケだ、うん」

んん……？

それだけ言って満足げに顔を洗い出すクロエ。

いやいや、端折りすぎだろ。俺はまだ魔法使いになったばかりのヨチヨチな赤ん坊なんだぜ。

初めてで右も左も分からないんだ。もうちいつとばっかし噛み砕

いて言ってくれねえと困るって。

そんな俺の不満に、クロエがスツと目を逸らして、

「……初めてが、あれだけの魔法をとっさに思いつくかって」
苛立つように呟いた。

あれだけの魔法——『スノードロップ』、『アクアサーベル』、『エメラルドダスト』のことか。

確かに今考えてみれば、どの魔法もとっさの案には上手くいきすぎたのかもしれない。

そう。どれも、ちゃんとした形になり、それなりの力を発揮するこ
とが出来た。

中でもエメラルドダストは最高傑作の威力だと言える。あのホ
バーに唯一、ダメージを与えられたしな。

そういえば——前にもあれだけの魔法を初陣で閃いておきながら、
とか言われたような。

でも、あん時とはいささかにニュアンスが違うんだよなあ。

今回は、どうもトゲが含まれているというか。

でも、初めてには違いないだし……。褒められこそすれ、ムカつ
かれる筋合いはねえぞ。

俺がムツと口を尖らせている様子に気づいたのか、そいつは慌てた
ように肉球を振って、

「あつ、じゃなくなって、初めてなのにあれだけの魔法をとっさに思いつ
くなんて、さすがシャクヤク様！

そう言いたかったんだ。いやあ、言いかた間違えちまったぜ、ま
いったまいった」

「……そんな間違い、あるかア？」

「ん、んなことより、おめえはあのシャオメイってヤツのことについて
訊きたいんだろ？ 説明してやんぜ、オレの知っている範囲でだけ
ど」

ごまをするような足の動き。

なにやら、はぐらかされたような……。

とりあえず俺らがシャオメイに引かれてるとい理由を詳しく訊

いてみる。

「それはだな、魔力を持つモノ同士は引かれ合うってことなんだ。それとも、強力な魔力を持つモノ同士は、どんなに遠くに居ても相手を感じることが出来る」

魔力を持つモノ同士――

それは、すなわち。

「……あのガキは魔力を持っている、ということか？」

クロエは深く頷いて、

「そして、あのヒゲにまわりつくような不愉快な力――おそらく、アレは模魔じゃない。模魔ではありえない」

「模魔じゃないって……。そんなの見りやあすぐに分かるじゃん。

だって、普通の人間じゃねーか」

俺の中で、模魔といえは真つ先にホバーが思い浮かぶ。

巨大という言葉では物足りない程のハチドリ。

まったく。とてつもなく、どうしようもない。そんな化け物。

そいつしか知らんが、他もきつとこんなヤツらだろう。

そう思っていたのだが、

「模魔は、持つ能力によって様々な姿カタチをしているんだ。

ホバーのように巨大なケモノ姿のヤツもいれば、コロ助のように小さい子どもみみたいな見た目のヤツもいる。他にも色々なパターンがあるぜ」

動物のような姿。

人間のような姿。

その他、色々なパターン……って、なんだよ。想像つかんぞ。

眉を寄せていると、クロエがけらけら笑って、

「まあ、それは遭ってからのお楽しみだぜ」

「出来れば遭いたくないんだけど……」

「普通は、」

すぐにそいつは真剣な表情に戻って、

「普通はな、魔力を持っているイコール模魔だとすぐに判断出来るんだよ」

「ん。ちよい待ち。えっと、もしかしたら『魔法関係者』かもしれないんじゃない？」

話や説明書にチラホラ出てくる魔法関係者という言葉。

どんな奴らか見たことないが、そいつらだって魔法関係者って名前なんだし。

魔力を持っているなら、その人たちという可能性もあるんじゃないのか。

「いや、関係者といっても魔力は無いんだよ。俺たちの姿が見える、そして理解がある。だが、それまでだ。魔力までは持ち合わせていない」

つまり？

「……これは、あくまで予想にすぎない話だが」

回りくどいな。

「わかりましたんで、とりあえず言ってみてくんねえか。その予想とやらを」

しばらく躊躇うように白ヒゲをイジっていたクロエだったが、

やがてため息をついて、こう言った。

「あのシャオメイは、お前たちと同じくピースに選ばれた『魔法使い』かもしれない」

第三十一石：目が輝く現象ってなに？

おおっ。

もしかしたら、そうかもしれねえなあって心のどこかで思ってたんだ。

あいつが魔法使いつてんなら、ゆりなど俺とあいつとで三人か。こりやあ、いいねえ。それなら思った以上に早く魔宝石を集められるな。

案外一ヶ月もしないうちに全部集めて、気持ちよく帰ることが出来るのかもしれない。

もちろんこのチビジャリ娘の呪いも解いてもらってさ。

そう俺が浮かれていると、黒猫がポツリと、

「またアレが鬼か。なら、どうせ今回も……」

「ん？　なんか言ったかい？」

「別に、なんでもねーよ」

そういえば、と。

クロエが洗面台に飛び移って、俺を見上げる。

赤い瞳。

「シラガ娘は気にならないのか？　ポニ子が、オレと同じような『赤い眼』になったコト」

……気にならないはずがない。

あの赤いゆりなのカラクリは早めに知っておきたいところだ。

「へへ。興味津々ってな顔してるぜ。わかりやすいな、シラガ娘はいいぜ。今ならコロ助もいないし、サクツと教えてやるぜ」

「サクツとでは困るのだけでも。あれはそんな簡単に説明出来ることなのかイ？」

訊くと、突然そいつは耳をピンと押っ立てて後ろを振り向いた。

「どうしたんでエい？」

「い、いや……」

なんだろう。

コロ美でも警戒しているのだろうか、そいつは声をひそめて、

「教えてやる、あの状態は『裏・集束』ってヤツだ」
ウラ・シユウソク？

こりやまたよくわからん名称だな。

「そうだ。俺ら霊獣の間ではアレを裏束と省略して呼んでいる」
「裏、と言うけれども。いやはや、それじゃあ表もあるということかい？」

俺のからかい気味な質問に、

「あるんだな、これが。表——というより、それはただの『集束』なんだが。もしかして、コロ助の眼が光ったところ見たことあるとか？」
「ああ。モチのロンだぜ。ええと、霊鳴を渡される前と風呂に入った時、あとは髪を乾かしてる時の三回だったな。たしか」

「はは……。 たった一日で三回も集束してたのか。そこんところ、あめーなあやつぱし。ま、しょうがねえか」

苦笑いのクロエ。

「あの目ん玉が光る不気味な現象が集束ってえヤツなのか。なるほどねエ。で、それって一日に何回もしちやあマズイわけ？」

「……マズイな。霊獣であるオレたちは自由自在に集束状態になることが出来るが、本来の発動方法とは異なるため、やればやるほど身体に障るんだ。」

三日に一回のペースならまだしも、一日に三回はさすがに無理がある。 つつても、コロ助の場合ほとんど無意識のうちに集束しちまったんだろうが、

「その発動方法って、どうやるんだ!？」

集束。

あの目が光る現象はおそらく魔力強化——パワーアップだろう。

赤いゆりなの桁違いな雷撃魔法を見るに、それしか考えられん。

あれを。

あれを、自在に発動できれば、この俺だって……。

そう前のめりになった俺に、

「まあ、そうくるだろうなあ。でも、わりイがハッキリ言わせてもらおうぜ……シラガ娘にや『集束』は無理だ。あきらめな」

一蹴されてしまった。

しかしながらと、俺は語気を荒げる。

「無理って……チビ助に出来たんだ、俺もやれるって。方法を教えてくれよ、やるだけやってみねえと分からねえだろ？」

あいつに出来て、俺に出来ないハズはない。

お前も言っていたじゃねーか。

俺はピースに選ばれた強力な魔法使い、だって。

「ポニ子に出来たって、裏の方を言っているのか？ それなら、もっと無理な話だぜ」

なぜなら、とクロエが言い掛けたとき、

「にんっ！ あ、しゃくつち、くろつちこんな所に居たっっちゃー！」

ももはが急に飛び込んできた。

そいつはビックリしている黒猫を抱き上げて、

「きやはっ。お別れの挨拶に来たっっちゃ」

頬ずりを始めた。

「そうか。短い出番だったな……。忘れないぜ、俺はお前のことを。閻魔さまよろしく言っておいてくれよ」

「勝手に殺すなっっちゃー！」

すかさずピコピコハンマーでツツコまれる。

なかなか手馴れた動きだった。

片手にクロエを抱いているのに、よくもまあそんな機敏に動けるモンだ。

感心ツラの俺に、やれやれとチビ天が首を振る。

「はあーあ。相変わらずワケわからんち。しゃくつちと話してると時間の無駄っっちゃね」

なんとも失礼なことを言っつて、俺に黒猫を押し付けやがった。

おつとつと。

クロエを抱きなおしていると、ももはがヘンテコなポーズをとって、「覚えてやがれー！」

走り去ってしまった。

いや、覚えてやがれって……何をだよ。

きよとんとしている俺に、腕の中の毛むくじやらが笑った。

「につしし。ワケわからんのはお互い様って話だよな。なかなか良いコンビしてるぜ、おめえら」

「……うるへー。にゃん畜生め」

さてはて。

部外者も帰ったことだし、話の続きはゆりなの部屋でゆつくりとしてもらおう。

そう、そいつを抱っこしたまま洗面所を後にしようとしたとき、

「いっててー!」

急に爪を立てるもんだからたまらない。

こんなにやろう、乙女の柔肌を傷つけやがってよオ。

そんな文句でも言ってるやろうかとそいつを眼前に持ってくる、

「この、気配——シラガ娘、感じないか?」

一転、シリアスな口調に面食らっちゃう。

いきなり、気配を感じないかって言われましても。

「いいから目を閉じて、意識を集中させてみる。おめえほどの使い手なら、もう感じる事が出来るはずだ」

「や、やってみますんで……」

気圧された俺は、とりあえず言われたとおりにやってみる。

ええと、目を閉じて意識を集中だっけか。

集中。集中。

しばらくすると、暗闇にポツポツとなにやらノイズのようなものが生まれてきた。

それは瞬く間に増殖すると、まぶたの裏全体を埋め尽くす。

「おお、なんかテレビの砂嵐みたいなものが出てきたぞ。すっげ。こりゃあ、たまげた」

「だから、意識を集中させろって言ってるんだろ!」

んな怒鳴らなくても。

おとなしくそのノイズを眺めていると、ぼんやりと魚のような影が浮かび上がってきた。

気配と言うけれども……。

もしかして、このへっぽこなお魚さんのことを言ってるのかね？
「んー。感じるつつうか、見えたんだが……出てきたのはよくわからん魚だったぞ」

「化け物でも魑魅魍魎でもなく、ただの魚。それも漫画のようにデフォルメされた魚。

他には何も出てこないぜ。」

「さかなあ？」

素っ頓狂な声をあげるクロエ。

「さかなあ」

素っ頓狂な声で答える俺。

てつきり、また怒鳴られるかと思っていたのだが、

「変だな。あんで、そこまで見えんだ……？」

驚き顔だった。

「変って、そう仰られてもよ。見えちまったモンはしょうがあるめえ」

「うーん、おかしいなあ。まあ、見えたんなら別にそれでいいのか」

どうもさつきから歯切れの悪い言い方をしやがる。

俺とチビ天のことをワケ分からんコンビとして笑っていたが、

こいつだって俺からしてみれば十二分にワケ分からんぞ。

しきりに首を傾げているクロエに、俺は痺れを切らしてこう言ってみる。

「……恐縮だけでも、この魚ちゃんがなんなのか教えてくれよ。めんどくせえから、ハッキリ頼むぜ」

すると、そいつは俺のお望みどおりにやたらハッキリと、

「ああ、その魚は『第八番模造魔宝石ダツシュ・ザ・アナナエル』を示しているんだ。そんでもって、」

軽い調子でさらに続ける。

「もうすぐこの家にやって来るぜ」

「へ……？」

この家にやって来る——って。

え、どういうことだ。

俺がクエスチョンマークを掲げようとしたその時——家のチャイ

ムがピンポーンと鳴り響いた。

第三十二石：ちつちやな訪問者

タイミングの良すぎる訪問者に、一步後退。

おいおい、マジか？

身構えている俺に黒猫が声を落として、

「噂をすればなんとやら。早速おいでなすったようだ」

早速にも程があるだろうが。

ホバーとやりあつてから、それほど経つてねえつてのに――

こんなことになるなら俺もゆりなと一緒に寝ておけばよかつたぜ。

目をこすりながら心の中で愚痴っていると、再びのチャイム音。

「ど、どうしたもんだかねえ」

「どうしたもんだかつて、捕まえるに決まつてんじゃねーか」

いやまあ、それはそうなんだけれども。

まさか、直接この家に敵さんがやってくるなんて思ってもみなかつ

たワケで。

えーと。うーんと。

とりあえず開けるべきか？

いや、開けた途端ぶつ飛ばされる可能性があるよな。変身をしてい

ないスツピン状態なんだし。

ここはコロ美を呼んできて変身をしてから開けるか――

よしっ、そうしよう。

いったん部屋へ戻ろうとしたとき、後ろからパタパタとスリッパの

音が聞こえてきた。

「はいはい。いま出ますですよっ」

エプロン姿のゆりなのお姉さんだった。

裾で手を拭きながら靴箱の上に置かれていたシャチハタの印鑑を

取って、

「お待たせしましたですっ」

ガチャリ。

「あっ……っ……」

止める間もなく、あっさりと扉が開かれてしまったのだが……。

そこに立っていたのは——体操服姿の小学生だった。
おそらくゆりなより学年が下で、コロ美よりは上かなといった感じ
の女の子。

額の赤いハチマキを見るに、体育の授業中なんだろうか。
って、授業中だったらこんなところに来るわきゃねーか。

「まあ、あらあらまあ。なんて……ああ、なんて可愛らしいのでしょう
！」

もしかして、ゆっちゃんの新しいお友達さんなのでしょうか？」
わきわきと手を動かしている様を見るに、きつと抱きしめたい衝動
に駆られているのだろう。

だが、そんな微笑み満開のお姉さんとは対照的に、そいつはツーン
とそっぽを向いてしまった。

「はれっ？ 違ったのでしょうか……。ではっ、しゃっちゃんちゃん
のお友達さんですか？」

「い、いやア、まったくもって知らねエ子です」

「それでは……。えっと、なんのご用なのでしょう？」

中腰の姿勢でニコリと微笑むお姉さんに、今度は逆の方へそっぽを
向くハチマキ娘。

ふわっとしたカールの金髪を指でイジりつつ、生意気そうに口を尖
らせていやがる。

なんかムカつくガキンちよだな……。

「おいコラ、おチビさんよオ。用が無いんだったら、ピンポン押すなよ
な。いささかにメーワクなんだよっ」

俺が言おうと、そいつはブルマの中からメモ帳とマジックペンを取り
出し、

『おまえ、ちんまい、あななど、おなじ』

下手クソな字で書かれた文を俺に突き出した。

「な……っ！ なんだとっ、こんガキやあ」

気色ばむ俺の肩に、お姉さんがなだめるように手を置いて、

「そんな言い方しちゃ、メツなのですよ。しゃっちゃんちゃんは、この
子よりきつとお姉さんなのですから、優しく……ね？」

「う、うう。すみません」

頷くしかあるめえ。

宿主には逆らえねえし……かなり不服だけでも。

一応、しゅんと肩を落としたりポーズを取っていると、

「ああっ！ わ、私ってばなんて偉そうなことを……っ！

こんな良い子を叱ってしまうなんて、そんな資格ないのです。申し訳ないのですっ」

急に抱きつかれてしまった。

どーして、そこで抱きつくっつう結論に至るんだ、この人は。

「ちよ、あの、苦しいですってば」

み、身動きが取れねえ。

例によつて巨大な胸プレスに目を白黒させていると、俺たちの様子をバカにしたツラで見ていたハチマキ娘が再度メモ帳に何かを書き始めた。

そして突き出されるメモ帳。

『さいふ、かりもの、きた』

「財布を借り物に来た、って書いてあんのか？」

「あ。もしかして、借り物競争に使うのではないのでしょうか？」

そいつは一瞬目を泳がせたあと、首肯した。

「んな馬鹿な。そんな借り物あるかってえの。ねえ、お姉さ——」

呆れた笑みを向けると、お姉さんはもぞもぞとスカートをまさぐつて、

「はいっ。お財布なのです。これをお使いくださいっ！」

差し出した途端、ムンズと掴んで、もの凄いスピードで走り去ってしまうハチマキ娘。

そしてそれを笑顔で手を振りながら見送るお姉さん。

……………。

な、なんてお人好しなんだ。

「ちよっどー！ ずえってエ、あいつ戻ってきませんよっ。ドロボーですって、ドロボー！」

お姉さんは食って掛かる俺の唇に、そつと人差し指をあてがうと、

「大丈夫……。大丈夫なのですよ。あの子は良い子さん。運動会が終わったら、きつと返しにやってきましたですつ。さくて、洒掃薪水！」
笑顔のまま踵を返して台所へ消えてしまった。
「いやいやいや。」

なんで良い子と言い切れるんだって。どこにも良い子要素なんて含まれてなかったじゃねーか。

むしろ悪い子要素の塊だったぜ。

「ちっ。追うぞ、シラガ娘！」

「んなの、言われなくたって！」

命の次に大事な金をパクられたんだ。是が非でも取り返さなくちゃならねえ。

猫を抱きかかえたまま玄関を飛び出すと、はるか前方にそいつを発見した。

もうあんなところまで……。なんつー脚力をしてやがんだ。

「てやんでえい、待ちやがれってんだ！」

叫ぶと、ハチマキ娘はこちらを振り返って、あつかんべーをしやがった。

む、ムツカつくぜ、つたく……。

全力で追いかけてみるが、まったくもって距離が縮まらねえ。

ガキンちよのスピードじゃねえぞ、ありやあ。

何度目の曲がり角だろうか、そこを曲がろうとしたとき、急にそいつが立ち止まった。

「はあ、はあ……。つ、ついに観念しやがったか。手間かけさせやがって」

さあ、大人しく財布を渡してもらおうかと続けようとした、その瞬間のことだ。

そいつの赤いハチマキが黄金色に輝き、頭上に赤黒い光輪が出現する。

「な、なんだあ!？」

あれよあれよという間に姿を変えるハチマキ娘。

やがて——俺の目の前には黄金のサメが立ちはだかっていた。

ホバーほどじゃないけれども、なんて大ききなんだ。

「このチビ、マジで模魔だったのか……」

「ああ。やっぱり、こいつは『ダツシユ・ザ・アナエル』に違いないな。

能力は『疾駆』で、ランクは確かEだったはずだ。捕まえりやあ、ダツシユの力が入るぜ」

「へえ。それはそれは、いささかに」

ランクE……ね。

ホバーがCだったから、それより二段階は弱い模魔つてことか。だったら、俺一人でもイケるかもしれねえ——

「クロエ、わりいけれども降りてくれ」

「おつ。シラガ娘つてば、やる気まんまんじゃねーか！」

「今回ばかりはな。ゼニのためなら、えんやこらだ」

それに、こいつの力——『疾駆』とやらも欲しいいな。

器用に尾ビレで立っていたそいつは、空中へ舞い上がり、一鳴きする。

ホバーよりもいくらか甲高い警報音——挑発のつもりだろうな。

いっひっひ、おもしれえ。すぐに吠え面かかせてやんぜ。

「変身する……っ！ 来やがれっ、霊鳴イイ！」

第三十三石：黄金のサメだ！シヤクヤクVSダツシユ

空に手をかざすと、スカートのポケットから石が飛び出してきた。

「あつ。そっか、そーいやポケットに入れてたんだっけか」

恥ずかしさのあまり、ぽりぽりと頬をかいてしまう。

ま、まあ、こんなこともあるさね。

「とりあえず、起動、起動つとくりやあ……試作型霊鳴石式、起動！」
石を胸にあて、続けて叫ぶ。

「イグリネイション——！」

あつという間に蒼杖へと変化したそれを、ブンブンと振り回し、

「行くぜえええ！ クロエええ！」

ラピスラズリに姿を変えたクロエを掴んで……掴んで、つて、アレ？

後ろを振り向くと、そこには困り顔の黒猫が一匹。

猫は空中で腕を組みつつ俺に、

「あのさ……オレとは合体できねえぞ。契約したモン同士じゃねーと
変身は無理だぜ」

「そーいうことは、はやく言——」

突然だった。

右脇のカーブミラーが俺のつま先数センチ先へ倒れる。

見ると、胸ビレを扉に突き刺したダツシユが笑つていやがった。い
びつな牙をむき出しにして……。

こ、こんちきしようめ。

「変身さえ出来りやあ、テメエなんざ恐くもなんとも——どわっ！」
言ってる途中だつてエのに、そいつは容赦なく胸ビレを振り下ろ
す。

飛び退いてかわしたはいいが、勢い余つてズッコけてしまった。

「い、いってっ」

巨大な影に、ハッと顔を上げると巨大なサメ——ダツシユが俺を見
下ろしていた。

鋭利な刃物のような胸ビレが、もう一度振り下ろされる。

や、やべえ……！

金色の一閃に目をつぶる俺。

なんて。

なんて、あっけない終わり方だ。

きっと、こんな小さい体なんざ、いとも簡単に引き裂かれてしまうんだろう。

ま。一瞬で死ぬるんなら、それも――

そう覚悟していたのだが、待てども攻撃が繰り出される気配がない。

「……………？」

そーっと目を開けてみると、そいつの胸ビレに黄緑色の氷柱が深々と突き刺さっているではないか。

凄まじい鳴き声を発しながら、塀に打ち付けられた胸ビレを必死に抜こうとしているダツシュ。

「こ、これは……………？」

「パパさん!!」

上空から俺を呼ぶ声。

見上げると、煌く羽をいっぱいに広げた巨大な蝶が舞っていた。

ま、まさか。

「コロ美、なのか？」

俺の問いには答えず、その怪獣は優雅に羽をはばたかせる。

すると、その羽からエメラルド色の鱗粉が出てきた。

いや、違うな。これは鱗粉というより、雪か？

それは地上十メートルあたりに突如として現れた緑色に輝く巨大な魔法陣に飛び込むと、次々に氷柱へと姿を変えていく。

そして――数多に広がったそれらは、ダツシュの体に容赦なく降り注いだ。

うつひよお、なんてド迫力なんですよ。つて、俺もここにいたら巻き添えを食らっちゃうんじゃないかねえのか？

……こりゃあ面白がつてる場合じゃねーな。

そう、慌てて退こうとした俺の目の前に、

「否定。大丈夫なんです。パパさんのところだけ降らないように調節してあるんです」

ゆつくりとツーサイドアップ園児が舞い降りた。

そいつは後ろ姿のまま、

「……パパさん、お怪我はないですか？」

「おうっ、コロ美サマのおかげでこのとーり、ピンピンしてるぜ！ いやー、それにしてもよオ。

お前さんってば、本気出したら強ええのな。びつくりしちまったぜ。びつくりしたつていえば、あの姿だ。あれがコロ美の本当の姿なんだな」

テンションがあがってしまい、つい饒舌に感動を語った俺に、

「強さは、否定。い、いつもは、こんなに力、出ないんです」

苦しそうにコロ美が答えた。

「どうしたんでイ？」

「なんでもないんです。パパさん、それより今のうちなんです。変身、しちゃうのです」

ダツシユを一瞥すると、苦しそうにのたうちまわっている。

たしかに、捕獲するなら今しかねえな……。

そいつの脇に転がっていた霊鳴を拾いあげ、俺は背を向けたままのチビチビに言った。

「わかりましたんで。恐縮だけれども——変身すつぞ、コロ美っ！」

「肯定……！」

小さな蝶に戻り、それからすぐさま宝石へと姿を変えたチビチビを掴む。

ん？　なんかこの宝石、すげえ熱くなってるな……。

まあ。とにもかくにも、と。

それを真上に放り投げて、俺は目を閉じた。

大丈夫——きつと、今度も成功する。いや、成功させてやるっ！

杖を掲げて、

「アイシクルパワーッ！」

叫ぶ。

「チエインジ・エメラルド——ビーストオオオ、イン!!」

魔宝石が割れ、破片が俺を取り囲む。

すっぽんぽんにむかれ、やがて魔法陣から水流が噴出したのだが……これが熱いのなんのって。

「あ、あちちちー!」

ま、前に変身したときは、こんなに熱くなかったぞ。

驚いていると、今度は薄緑色のパンツをはかされる——ハズだったのに、雪が舞い上がった。

次々にコスチュームが現れていく様子に、どんどんと顔が青ざめる俺。

「えっ、あの。ちよい、待てっ。パンツ、パンツの部分忘れてるぞコロ美!」

言うど、腕に白いアームカバーが装着される。

「いやいやいや、コレとかいらねえから、それよりもパンツ出してくれっ」

だが、叫んでも梨のつぶて。

どうやら、変身中は俺の声が届かないようだな。

トホホ……。

そうこうしているうちに、背中から蝶の羽が生まれ、すべての工程が終わる。

とりあえず踏ん張って羽を起動させ、空高く飛び上がっておくが――

やっぱり気になるもんで、ピラツとスカートをめくってみる。

「な、なんも無い」

うう……俺は男だけれども、いささかにこれは恥ずかしいぜ。

魔法を使ってパンツを出したいところだが、『水』や『氷』をどうアレンジすりゃあ出来上がるんだ。

顔を真っ赤にしてスカートを押さえていると、

『パ、パパさん、ダッシュユが逃げてるんですー!』

「えっ!?!」

コロナの声に、慌ててダッシュユの姿を探してみるが——どこを探し

ても見当たらない。

あんな巨大な体躯を見失うなんて！

こうなったら、飛びまわって探すしかねえよな……。

どうせ、今の俺の姿は誰の目にも映らないんだ。

恥ずかしかつてもいらねえ、とつとと捕まえてやる！

杖を肩に担ぐと、俺はダッシュを搜索するべく羽に魔力を注いだ。

第三十四石：見た目に惑わされるな！

「どこ行きやがった、あんにやろう」

十五分ほど空を翔けて探してみたのだけれども——
いない。

探せども探せども見つからないのだ。

あの巨体がだぜ？　こんなちっぽけな町に隠れるところなんてあるとは思えないが。

ふうむ。

まさか、もつと遠くまで行っちゃったとか？

俺が空中であぐらをかきながら考え込んでいると、

『パパさん。ダツシユは傷を負ってるんです。そこまで遠くに行けるとは思えないのです』

相も変わらず俺の心をサクツと読みとるチビチビ助。

「そりゃあ、まあそうだな……」

そう返して、俺はさっきの光景を思い出す。

本来の姿になったコロ美による容赦無しの氷柱マシンガン。

全身に氷柱が刺さり、のたうちまわるアイツの姿は、傷を負ったというよりも——

もはや、『致命傷』の領域だ。

ホバーを事も無げに喰らったクロエに、

ダツシユを平然と半殺しにしたコロナ。

模造やら七大やら括りは違えども、同じパンドラの箱から飛び出した『石』だつてえのに。

よくもまあ、アツサリと傷つけられるもんだ。

クロエ曰く、数百年ほど箱の中で一緒に過ごしていたんだろ。普通に考えりゃあ、それって仲間——

『否定。模造魔宝石と七大魔宝石は仲間じゃないんです。まったくの、別物なのです』

まあた、人の思考を勝手に読みやがって。

『ごめんなさい、なのです。でも、アレはコロナたちとは違う——違い

すぎる石なんです。

あんなお話の出来ない暴れん坊さんなんて、コロナと一緒にじゃないのです。絶対に違うんです』

拒絶。

自分と模魔を同列として考えて欲しくない、そんな拒絶がハッキリと伝わってくる。

いやはや。こういった話はとつと切り上げたほうが良さそうだとは、思うのだが……。

どうも引つかかる一点に、俺はつい訊いてしまった。

「あのよオ。お話の出来ないって言うけれども、さ。ホバーはともかく、ダツシユは会話通じたぞ?」

『ひ、否定。それはウソなんです』

「嘘じゃねえって。まあ、実際のところ声を出した会話はしてないのだけれども、

あいつ、メモ帳に文字を書いてたんだぜ。下手っぴで、しかも片言だが、一応読める日本語をさ」
そう。

クロエも模魔には心が無いとか言っていたが、ダツシユには心があるように思えるのだ。

ちゃんと俺とお姉さんの言葉を理解し、文字を書いて返事をしたんだからな。

どう考えても心があるだろ、あれは。

『あの大きなヒレで文字を書いたんですか? ありえないのです』

「違う違う。お前さんたちのような『仮の姿』つてえヤツ。金髪ちんちくりんのハチマキ娘つてな人型の時に書いてたんだ」

『そんな、まさか……。パ、パパさん。お姉ちゃまは、その仮の姿のダツシユを見て、なんて言ってたんですか?』

「ん。いや、別になんも言ってたかと思っぞ」

ダツシユがハチマキ娘からサメに戻ったときのリアクションを思い出してみるが、

あの猫はそれが当たり前のように淡々と能力やランクについて

語ってたぜ。

『そう、ですか』

それつきり黙ってしまおうコロ美。

はて。こいつは、さっきから何を驚いているんだろう。

もしかすると、あまり模魔について知らないのかもしれないな。チビチビだし。

ま、俺もよく知らねえケド、多分あいつらにも色んな種類があつて、中には心があるヤツや仮の姿になれるヤツもいるとか、そんなオチだろ。

つて、待てよ。仮の姿……？

もしかして、あいつ！

羽に力を入れて浮き上がった俺に、

『ど、どうしたんですか、パパさん』

「おそらく、ダツシユは仮の姿に化けていやがる。あの巨大なサメ状態じゃなくて、ちっこいハチマキ娘にな。だから、いくら探しても見つからなかったんだ」

+ + +

ほどなくして、そいつは見つかった。

俺たちの居た町よりも一駅ほど遠くの商店街。

「ビンゴ。よくこの方法を思い出したな、コロ美」

模魔の顔を思い浮かべて意識を集中させれば居場所がわかるかもしれない、というコロナのアドバイス。

霊獣はおおよその気配察知くらいしか出来ないが、強力な魔法少女ならば、それが出来るかもつつうこつて。

ダメもとでやってみたら見事出来たってワケだ。

ただし、条件としては『顔や姿を一度でも見たことがある模魔』であり、しかも正式な魔法使い状態でなければ出来ない——
つまり、ゆりなのような簡易変身タイプでは不可能な捜索方法らしい。

他にも簡易変身と正式変身との違いについてなんかベラベラと語っていたが、長つたらしいから全部忘れちゃった。

『さつすがパパさん。飲み込み早いんです。凄いんです。これが出来る魔法使いさんはそういないんです。やんややんやつ』

「いっひっひ。そう褒めてくれるなよ」

しかしながら、この探し方はいささかに体力を使うな。出来れば、あまり使いたくねえところだぜ……。

さてはて。

これからどうしたもんだかと、改めてダッシュを見下ろす俺。

そいつは、端の欠けたベンチにちよこんと座って、おなかを押さえていた。

ちなみに、俺ら（というか見た目には俺一人か）は、見つからないように真正面にあるクレープ屋の屋根上にへばりついている。

はあ。甘い匂いに腹が鳴りまくりだぜ……。

『あの子が本当にダッシュなんですか？ 確かに魔力は感じるのですが……』

「マジだったの。あのチビが金ピカのサメに変身したところを、ちやーんとこの目で見たんだぜ。」

それにしても、ずっと腹をさすってやがるが、どうしたのかね。やっぱコロ美の氷柱攻撃が効いてるのか？」

『多分、否定。模魔は丈夫なんです。少しぐらい傷ついてもヘーキなのです』

少しぐらい、か。

そうは言うけれどもよ。

体操服もブルマもハチマキもボロボロに引き裂かれちゃってるじゃねえか——

「なんだかなあ……」

呟いて、俺は肩をすくめる。

サメのような姿だったら別になんとも思わないんだけども、これはいささかにどうもね。

『周りの人、ダッシュを見てるんです』

「ホントだ」

仮の姿だから見えているのだろう、周りの通行人たちがギョツとし

た目でそいつを見ている。

そりやそうだ。

全身傷だらけの痛々しい姿をした小学生が一人でベンチに座っているんだ。

誰でも驚くだろうし、不思議がるだろうよ。

だが、驚き、不思議がるだけで誰もそいつに話しかけようとしないう。遠巻きに見て、気の毒にねえとヒソヒソ話をするおばちゃんや、まるで汚いモノでも見るかのような目で見ているサラリーマン。誰しもがハチマキ娘の座るベンチから距離をとって歩いている。そりや、そうだ――

あんな面倒そうなガキンちよ、誰も関わりたくないというのが本音だろう。

『あ、パパさん、ダツシユが動き出したのです。見つかつちやうんです』

「おっととー」

突然のコロナの声に、慌ててホフク後退する。

少ししてから、そーつと顔を出してみると、なんとそいつはお姉さんの財布を開けていやがった。

財布の中身と、正面のクレープ屋を交互に見るダツシユ。

『もしかして、お腹減ってるですかね？』

「あ、あのチビザメええ、他人様の金でテメエの腹を満たす気か！ ふてえヤロウだ！」

『わ。パパさん燃えてるんです』

見た目に惑わされるところだったぜ。所詮、模魔は模魔だ。化け物相手に同情なんてするもんじゃねえ。

さっさとあの泥棒ザメをぶっ倒して、財布を取り戻す！

俺は立ち上がって杖を構える。

とりあえず、杖に『水付与』の呪文をかけたかねえと。

「コロナが魂よ、我に翡翠の――」

「はわーっ！ な、なんとということでしょう……っ！」

聞き覚えのある少々ズレた口調に、俺は驚いて呪文を止めた。

げげっ、この声は……。

屋根上に立ったまま見下ろしてみると、そこには予想通り——ゆり
なのお姉さんが居た。

第三十五石：ダツシユとゆりなのお姉さん

彼女は腕に下げていた買い物袋を放り投げると、一目散にダツシユを抱きしめて、

「あわわわ。ど、どうしま……、あの、傷、傷が……っ！ 事故、事故なのですかっ!? 交通という名の！」

動転しているお姉さんを、冷ややかに見ているダツシユ。

その後ろからゆりながひよこつと顔を出した。

「どーしたの、お姉ちゃん。その子、知ってる子？」

「さ、さつき、運動会の、借り物競争で、リレーアンカーの、トップアスリートさんなのですっ！」

「……ふえ？」

それから、しばらくして。

そこには全身バンソウコウまみれのハチマキ娘が立っていた。

戸惑いというか、なんとも言えない微妙なツラでお姉さんをジッと見つめている。

「応急処置程度ですが……。これで、一安心なのです。本当にもう痛くないですか？ 病院、行かなくて大丈夫なのですか……？」

こくり、と頷いたダツシユに、ホツと胸を撫で下ろす仕草をするお姉さん。

『あの方、やっぱり侮れないんです』

「ぶっ飛んでるよな……色々。しっかし、危うく救急車を呼ばれるところだったぜ」

『ダツシユが止めてくれて良かったのです』

メモ帳で必死に『あなな、ヘーキ、よゆう』って書きまくってたからなあ。

とりあえず、ゆりなとコンタクトを取っておかねーと。

俺は小声で杖に水付与を施すと、なるべく早口で、

「ぶゆゆんぶゆん、ぷいぷいぷう。すいすい、『ミニスノードロツプ』っ」

唱えた途端、杖先から豆粒程度のガラス玉が生まれる。

それをボーッと立っているゆりなの額へ目掛けて……撃つ。

「ふえっ!」

よっしゃ。ナイスコントロール。って、ちよいとぼっかし強かったか？

痛そうに額を押さえてしやがみ込んでいるゆりなに、お姉さんが駆け寄る。

「こ、今度はゆっちゃんがつ! ど、ど、どうなってるのでしょ…!?!」

「うう、大丈夫。平気だよお姉ちゃん。ちよつち目にゴミが入っただけだもん。えへへ」

涙目で顔を上げたゆりなど、ふと目が合った。

「お、おいつす」

と。片手をあげて再会のポーズをとった俺に、

「むーっ。やったなあ〜」

ぷくーっとなら顔を膨らませるゆりな。

そいつの指先に黒い電流が凄まじい勢いで集まっていく。

あ、こりやヤバイ。

それを見た俺は慌てて首を振ると、そのガキんちよが模魔だということを必死にジェスチャーで伝える。

やがて、ようやく理解したゆりなが、

「ごめんね、お姉ちゃん! お友達と約束してたのすっかり忘れてたっ。先に帰ってもいい?」

「あらあら、約束はちゃんと守らないと、ですつ。行ってらっしゃいゆっちゃん」

「う、うん……ほんとに、ごめんね」

そそくさと裏路地に消えていくチビ助。

そしてすぐさま、空から杖に跨つての登場。

「にはは。しゃっちゃん、お待たせ」

「よう。中々にやってくれたじゃん」

言って、わざとらしくコスチュームをはたく俺。

ミニライトニングによる四つの小さな焦げ痕を見て、ゆりなが肩を

落とす。

「ごめんなさい……。飛び魔法ごっこかと思って、つい電気飛ばしちゃった」

「別にいいって。俺のミニ飴ちゃんが強すぎたのがいけねーんだし」

少し赤くなってるそいつの額をさすりながら言うと、

「えへへ。しゃっちゃんのお手で、ひんやりして気持ちイイ〜」

「ま。『水と氷の魔法使い』だからな、一応。そういえばクロエは一緒にじゃねえのか？」

杖の起動はしているみたいだが、格好がコスチューム姿ではなくて、普通の洋服なのだ。

「えっ。クーちゃん見てないよ？　しゃっちゃん達とお散歩にでも行っちゃったのかと思ってたよう」

「あれま。コロ美と合流するまでは一緒にいたんだけれども……。どこに行っちゃったんだか」

「しようがないや、ボクは変身無しで戦うよ」

「変身しないでも大丈夫なのか？」

「うん。魔法の威力は弱いし、防御力も全然なくなっちゃうってクーちゃんが言ってたけど、

捕獲呪文はこのままの姿でも出せるから、しゃっちゃんは攻撃に専念できるよ」

なるほどね。

素のままだと攻撃力も防御力もガタ落ちってことか。

「わかった。俺がオフエンスをやる。チビ助はバックアップ後、状況によつて捕獲準備をしてもらう」

「ほいつ、了解うけたまわりっ。えっと、それで——本当にあの子が魔魔さんなの？」

「マジさ。あいつは何番か忘れたが、ダツシユ・ザ・アナナエルつっう巨大な金ピカザメの模魔。」

見た目はガキだけでもさ。確かランクはEで、ホバーよりも二段階ほど弱い、」

「でも……」

と。

ゆりなが俺のセリフを遮ってダツシユを見る。

迷いの表情だった。

メモ帳でお姉さんと『会話』しているハチマキ娘。

お姉さんが心配をすれば、そいつは困ったようにペンを取る。

その繰り返し。

一見すると、ちよつと変な……いや、かなり変な子どもにみえる
ダツシユ。

しかしながら――

「間違えるなよ。あいつは、模魔だ。ランクは低いかもしれねえが、あいつを野放しにしているとこの街に被害が出る可能性がある」

俺は続けて言った。

「それだけじゃない。あいつはその名のとおり足が速いんだ。ここを壊したら他の街へ移動して暴れるかもしれねえ」

だから。

そうなる前にあいつを捕まえなければいけない。

だから、

捕まえるにはあいつを弱らせなければいけない。

だから――

弱らせるにはあいつを傷つけないといけない。

「あ……っ。今、お腹の音が聞こえたのです」

お姉さんが両手を叩いてダツシユのお腹に耳をあてる。

「やはり、鳴っているのですっ。もしかして、お腹が空いてしまわれた
のでしょうか？」

ペンを取ってメモ帳に書こうとしたダツシユだったが、どうやら紙
が切れてしまったらしい。

それを見たお姉さんは、につこり微笑むと、

「ここにはたくきんのお店屋さんがあります。何か、食べたいものが
あったら指差してみてくださいっ」

本当は指をさすのはイケナイことなのですが、と付け足すお姉さん。
ん。

ハチマキ娘は一瞬ためらった後、どうしても空腹に勝てないのだろうか、

こちら——クレープ屋をおずおずと指差す。

「このクレープ屋さんで、味はイチゴ生クリームですね。はいっ、了承うけたまわりますっ」

どこかで聞いたようなセリフを言ってお姉さんは第二の財布を取り出す。

アホ面の鳥が一面にプリントされたがま口財布。

それをカパツと開けて、お姉さんは固まった。

「は、はれ……っ？　　そういえば、さっきのお買い物でほとんど使い切ってしまったような……」

「そう、なのか？」

俺が訊くと、隣のチビ助が「うん」と頷いて、

「今日はすき焼きパーティーをしようって、予備のお金ぜんぶ使ってたもん」

「む、無茶をするなあ、あのお姉さんは」

『わーい。すき焼きパーチー楽しみなんです』

喜んでる場合かよ……。

ともかく。財布を取り返さないと明日以降の飯が無くなっちゃうことが判明したワケで。

もう少ししたらお姉さんが立ち去るだろうから、そのときに奇襲をかけるとするか。

先手必勝、つてね。杖を握る手に力が入る。

「窮余一策！　こんなこともあるのかと……じゃじゃーんのですっ！」

取り出されたのは古そうなお守りだった。

ダツシユが首を傾げて、俺も同時に首を傾げる。

「なんだありやあ」

「あれは、お姉ちゃんがいつも大事に持ってるお守りだよっ」

「交通安全とか、そういうヤツ？」

「うーん。ボクもあんまり知らなかったり。肌身離さず持ってるから

ジツクリ見たことないの」
へえ。

でも、そのお守りが、今この時において何の役に立つのだろうか。見ていると、お姉さんがお守りの中からクシャクシャの千円札を取り出して、

「少し、待っていてくださいねっ」

と、クレープ屋さんの中に消えていった。ああ、そういうことだったのか。

いささかに良い案だな。俺も、もしもの時用にお守りの一つでも買っておこうかねえ。

そんなことを考えていると、お姉さんがクレープを持って店から出てきた。

それをダツシユに手渡し、

「遠慮なさらずに、どぞ食べちゃってください。どんなお料理もそうですが、特にクレープは作りたてが一番美味しいのです」

しばらくお姉さんを見上げていたハチマキ娘は、ごくりと喉を鳴らすと、クレープに食らいつた。

あーあ、顔中クリームだらけにしちゃってまあ。

よっほど腹が減っていたんだろうな。

「ボクもお腹ぺっこぺこ……」

『コロナも、なんです……』

指をくわえて言うチビ助に、おそらくヨダレを垂らしながら言っているだろうチビチビ助。

当然、俺だって腹ぺこ状態だ。

みんな、朝ごはん食ってねえからなあ。

『はぐはぐ、もぐもぐ、がつがつ！』

「あらあらまあまあ、ちっちゃなお口で一生懸命食べてるんです。かわいい、ああ、なんて可愛らしいのでしょうか……っ！」

クレープのCMオフアーがきそうなほど美味そうに食うダツシユに、それを愛おしそうに見つめるお姉さん。

あ。夢中で食っている隙に頭を撫で始めたぞ。

ったく。

そいつは化け物だというのに。

そいつは敵だというのに……。

目の前の微笑ましい光景に、小さくため息をついていると、

「——ねえ、しゃっちゃん。捕まえるの、さ。食べ終わってからでもいいよね」

ぼそりと辛そうに言うチビ助。

「あの食いっぷりだ。すぐに、食い終わっちゃうだろう……」

「そっか。そう、だよね」

まったく、こいつはどこまで甘いのだろうか。

苦笑しつつ視線を戻すと、ダツシユが食べる手を止めていた。

どうしたんだ？　と思っていると、そいつの視線がゆっくりと上がって——

「……!?!」

ハチマキ娘と目が合う俺たち。

次の瞬間、凄まじいスピードで逃げ出すダツシユ。

しまった——気が抜けていたなんて、そんな言い訳をしている暇も無い。

「チイツ、跳躍する……っ！　ゆりな、行くぞ！」

「う、うん」

第三十六石：飛び出せつ、氷の鉄拳！

「クソッ！　なんて、すばしっこいヤツだ」

デパートの屋上に降り立つと、俺は霊鳴を強く握りしめた。

何度も、何度も逃げられやがって。なにが選ばれし魔法使いだ。情けねえ——

こんなことなら食い終わるまでノンキに待ってねエで、とつと魔法を撃つておけば良かったぜ。

そんな焦燥に駆られている俺に、

『……さすがはダッシュの看板背負ってるだけあるんです。あのスピードに対抗するにはコロナの羽だと力不足なのです。パパさんは悪くないんです』

「……………」

コロナの気遣いが胸に刺さる。

確かにハチマキ娘の足の速さはとんでもないかもしれないが、それでも追いつけないほどではない。

むしろ、追い越すくらいの力をチビチビ助の羽は持っている。

実際、さっき一度だけ接近することに成功したからな。だけれども、また徐々に引き離されていった。

その理由は——カーブ。

直線速度ならば俺の方がおそらく、いや確実に速い。

だがあいつはそれを知ってか知らでか、直線を嫌ってとにかく曲がりまくる。

やっと飴ちゃんの射程距離内に入ったかと思えば、くるりと方向転換をして俺のスピードを殺しにかかる、といった具合だ。

まあ、カーブの弱さについては今後の課題だな。今は飛びの練習してる時間もねえし。

『あれ？　そういえば旧魔法少女さんが居ないんです』

チビチビの声に俺はちらりと振り返る。

晴れ渡った青い空に、せつせと春の日差しとやらを生み出している太陽。

チビ助どころか鳥の一匹すら飛んでいないという、なんともスツキリした風景だった。

「ま、あんなだけ飛ばしたらついて来れねえだろ。羽に魔力がち込みまくったしよオ。つーか、ついて来られたらいささかにシヨックだぜ」
『そでした。パパさんの羽と旧魔法少女さんの杖とでは、出るスピードが違ったんです』

確かに羽と杖の差が一番デカイのかもしれないねえが……。

あのフラフラした飛びっぷりを見るに、杖で飛ぶこと自体にあまり慣れていないように思える。

とはいえ。あいつも魔法使いになったばかりらしいし、仕方ないっちゃ仕方ないか。

しかしながら、このどピーカンな天気——悪くねえな。こんな時じゃなければ、ゆっくり日向ぼっこことシヤレ込みたいところだけれども。

『肯定。気持ち良さそうなのです。パパさんと一緒に日向ぼっこしたいんです。旧魔法少女さんを待つあいだ、少しだけしちゃうのです』
「否定。また今度な」

『ぶうっ』

「ブーたれてもダメなもんはダメだつうの。ゆりなが来るまでに、ダツシュを見つけて少しでもダメージを与えておかねえとよオ」
そう。

今のあいつは変身をしていない素の状態。

攻撃力については俺がカバーするから別にいいとして、問題は防御力だ。

体中を纏うオーラで防いでいるのかコスチューム自体で防いでいるのかよく分からんが、どっちにしる、それらの無い生身で攻撃を食らったらひとたまりもないだろう。

たとえランクEのダツシュだとしても、だ。

護れるなら護ってやりたいところだけれども——正直、その自信が無い。俺だって成り立てだし。

……出来ることなら、なるべく戦闘に参加させたくねえ。

理想としては俺が先に瀕死までおいやって、最後に到着したチビ助に捕獲を任せるって流れだな。

「コロ美、恐縮だけれども気配察知をしてみてください。大体で構わねえぜ」

『肯定。えつと……なんとなくダツシユの気配を感じるんです。きつとまだこの街に居ると思うのです』

「オーケイ。そんじゃ、もう一回アレをやってみつか」

新魔法使い専用の搜索術。

しんどいからあまりやりたくないんだけど、そうも言ってもらえねえ。

目を閉じ、ダツシユのツラを思い出す。

……………。

現れたのは、顔いっぱいクリームをつけて美味しそうにクレープをほおぼるハチマキ娘――

違う。

違うって。

あのチビガキは仮の姿であって、本当の姿じゃねえんだよ。

俺はブンブンと頭を振って、サメ状態のダツシユを思い出した。

凶暴そうなツラに、不揃いに並ぶ歪なキバ。そして、鋭く冷たいウオーターブルーの目ん玉。

まっ、こんなところだろ。そんじゃ意識集中つと。

うーむ…………。

どうやら、前方には居ないようだな。するってえと、こっちか？

目を閉じたまま首を回してみると、暗闇の中に黄金色のモヤが出てきた。

コレだ。

いつひつひ。見つけたぜえ、サメちゃんよオ。そして、このモヤのデカさ――かなり近くにいやがるな。

今度こそ不意打ちをぶちかまして、

「……………んんっ？」

『どうしたんですか？』

「いや、なんか、どんどんモヤがデカくなっていつてるんだけれども……」

不思議に思い、目を開けてみると、目の前が金ピカ一色に染まっているではないか。

「ま、まさか」

おそろおそろ見上げた先には——俺を静かに睨みつけている金色のサメ、ダツシユ!

「うおわっ!?!」

俺はすぐさま羽に魔力を注ぐと、後方へと羽ばたいた。

ビ、ビビらせやがってよオ。

速まる鼓動を落ち着かせるために、大きく深呼吸。続けて杖を持ち直す。

水付与は——よし、まだ効いてるな。

それにしても、と俺は微動だにしないダツシユへ目を向ける。

なんで、あいつの方からやって来やがったんだ?

逃げるのに飽きたのか、はたまた逆に不意打ちをかまそうとしたのか。

いや、んなことゴチャゴチャ考えてたらまた逃げられちゃうってエの。

これはチャンスだ。四の五の言わずに攻撃あるのみってなモンで!

「恐縮だけでも、いかせてもらおうぜっ!　ぷくゆんぷゆん、ぷいぷいい〜ぷう!」

一発目と叫びたら、やっぱコレつきやねえ。

「すいすい、『スノードロップ』っ」

杖からポコポコ飛び出す、無数の氷弾。

よーし、当たってる当たってる。

俺は飴マシンガンを出したまま、羽を広げて飛び上がり、

「いっひっひ。こいつもくらいなア!　追加攻撃だつ、ぷゆゆんぷゆん、ぷいぷいー……」

空いている左手をダツシユに向けて突き出す。

ゆりながやっていたように、杖を持っていない手のほうでも魔法が出せるハズだ。

俺だって。

俺だって、やってみせる。

「ふうー！」

前半の呪文を唱えた直後、俺のコブシ周りに流れていた緑色のオーラが、いつそう分厚くなる。

いいねエ、実にいい。

ニヤリと笑い、俺は力いっぱいコブシを握った。

ますます分厚いオーラを宿した左手を、グンツと引いて、

「飛び出せえええ、すいすい、『フリーズナツクル』っ!!」

後半の呪文と同時に正拳突きを繰り出す。

すると、俺のコブシと同じ形をしたゼリー状の塊がプルンと現れた。

そしてそれは瞬く間にダツシユへと突っ込んで……いかない!?

第三十七石：余裕の勝利!?

「な、なにしてやがんだテメエ！ 飛ぶんだよ、あいつに体当たりすんのっ」

俺の怒声に、ぷゆゆつと怯えるように身を震わせるマスカットゼリー。

そいつは空中で静止したまま一向に動こうとしやがらねえ。

つたく、ご主人様に反抗するたア新米魔法のクセに良い度胸してやがるぜ。

あーあ。かっちょよくロケットパンチみたいに飛ばす予定だったのによオ……。

『パパさん。こんな時はふーふー、なのです。後押ししてあげるんです』

「ふーふー、だあ?」

あ。

そこで俺は思い出す。

昨日のゆりなどコロナの一戦で、コロナが繰り出したあの魔法を。

そうか、ふーふーつてのは『氷の吐息』のことだな。

ゼリーを維持するべく左手はそのまま、飴ちゃんもおろそかにしないよう右手に再度魔力を注ぐ。

吐息、ね……出来るか分からねエが、両手が塞がってる今、それしか選択肢はなさそうだな。

「オーケイ、やってみますんで。んじや、いくぜえええ……口から吹雪！ すいすい『アイスブレス』っ」

大きく息を吸い込み、そして限界まで達したところで一気にフウーツと吐く。

おお、すつげえ、マジで出たぞ。

氷の粒がちらほら混ざっているエメラルドグリーンの吐息。

キラキラと輝いたそれは一瞬でフリーズナツクルを凍らせ——勢い良く飛ばした。

「おっとっと」

明後日の方向へ飛んでいこうとしたそいつを、左手をクイツと曲げて軌道修正。

すると、曲げた方向にナツクルが飛んでいくではないか。

スノードロップに押され、身動きの取れないダツシユに容赦なくぶつかっていく凍ったマスカットゼリー。

いやはや。さつきまであんなに怯えていたというのに、子どもの成長ってエのは早いもんだね。パパさん感激だ。

それにしても、と俺はふと思う。

左手の動きと同じようにナツクルが動くつてエことは――

「……これは、もしかすると、もしかするつてねエ！」

試しにシャドーボクシングよろしく左コブシを振ってみる。

やはり思ったとおりだ。同じように氷ゼリーも動きやがる。

やられるがままにヒレガードしているダツシユに、俺は確信の笑みを浮かべた。

イケる……倒せるぞ！

「ウラウラウラウラーツ！ どうした、どうしたア!？」

ジャブ、ジャブ、フックからのストレート。

うっひよお、気持ち良いねえ！

やがてガードが崩れたそいつの土手っ腹に、

「恐縮だけでも、ここまでだね」

トドメのボディブローをかます。

巨大ザメ、陥落。

声も無く落下していくダツシユを見下ろして、俺は勝利の味を噛み締めていた。

へへっ、変身さえ出来りやあ、ザツとこんなもんよ。

おっ。今日一番の大将が戻ってきたな。

俺の周りを楽しそうに飛び回るフリーズナツクルを捕まえて、

「なんでえい、褒めてほしいのかイ?」

いつの間にか氷がとけていたそいつは、ぷるんと一回だけ震えて答える。

おそらくイエスって意味だらうな。

「よしよし、良い子良い子。エライぞー、お前さんは」

撫でてみると、ぶくぶくと沸騰する音を立てて、たちまち消えてしまった。

「あんれま。もしかしてノーって意味だったのか」

『否定。嬉しすぎて気化しちゃうくらい照れてしまったんです』

「ふうん。撫でられるのがそんなに嬉しいのかねエ？」

『それはもう！ ご主人様に撫でてもらえるなんて、それ以上のご褒美はないんですっ』

へー。

じゃあ、あとで飴ちゃんも撫でておこうかね。機嫌悪くされちゃあ、一番困る魔法だし。

しっかしながらよオ……。

「本当に想像次第でなんでも作れるんだから、スゲエよな魔法ってやつア」

しみじみと言った俺に、

『……ほんとはありえないのです。成ったばかりなのに、ここまで色んな魔法を上手く編み出せるなんて。』

いくら新魔法少女さんと言えど、こんなのっておかしいんです』
コロナが苦々しくつぶやく。

むっ。なんだよ、こいつまでクロエみたいなこと言いやがって。

「ありえなくねーっての。俺はピースに選ばれた程の強力な魔法使いなんだろう？ これくらい出来てトーゼンだぜー！」

『そうですね……』

そんなやり取りをしていると、ゆりながやってきた。

杖に跨って、ゼーゼーと息を切らしている。

こりやまた、ヒドい状態だな。俺はボサボサになっちまったそいつの髪形を整えながら笑って、

「よっ、遅かったなチビ助。わりいが、スピード勝負は俺の勝ちってことぢ」

「はあ、はあ……。しゃっちゃん速すぎい。ボク、もうヘトヘトだよお……。ちよつち休まないと、ま、魔法出せないかも」

「オーケイ。ノンビリ休んでもらって構わないぜ。どうせ、あとは捕獲するだけだからよ」

「ふえ?」

「ほれっ、アレを見てみそ」

交差点のど真ん中で気絶しているダツシユを指差すと、ゆりなが目を丸くした。

「しゃ、しゃっちゃん!」

凄いな、チヨーっおい最強じゃん! とセリフが続くと思い、したり顔でふんぞり返っていた俺にチビ助がこう叫んだ。

「油断しちゃダメっ」

「……へ?」

どういうこっちゃ。

倒れているであろう、そいつを見下ろしたその時、

光の輪が高速回転する音と共に、ウォーターブルーの瞳が真紅に染まった。

第三十八石：反撃の咆哮

この現象、あのときのホバーとまったく一緒だ。

……いささかにマズイかもしれないねーな。

「しゃっちゃん、ど、どうしよう」

「さあて。どうしたモンだかねエ」

お互いに顔を見合わせて、困っちゃいましたとばかりに眉を寄せ
る。

そんな軽い問題でもないのだけれども。

本当に——どうしたものか。

「おそらくホバーみたいにムチャクチャな攻撃をしてくるだろうよ」

対象の脳裏に『最期』の映像を叩きつける精神干渉波。

魔力を吸い取るだけの攻撃だとはいえ、もうあんな不快な思いは二
度とゴメンだ。

こいつも同じ攻撃をするかどうか分からないが……用心するに越
したことはない。

「でも、サメさんちよっただけ苦しそうに見えるよ?」

「苦しそう、って」

よく見てみると、高速回転していたハズの光輪が、錆びついた車輪
のような鈍い動きになっていた。

それに、紅く染まったモノアイも光をどんどん失っている。

「ホントだ。こりゃあ、一体どうしちゃったんだ?」

「ね。きつともう、戦う力が残って無いのかも」

だから捕獲準備をしよう、そう言い出したゆりなに、

「いや。念には念を入れておいたほうがいい。もう少し弱らせておく
ぜ」

言つて、俺は杖を振りかざす。

どうせ、気を抜いたところで背中を撃つか、はたまた逃げ出す魂胆
だろうよ——そうはさせるかってえの。

「ダストを使う。あぶねえから、チビ助は下がってなア」

「う、うん……」

スイーっと、ゆりなが下がったところで、

「ぷくゆゆん、ぷゆん。ぷいぷい〜」

ぐっ。魔法を連発しすぎたせいかな、頭に鋭い痛みが走る。

しかしながら、それでも――！

「ふうっ！」

俺しか。

今まともに魔法を撃てるヤツは俺しかないんだっての。

「てやんでえいつ。こおれで、どうだああ！ すいすい、『エメラルドダスト』ッ！」

霊鳴がピカツと光り、やがて幾つもの結晶がダツシユめがけて飛んでいく。

自分で言うのもなんだが、やっぱスゲエ魔法だよなあコレ。

他とは雲泥の差。俺の中で一番の大魔法かも。発動に少しだけ時間がかかっちゃうのが難点だけれども。

「へくちっ」

見やると、ゆりなが手をこすり合わせてガタガタ震えていた。

そんなにクシヤミするほど寒いかねエ？ って、俺と違って変身してないんだったな。

生身でこの大魔法の近くは、いささかにキツイか。

しゃあねえ。なるべくそいつから離れようと羽を動かし始めたとき、

「痛ッー」

いつてええ。さらに頭痛がひどくなりやがった。

魔法撃ちまくった上に、この大魔法――さすがに無理があったか。杖を振り上げたまま頭を押さえていると、ゆりながすっ飛んできた。

そいつは、心配そうに俺の顔を覗き込んで、

「しゃっちゃん、だいじょう……ぶ、ぶ、ぶええつくしゅー！」

フルパワーのクシヤミをぶちかましやがった。

「こ、これはこれは。お前さんも水系の魔法が使えたとはねエ……知らなかったぜ」

顔中ベトベトのまま言う俺に、

「きやつ。ぐ、ごめんねっ」

慌ててハンケチを取り出して拭うゆりな。

ほお。こういうのちゃんと持ち歩いてるなんて、さすが現役小学生。エライエライ。

そう感心していると、ピタリとそいつの手が止まった。

「迷惑かけっぱなしだね、ボク。変身出来ないし、しゃっちゃんに気を使わせちゃうし……」

すかさずデコピン一つ。

「バーカ。そもそも、あのニヤンちくしょうがどっか行っちゃまうからいけねーんだ。チビ助は悪くねえっての」

「……えへへっ。しゃっちゃんって、やさしくよね」
むっ。

「言っておくがなア。俺は優しくねーし、別におめえさんに気を使つた覚えもねえ！ そこんところ間違えんなよっ」

「はーい、わかりましたんでっ」

ったく。ケロツと元気になりやがってよオ。舌打ちをしつつ、杖を振って水切り。

さてはて。やつこさんの様子は、と。

あれまあ……雪霧が濃すぎてよく見えねーな。ちと、大げさに撃ちすぎたか。

つつても、エメラルドダストに限っては手加減のしようが無いからなあ。どうしても魔力をたくさん使っちゃまう。

ふうむ。カテゴリー分けするなら、切り札ないしはトドメ粹ってところかね。

「しゃっちゃんの『エメラルドダスト』って、ちよー強くてキレイでカッコいいよね！

いいなあ。ボクもそういう魔法を使ってみたいよう。どがーんばごーんばりばりくっ、スペシヤルライトニング！ みたいなのっ」

「よく言うぜ。俺のダストより、もつとスゲー魔法使ってたじゃん。ほら、」

と、言いかけて俺は口ごもる。

もしかして、こいつ……ホバーを斃した時のこと覚えてなかったりして。

別人のような赤いゆりな。クロエ曰く、『裏・集束』状態。

その状態になつちまつたことを覚えてないのだとしたら、軽はずみに言うのも――

「ふえ。しゃっちゃん、もっと凄い魔法ってなあに？」

「あー。いや、ちよつと勘違いしてたぜ。それより、そろそろ捕獲準備に入ってもらおうかね。おめえさんが風邪ひかねエうちに、よ」

「残念でしたっ。ボク、バカだから風邪ひかないもくん」

につこりブイサインを決めて、杖から飛び降りるチビ助。

そして、そいつが屋上の端っこに立ち、捕獲呪文の詠唱を開始した瞬間――

先ほどとは違うピリツとした頭痛と共に、モノクロの映像が俺の頭に入ってくる。

これは。

これは、なんだ？

デパートの屋上。ドレスに身を包んだポニーテールの少女。その後ろに、ドレスの裾を掴んで震える長い髪の少女。

それはまるで昔のサイレント映画のようだった。

一体なんなのかと、訝しげにそれを観ていたが――

次の映像が飛び込んできたと同時に、俺は無意識のうちに空を蹴っていた。

「避けろっ、ゆりな!!」

叫んで、チビ助の襟首を強く引っ張る。

「えっ……きやあー」

後方へとぶつ飛ばされたそいつを背に、俺はおそろおそろ下を覗き込んだ。

「――なにも、起きない？」

倒れたままピクリとも動かないダツシュ。

それを確かめて、俺は安堵のため息をついた。

「な、なんでえい。驚かせやがってよ……」

ヘナヘナとその場に座り込んでいると、ぷんすこ怒ったゆりながやってきた。

「もーっ。しゅっちゃん、いきなり何するの！ 変身したしゅっちゃんの方って、めっちゃんこ強いんだよっ」

「ははっ、わりいわりい。チビ助の背中見てたら、なんかムショーに引っ張ってみたいくなっさア。ま、気にしなさんなっ」

「気にするもん！ 今度、魔法中に引っ張りっこしたらカミナリチョップ百連発の刑っ」

フツッに怖そうな刑だった。ていうか、引っ張っただけでその刑は重過ぎるだろ。

……まあ、何も起こらなくて良かったぜ。

もし、チビ助がああ映像のようなことになっちまったらと思うと――

ん？ ああ映像のようなことって、なんだっけ……。

ありやりや。さっぱり思い出せねえぞ。こんなピチピチな若さでボケるはずがないと思うのだけれども。

『お考え中のところゴメンなのです。パパさん。ダツシユ、起きちゃったんです』

顔を上げると、俺たちの目の前に巨大ザメが浮かんでいた。

強面で俺を睨みつけるという、いつかと同じパターン。

「……あんれまあ。寝起きサイアクって感じだねエ」

ギョロギョロと左右行ったり来たりしている真紅の単眼。そして、激しく回転する光輪。

あれだけエメラルドダストをぶちかましたというのに、こうもピンピンしているとは、ね。

だが、と俺は発狂モードのダツシユに薄く笑う。

「ま。そう何度も、ビビってられるかってハナシ」

また反撃出来ないくらいに、怒涛の連続魔法かましてやるぜ！

杖をそいつの口の中に向けて、

「イライラしたときは、甘いお菓子っつね。ほおれ、飴ちゃんでも喰い

ねエ！　ぷくゆゆん、ぶゆんっ、ぷいぷいぷう。すいすい、『スノードロップ』！」

しかし、うんともすんとも言わない霊鳴。

「あ、あれ？」

困惑していると、杖から大量の蒸気が噴きだした。

「試作型ちゃんよオ、どうしたんでイ？　恐縮だけれども、蒸気よりもスノードロップ出してもらえねえかな」

もしかして呪文を間違えたのかなと、もう一度魔法を唱えた直後。

耳をつんざくような高音と共に、『error』やら『供給限界』、『充填希望』、『再起動迄残参拾秒』などの赤い文字が視界を埋め尽くした。ウソだろ。まさか、これって。

慌てて柄先の宝石へ視線を移すと、中に入っていた水がキレイさっぱりと無くなっていった。

「れ、霊薬が切れた……!?!」

サーっと一瞬で血の気が引いていくのが分かる。やっちゃった。

なに調子に乗ってボコス力魔法撃ちまくってたよ、俺。

チビ助が変身出来ない今、俺まで魔法使えなくなっちゃったら、終わりだろうが。

終わっちゃまうだろうが——

「ちくしょう……」

唇を噛んでいると、突然、頭上から歪んだサイレンの音が鳴り響く。それは反撃を告げる咆哮だった。

「くっー」

ゆらりと近づき、口を大きく開けるダツシユ。

まさかこいつ——俺を喰らう気か!?

第三十九石：追いかけてアナナエル

「ま、待て待て。見てみる、俺なんて骨と皮だけだぜ？　喰ってもウマくねえって」

『……………』

「聞く耳持たず、ってヤツカイ」

ダメだ。逃げようにも、こ、腰があがらねえ。

こうなつたら、一か八かだ。

「式式！　頼む、あと一回だけでいいから魔法を出してくれ……っ」

そう霊鳴を握り締めてみるが、『霊薬残量無』『再起動不可能』『強制終了』と再び赤い警告画面が視界を覆う。

そして、悲しげな終了音と共にただの石ころへと戻ってしまう霊鳴石。

何度、起動を試みようとも光は失われたまま——完全に魔力が尽きた証拠だった。

「も、もう終わりだ……」

観念するしかない、と。石を抱きしめてうな垂れた時、

「ううん、終わらせないよ」

優しい声。

力無く顔をあげると、俺の前にゆりなが立っていた。

杖を両手持ちにしたそいつは、気丈にダツシュを睨みつけている。

「ダツシュちゃん。これ以上しゃっちゃんを恐がらせちゃ、メツだよ」

一陣の風が、ゆりなの長い黒髪をふわりと舞い上げる。

その後ろ姿を見上げ、俺は昨日のホバー戦を思い出していた。

浮かび上がる髪。赤く発光する髪。

そして、熱く燃ゆる髪へと段階を踏んだ後に繰り出されるは、あの残酷な魔法……。

また、こいつに。

また、あいつに。

……『赤いゆりな』に頼らないといけないのか。

俺が不安げな視線を送っていると、不意にゆりながこちらを向い

た。

そしてニコつと微笑むと、再びダツシユへ向き直り、

「お腹が空いたんなら、しゃっちゃんのだわりにボクを食べて。でも、ボクを食べたらしゃっちゃんは見逃してあげてね」

「バ、バカヤロウツ、なんてこと言いやがるチビ助！」

しかし、更にそいつは続ける。

「にはは。その前に、ちよっちだけ。ちよっちだけキミとお話したいなあ、なーんちて」

テへへと頭をかいて笑うゆりなに、激しく喉を鳴らすダツシユ。

ハチマキ娘状態ならばまだしも、相手は本来の姿——それも発狂モードになっちまってんだ。

もはや、話しをしたいなんてそんな悠長な事を言っただけで状況じゃねエって。

いや、もしかしたら油断したところで全力の魔法をぶちかますって思惑かもしれないが……。

「あ、ごめんね。この杖、恐いよね」

言っただけで霊冥を足元に置くチビ助。

「おいおい。まさか、マジで説得するつもりなのか？」

「ほら。これでもう恐くないよっ」

手をパタパタ振って、笑顔満開。

対するダツシユは、好機だとばかりにニヤリと口角を上げ、ゆりなの頭を喰らおうと巨大な口を開ける。

「ひっ！」

も、もう見てられねエ……！！

目を背けようとした次の瞬間、

「大丈夫——恐くないよ。もう、大丈夫。キミを傷つける人はココにいないよ」

その声にハッと動きを止める巨大ザメ。

真紅へと染まりきっていた単眼が明滅を始め、頭上の光輪もそれに伴い回転速度を落としていく。

やや身を退いたダツシユに、ゆりなは笑顔のまま両手を差し出し

た。

「不思議に思ってたんだ。どうしてキミはボク達に攻撃をしないんだろうって。いつでも攻撃できるチャンスがあったのに、キミは威嚇だけで何もしてこなかった……」

その言葉に俺は驚いた。

こいつが攻撃をしなかったって、そんなバカな。

俺は何度も殺されかけたぞ……いや、待てよ。

そういえばと、ダツシュの行動を思い出してみる。

最初追いかけたとき、俺を直接攻撃せずに、わざわざカーブミラーを壊してビビらせていたような。

その次のヒレ攻撃もコロ美に助けられはしたが、もしかしたら初めから外すつもりでいたのかもしれない。

そして、模魔を探す搜索術をしていた際になぜか近づいてきたダツシュだ。

あいつは俺を睨みつけるだけで微動だにせず、繰り出される魔法をただひたすらに防御するだけだった。

反撃をしないで、ジツと俺の魔法を耐えるダツシュ——

「……さつき、ダツシュちゃんが怒ったとき、さ。苦しそうにしてたよね」

動揺しているのだろうか、明滅するモノアイが右へとスライドする。

「きつと。それってきつと、もしかしてボク達を傷つけないのかになって。怒っちゃうのを我慢していたのかなって。」

えへへっ、都合が良い事を言っちゃってるのかもしれないけど、全然違うのかもしれないけど、

でもね、とゆりなは笑顔のまま。

「模魔ちゃんとお話しが出来るのなら、言葉が通じるのなら。可能性が、少しでもあるのなら……」

ゆっくりと——

「ボクはキミを信じたいから。キミの優しさをムダにしたくないから」

その時だった。

ダツシユの赤黒い光輪が一瞬にして青白く染まっっていく。明滅していた瞳も、元の色へと戻り、そして――

『ごめん、なさい。あなな、あななは……』

ハチマキ娘へと姿を変えたダツシユがそこに立っていた。

ぽろぽろと大粒の涙を流して、体操服の裾をギュツと握っている。

「うん、大丈夫。解ってるよ」

言ってアナナエルを抱きしめるゆりな。

よしよしと、ボサボサになった金髪を撫でて、

「にやははっ。ダツシユちゃんの声、めっちゃんこプリチーじゃんっ

！もったいないよう、喋らないなんて。ね、しゃっちゃんもそう思

うでしょ?」

えっ！

いや、そんな急に振られましたも。

目の前の展開についていくのがやっとだった俺は、つい慌てて、

「お、おう。っーか、声が出せるんなら最初から出せばよかつたじゃ

ねーか。メモ帳なんて面倒なモン使わないでさア」

刺激するような事を言ってしまった。

な、なに言ってるんだ俺は。またブチ切れたらどうすんだよ……。今

度こそ本当に喰われちゃうかもしれないのに。

だが、俺のそんな心配をよそに、

『はじめて、こえ、でたの』

ハチマキ娘はビクビクと答えた。

「そ、そうだったのか」

言った直後、すぐさまゆりなの腕の中へと顔をうずめるダツシユ。

「……どうしたんでエい。あんなに小生意気だったのに、しおらしく

なっちまっつてさア。お前さんらしくないぞ」

『ごめん、なさい』

「いや、別に謝ることじゃあないんだけど。むしろそっちのほうが

が良い、みたいな」

『……………』

「……………」

気まずい沈黙がお互いの間に流れる。

ううっ。なにやら、どうも。これは何と言ったらいいものか。

アレだな。俺、スゲエ嫌われちまったみたいだな。

それにしても。

さっきまでビクビクしていたのはこっちの方だったのに、いつの間に形勢逆転しちまったんだか。

いや——形勢逆転も何も、最初からこいつは俺たちとやりあう気がなかったんだよな。

こいつは、ただ単純に俺から逃げていただけ……。

ん？

「そういえば、あの時どうして俺に近づいてきたんだ？」

ふと気になった俺は訊ねてみる。

たしか、搜索術を試みたあの時だけは、逃げずに俺のもとへ近づいてきたような。

攻撃をする為ではないとすれば、一体なんのために？

『こ、これ』

そう言っつてハチマキ娘が差し出したのは財布だった。

「あっ」

すっかり忘れてた。そういや、財布を盗まれたから追いかけてたんだっけか。

と。そんなことをぼんやりと思ってから、気付いた。

俺がしたことを。してしまったことを。

「……もしかして、あの時俺に近づいてきたのは、この財布を返すためだったのか？」

コクリ、と小さく頷くダツシユ。

「しやつちゃん……」

ゆりなの俺を呼ぶ声。

いつもと同じトーンのハズなのに、どうしてだろうか俺を責めているように聞こえる。

違う。責めているのはゆりなじやない、俺自身だ。

だから、そう聞こえたんだ――

「すまねえ！」

俺はダツシユに頭を下げた。

「そうとは知らずに、魔法撃ちまくってすまんっ！ 痛い思いさせてすまんっ！」

ひたすら謝った。

あの時すでにダツシユは心を入れ替えていたというのに。気付いてやれなかったなんて――情けねエ。

数分前の調子こいてた自分を殴ってやりたい気分だ……。

『……おまえさん、らしくないし』

ポンツと頭に手を置かれる。

見上げると、ハチマキ娘の顔が目の前にあつた。

俺と目が合うと、そいつは顔を真っ赤にして、

『悪いの、あなな、だし。おまえさん、悪くないし』

でも、ちよつと痛かったかも……だけど、と付け加えてそっぽを向く。

「へへっ、ちよつとは言ってくれるじゃん」

『じゃあ、へーき、よゆう。蚊に刺されたてーど』

「そ、そこまで言うかア!?!」

『ふんっ』

腕を組んでもう一度そっぽを向きやがった。

こいつ、また生意気になりやがって！

しかも今度は口が利けるようになったからか、生意気レベルが数段上がってる気がするぜ。

こんなにやろう……。

俺がコブシをわなわなと震わせていると、

『だから、気にしないで、いいし』

言っただけでさらに顔を赤らめる。

気のせいかな、そいつの頭から汗が飛びまくってるように見えるのだけれども。

「……………」

『……………』

再び飛び交う三点リーダー。

だが先ほどとは違い、気まずい沈黙ではなかった。

気まずいというより、気恥ずかしい。略して気はずいというよう
な。

そんな沈黙をひとしきり飛ばしあつた後、俺たちはお互い笑つた。
はにかむように。

「でへへー。二人とも、可愛いにやあ」

「!?」

出し抜けに声をかけられ、慌てて視線を逸らす俺たち。

「むふふ。顔まっかつか。つんつんっーん」

とろけるような顔をして、俺とダツシユの頬を交互に突きはじめる
チビ助。

「か、からかうんじゃないねエ」

『あうう』

やがて突くのに満足したのか、そいつはふと真面目な口調で、

「でもさ、ダツシユちゃん。本当にそれでいいのかな？」

と言つた。

『え……………?』

振り向いたハチマキ娘を、まっすぐに見つめて、

「たしかに、ボクらにお財布を返せばお姉ちゃんに届くのかもしれな
いけど。それで、いいと思う?」

『……………』

「キミの手から直接返した方がお姉ちゃん喜ぶと思うなあ」

『……………』

うつむいたまま黙ってしまふ金髪娘に、ゆりなは少し寂しそうに、

「困らせるようなこと言っちゃってごめんね。にはは。だいじょーぶ
だよつ。ボクらが、ちゃんとお姉ちゃんに返すから、」

言い掛けて、止まる。

ダツシユがチビ助のスカートを引っ張つたからだ。

そして、ハチマキ娘は言つた。

『あなたが返す。あなた、あの人にもう一度会いたいから。会って謝りたいから……』

そう、ハッキリとした口調で。

第四十石：式式とダツシュ

駅前のベンチ。

そこに、買い物袋を置いて途方に暮れている儂げな美少女がいた——というか、ゆりなお姉さんだった。

彼女は柏と書かれた駅の看板を見上げて、

「どうしましょう……。お金、全部使っちゃいました。うう、またまた電車賃のこと忘れてましたあ。これで三十八回目です……。っ」

泣きそうだった。いや、すでに泣いていた。

どんよりと不幸オーラを放っているお姉さんを物陰からこっそり見ていたのだが——いよいよ忍びなくなってきたぞ。

なので、

「さてはて、やっこさん泣いちゃいましたが、どうするんでエイ。いつまでもウジウジしてたら、日が暮れちゃうぜ」

俺の背中に隠れている鮫娘に言ってみるが、そいつは羽を掴んだまま石のように動かない。

「っーか、羽にも痛覚があるもんで……。そんなに強く握られると、いささかに痛いだけでも。」

「ダツシュちゃん、しんこきゅー、しんこきゅー。ひっひ、ふう」
「それ深呼吸吸じやなくてラマーズ法だつての。大体、そんなコトしたって無駄なの。行くなら、さっさと行く！ 鮫らしくねえぞ。がぶつといけ、がぶつとよオ」

『うっ。さ、鮫は本当はそんなに凶暴じゃないし、誤解だし。人間の勝手な思い込みだし』

「あーそう。ほれ、だしだし言ってねーで、行った行った」

『あにやつー！』

ブルマをグイッと押すと、そいつは前につんのめって——
「わわ……。っ!?!」

お姉さんの胸元へ激しいダイブをかました。

きよとんと見つめ合う二人。

そしてすぐに、

「お元気そうだなによりですっ!」

ダツシユを抱きしめた。

さつきまでのどんより雲はどこへやら、晴れやかないつものお姉さんに戻っていた。

やれやれ……。どうにかこうにか、収まるところに収まったよう
で。

「もー。しゃっちゃん、乱暴は良くないよう」

「いっひっひ。優しいだけじゃあダメなの。ときには強引にでも背中を押しやらねーと」

まあ、押したのはケツだけれども。

「ふわあ。なんだか、しゃっちゃんってお父さんみたい」

「失礼なことを言ってくれるぜ。俺ア、まだ十四歳なのによオ」

「えっ、そうだったの!?!」

「そうだったのって……。あれ。言ってなかったけか?」

見た目はこんなだけけれども、中身は中学二年生の男だぜ」

おかしいな。前にちゃんと説いたような覚えがあるのだが——勘違いだったか。

「男の子で年上だっていうのは知ってたけど、そんなに離れてたなんてビックリ。えっと、ボクが九歳だから……。い、五つも離れてる!」

「うん、そーなるな」

「じゃあ、しゃっちゃんさんって呼んだほうがいいかな……。あつ、じゃなかった。いいでしょうか?」

すかさずデコピン、そしてチョップの追加攻撃。

「ふ、ふえええっ!?!」

二連続コンボの点数を稼いだ俺は、涙目で頭を押さえてるチビ助に向かつて、

「今度、そんなめんどくせエ呼び方したらコオリビンタ百連発の刑な」
「フツーに怖そうな刑だよっ!」

デジャヴ。しかも、かなり最近の。

「いいじゃん、カミナリチョップは俺の弱点属性なんだぞ。チビ助はどうせ氷の耐性もってるんだから喰らってもそんなに痛くないって」

「耐性もってないよっ、等倍ダメージだもん！」
なかなかのツツコミだった。

そんなお冠状態のゆりなに、俺はついつい笑ってしまふ。
「そうそう。そんなカンジで今まで通り、一つよろしく頼むぜ」
と、握手よろしく右手を差し出してみる。

「えっ、あ。うん……。こ、こちらこそ」
すかさず握り返してきた。

しかも、なぜか両手で。

『おまえさんたち、なにしてる?』

ひよこつと現れたのはダッシュユだった。

不思議そうに俺たちの手元を見ている。

「なについて見りやあ分かるだろ」

「えへへっ。見れば分かるよねっ」

「お手のしつだけだよ。このペット、どうも覚えが悪くて困る」

「がーん!! ボク、いつの間にペットになったの!?!」

『…………?』

まあ、チビ助で遊ぶのはこれくらいにして。

とりあえず、クエスチョンマークを出しているそいつに訊いてみる
ことにした。

「んで、ちゃんと財布は返してきたのかイ?」

『うんっ。それでね、これもらったの。良い子さんのあななに、プレゼ
ントって』

ブルマの中から自慢げに取り出したのは、新品のメモ帳だった。

「あ、ダッシュユちゃんのメモ帳無くなったんだもんね」

「ス、スゲー分厚いメモ帳だな、オイ」

しかも、所々金箔が貼ってあるし。こりやあ結構な値段しただろう
な。

いやはや、まったく。こんなもん買うから電車賃が無くなるんだっ
つうのに……。

あの人は本当に――

『暖かい、人……』

メモ帳を宝物のようにギュッと抱きしめて涙を浮かべるダッシュ。
俺とゆりなは顔を見合わせ、

「そうだよね」

と同時に表情を緩める。

そして。

『あななは……』

ハチマキ娘は呟いて、俺たちを見上げた。

……意を決した眼差しで。

『あななは、もう逃げない。捕まえて』

「本当に、それでいいの？ もう自由にお空を飛べないかもしれないよ？」

ゆりなの問いに、首肯するダッシュ。

『あなな、ヘーキ、よゆう。今日、いっぱい運動会した。それに、』

ふわりと金髪を風になびかせて、俺の方へ向くと、

『おまえさんの、チカラ、なりたいから』

言った。

俺に向かって言った。確実に。

「にはは。フラれちった」

まいったまいったと頭をかくゆりな。

「えええっ!?! チビ助じゃなくて、俺んところに来んの?」

『イヤか……?』

「い、イヤじゃないけれども！ なんでまた、ゆりなじやなくて俺なんだ。散々ヒデエ目にあわせたつうのによオ」

しかし、そいつは無言のまま俺の前にひざまずく。

さっさとしろと言いたげに地面を指でトントン叩きながら。

「どういうこつたア……?」

うーむ。

どうも腑に落ちないが、とりあえず目を閉じて——俺は意識を集中させた。

「えっと。それで、捕獲呪文ってどーすりやあいんだ?」

「あ、そっか。初めてなんだっけ。アイスウォーターちゃんと契約し

たときの呪文って覚えてる？」

「なんとなく覚えてるよーな」

「それとおんなじだよ。模魔ちゃんの体力や魔力が残り少ないときか、

模魔ちゃんがこの魔法使いさんだったら仕えてもいいって判断すると、捕獲呪文が成立するの」

ということは、この場合、ダツシユが俺に仕えてもいいって判断したから捕獲が成立する、と。

なるほどね。ま、とにもかくにも。

俺は喉を湿らせると、呪文を唱えた。

「――我は命ずる。我に忠誠を誓い、真の力を全て我に宿せ」

コロ美のときと同じく、足元に緑色の魔法陣が出現する。

胸の中が熱くなり始めたところで、

『――我は誓う。主に我の全てを捧げんことを。その力、『疾駆』を与えん』

ダツシユが俺の手の甲に口付けをすると、魔法陣から冷たい風が流れ出した。

そして胸の熱さが足へと移動し、魔法陣がゆっくりと消滅していく。

「ん。これで捕獲は終わりかい」

土だらけになった膝をぼんぼん叩いているハチマキ娘に訊いてみると、

『おわり。これであんなのチカラおまえさんの足に宿った。いつでも足、速くなる。あんな呼べば、もつと速くなる』

答えた直後、小さな鮫へ変身、そして一回転。

黄金の宝石が埋め込まれた指輪へと姿を変えるダツシユ。

光り輝くそれをアホ面で見つめていると、隣に立っているゆりなが説明を始めた。

「その指輪をはめていれば模魔ちゃんの力の一部がもらえるんだよ。でも、それだけだとあんまりパワーが無いの。もつと模魔ちゃんの力――ダツシユちゃんだったら『疾駆』だっけ。その力を百パーセント

使いたかつたら召喚するんだよっ」

ほー。なかなか面白いシステムじゃねえか。

「んで、召喚のやり方ってどうやるんだ？ 長い呪文が必要なら、帰ってから聞くけれども」

「んーん。かんたん、かんたん。呼び出したい模魔ちゃんの名前を呼んで、その指輪にキスするの」

「接吻、ね……」

これまた恥ずかしい召喚方法なこつて。

ま、人間状態じゃなくて宝石に接吻するなら、そんなに抵抗は無いが。

物は試しだ。さっそくやってみるとするかねエ。

俺は目の前に浮かんでいるそれを掴んで、右手の小指にはめた。

そんでもって、

「出て来やがれっ、ダツシユ・ザ・アナナエル!!」

強くキスをする。

「!?!」

途端、目の前が真っ暗になり、また妙な映像が流れ込んできた。

それはモノクロじゃなく、カラーだったのだけれども……。

現れた人物に、俺は驚いた。

「こいつ、もしかしてハチマキ娘……なのか?」

暗い迷宮のような空間をひたすら走っているダツシユが映し出されていた。

髪はかなり長い、水色の目といい、顔のつくりといい、間違いない……こいつはダツシユだ。

まあ、ダツシユの石なんだし、こいつが出てくるのはそれはそれで当然なのかもしれない。

もしかしたら、召喚するのに一々映像を見なきゃいけない、なんてヘンテコなオチもありうる。

しかし。

しかしながら、これは――

「なんだ、こりゃ。どうして、ダツシユがゆりなと同じコスチュームを

着ているんだ……?」

そう。

そいつは変身したゆりなとまったく同じドレスを着ていたのだ。

いや、まったく同じとは言えないか。ゆりなは黒を基調としたドレスだが、ダツシユの場合、黄を基調としている。

だが、違うのはそれだけだった。ネクタイも、スカートに描かれている模様も、稲妻型のイヤリングも全てゆりなと一緒……。

ダツシユの手元を見て、俺はさらに喫驚する。

なぜなら、蒼杖が握られていたからだ。それは、どう見ても俺の霊鳴石——式式だった。

「つちゃん……。しゃっちゃんー!」

「んあっ?」

呼び起こされてボーッと顔をあげる。

心配そうに俺を覗き込むゆりな。

そして、同じく心配そうな……ダツシユ。

しばらく額を押さえて頭の中を整理した後、俺はそいつのツラをしげしげと眺めた。

「やっぱり、同じ顔だ」

『おまえさん、なんの話、してる?』

「いや、別になんでもねえ……」

言って立ち上がったその時、イタズラな風が俺のスカートをめくりあげた。

ひらり。

ボンツと大きな音を立てて顔を真っ赤にするゆりな。

「きゃっ! しゃ、しゃっちゃんてばっ」

「ん? どうしたんでエイ」

そう小首を傾げていると、これまた顔を真っ赤にしたダツシユが新しいメモ帳にさらさらと書いた。

『ぱんっはけ』
と。

そう一言だけ。

V S 第八番模造魔宝石ダツシユ・ザ・アナエル編——完
+ + +

第四十一石：VS第十四番模造魔宝石コピー・ザ・ヨムリエル編

パンツ騒動の後、空腹に耐えかねた俺達はゆりな家へと文字通り飛んで帰ったワケだが。

そこで事件は起こった。

俺が変身を解こうと解除呪文を唱えた時、ぽんつという小さな爆発音と共に、胸のエメラルド宝石から蝶々——コロナが飛び出した。

そいつはフラフラ彷徨ったあと、やがてへロリと地面へ落下する。

一体どうしたんだと、その様を呆然と見ていた俺だったが、

「あ、アイスウオーターちゃん、大丈夫!？」

ゆりなの呼びかける声にハッと気付く。

そーいや、結構前からコロ美の声が聞こえなかったような……。

もしかして、こいつどっか具合でも悪いのか？

「しゃっちゃんどうしよう……。すっごく体が熱いよ」

手のひらに蝶を乗せたチビ助が涙目で言う。

「確かに様子が変だな。羽の光りかたが尋常じゃねエし。とりあえず、ここじゃあ人目についちまうから家の中入るぞ」

部屋に戻ろうと俺たちが駆け足で階段を上がっていると、突然の黒い影。

ギョツとして立ち止まったのだけれども——そいつはクロエだった。

階段の一番上、ゆりなの部屋の手前でそいつは通せんぼをするかのように俺たちを見下ろしている。

「なんでエい、クロエか。驚かせやがって。っーか、今までどこほつき歩いてたんだよ。お前さんがどっか行っちゃまったせいで、こちとら大変だったんだぜ」

「……ああ。わりい、ちよつとな」

「ちよつとなって、お前さんよオ」

生返事に食って掛かろうとする俺に、

「しゃ、しゃっちゃん。それより、アイスウォーターちゃんが……」
「あ、そうだった。おいクロエ、コロ美の様子が変なんだけれども、一体どうなってやがるんでえい」

訊くと、黒猫は眉間にシワを寄せてこう言った。

「本来の姿に戻ったからな。おそろく石風邪にかかったんだろう」

石風邪って、そんな風邪きいたことねエぞ。

俺が視線を送ると、ゆりなも知らないという風に首を振る。

「ああ。石風邪っていうのは、オレたち霊獣や模魔がかかる特有の病気だ」

「びよ、病気って!」

青ざめるチビ助だったが、

「いやいや、そんな大した病じゃないから安心しな。体力が無いときに魔力を使いすぎるとよくなっちゃうんだ。オレも何度か経験あるし。アレだな、人間で言うところの貧血みたいなもんだな」

黒猫の一言にホッと安心する。

無論、俺もその言葉に安心したのだけれども……。

小さいとはいえ、七大霊獣サマとやらが本来の姿に戻っただけで貧血になっちゃうなんてな。

ランクEのダッシュでさえコロコロ姿を変えてたつつうのに。

うーむ。いまいち、よくわかんねえ存在だ。

そう俺が心の中で不思議がっていると、

「言っただろ。体力が無いときに、ってさ。コロ助は一日のうちに何度も集束を使ったからな。しかも七大の中でも一番体力の少ない三番石だ。すぐにガス欠になるんだよ。まっ、一番の原因はシラガ娘を守るために本来の姿へ変身、あまつさえ同時に集束まで使ったからだろうケド」

ベラベラと次から次に言葉を紡ぐ黒猫に、俺は待ったをかけた。

「弁舌さわやかに語っているところ申し訳ないのだけれども、別に俺は何も言っただろ。そりゃ疑問には思ったが。もしかして、お前さんもコロ美みたいに俺の心が読めるのかイ?」

言うと同時にそいつは肉球を自分の頭にあて、

「あつー！」

と言った。スゲエやつちまった感が伝わるリアクションだった。

しかし追撃の手は緩めずといった調子で、

「クーちゃん、『集束』ってなあに？」

今度は俺の後ろにいるチビ助が訊ねた。

「いつー！」

あからさまな動揺。

そういや、たしか集束のことは秘密なんだっけか。

とりあえず、こちらにケツを向けてガタガタ震えているそいつに、
言っておく。

「何をビビってたんだか知らねエけれどもよオ。チビ助だつて魔法使いなんだ。『集束』くらい知っておいたほうがいいだろ。つーか、そもそも隠す意味が分からん」

「そ、そーだな。シラガ娘の言うとおりだ。まあ、その前にコロ助を部屋に運ぼうぜ」

運ぼうぜつて、ジヤマしたのは誰なんでえい。

いささかに唇を尖らせていると、そいつは俺の股下をスルツとくぐり、ゆりなを見上げる。

「言つとくが、ポニ子の部屋はダメだぜ。隣の物置部屋に連れて行くぞ」

「え。なんでボクの部屋だとダメなの？」

「石風邪は普通の人間には移らないが、魔法使いには移るんだ。しかも、持つてる魔力が多ければ多いほど移りやすい。それに風邪のあいだは細かい石の結晶を吐き続けるんだ。それは菌のようなもので、部屋の中でばらまかれたら最後、どうやっても除去する手立てがないの。消すには時間経過しかないが、完全に消えるまで丸一日くらいかかるんだ」

ふうん、なるほどね。だから物置部屋にコロ美を隔離するってワケかい。

横目で黒猫を見ていると、チビ助が食って掛かった。

「ボク平気だもん。物置部屋なんて寒いところ、かわいそうだよっ」

「バーロー。平気じゃないっての。明日から学校が始まるんだろ？」

悪いことは言わねえ、コロ助は物置に寝かせておけて。どーせすぐに治るんだし」

「いいもん。風邪になっちゃったら休むもん」

「だあああ。オレらは人間じゃなくて石なんだっての、頑丈なんだから平気だつて！」

「人とか石とか関係ないよっ」

いやはや。双方ヒートアップしちゃってまあ。

二人が言い合ってる中、俺はそーつとチビ助の手の中から蝶々をつまみ上げた。

うお、思った以上に体が熱いな。大した病じゃない、なんて言うけれども……。

グツタリと羽を休めているそいつと、「ボクの部屋！」「いいや物置！」なんてやり合うゆりな達を見比べ、俺は深いため息をついた。

こりやあ、どうも埒が明かないね。

「あーもう、めんどくせえヤツら。いいよ、コロ美は俺のものだ。俺が面倒みるのが筋つてなモンで。二人はそこで仲良く遊んでなア」

そう言い捨て、俺は物置部屋へと歩を進めた。

第四十二石：これからの禁止

「けほっ、こほっ」

キレイに片付いているとはいえ、さすがにホコリっぽいな。

とりあえずコロ美の寝床を確保したかったので、棚上からピンクの布団を下ろして勢いよく広げる。

ペろりんこと敷かれた子ども用の布団。おそらくチビ助がもつと小さいときに使っていた布団なのだろう。

「否定。ここに『ももは専用』って書いてあるんです。きつと天使さんが使っていた布団なのです」

「げっ、マジだ。あんのバカ天、こんなところにもまで書きやがってからに。まったくもって迷惑な貧乳だぜ……って、コロ美!？」

いつの間に人型に戻ったのだろうか、そこにはフラフラ状態の園児が立っていた。

トロンとした目は普段の三割増しだし、頬はりんご病みたいに見つ赤になっちまってるしで、なんとも辛そうに見える。

どう声をかけたらいいものかと戸惑っていると、そいつは俺をポケーつと見上げて、

「ふやあ。パパさん、ここまで連れてきてくれてありがとうございます」

と言い、頭を下げた。

こんな時に律儀なヤツだな……。

「礼なんざいいからよオ、とつとと布団に入りねえ。これ以上悪化したらどうするんでエイ」

にしても。この薄っぺらい掛け布団一つじゃあ、いささかに心許ねーな。

タオルケットみたいなもんでもいいから何か無いものかね。

そう部屋の中をあれこれ探っていると、不意にスカートを引っ張られる。

「あのあの。パパさんのお気遣いとても嬉しいんです。でも、もういいのです。コロナは一人で大丈夫なんです」

と仰られてもよオ。スカートを掴む手が小刻みに震えているワケ

で。

これを見て、ハイソーですかとはさすがに言えねえよ。

「ダイジョバないっての。ほれ、いいから布団に……」

「こ、これ以上コロナの近くにいと、パパさんまでビョーキになっちゃうんです……」

困ったように笑うそいつに、俺は肩をすくめた。

あー。そんなこと気にしてたのか。

「あのなあ。俺のことよりもまずはテメエの体の心配をしろよ。んなめんどくせエこと考えてる暇があつたら、さつさと治しなア。それに、自慢じゃねえが俺は今までの人生で一度も風邪にかかったことねーの。石風邪だかなんだかしらねえが、んなもん俺様にやあ効かねーよ。だから、」

言いつつ、ひよいつとお姫様抱っこをして布団へと運んでやる。

「ここで大人しく寝てやがれ」

「……………」

さらに真つ赤な顔で俺を見つめるコロ美。

こりやあまた熱が上がったな。つたく、無駄に動き回るからだつての。

一応、釘をさしておくべきかね。

「いいか、もうちよこまか動くんじゃねーぞ。次動いたらアイスフィングーでお尻ペンペンすつからな」

「……………」

「おい。返事は？」

「ふあ!? こ、肯定なんですっ」

「いっひっひ。よろしい」

申し訳程度の掛け布団をかけて立ち上がる。

さて。他にかけられるモノはないかね、と部屋を再度探り始めたとき、

「しゃっちゃん、しゃっちゃん」

「あん？」

少しだけ開かれたドアから顔をのぞかせるゆりな。

そいつはしばし言いにくそうに視線を彷徨させたあと、

「さつきはごめんね。アイスウォーターちゃんが大変なときに、ボクラってばケンカなんてしちゃって……」

「めんどくせえからイチイチ謝るの禁止。それよかさつきクロエが言ってたけど、お前さん学校が始まるんだって?」

「にはは、禁止されちった。うん、そーだよ。明日始業式なの」

「そっか。つーことは、なおさら風邪ひいてる場合じゃないな。まあ、俺はこの世界じゃあ行く学校も無いし、暇だから看病ぐらいやつといてやんよ。あとのことは俺に任せて、チビ助は明日の準備に勤しみなア」

「うんっ。ありがとね、しゃっちゃん……。あ、お着替えとかタオルここに置いておくね」

言って、ドアの隙間から着替え一式とその他もろもろが差し出される。

こりやまた準備がよろしいこって。コイツもコイツでしつかりしてるよなあ。とても九つとは思えねえぜ。

受け取りつつ俺がそんなことを考えていると、チビ助は思い出したようにポンと両手を叩いて、

「そうだっ、今日はすき焼きパーティーをするんだっただよう。出来たら呼ぶね」

「ん。そういうえばそんなこと言ってたな。わかりましたんで、つか悪イなご馳走になってばかりで」

恐縮だぜ、と頭を下げようとしたのだが、頭の触覚を掴まれて阻止される。

「むー。ダメだよっ。しゃっちゃんもこれから禁止だもん」

むくれ面で言うチビ助に、

「えっ。禁止って、なにを?」

俺はすかさず聞き返した。

まさか俺の謝り禁止令に対抗して、食事禁止令とかトイレ禁止令なんてもんが発令したりして。

んなことになっちまったら、これからこの家でどうやって生きてい

こう……。

最悪の場合、ホームレス小学生として野外デビューする線も考えておかねばならんな。

そう、いささかに目を潤ませ始めた俺にゆりなは屈託のない笑顔で言った。

「申し訳ないとか、恐縮だぜえとか禁止。しゃっちゃんはボクたち家族の一員なんだから、そういうのアレだよ。えーと、『めんどくせえ』だもんね」

家族――

その発言にきよとんとしてしまふ俺。

なんとも簡単に言ってくれるが、家族の一員なんて一日や二日の付き合いでなれるモンじゃないだろ。

血の繋がりもないのに、いきなり『家族』って。

いやはやまったく、久樹上家はどうもお人好しが過ぎるな。

もし俺様が超がつくほどの悪人だったららどうするんでえい。少しは人を疑うことも覚えておいたほうがいいぜ。

と呆れ顔の俺に、

「しゃっちゃんだったらいいよ。悪人さんでも、なんでも。ボクぜんぜん平気だもん。どんとこーい！」

胸をポコツと叩いて八重歯を見せるゆりな。

何やらイマイチ会話が噛み合っていないような。つーか、悪人の意味を解ってなさそうだなこいつ。

「解ってるよ。悪人さんは、ボクを庇ってくれたり、コロちゃんを看病するような優しい人じゃないってことぐらい。ちゃんと解ってるもん」

のほほんと微笑むそいつに、俺は何も言えなくなってしまった。

「それじゃ、コロちゃんのことお願いねっ。ボクはお姉ちゃんのお手伝いしてくるよ」

「お、おう。すき焼き楽しみにしてるぜ」

「にやはは。ウチのはとっても美味しいから期待しててね。なんてっ たっておダシが違うもん。さーて、ご飯の支度っ、支度っ」

パタパタと楽しそうに階段をかけ降りていくゆりなを見送っていたのだが、ふと、いつぞやの白米タワーが脳裏をよぎる。

うぐっ。またあのタワーが現れちゃったらどうしよう。すき焼きどころじゃなくなるぞ……。

「チ、チビ助!」

「ほよ?」

慌てて待ったをかけると、そいつはヘンテコなポーズで止まって俺を見上げた。

「どったの、しゃっちゃん」

「きよ、恐縮だけれどもよ……ご飯は並盛りで頼みますぞ旦那」

「だーめ。恐縮だぜえはさつき禁止したもんね。まったく、しゃっちゃんてば遠慮屋さんだからあ」

いやいやいや、遠慮じゃねーし! ていうか、恐縮というワードをまるっと禁止されるといささかに困るんだが。

「あ。ついでだし『いささかに』も禁止しちゃおっかなあ……」

「なんで!」

恐ろしい禁止令の乱立にうろたえていると、

「うっそぴょんっ」

まさかの前宙をしゃがった。綺麗に着地し、「わーい!」と走り去る。そいつの後姿を唾然と見ながら、二つほど思う。

なんつーアホな運動神経をしてやがんだ、と。

危ないから前宙の禁止令を出しておこう、と。

第四十三石：看病するシャクヤク

「はあ……」

とにもかくにもと、ドアを閉めると、俺は用意された着替えやら何やらを持ってコロ美のもとへ戻った。

目を閉じ、浅く速い呼吸を繰り返しているチビチビ。

うーん。さっきよりはマシになったが、それでもまだ苦しそうだねえ。

着替えを脇に置き、その他もろもろが入ってる袋からタオルケットを取り出す。

それをフワリとかけて、

「いいねえ、こいつは暖かそうだ。これで掛け布団問題はクリアってなもんで」

ぼむぼむ叩いてやる。

それにしても、ごちやごちやとまあ。色んなものが詰め込まれているな。

「どれどれ、えーっと。絵本にぬいぐるみに、ぬいぐるみに、ぬいぐるみ……って、なんじゃこりや」

ぬいぐるみが袋の八割を占めているぞ。

使えそうなのは、洗面器とタオルぐらいしか見つからないんだが。風邪薬の一つぐらい入れておいて欲しかったぜ。なんて贅沢なこと

とを心の中で思っていると、

「石風邪は特殊なのです。人間の風邪薬は効かないんです……」

か細い声でコロナが言う。

「あれま。起こしちゃった？」

「否定。体がホカホカして全然眠れないのです」

「ホカホカ、ねえ。ちよいと失礼」

よくある火照りだろうと、布団の中に手を入れて確かめてみたのだが、これが熱いのなんのつて。

どうなってるんだ、こいつア。火傷しちゃうところだったぞ。

「いやはや。石風邪とやらを甘く見すぎていたのかもしれないねえ。コロ

美、立てるか？ とりあえず汗がハンパねエから着替えすつぞ」

「ふあい……。がんばるんです」

「頑張るな頑張るな。立ってるだけでいいって。俺が着替えさせてやる」

「こ、肯定」

スモックを脱がし、ぱぱつとパジャマへの着替えを済ますと——いや、ちよいタンマ。

この動物の顔をしたボタンが、凄まじく閉めにくいんだけどもむむつ。

誰だよ、このパジャマのデザインを考えたヤツは……。もはや知恵の輪レベルだぞ。

「くそつ、牛のツノが邪魔過ぎて閉まんねえ。待てよ、このツノ少しだけ曲がるぞ。ああ、分かった。ここをこうするのか。そんなもって鼻輪を半回転させれば——よし、いいぞいいぞ」

俺が唸りながらボタンと格闘していると、

「あのあの、パパさん。コロナはひとつお訊きたいんです」

「んー。恐縮だけれども、ただ今お取り込み中なんで。手短にヨロシクどうぞ」

「肯定。パパさんって、もしかして妹さんとかいるんです？」

その言葉にぴたりと手を止める。

「……どういう意味だよ？」

「昨日のお風呂から思ってたんです。なんとなくですけど、お兄ちゃまっぽい雰囲気か、」

「いねエよ」

言っている途中だったが、一言で俺はその会話を終わらせる。

いないモノは、いない。だから話すことは何も無い。

「パパさん……？」

「ほれ、出来たぞ。いっひっひ、かっちよわりイパジャマだぜ。さあ、横になりなア。あとは冷たいタオルで頭を冷やせばすぐに治るだろ」

「あ。ありがとなんです」

もぞもぞと布団の中へともぐりこむコロ美。

そんじやま、下に降りて水を汲んでくるかね。

俺が洗面器を持って立ち上がるうとしたとき、ちよいちよいつと小さな指でつつかれる。

「あんだよ。心配しねえでも、すぐに戻ってくるって」

「えっと、その。お水は魔法で出せばイイと思うのです」

……………

そっすね。そういや、俺って水の魔法使いでしたね。

恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にしていると、コロ美がクスクスと笑った。

「にやろう。笑うんじやねエよ、タコ助」

「否定。コロナはタコじやないんです。チョウチョなのです」

「似たようなモンだろ」

「似てないんですっ!」

「おー、コワイ。へへっ、ちよつとは元気になってきたじゃあないの……つとオ、ぷくゆゆんぷゆん、ぷいぷいぷう『アクアビット』!」
詠唱後、右手をグツと握り締める。すると、手の中に冷たいグミのような感触が現れる。

そつと手を開くと、小さなシャボン玉がフワツと浮かび上がった。中にはエメラルド色の水がなみなみと溜まっている。

オーケイ、俺の想像通りだ。だが、これじゃあいささかに少ないな。

「ぷゆゆんぷゆん、」

左手を右手首に添え、魔力をちよいと追加。

すぐさま膨張し巨大化するシャボン玉を洗面器の上まで持っていて、

「ぷうーっ」

弱めのアイスブレスをかまして凍らせる。それを霊鳴の尖った方でつつけば——あつという間に出来上がり。

「す、凄いです……」

洗面器の中を見てコロナが感嘆の声を上げる。

「他の魔法と比べりゃあ、別に凄くないだろうよ。ただ単純に水入りシャボンを作って凍らせただけだし。まあ杖を使わずに魔法を出す

のは初めてだったから、少し緊張したけれども」

言いながら、チビチビの頭に冷たいタオルを乗せてやる。

「氷とお水を効率良く出す魔法を一瞬で閃いたのです。やっぱりパパさん凄いです。特別なのです」

「へいへい、そりゃどーも。興奮したらまた熱があがんど。いいから寝ろ」

あまり何度も褒められてもね。何故かそこまでイイ気分じゃあない。

さて、一段落ついたことだし、すき焼きが出来上がるまで俺も横になるかね。

ごろんと、コロ美の隣に寝転がり、特大のあくびをしていると、

「あのっ」

布団を顔半分までかぶってそいつは恥かしそうに、こう呟いた。

「きよ、今日のパパさんなんだか優しいのです。昨日も優しくかったですけど、なんていうですか、その……」

「病気だからな。女で、子どもで、しかも病気とくりやあ最大限まで優しきレベルをあげなきゃなんねえ。まっ、治ったら厳しくするんで覚悟するときなア」

「うっ……。なら、コロナはずっと石風邪のまんまがいいです」

「おっと。言い忘れたけれども、看病も一日が限界だから。それ以上は見放す。サクツと見放す」

「ぐすっ」

悲しげに鼻をすするチビチビ。

ちと、からかい過ぎたかね。

「チツ」

俺は飛び起きると、袋からぬいぐるみ達を解放した。

コロ美の周りへと陣取ったそいつらの中で一番でかい蜘蛛のぬいぐるみ（ゆりながコロナへと貸したヤツだ）を掴み、

「ふおっふおっ。おチビさん、逆に考えてみなされ。一日だけなら優しくしてやらんこともないという意味じゃろ。ほれ、なにかして欲しかったら何でも言うてみるがいい。今のうちじゃよ」

人形劇よろしくやってみる。

出来ればそのまま寝てくれたほうが有り難いんだけども。

「あつー。えっと、えっと、それじゃあ絵本を読んで欲しいのですっ」
「そうもいかないよなあ……やっぱし。」

しようがねえな。めんどくせーけど。

底にあった『雪むすめ』という絵本を取り出し、袋を畳む。

やれやれ。結局、袋の中身を全部使うことになったな。

「パパさん、はやく、はやくっ」

「わーってるって。えーっと、昔々おじいさんとおばあさんがいました……」

第四十四石：雪むすめ

絵本の内容はこうだった。

ある雪の降る日、おじいさんとおばあさんが外を見ると子どもたちが楽しそうに雪だるまを作っていた。

子どものいなかった二人は、どちらともなくワシらも雪だるまを作ろうと提案する。

やがて完成したのは、それはそれは可愛らしい女の子の姿をした雪だるまだった。

長靴に手袋、帽子にマフラー。雪だるまにめいっぱいのおしゃれをさせるおばあさんに、おじいさんは名前をつけてみないかと微笑む。

それじゃあこんなのはどうでしょうと、おばあさんが『ミイ』と名前をつけた瞬間、その雪だるまが動き出した。

驚いた二人だったが、すぐに喜び抱き合い、その子を我が子のように育てる。

すくすくと育っていく雪むすめ。その姿は本物の女の子と見分けがつかないほどだった。

しかし、体はやっぱり雪だ。冬以外は外で遊べず家の中に閉じこもっていなくてはならなかった。

ある夏の日。外で楽しそうに遊ぶ友達のを羨ましそうに見つめる雪むすめ。

寂しそうなその姿を見た友達と一緒に遊ぼうよと雪むすめを誘った。

迷ったあげく、意を決して家から飛びだして行く雪むすめ――

「そんでもって、太陽の日差しを受けたミイちゃんは、跡形もなくとけて消えてしまいましたとさ」

めでたしめでたしと締めくくろうとしたのだが。

「ミイちゃんかわいそうなんです……。ひっぐ、うええっ」

「げっ。たかが絵本で泣くとか、カンベンしてくれよオ。かわいそうも何も、そもそもミイちゃんは人間じゃなくて雪だるまなんだっての。ったく、作り話にマジになるなって」

だが泣き止むどころか、ますます大声で泣くコロ美。しまった。逆効果だったか。

「あー、スーパーめんどくせえー！」
しばらく耳を塞いでいると、急に静かになった。

そつと目を開けてみる。

「泣き疲れた、か」

スヤスヤと寝息を立てているコロナ。

はあ。これだからガキンちよは……。やってらんねエ。

十分だけでも眠ろうと寝返りを打とうとしたところで、ギュツとキャミソールが引つ張られる。

「あんだあ？」

見ると、チビチビの小さな手が俺のキャミを掴んでいた。

「こいつ、いい加減に！」

乱暴に手を放そうとするが、

「パパ、さん。コロナは、ずっと……」

ズルリと額のタオルが落ち、それと同時に涙も流れ落ちる。

その時だった。俺はクロエの言葉を思い出す。

『一番の原因はシラガ娘を守るために本来の姿へ変身、あまつさえ同時に集束まで使ったからだろうケド』

こいつが石風邪にかかったそもその原因は俺――

変身。集束。大魔法。こんな小さい体でそれらをいつぺんにしたんだよな。

「ムチャ、しやがってよ」

呟いてすぐ、自分の勝手な発言に情けなくなる。

ムチャさせたのはどこのどいつだよ。

生身でダツシュを追いかけてたりなんかするから、コロナが力を使わざるを得なかったんだ。

こうなることを分かっているこいつは俺を守ってくれたんだよ。ありったけの力を使って。

チビチビが居なきや何も出来ないクセに。

魔法が使えなきや何の意味もないクセに。

自己嫌悪——らしくないよなア。

まったく。この世界はどうも調子が狂う。

俺は落ちたタオルをもう一度濡らすと、そいつの頭に乗せようとして、

『ご主人様に撫でてもらえるなんて、それ以上のご褒美はないんです』
今度はコロナの言葉を思い出していた。

「……………」

撫でるだけで命を救ってくれた褒美になるとは、思っちゃあいないけれども。

それでも——

他に何をしてやれるのか分からない俺は、

「さんきゅな、コロ美。あと、ごめん」

チビチビの頭を数回優しく撫でた。

タオルの水か汗か、じつとりと濡れている前髪を整えてやる。

「なんつーか、その……もうこんなムチャさせねエからよ」

言ってタオルを乗せたその時だ。

「うっひゃあ、もしかしてお邪魔だったか？」

「!？」

振り向くと、そこには面白そうに笑う黒猫が座っていた。

うげっ。こいつ、いつの間——

「へえ、なるほどね。二人っきりの時はいつもそんなカンジだったのか。そりゃあ好かれるワケだ。合点がいったぜ、『優しいパパさん』よ」

「こ、これはだな。一瞬の気の迷いっていうか、別にこんなガキどうでもいいし。ただ、親父に優しくしろって言われてるから仕方なく演技しただけだしっ。間違えるなよ、クソツタレ！」

そいつは嫌味なニヤケヅラを向けたまま、

「ほれほれ。あんま大きな声を出すとコロ助のヤツ起きちゃうぜ」

と、尻尾を左右に揺らす。

「ぐっ……………！ ていうか、なんの用でえい」

あぐらをかいてバカ猫の鼻をつくと、そいつはくすぐったそうに

顔を背ける。

「なんの用だとはご挨拶じゃねーの。オレだつてコロ助の具合が心配だったから様子を見に来たのさ。シラガ娘一人だと不安でさあ」

こんのニヤンちくしようが。ホント、言いたいこと言ってくれませ。

俺がイラツと拳を握りしめていると、クロエは顔を背けたまま呟いた。

「でも……大丈夫そうだな。あーあ。コロ助のやつ、良いご主人様に拾われて幸せモンだな。けけっ」

こんな目にあわせて良いご主人も何もないと思うのだけれども。というか、いささかに疑問だな。

「俺より、チビ助のほうが良いご主人様をやっていると思うぞ？」
「……………」

クロエが無言を返したとき、ガチャリとドアが開いてゆりなが顔を覗かせた。

「しゃつちゃん、すき焼き出来たよー。あ、クーちゃんこんなところにいたんだ。もう、お話の途中で急にいなくなるんだもん。心配しちゃったよ」

「へへっ、猫は気まぐれって言うじゃん」

「気まぐれすぎだよっ！」

そんな二人のコントを見ていたい気もするのだが、ちいとぼつかし声が大きいで人差し指を唇にあて、シートというジェスチャーをする。

「にや、にやはは。それじゃあ、待ってるからね」

ポリポリと頭をかいてドアを閉めるチビ助。

俺はコロナの様子を確認してみた。よし、ぐっすり眠っているようだ。もうじき良くなるだろうな。

そんじやま、早速行くとするかね。もう腹ペコで限界だぜ。

「よーし、今日こそ白飯以外も食ってやるぞってなモンで……あれ、お前は行かねーの？」

コロ美の隣でとぐろを巻くクロエに訊いてみると、

「バーロー。ポヨ子もいるんだぜ、オレが普通にすき焼き食ったらおかしいだろっての。あとでポニ子がタツパーに詰めて持ってきてくれるから心配すんな」

「……別にテメエの心配なんかしてねえし」

「ゴロ助の心配はするのに、オレの心配はしてくれねえんだな。ああ、オレは今モーレッツに悲しいぜ。およよよ」

「チツ、うざってえ」

付き合ってらんねーやと、ドアを開けた時、

「今度こそ……」

背後から悲しげな声が聞こえた。

「ん？」

不思議に思い、首を傾げたのだが、階下から漂ってくるすき焼きのニオイにたちまちノックダウン。

こりゃあ、たまんねーぜ！

俺はそのニオイの糸に手繰り寄せられるまま階段を下りていった。

第四十五石：夏夢

「こ、こりゃあ、旨い！ 旨すぎるー！」

すき焼きに関しては関東風ばかり作っていたのだが、関東風でここまで美味しいモンに出会えるとは。

関東風といえばベシヨベシヨに甘いただのごった煮というイメージだったけれども、甘過ぎず、かと言ってしょっぱ過ぎずといった割り下の塩梅が何とも秀逸だ。

それに、このフワフワに柔らかい牛肉。まさかと思い、箸で掬い上げたときに下を覗いてみたらパイナップルが一切れ敷いてあるじゃあねエの。

かーっ、このやり方を知ってるたア、中々に憎いねえ。

んでもって、俺の大好きなジャガイモ入りつつうパーフェクトな具材選びときたもんだ。

空きっ腹ってなブースト効果を抜きにしても、素晴らしいすき焼きだった。

デラックスだ……こいつア、大いにデラックスだぜ。

そう無我夢中であつついでいると、

「うふふ、しゃっちゃんちゃんに喜んで頂けて嬉しいですつ。でも、そんなに急いで食べては喉を詰まらせてしまいますよ」

お姉さんが麦茶をコップに注いで微笑む。

「いやはや、これほど旨い関東風すき焼きを食べるのは生まれて初めてでー！」

「まあっ。お上手なんですね。はい、これをどうぞ」

「本当ですつて。俺は世辞が苦手なんでさア」

差し出された麦茶を一気に呷って、至福のひとつときに酔いしれていると、隣のゆりなが不思議そうな顔をする。

「ねえねえ。かんとーふってなあに？ お豆腐のこと？」

言いつつ俺の白飯の上に焼き豆腐を乗っけるチビ助。

「まったくもって違うぜ、旦那。つつーか、なんで豆腐乗っけるワケ？」

「むふふ。このお豆腐ね、ボクが焼いたんだよ」

「うへえ、マジかよ!？」

「マジだもんねー。お豆腐とキノコと白菜はボクの担当なの」

すき焼きの一口目は必ず豆腐からと決めている俺は、最初にそれを食べた際、その絶妙な炙り加減に感心していた。

こりやあ市販のそれではないなとは思っていたけれども……コレを作っていたのがお姉さんではなくチビ助だったとはねエ。

うーむ。久樹上姉妹、おそるべし。

「ね、ね。しゃっちゃん、ボクの担当したやつ美味しい?」

「おう。めっちゃ旨いぞ! 全部、非の打ちどころが無いぜ。やるじゃん、チビ助」

俺が頭をぽんぽんすると、

「えへへっ、褒められちった!」

椅子の上でぴよんぴよんとお尻ジャンプするゆりな。

あーあ、んなことしたらお姉さんに叱られちまうぜ。お行儀が悪いってよオ。

そう心の中で笑い、視線をお姉さんの方へ向けると、彼女は真剣な眼差しで見ている——俺のことを。

思わず二度見してしまう。えっ、俺なんかマズイこと言ったっけ。

「な、なんですか?」

おそるおそる訊いてみると、

「あのう、それで『かんとーふ』とは、一体何のことでしょうか?」

ズデツとコケそうになる俺。

「すみません。とてつもなく気になってしまいました。このままでは夜も眠れないのです……っ」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。夜更かしはね、お肌が荒れる原因になっちゃうってテレビでやってたよ」

「そんなんっ! うう、どうしましょう……」

「どうしようもないよ、もう……」

悲愴感たつぷりにうな垂れる二人。

こ、こりやあ、てえへんだ。

「待った、ちょっと待ってくださいエ！ か、関東風というのはですね……かくかくしかじか」

飯の恩を仇で返すワケにはいかねエと、慌てて関東風と関西風の違いついて語る俺に、ふんふんと揃って頷く姉妹。

やがて、

「というワケなんでさア」

「そう締めという言葉を放つと、

「浴覧深識！ しゃっちゃんちゃん物知りさんですつ。それに、なんて解りやすい説明なのでしょう！ お料理の先生みただったのですつ」

「ふわあ、お料理のこと詳しいんだね。なんだかビツクリだよお」

「いや、まあ、あの……所詮、聞きかじりの知識なんで」

ううつ。この二人、スゲエ聞き上手だからついつい熱く語ってしまっただぜ。

本当は料理が趣味つつうことはあまり知られたくないんだけども——かつこ悪イし。

「あらあら！ 恥ずかしがってるしゃっちゃんちゃん、とっても可愛いのですつ。お料理はお母様から教わったのですか？」

テーブルに頬杖をついて優しく訊いてくるお姉さん。

あー……。

しばし視線を彷徨させたあと、俺はニツコリと答えた。

「はい。俺の料理術は全部お袋直伝です。そいつを自分流にアレンジしては、毎朝親父の弁当に放り込んでます」

「まあっ、お父様もさぞやお喜びのことでしょう！」

「いやいや、それがまた。いっつも『毒見役はツライなあ』なんて失礼なことを言いやがるんですよ。つたく、イヤなら食わなきやいいに」

「ふふつ。きつと、誰かさんに似て照れ屋さんなのですよ。それにしても、料理のお上手なお母様とこんなに素敵で可愛い娘さんがいらして、お父様が羨ましい限りですつ」

「は、はは……」

まあ、俺は男なんだけれども——なんて言うワケにもいかないしな。とほほ……。

嘆きつつ残った白飯をかきこむ作業に戻っていると、再びの視線。つて、またお姉さんか。今度は何だろうねえ。

「しゃっちゃんちゃん。お母様とお父様は好きですか？」

急な質問に面食らう。

「と、突然どうしたんですか」

「答えてください」

ぴしゃりと返された。

先程と同じように確実に違う眼差し。

これは——真面目に答えるべきだな。

「好きですよ、どっちも」

「では、いいのですか、二日も無断で家をあけて。ご両親はとても心配していると思いますよ」

「お、お姉ちゃん。しゃっちゃんはね……」

慌てて割り込むゆりなだったが、

「ゆっちゃん」

言ってゆるりと首を振るお姉さん。口を出すな、との合図だった。

それを汲み取ったチビ助は小さくごめんねと言い、料理の後片付けを始める。

「えーと、そ、それはですね、」

なんて言ったらいいのだろう。

いきなり異世界に飛ばされたんです。飛び散った魔宝石を全部集めて、ピースに呪いを解いてもらうまで元の世界に帰れないんです。

そんなこと……言えねエし、言ったとしても信じられないよなあ。

俺が逆の立場だったら絶対に信じねーし。むしろ、頭の病気が何かだろうと踏んでとりあえずそいつを病院へ連れていくぞ。

なので。

「なにか、事情があるのですか？」

と訊かれても、

「すみません」

「〇両親に連絡は？」

「すみません……」

それしか言葉が出てこなかった。

答えに窮し、ただひたすらとスカートを握りしめっていると、急に暖かいものが俺を包む。

「解りました。もう謝らないでください……」

すみませんの一点張りで、いったい何が解ったというのだろう。

しかし、そんなことよりも俺はこの温もりから逃げ出したかった。

冷や汗がふき出し、動悸が激しくなる。

本当に、本当にやめてくれ――

「怖がらないでください」

ギョツと更に強く抱きしめられる。

「大丈夫ですから、もう、大丈夫ですから……」

その言葉とともに、柔らかな何かが俺の頬に当たる。

「……………」

どうしてだろうか、先程まで俺を鎖のように支配していた恐怖が嘘のように霧散していく。

そして、急激な眠気にたちまち襲われたかと思うと、そのまま深い眠りの世界へといざなわれていった。

++++

夏に吹く夢く Dreams of Summer

赤い夢を見ている。

夏色の風に包まれた、とても小さくて暖かい夢。

夕焼けに染まった世界で、ただ独りぼくは泣いていた。

一体、これで何回目だろう。

答えのないまま繰り返し返される、ある夏の日の夕方。

それでも、ぼくはこの終わらない夢が嫌いじゃなかった。

また、あの子に会えるから。

また、あの子が微笑むから。

人気のない公園のベンチでぼくは空を見上げる。

太陽が沈もうとしていた。

赤い夕陽に照らされた雲がゆつくりと流れて、どんどんぼくから遠ざかっていく。

さつきまでぼくの周りを楽しそうに飛んでいた赤トンボも、もうすでにどこかへ消えてしまっていた。

でも。

大丈夫、独りぼっちには慣れてるから。

どうせみんな、いなくなっちゃうから。

期待するだけ無駄だと、知ってるから。

からっぽな空から目を逸らすように、ぼくは大きな時計台へと視線を移した。

四つの小さな鐘が吊り下げられている立派な時計。

だけど。

「止まってる……」

ぼくがここに来てから、たくさん時間が経っているはずなのに。

時計は、二十三時五十五分のままピクリとも動かない。

それは。何も言わずに、ぼくを冷たく見下ろしている。

少し怖いかも。ううん、とても怖かった。

「死んじゃったんだ、時計さん」

またひとつ、ぼくの世界から消えてしまう。

ずっと時計を見るのはイケナイことかも。話しかけるのはもつと

イケナイことなのかな。

でも、色々試すのはもう疲れちゃった。

だから、ぼくはずっと傍に居てくれる地面さんへと目を落とした。

その時だった。

「はっ、バツカバカじゃん。時計なんてただの機械よ。死ぬワケ無いじゃん」

透き通った声が後ろから聞こえた。

振り返ると、そこにはぼくと同じ年くらいの女の子が立っていた。

意志の強そうな金色の瞳で傲然とぼくを見下ろす彼女。

「……………」

ぼくが何も言えずに固まっていると、彼女は腰に手をあて、偉そう

な口調でこう言った。

「ちよつとお、なんとか言いなさいよ。このあたしが話しかけてやってんのよ」

「えっ、あ、ごめんなさい」

「なんでそこで謝るのよ！ 陰気なヤツねえ」

「ほつといてよ……」

一陣の風。

オレンジ色のワンピースがひらひらとはためく。

それを押さえると、彼女は鼻を親指でこすった。

「この風、夕立のニオイがするわね」

夕立にニオイなんてあるのかなあ。

首を傾げていると、その子は急に片足をベンチにドカツと乗つけて、ぼくの襟首を掴んだ。

「ほら、行くわよ」

「い、行くって、え、なに？」

「なに、じゃないわよ。あんた、脳みそフロツピー!? 夕立が来るつつってんのよっ！」

フロツピーの意味がよくわからないけど、なにかバカにされてる気分だった。

ぼくは彼女の手を払いのけると、

「だ、だからなんなんだよ、高飛車なヤツだな！」

少し強めに言い放ってしまった。

どうしてだろう。こんなこと言うなんて、まるでぼくじゃないみたいだ。

だけど、その子は臆することなく、とても意地悪そうな顔でニヤリと笑う。

「ふんっ。あたしが高飛車なら、あんたは低角行つてところね」

「どういう意味か分かんないよ……」

「低レベルで角が立っていてグチグチつまらない行いばかりをするバカっていう意味よ。すなわちバカね。大バカ」

めちやくちやだった。

「な、なんだよ。初めて会ったくせに馴れ馴れしくバカバカ言うなよな！」

「ふうん。バカのクセに、なかなか良い度胸してるわね。陰気なやつってセリフは前言撤回してあげるわ」

満足気に言うと、彼女は陽に染まった長い髪をフワリとかきあげる。

そして。

「……こんなところでウジウジしていたって始まらないわ。雨に濡れて、ただ身体を冷やすだけよ。まだあんたは暖かいんだから、立ちなさい」

「え？」

暖かいつてなんだろう。人はみんな暖かいんじゃないのかな。

よく——わからない。

「立って、歩くのよ。ねっ。あたしの手、貸してあげるから、さ」
「う、うん」

彼女は先程とは別人のような、とても柔和な笑顔でぼくに手を差し伸べる。

吸い込まれるようにその小さな手を取ると、ワンピースの少女はちよつとだけ寂しげに呟いた。

「次は、ちゃんと辿り着けるかしら……」

まただ。

夢はいつもそこで途絶える。

暗転していく中、ぽつりぽつりと雨音が聞こえ、最後には決まって雷鳴が轟く。

いつもの終わり方だった。

雨が止んだら、また会えるかな。

今度のもつといっぱい喋りたいな。あの子と話していると元気が出てくるから。

ぼくが、ぼくでない誰かに……生まれ変われる気がするから。

そうまどろみ、ぬかるんだ泥の中へと沈んでいくぼく。

それもまた——いつものオワリ方だった。

次にはフリダシへと戻るぼくと彼女。

何もかも忘れて、再び出会うぼくら。

それは。なんて、バカげた夢なんだろう。

そして。なんて、怖ろしい夢なんだろう。

+
+
+

第四十六石：家族

「ふやつ!？」

飛び起き、ヨダレを拭きながら辺りを見回していると、

「しゃっちゃん、おっはにゃーん」

ゆりなが満面の笑みで俺の顔を覗き込んでいた。

「あ、ありや。俺ア、一体どうしちゃったんでエイ」

とりあえず、状況を確認。

除湿の効いた涼しいリビング。もふもふソファの上、かけられた厚手の毛布。

考えるまでもない。どうやら俺は、寝ちまってたらしい。

「いつの間に……。すき焼きが旨かったことまでは覚えてるんだけども」

どういった経緯で眠りに落ちたのか思い出そうとしていると、ゆりなが俺の首に抱きついてきやがった。

「ねーねー。しゃっちゃん、おはにゃんってばあ」

「抱きつく? ああ、そうだ。お姉さんに抱きつかれたときに寝ちまったんだっけ。ううむ、催眠型魔宝石でも持っているのか、あの人は」

完全スルーを決め込む俺に、

「もー! おはにゃんって言ったらおはにゃんって返さなきやダメなんだもんっ」

結構マジな怒りをぶつけてきた。

「おやまあ。怪獣みたいに火を吐きそうな勢いだな。いやはや、恐い恐い」

「火じゃないもん、雷だもん!」

「いや、怒るところそこなのかよ……」

「むぐぐーっ」

そう歯を食いしばってみせるチビ助。

これはこれは。いささかに挑発が過ぎたのかもしれない。

バチバチと黒い電撃を上半身に纏い始めたところで、

「おはよう、チビ助」

と言って軽くチョップ。

しかし、すんでのところで避け、逆にチョップをかまされた。

「ふっふーん。カウンターだもんね」

「あいてて。飯食ったばかりだつうのに、なんとも身軽だねえ」

「えへへ。ボクね、消化が早いのが取り柄なの」

「そうか。ゆくゆくは大食いチャンピオンだな。賞金を稼いだら、俺を北海道旅行にでも連れていってくれ」

「うんっ！」

うんっ、て。そんな全力でボケ潰しせんでも。

さつきまでの怒りはどこへやら、すぐにニコニコ笑顔で俺の隣へ座るゆりな。

そいつはテレビをつけると、テーブルの上に置いてあるお菓子をもぐもぐ食べ始めた。

「あんだけ食って、まだ食うんスか……」

「お菓子は別腹だもん。あ、しゃっちゃんも食べる？ おいしさカミナリ級のお菓子だよっ」

差し出された黒いココアクッキーのお菓子を見て、そういえば似たようなの俺の世界にもあったなあと思ひ、手を伸ばす。

「んん。味もそっくりじゃあねエーか」

「ふえ？ そっくりってなあに」

なんて面白い驚き方をするもんだから、

「ぶええっ!? そっくりってなんでゲスか」

ついつい真似をしてしまった。

多少アレンジを施したが、中々に良い出来だと自負している。

「ま、真似したなーっ。てか、ボクそんなヘンテコな声じゃないし、あとゲスなんておかしな語尾つけてないもん！」

語尾なんて言葉を知っているとは。

「まあまあ。んなすぐ怒ってたら健康に悪いぜ。甘い菓子より海草とか切り干し大根を食いなア。カルシウムは大事だぜ」

「カルシウムかあ……。煮干しだったら朝ご飯のときいっぱい食べて

るよ？ あと、牛乳もいっぱいゴクゴク」

猫まつしぐらな朝飯だな……。

「恐縮だけれども、煮干しとか牛乳は正直ビミョーなの。みんな過信しすぎ」

「そ、そうなんだ。よし、それじゃあ明日からいっぱい海藻サラダ食べるよつ。頑張るね、しゃっちゃん！」

「おう頑張れ頑張れ。ま。そもそもカルシウム不足でイライラするつうこと自体、真つ赤なウソなんだけれども」

カミナリ級のお菓子をパクつきながら気だるげに言つてやると、

「ふえええん！ お姉ちゃあん、しゃっちゃんがボクの心を弄ぶのーっ」

なんとも誤解を招くような言い回しで、台所にいるだろうお姉さんのもとへと走り去ってしまった。

「いっひっひ。からかい甲斐のあるヤツ」

いやはや、それにしても……。お姉さんに抱きつかれたぐらいで、寝ちまうとはねエ。

どうやら、思った以上に疲れが溜まっているのかもしれない。

まあ。よくよく考えてみりや、あんまり寝てなかったし、連続続きだったからな。

ふと掛けられた時計を見ると、あれから一時間しか経っていないかった。

一時間、ね……。

めんどくせエが、コロ美の様子でも見に行つてやるとするかね。

そう重い腰にムチを打ち、階段を上ろうとしたとき、台所のほうから姉妹のやりとりが聞こえてきた。

別に聞き耳を立てるつもりはないんだけども——やはり、気になるもんで。

何を話してるんだろう……。

「あらあら、しゃっちゃんちゃんつてば、そんなことを？」

「もーっ、ひどいんだよ。すぐにボクで遊ぶんだから」

「まあ、なんて微笑ましいのでしょう！ ふわあ……っ。お姉ちゃん

はお二人がとても羨ましいのです」

「えっ、羨ましいって?」

「だって、私にはそんな一面を全然見せないのです。どこか他人行儀と
言いますか……。壁を作ってらっしやると言いますか。なんともは
や、悲しい限りなのです」

お姉さんの寂しそうな一言に、チクリと胸が痛む。

たしかに、俺は壁を作っていた。その理由は、実のところ自分でも
よく分かっていない。

何故だか、お姉さんが苦手だった。とても良い人で、暖かい人なの
は確かなのだけれども……。

「んー。壁とか難しいことボクわかんないけど、これから一緒に暮ら
していけばすぐに仲良くなれるよっ。家族なんだもん、すぐすぐ!」
「そうですね、家族ですもんね……。っ。ゆっちゃんの言うとおりなの
です! 時間はいっぱいありますし、ゆっくりでもお近づきになるの
ですっ。がんばるんば!」

「がんばるんば!」

「ああ、それにしても……。ゆっちゃん、もっちゃん、しゃっちゃんちや
んの三人もの天使さんとのバラ色生活がこれから始まると思うと、居
ても立ってもいられないのですよ。はわーっ」

「にや、にやはは……。また、お姉ちゃんの大妄想が始まっちった」
……………。

なんっつーか。つくづく、お人好しな姉妹というか。

いやはや、まったく。俺には、もったいないくらいいの『家族』様な
こっつて。

一つ肩をすくめて、物置部屋へと向かったのだが。

入るや否や、黒猫が俺の足にまとわりついてきやがった。

「よお、シラガ娘。すき焼きは旨かったか? オレの分はちやーんと
持って来てくれたよな……。っつて、あんだあ、そのニヤけただらしねえ
ツラは! 気持ち悪い!」

ドン引きの表情で俺を見るクロエ。

「えっ、あ、いや。べ、別にニヤけてなんかねエし! 全然嬉しくねエ

し！」

「はあ……？ ま、いいや。それより、腹ごなしに散歩にでも行かねーか。ここのベランダからピヨーンと抜け出してさ」

「散歩は別に構わねエが、抜け出すって、また巨大化したお前さんに乗れって意味かい？」

いつかの荒々しい暴走黒虎を思い出す。

うつぶ。あんなのに今乗ったら、百パーセント吐く自信があるぜ……。

「ちげえって。腹ペコで力が出ない状態なんだ。巨大化なんて疲れる魔法陣描いてらんねーよ」

「じゃあ、羽をおっぴろげて飛び降りろってことかよ。無理だぜ、チビチビはぐっすり眠ってるんだし」

と、すやすや寝息を立てているコロ美の頬を突いてやる。

「それも、ちげえって」

「なら、どーしろってんだよ」

眉をひそめると、黒猫はヒゲをいじりながら、ある方向を指した。

そこには俺の霊鳴石式が転がっている。

「そいつを起動させてまたがれば、変身しなくても飛べるんだぜ。乗り心地はサイアクだけどな、にっしっし！」

第四十七石：ももは？それとも別人？

「ああ、なるほどねエ」

ふむ。羽が出せないときは杖を使って飛ぶつつう選択肢もあると
いうことか。

そういやチビ助も何度か霊冥にまたがって空を飛んでいたし……
いささかに面白そうだ。

さっそくとばかりに俺は右手を突き出して、

「来やがれ、霊鳴ー！」

ピカッと光ったのち、すぐさま俺の胸の中へと飛来する霊鳴石をそ
のまま抱きしめ、

「式式、起動する……っ。イグリネイション！」

と、封印解除呪文を唱える。

いつものように青い光が手元を包み込み、そして瞬く間に蒼杖モー
ドへと変化するサファイア宝石。

よーし。いっちょあがりだぜ。

その様子を見たクロエは、感心顔で肉球をアゴに当てつつ、

「ほお。やる度に解除が早くなってるな。さっすが、期待の新星」

「へへっ。そーだろ、そーだろ。もつと褒めてくれてもいいんだぜ」

そう気持ちよくふんぞり返っている俺を尻目に、

「んじゃ、散歩行くか」

戸の隙間からさっさと外へ飛び出して行ってしまおう黒猫。

おいおいおい！ まだ杖の乗り方を教えてもらってねエぞ。

慌てて戸を開けると、そいつはベランダの手すりに器用に乗っかり
ながら、馬鹿デカいあくびを一つかました。

「ふわあーあ。教えるもなにも、コロ助の羽であんだけ飛べたんだか
ら、杖での飛翔なんざお茶の子さいさいだろ。ただ杖にまたがって飛
ぶイメージをすりゃあいいだけ。羽だろうが杖だろうが、要領は同じ
ぢや」

言うど、しなやかに飛び降りてしまった。

「そ、そんな簡単に言ってくれるがよお……」

目を潤ませつつ不安げに見下ろしていたのだが、「へいへい。しゃくやつちゃん、ビビってるう?」「男なら根性見せてみやがれ。女の子だって言うなら可愛くお願いしてみな。オレが受け止めてやんよ、お姫様!」なんて小躍りしながら俺を煽るクロエ。

ぐぬぬっ。

あんのクソ猫め、好き放題言いやがってからに……。

「ば、ばつきやーろイ! この俺様がビビるわけねエだろ。いいぜ、やってやんよっ」

ここまでバカにされて、引き下がっていられるほど出来た男じゃないんでね。

よっこらせつと手すりの上へとよじ登り、続けて蒼杖にまたがる。と。ここまでは良かったのだけれども――

「ひえええ。し、下はあまり見ない方が良さそうだな」

ゴクリと喉を湿らせ、目をつぶる。

やべえぞ。今は変身してねエ生身の状態だし、ミスったら痛いどころじゃ済まないぜ……。

いや大丈夫なハズだって。そうさ、俺は選ばれた魔法使いなんだ。こんくらい出来てトーゼン!

「試作型ちゃんよオ。俺も頑張るが、おめえさんも気張ってくれよ」頼りなげな明滅で答える霊鳴。うう、不安の種は尽きないが、いつ

までもこうしていらねエし。

「ええい、飛ぶぞ。飛んでやるっ!」

意を決して手すりを蹴ったのだが、これがなんともあっけなく飛べてしまったワケで。

な、なんでえい。簡単じゃねーか。それに、乗り心地も言われるほど悪くねーし。

ちよつと股のところがムズムズと変な感じだけでも、乗り方さえ工夫すりゃあ、そこはなんとかかなりそうだ。

「うっひょーい! おらおら、クロエさんよお。どうだいこの飛びっぷり。いささかにお上手だろ?」

スーッと得意げに黒猫の上を飛び回ってやる。

ひゃあ、夜風がすげえ気持ちいいぜ！

「ほら、案ずるより産むが易しってな。ところで、シラガ娘。言い忘れてただけだよ」

「ん〜？」

「霊薬が切れたら、落っこちるからな」

そいつが言った直後だ。

霊鳴から実はもう限界来ちゃってるんですけども言いたげな蒸気が勢い良く噴き出す。

そうだった。残り少ないつつーか、確か霊薬はダッシュ戦でとつくに切れていたような……。

ゆっくりと首を後ろに曲げ、ケツ先の宝石を試してみる。

か、限りなくゼロに近い霊薬液。ていうか、ゼロだった。

「ダメエ、だからそういうことは早く、」

怒鳴ってる途中で、股に挟んでいた杖の感触がフツと無くなる。

「うわああっ！」

真つ逆さまの急転直下だった。

これは……骨折くらいは覚悟しておくべきか。

「ちきしょー、南無三ー」

そう衝撃に備えて目をつぶったとき、「ひあっ！」という、か細い声とともに、柔らかなクッションが俺の体を包み込んだ。

ムギユと、さらに柔らかい二つの桃のようなモノに頭を突っ込んだまま、うーんと唸っていると、

「は、早く、どいてくださいいー！」

「んあ。桃が喋った!？」

飛び起き、俺は改めて二つの桃を揉みしだく。

な、なんでこんなところに桃が落ちてやがんだ——それにしても熟れているのかやけに柔いな。

むにもに。

いや、ここまできるともはや腐っているような。

「ほわわっ、や、やめひえくだひゃいひゃい」

いちいち変な声を出しやがって。なんとも気色の悪い桃だぜ

……つて、アレ？

そこで、ぼんやりとしていた視界が徐々にハッキリとしていく。
え、えーつと。

桃だと思っていたそれは、スカートのめくれあがった尻で。そしてそれを鷲掴みにしているのは俺で。

そんなでもって手の中にいる子犬ちゃん柄のパンツが俺を睨んでいるという具合で。あの、その……。

「もう、いい加減に、どいてくださいいい！」

「あ。すまねえ！」

状況説明している場合じゃなかったぜ。慌てて飛び退くと、クツシヨンになった少女と目が合った。

その子は、桃色のミディアムストレートといった髪型で、ピンクフレームのメガネを頭にかけている。

そんな特徴的なメガネよりも、もっと特徴的なのは瞳だった。

エメラルドグリーンの大きな瞳で、なんと奥には星型の模様が——
いやいや、ちよい待て！

ついこの間も似たようなヤツと出会った記憶があるぞ。

そいつは語尾に「ちやつちやつ」つけるなど、凄まじくうるさいヤツなんだけけれども。

試しに顔を近づけてニオイを嗅いでみると、強い桃の香りがした。
げげっ、間違いない、こいつは……。

「あのっ、私のメガネ知りませんか？　ぶつかっちゃったときに外れてしまったようで……」

「それなら頭の上に乗っかってるぞ」

軽口を叩きつつ、クイツと下ろしてやる。

「あ、すみません。ありがとうございます」

「いやなに。てつきりファッシヨンでやってるのかと思ってたぜ」
そいつはメガネを掛け直すと、苦笑混じりに俺を見上げて、

「いえいえ、そのような奇抜なファッシヨンなどしようものなら、お父様に何と言われ、」

セリフの途中で石のように固まった。

「髪型違うけど、やっぱり同じ顔だ。ももは、だよな？ お前さん、こんなところで何してんだア。それに、そんなアニメチックなメガネなんにかけて——近くでコスプレ祭りでも開催してんの？」

「え、あの、ももはさんって。ど、どなたのことを言っているのか私にはさっぱり……」

と、視線を逸らされる。

だがしかし。俺はダツシユから貰った『疾駆』の脚力で、すかさずに眼前へと回り込む。

「おい、コラー！ さっきの衝撃で頭でも打ったのか。俺だよ、俺俺。シヤクヤクだつて」

「し、知りません、しやくつちなんて知りませんから。大体、オレオレ詐欺なんて今どき流行りませんよっ」

いやいや。俺をしやくつちって呼ぶのはチビ天だけだろ。

なんでそんなバレバレのウソをつくんだ、こいつは。

第四十八石：急襲のシャオメイ

「なあ、チビ天どーしたんだよ?」

「ぷいっ」

「いつものヘンテコな喋りはどーしちまったんだ」

「ぷいっぷいっ」

そっぽを向いては、前に回り込むを二十回ほど繰り返したのだが、

「あちちち! あ、足が、ブツ壊れちまうっ」

先に音を上げたのは俺の方だった。オーバーヒートよろしく尋常じゃない熱を放つふくらはぎ。

ダッシュリングの凄さは認めるが、これは注意して使わないと身がもたねえな……。

とりあえず、アイスブレスを吹いて応急措置をしておこう。

「フー、フー……。お前なあ、いい加減に認めろよ」

「だから人違いですってば」

うーむ、なんて強情なヤツなんだ。このままじゃ埒が明かねエ。

仕方ない。こうなりや伝家の宝刀を抜くしかないな。

「正気を取り戻してくれよ、貧乳ちゃん! 胸が小さいからって現実逃避は良くないぜ。まことに残念ながら一生そのままかもしれないけれども、むしろそれが好きだって男も中にはいるハズだ。ほとんどの男は大きいに越したことは無いって内心思ってるケド、それは今は関係ない。だから、いつものお前に戻ってくれっ」

「……ぷいっ」

おかしい。おかし過ぎるぞ。

こりゃあ、本気で頭を打ったのかもしれないな。さすがに心配になつてきたところで、

「お、委員長めっけ。こないなトコでなにしてるんや?」

「もうトーカさんってば、駅はこちらじゃありませんわ。まあ方向音痴なところもとても魅力的なのですが……ポッ」

なんてことを口々に言いながら、背後から二人組みの少女が現れた。

おそらく、ゆりなやももはと同じぐらいの年齢だと思うのだが、どちらも育ちの良さそうな服を身にまとっている。

いや、よく見りゃあ今のチビ天もかなり上品な格好をしているな。真っピンクな肩出しワンピースなんていう露出のある服も着ていなければ、持っているカバンも普通のどこにでもありそうな茶色いカバンだし。

まあ、羽つきナップサックがそもそも異端過ぎるつつう話だけれども。

「あらあ。トーカさん、この白髪のかたは一体どちらさまですか」

「なんやあ、委員長の知り合い？」

「っーか、さっきから気になっていたんだが、トーカさんって何のことちゃ。しかも、委員長って？」

「そう、ももはに訊ねたのだが、そいつは俺に一瞥もくれずにお行儀よくカバンを両手で持ち直すと、

「いえ。このような不躰な人、知りません。それより、二人ともお稽古に遅れてしまいますよ。早く行きましょう」

「え、ちよつと。おい……チビ天ってば」

止めるも声も空しく、そそくさと立ち去ってしまうももは。

目を点にしたまま、硬直していると、クロエが俺の頭に飛び乗ってきた。

「まあまあ、あいつにも色々あるんだろ」

「色々ってなんだよ。おめえさん、なんか知ってんのか？」

「んー。オレの口から言ってもいいけど、いずれ本人の口から理由を話すときが来ると思うぜ。ま、オレらはオレらで仲良く散歩としやれ込もうじゃねーの」

チツ。相変わらず歯切れの悪い言い方をするヤツだ。

しばらく景色を眺めながらゆったりと歩を進めていたのだけれども……。

やっぱリムカつくもんで。

「なんでえい、なんでえい！ なーにが『このような不躰な人知りません』だ。けつ、お高くとまりやがってよ」

両手を頭の後ろで組みつつブーたれる俺に、

「まあだ言つてやがんのか。シラガ娘つて意外にナイーブだよな」

「あんだとオ？ 別に気にしちやいなーよ」

「だったら何べんも同じことグチるなつて。大丈夫さ、あいつはシラガ娘のことちゃんとお友達だと思ってるぜ」

「へっ、そいつはどーだかねエ」

てか、いつまで頭上に居座る気だコイツ。

俺のアホ毛で楽しそうに遊んでいるところをあまり邪魔したくはないが。

そろそろ頭が痒くなってきたぜ。

「しまった。触覚ボクシングに夢中でまた忘れるところだった。シラガ娘に充填の説明をしておかねーと。ちよつと霊鳴を取り出してみそ。言つとくが、霊薬が切れてる状態じゃあ呼んでも飛んで来ないからな」

「ん……ああ、わかりましたんで」

言われるがまま、ポツケから冷たくなつた霊鳴石を取り出す。

ぼんやりと淡い光を放っている式式だったが、その光もすぐに消えてしまいそうだった。

「見るに堪えんというか、なんとも元気の無い試作型ちゃんだけれども」

もはや事切れる寸前だぞ。こりゃあ元に戻るのに時間がかかりそうだ。

「あつちやー、霊薬すつからかん状態だな。とりあえず、言い方はなんでもいいから霊鳴に眠るよう命令するんだ」

「オーケイ。眠りやがれっ、霊鳴！」

命令するや否や、元気良く遙か彼方へと飛んで行ってしまふ霊鳴石。

「ありやまあ。あんな元気どこにあつたんだ？」と俺が目丸くしていると、

「元氣そうに見えるが、アレは単に海の魔力に引き寄せられてるつてだけ。戻すときは霊薬ゼロでもいいが、呼んだときに消費する魔力は

石自体の霊薬から捻出するから、ゼロだと飛べなくなるんだ」

「ふーん。海、か。そういや、説明書のどっかに海に戻せとか書いてあったな。ということは、試作型ちゃんは今ごろ海の中でおねんね中ってワケ？」

「そうそう。一時間も寝かせれば五十パーセントくらいには回復するぜ。満タンにするなら六時間はかかるけどな。あ、ゼロの状態から満タンだと十二時間はかかるんだった」

「そんなに時間がかかるのか……。つまるところの安易に霊薬を使い切るのはマズイってことだな。」

「おー。シラガ娘はポニ子と違って、物分りが良いな」

「伊達に長生きしてないんでね。つっても五年程度だけでも。それより、気になることが一つだけ。確かダツシユ戦の時点で霊薬を使い切ったはずだと思っただが、起動も出来たし、少しの時間だが乗れたのは何でだ？」

「ああ、それか。説明書に書いてあったと思うが、海で眠らせるという選択肢の他に、使用者の心身を休ませるといった形でも充填が出来るんだ。これは他の『レイメイ』にも共通することなんだが、簡単に言えば、食事、睡眠なんかで霊薬が溜まる。もちろんそれは微々たる量で、それぞれの眠る場所に——式式の場合は海に戻るのがベストだけだな」

なるほどな。スゲエ面倒くせえシステムだっていうのが分かった。

霊鳴石を作ったヤツめ。無駄に手の込んだ仕様にしやがって……。

眉間にシワを寄せてブツブツ文句を言っていると、クロエがぴよーんと飛び降りて、後ろ歩きを始める。

「ま。ま。要は霊薬が無くなる前に、さっさと眠らせればいいつつう単純な話さ。小まめに充填しておけば、憂いなし！」

ゴマをするような前足の動きに、意地悪心をくすぐられる。

「はあ。魔法少女ってヤツはなんでこうも面倒くせエのかね……。だりいぜ、まったくもって。やめちやおうかなア」

なんて大げさに言ってみたりして。

「んな、すぐに面倒くさいって言わないでくれよ。頼むぜ、シヤクヤク

様つ。ポニ子とコンビを組めるのは異世界中探しても、シヤクヤク様
しかないんだって」

「いっひっひ。まったく、しょうがねえなあ。そこまで言うんなら
やってやらないでも、」

言いかけたところでハタと足を止める。

な、なんだ、この寒気は……。

それは俺の前を歩いてきたクロエも感じていたようで、先ほどとは
一転し、緊張した面持ちで辺りの様子を窺っている。

気味の悪い不快感が、ぬめりと俺の背中に滑り込む。

この感覚、いつかどこかで――

「……魔法少女、やめたければやめてもらっても構わないわ」

後ろから迫ってくる殺気のもった声に、身動きが取れずにいる
と、

「ねえ。そんなに面倒ならさ。さっさと退場しちやいなさいよ」

こ、今度は前から声が聞こえてきたぞ……。

違う。前方どころじゃない、四方八方から聞こえてきやがる。

「あたしのいる場所すらも分からない『Level II マイナー』如きの
魔法少女。これから先を考えると、いつそ哀れね」

目の前。何も無い空間に亀裂が入ったかと思うと、その中から長い
赤髪の少女が現れた。

いや。赤髪の少女なんて回りくどい言い方をするまでもない。

こんな、敵意むき出しといったあからさまにドス黒い感情をぶつけ
てくるヤツは、一人しか知らない。

そう、一人しか――

「シヤオメイ……ッ！」

第四十九石：紗華夢 夜紅

恐怖心ゆえか、激しさを増す胸の鼓動。

脱退記者会見の時よりは幾分かマシだけれども……それでも、恐ろしいものは恐ろしかった。

つーか、なんで毎度毎度ご丁寧にビビってんだよ、俺の心臓は。相手はただのガキンちよじゃねエか。しつかりしやがれっつてんだ。

そう、俺が右胸を押さえながら歯を食いしばっていると、シャオメイが不思議そうに眉根を寄せた。

「気安く呼び捨てにすんじゃないわよっつて言いたいところだケド……。その前に、なんであたしの名前を知ってんのよ?」

「な、なんでっつて。そりゃあ、今朝のテレビでお前さんを観たからな」
「ああ、そういうことだったの。はっ、有名になったものねえ……このあたしも」

左手を腰にあて、まるで他人事のように薄く笑うシャオメイ。

「有名になったもなにも、お前さんトップアイドルだったんだろ?」

たしか、えーと。ハッピーラピッドの赤をやってたんだっけか」

「さあね、どうだったかしら。昔の話なんて更々興味無いのよね」

「昔っつて、辞めたの今朝じゃねーか」

「チツ、いちいち細かい男ねえ……」

小さくそれだけ言うのと、ぼつの悪そうな顔をして目を逸らす。

前職の件については、あまり触れられたくないって感じだな。

まあ、それはともかくとして——こいつ、意外に話せるヤツじやねえか。

もしかして、俺が勝手にビビっていただけで、本当はそんなに悪いヤツじやないのかも……。

言ってもまだ十歳にも満たない子どもだしな。そう思うと、ホツとしたのかすぐさま動悸が鎮まっていくな。

安心したというのもあるが、腕を組んだまま上空を仰ぎ見ていると、いったそいつの無防備さ加減も相まって、俺は改めてやつこさんの格好を観察することにした。

やはり長いツインテールの赤髪が一番に目に付くが、次いで目立つモノはと言われたら、そりやもう黒いマントしかないだろう。

それはシャオメイの体軀をすっぽり隠すほどのバカでかい代物で——というより、これ程までになるとマントではなくローブと言ったほうが正しいのかもしれないねエな。

んでもって、そいつが動くたびにチラチラ見える中の服装——オレンジ色のフリルワンピースについてだが、これがまあ短いなのなのて。

ローブは丈長なのに、どうしてワンピースはこうも、

「おい、バカシラガツ！」

「うお!?」

急に耳元で怒鳴られたもんだからたまらない。

俺が目を白黒させていると、

「なにやってんだ、ボーっと見てる暇があったら逃げろって！ ふざけるのも時と場合を考えてくれよな、死にたくなかったらダツシユを召喚しろ！」

これはこれは。クロエさん、すげえキレてらっしやるぞ……。

怒髪衝天とはまさにこのことだな。凄まじく毛が逆立っているぜ。

だがね、と。俺は眼前でまくしたてる黒猫の背中を一つ撫でながら、

「死にたくなかったらって、何を物騒なことを言ってるやがるんでえい。こいつもピースのババアに選ばれた魔法少女なんだろ？ だったら俺たちの仲間じゃねーか。存外、悪いヤツじゃあなさそうだし……」

言った次の瞬間。

こみ上げてくる吐き気と共に、目の前がぐにやりと歪む。

「か、かは……っ！」

なんだ、なんだよ、これ。一体なにが、起こってるんだ？

立っていられるハズもなく、その場にうずくまっていると、

「……あたしの前でピース様を侮辱するだなんて、どこまでもバカな男」

内臓が体中をグルグル這いずり回っているかのような感覚。

そのたびに、胃酸混じりのヨダレが口からだらしなくたれ落ちる。前からにじり寄って来るシャオメイの気配に、かろうじて動く頭を持ちあげようとしたのだが、驚くほどの間もなく後ろから踏みつけられてしまった。

また、こいつ妙な移動方法を……。瞬間移動の魔宝石でも持ってやがんのかよ。

「口は汚いクセに、白くて綺麗な髪をしてるわねえ。純白ってヤツかしら——穢したくなるくらいに、ムカつく色ね」

そいつはそう呟くと、凄まじい力で俺の頭を何度も踏みつける。

「何も知らない、何も知ろうともしない。何も解らない、何も解ろうともしない」

「ぐはっ！」

何度も、何度も、何度も。

意味が分からないことを恨み言のように並べながら——狂ったようにシャオメイは続ける。

「そうやって、真っ白のままいつまでもいられると思ってるのかしら。自分だけは白いまま終われるとでも思ってるのかしら」

機械のような冷たい口調とは裏腹に、激しさを増す足の動き。

何も言えずに、ただやられるがままとなっている俺に飽きたのか、そいつはピタツと足を止めて、

「……あたしシア、あんた達が模魔を捕まえるところ全部見てたのよね。十番石ネオン、六番石ホバー、八番石ダツシユ——この三つを捕まえるところを、全部ね」

俺のアゴをクイツと持ち上げる。

三つだって？ ホバーとダツシユは知っているが、ネオンなんて石知らねエぞ。

そう言おうとしたのだが、口の中を切ってしまったらしく、上手く言葉が出ない。

「疑問だって顔をしているわね。それはネオンのことかしら、それとも全部見てたってところかしら」

口角を上げて、俺の頬を優しく撫でるシャオメイ。

「ネオンは、あんたがこの世界に来る直前に『猫憑き』が捕まえた石のことよ。ランクはたしかFだったかしら。あまりにクス石過ぎてどーでもいいケド」

それからそいつは訊いてもいないのに、全部見ていたことについて話し始めた。

なんでも彼女は魔法少女の中でも、特別な存在らしい。ピースのヤロウの片腕と呼ばれる地位、紗華夢 夜紅（しゃげむ やこう）というふざけた名を持っているとのことだ。

チビ助のような旧魔法少女でもなければ、俺のような新魔法少女でもない、もつと格上の魔法使い。

『ヤコウ』の力を持つてすれば、どれだけ離れていようとも模魔や他の魔法少女の居場所を知ることが出来るし、頭の中にそいつらの映像を俯瞰視点で映すことも可能だとさ。

プライバシーもへったくれもねえ話だね。

以前、クロエが強力な魔力を持つモノ同士は惹かれ合うし、遠くに居ようとも相手を感じることが出来るとか言っていたが、紗華夢の持つ能力はそれを軽く凌駕していた。

もつと言うならば、さつきみたいに瞬間移動よろしく闇の中から飛び出したり、魔力波を発しただけで相手を倒れさせたりも出来るってワケだろ？

シャゲムだかジュゲムだか知らんが、模魔の居場所が手に取るように分かるってだけで反則級なのによ。いくらなんでも優遇されすぎだつて。

「つたく、俺も紗華夢のような瞬間移動能力が欲しかったぜ」

そう言い捨てたのを聞き逃さなかったようで、そのシャゲムヤコウさんとやらは俺のキヤミをグイツと掴むと、

「はっ、バツカバカじゃん。いくら夜紅様でも、瞬間移動なんて出来ないわよ。あれは『第七番模造魔宝石シャドー・ザ・ライラエル』の能力っ！」

ふふんと自慢げに中指にはめた黒い指輪を見せつけながら、そいつは続けてこう言った。

「それも、あんた達のようなザコ共が持つクズ石とは違うの。このあたしのシャドーはランクAの凄い模魔なんだから！」

シャオが、まるで買ってもらったばかりのおもちやを嬉しがる子どものように指輪——ライラへと恍惚の眼差しを向けたその時だ。

俺の前にヌツと巨大な影が現れたかと思うと、

「てめえ、クソガキが。よくもシラガ娘を傷つけてくれたなあ……？」
「きゃあー！」

はるか後方へとぶっ飛ばされるシャオメイ。

どうやら巨大化したクロエが何かしらの魔法をあいつに当てたようだが(でかい背中が邪魔でよく見えなかったぜ)、それでもさすがは夜紅サマと言ったところか。そいつは器用にも空中で指輪に口づけをしやがった。

つまりとこのシャドー召喚。

次の瞬間、背後、何も無い空間に裂け目が入り——そして、そこにすっぽり落ちると、何事もなかったかのように前方から闇を引き裂いて現れる。

もちろん無傷だ。普通ならばあの勢いで地面に叩きつけられたらかすり傷一つでは済まないだろう。

これがシャドーの能力。

これがランクAの模魔。

やられながらも一瞬の判断でシャドーを召喚したシャオメイにも恐れ入るが、この模魔の能力は素人目でも飛びぬけた能力だと分かる。

ここまでくると、もはや感嘆の言葉も尽きてしまうな。鬼に金棒なんてレベルじゃねえ。

「第一番大魔宝石、クロエ・ザ・マンデイ……！ あんた、魔力空っぽのハズじゃ無かったの？」

不意をつかれたのが悔しかったのか、ギリツと唇を噛みながら睨みつけるシャオに対して、

「まあな。ま、あんだけ『魔気』を垂れ流しにしてりゃあ、イヤでも腹が膨れるぜ。味は最悪だったけどな。にっしっし」

巨大な尻尾を一つ揺らして、余裕そうに返す。

第五十石：シャドーVSダツシュ

「つか、魔気ってまた妙なワードが飛び出したな。

紗華夢なんたらでも混乱してるつつうのに、もうこれ以上は処理しきれねーぞ。

「ふうん、あたしの魔気を食べて自分の魔力へと変換できるだなんて。とんだ泥棒猫もいたものね」

「まあまあ、あんまし褒めてくれるなって」

黒虎はそう軽く笑ったあと、小声で俺に、

「……シラガ娘、おそらく今のあいつは大魔宝石との契約はおろか、霊鳴の封印もまだ解いていない状態だ」

ん、どういうこった？

シャドーは持つてるのに、杖も霊獣も無いって意味がわからん。

じゃあどうやってシャドーを捕まえたんだ。いくら紗華夢でもすっぴんでランクA捕獲なんて無理じゃないのか。

そんな俺の問いに、

「分からねえんだよなあ、それが。とりあえず、オレが時間を稼ぐからその間にダツシュを召喚して逃げるんだ」

「オーケイ、わかりましたんで。俺だって、今は杖も霊獣もいねーしな」

そりゃ、逃げるしか手はないぜと言いかけたところで、シャオメイがくすくすと笑った。

「バツカバカじゃん。丸聞こえだってーの。大体さあ、あんたが百パーセント充填された霊鳴を持っていようが変身しようが、ザコはザコなのよね。まさか、このあたしに勝てるなんて夢見ちゃってるワケ？」

「……………」

ひでえ煽りをしやがる。

夢見る以前に、俺は端から戦う気なんて微塵もねえよ……。

ただ仲間が増えて、石集めが楽になるなって浮かれていたただけだったのに。

「あーあ、つまんない。ここまで言われてんのよ？ 集束の一つでもして、あたしを困らせてみなさいよ」

「集束って言われても……。やり方、知らねえし」

「あはははっ、なーんにも出来ないのね」

「やめろ。シラガ娘は、まだ魔法使いになつてから日が浅いんだ。あまりムチャなことを言うんじゃないわねえ」

俺の前へと守るように進み出たクロエに、シャオはさつきまでの笑みを消した。

そして、酷く冷たい表情で俺を睨みつける。

「毎回そうやって、誰かに守ってもらってばかり。ホバーのときもそう、ダツシユのときもそう……。反吐が出るわね。今日は様子見だけのつもりだったケド、気が変わったわ。あんたなんて要らない。あたしのシャドーで仕舞ってあげる……」

スツとシャドーの指輪を唇まで近づけた、その時。

雷鳴を響かせながら、何かが上空を駆け抜けていった。

一瞬しか見えなかったが、あれはもしかして――

「猫憑きの霊冥石零式!?!」

驚いた表情で空を見上げて言い放つシャオメイに俺は確信した。

ゆりなだ。あいつが、異常事態に気付いたんだ……!!

「チツ、どうして猫憑きが……。マンデイ無しであたしに気付くはずがないのに」

霊冥が飛び去っていった方向を憎々しげに睨みつけたあと、そいつは俺へと向き直った。

「何よその顔。あんた、もしかして期待してんの?」

「き、期待って何のことだよ」

「また守ってもらえる。救ってもらえるってき。ピンチのときは必ず猫憑きが飛んできてくれる……。いいご身分よねえ。ホント、羨ましい限りだわ」

「うるせえっ、いちいち嫌味なヤロウだな!」

「あら。褒めたつもりだったんだケド。日本語ってイマイチよく分からないわ」

そう言つて、わざとらしく肩をすくめるシャオメイ。

クソツ……いつまでもこんな奴の悪罵に付き合つてられねエや。

ゆりなが霊冥に乗つてここにやってくるまでの時間、ダツシユを使つてなんとか稼がせてもらうぜ！

「出てきやがれつ、ダツシユ・ザ・アナナエル！」

右手をひねり、勢い良く指輪にキスをした——のだけれども。

「あれ!? おいつ、ハチマキ娘！ 出番だぞっ」

何度もキスをして召喚を試みるが、一向に出てくる気配が無い。

あのチビ鯨、まさか寝てるなんてオチじゃないだろうな……。

指輪を見てみると、宝石中心部にある液体——金色の海で小さな鯨が気持ち良さそうに泳いでいるではないか。

「あつ、いるじゃねーかテメエ！」

サボリやがつて、と続けようとしたのだが急にスカートを引つ張られ、尻餅をついてしまう。

一体何事かと見上げると、先ほどまで俺が立っていた場所にサツカーボール大の暗い穴がぽっかりと開いていた。

幸い、それは上半身部分だけだったから助かったのだけれども……。

いや待て、徐々に広がっていつてるぞ！

「あわわわっ」

慌ててそのままの体勢で後ずさっていると、何かが俺の背中に当たる。

振り向いた先には、俺のスカートを啜えた黒虎が険しい表情で立っていた。

「落ち着けて、シラガ娘。あいつの持つシャドーは移動手段であると同時に、対象を闇の中へと葬ることが出来る強力な模魔だ。だが攻撃時に限り、発動までに時間がかかるのがネックなんだ。さつきみたくボーっとしているとすぐに飲み込まれるが、『疾駆』で逃げ回っていればそれほど恐ろしい相手じゃない」

「そ、そうは言つてもよう……。何回召喚しようとしてもハチマキ娘のヤツ、出てこねーんだ」

もしかして俺の接吻がイヤなのかねえと、返されたスカートの方
スナーを上げつつ言うと、

「そりゃ呪文無しで召喚できるわけねーだろっ!」

モーレッツに怒鳴られてしまった。

いやいや。召喚に呪文が必要なんぞ、今初めて知ったぞ。

ゆりなに呼び出したい模魔の名前を呼んで、指輪にキスするだけで
いいって言われたんだぜ。

それにシャオメイだって、呪文無しでシャドーの召喚をしてるじゃ
んか。

そう、俺が疑問の数々を口にするのと、

「おめえは二人と違って、レベルが低いからな。呪文無しじゃあ、ま
もに召喚出来ねーんだよ」

「レベルって——さっきあいつが言ってたレベルツうんたらってヤ
ツのことか?」

だが、返答は無かった。

再びスカートを引つ張られたからだ。今度は尻餅程度では済まな
く、後ろへと強い力でぶっ飛ばされる。

しこたま堀へ打ち付けられた腰をさすっていると、シャオメイが大
笑いした。

「きやは、あははっ! そうよ、あんたはあたしや猫憑きとは違うの。
低レベルなの。LevelⅡマイナー程度で呪文の省略なんかした
ら効果が弱まるどころか、出すことすら無理だと思うわ」

「へえ、そうだったのかい。そりゃご親切にどーも……」

細く長い赤毛を指先でクルクルと弄びながら言う、そいつの余裕つ
ぷりったら。

人を苛立たせるコンクールに出たら間違い無く優勝だろうな。

「だからあんたの場合、呪文はちゃーんと全部言わないとダメよ。こ
ういう風にね……」

「完全召喚をするつもりか!? 走れっシラガ娘!」

ただならぬ雰囲気クロエが叫ぶ。

なにが始まるのか分からないが、いささかにヤバそうだな……。

退避するべく俺が立ち上がったと同時に、そいつは呪文を唱えた。
「我は欲す。汝が纏う忌むべき力を——来なさい、シャドー・ザ・ライ
ラエル！」

シャオメイの背後に薄っすらと黒髪の暗そうな少女が現れたかと思
うと、突如として俺の周り——全方向の空間に数多の亀裂が入る。

「いやはやどうも……。走れって言うが、これじゃあね」

さつきと違い、凄まじいスピードで広がっていく穴に、俺はすぐさま
決断する。

こうなつたら一か八かだ——あいつの呪文を俺も使うつきやねえ
！

「我は、我は欲す。汝が纏う忌むべき力を……。今度こそ頼むぜ、ダツ
シュ・ザ・アナエルウウ！」

見よう見真似で呪文を唱えてキスをすると、俺の背後にぶんすこと
怒った顔のハチマキ娘が現れた。

そいつは、あらかじめ用意していたのであろうメモ帳の切れ端を、
俺の眼前にずいと押し付けてくる。

それには拙い字で『おまえさん、もつと早く、あなな使え。危なっ
かしくて、見てられないし』と書かれてあった。

「ご心配かけました……」

ぺこりと頭を下げようとしたところで、何故か両足の力カトから白
煙が上がっているのに気付く。

「なんだなんだ!?!」

覗き込んだ直後、大量の火花が眩しく足元を照らし——そして、い
つの間にか俺は空中へと舞っていた。

『間一髪。シャドーが自分の髪の毛を使って、おまえさんを引きずり
込もうとした。だから、あなな、最善の方法を取った。結晶爆破、反
動、強制ジャンプ』

「よ、よくわかんねーけど、とりあえず助かったぜ。さんきゆうな、
ダツシュちゃん。にしても、これが模魔召喚の力か……。素晴らしい
ぜエ、まったくもって」

変身も杖も無しで、こんな便利な能力が使えるたあ、なんとも気前

の良い話だねエ。

なんて飛びながらに喜んでいたのだが、度が過ぎる跳躍に段々と顔が引きつってくる。

「えーと、それでダツシユちゃんよお……着地がスゲー痛そうなんだけれど」

未だに俺の背後で悠々とハチマキを風になびかせているチビ鯨に訊いてみると、

『へーき、よゆう。おまえさんの足裏に、自動走行可能な結晶を生成済み。それ、着地の衝撃も、よゆう』

腕を組みつつ、事も無げに言つてのける。

確かに着地に全然衝撃が無かったのだけれども——なんか、キヤラ変わってねーか。

ちよつとどころか、かなりカツコいいぞこいつ。

「いやあ、何から何まで頭があがらないぜ。チビ鯨がこんなに頼れる奴だったなんて……」

と、素直な感想を述べてみると、ニコツと微笑んで俺の頭に手を乗せるダツシユ。

『おまえさん、杖無い、大魔宝石もない。今、あなただけ。だから、あななが頑張る。全力で、守るの』

「守る……」

そいつの笑顔にズキツと胸が痛む。

シャオの言う通りだ。

チビ助も、コロナも、ダツシユも——俺を守ってくれる。守ろうと必死になってくれる。

だが、俺は。俺は……。

「なにこれ、バグってんのオ？ 模魔が喋ってるだなんて。いえ、心があるだなんて、ありえないわ」

シャオが俺と後ろにいるダツシユを交互に見て、顔をしかめる。

こいつもコロ美と同じこと言つてやがるな。そんなに模魔が喋るのが珍しいのか？

首を傾げていると、そいつは自分の背後にポーッと佇む黒髪のお

かっぱ少女を怒鳴り散らした。

「ちよつとシャドー、あんたは話せないの？ ランクAなのにランクEのクズ石なんかに劣るっていうの!？」

しかし、シャドーは答えない。

それどころかピクリとも動かんぞ。一回だけ、瞬きをしたがそれだけだ。

聞こえているのか聞こえていないのか……どこか遠くを見ているような目がとても不気味だった。

「いいわ。それなら、あたしがピース様からもらった紗華夢の力で、あいつの声を潰してやる……。あたしのシャドーが一番なんだから！」

第五十一石：ゆりなとシャオメイ

言うど、マントをひるがえし——スカートの中から長細い変なものを出しやがった。

それはまるで生きている蛇のような動きで俺たちを威嚇する。

「く、クロエさんよお。ありやあ、一体どんな魔法なんでえい」

股下からニユルリと伸びる、お世辞にも可愛いとは言えないソレについて訊いてみたのだが、いつの間にかクロエの姿が消えていた。

『さつき、あなな言った。大魔宝石いない。今、おまえさんと、二人だけ。ぽっ』

大魔宝石ってコロナのことだけかと思っていたが、その中にクロエも入っていたのか。

またあんにやろう勝手に消えて……。ていうか、なんで頬を染めてやがんだ。

『とりあえず、あの尻尾、怖いから逃げる。自動走行の許可欲しい。望むならおまえさんの意思で走れるように、結晶調整する』

「なるほど、言われてみれば確かに尻尾に見えるな。あ、初めてなんで自動走行で頼むぜ」

『おっけ』

途端、爆音と共にホバー走行で急速後退する俺。

「どわわわっ、もうちよつと丁寧に……」

『無理。あの人の尻尾、思った以上の動き。あななのスピードについてくるなんて、よっぽど』

ダツシユの言う通り、どこまでも伸びて追っかけてくるあの触手——じゃなかった、尻尾はかなり厄介だ。

それだけならまだしも、シャドーの完全召喚もまだ生きているようで、俺が走り抜けたところにボコボコと穴が開いていく。

すんでのところでそれらを回避するが、チビ鯨の余裕を無くした表情を見るに、状況の深刻さが窺える。

かなりヤバイかもな……。

「あんまり、無理すんなよ。キツくなったらいつでも引っ込んでいい

からな」

『へーき、よゆう。あなな、頑張る』

口ではああ言ってるけれども……。

さすがに、こいつだけ働かせて俺だけ見てるだけってワケにもいかねエって。

まだ数十分しか経っていないが、少しくらいだったら霊鳴も動くだろう。

ダツシユの負担を出来るだけ軽くしてやらなきゃな……。

そう考え、杖を呼ぼうと手を掲げたその時、小さな声が聞こえてきた。

「あ、あんだあ？」

チビ鯨の声じゃないのは確かだ。なにを言ってるんだろう——と耳をすませてすぐに、

「ダツシユ、今すぐ指輪の中に戻れ！」

『えっ？ だから、あなな、へーきだし。おまえさん、守るし』

俺は続けて叫ぶ。

「これは命令だ！ ご主人様の言うことを聞け！」

『りよ、了解だし』

背後のダツシユが消えた直後、そいつがさつきまでいた空間——頭のあつた場所に穴が開き、そしてシャオの尻尾が飛び出した。

鋭利な刃へと先を変えたそれを見上げて、俺は喉をゴクリと鳴らす。

もし、もしも一瞬でも戻すのが遅れていたら。今頃、ハチマキ娘は……。

「しゃっちゃん！」

不意に声を掛けられ、振り向くと、そこには杖に跨ったゆりなが浮かんでいた。

「おお、チビ助！ って、その格好……お前さんいつの間に変身したんだア？」

黄色いネクタイに、黒いドレスといった旧魔法少女のコスチューム。

ホバー戦以来の魔法使いモードだった。

改めてその姿を見て思ったが、相変わらずチビ助によく似合っているというか、なんとも可愛らしい格好だな。

いや、可愛いというよりカッコ可愛いというべきかね。この窮地な状況も重なってか、とても頼もしく見えるぜ。

そんなことを考えていると、カランという乾いた音が耳に入ってきた。

音のした方へと顔を向けてみると、黒い杖が地面へと落ち――

「うわああああんっ！」

いきなり飛びつかれ、また盛大に尻餅をついてしまう。

「いつてつて。ど、どうしたんでエい？」

「ひっぐ、無事で、しゃっちゃん、無事でよかったよう……。クーちゃんが、恐い敵さん来たつて。少しでも遅れたらしゃっちゃん死んじやうかもつて、だから、だからっ」

泣きじやくるチビ助に抱きつかれたまま、ただひたすらと困惑する俺。

ていうか、困惑どころじゃないぞ。

すげえ力で押さえつけられるわ、ぼさぼさの長い黒髪が鼻やら目やら、至るところの穴に入ってくるわで、むしろ苦しいぜ。

チビ助め、変身後の力はムチャクチャになるのを忘れてやがるな……。

このままじゃ無事とは言えない体になっちゃうので、

「ばーろおい、俺様はそう簡単に死なないっつーの。どこの虫さんよろしく素早いのと、しぶといのが取り柄なんでさア」

言つて、全力でチビ助の肩を押し戻す。

ぐおっ。なんて力だ。お、重すぎるぜ……。

顔を真っ赤にして踏ん張っていると、

「ふえっ。どこの虫さんつて、チョウチョさんのことっ？」

と、急に体を起こしたもんだから勢い余って、

「きゃっ！」

「わっぷー！」

今度は俺がゆりなを押し倒す形になってしまった。

わりイわりイと言いつつ、顔を上げたのだけれども——倒れたまま俺を見つめるそいつの潤んだ瞳を見て、胸に痛みが走るのを感じた。チクつとする痛み。初めて会ったときの、あの苦手な瞳。

慣れたハズだと思っていたのに……。どういうこつた、こりやあ。

「しや、しやつちゃん?」

「……………」

時が止まったかのような一瞬。

「はーあ、やだやだ。人前でイチャついてくれちゃつてさ。この紗華夢様がいるってえーのに、危機感つてものが無いのかしら」

背後から聞こえるシャオの呆れた声に、慌てて飛び退く俺たち。

そうだった、こいつが居たんだ。

胸の痛みの正体なんざ、今はどうでもいい。とにかく、シャオメイを——ジュゲムなんたらをどうにかして撃退しねエと。

「あの子、もしかしてシャオちゃん……?」

隣のゆりなが自分のネクタイを握りしめつつ言う。

「ああ。顔色こそ悪いが、あいつは間違いなく本物のシャオメイだ。お前さんの好きだったハッピーラピッドのリーダーさんだぜ」

「そっか……」

と、辛そうに俯くチビ助。

ううむ。そりやあ、そうだよなあ。

自分の憧れだったアイドルが急に『敵』として現れたんだ。

普通は混乱するだろうし、ましてや戦うなんざ絶対に無理な話だろうよ。

いやはや、どうしたもんだか。そう腕を組もうとしたところで——

「すっ……いー!」

そいつは、バツと顔を上げたかと思うと、

「すっ……いよっ! 本物のシャオちゃんだっ、わーい、わーい! 芸能人さん初めて見たよっ」

ぴよんこぴよんことその場でジャンプし始めたではないか。

まさかの反応にズッコけそうになる俺。

「あ、あのなア……」

「にやはは。やつぱり近くで見るとめっちゃんこ可愛いなあ、お肌もちもちつやつやだし、髪もさらさらふわふわで綺麗だし。ねっねっ、しゅっちゃんもそう思うでしょー!」

そう思うでしょって言われましてもねエ。

だが、そいつの爛々と輝く眼に気圧された俺は、

「えっ、いや。い、言われてみれば可愛いかもな……」

と言う他なかった。

実際、性格はアレだけれども、見た目だけは飛び抜けてるからな。まあ、目の下のクマは相変わらず酷いが。

「いやあ、もちちゃん居ないの残念だよ。そうだった、もちちゃん用にサイン書いて貰っちゃおうかな。ついでにボクの分も——あつ、サインペンないや……。ど、どうしよう。もうこんなグーゼン、二度と無いかもなのにい」

喜色満面の体ではしゃいだかと思うと、急に落ち込んだり……。

手の付けられない興奮状態のチビ助に、俺はやれやれとこめかみに人差し指をあて、嘆息した。

第五十二石：藍色の光

「おいおい。チビ助、頼むぜエ。サインが欲しいだなんて、んな悠長なこと言ってる場合かあ？」

「あら。サインぐらい何枚でも書いてあげるわよ。ペンも、こんな時のために持ち歩いてるし」

あつさり了承したかと思うと、マントの中に手を突っ込んでペンを取り出すシャオメイ。

用意が良いつつーか、それよりも意外な反応に驚いたぜ。

てつきり、『バツカバカじゃん』とか言って一蹴するものとばかり思っていたのだが。

「わ、わ。シャオちゃん、本当に書いてくれるの!？」

「だから書くって言ってるじゃん。なんだったら、このペンもあげよっか？」

ひらひら振られたペンに引き寄せられるように、シャオのもとへと走っていくチビ助。

「そ、そのペンってハピラピが結成したときに記念で作った、すっごく大事なペンじゃ……」

「へえー。よく知ってるわね。この世に七つしかない特別なペンで、それぞれメンバーの誕生石が埋め込まれてるのよ」

「確かシャオちゃんは十二月だから、ラピスラズリだっけ？」

「うげっ。本当によく知ってるのね……」

「ボク、シャオちゃんの大大、だーいファンだもん！ シャオちゃんが写ってるポスターとかフロクいっぱい持ってるとよ。でも、そんな大事なのボクなんか貰っちゃっていいのかな……」

「大事ななんかじゃないわよ、こんなの。どーせ今日で捨てようと思ってたし、あたしのファンに使ってもらえるんなら、こいつも喜ぶと思うわ。別に使わないで売ってもいいケドね。五十万くらいで売れるんじゃない？」

「う、売らないよ！ 一生の宝物にするもんっ」

そんな二人のやり取りに、俺はうーんと唖る。

なんなんだ、こいつは。俺にはスゲエ態度悪いクセに、ゆりなにはやけに優しいじゃねえか。

怪しすぎるぜ……。一体なにが目的なんだか。

そう、訝しげな目で見ていたのがバレたのか、そいつは赤毛ツインの左側をふわつと払って、

「なによ、なんか文句でもあるワケ？」

まるで虫けらを見るような目つきとは、よく言ったものだ。

「現実にこんな顔をするヤツがいるとはね……。」

俺が「別に」と言って、顔を背けると、

「ねえ、猫憑き」

ゆりなへと視線を戻すシャオメイ。

「ふえっ。ネコツキってボクのこと？」

おそらく猫型の霊獣であるクロエと契約してるからそう呼んでるんだろうな。

そいつは戸惑うチビ助に構わず、

「サイン書いてもいいケドさ。一つだけ、あたしからもお願いしていいかしら」

薄く笑い、スカートの中から尻尾を伸ばすシャオメイ。

それを見たチビ助は、ギョツと目を丸くして一歩退いた。

「お、お願いってなあに？」

「簡単なことよ……。あたしと戦って欲しいの」

「戦うって——シャオちゃんが何を言ってるのか、わかんないよ」

ジリジリと。

恐ろしい形相でにじり寄るシャオに、青ざめた顔で後ずさるゆりな。

もしかしてクロエのヤツ、『恐い敵さん』がシャオメイだってこと言ってるのか？

「頭の悪い、女ねえ……。ピース様を選んだ、あたしとあんな。どっちがよりピース様に相応しいか、決めようって言ってるのよ！」

「ひゃっ!？」

ムチよろしく振り下ろされた尻尾を紙一重で避け、俺のもとまで

走って逃げるチビ助。

かわいそうに、すっかり怯えきつたそいつの震える肩を抱いて俺はシヤオを睨み付けた。

「へっ。そんなこつたらろうと思つたぜ。油断させておいて殺そうとするなんざ、いささかにスマートじゃないねエ。紗華夢サマともあろうお方が、そんな汚い手使つていいワケ？」

「うるさい男ね。たかだか、こんな牽制如きで死ぬようならそれまでつてことよ。まあ、猫憑きはあんたみたいなザコ虫と違って、それなりにあたしを楽しませてくれると思うケド」

口を開けばこいつは……。

こつちからも何か嫌味の一つでも言つてやろうかと眉をピクつかせたとき、

「ど、どうして。なんでシヤオちゃんが、ピースのおばあちゃんのことを知ってるの？ もしかして、ボクが魔法使いだつてこともバレてるのかな……」

腕の中のチビ助が不安げに俺を見上げる。

つて、いやいや。ちよい待つてくれよ。

「んな格好して空飛んでんだ、そりゃバレバレだつて……。っーか、それ以前によオ。今朝の記者会見を観たとき、あいつの目を見て金縛りになつたじゃん？ チビ天は平気つつう、俺たち限定の奇妙な金縛りのコトさ。あんな芸当が出来るヤツとくりゃあ、だいたい見当がつくだらうよ」

「……………」

ボーっと俺を見つめるチビ助。

表情から察するに、やつとこさあいつの正体に気付いたのだらう。

「そう、あいつは俺たちと同じ——魔法少女だ。三番目のな。何故かは分からんが、俺たちを殺そうとしている」

というより俺を、だらうな——

ゆりなに対しては、どちらが強いか決めようとしているだけで殺そうとまでは考えていないと思う。

なんとなくという言葉はあまり使いたくないけれども。

ま、なんとなく。

そのままに、あいつが旧や新を超えた魔法使い——紗華夢夜紅であるというこまで説明しておく。

無論、大雑把にだけど。

「というワケだ。だから、あいつは敵なの。やらなきややられるつてなモンで、辛いだろが解ってくれ」

「……………」

説明は終わったつうのに、未だに俺の顔を見ているチビ助。

気が抜けたようなそいつのツラに慌てた俺は、ゆつくりと近づいてくるシャオを横目で見つつ、

「お、おい。何をボケっとしてやがんでえい？ お前さんがしつかりしてくれねーと、あいつにやられちまうんだぞ!？」

情けない話だけれども、魔力が残っているチビ助に頼らざるを得ないんだよ……………」

だから、と肩を揺すっていると、不意にゆりなが口を開いた。

「しゃっちゃん、その髪どうしたの？ 土で汚れちゃってるよ」
つて。今更、俺の有様に気付いたのかい。

なんて思ったが、正気を取り戻したゆりなりに安堵した俺は苦笑混じりに、

「え？ あ、ああ。これね。あの赤毛に踏まれちまってさア」

別に痛くも痒くもねーけど、そう続けようとしたのだが、

「しゃっちゃん、その顔どうしたの？ 血で汚れちゃってるよ」

俺の言葉を待たずしてボソツと機械的に呟くチビ助。

おかしい。

なにやらどうも——様子がおかしい。

よく見ると、そいつの目の焦点が合っていないことに気付いた。

「ゆ、ゆりな？」

背筋が凍るような感覚に襲われる。

「しゃっちゃん。シャオちゃんに、イジメられた、の？」

やけに冷えた口調で言ったかと思うと、眼だけをギョロリと動かし
て俺を見るゆりな。

光を失った暗い瞳の奥に、チカチカと藍色の光が明滅しだす。
その異様な姿に、俺はホバー戦のゆりなを思い出していた。
これって、まさか……。

第五十三石：いきなりランクB!? 恐怖のコピー

「そうよ、あたしがこいつを痛めつけたのよ！　這いつくばって許しを請う姿、猫憑きにも見せてあげたかったわ。笑っちゃうくらい無様だったもの」

見やると、腕を組んで仁王立ちのシャオメイ。

「おいっ、許しなんて誰が請うか！　デタラメ言ってるんじゃないやねえっ」

「ホント、惨めよね。弱いつてかわいそう。そのクセ、デカイ口を叩くんだから、もうつける薬は無いつてカンジよね。いっぺん死んでやり直したほうがいいんじゃないかしら」

さらっと無視し、饒舌に俺を馬鹿にするそいつに違和感を覚える。

なぜ、こいつはチビ助を襲わないで俺を挑発してやがんだ？

攻撃するなら今が絶好のチャンスだろうよ。

「どうして、」

徐々にゆりなの瞳が藍色の光に支配されていく。

いや、待てよ。もしかして、俺を挑発してるんじゃないやなくて――

「あんたも大変よねえ、こんな弱くて馬鹿な『ハズレ』なんか引いちやってさ。本当はもっと強くて賢い人が良かったんでしょ？」

「どうして、しゃっちゃんを、」

「今からあたしがピース様に頼んであげよつか。そこの、その、使えないゴミを処分してくださいっさー！」

「どうして、しゃっちゃんを、イジめるの……かな？」

やがて、完全に光りきった瞳をゆっくりと閉じ、ゆりなは俺の腕の中から抜け出した。

生気を感じられない後ろ姿に、俺は思う。

やはりそうだ。この現象――『集束』に違いない。

「いくらシャオちゃんでも……ダメだよ。許せないよ」

「チビ助、お前……」

「ごめんね、しゃっちゃん。悪いけど下がっててくれないかな」

「あ、ああ」

言われるがまま半歩だけ下がり、一つおかしい点に気付く。

俺を『しゃっちゃん』と呼んだってことは集束じゃないのか？

髪も燃えていないし、体中を纏うオーラや稲光だつて変色していない。多少動きが活発化しているけれども、それだけだ。

だが、しかし。あの眼の光はどう考えても……。

そう思案しようとしたその時、シャオメイのスカートから尻尾が飛び出し——チビ助を猛然と襲った。

「マズイ！ ゆりな、あいつの尻尾は先っぽを自在に変形させることが出来るんだ。大きく避けないと危険だぜ！」

停止しかけた頭を奮い起こして無我夢中で叫ぶと、

「そう……。おいで、霊冥」

冷静にそれだけ言い、転がっていた杖を手元へと呼び戻すゆりな。

そして、尻尾が顔面に到達する瞬間。

「らいらい」

杖をくるうりと回転させたかと思うと、そいつの左手には何故か独特な形の小さい黒鎌が握られていた。

そ、そんな物騒なモノ一体どつから出したんだ？

「サンダーシックル……」

妙な三枚刃で尻尾を器用に絡め取る鎌——全体に黒い雷を走らせるそれを見て、すぐにその正体が霊冥だと知ることになる。

なるほどねエ。俺のアクアサーベルと似たようなものか。それより、スゲエ反射神経をしてやがるなコイツ……。

普通あんな正確にあいつの尻尾を受け止められないぞ。というか、避けないで受け止めようと判断したのが、また何とも。

無謀なのか、はたまた——余裕というものなのか。

どちらにしろシャオメイのヤツ、さぞかし悔しがっていることだろう。

そう、そいつへと視線をスライドさせると、

「あははっ！ 思ったとおりだね。猫憑きの集束の引き金は、この男ね！」

心底楽しそうに笑っていた。

ああ、やっぱりそういうことかよ。

俺を挑発していたんじゃない——チビ助を怒らせて、『集束』を発動させようとしていたんだ。

ふざけた真似をしゃがって……。

「でも、裏束じゃないのは少し残念ね。あのゾクつとする魔気を間近で触れてみたかったのに。まあ、『表』でも十分楽しめるケドさ」

そう言っつてシャオメイが黒い指輪を掲げた、その時だ。

大音量の警報音が頭上で鳴り響き、それと同時に空に凄まじくデカイ亀裂が走った。

にやろう。出やがったな、シャドーめ。

「空の亀裂に気をつけろ、ゆりな。こいつの持つシャドーは、ランクAのトンでもねえ模魔だ。穴が開いたら最後、闇に飲み込まれちまうぞっ」

「うん、わかった……」

相変わらずどこを見るのか分からない目だが、話は通じるようであつた。良かったぜ。

それにしても——ここまで巨大な穴を開ける力がシャドーにあつたなんて、思いもよらなかつたな。

ま、どうせ俺相手じゃあ出すまでも無かつたってことだろう。とっておきの大召喚は、お楽しみのおチビ助戦で、つてか。

「チツ、なんてタイミング。せつかく良いところだつてーのに、邪魔しやがって……」

亀裂を覗むシャオメイの顔に、何故か焦りの色が見える。

どういふことだ、と訊ねるよりも前に、そいつは俺に向かつてこう言つた。

「バツカバカじゃん。鳴き声で判らないのかしら。あれはシャドーじゃなくて、コピー・ザ・ヨムリエル……十四番目の模魔よ」

「あ、あれが、模魔コピー!?!」

破れた空から巨大な顔をのぞかせるソレに、足が勝手に後ずさりをしてしまう。

体軀こそホバーと同じくらいだが、その形状がまた……なんと言つたらいいものか。

端的に言えば、虫だ。それも、よく見慣れた虫——カブトムシの形をしていた。

とは言え、仮面のハチドリやモノアイの鮫のように、そのままの姿をしているわけではない。

鈍色の鎧のような分厚い外骨格に、四本の脚。次いで四又の長い頭角に、突出した四つの複眼。

そして、悠々たる動きで広げられる四枚の鞘翅。

うげえ……。いささかになんてモンじゃねエな。めちやくちやに気味が悪い。

コピーは下手くそな飛び方で、(むしろただの滑空かも)音も無く近場の屋根へ降り立つと、四つの目をせわしなくキョロキョロと動かし

た。

「なに、してやがんだ？」

「……誰を食べようかって吟味してるんじゃないの」

た、食べるって。

「笑えん冗談だぞ」

「あら。冗談かどうかは、身をもって確かめてみればいいわ。少なくとも笑えるとは思わなくても」

あたしにとつてはね、と言いついてシャドーの指輪に口づけをするシャオメイ。

「あつ、テメエ逃げるつもりか!」

「当然でしょ? 霊鳴も霊獣も無しで、どーやってあいつと戦えてーのよ。第一、このあたしがわざわざ出張る必要なんて無いの。集束状態の猫憑きがいるんだから、あんな低ランクの模魔なんてちよちよいのちよいでしょ」

あんな低ランクのつて——ジュゲムさんは名前だけじゃなくてランクまで知ってるのか。

「まあね。たしかランクBだったはずよ」

それだけ言うと、ひらひらと手を振って闇の中に消えていくシャオ。

「ランクBが低ランクだとオ!? って、どこに行きやがった」

辺りを見回すと、意外にもすぐにそいつは見つかった。

右前方、建設中の超高層ビルの屋上——クレーンの先端に、さも自分は無関係な観客だと言わんばかりの態度で座っている。

つまりは、横柄なあぐらうってヤツだ。

「くそつたれが……」

第五十四石：重装甲コピー vs 集束のゆりな

大体、ランクAの模魔を持つてるクセに戦えないなんて絶対ウソだろ。

紗華夢の力でシャドーを捕まえたように、コピーもサクツと捕まえてくれりゃあいいのに。

そう俺がジーツと睨みつけていると、急に耳元に息がかかる。

「ひゃうっ!?!」

振り向くと、ニヤリと唇をひん曲げたシャオの口がそこにあつた。

なんだ、口だけシャドーを使って移動させたのか……。

相も変わらず何でもアリな模魔だな。

「きやは。情けない声出しちゃつて、ダツサー」

「うるせエな……。尻尾巻いて逃げ出したヤツが何の用だよ」

「あら、尻尾は巻いてないわよ。縮めただけだし。でもさ、コレ体の中に全部入らないからちよつと不便なのよね。二十センチぐらいは出ちゃうから、下着にいちいち穴を開けなきゃなんないのよ」

「そういう意味じゃねーよ。というか、そんな使いどころの無い尻尾ウンチクなんざどうでもいい。用があるなら、それをさっさとやってくれ」

「ハイハイ。あれよ、ザコ虫のクセに目が良くなって感心してサ。よくあたしのことすぐに見つけられたわね?」

「そりゃあ……。存在感のあるマントがバサバサ風になびいてりゃ、すぐに気付くつて」

ふうん、と意味ありげにそいつは唇を尖らせると、

「ま、いいわ。見つけたご褒美に、一つだけ面白いことを教えてあげる」

「面白いことオ?」

「ふふっ……。模魔コピーはね、『脱皮』するの。そうなったら厄介なことになるわ。ま、あんたに出来ることと言えば、脱皮前に猫憑きが倒してくれるようお祈りするくらいしかないわね」

そう言い残すと、裂け目は跡形も無く消えてしまう。

脱皮。それは動物が成長の過程で皮を脱ぎさる行為。文字通りの意味だ。

未だに獲物を探している様子の節足動物を見ながら、あの重装甲の中に何が隠されているのだろうか考える。

「脱皮が厄介ねエ……」

ヘビやらクモの脱皮を思い出してみるが、やったところで姿自体はあんまし変わらないように思えるが。

つーか、戦闘中に脱皮なんてモンをしちまったら、体が軟化して不利になるんじゃないのか、という疑問が出てくる。

ううむ。模魔の場合は例外とか？

まあ、考えたところで答えは見つかるはずも無いワケで……ともかく、この情報はチビ助に伝えておいたほうが良さそうだな。

俺は、無表情のままコピーを見上げているチビ助に向かって、

「ゆりな、シャオ曰くコピーは『脱皮』をするらしい。本当かどうかは分からないが、そうなっちゃったら面倒なことになる！ だから早めにケリをつけなきゃならねエ」

「うん……わかった」

やがて標的を見つけたのだろうか、コピーの複眼がいつせいにチビ助の方へ向いた。

「来るぞー」

やにわに飛び上がったかと思うと、急速で滑空。

そしてチビ助の眼前へ降り立つと同時に、両前脚を振り下ろすコピー。

バツテンの軌道を描いたそれだったが、紙一重で避けられる。

……凄まじい跳躍によって。

グングンと空を駆け上がるチビ助に俺は啞然とするしかなかった。「うっへえ、なんてデタラメなジャンプ力……。集束状態だからあんなに高く跳べるのか？」

そう呟いたとき背後から、

「否定。あのジャンプ力はお姉ちゃまの能力なんです。パパさんがコロナの羽で飛べてるように、お姉ちゃまと契約すると特典として凄

ジャンプ力が手に入るのです」

「はあ。なるほどねえ、霊獣ごとに色んな付加能力があるってワケね。いささかに凝ってらっしゃる……って、コロ美!」

振り向くと、そこにはペリドットカラーのストレートロングという髪型の眠そうな少女——チビチビ助が浮かんでいた。

そいつはパジャマ姿のまま、タツパーに詰められたすき焼きを、モグモグごっくと美味しそうにほお張っていた。

何故ここにいるんだとか、もう石風邪は良くなったのかとか、色々訊きたいことはあつただけけれども。

まあ、とりあず。

「行儀悪いぞ、コルア」

高速のフロストチョコップをド頭にぶち込んでおく。

当然油断していただろうチビチビ助は、シラタキをすすつてる途中だった為、「ふぐうなんです!」というトンチキな鳴き声と一緒にそれらを吹き出した。

「けほつけほつ。パパさん、ひどいんですつ。コロナは病み上がりなのです、もつと優しいチョコップにして欲しいんです」

「言ったじゃんか。治ったら厳しくするから覚悟しとけつてさ。そんだけ元気があるんだから、もう優しさレベル下げていいだろ」

「やだつ、まだ治つてないんです。下げちゃやなのです!」

「はーい、今下げましたア。もう無理でーす、一旦下げたら一週間は上がりませエン」

そう言つて、口角から垂れ下がってるシラタキを強引に口の中へ押し込んでやる。

コロ美は俺に抗議の視線を送りながら、それを頑張つて咀嚼して、「……それにしても、パパさんもお元気そうで良かったのです。一つだけでもビックリなのに、大きい気配が二つも同じところに出たので、急いで飛んで来たんです」

「気配——ああ、確か気配察知だっけか。でもそれって、おおよそしか出来ないんじゃないかなかったか?」

「肯定。でも、どっちも出してる魔力波が凄すぎるんです。あそこま

で膨大だと、むしろ気付いてくれて言ってるようなものなのです」
コロ美の話をまとめると、こうだ。

一つ目の巨大な気配にびっくりしたコロナはすき焼きを持ってきたゆりなに気配のこと、ついでに俺とクロエが居ないことを伝えた。それは大変、もしかしたら何か事件に巻き込まれたのかもしれないと、霊冥を呼んで俺たちを探しに出るゆりな。

見送ったあと、すき焼きを一人で食べてると、まさかの二つ目が出現。

これも強大で、さすがに旧魔法少女さんだけじゃ心配だと自分も慌ててベランダから飛び降りた、と。

一刻も早く魔力を回復させるために、すき焼きが入ったタツパーを大事に抱えて――

「魔力が無くちやパパさんがピンチのとき助けられないんです。変身も出来ないですし……だから大目に見て欲しいんです。普通のはちちゃんとお行儀良く食べるのです」

言つて、大急ぎで豆腐を口の中へと詰め込むコロナ。

「むぐっ!？」

「お、おい大丈夫かよ」

チビっこい体して、あんなデカイ豆腐を丸々飲み込もうなんざ、無理に決まっている。

咳き込んだチビチビの背中をさすりながら、俺は気付かれないように小さくため息をついた。

こんなに寒い中。こんなに冷え切ったすき焼きを。こんなに急がせて。

なあにが、「もうムチャはさせねエ」だよ。さっそくムチャさせてるじゃねえか……。

「パパさん、ありがとなんです。背中さすさすのおかげで豆腐さんをやっつけることに無事成功したのです」

「そ、そうか。急がなくていいから……。良く噛んで、味わって食べな」

「肯定なんです。そういうえば、気配の一つがコピーということは見れ

ば分かるんですが、もう一つの凄い魔力波を出してる模魔はどこにいるんです?」

おそらく最後の楽しみに取っておいたのであろう、パイナップルの一切れを口に放り投げてそんなことを訊ねるコロ美。

そうか、デカイ気配は読み取れても正体までは分からないんだっとな……。

「ああ、もう一つの気配の正体はシャオだ。あそこに座ってるヤツだぜ。あいつは模魔じゃなくて——」

と、言つてクレーン先に座っているであろう黒マントを指さそうとするが、

「!?」

いきなり足元へと突き刺さった瓦の数々に、二人同時に固まる。

その瓦の雨は止むことを知らず、弧を描いてどんどこ飛んできやがる。

「あぶねえあぶねえ……。コピーめ、ヤケクソになつてんな」

様々な家の屋根を渡り歩いては、未だに上昇を続けているゆりなに、前脚で剥がした瓦をぶん投げるといふ攻撃をしているコピー。

実は数分前からこんな調子だった。

だから、(一応チラチラ気にはしていたが) コロナと話せる余裕があつたのだ。

しかしながら……駄々っ子のように瓦を投げまくるあいつを見るに、そんな悠長な時間はいささかにも——

「クツ……! らいらい、プラズマドーム!」

チビ助による突然の呪文に、ビクツと顔をあげた……その時だった。

俺の顔面、数センチ先で何かが飛散していき、そして同時に爆竹のような破裂音が聞こえた。

「こ、これは?」

俺とコロナの周りを覆うように形成された、小さな半球型の光るカゴ。

藍色の光と限りなく黒に近い紫光が網目状に交錯しており、その交

錯した部分から時々小さな火花が発生している。

独特のスパーク音から察するに、おそらくこれはゆりなの出した雷防壁だろうな。プラズマドームとか呪文唱えてたし。

にしても、合間合間から見える星空も手伝ってか、凄まじく幻想的で綺麗な防壁だ。

第五十五石：完全召喚！ホバーを呼び出したゆりな

「ふああ。まるでコロナたちメロンパンの具にされたみたいなんです」

「お前さんはこれがメロンパンに見えるのか。確かにそんな模様と形だけでも。つーかメロンパンって具が入ってない気がするぞ」

「とつても、とつても、不思議ちゃんなのです」

それは、この雷防壁自体のことを言ってるのか、それともメロンパンに具が入ってないことを言ってるのか。

ま、どっちも不思議だけれども。

そう俺たちが、ボケらつと防壁を眺めていると、

「ねえ、キミさあ。誰かを傷つけようとするってことはねえ……」

網目の間から見えるチビ助が、ボソつと呟き、杖の持っていない方の握り拳をゆっくりとコチラに向けて突き出した。

ん、ちよつと待てよ。あんなに遠くに居るのに、なんで声がハッキリ聞こえてくるんだ？

しかも、ちゃんとボソつと出した感じが分かったぞ。

「魔力を持つ者同士なら、どんなに遠くにいても無線のように声をキャッチすることが出来るのです」

「へえ、そうなのか。いちいち近寄らなくても作戦を立てられるってワケね。便利なこつた。それはともかくとして……チビ助のヤツ、一体何をやる気なんでエい？」

「うーん。目が光って尾を引いているということは、集束をしてることなんです。とすれば、きつとまたとんでもない魔法を出すつもりかもなんです」

やっぱり、それしか考えられないよなあ。

低速だがまだまだ上昇をやめないゆりなの目から放たれる藍色の光。

残光として夜を美しく彩るそれに、俺は不安を隠せない。

はたして、チビ助の突き出した拳がクルリと回りだす。そして、それがピツタリ百八十度ほど半回転したときだ。

「自分もね——自分も、傷つく時が来るってことなんだよ……ッ！」
叫んだと同時に、集束の光が一気に倍増し、真つ逆さまに落ちるゆりな。

そのままの格好で、そいつは握り拳を開いたかと思うと、

「反転ッ！　らいらい、プラズマアア、ドオオオムウウ……」

地響きと共に、俺たちを覆っていた雷防壁がメキメキと音を立てて裏返っていく。

次に、俺たちの足元に突き刺さっていた瓦や、さつき飛散していた何かの細かい欠片などが、裏返った防壁の中央へと、一斉に集まる。

「わ、わわ。ぱ、パパさん!?　怖いんですっ」

俺だって何が起こるか分からないし、いささかに恐いさ。

でもよ、あいつはあのドがつく程の優しいゆりなだぞ。俺たちに危害を加えるハズが無いだろ。

胸に飛び込んで来たチビチビの背中をぽんぽん叩きながら、

「落ち着けて。大丈夫、ジツとしてれば安全だ……。ゆりなを信じろ！」

「こ、肯定、なんですう……」

コロナが涙目で答えたと、ほぼ同時に、

「リフレクシオン！」

と、呪文を唱え終えるゆりな。

その声に呼応するかのように、中心部に溜まった無数の瓦や塵がコピーへと向かっていく。

もちろんそのままの形で向かうのではなく、それぞれ凄まじい電気を身に纏っているワケだが——

「これが『プラズマドーム・リフレクシオン』か……。瓦礫も何も、全部まとめて反射したってことかい」

リフレクシオン、確かこれは反射って意味だったハズだ。

中学一年生の頃、英語の成績が二だった俺でも分かるぞ。

まあ、漫画で得た知識なのだけれども。知識は知識さ。

しかしながら——直撃を食らったコピーの苦しそうな様相を見る

に、ただの瓦礫によるダメージだけではなさそうだ。

纏っている雷の力も当然の如くあると思うが、あのプラズマドーム自体の魔力も加算されている気がするぜ。あくまでも当て推量だけれども。

「いやはや、なんとも。バリアという役割だけではなく、攻撃も兼ねているなんざ、なんともまあ便利つつうか、強力な魔法だねエ」

あの魔法一辺倒で大体の模魔は倒せるんじゃないのかね。

うーむ、羨ましい限りだぜ。俺の水魔法でアレと似たようなの作れねえかなあ……。

なんて、そんなことを考えていると、

「パ、パパさん。旧魔法少女さんが落っこちてるんです!」

「えっ!?!」

コロナの声に慌てて空を見上げると、なんとチビ助がドンドンと急速落下してしまっているではないか。

そういや、ドームの裏返し魔法を詠唱し始めたときから落ちているような……。

もしや、反転魔法を唱える際にジャンプの勢いを殺してしまったからか?

つて。んなことよりも早く飛んで行って、チビ助を助けねーと!

「おい、チビチビ。変身して、ゆりなを拾いあげろぞ!」

「む、無理なんです。あんなに遠いところでは急いで変身しても間に合わないのですっ。コロナが元の姿だったら追いつくかもですが、戻るのにも時間がかかっちゃうですし……」

「チツ……!」

確かに距離が遠いし、それに最初にやったハイジャンプでいくらか高さに余裕があるとはいえ、あの落下スピードだ。

今から変身して飛んでいっても、十中八九間に合わないだろう。

でもよ——だからって、このまま見殺しになんてさせてたまるかってんでエい!

「つべこべ言ってねえで変身すつぞ、コロ美。これはご主人様による直々の命令だ。否定つつたら、お尻ぺんぺんの刑に処すっ」

「こ、肯定、」

チビチビが頷きかけたとき、

「しゃっちゃん、ありがとね。でも、ボクは大丈夫だよ……」

そんな優しげなゆりなの声が入ってきたかと思うと、

「我は欲す、汝が纏う忌むべき力を。おいで、ホバー・ザ・ルヒエル！」
模魔の召喚を、それも完全召喚の呪文を唱えたではないか。

名前を呼んでキスをするだけでいいよ、なんてあの時言ってたのに

——完全召喚の呪文を知っていたとは。

だったら初めからそう教えてくれりゃあいいのに。

頭の中がモヤモヤし始めたところで、

「旧魔法少女さんは、ネオンの召喚でたくさん練習をして、コツを掴んだのだと思います。詠唱を省略しても模魔が出るから大丈夫だと思って、それでパパさんにそう伝えたのかと」

「ネオンって、シャオが言うには俺が来る直前に捕まえた模魔のことだろ？ 直前がどれくらいのことを言ってるのか分かんが、そんな短時間で詠唱カットをマスター出来るとは、いささかにも思えないのだけれども」

そう言うと、未だに俺の腕の中に居るコロ美はうーんと唸って、

「そういえばそうなのです……。でも、あの人の才能ならちよつどの時間でコツを掴めたのかもしれないんです」

「ふーん。才能、ねエ」

と、チビ助をちらりと見やる。

足裏から振りまかれていた濃緑色の光の粒子のおかげか、落下せず
に浮いている状態——いわば滞空モードとなっているゆりな。

おそらくアレは、背後に佇んでいる大人しそうな三つ編みメガネ少女、ホバー・ザ・ルヒエルの力によるものだろう。

第五十六石：失われていく輝き

すっかり。ホバーのヤツ、やけに顔色が悪いな。俺様の持っているピチピチ肌なハチマキ娘と比べるとまったくもって違うぞ。

ふうむ。いっちょよ、コロ美に訊いてみるとするか。

「なあ、チビチビ。ホバーの顔がどうも青白いように思えるのだけでも。これって、やっぱし捕獲の仕方がマズかったからかねエ？」

捕獲方法。

それは、捕まえる対象の体力や魔力が残り少ない状態、もしくはそいつが魔法使いに服従を誓ったときに捕獲呪文を唱えることで成立する。

ダツシユはダメージを与えての捕獲という形ではなく、俺の力になりたいと言ってきたから捕獲呪文を唱えた。

対してホバーはといえば、圧倒的な魔力を持つゆりな——いや、『裏・集束状態の赤いゆりな』の放つ雷撃魔法によって一発で瞬殺され、そして捕獲となった。

というよりも。あの惨状を見るに、捕獲ではなく捕食と言ったほうが正しいのだろう。

今でもあのけつたくそ悪い光景が頭に焼き付いているぜ……。

つーか、よくよく考えてみたら、捕獲する前にホバーは死んでいたはずじゃないのか？

顔色が悪いとはいえ、よく無事な姿で出てこられたな。

「いや——もしかしたら他にもおかしな点があるかもしれねエな」

と。もう一度、人間の姿のホバーを観察してみる。二つに分けた三つ編みおさげを夜風になびかせている儂げな半透明少女。

特徴的なところと言えばディープグリーンという髪色程度で、他はメガネくらいしかない。

メガネつつても普通のどこにでもあるメガネだからなあ、なんともそれ以上言うことが見つからん。

てか、ゆりなと同じか少し上くらいに見える容姿のくせに、やけにキチンとした制服姿だな。

着こなしの問題かもしれないが、どうも固っ苦しいねえ。長すぎるスカート丈をちよいと短くするだけでだいぶ垢抜けて見えると思うのだけれども。

俺の舐めるような視線に気付いたのか、ホバーはゆっくりとした動作でメガネをクイツとあげると、コチラへと顔を向けた。

その表情たるや……。明らかにヘンタイを見る目つきだった。

最大限の侮蔑を込めた冷やややかな琥珀色の双眸に耐え切れるハズもなく、すぐさま目を逸らし、

「コホン……」

小さな咳払いを一回だけしておく。

と、ともあれ。顔色以外のおかしな点は無さそうだな。

だとすれば。ホバーはダツシユやシャドーのように通常の模魔として機能するということなのだろうか。

「ふわあ。なんだか難しいこといっぱい考えてるのです。パパさんって、テキトーさんな時とマジメさんな時の差が凄いです。別人さんみたいなのですっ」

「おっとっと。それは褒め言葉として捉えて良いのかイ？」

「いささかに、なんです」

「おいおい。いささかにの使い方、ちと間違っつてねーか。」

「ま、俺も人のこと言えないケドさ。」

「んで、それはともかくとして。恐縮だけれども、ホバーの顔色についてそろそろ回答のほどよろしく頼みますんで」

「言うと、そいつは腕の中から飛び出して俺の頭上へとよじ登った。」

「た、高い高いしてくれたら答えてあげないこともないんです」

「突飛な発言に、少々面食らっつてしまう俺。」

「……なんだア？ なんでもんイヤに決まっつてんだろ。てめえの羽があるんだから、それでセルフ高い高いしろっつてんでエい」

「うーっ！ 否定、否定っ！ パパさんにしてもらいたいですう！」

「おい、やめろっつて。人の触覚を引っ張んなっ」

猫つかみの要領でコロナをひっぺがし、眼前に持ってくるると、

「うー、パパさあん……」

涙目で懇願してきやがる。

急にどうしたんだよ、こいつ。

なんでこの場でワガママを言い出すつつうか、甘えてくるんだ？
別にすんなり答えてもいい質問だろうよ。

「うーうー言っても、やりたくねえモンはやりたくねえの」

「じゃあ、じゃあ。良い子良い子って撫でて欲しいのです」

「……チビチビイ、いい加減にしろよな。この状況わかってんのかあ？
こう着状態とはいえ、チビ助とコピーはまだ戦ってんだぞ。いくらなんでも緊張感無さ過ぎだって」

戦ってる最中、いきなり俺がチビチビを高い高いし始めたらおかしいだろ……。

シャオメイのヤツになんて言われるか。それにクロエにも文句言われそうだ。ゆりなどの合体中で俺たちのことが見えるのか知らんが。

ま。一番の理由は、単純に面倒くせエからだけれども。

「肯定……なのです」

頑なに拒否する俺に、コロ美は諦めたようにため息をついて口を開いた。

「さっきパパさんが言っていた捕獲の仕方が問題じゃないんです。旧魔法少女さんがホバーを完全に『破壊』したのが問題なんです」

「んん。破壊つてのは、ホバーが死んだことを言ってるんだよな」

「うーん、まあそういうことなのです」

奥歯に物が挟まったような言い方だな。

「模魔は丈夫に造られているので強い魔法を受けてもそうそう壊れないんです。それにホバーはランクもCと高いほうですし、自己治癒能力もあつたハズなのです。でも、あの魔法はその治癒が発動する間もなく一瞬でホバーを……」

あの魔法——ヴォルティック・エンドのことか。

赤い満月のような巨大な雷球。

確かに、あんなバカげた魔法ではホバーと言えどひとたまりもないだろうな。

「あそこまで破壊してから捕獲しちゃうと、ちよつと困ったことになるんです。多分、それが顔色の悪さに繋がると思うのです」

「ちよつと困ったことって?」

「コロナは少しだけ考える素振りを見せてから、

「模魔の召喚は、変身や、杖が無くても呪文を唱えて宝石にキスをするだけでいつでも発動出来るのが強みなんです。さらに言えば、パパさんの魔力がすつからかんでも、召喚可能なのです」

「ああー。ダツシユを召喚したとき、やけに気前がいい話だなんて感心したっけか。俺の魔力が無くても出せるなんざ、本当に便利な指輪だねエ」

「どんなピンチも切り抜けることの出来る、さいきよーの切り札!と、言いたいところなんですが……指輪による召喚には弱点があるんです」

まあ。

そりゃあ、なんのデメリットも無しに使い放題ってえのは、さすがに出来すぎた話だよな……。

「オーケイ。んで、その弱点つーのは一体なんなんデイ」

「……乱用すると少しずつヒビが入ってきて、最後には消滅しちゃうんです」

「消滅だあ!?!」

思いがけない言葉に、俺はすぐさまダツシユリングへと視線を落としました。

「さ、さつき、チビ鯨にちよつとだけムチャさせちまったような……。大丈夫なのか?」

色んな角度から見てみるが、どうやらヒビどころか傷ひとつない新品状態だったようだ。

「あつぶねえ。やつぱ引つ込めておいて正解だったみてーだな」

ふうつと、安堵の息をつきながら指輪を眺めていると、遊泳しているダツシユと目が合った。

俺に気付いたそいつは、一生懸命にバシヤバシヤ泳いでこちらへと向かってくる。

「これはこれは。元氣そうで何よりってね」

なにげなしに鮫状態のそいつを指先でつついてみる。すると、俺の指に合わせるようにぴたりとヒレをくつつけてきた。

試しに指をひよいひよいと動かしてみると、そのたびに様々な泳ぎ方でついてくるじゃねーか。

ははっ、おもしれえヤツだなコイツ。なんか水族館の調教師にでもなった気分だぜ。

これを見世物にすりゃあ、いささかに金が稼げるかもな……なんて内心ニヤついていると、

「むーっ！ パパさん、ダツシユと遊んでる場合じゃないんです。説明してる途中なのですっ」

むくれつつらのコロ美がヌツと顔を出してきたではないか。

「あ、ああ。わりイわりイ」

っーか、遊んでる場合じゃないって。高い高いしてくれとかダダをこねてたヤツの言うセリフじゃないような……。

「ともかくですね、破壊しての契約だとヒビが急激に入っちゃうんです。つまり、ホバーはいつ消滅してもおかしくないボロボロな状態になっちゃったんです。きっと顔色の悪さはそれかと。まあ、フツーに弱らせてから捕獲すれば、ヒビがあまり入ってない指輪になるのですが」

「つうことは、捕獲するだけなら大ダメージ与えたほうがいいけれども、それだと契約してもあまり召喚出来なくなる——だから、なるべくダツシユのように円満解決しろってこと？」

「肯定なんです」

「肯定ですよね」

言うは易し、行うはなんとやら……。

こちらら死に物狂いなんだ、円満解決を試みている間に頭からザツクリとやられちまうっての。

大体、成功例のダツシユについても、なんで俺を認めてくれたのか未だによくわかんねーし。

ともあれ、これでようやく顔色について納得がいったぜ。

「いやはや。こう言っちゃあなんだけれども、死んだのにケロッと出てくるわ青ざめた顔をしてるわで、まるでホラー映画のゾンビみたいで気味がわりイよなあ。おまけに半透明だし、幽霊も混ざってらア」と。ケラケラ笑いながら冗談を言う俺に、

「そう、ですよね……。あの姿を見たら普通の人は気味が悪いと思います。それが当然なのです。当たり前前の反応なんです。わかって、いるのです……」

なぜだか寂しそうに呟くコロナ。

予想だにしない反応に首を傾げていたのも束の間。

そいつが泣く前兆——鼻をすすり始めたところで、

「ダメー！ お願ひ、戻って……プラズマドームッ！」

ゆりなの声が出たかと思うと、裏返っていたままのプラズマドームが爆音とともに俺たちを覆っていく。

「……………」

再び防壁モードとなったドームを驚くままに見上げていたのだが——耳をつんぎくような凄まじい破裂音に、ハッと気付いた。

そうだった、チビ助とコピーはまだ戦ってる最中だったのに。いつまでもノンキに道のど真ん中で喋ってる場合じゃねえだろ！

舞っていた砂ぼこりが晴れていくと、その先には分厚い鎧をガチャガチャと鳴らすカブト虫——コピーの姿があった。

あれだけリフレクションの雷撃を喰らったにも関わらず、四つの黒い瞳の輝きは一つも失われていない。

そいつは、すっかりハゲてしまった家から三軒ほど離れた家に飛び移ると、またぞろ瓦を投げてきやがった。

しかし、ゆりなもそれを見逃すことはなく、もう一度リフレクションを唱える。

そんな応酬の中、

「しゃっちゃん。ボクの声が聞こえるかな？」

不意に耳に入ってきたチビ助の声に、

「ああ、聞こえるぜ！ すまねえ、逃げなきゃいけなかったのにボーっとしちまって……」

慌てて俺は謝った。

せつかく攻撃から守ったというのにいつまでも無防備なまま突っ立ってるんだ、怒られてもしょうがない。

「つか、俺だったら絶対キレてるぜ……」。

だが、ゆりなは一言も俺たちを責めることなく、

「あのね。せーのでドームを持ち上げるから、その隙にしゃっちゃん
はコロちゃんを抱いて安全な場所まで逃げてほしいの。にやはは。
ちよつち、守りきれない自信がないかもだから……」

「チ、チビ助……」

「ごめんね、しゃっちゃん」

どうして。

どうして、そこでお前が謝るんだよ——謝らなきゃいけないのは俺
のほうなのに。

足手まといの俺が謝らなきゃいけないのに……

悔しきでこみ上げてくる涙をどうにか押し戻しつつ、俺はゆりなに
向かって叫んだ。

「オーケイ。いつでも準備出来てるぜ！」

「ほいっ」

次の瞬間、チビ助の手に暗い光が集まっていく。

藍色のオーラじゃないってことは、これは霊冥の放つ光か？

「ぽくよよん、ぽいぽいー、ぽんっ！ らいらい、サンダーシックル！」

三枚刃の鎌へと姿を変えた霊冥をプラズマドームへと投げつけて、

「掴んで、シックル！」

言うが早いか、三枚の刃が器用にも雷の網をガツチリ捕らえてい
た。

てか、掴んだはいいのだが、霊冥を丸ごと投げつけちゃってどうす
るんだ？

「パパさん、霊冥と旧魔法少女さんの間に雷の鎖が見えるんですっ」

コロナの指差す方向には、確かにキラキラと光る鎖のようなものが
あった。

鎌とチビ助を繋ぐ雷鎖——

「これってもしかして、鎖鎌ってヤツか？」

しかし、感心してる暇もなく、

「しゃっちゃん、いくよー！　せーのー！」

掛け声とともに分銅（ここからではよく見えんが、おそらく霊冥の宝石部分だろう）を引つ張って、ドームを持ち上げていく。

「おおっ」

コスチュームの力だろうけど、すげえパワーだな……。あのドームを軽々と持ち上げてしまうだなんて。

「わっ。パパさん、はやくはやくー！」

やべえ、だから感心してる暇はないんだっての。

上がったドームの隙間からコロ美を抱いて無事脱出。

ふーっ。あとはチビ助の邪魔にならないところまで逃げるだけだな。

そうだ、その前に礼のひとつでも言っておかねーと。

「さんきゆうなっ、チビ助」

浮かびながら肩で息をしているそいつに呼びかけたのだが——俺はそこで気付いてしまった。

ホバーの出す光の粒子の量が減っていることを。

魔法の詠唱が省略化されていないことを。

いつもの口調に戻っていることを。

「ゆ、ゆりな？　おまえ、まさか……」

ゆっくりと顔をあげたその瞳からは輝きが失われつつあった。

切れかかった電球のような激しい点滅。

つまり、それは——

「ごめんね。しゃっちゃん……逃げ、て」

辛そうな笑顔でもう一度俺に謝ったゆりなの背後に、けたたましい翹音が迫っていた。

第五十七石：二つの走行モード

「ここから……ここから先へは行かせないんだからっ！」

キツと表情を変えて振り返ると、コピーの顔面に向かって右手を突き出し、

「ぽおよんぽよん、ぽいぽいー、ぽんっ！」

呪文を唱え終えるよりも前に、お馴染みの雷撃魔法『ライトニング』を放つチビ助。

しかしながら、杖無し状態で唱えたため、普段よりも細い雷撃となつて放出されている。

「手のひらからライトニングって。どうして杖を使わないんだ？」

「わからないんです……」

依然として鎖鎌状態のままドームを鷲掴みにしている霊冥。

杖に戻してから撃ったほうが良さそうだけれども、なんて思っていると、上からバチバチツと音を立てて分銅——黒い宝石が落ちてきた。

完全に霊冥を手放しただと？

続々と沸いて出てくる疑問符をかきわけて空を見上げてみたのだが。そこでさらに巨大な疑問符と出くわしてしまった。

「行かせない、行かせない、行かせない……ッ！」

なぜなら、ゆりなの体全体を巡るように流動している藍色のオーラが時折赤く光っていたからだ。

それと共に、黒い稲光も徐々に赤く染まり出していく。

「どういうこった。チビ助の集束は切れる寸前じゃなかったのか？」

さっきの様子から察するに、集束状態が解けていつているのかとばかり思っていたのだが。

この現象は、どうみても——

「パパさんの考えてるとおりなのです。旧魔法少女さんがまた集束を発動したんです」

冷めた目で事も無げに言うチビチビ。

「またって、おいおい。チビ助はあのモードに自由自在になれるって

ことなのか？」

いつの間にそんな修行を積んだのやら……。

そんな俺の問いにコロナがゆるりと首を振る。

「否定。旧魔法少女さんは、無意識の中『再点火』したんです」

「再点火って、もう一回火をつけるって意味のアレのこと？」

今度はこくりと頷いて、

「集束の光をもう一度灯す再点火……集束時間を強制的に延ばすって意味なのです」

灯す、ならば再点灯のほうが適切な気がするぞ。

そんなどうでもいいことを考えていると、またもや俺の心の中を讀んだのか、

「否定、『火』のほうが適切なんです」

言って上空にいるゆりなへと視線を向けるチビチビ。

それに倣って俺も顔を上げようとした時、

「うわっちっち」

空から無数の火の粉が舞い降りてきた。

それとともに花火をした後のようなツンとした匂いが鼻腔をつく。

おかしいな。チビ助とコピーの戦いで、どうして火が出てくるんだ？

そう不思議に思っていたのだが――

「らいらいッ」

詠唱するゆりなの姿を見て、俺は再点火の方が適切だという意味を知ることになった。

「チビ助の髪が、燃えてやがる……」

赤く明滅し、火の粉を撒き散らしているゆりなの髪。

それは、かつてのホバー戦で見たあの姿と同じだった。

いや。まったくの一緒ではないな。

あの時よりも黒髪の部分が多くを占めているし、周りのオーラも赤より藍のほうが色濃く出ていた。

するってえとつまり……。

「まだ裏になりきれてない状態なのです。再点火は完全に火が点くま

で時間がかかるんです」

複雑な表情でチビチビが言った直後、

「デュアル・ライトニングウウツ!!」

ゆりなの呪文が発動した。

自由になった左手を右手へとクロスさせるように重ねて放出する二重の雷撃魔法。

これがまた、デュアルどころのレベルじゃなく、普段ブツ放しているライトニングの数倍もデカイ雷だった。

こんだけデカけりや、さすがのBランク様とはいえ、ひとたまりも無いだろう。

と、思ったのだけでも。

「げっ、アレを喰らって落ちねエのかよ……」

一瞬だけガクツとひるんだ後、すぐに体勢を立て直して飛行を続けるカブト虫。

直撃を受けたにもかかわらず、これとは——なんともはや。

「見た目は凄いです、杖が無いとどの魔法もイマイチなんです。それにコピーの鎧はもともと雷に対する耐性が結構あるのです」

「電撃耐性とは。相性最悪ってことか……。そりや、集束しているゆりなでも苦戦するワケだ」

やつぱ、杖を引き寄せて素直にライトニング連打のゴリ押しをしたほうが良いような……。って、ちよい待ち。

コピーがチビ助の横をさらりと無視して通り過ぎて行ったんだが。行ったつつうか、確実に俺のほうへと向かって来ているような——

「肯定。かなり前からパパさんだけを狙ってるんです」

「ええっ!? 初耳だぞ!」

そう驚いている俺に、腕の中のコロナがぼそつと続ける。

「だから旧魔法少女さんが再点火しちゃうほどまで追い詰められたんです……」

「追い詰められた? なんのこってえい」

言った意味がよく分からず訊ねてみたのだが、そいつは俺の胸にムギユツと顔をうずめるだけで何も答えようとしなない。

「まあいいや。とりあえずコピーから逃げねーと。ダツシユを呼ぶから、しつかりつかまつとけよコロ美ツ！」

「ぐすつ。肯定なんです」

「コロナを抱っこし直して、俺は指輪を勢いよく目の前へと持つてくる。

「バカンス中のところ悪いけれども、もう一度頼むぜ、サメちゃんよ」
準備万端だし、と言わんばかりにキラリと光って応える黄金の宝石に、

「我は欲す。汝が纏う忌むべき力を！ 来やがれえツ、ダツシユ・ザ・アナナエル！」

呪文を唱えての口づけ。

少しだけ甘いクリームの香りが口の中に広がった後、俺の背後に腕を組んだチビ鯨が登場する。

いいねいいねエ。つつがなく召喚出来たぜ。

この召喚の流れもなかなか板についてきたじゃねーか。

「ギアてきて、コピーさんよお、追いつけるものなら……」

相も変わらずヘタクソな飛び方でこちらへとにじり寄ってくるコピーに、

「追いついてみやがれてなモンで、一つ！」

ビシツと指をさしておく。

あんなノロマな動きで、俺様のダツシユちゃんに敵うわきやねエつての。

啖呵を切った勢いそのままに、走り出そうとしたところで、

『え、えっと、その前に自動走行か手動走行、どちらか選んで欲しい』
「へ?」

なんとも気まずそうな顔でポリポリと紅潮した頬をかいているチビ鯨。

そいつの様子を見て、俺まで恥ずかしさのあまり体温が上昇しているのが分かる。

うう。すっかり勢いが削がれちまったぜ……。

「あ、ああ。選ばなきやいけないのか。ていうか、それ毎回訊いてくん

の?」

『自動、手動、どちらも一長一短。時と場合で、使い分けが肝心。だからお前さんに、ちゃんと訊ねたほうがいいかなって。あななは思ってるの』

言いつつ、食い込んだ赤ブルマを直しているハチマキ娘。

うーむ、結構マジメな奴なんだな。

「そうかい、あななが思ってるのなら仕方ねーな。それじゃあ、今回はどうしようかねエ」

自動、もしくは手動のどちらか。つまり、車で言うところのオートマかマニュアルかみたいなお選択だろ?

車の免許はマニュアルを取るつもりだし、ここは試しに手動走行とやらにチャレンジしてみつかな。

あのカブト虫もトロいし、練習がてら丁度良いだろうよ。

「パパさん、それあんまり関係ない気がするんです。ダツシユの手動モードと車さんとは全然違うのです」

「まあ、人の心を勝手に。いいんだよ、俺が似たようなもんだつたら似たようなもんなの。いいからチビチビは黙って俺様につかまってなア」

「こ、肯定」

もう一度、俺の胸に顔を押し付けるコロナをため息混じりに見下ろし、そしてすぐさま後方のダツシユへと目を移す。

「んじや、そういうこって。今回はマニュアルモードをやってみることにするぜ」

『……………』

ん……………? なんだか、ダツシユの様子がおかしいぞ。

先ほどとは打って変わって、不機嫌そうなツラで俺を見ている。

「どうしたんだ、ハチマキ娘? んな、怒った顔して」

『別に…………。なんでもないし』

腕を組んでぶいっとそっぽを向いてしまった。

何が何やら分からねーが、確実にコピーもこちらへと迫ってきているワケで。

そろそろ巻きで行かねーとな。

「いささかに恐縮だけれども、マニュアル走行のほどよろしく頼みますんでっ」

少しばかり焦った口調の俺に、チビ鮫は普段の調子を取り戻して、『了解だし。手動走行へ結晶調整するから、それまでお前さんは、自分の足で後退して欲しい』

「えっ、さっきみたいにすぐに発動してくれねーの?」

シャオの伸びる尻尾から逃げる際、『おっけ』の一言ですぐさま疾駆の能力が発動したような覚えがあるのだけれども。

『あれは自動走行だけ。あなながそのままお前さんの足に力を込めて全力で走ったの。でも、手動はちよつと準備に時間がかかるの。だから、とりあえず走って』

「じ、時間がかかるって……。そういうことは、もっと早めに、」

言いかけたところで、前方からけたたましいサイレンが鳴り響く。

「ぐっ……!」

耳を塞ぎながら見上げると、そこにはフラフラと夜空を不気味に飛翔する巨大なカブト虫が——俺の眼前へと迫っていた。

「い、いつの間に、こいつ!?!」

驚愕よりも前に、俺の足は勝手に動き出していた。

もちろんダッシュの能力ではなく、恐怖によつて反射的に動いている。

マズイ、マズイぞ。いささかにどころのハナシではない。本気でヤバイ状況だ。

いくらコピーが遅いとはいえ、さすがに『疾駆』無しの足ではすぐに追いつかれてしまう……!!

第五十八石：それはやけに生暖かくて

「はっ、はっ……。や、やっぱし無理があるってエの」

走りながら振り向くと、コピーとの距離がグングンと狭まっていつているのが分かる。

指輪の速度増加効果があるからまだマシだが、無けりやとつくに追いつかれちまつてるだろうな。

「おい、こんなにやる！ どうして俺様を狙うんでエい。杖も無けりや変身もしていないんだぜ。そんな奴を狙っても面白くねえだろ。なあ、ここは一つ仲良くいこうじゃねーか！」

なんて言っても聞く耳を持たないわけで。

むしろ、聞く耳すら持っていないように。

依然として頭上で回転している敵意むき出しの光輪を見て、俺は小さく舌打ちをする。

こんな相手、穩便に済ませられるはずがないって。やはり、話を聞いてくれたダツシユは特別だったってことなのか……。

「らいらい、ライトニング、ライトニング、ライトニングッ！」

ゆりなが必死にライトニングを連射して足止めしようとしているが、耐性持ちのカブト虫にとっては蚊に刺された程度なのだろう、平気な顔でこちらに向かってきている。

まったく。式を眠らせたばかりのこの最悪なタイミングにわざわざ登場しなくたっていいじゃねーか。

しかも、よりにもよって高ランクで雷に強い模魔ときたもんだ。ほとほとついてねエぜ……。

とにもかくにも、今は全力で逃げまくってチビ助の再点火とやらを完全発動させるしかあるめえ。

裏・集束状態にさえなつちまえば、いくらコピーといえど一瞬でケリがつくだらうよ。

「おいチビ鮫っ、調整とやらはまだなのか!？」

息を荒げて背後を振り返った俺に、

『おっけ。結晶調整完了。手動走行用レバー、展開』

空中の何も無いところをやみくもに指でタッチしていたチビ鯨は、
そう言い終わると俺に目配せをした。

「レバー展開って、一体なにを……おわっ、こりやなんでエい！」
素っ頓狂な声をあげてしまうのも無理はない。

何故なら、俺の目の前に二つの魔法陣がいきなり現れたからだ。

それは手のひらサイズで、金ピカゴージャスな光を放ちながらゆっ
くりと回転している。

『その中に、両手を突っ込むの』

「え、この中について言われなくても……」

『へーき、よゆう。ぜんぜん痛くないし、怖がらなくておっけ』

「あ、ああ」

言われるがままに手を入れてみたのだけれども。

ぬるっとした生暖かいゼリーに包まれたような感じつつうか、
ちよつとなんとも言えん気持ち悪さだぞ。

しかも魔法陣の先の両手が見えなくなっちゃったし。一応、手の感
触はあるが——コレ、本当に大丈夫なのかねエ。

『ん……っ。そう、もつと奥に、手を伸ばして』

「わかりましたんで、っとー！」

勢い良く伸ばした先には、確かに操縦桿のような硬い棒があった。
なるほど。これが手動用レバーってやつかね。

『いたたっ！ お前さん、ちよつと、乱暴だし……』

「ん。なんか言ったか？」

『な、なんでもないし。とりあえず、それをしっかり握って欲しい』

「オーケイツ」

グツと握った瞬間、まばゆい光とともに、それまで見えなかった俺
の両手が徐々に姿を現す。

「おお、すげエ。こりやまたゴテゴテと。車というよりもどこその巨
大口ロボット並だな」

いくつものスイッチがついた金色の操縦桿。

思った以上にハイレベルなデザインのそれに、少年心をくすぐられ
るがまま興奮する俺だったが、

「パパさん、喜んでる場合じゃないのです、はやくそのレバーを——
ダツシユを操縦して逃げるんですっ」

いつの間に肩車のような状態になったのか、頭上からコロナが俺を
急ぎ立てる。

「わかつてるっつーの！」

とは言ったものの。一体これをどうすればいいんだ？

説明も無しにいきなり操縦しろっつわれてもなア……。

とにもかくにも、スイッチを押してレバーを動かすしかやることは
ないワケで。

「ポチっと、あんど、ゴー」

なんて言いながらテキトーにスイッチを押した次の瞬間、いきなり
俺の足裏から火花がほとばしった。

そして、特大跳躍。

「うわわっ！ これってば、もしかして、さっきダツシユが使っていた
結晶強制なんたらっつうジャンプか？」

そんな動作が出来るスイッチがあっただなんて、というかそれを
今、この状況で押ししてしまうだなんて。

不連続きで悲しくなってくるぜ。今日は厄日決定だな。いや、今日
も——か。

と。心の中で苦笑していたとき、

「……グズグズと。いつまでもふぎけてんじやないわよ。やつばダメ
ねえ。バカは死ななきや治らないみたい。いえ、バカは死なれなきや
治らない——と言ったほうが正しいのかもしれないわね」

不意にシャオの声が聞こえてきやがった。

まーた、あのヤロウ俺を煽る気だな。

どうせチビ助を怒らせて裏の発動を早めようって魂胆だろうが、い
つまでも言われっぱなしってワケにも——

「ひいっ!？」

突如、頭上から声にならない悲鳴があがった。

「ん？ どうしたんだよ」コロ美

とりあえずシャオをさらっと無視し、悲鳴の主であろうチビチビの

方へと視線を向けようとしたところで——何かを砕くような鈍い音が耳に入ってきた。

そしてやや半瞬ほど遅れて、背中に凄まじい衝撃を受ける。

「ぐがつ……！」

「あうっ」

瞬く間に地面へと叩きつけられてしまう俺とコロナ。

とはいえ、叩きつけられる寸前にダツシユの放った結晶が衝撃緩衝材よろしく俺たちを守ってくれたのでダメージはほぼ皆無に等しかった。

もしも、ハチマキ娘がとっさの機転を利かせてくれなかったらと思うと……。い、いささかに恐ろしすぎるぜ。

「いつつつ。なにがどうなってるんだア」

そう言い、原因究明を試みようとする空を見上げ——るまでもなかった。何故なら巨大な影がすっぽりと俺を覆っていたからだ。

「そうか、ちようどあいつの目の前にジャンプしちゃったから叩き落されたのか……くそっ！」

運の無さにもう一度嘆きたくなるどころだが。

しかしながら、ちよつとはまだ運が残っていたようで、そいつは四つの複眼を上方へと向けたままピタリと動きを止めていた。

「まさか、俺たちが真下にいるということに気付いてねーのか？」

普通、自分で叩き落しておいて気付かないワケがないと思うのだが——やはり所詮は虫なのか、そこまでは頭が回らないようで。

まあ、なんにせよチャンスは今しかねえ。

とりあえず投げ出されたコロナを拾い上げ、俺は背後にいるハチマキ娘に叫んだ。

「ダツシユー！ いささかに悪いんだけども、手動走行から自動走行へすぐに調整しなおしてくれっ」

すると、さっそく切り替え作業に入ったのか、俺の手から操縦桿がフツと消えた。

「手間かけさせてすまねエ。マニュアルモードはもつと余裕のあるときに練習しときますんで。いやはや、ぶつつけ本番でやるもんじやな

かったぜ」

『……………』

「あつ、まさか手動から自動走行に戻すのにも時間がかかるのか？
だとしたら手動のままのほうが良かったのかねエ」

『……………』

だが、何を言っても梨のつぶて。

もしかして『おまえさん、模魔使いが荒いし！』てな感じで、ぶん
ぶん怒ってたりして。

うーむ。この状況でチビ鮫の機嫌を損ねてしまうのは非常にマズ
イよなあ。まさに死活問題だぜ。

なので。ここは一つ、伝家の宝刀である餌で釣る作戦を実行してみ
ることにする。

「えつと、あの。ダッシュちゃんよオ。あとで超美味しいチョコバナ
ナクレープを作ってやるからさ、機嫌を直してもらえるととても嬉し
いのだけれども……………」

なんて手を揉みつつ振り向いた次の瞬間。

何故か、ふわつと抱きしめられてしまった。鼻腔をくすぐるはハチ
マキ娘特有のやけに甘ったるい香り。

いや、ちよい待て。ふわつとどころじゃねエ。こりやあ、がしつと
レベルにまで達しているぞ。

「むぐぐつ!?! な、なんなんでエい、こんな時につ。まさか、お前さん
までコロ美みたいに甘え出す気じゃあないだろうな？ ていうか、息
が出来ねえつての!」

と、そいつの胸の中で必死に手をバタつかせながら抵抗していたの
だが。

再びサイレンのような咆哮がしたため、俺はビクツと身をすくめ
る。

や、やべえ。まさかコピーのやろう、俺たちに気付きやがったか!?

「おいおい、だあら今はそんなことしてる場合じゃないんだって。す
ぐ真上にあいつがいるんだぞつ。いいから放して、」

そう。

引つ剥がそうと、そいつの背中に手を回したとき、指先にぬちやつとした何かが触れた。

それはやけに生暖かくて。

やけに、生暖かくて。

やけに――

「え……う？」

おそろおそろ手を眼前に持つていくと、俺の手のひらがとても鮮やかな赤に濡れていた。

さつきまで真っ白だった体操服が、見る見るうちに赤へと侵食されていく。

理解が、追いつかなかった。

第五十九石：あつけないもの ☆

「さ、さつき、コピーがパパさんを爪で狙って……でも、それを、ダツシユがとつさに庇って……」

先ほどの何かを砕くような鈍い音を思い出す。

あれは、あの音は。

なんの音、だった？

理解を——したくなかった。

口の端から血を流し、苦痛に顔を歪めているハチマキ娘を、俺はどんな顔で見っていたのだろう。

『お前さん、無事、か？』

『どうして、どうして俺を……』

『簡単。あなな、お前さんを守る。契約、した。だから守った、それだけ』

俺が、手動を選択したから？

俺が、操縦を誤ったから？

俺が、不運だったから？

ああ——そうだ。今日はとことんツイてない日なんだ。

だから、こんなことに。

だから。

『いつまでもふざけてんじやないわよ』

先ほどのシャオメイの言葉が頭を過ぎる。

違う。

運が悪かっただけの、ただの言い訳だ。

そんなもの、都合のいい言い訳に過ぎない。

「ごめん、ごめんな……。俺がもっとマジメに逃げていれば、お前をこんな目にあわせることもなかったのに……」

『なぜ、謝る？ 別にお前さん悪くないし。コピー様が相手なのに、手動か自動か、変なこと訊いたあななのミス』

「違う！俺が、」

言いかけて、俺は息を呑んだ。

チビ鯨の向こう側に降り立つコピーを見たからだ。

あいつ、やっぱり俺たちに気付いて……！

『そんな顔しないで、へーき、よゆう。自動走行の調整、あと少しで完了。それまで、まだ守れるから……多分。きつと』

そう微笑み、もう一度俺を抱きしめるダツシュ。

「や、やめろ。もういいから……」

『あななの血、お前さんの服を汚しちゃうけど、すぐに綺麗に乾くから、心配しないで欲しいし』

「そんな心配をしてるんじゃないやねえ！俺はお前に……うわっ!」

全身に響く振動に、驚いて目を閉じてしまう。

『うぐっ……!』

苦しそうなうめき声に慌てて目を開けたときにはすでに——コピーの前脚がチビ鯨の背中へと深く突き刺さっていた。

次の瞬間、鳴き声とも笑い声ともつかない不気味な声をあげて翅を広げるコピー。

やっと獲物にありつけた。そんな喜びを歌うかのように奇声を発し、鋭い前脚で小さな体を何度も抉る。

一心不乱に。

何度も。何度も。何度も——

「放せ、俺を放すんだっ。いくら模魔が丈夫だって言っても相手が悪すぎる！ご主人様の命令だ、いいから指輪に戻れ、戻ってくれ！」
強引に引き剥がそうとしているのに、そいつは強い力で抵抗して俺を抱きしめ続ける。

そんな中、俺の小指にはめている指輪が一瞬だけフラッシュした。

「ダツシュの指輪に、亀裂が……」

切り裂かれる度に次々と亀裂が増えていく黄金の宝石。

ついさっきまで、あんなに綺麗な宝石だったのに……。

一瞬で、こんな——

『乱用すると少しずつヒビが入ってきて——最後には消滅しちゃうん

です』

コロナの言葉を思い出したと同時に、俺の頬を涙がつつた。

『泣くなんて……おまえさんらしく、ないし』

呆けてる俺にそつと手を差し伸べるダツシユ。

そいつは、とめどなく流れる俺の涙を優しく指先で拭いながら、

『あななは、おまえさんに、涙は似合わない……そう、思うの』

そして。

さらに、こう呟いた。

『ほんの、本当に、ほんのちよつとの間だったけど、おまえさんと契約して、良かったし……』

今も背中を抉られ続けているというのに、笑顔のまま最期の言葉を紡ぐそいつに、

「おいつ、縁起でもねエ言い方すんなよ！ これっぽちの傷で消滅なんざしねエよな!」

涙声で叫ぶが、

『……調整完了』

俺の問いには答えず、ギユッと俺の全身を強く抱きしめるダツシユ。

次の瞬間、ガリガリと何かが削れる音と共に、俺の体が少し浮き上がる。

これは……なんなんだ、この音は。

まさかと思い、ダツシユの背中を見ると、コピーの両脚が深く突き刺さっていた。

こ、このまま急速後退しちまったら、こいつの体は――

「ま、待てー!」

勝手に走り出そうとする足を引っぱたき、なんとか踏みとどまろうとするが、自動走行モードに入ったためか、一つも言うことを聞きやがらねえ。

くそつ、こうなったら力づくしかあるめえ。

「バカ! 待ってって、今走り出したら、お前は本当に壊れちゃうんだぞ! それでもいいのかよつ」

チビ鮫の小さい肩を両手で掴んで、押し戻しつつ言う俺に、

『そんなの、へーき、よゆう……。あななは、大魔宝石じゃない、ただの模造魔宝石だし……。それに、コピー様やシャドーみたいな強い宝石でもないし。だから、だからね。別に壊れても、へーきだし。あななは、使い捨てで、おっけ』

「お前、なにを言ってる……」

言いかけたところで、俺の両かかるとに黄金の結晶がこびりついているのに気付いた。

「こ、これはなんでエい？」

『ごめん、なさい。もう立ち上がる力が、残ってないかも。だからこのままの体勢で後退するし』

「えっ、このままの体勢で……うわわっ!?!」

途端。爆音を立てて、後退する俺たち。

まるでジェットコースターのような猛スピードに、ギョツと目をつぶっている。

『へへへ。恐がってるお前さん、ちよつと可愛いかも』

ダツシュが意地悪そうな顔で俺の頬をつついてきやがった。

そのニヤケ面にさっきまでの涙なんて吹き飛んじまって、ついついいつもの調子で、

「べ、別に恐がってなんかねーよ!」

『強がるな、強がるな。恐かったらあななにもつとピツタリくつつくといいし』

「だから別にこんなの全然恐くなんかねえっての!」

『そつか。じゃあ、もうちよつと速度あげるし』

「う、嘘っス、すんません、お願いだからこれ以上速度あげないでくれイ!」

『へへへ。最初から、素直にそう言えば良かったし』

な、なんだよ、こいつ。

急に調子を戻しやがってからに。

まったくもって『へーき、よゆう』って感じじゃねーか。

相変わらず口端から血を流してはいるけれども、先ほどの辛そうな

様子なんざ微塵も感じられねーぞ。

「もしかして、今までの全部演技だったとか、そんなオチねーよな……」

『だったりして』

言いかも言ったり。

テへっと片目をつぶって舌を出したハチマキ娘に、俺の手がとつさに動く。

「ご、こんのチビ鯨があー！」

頬を両手でギューつとつねってやる。

もちろん爆走ホバー後退しながら、だ。今はスピードの恐怖よりも、こいつへの怒りが勝っていた。

「ちきしょう、俺様の涙を耳をそろえて返しやがれっ！」

『いひやいいひやい、あなな、壊れひやうしっ』

「てやんでえい、お前さんなんざ壊れちまえてんでエイ！」

なんてバカなことを走りながらやっていたからだろうか、カーブを曲がりきったところでバランスを崩し、盛大にずっこけてしまった。

「いつてて……」

すぐさま上体を起こして俺は投げ出されたダツシュのもとへと駆け寄った。

うつ伏せになったままピクリとも動かないそいつに、一つため息をついて、ペシペシと尻を叩いておく。

「おい、チビ鯨。今度は死んだフリかあ？ 二度とその手は食わねーつての。ほれ、コピーの鎧の音が聞こえるだろ。あのヤロウが来るまえに、とつとと起きてくれイ」

すると、そいつは顔を上げることなく、ぼそつと呟いた。

『へへへ。やつと、おまえさん、らしくなったし……。あななは、あななはご主人様と、最期まで一緒に走れて……』

「はあ？ 何、ワケわかんねーことブツブツ言っやがんだア。いいから、行けぜ」
と。

そう言っ、右腕を掴んで持ち上げたとき——そいつの腕がポロつ

と俺の手の中から抜け落ちた。

「え？」

音も無くアスファルトに落ちるハチマキ娘の腕に唾然としていて、瞬く間に金色の粒子となって空へと消えてしまった。

空へと。消えて、しまった……？

ツバを飲み込んで、一歩下がりが、今起きたことを頭の中で必死に反芻する。

俺がチビ鯨の腕を、持ち上げようとしたら、その腕が落ちて、地面に落ちて、落ちて消えて、光になって消えて――

「嘘、だろ……」

口の端から垂れた血はすでに跡形もなく消えているのに。体操服も出会ったときのように真っ白に戻っているのに。

なのに。

もう動くこともなく。喋ることもなく。笑うこともなく。

空っぽに、なまってしまっていた。

ただの、道端に転がる――石のように。

「……………」

左腕、右足、左足と、次々に空へと消えていくその様に、為す術もなく呆然と見下ろしていると、乾いた風がダツシユのやわらかい金髪を僅かに揺らした。

乱れた髪からのぞく安らかな顔に、俺はようやく――そいつの死を悟ることになった。

「ほ、本当に……壊れちゃうバカがいるかよ……」

「あーらら。このクズ石を捕まえたのって確か今日の夕方くらいだったわよねえ。それがなあに、まだ半日も経ってないのにもう消滅う？

さっすが低ランク。あつけないものねえ」

「!？」

驚いて、振り向くとそこにはいつの間にも地上に降りてきたのだろうか、シャオメイが立っていた。

そいつは仁王立ちのまま、けらけらと面白そうに笑い、

「はっ、とーんだお笑いぐさだこと。ご主人様の選択を間違えるから

こうなるのよねえ。猫憑きと契約すれば、ちったあ長生き出来たかもしれぬのにさ。まっ、ただの石つころに生きるも死ぬもない、か。むしろ壊れてよかったのかもしれないわ。だって、喋る模魔だなんて気持ち悪いし。居ないほうがマシなもの」

「そう言い終えるや否や、消えることなく残っていたダツシユのハチマキを——強く踏みにじった。」

第六十石：怒りに染まる瞳

あまりにも非道な行動に、俺はとっさにシャオの胸倉を掴んで叫ぶ。

「てめえ、なんてことを……！ その薄汚ねえ足を今すぐどけろよッ！」

「あーら、ご挨拶なこと。このあたしの美しい足が薄汚いだなんて、フアンのみんなが聞いたら暴動起こしちゃうわね」

言いつつマントをめくり、白い太ももをチラリと覗かせるシャオメイ。

「ふふっ。フアンと言っても、猫憑きみたいな子は少数。大きいお友達ばかりだからさ。あんたみたいなチビ、瞬殺よ、瞬殺う」

俺を見下ろし、またもや嫌味な笑みを浮かべる。

そんな人をバカにした態度の数々に――

「ぎけんじゃねエよ……」

積もりに積もった怒りが、俺の目の前を真っ赤に染める。

「いいから足をどけろっつってんだよ。チビ鮫のハチマキを返せ」

胸倉を掴む手が薄緑色に淡く光り、そいつのマントを一瞬で凍らせた。

「え……？」

突然の魔法に驚いたのだろうか、シャオの表情が一転する。

魔法を放ったつもりはなかったが――そんなことは、どうでもよかった。

俺は構わずそいつに詰め寄る。

「なにが気持ち悪いだ。なにが低ランクだ。なにがクズ石だ……」

「な、なんでこのタイミングで点灯すんのよ？」

「トップアイドルだかなんだか知らねエけれども、俺にとってダツシユはテメエみたいなクソヤロウより、何千倍も可愛いヤツだった……」

「しかも、赤い光ってことは――」

「俺はどう罵倒してもいい。だが、死んだ者の悪口を……一生懸命に

俺を守ってくれたあいつを馬鹿にするのだけは、絶対に許さねエ」

「まさか、あんたのトリガーって猫憑きじゃなくて、」

狼狽しているそいつの眼前に、もう片方の空いた手をゆらりと突き出す。

瞬時にありつただけの魔力が込められ、凄まじい冷気を帯びる右手。

「ごちやごちやとうるせえなあ……。足どけるよ、コラ。じゃねエと、全身を凍らせるぞ」

「……………」

無言で身をひいたそいつの足元からダツシユの赤いハチマキを拾い上げたとき、背後から殺気を感じた。

振り返ると、そこにはコピーの姿があった。

甲高い鳴き声をあげて俺を威嚇するカブト虫。

「まだいたのか。いい加減しつけえんだよ、お前……。めんどくせえから壊れちまえよ、もう」

緩慢な動きでシャオからコピーの方へと右手を伸ばす。

そして、一言だけ。

「フィンブル……」

ボソッと呟いた次の瞬間、右手から竜巻が放たれた。

虫らしく這って近づいてきたそいつを強制的に立ち上がらせるほどの暴風に、

「バカッ、変身も杖も霊獣も無しで、なんて魔法を出してんのよ！ あんた、死ぬ気!？」

背後のシャオが驚いたような声をあげるが、そんなこと知ったこつちやねエ。

「死ぬ気じゃねえよ、殺す気だつての。あいつが俺のダツシユをいたぶり殺したんだ。その礼はご主人様の俺がしなきゃな」

言うと同時に、今度は大量の雪が舞い出した。

それはあつという間にコピーの下半身を覆う。

立ったままの状態で鳴き叫んだあと、しきりに脚を動かすが——そんなことじゃ俺の雪は吹き飛ばせない。

「無駄だ。どう身をよじろうが、もうお前は逃げられない」

「あの巨体のほとんどを覆う雪を瞬時に……。さつきまで魔気が全然感じられなかったのに。どっから魔力をひねり出してんのよ、こいつ……」

「おい、シャオ。凍え死にたくなかったらノンキに観戦してねえで、とつとつシャドーを召喚して逃げなア。さつきみたく尻尾を巻いて、さ」

「ハッ、おあいにく様。あたしは紗華夢 夜紅よ。あんたなんかの弱っちい魔法で死ぬわけないじゃん。むしろ涼しいくらいだわ。適温ってカンジね」

「ふうん？」

「な、なによそのムカつく顔は……」

よく言うぜ。クシヤミをして慌ててマントを着なおしたくせによ。

後ろで何をしようが、今の俺には全部『視えている』んだからな……。

「ま、忠告はしたからな」

それよりも、と。

すっかり身動きの取れなくなった虫を見上げて俺は薄く笑った。

「ごまあねエな、ゴミ虫。ゆりなの到着を待つまでもない……。俺がこのままブツ壊してやる。木っ端微塵にな」

息を吸って右手に全魔力を注ぐ。

やっと自分の置かれた立場に気付いたのか、四つの複眼をグルグルと回し、慌てふためいた様子でサイレン音を出すカブト虫。

「いささかに良い声で鳴くじゃねえか。心地良いねえ。実に心地良いよ、『キミ』キア」

悲鳴をつまみに、俺は目を見開いた。

一瞬のノイズ。次に視界に赤いモヤがかかり、ヒビの入ったロックオンサイトが現れた。

それは右往左往したのち、コピーの頭——いや、複眼を捉えた。

そして、視界の隅にぼんやりと映っていた『射程圏外』という赤い文字が『射程圏内』へと切り変わった次の瞬間、俺は溜まっていた魔力を一気に放出した。

風、雪に続く三段階目の大粒の雹が手のひらから勢いよく飛び出す。

「ほらほら、コピーさあん。その名は、飾りなんですかア？」

鋭い雹の弾幕に右上の複眼が瞬く間に破裂音をあげる。

まだだ。

「コピーさんなんですよねエ、コピーするんですよねエ？」

次に左下の複眼が破壊される。潰れた眼からどろりと血が垂れ出し、そいつの足元に積もった雪を赤く染める。

まだだ。こんなものじゃない。

「だったら、俺の魔法を……『フィンブル』をコピーしてみてくださいよオ？」

必死に逃げ出そうと広げられた翅を、氷の刃が二枚同時に貫く。穴の開いた部分から凍結がジワジワと広がっていく様を見て、俺はさらに口角を上げた。

まだだ。痛みは、こんなものじゃない。

「それとも、『脱皮』とやらをするんですかイ？」

今度はもう二枚の翅を粉々に切り刻む。

まだだ。痛みは——ダツシユの受けた痛みは、こんなものじゃない。

「さっさとしねーと、終わるぜえ、終わっちゃいますぜエ!？」
そして。

最後に残った二つの複眼を乱雑にすべてブチ破る。

苦痛に蠢いていた四つ脚がだらんと垂れ下がったのを確認した俺は、魔法を止めて右手を一つ払った。

「チツ、あっけねエ」

カランコロン、と。

乾いた音を立てて地面に大量の氷の粒が落ちる。

「あらよっと」

変な掛け声に、俺は前方を見たまま視界を後ろにぐるりと回すようイメージする。

すると、赤く明滅する世界に、転がった氷の粒を拾い上げるシャオ

の姿が映った。

「……なにをしている」

「別に、ちよつとした検査よ。そんな、おつかない声を出さなくてもいいじゃん。うーん……硬度、冷たさ、纏つてる魔気。全てにおいてちやんとした『フインブル』の氷だわ」

「フイン、ブル……？」

「再点火じゃない天然の裏・集束だとしても、杖も何も無い素の状態での大魔法を繰り出せるなんて、いくらなんでもありえないわねえ。紗華夢ならまだしも、レベルⅡマイナー如きにこんな芸当が出来るはずないわ。でもピース様が嘘を言うわけないし……」

「ぶつぶつと。さつきから再点火だの裏集束だの、何を意味わかんねーこと言ってるんだよ、お前さん」

あくびをしながらゆるりと後ろを向いた俺に、そいつは怪訝そうな表情で、

「あんた、もしかして自分が今何をしたのか分かってないの？」

と……言われましても。

何をしたのかって。

そんなの。そんなの、決まっているじゃねーか。

「スノードロップを、飴ちゃんを杖から出してコピーを倒したんだろ？」

「ス、スノードロップう？」

「いやー、それにしても、あんなに強いとは思わなかったぜ。軽い牽制魔法かと思っていたんだが、いやはや。認識を改めなきゃいけない。まったくもって飴ちゃんを甘く見ていたってハナシでさア。いやこれが、ほんとの飴ちゃんだけに……なんつって!」

ドツと腹をかかえて笑う俺に、シャオは「あーらら……」と残念そうに眉根を寄せる。

「記憶の混乱、欠如。そして自己防衛による改ざん。典型的な怒りによる裏束ね。まさかとは思っていたケド、たった数時間従えただけの模魔に、どうしてそこまで怒れたのかしら。猫憑きのときは発動する素振りも見せなかったのに」

欠如はまあなんとなくわかるが。改ざんって何だ、初めて聞いた単語だぞ。

「ハア？　んな、難しいことをベラベラ言われてもよ。俺の頭でも理解できる言語で喋ってくれ。恐縮だけれども、いささかにあくびが出るぜ」

そう、あくびを放ちつつポリポリと頭をかくと、ちようど俺のアホ毛が綺麗なハテナマークの形になった。

「バーカ、いつまでも寝ぼけてんじゃないわよっ！」

アホ毛をピシッとデコピンよろしく中指で弾いて、

「あんた、手から水を出して自分の顔を見てみなさいよ。切れかかっているとはいえ、それを見れば少しはあたしの言っていた意味がわかると思うわ」

「えっ。あ、はい。わかりましたんで……」

言われたままに、両手で水をすくうような動きを試してみる。

すると、ゴボゴボ音を立てて手のひらいっぱい水が現れた。

それをポーッと覗いてみたのだが……、そこには瞳全体が赤く明滅している悪鬼のような顔が映っていた。

「えっ!？」

驚いて目をこすり、もう一度水を出して覗いてみると、普段の色――鶯色の瞳をぱちくりしている幼い少女が映っているだけだった。

「お、おい。さっきの世にも恐ろしい顔はなんなんでえい！」

「バツカバカじゃん。あんたの顔に決まってるでしょ。あんたはクズ石……っていうか、八番石ダツシユの死によって裏集束が発動したの。六番石ホバーからあんたを庇おうとした猫憑きのようにね」

ワケが分からん。

俺が、あの赤いゆりなのように眼がピカつたって……そんなバカな。

「でもよお。全然覚えてねーぞ。スノードロップをがむしやらに撃つた覚えしかねえし。裏集束しただなんて、そんなことを言われてもよう……」

そう困惑して呟く俺に、シャオが呆れた様子で腕時計へと視線を落

とした。

「チツ。完全に裏の光が消えてるわね。あと十五分以内での再発動率は天文学的数字。もしかしたらって思ったケド——やっぱり、ここま
でか……」

言つて、マントの中からカラフルな棒付きキャンディを取り出す
シヤオメイ。

それを美味しそうに啜えると、髪をふわりとかきあげて、跳躍。

「ふふんっ」

そいつは街灯の上に音も無く綺麗に着地すると、

「ま、あんたにしちやあ頑張ったほうね。面白いものが観れて楽し
かったわ。じゃ、さよなら。バカてふ」

「バ、バカてふってなんでえい？」

「おバカな蝶々さん、って意味よ」

ベーっと舌を出して、そのまま闇の中へと消えてしまった。

「……………」

手のひらの水面に映った困り顔の少女をジツと見つめていると、
『パパさん！ コピーはまだ生きてるんです！』

突然、空から大声が降ってきた。

第六十一石：時園に迷う二つの魂 ☆

その声にビックリしてコピーのほうへと顔を向けたのだけでも、なんと。

四つ脚を器用に動かして大量に積もったスノードロップの山々をかき分け始めているではないか。

「うげっ!? いくらなんでも、しぶと過ぎだっつーの!」

こうなったら、そのうぎってえ脚もさつきみたいに全部凍らせてやるぜ。

「もっかい頼むぜ、飴ちゃんよ! スノオオ……ドロツプう!」

ピツと人差し指を向けたのだが、俺の指先から出たのは少量の水だけだった。

「あれ? さつきは詠唱なしでも出たハズなのに……」

そうこうしている間に、どんどんと飴ちゃんが取り除かれ、今度は下半身を覆っている雪山を崩そうとしているコピー。

ヤバイ。省略化なんて考えている場合じゃねえ、ちゃんと順序を守って魔法を出さねーと!

「ぷくゆゆん、ぷゆん、ぷいぷいぷう! すいすい、スノードロツ——ぐわっ!」

呪文を唱え終える寸前、すさまじい頭痛が俺を襲う。

次に、眼が焼けるように熱くなっていく。

「うぐっ……! 眼、眼がッ」

地面にヒザをつき、俺は両目を手で覆った。

な、なんなんデエい、この痛みは。

本当に——俺はゆりなのように裏束をしちまったっていうのか。シャオの言っていたことが正しかったとしたら、俺は大魔法『フィンプル』とやらをスツピンのまま撃ったということになる。

この頭全体が焦げるような激痛は、その反動なのか……??

「ううう」

ぴりぴりと手が痙攣を始め、目の前が二重にぼやけてしまう。

そのぼやけた視界に映ったのは、雪山を完全に取り払い終えたコ

ピーの姿だった。

そいつは頭の中央に埋め込まれている桃色の宝石を眩く光らせながら、頭上の光輪を激しく回転させた。

ホバーのときのような……攻撃の予兆。

眼は全部破壊した。翅も二枚はバラバラに、もう二枚は氷漬けの状態で。

赤いゆりなに匹敵するハズの大魔法を喰らわせたってエのに、なんでこいつはここまで平然と動けるんだよ。

これに加えて、脱皮とかいうのもオマケについてくるんだろ？

ランクBだからって、いくらなんでもこいつの強さは異常だって。

こんなの、こんなの絶対に勝てっこねーじゃん……。

そして。

赤黒い光の輪が、攻撃を繰り出す際の最終合図であろう閃光を――放った。

「い、いっひっひ。これはこれは。あっけねエのは俺様だってオチかい」

跳躍し、動けずにうずくまっている俺の前に降り立ったコピーは、やたらにデカイ口を緩慢な動きで開ける。

ゆりなのように瓦礫を投げつけるでもなく。

ハチマキ娘のように脚でいたぶるでもなく。

そいつは大魔法で傷つけられたプライドの仕返しだとも言うかの如く――俺を頭から確実に、残酷に、喰い散らかして殺すつもりらしい。

まさか。まさかな。シャオの言っていたとおりの展開になるなんて、よ。

本当に身をもって確かめることになるなんざ、まったくもって笑えん話だぜ……。

「すまねえなあ、チビ助……。最後まで、手伝ってやれなくて」

喰われる寸前、コピーの口内に潜んであった不気味な『目玉』と目が合う。

そこで――俺の意識は途絶えた。

鼻をかすめる花の香りに、ほのかに漂う蜜の香り。

続いて鼻の穴に突撃するは一匹の蜂ちゃんで……。

一匹の、蜂ちゃんで——

「ぶえつくしー！ てやんでえい、べらぼうめい！」

親父直伝のクシヤミをかまし、俺は鼻の穴に侵入しようとした蜂をすんでで追い出した。

あぶねーあぶねー。刺されたらいささかにヤバかったぜ。

確か二回目はアナなんちやらシヨックで死ぬかもしれないんだっけ。小学生のころに一回刺されてからは気をつけるようになって親父に口をすっぱくして言われたからな。

さすがに寝てる間に襲われちゃあ、どうしようもないって話だけども。ま、なんとか死なずに済んで良かったぜ。

と、安堵のため息をついていたら、逆上した蜂が猛然と俺を襲ってくるではないか。

しかも大量の仲間を従えて。

「くつ、蜂ちゃんごときが。氷と水の魔法使い様に勝てますかってんでいい。ぷーゆゆんぷゆん、ぷいぷいぷう！ すいすい、口から吹雪ってなもんで！ 『アイスブレス』 つとくりやあ！」

ぷーつと吐き出された氷の吐息で見る見るうちに凍り、墜落していく蜂の大群。

「いっひっひ。恐縮だけれども、どうやら相手が悪かったようだぜ、チミたちい」

氷漬けになった蜂たちを、

「てやっ。ていていつ、どーでえい参ったか」

と、おはじきよろしく指で弾いて遊ぶこと数十秒。

俺はハツと気付いて、周りを見渡した。

「って、なんなんや、ここはっ!？」

一面に広がる花畑。

地面は色とりどりの花たちが美しく生い茂っているという幻想的

な風景なんだけれども、空が……なんつーか凄まじく奇妙だった。

「なんでこんなに時計がたくさんあるんだア？」

暗い空にぎっしりと敷き詰められているのは大量の時計だ。

それもベルの付いたシンプルな目覚まし時計から始まって、懐中時計、壁時計、腕時計、柱時計など様々な種類の時計が所狭しと飾られていやがる。

その光景を見れば誰だって『凄まじく奇妙』としか言いようがないだろうさ。

「うーん、ここが天国とやらなのかねエ……」

一応、ふらつと歩き回ってはみたものの、延々と花畑が続くだけだったので、小一時間もしないうちに飽きた俺は大の字に寝転がっていた。

花の香りをたらふく吸いつつ俺は独り呟く。

「たしか、俺はあの時コピーに頭から喰われて死んだはず。するつてえとつまり、ここが死後の世界となるわけで。にしても、天使も閻魔もいねーのはいささかに不思議なもんだぜ」

もしかして三途の川みたいな場所なのだろうか。そういや、川の向こうに花畑が見えて、そこに行っちゃまうと死んでしまっただっけか。

川を渡った記憶は無いが、花畑の中にいるってことは——もうダメだな、こりゃ。

「すでに死んでるっつーのに、蜂なんかで死ぬだなんだ騒いでバツカみてエ」

それにしても綺麗な夜空だねえ。

時計は邪魔くさいが、その隙間から見える星の数々に俺はガラにも無く見惚れていた。

たまに吹く風が俺の頬を撫で、遠い花の香りを鼻先へと運んでくる。

先ほどの戦いが嘘のような静けさだった。

「ふわあゝあ」

さつきからやたらに眠い。このまま眠ったら、今度こそ天国かね。それとも地獄か。

ま、どつちでもいいや。めんどくせーからとつと連れて行つても
らいたいもんだぜ。

そう、大きく伸びをしたとき、いつせいに時計たちが騒ぎ出した。
目覚ましのベルやら、柱時計の時報の音やらがごつちや混ぜになつ
た不協和音が俺の耳に飛び込んでくる。

「う、うるせー！ 寝られねーじゃねえか」

文句を言いつつ、耳を塞いで空を見上げたのだが。

そこで俺は絶句することになった。

なぜなら、大量にあつたはずの時計がいつの間にか姿を消しており
——その代わりに、巨大な目が星空の中に現れていたからだ。

目玉じゃなくて、目だ。まぶたもあり、まつ毛もある。

まるで誰かに覗き込まれているかのようなおぞましさ。

「なんじゃありや。うえー。気持ちわりイぜ……」

よく見ると、その目の中には時計のような長針と短針と秒針があつ
た。

その瞳の中の時間によると、今は零時らしい。夜のようなだから午前
か。秒針は三十秒を過ぎている。

つまるところの、あの騒ぎは零時を知らせる時報だということなの
か？

なんでこんな世界に時報なんかがあるのかねえと首を傾げたとき
だ。

静寂を取り戻した花畑に、かすかに足音が聞こえた。

ザツ、ザツと草花を踏みしめるような音。

「だ、誰かいるのか？」

ビクツと身を震わせて喉を湿らし、その音のする方へと足を向け
る。

もしかしたら俺のあとに死んでしまったヤツがいるのかもしれない。
い。

ふと脳裏を過ぎるのはゆりなの無邪気な笑顔だった。

あいつ、まさか……。

「チビ助……。もし、こんなところに来やがったら、力づくで追い返し

てやる」

ゆりなじやないことを祈りつつ歩を進めると、やがてその足音の主の後ろ姿が目に入ってきた。

風にたなびく長い髪に、見慣れたチビ助の旧魔法少女コスチューム。

一瞬、ゆりなかと思っただけけれども。なんとなく違うような……。

それよりも前に、おかしな点が一つある。

「なんだ？ あいつだけ色が無いぞ……」

空も花も、俺だって色はあるというのに、そいつだけ塗り忘れたかのように色が抜け落ちているのだ。

眉を寄せつつ、モノクロ少女の後ろ姿を訝しげに見ていると、突然……黒い影たちがそいつの周りに現れ始めた。

「ば、化けモノ!？」

その影たちは、もぞもぞ蠢きながら動物の姿へと形を変えていく。あるモノは猫。あるモノは犬。あるモノは狐。あるモノは二羽の鳥。あるモノは二匹の蝶へと。

暗いモヤモヤとした影の中に、発光する眼のようなものを携えたそいつらは、少女の周りをいつせいに取り囲んだ。

まさに一触即発。ただならぬ雰囲気、俺はゴクリと唾を飲む。

こ、こりやあ、魔法で助けたほうがいいのかねエ。でも、すでに死んでいる相手に助けるも何もあったもんじやないとは思っけれども。

どうしようかと迷っていると、やにわにそいつは呟いた。

「ごめんなさい。もう一度だけ、私に力を貸して……。助けたい人がいるの。だから、お願い霊鳴」

「え……」

霊鳴を呼んだことよりも、俺はそいつの声に驚愕していた。

俺の耳がおかしくなっていないければ――

「来てくれてありがとう、式式……。また一緒に戦ってくれるの？」

そう……。あなたも同じ気持ちなのね」

天から舞い降りた蒼い宝石――俺の霊鳴石式式にそつとキスをし

て、

「式式、起動……。イグリネイション」

瞬く間に杖へと変化させるモノクロ少女。

こ、この声はやっぱり……。

ふと、スカートのポケットに押し込められた赤いハチマキを取り出す。

「間違いない、あいつは……」

それをグッと握り締め、俺は目の前のモノクロ魔法少女を——いや、『ダツシユ・ザ・アナナエル』と呼ばれていたハズの少女を見つめた。

第六十二石：謎の眼帯少女、ネームレス ☆

「どうして、ハチマキ娘が？」

詠唱も無しに魔法を繰り出し、集った影達を次々に駆逐していく。いつに、ただただ啞然とするばかりだった。

踊るような動きで華麗に金色の雷撃を放つダッシュ。

そいつの出す魔法は呪文名や色こそ違えど、ゆりなの雷魔法にとてもよく似ていた。

しかしながら——雷を使える霊獣と言えばクロエだよなあ。ゆりなど契約しているはずなのに、なんで模魔のダッシュが当たり前のように使えてるんだ？

それに、式式だつてそうだ。状況によつて様々な武器へと瞬時に変化させているという、俺以上の使いこなしっぷり。

ううむ。疑問符だらけで頭がパンクしちまいそうだぜ……。

「……理解不能。それは至極当然」

背後から、やけにか細い声が聞こえたもんだから俺はビツクリして、

「うわ、化けモノの次は幽霊か!？」

と。青ざめた顔で振り向いたのだけれども。

そこに突つ立っていたのは、黒い影チツクな化けモノでもなく、白い影チツクな幽霊でもなく……フツの少女だった。

紫色のショートヘアに、左目は赤紫の瞳で右目は黒い眼帯という、いたってどこにでもいる——つて、ちよつと待て。まったくもってフツの少女じゃなかったぞ。

「なんでえい、その海賊みたいな眼帯は。転んでどつかにぶつけちゃまったとか？ それともモノモライにでもかかっちゃまったのかイ」

「……………」

「まさかまさか。本当に海賊で、今まさにお宝を探し中……とかなんとかだつたりして。いや、でもここは花畑だからなあ。海のウの字もねーし」

「……………」

「ガン無視っすか」

というよりも、ガン見無視というべきか。

その紫少女は俺より背が低く、こちらをジーツと見上げているワケなんだが……その眼力が凄まじいのなんのつて。

「あおう、俺様の顔になんかついてんの？」

「……………」

息が詰まりそうな沈黙。ま、まあ、いいか。

そういえばやけに大きいマントを羽織っているな。あれ、つーかこのマントってシャオが身に付けていたマントの色違いじゃねーか？

あいつのは黒かったが、この眼帯少女のは逆に真っ白だ。

あとは留め具の宝石も、あつちは赤いルビーのような石がはめ込まれていたが、こっちは青い石がはめ込まれているという違いがある。

違いはそれだけで、他はおそらく同じデザインか。

ふうむ。シャオと何かしら繋がりでもあるのかねえ……。そう、目を凝らしてじっくり見ていると、

「……私は幽霊じゃない。それに、海賊でもない。そう、私は判断する」

俺を見上げていたそいつがぼそりと言った。

なんつー、返答の遅さだ……。

「そ、そりやまあそーだわな。えーと、じゃあどなたさんで？」

実は死神なんデス、なーんてオチはねえよな。

すると、そいつは静かにまばたきを一回だけして、

「私はピース様の使い。貴女を迎えに来た。それだけ」

「それだけって……名前は？」

「名前って、なに」

「えっ」

一瞬、おちよくられてるのかとも思ったが……。

無表情で首を傾げる素振りを見るに、本当に『名前』の意味を解っていないのかもしれない。

「うーん。なんつったらしいのかな。なら、ピースからは何て呼ば

れてんの?」

「……ピース様は私をネームレスと呼んでる。これが、名前?」

それって、たしか無名だとか名無しつつうのような意味じゃなかったっけか。

どちらにしろ、ひでえ呼びかたをするもんだぜ……。もつと呼びやすく可愛い名前がたくさんあるだろうによ。よりにもよつて名無しって。

そう心の中で舌打ちをしたとき、なにかが俺たちの頭上を飛び越えていった。

「な、なんだ!?!」

見やると、一匹の狐の形をした影が青い眼を光らせてダツシユの背後へと回つたではないか。

やべえ。ハチマキ娘のやつ、他の化けモノに夢中でまったく気が付いてないぞー!

「おいダツシユ! 危ない、後ろだつ!」

「うぐつ……!」

しかし、俺が声をかけたのにもかかわらず、狐の吐き出した炎をモロに受けてしまうハチマキ娘。

「どういうこつてエイ。俺の声が聞こえてねーのか?」

「ら、らいらい……『サンダースピア』!」

片ヒザをついたまま式を槍の形へと変化させ、背後の狐を貫いた——が、そいつは煙状になったかと思うと、再び狐の姿を構築してダツシユへ飛びかかる。

「くつ!」

すぐに体勢を立て直して再び七つの影を翻弄するチビ鮫だったが、その顔は先ほどとは違い、苦痛に満ち満ちていた。

「あの影どもは一体なんなんだよ。倒しても倒してもすぐに復活しちまうじゃねーか……!」

式や雷呪文を器用に使う姿を見て、そこまで心配せずにしたのだけれども。

これでは、いささかにマズイような——

そう、唇を噛みながらダツシユの戦う姿を見守っていると、

「どうして、そんな顔をしているの？」

抑揚のない声で訊ねてくる無表情娘。

「んなの、チビ鮫のことが心配だからに決まってるだろうっ」

「……そう。でも、心配するだけ無駄。どう抗おうとも彼女はここで終わり。あの姿で『時園』に迷い込んだ時点で終わりからは逃げられない。そう、私は判断する」

その言葉にギョツとしてネームレスと呼ばれている少女を見ると、そいつは戦ってるダツシユを指さして、

「彼女はアナエルだけど、アナエルじゃない。過去の意識と現在の意識が混ざり合っている。言わば、まがいもの。それは、この時園では忌むべき存在。だから、それを排除しようとする抗体である影たちが自然に生まれる……彼女を完全に消すまで、ずっと」

なんだそりゃ。言ってる意味がまったくもって解らないのだけけども。

「解らなくていい。ただ、知って欲しい。彼女は助からない。式式の霊薬と彼女自身の魔力が尽きたら影に四肢をもがれて、バラバラに分解される。それは、きつともうすぐ。その姿を見たくなければ、はやく私と一緒にピース様のところへ——」

「ちよつと待て、待てよ！ 分解して、あいつがダツシユじゃないって。そんなにぼんぼん言われても頭がおっつかねえよ」

「だから、貴女が理解する必要はない。ピース様は貴女の呪いを解いてもこの世界へ帰すつもり。そうすればアナエルと貴女は無関係になる。契約も全て無かったことになり、記憶も隠蔽される」

「記憶を隠蔽？」

「今までのことを全部忘れること。それで、アナエルや黒の魔法少女のことを気に病まなくて済む。そう、私は判断する」

「……………」

なにもかも忘れ、もとの世界に帰れる。

そういえば、クロエが俺を戻してくれるようピースに掛け合ってくれてたんだっけか。

それで気が変わらなければ俺を逃がしてもいい、という流れになったハズ。ピースはそれを覚えていた――

「本当、なんだろうな？」

「……本当」

と、能面顔のまま小さく頷いて歩き出す眼帯少女。

あいつについて行き、ピースと会えば俺は今すぐにでももとの生活に戻る。

このよくわからん世界ともおさらば出来る。

あの煩わしい魔宝石集めからも解放される。

……なあんだ。めんどくせエことが一気に解決する良策じゃねーか。

なにも迷うこたアねえな。

とつとと帰って、また喧嘩三昧の日々に明け暮れるとしよう。魔法だなんだって、やっぱり俺の性には合わねーんだよ。

第六十三石：一番幸せな最期

そう。ボリボリ頭を搔こうとしたとき、握りしめているハチマキの存在に気付いた。

「あ。そうだ、これどうしよう……」

「なに？」

「いや。このハチマキ、ダツシユがつけていたヤツなんだけれども」
歩みを止めて戻ってきたネームレスに赤いハチマキを見せると、

「そう。そういうこと……」

無表情ヅラが少しだけ崩れた。

なにかを考えるように視線を巡らせたのち、俺をジツと見上げる。
「端的に言う。彼女がああなったのは、そのせい。そう、私は判断する」

「へ？」

「そのハチマキには貴女との永い思い出がとても色濃く染み付いている」

「なげえ思い出って言われましてもよお、俺はあいつと契約して一日も経ってなかったハズだぜ？」

言った直後、不意にシャオの言葉が頭に響いてくる。

『——たった数時間従えただけの模魔に、どうしてそこまで怒れたのかしら』

そうだ。あるとき俺はダツシユを馬鹿にされて、目の前が真っ赤に染まった。

それが怒りによる裏集束の光だというのならば——俺はなんであそこまでムカついたんだ？

シャオの言うとおり、たった数時間の付き合いの模魔だ。あんなに自分が分からなくなるまでキレルほどの大事な存在とは……いささかに思えない。

「それなのに、なんで俺はあいつを……」

今も必死に影と戦っているダツシユ。そいつの小さい背中を見ながら俺は戸惑った。

戸惑うしか、なかった。

ダツシユが苦しい表情を見せるたび、胸がズキツと痛む。

この痛みは——なんなんだ？

「戸惑い。それは、アナナエルも同じ気持ちだった」

「同じ、気持ち？」

「私には理解不能だった。アナナエルが貴女を選んだ理由が。自分を助けた黒の魔法少女じゃなく、自分を傷つけた白の魔法少女を選んだ理由が。でも……」

それだけ眩くと、目を閉じてしまった。何かを考え込んでいるのか、ピクリとも動かない紫髪少女。

「……………」

ううむ。

どうしたらいいものか。声をかけようにもなんとなく声をかけにくいオーラが——

「きやあつー！」

「うおっ!？」

出し抜けに、ダツシユが俺の目の前に降ってきた。

「あいたた……」

腰をさすりつつ立ち上がり、またも果敢に影へと向かっていこうとするが、何故かペタンとその場に座り込んでしまうハチマキ娘。

「お、おい！ 大丈夫か、ダツシユ！ どっかイタイイタイしたのかっ」

なんて、とつさに駆け寄ったはいいが、たしか俺の声が届かないんだっけか。

過去と現在の意識が混ざり合ってる、まがいもののダツシユとやらだからか知らねーけれども、話せないのはいささかに厄介だな。

もしかして触ることも出来ないのかねえ。

と、そいつの肩に手を乗せようとしたとき、

「……………ひっぐ、ううっ」

急に肩を震わせて泣き出したもんだからたまらない。

「あ、いや！ 待て待て、俺だよ俺だってば。断じてヘンタイさんなん

かじゃねーぞ……って、ガキんちよ相手になに言ってるんだ、俺ア」
「ご、ご主人様あ……」

お。なーんだ、俺の声がちやんと聞こえてるじゃねーか。

「おう。俺様は……だぜっ」

泣きじやくっているダツシユの前に意気揚々と回り込んだのだが。

そいつの泣き顔を——大粒の涙を流し、それをグシグシと手で拭う
そいつの姿を見て、俺は途端に固まってしまった。

まるで心臓を鷲掴みにされたかのような息苦しさ。

「こ、怖いよ……寂しいよ……っ。ご主人様あ、ひつぐ。ご主人様、どこにいるの……。あななを置いてかないでえ……」

「ハチマキ娘……」

ただただ困惑していると、ダツシユの後ろに立っているネームレス
がゆつくりと目を開けた。

「……さつきは、過去の力強いアナエルの意識が勝っていた。でも、
今の彼女は現在の——死んだばかりのアナエルの意識が強く出ている」

「死んだばかりのって、俺を守ってくれたダツシユのことか……?」

「そう。彼女の魔力が影との戦闘で磨耗し、残り少なくなってる。だから、不安定なアナエルの意識が表に出てきた」

「……………」

「どちらも意識は違えど、貴女のことを想い続けている。だから戦えた。影を振り払って貴女のもとへと戻り、もう一度守ろうと——救おうとしている」

こんなボロボロな姿になってまで俺のことを?

ツギハギの意識体になってまで——どうして。

「でも、もう彼女自身限界を悟っている。だから……」

草むらに転がっている霊鳴石式式を指さして、ネームレスは言う。
「影がアナエルの分解する前に、貴女が式式を使って彼女の意識を破壊して」

「じよ、冗談だろ? 俺に……ハチマキ娘を殺せと言うのか?」

狼狽する俺とは対照的に、そいつはいつもの無感情な口調のまま、

「それが——彼女にとって一番幸せな最期になる。そう、私は判断する」

淡々と、続けた。

++++

「そんな。そんなことを言われてもよ……」

当然のごとく戸惑う俺だったが、さらにネームレスは容赦することなく、

「式式の形状は鈍が最良。一振りで首を落とせば、彼女は苦しまずに死ぬことができる」

く、首を落とさせて……。

無表情なそいつから視線を落とし、まがいものと言われたダツシユを見る。

涙で顔をべちよべちよに濡らし、未だに俺のことを呼び求める少女。

こいつは、まがいもの。つまり——偽者。

「このハチマキ娘は、まがいものだとかさつき言ってたよな」

「そう。模造魔宝石が朽ちた際、普通は光となって時園に——ピース様のもとへとまっすぐ還っていく。だけど、このアナナエルは壊れて光の意識体となってもまだ貴女のことを心配していた」

「……………」

「もし自分がランクの高い石だったら。もし自分が『疾駆』という補助型の石ではなく、強い力を持った攻撃型の石だったら——そう考えていたところに、同じく時園の近くで彷徨っていたアナナエルの光と出会った。その光はとても強い力を持っていたがすでに消えかかっていた。片方は強いけど消滅寸前の古い意識、もう片方は弱いけど新鮮な意識……彼女たちは迷うことなく融合した。貴女を守る力を得るために。それが禁忌の行為と知りながらも」

待て待て。

同じく彷徨っていたって、どういうこった。ダツシユは一人なんだろう？

過去の意識とか現在の意識だとか言っていたけれども、もしかして

それが関係してるのか。

あと、それがどうして禁忌の行為になるんだ。

そんな疑問をぶつけてみたのだが、そいつは、まばたきもせず、
「……その説明は、とても複雑。時間も権限も今は無い。だから省く。
そう、私は判断する」

なんでえい。無口そうなわりに説明好きなヤツだと思ったのに、
そこは言わねーのな。

いや。権限の言葉から察するに、言わない、というよりも言えない
のか。

口元に手をあてながらそんなことを考えていると、

「ひっー」

ダツシユが声にならない悲鳴をあげて頭を抱えた。

どうやら、蝶の形をした影が放った氷のつぶてに驚いたらしい。

蝶だけじゃない。他の影たちもジワリジワリとダツシユの周りを
囲み始めていた。

「チビ鯨が魔法を撃てなくなったことにあの影どもが気付いたら、こ
いつは四肢をもがれて凄まじい苦しみを受けることになる。そうな
んだよな……」

ギラギラ光る目でこちらの様子をうかがっている狐と蝶。

そいつらを睨みながら言うと、

「そう。だからその前に早く決断して欲しい。ちようど首を落とすや
すい体勢になってる。やるなら今」

眼帯娘は小さく頷いた。

確かにのんびり説明を聞いている暇はねえな……。

俺が介錯してやらなきゃ。主人である俺しか出来ねーんだ。

やるしか、ない——

「来やがれっ、霊鳴！」

だがしかし。

霊鳴は一瞬光っただけで、うんともすんとも言わない。

普通はすぐにでも飛んでくるのだが、心なしか後ずさっているよう
にも見える。

「おい、なにしてやがんだっ」

まさか、俺が今やる事をこいつは察しているのか？

「チッー」

飛んで逃げられる前にと、荒々しく式式を掴むと、俺は鉈を強くイメージした。

だが、やはりと言うべきかひとつも形状を変える気配のない霊鳴。

「言うことを聞け、今の契約者は俺だぞ、式式！　ダツシユはもう限界なんだ。俺が——こいつの主人である俺が介錯してやらねーと、こいつはもつと苦しむことになるんだよつ、解れよ！」

怒鳴ると、式式は切れかかった電球よろしく弱々しい明滅で答えた。

理解してはいる。でも、それでも殺したくはない。そういった想い——俺とおんなじ気持ちなんだろうよ。

「よくわからねーけど、ダツシユはお前の主人だったんだろ？　だつたらお前も主人の為に出来ることを考えるんだっ」

その言葉にやつと観念したのか、巨大な鉈へと変化する式式。

太く無骨な氷の刃を両手で振り上げ、俺はハチマキ娘を見下ろした。

「これで、これでいいんだよな……」

「それが——彼女の幸せ。そう、私は判断する」

第六十四石：ああ、わかってるって

あとは、ただ式式をこいつの首にめがけて振り下ろすだけ。それでハチマキ娘は救われる。救われるんだ……。

救われる？ 本当に——？

必死で守ろうとした相手に、首を落とされて死ぬのがこいつのシアワセ。

声をかけるでもなく、声が届くでもなく。

孤独なまま。泣いたまま。いきなりワケも分からずに殺される。

ご主人様に殺されるんだからそれがシアワセ。

シアワセな最期——

「……そんな、のって。そんなのって、あんまりじゃねエかよ」

頭では理解していた。今ここで殺さなければ、影がもつとひどい殺し方をする。

でも。それでも、俺は……。

キツと顔を上げた俺に、霊鳴が二回ほどフラッシュユする。

「ああ、わかってるって。わりいなあ試作型ちゃんよオ。なんも解つてないクセに偉そうなこと言っちゃまってさア」

なにが俺が介錯してやらないと、だ。

なにが主人の為に出来ることを、だ。

クソ、くだらねえ……！

「ぷくゆゆん、ぷゆん。ぷいぷい、ぷう！ 式式ちゃん行くぜ、すいすい」『アクアサーベル』！

直後。待つてましたとばかりにブクブクと泡の弾ける音を立て、すぐさま氷の鉞から水の刀へと姿を変える霊鳴。

コロ美がいなくて水付与が出来ないせいか、いささかに弱々しい水の刃だが、まあ影を切るだけならこれでも事足りるだろう。

そいつを肩に乗せ、俺は周りを囲う影どもを睥睨した。

「くそつたれども、よくも俺様の可愛い下僕を泣かせやがったなア？ 恐縮だけれども、その落とし前はキツチリつけさせてもらおうぜ」

言うのと、一瞬だが影たちが怯むのが分かった。

あいつらにとつて俺は攻撃対象外。だから、どうしたらいいのか困惑しているのだろう。

「相手は戦意が無いみたいだぜ。気が引けるか、弐式？」

一応、訊いてみたのだが——激しく光り、勢いよく蒸気を出す霊鳴に、俺はクツクツと笑った。

「怒り心頭に発する、ってかア？　いつひっひ、そらそうだよなア。誰だってムカつくもんな。テメエの大切な人を傷つけられたらよオ！」
言うが早いか。大跳躍し、サーベルを蝶に突き刺す。

そして、そいつが霧散するよりも前に、俺はダツシユに一番近い狐を力任せになぎ払う。

両前足を失ったそいつはたたらを踏んだのち、全身を炎に焼かれながら消えていった。

その燃え散る音に気付いたのか、ダツシユが泣き顔をふと上げる。

「ひっぐ……。あ、あれ、霊鳴が、ひとりでに動いてる……？」

「バーカ。ひとりでに、じゃねーよ。俺もいるっつーの」

そうだ。テメエは独りじゃないんだよ。力任せにそいつの髪をぐしぐし撫でつけてから、もう一度霊鳴に魔力を込める。

「行くぜ、弐式……」

息つく間もなく、他の五匹も次々に水の刃で切り刻んでいく。

動けずにいる相手だ。それは俺にとって造作も無いことだった。

「……何故、こんなことをするの？」

全てを倒し、肩で息をしているとネームレスがそんなことを訊ねてきた。

「何故ってかア？　うーん……」

俺は霊鳴を肩に担ぎ直し、霊薬の残量を確認しながらこう答えた。

「俺がバカだから、かねエ」

「バカ……？」

「正直、お前さんの言っている事がほとんどよくわからねーんだ。んで、こいつを俺が殺すことが本当の幸せだって言われても、いまいちピンと来なくてさア」

「わからないなら、もう一度言う。何度切り刻もうが、影は忌むべき存在が生きている限り死なない。少し経てばまた彼女を襲う。また、彼女が怯える。だから、貴女が——主人である貴女が壊すのが一番。それがアナエルの幸せな最期。そう、私は——」

言い終えるよりも前に、俺はたまらず振り向いた。

「判断、するってか。勝手に。勝手にさア……こいつの幸せを『判断』しないでやってくれよ。俺はハチマキ娘を殺したくないんだよ。死ぬ前も、死んでからも体を張って俺を守ろうとしてくれたヤツを、殺せるワケねえじゃねえか」

「……………」

「このチビには生きていて欲しいんだ。俺の後ろで、だしだしとうるさく騒いでいて欲しいんだ。ただ単純に、そんだけなんだよ……」

「泣いて……いるの？」

無表情娘が少しだけ驚いたような顔になっていた。

「え。な、泣いてなんか——」

ギョツとして頬に手をあててみる。

げげっ。ほんとだ、いつの間にか泣いてしまったらしい。

「ち、違う違うっ。これは霊鳴の水つつうか、俺は水の魔法少女だから、色んなところから水がびゅーびゅー出やすくて……ちよ、ちよっち、たんまー！」

これ以上恥ずかしいところを見られるワケには、と。

慌てて手に持っていたダッシュのハチマキで涙を拭ってしまった。

その瞬間——

突然、ハチマキがまばゆく輝いたかと思うと、勝手に俺の手から抜けだしてハチマキ娘の周りをグルグル回り出したではないか。

「ひえええ、なんでえい!?!」

いきなりの怪奇現象に目を丸くしていると、それは一本の赤い糸へと変化した。

「わわっ!」

同じくビクビクしているダッシュの左手の小指にすると巻かれる赤い糸。

そして、もう片方の糸が今度は俺の指輪に——右手の小指に巻かれていく。

「いったい何が起きたんだかと、ネームレスを見てみると、そいつはフウと小さくため息をついていた。」

「な、なに落ち着いて眺めてやがんでえい！ どうなつてんだこりやあ、説明してくれってばっ」

「説明……。それは私がする必要はない。そう、私は判断する」
「だから勝手に判断するんじゃない——うぐっ」

「なんだ、頭に直接なにかの映像が流れ込んでくるぞ……！」

「こ、これは——ダッシュと、俺!？」

第六十五石：過去と現在を紡いで、

頭の中に流れ込んだ映像には、ハチマキ娘と俺が映っていた。

俺たち二人の様々な場面がノイズごとに切り替わり、そして次々と脳裏に描かれていく。

あるときは、海でコロ美と一緒にお城を作ってるダツシユ。

あるときは、ゆりなお姉さんと二人でクレープを焼く俺。

あるときは、ゆりなお姉さんと二人でクレープを焼く俺。

あるときは、俺とハチマキ娘と一緒にクレープ屋の前で——クレープをほお張っていた。

ニコニコ笑顔を咲かせるそいつに、財布の中身を見て肩を落とす俺。

「……どうして。こんなことやってないし、知らないのに。なのに——俺は全部を知っているような。懐かしい気持ちになっちゃうのは、なんでだ……？」

それは。

脳裏に描かれていく、というよりも——絵画に被っていたホコリが徐々に取り払われていくかのような。

そんな奇妙な感覚だった。

拭ったハズの涙がまたも流れ出してくる。だがそれを俺は止めることが出来なかった。

ぼろぼろと零れるがままの涙を、小さな指がスツと拭う。

「おまえさんって、意外に泣き虫だし……」

「えっ？」

ふと見ると、そこにはダツシユが笑顔で座っていた。

さつき頭の中に映し出されていたハチマキ娘と同じ笑顔。

髪の毛の長さは違えども。体操服にブルマという姿じゃないけれども。

それでも——やっぱりこいつは俺の知ってるダツシユだった。

んん？ ていうか……。

「あれ？ お、お前さん、俺様の姿が見えんの!？」

涙もすぐさま引っ込み、驚愕の顔で指をさす俺に、

「……うん、見えるよ」

と。女の子座りのまま、スカートに両手を押し当てて、そいつは恥ずかしそうに俯く。

「あつ、そう……」

な、なんだろうか、この一気に襲ってくる気まずい空気は。

とりあえずその場にあぐらをかいて、そっぽを向いておく。

数十秒ほど沈黙が続いた後、やがて口を開いたのはハチマキ娘だった。

「えつとね。あななも、ずっと泣いてたの……」

「あー知ってるぜ。ずっと見てたからな。ごぢゆじんしやまあくつて、ピーピー泣いてたっけ。だからお前さんの方が泣き虫な」

一応、主人の威厳は保っておかねーと。俺のほう泣き虫だつっう烙印を押されたら部下に示しがつかねえぜ。

続けて、『意外に泣き虫』という発言の撤回を改めて申し立てしようとしたところで、そいつは頬を赤く染めて、

「あうう。あ……霊鳴が、あなな守ってくれたけど、もしかして動かしただのって、やっぱり……」

もじもじと両手の指先を絡めながら俺を見上げる。

「もしかしなくても俺しかいねーっての」

「そ、そっか。あの、守ってくれてありがと……だし」

泣いて主人を呼んだ方がいいが、いざ現れたらどうしたらいいのか分からない。

そんな様子で、ゆでダコのような顔のまま感謝の言葉を紡ぐそいつに、

「いささかに恐縮だけでも、礼を言うのはこっちだぜ。俺なんかのためにありがとうな、だし子」

だし子——だしし言うから俺がつけたあだ名。

ハチマキの糸を通じてさつきみたあの映像から思い出した、こいつの呼び名。

思い出したというか——あれが過去の記憶とやらなのか、デジャブとやらなのかは、イマイチよく分からねエ。

まあ。俺のつけそうなあだ名だったんで、ちよいとばっかし拝借しよう。

それにしても、これ程までにしっくりくるあだ名をつけるとはねエ。

さすがハイカラなセンスをお持ちの俺様だけ……うんうん、と心の中で満足気に頷いたときだ。

一瞬、甘い香りが鼻腔をくすぐったかと思うと、

「……ご主人様っ！」

「な、なんだよ急に抱きついてきやがって」

ほんとに急だったもんだから、尻餅をついてしまった。

うっとうしいぞ、と突き放そうとしたのだが——失われたダツシユの色が徐々に取り戻されていくその光景にあっけに取られてしまった。

キラキラとした光が現れては弾ける。その度に、スカートや胸のネクタイ、稲妻型のピアスに色が刻まれていく。

すつかり、いつか見た黄色い旧魔法少女コスチュームと長い金髪という姿に戻ったダツシユは、俺の胸の中で、

「ご主人様、あなな、いっぱい強くなったからっ……!! もうコピー様には負けないから、今度こそ絶対にご主人様を守ってみせるからあ、うえええん……!!」

「わ、わかったって」

まあた泣き出しやがった。

やっぱり俺より泣き虫だな。つーか、ゆりなとタメ張れるぜ、こりやあ。

よしよしと嘆息しながらそいつの長い髪を撫でていると、俺の指輪が光っているのに気付いた。

赤い糸の繋がった指輪——よくよく見るとヒビが薄くなっているような気がするぞ。

「それは過去のダツシユの意識がハチマキを……糸を通じて指輪に宿ったから。だから、石が少しだけ回復した」

ひよっこり顔を覗かせたネームレスは、泣きついているダツシユの

小指を指差して、

「その意識はアナナエルのほうの指輪に強く宿っている」

「アナナエルの指輪って……あれれっ！」

なんてこった、ダツシユも俺と同じ金色の指輪を小指につけてやがった。

「おい、だし子！ お前さん、いつの間に魔法少女になったんでいい」
ガシガシと肩を振って言うのと、そいつは涙目のまま首を傾げた。

「あうっ？ あなな、模魔だし。魔法少女はご主人様のほうだし……
あれれっ！」

まったく俺と同じリアクションで自分の指輪に驚くハチマキ娘。

「こ、これ何だし!？」

「知らねーよ。っーか、さつき霊鳴ぶん回してたし、その格好も格好で……フツーに魔法使いやってますよね、お前さん」

「ええっ!？ あ、ホントだし！ このひらひらの服、どーなってるの!？」

よほど戸惑っているのだろう。立ち上がってぴよんぴよんとその場で回り出したダツシユに、眼帯娘が淡々とこう呟いた。

「貴女は今、姿は過去、意識は現在という、どっちつかずのままの不安定な状態になっている。アナナエル、自分の指輪に口づけをして、改めて過去の自分と融合してみて」

「へ？ ご主人様、この人だーれ？」

疑問符がまた増えたとばかりに指をくわえて俺のほうを向く。

なんと答えたらいいのか……。

というか、俺もそいつのことよく分かっているのだけれども。

「……私のことなんてどうでもいい。影たちがまた動き出す。ちやうど力を試す良い機会。融合呪文は指輪を通して過去の貴女が教えてくれるはず」

「で、でも……」

まあ。知らない人にいきなりそう言われてもな。

そりゃ、ためらっちゃうだろうよ。

しかしながら——ネームレスの言うように、確かに影たちが集いつ

つあるのも確かだ。

「白の魔法少女。貴女からも言って。せつかく治ったダツシユの寶石、無駄にするべきではない。そう、私は判断する」

俺は立ち上がり、首をコキコキと鳴らした。

「オーケイ、わかりましたんで。その判断には俺も賛成しとくぜ。つてなわけで、だし子！」

「ふあ、ふあいつー！」

「さっそくだけでも。この残酷な影たちから、ご主人である俺様を守ってもらうぜ。この影どもは俺を殺そうと必死だから、気を抜けばすぐに俺は死ぬぜ。そりやもう、あつという間になっ！」

「あう、ご主人様強いのに……あつという間って」

「ゴロ美もいねエから変身出来ねーし、霊鳴も霊薬がほとんど残っていない。それに俺の魔力も空っぽのままなんだぜ。だから、いま頼れるのはお前さんだけだ」

なーんて、さつき見た感じだと霊鳴の霊薬も三割くらいまで何故か回復してたし、俺自身の魔力も結構残っていたがな。

それに、別にこの影どももハナから俺を狙う気は無いようだが——まあ、嘘も方便ってね。

さつきは忠告を無視したが、時園を脱出するにはネームレスの指示に従っていたほうがいささかに無難だろう。

もしダツシユが傷つきそうなら……そのときは俺の霊鳴ですぐさま影をぶっ飛ばしてやる。

だから——気兼ねなく、こいつには力を解放してもらいたい。

つーか、単純に見てみてエじゃねーか。俺の可愛い下僕の大活躍を、さ。

「ご主人様を守る……あなな、頑張るし！」

むふーつと鼻息を荒くして目を爛々と輝かせているそいつに、俺は腕を組みながら叫んだ。

「よーし命令だ、融合変身しろ、ダツシユ・ザ・アナナエル！」

第六十六石：融合開花！ラヴシャイン!?

「了解だし……!」

力強く頷き、目を閉じる。

そして過去の自分から呪文を聞き終えたのだろう、そいつは一つ深呼吸をしてから、

「我は欲す。汝が纏う忌むべき力を！　お願い、過去のあなな……力を貸して！」

自分の小指にはめている金色の指輪にキスをするダツシユ。

ふーん……呪文つつても、模魔の完全召喚のときと似たようなもんか。

と。思っていたのだが、そいつは続けてこう叫んだ。

「サクラヴィー！　デュアル——アゲイン！」

「へっ？　さ、さくら海老ジュワツと揚げ……？」

どうしていきなり海老の揚げモンを叫ぶんだ？　もしかしてコイツ、腹でも減ってるのかね。

そう首をひねっていると、突然ハチマキ娘の背後に過去のダツシユが現れたではないか。

黄金色に輝く過去の少女は目を閉じたままのハチマキ娘に優しく微笑みかけると、そっと頬にキスをして抱きしめる。

その瞬間、少女は一つの大きな光の輪になったかと思うと、緩慢な動きでダツシユの頭を包み込んだ。

次に、輪が頭から足先にかけて移動していき、どんどんとハチマキ娘の服が脱がされていく。

「あんれま、こりやまた大胆なこつて」

やがて真つ裸になったとき、今度は輪が足先から胸まで駆け上がっていき——それとともに黄色のコスチュームが装着されていた。

って、待てよ。なんだこのコスチュームは……。

フリフリのスカートは旧魔法少女っぽいような気もするけれども、それよりかなり短いし、上半身は俺の新魔法少女に似ているが……もっと露出度が増している。

「ゆりなの旧コスでもないし、俺の新コスでもないぞ。こりや一体なんなんでエい……」

あんぐり口を開けている俺を尻目に、今度は光の輪がダツシユの髪をまとめていく。

と言つても、ストレートロングという髪型のままだった。どうやらボサボサだった長い髪を綺麗にしただけらしい。

そんでもって、髪の上上げを済ませたそいつは、ちよいと失礼とばかりに俺の小指をまさぐり、赤い糸をいそいそと持ち出していく。

「何故に糸を持つてくんだ？」

なんて思っていると、その糸はハチマキに——いや、リボンへと変わっていった。

それを長い金髪に可愛く添えると、光輪はふよふよとそいつの頭上に乗っかり、きらりと光を放つ。

そんな変身終了の合図に、それまで目をつぶっていたダツシユは水色の瞳をゆっくりと開けて、

「ゆ、融合開花……ラヴ・シャイン！」

と。

どこぞの戦隊モノのキャラのようにポーズを決めたではないか。

「……………」

もちろん、俺のあんぐり口はそのまま。

それに加えて目が点になっていたのだけれども——まあ、とりあえず、これだけは言っておこう。

コホンと咳払い一つしたあと、俺は得意満面のそいつに向かって、「なんでえい、そのヘンチクリンな決めポーズと名前は！」

とツツコんだ。

しかし、そんなツツコみもどこ吹く風。

そいつは無駄にキラキラ輝く星マシンガンを周囲にまき散らしながら、

「キラッとピカッと！ 二つの光が今、希望のともし火へと——」

なおもそんな前口上を続けようとしやがったので、

「だあら、人の話を聞きやがれってんだっ！」

一発だけ後頭部にフロストチョップをお見舞いしておく。

「あうーっ。痛い。ご主人さまあ、どーしてあんな殴るのお……」

頭を押さえながら涙目で見上げるそいつの鼻先に、指をグイッと突きつける。

「どーしてもこーしても、なんなんだよその『ブラ社員』とかいうヘンタイみてえな名前は！」

「違うしっ、ラヴシャインだし！ ブラじゃなくて、ラヴっ！」

「どっちも似たようなもんだろ。っーか、そのふざけた名前は自分で考えてつけたワケ……？」

腕を組んだままの状態で眉を寄せるといった、イラ立ち顔マックスの俺に焦ったのか、だし子は首をぶんぶんと振って、

「だ、だってえ、過去のあなながそう言えっつてゆーから言っただけだし……。あなな、ふざけてなんかないもん」

「じゃあ、やっぱりお前のせいじゃねーかっ！」

「あうーっ！ あななだけど、あななじやないしっ。おまえさんの分かつ屋あ！」

「あんだとオ、ご主人様に向かってなんでえいその可愛くねエ態度はッ」

そんな言い合いをしていたときだ、ふと冷たい何か上空から降ってきて俺の頬を掠めた。

「!？」

足元に刺さった黄緑色のツララに驚愕する俺。

やや遅れて頬にピリツとした痛みが走る。

「この氷は……まさか、コロ美!？」

「ご主人様、上！」

ハチマキ娘の指差す方向に顔を向けると、そこにはコロナじゃなく……蝶の影が舞っていた。

そいつは集束よろしくエメラルドグリーンの眩い光を放ちながら、さらにいくつものツララを作り出していく。

その数——数十にも及ぶ膨大な量だぞ。

「こ、今度こそ、あななが守るから……」

そう言つて俺の前に歩み出たはいいけれども——声がいささかに震えてるじゃねーか。

周りにボコボコと現れた影達も激昂しているのか、みんな一様に眼を光らせてダツシユを警戒している。

まずい——

融合に成功したとはいえ、成ったばかりのあいつにはいくらなんでも荷が重過ぎる。

ダメだな……これはさすがに俺も霊鳴を振っていかねエと。

そう、式式を強く握り締めた次の瞬間。

目の前にいきなり巨大な暗闇が現れたかと思うと、その中からウネウネと蠢くモノが飛び出した。

その触手のようなモノは次々と影に巻きつき、暗闇の中へと強引に引きずり込んでいく。

「えっ、えっ？　これご主人様が出してるの？」

「いや、俺はこんなデタラメな魔宝石持ってねエし」

「じゃあ、もしかして……」

「……………」

顔を見合わせてゴクリと喉を鳴らす俺たち。

もしかしくとも、こんな芸当が出来るヤツは一人しかいないワケで。

最後までツララ乱射で抵抗した蝶もあっけなく闇に喰われたところで、今までつくねんと立っていたネームレスが口を開いた。

「赤の魔法少女……。せつかくアナエルの力を試す良い機会だったのに。どうして貴女が手を出すの？」

「どうして？　どうしてですってえ……？　それはコツチのセリフだわ」

イライラした様子で暗闇の中からノツソリと現れたのは、やはりと
いうべきか——シャオメイだった。

そいつは、目元を覆う黒いバイザーのような妙な機械を装着していた。

そのバイザーの中央に赤い光の波が一つ走ったかと思うと、

「こいつが、ダッシュ・ザ・アナエルだつていうの？ ランクEからランクD並みの魔気力になって生き返ってるだなんて……ふざけたことをしてくれたものね。こんな冒涇、あたしは認めないわよ」

「……貴女が認める必要はない。そう私は判断する」

淡々とした眼帯娘の返しに、ますます怒りをあらわにしたシャオは、

「ピース様のメイド風情が、この紗華夢 夜紅サマに意見をするつてえの!？」

なんてネームレスの胸倉を掴んでしまったではないか。

しかし、掴まれたそいつも止せばいいのに、火に油よろしく、

「紗華夢はこの世にたった一人だけの存在。だから、私は貴女を赤の魔法少女と認識する」

「チッ。相変わらず話にならないわね、このバカ女は……」

なんだこいつら、似たような格好してるクセに果てしなく仲が悪そうだな……。

「こ、恐いし……」

消え入りそうな声と、引っ張られる俺のスカート。

後ろを見やると、シャオを見て完全にすくみあがっているハチマキ娘がいた。

第六十七石：あのとき、俺は—— ☆

俺の後ろでガタガタブルブルと震えちまってるア。

まあ、気持ちには分からんでもないけれども。それにしたってなあ、とダツシユの姿を改めて見直す。

「そんな恐がるなって。今はお前さんのほうがデツカいんだからさ」
そう。変身前は俺と同じくらいの低身長だったのに、変身後はすっかり大きくなってしまったのだ。

とは言っても、小学五、六年あたりって感じだが。それでもシャオメイよりは背が高いだろう。

同学年組では多分、シャオが一番身長が高いのかもしれないな。次いでももは、その次にゆりな、それでもって最後に俺って具合か。くっ……元の姿にさえ戻れたら俺が一番背がたけエってのによオ。情けねー話だぜ。

んなことを心の中で嘆いてると、ふと視界の端に変な動きをしているダツシユが映った。

そいつは胸元のコスチュームをクイツと引っ張って、なにやら真剣な眼差しを自身の胸に向けている。

「お、お前さん、なにしてんの……」

半ば呆れ口調で訊ねる俺に、

「あなな、全然デツカくなってないよ？ ちっこいまんまだし」

なかなか残念そうな困り顔でそう言っただけたそいつの頭に、本日二回目のフロストチョップ。

「あうーっ！ また、ぶったあ。ちべたくて頭がキンキンするしっ」

「その話じゃねーよっ！」

と。ツツコみを入れてすぐに気まずい空気が流れた。

それまでネームレスを睨んでいたシャオがこちらを向いたのだ。

俺とダツシユが息を呑んだところで、

「こっちも相も変わらず。ふざけたヤツらねえ」

「……………」

シャオは緩慢な動きで眼帯娘のマントから手を離すと、これまた緩

慢な歩みでこちらへとにじり寄ってくる。

そいつの顔は黒いバイザーで大半が覆われているのにも関わらず、怒りの表情が簡単に読み取れた。

「いつまで経っても眼を覚まさないからおかしいって思っただけで『タイムガーデン』に来てみれば、ノンキにクソくだらない話をしてる……」
う、動けねエぞ……。

なんだ、こいつのプレッシャーは。

まるで記者会見のときに受けたような強い金縛りに、俺たちが身動き取れずにいると、

「コロナ・ザ・ウエンズデイも、かわいそうねエ。あんたみたいなヤツをせっかく命がけで拾い上げたってえのに、こんなところで無駄口を叩いてるんだから」

コロナの本名——いや、それよりも。

「どういうこった、お、俺を拾い上げたって」

「……あんたが喰われる寸前、元の姿に戻ったウエンズデイがあんたを助けたのよ。まさか、あんたここが地獄や天国だとも思ってたの？」

「違うのか……？」

「はっ、バツカバカじゃん。ここは時を司る園よ。通称タイムガーデン。このバカメイドは時園なんてダサイ呼び方してるケドね」

やがて俺たちの目の前まで来たそいつは、ダツシユのアゴをくいと持ち上げて、

「こんな役にも立たないクズ石のために、七大霊獣と猫憑きを見殺しにするんだから。ホント、救えなあい……」

一体、こいつは何を言ってるんだよ。

コロナやクロエ、そしてゆりなを俺が見殺しにしている——？

「察しの悪い男ねえ。あんたはまだ生きてるってことよ。おそろく気を失った際に、ピース様があんたの魂だけサルベージしたんでしよう。綺麗なまま、次に再利用するつもりだったのかもしれないわ」

「……ピース様は、白の魔法少女を逃がすつもり。だから、魂をこちらへと引っ張った」

そう否定するネームレスに、シャオはさぞ面白おかしそうに、

「きやはっ、あははははははは。そう、そうだったわね。そういうことだったっけえ？ まあ……そんなこと、どうでもいいわ。こんなふざけたヤツ、すぐに使い物にならなくなるだろうし」

まったく意味がわからないといった様子の俺に、シャオはさらに口角を歪めて笑った。

「ククク……。百聞は一見にんとやら。あんたに面白いものを見せてあげるわ。これが——あんたのふざけた選択による結果よ」

マントの中から飛び出した尻尾がウネリ、上空に浮かぶ無数の時計の一つ——手のひらサイズの懐中時計を掴んでくる。

それを俺の顔面に突き出したのだけれども……この何の変哲も無い時計が、一体なんだってんでえい？

首を傾げていると、いきなり時計の針が急速に戻り出したではないか。それとともに、文字盤の中心に波紋のようなものが広がり、何か映像が——

「こ、これは……!?!」

そりや、こんなのただ驚くしかない。

なぜなら、その文字盤に映し出されたものが、ついさっきの俺とクロエの散歩模様だったのだから。

俯瞰視点というべきか、見下ろすような形で、俺たちのやりとりが再生されている。

コマ送りのような飛び飛びの映像だが、その後にシャオが現れるところや、巨大化したクロエがそいつを吹き飛ばす場面、そしてコピーが空から現れる場面が次々に映し出されていく。

「ん……?」

俺はその再生されている文字盤の映像で一つ違和感を覚えた。

ゆりなに向かって俺がシャオから得た情報……『脱皮』のことをチビ助に伝えようとする、少し前のところだ。

何故か、ゆりながコチラを見上げて何かを呟いているように思えたのだ。

空を見上げる形だから、コピーを見ているのかとも思ったのだが、

そいつはすでに屋根の上に降り立っているし、ビルの屋上へ退避したシャオを見ているワケでもない。

確実に——見下ろしている今の俺と目が合ったと言ってしまったのもいいだろう。

どこを見ているのか分からない集束の瞳だったが、悲しそうに眉根を寄せていた。

ブツブツと呟いているのは、クロエと何かを喋っているのか？

それから少しして、俺が脱皮を伝える瞬間、ふと空から視線を外し、コピーの方へと無表情を向けるチビ助。

「……………」

いや、なんかの気のせいだって。

あいつが時園を知ってるワケねエし……。

「あつ、コピー様がこつち見てるし」

ダツシュの声に、文字盤の中のカブト虫を見てみると確かに四つの複眼がこちらを向いていた。

「あれって、だし子と俺を叩き落としたときだよな。そういえば、しばらくあいつ動かなかったっけか……」

あのときは俺たちが真下にいることに気付いてなかったのかと思っていたのだけれども——もしかして、こいつもゆりなのように俺を見ているというのか？

なにがなにやら……。

理解がおつつかずにいる俺に、

「面白いのはこれからよ。よく見ておきなさい……目を逸らすことは、絶対に許されないわ」

髪を乱暴に掴んで、文字盤に無理やり顔を近づけさせるシャオメイ。イ。

「ぐっ……い」

文字盤には、コピーが大きな口を開けた瞬間、フツと気を失う俺の姿が映っていた。

その後、すぐさま体当たりをぶちかます巨大化したコロ美。

そいつは倒れた俺を器用に脚で掴むと、屋根の上へと避難させて、再度コピーへ向かっていく。

「ご主人様、ゆりな様が……！」

その声に、コピーのいる場所よりも少し遠いところにいるチビ助のほうへと視線を向けると、そいつが胸を押さえながらうずくまっている姿が見えた。

立ち上がろうとするが、フラついてすぐにその場に倒れこむ。それを何度か繰り返したとき、

「あーあ、かわいそうな猫憑き。あんたの為に、集束どころか再点火までしちゃつてさ。そりゃそうよね。いくら才能があろうとも、成り立ての魔法少女よ……あんな無理ばかりしてたらすぐに限界が来ちゃうって」

「……っ！」

何度目だろうか、なんとか立ち上がり、よろよろと壁に手をかけながら歩いていくゆりな。

赤く燃え上がっていた髪が黒髪へと徐々に戻っていき、赤く明滅する瞳もどんと色を失っていく。

「それなのに、なあに。あんたはそそくさと逃げるだけだったわよねえ。一体、なにを考えていたのかしら？」

「お、俺は……」

あのととき。俺は。

ゆりなに再点火の裏集束を完全発動させて、コピーを一瞬で倒してもらおう——それまでは、ひたすら逃げるしかない。

そう軽く考え、ただただ——逃げていた。

「猫憑きのことは一つも振り返らないで。クズ石が傷つけられたときだけ、怒って集束う？」

「……」

なにも言えずにうなだれる俺の髪をグイツと再び掴んで、

「……あの子はあんたのために、ボロボロになりながら、無い魔力をしぼり出したってえのに、こんなクズ石にかまけて！ あまつさえ、タイムガーデンに入ってもいつまでもダラダラケラケラとやつてるか

ら……っ！」

そう言つてシヤオは時計の中に指を突っ込んで強引に針を進めた。
やがて映し出された映像は——とても悲惨なものだった。

第六十八石：あの地、この空にさよならを

「ひっー」

力を使い果たし、園児の姿になったコロナがボロ雑巾のようにコピーに足蹴にされるシーン。

それを見たダツシユが、悲鳴をあげて俺の背中に顔をうずめる。

「チビチビ……いー」

痙攣しているそいつを、鳴き声とともに巨大な脚で踏み潰すコピー。

まるで動かなくなったオモチャにかんしゃくを起こした子供のような地団駄で……なんども、なんども、なんども。

「や、やめてくれ……」

——それは俺だって、顔を背けたいほどの光景だった。

だがそんなことをシャオが許すハズもなく、俺の髪を掴みあげて、「ねえ、見たあ？ ほら一匹目よ。あんたが目を覚ますのをずっと待ってたのに、なんてかわいそうなウエンズデイ……」

次の映像では死んだコロナの姿を目の当たりにしたゆりなが、絶叫とともに霊冥を呼んでいた。

「いったい、何度目の集束なのか。赤い眼でホバーを召喚し、コピーへと飛びかかるゆりな。」

「へえ、凄いわね。プラズマドームに霊冥を突き刺してそのまま雷の大玉へと育ててたみたいよ、この子。コピーを倒すにはドームの一撃に賭けるしかなかったって感じかしら……さすが猫憑き。マンデイの入れ知恵かもしれないケドさ。でも、そんな賭けも……」

呼んだ霊冥の分銅を掴んで、ありったけの魔力が込められている雷玉を振り下ろそうとしたそのとき。

突然、二枚の翅でゆりなよりも高く飛び上がったかと思うと——脚を垂直に振り下ろすコピー。

「!?」

ゆりなの腕ごと霊冥を叩き潰すといった、あまりにショッキングな映像に、俺は言葉を失った。

「あはっ。ざあんねえん！ そりやそうよね、あんな真正面から膨大な魔力が近づいてくるんだもの。いくらトロいコピーとはいえ、すぐに気付くわ。……さてさて、腕の無くなつた猫憑きは、と。あーちら、いい加減に抵抗するのを諦めたみたいね」

肩を抱え、激痛に顔を歪めていたゆりなだったが、キツと顔を上げて俺が倒れている屋根へと跳躍した。

そして、変身解除の呪文を唱えたかと思うと、体から飛び出したクロエに向かって何かを囁く。

「ねえ、あの子なんて言ったと思うっ？」

「……………」

「ふふっ、『クーちゃん、しゃっちゃんをピースさんに頼んで元の世界に帰してあげてくれないかな……こんなことに巻き込んで、ごめんなさいって伝えておいて欲しいの』だって。健気よねえ、『しゃっちゃん』は猫憑きのことなんて、これっぽっちも想っていないのにねえ？

言われなくても、帰ろうとしてるってーのにさ。あはははっ！」

「ゆ、ゆりな……」

「……それじゃあ、お待ちかねの最期よ。しっかり見なさい。あんたが、ふざけて見捨てた世界を」

変身の解けた魔法少女なんて脆いものだった。

逃げるでもなく、笑顔でコピーに呟くゆりな。

唇の動きから察するに、それはおそらく――

『キミを救ってあげられなくて、ごめんね』

次の、次の瞬間……大きな口を開けたコピーは、ゆりなを乱雑に持ち上げると、顔を、抉るように、噛み砕い――もう、イヤだ……許してくれ。

もう、見ていられない……許してくれ……許して――

涙で文字盤が見えなくなる瞬前、そこに映っていたのは口周りをベツタリと赤く染めた少女だった。

白髪と黒髪の入り混じった不気味な長髪に、黒いゴシックドレスを身に纏った少女――頭上に赤黒い光輪を携えたそいつはペロリと唇に付着したゆりなの鮮血を美味しそうに舐めとると、こちらを見上げ

てニイツ……と笑った。

「ゆりなあ……ごめ、ごめん……」

「そうよ。すっかり、見て、覚えて、頭に刻み込みなさい……ちよつとしたことで、あっさりとすぐに沈む世界。生きていて当たり前、奇跡が起きて当たり前、そんなこと……あるわけないのだから」

肩を震わせ、声を押し殺して泣く俺。それとは対照的に大声で泣くダツシユ。

そんな泣き声が交錯する中、ネームレスが俺とシャオの間にずいつと入ってきたかと思うと、

「……赤の魔法少女。私はやりすぎだと判断する」

「さて。どうかしら。ピース様は、いま深い眠りについていらっしやるわ。そのこと、あんたも知っているハズよね」

「それは……」

「だから、これくらいならバレやしないわ……」

「貴女、何がしたいの？」

「あんたこそ、たかがメイドの分際で勝手にこんなことして何がしたいワケ？ あたしより危険なことをしているのは、あんたのほうでしよ」

「……………」

なにやら、言い合ってるみたいだが……そんなこと、どうでもよかった。

そんなことはどうでも——

「白の魔法少女。よく聞いて、いま貴女が見た世界には足りないものがある。それは、なに？」

突然、肩を揺さぶられたかと思うと、そんなことを訊いてくる眼帯娘。

「わかんねえよ……そんなクイズなんかに答えていられる気分じゃないんだ……」

そいつの手を振り払おうとしたのだが、思いのほか強く握られていた。

「いたたっ……痛いって。離してくれよ」

「……お願い、考えて」

考えてつて言われても。だから、もうどうでもいいって……。
そう、目を閉じかけたそのとき。

「ご主人様が、いない」

今まで俺の背中であいていたダツシユがいきなりそんなことを言い出したかと思うと、

「さっきの映像、ご主人様がいらない！」

なんだか興奮している様子だけれども、俺は居たじゃねーかよ。

屋根の上で気を失って――

「待てよ……」

そう顔を上げた俺に、

「そう。白の魔法少女はあそこにいなかった。そして、融合したアナエル……貴女も」

「うん……」

大きく頷くダツシユ。

そうだ。そうだった、あそこには俺とダツシユが居なかった。

いや、実際にはいたのだけれども、魂とやらがここへと引つ張り出されていた。

つまり――

「た、確か俺はまだ死んでない……。そうだったよな？」

「そう。そして、赤の魔法少女は時計の針を少し進めただけ。あれは貴女が居ない世界の終わりかた。時園から現実へと帰ったときの

……結末。まだ、救いの余地はある」

「そ、それじゃあ……」

「もしあの場に、貴女たちがいたら――」

「運命が、変わるかもしれない……」

俺とダツシユが同時にそう言うと、シャオがこらえきれないといった様子で、

「きゃは、あははっ！ 無駄よ無駄ア。あんたらみたいなザコどもが行ったところですぐに返り討ちにされるわ。コピーはランクBの中でも最上位の模魔なのよお？」

「んなの、やってみねーとわかんねえだろ！」

「ふん……威勢だけは一丁前ねえ」

と。軽く鼻で笑ったのち、ふいにそいつはバイザーを脱ぐと、

「じゃあ、やってみなさい。ただし……ピース様の気は変わりやすいわ。おそらく、もう二度と元の世界へ帰してくれないでしょうね。七大魔宝石、そのすべてを集め終えるまでは。今ここで帰るか、それとも最後まで宝石を集めるか——これは最後の選択になると思いなさい」

「……ゆりながあんなに頑張ってくれてたんだ。借りた恩は十倍にして返してやれってな。これ、親父の口癖なり。だから……もうグダグダ言わねえ。最後まで付き合ってやんぜ」

「あつそ。言うは易し、行うのはなんとやらってね。これで犬死にしたら、とんだお笑いぐさだわ」

「いっひっひ。笑わせてやるから、早くシャドーを出してチビ助のいる世界に戻してくれよ、ジユゲムさん」

そう言うと、シャオはばつの悪そうな顔をして、

「なによ、こいつ……。やっぱり、あたしあんたのこと大っ嫌いだわ」
「おっと、奇遇だねえ。俺様もテメエのこと大っ嫌いだぜ」

「チツ。とつとと、ここから消えなさいよ！ 我は欲す。汝が纏う忌むべき力を——来なさい、シャドー・ザ・ライラエルツ」

すぐさま開いたブラックホールのふちに手をかけ、俺は後ろで恐々と覗き込んでいるダツシユに、

「チビ鮫。こつから先は俺だけでもいいんだぜ。俺とコロ美でなんとかなるかもしれない。だから、お前さんはこの時園とやらでゆっくり——」

言い終えるよりも前に、そいつは俺の手をギュツと握りしめた。

「やだつ！ どーせここにいても影にずっとイジめられるだけだしっ」

「あー、そーいやそーうだったっけ」

「あなな、死ぬとき、ご主人様と一緒にだし！ だから、いっぱいこき使って欲しいしー！」

「オーケイオーケイ、わかりましたんで。そんなじゃま、行きますか」
「うん……待っててね、ゆりな様！」

そう鼻息を荒くして闇の中へ飛び込むダツシュに、俺は一つため息をついた。

「はえーよ、いくら疾駆だからって疾駆しすぎだろあいつ……」
とりあえず。

俺は振り返ると、無表情のまま手を振って見送りをしている眼帯娘に向かって、

「なんかよくわかんねーけど、まあ世話になったな……ネム」
「……ネムって、なに？」

「ネムはお前さんのこと。ネームレスだと長ったらしいから、ネム！
そっちのほうが可愛いし言いやすいぜ」

「……………」
「もつと仲良くなったら、いつかピッタリのあだ名をつけてやんぞ」
「……………」

そんな冗談にもまったく動じず。
相も変わらず表情の読めないヤツだぜ……。

ま、いつか。

「んじゃ、またなー！」

と。俺はぶんぶんとネムに手を振って、闇へとダイブする。

一応シャオにも振ってやろうかとも思ったのだけれども、そいつはよっぽど俺の顔を見たくないのか、とつくに姿を消していた。

第六十九石：急げ！

「……で、いつになったら出られるんでしょうね、こりゃあ」

あれから三分ほど経ったが、まったくもって終着点が見えてこねエ。

周りの景色は真っ暗なままだし、ダツシユの姿は見当たらないしで……いよいよ不安になってきたぞ。

うーむ。このまま闇の中で野垂れ死にとか、さすがにイヤ過ぎるぜ。

てか。考えてみりゃあ、あのシャオが召喚したシャドーの中を通るだなんて、フツーに自殺行為のような……。

「ハハハ。ま、まさかな。いくら性格がアレでも、さすがにそんな非道なことはしねエって。うんうん、俺はハッピーレッドちゃんを信じてるぜ」

なんて額に脂汗をかきつつ一人で頷いてると、

「うっぷふ!」

突然、顔にムニユつとした柔らかい感触が飛び込んできたではないか。

なんだなんだと、その物体を両手でグイグイ押し戻そうとすると、
「ひゃうっ……! お、おまえさん、あなな、あななだし!」

「なんでえい、だし子だったのか。驚かせやがってからに」

どうやらダツシユのケツに顔を突っ込んでしまっていたみたいだ。

そいつは変身したときのような輝きを全身に纏うと、食い込んだブルマを直しつつ、

「んーとね。あなな、ちょっとここでおまえさん待ってたし。このまま落ちてくより、あななに乗ったほうが速いと思うの」

「乗ったほうがって速いって言われましても。なに、おんぶでもしてくれるワケ?」

「ちっちゃー! 違うんだなー、これが」

言うと同時に、巨大な黄金の鮫へと姿を変えるダツシユ。

おおーっ、そーいや元の姿は鮫だったっけか。でも、以前より一回

り小さいような気もするな。

そんなことを考えていると、そいつは胸ビレを曲げて自分の背中をちよいちよいと指した。

「まさか乗れって、そういう意味……？ い、いささかに恐いのだけれども」

おそろおそろ乗ってみると、エンジン音よろしく喉を鳴らして——急発進。

「ひいっ！」

なんてスピードでえい！ 目を開けてられねえぜ、こいつは。

必死に背ビレに掴まること数十秒。闇が晴れてきたかと思うと、あつという間に空を割って飛び出す俺たち。

「うっひよー、すっげえ速えええ！ 気ん持ち良いぜえ！」
って。ダメだダメだ。

こんなに浮かれてちゃあ、ダメだつてえの。

時園で見た映像を思い出し、俺は気を引き締める。

あんな惨劇、二度と見たくねえ……！

「ダツシュ、どんなタイミングで帰ってきたのか分からないけれども、とりあえず俺の体を探してくれっ」

たしか、俺が気を失ったと同時に魂が持って行かれちゃったんだよな。

するつてえと、つまるところその直後の世界に戻ってきたと考えるのがベターだろう。

時園に居た時間がカウントされていたら絶望的だが、だとしたらそもそもネムは俺をこの世界に帰そうとしないワケで——

「あー、(こちゃ(こちゃ)考えるのクソめんどくせえ！」

キーツと頭をかきむしったそのときだ。

暴風雪とともに、俺たちの横を飛び抜けていく巨大な蝶。

あれは、まさしくコロナ……！

脚には大事そうに俺の体を抱えている。やっぱり、ここは俺が気絶した直後の世界だな。

あいつがコピーに向かっていく前に、なんとかかして止めねーと。

「いたぞ、コロ美を追ってくれ！ このままじゃ、あいつはコピーと戦って死んでしまうっ」

モノアイを光らせ、さらに加速するダツシユ。

俺はそいつの背中を撫でながら、霊鳴を呼びつけた。

体に戻った際、いち早く変身してゆりなのもとへ駆けつけるように

……これからは時間との勝負だ。

「式式、ちよつちハードな戦いになるかもしれないねえけれども、そこんとこヨロシクつてなもんで」

俺の周りを浮遊する蒼の宝石にそう言うと、二つほど元気にフラツシユして答える。

やがてコロ美のもとへとたどり着いたダツシユは、強引に体当たりをかました。

とはいえ、今は一回り小さい鮫だ、巨大モードのコロナとは雲泥の差。

蚊に刺された程度だろう、不思議そうに触覚をピンと立たせたそいつは、ゆつくりと振り向いて――

「パ、パパさんっ！」

と。俺を見るなり園児の姿に戻ってしまったではないか。

「あつ、バカ!!」

叫んでしまうのも無理はねエって。

そいつが脚に抱えていた俺の体が、急速落下していくんだからな。慌てた俺はとっさに、

「やばいっ！ 霊鳴ちゃん、なんとかしてくれえいっ」

叫ぶと、合点承知の助とばかりに俺の下に飛び込み、バカデカイしゃぼん玉を生み出す式式。

その反動からか、トランポリンのようにこちらへと跳ねてきた体に、

「今だッ」

と、勢い良く飛び込んだ。

いやはや。いちかばちかの賭けだったが、なんとかなったようである……。

「くーっ、久々の生身だぜっ！ ちょっと腰と膝と肩と腕と首が痛いけれども、まあなんとかなるっしょ」

果たして自分の体と無事再開となった俺は、追ってきたダツシユに飛び乗り、啞然としてるコロナの額をつつく。

「おーい、なにを呆けてやがんでえい。コロ美ちゃんよオ」

「うっ、パパさんだ。パパさんだああっ……！」

くしゃくしゃの顔で俺の胸に抱きつくコロナ。

俺の体を落としゃがってと悪態をつきたかったところだけでも、こんな泣き顔を見せられちゃあ何も言えねエぜ……。

いや——その前に助けてもらった礼がまだだったな。

「俺のこと拾い上げてくれたんだよな。ありがとよ、チビチビ」

そう頭を撫でたら、ますます泣き出したから手に負えない。

うーむむ。

「悪いけれども、あまり泣くと魔力が無くなっちゃうぜ。これから一仕事残ってるんだからさア」

すると、そいつは鼻水を垂らしながら、

「……一仕事って、なんですか？」

見上げたそいつの頭にポンっと手を乗せる。

「決まってるじゃんか。変身して、カブト虫ヤロウをぎったんぎったんにブツ倒すんでえい」

「ひ、否定。コピーは強すぎるのです……。パパさんは逃げるんです。

あとは旧魔法少女さんがなんとかしてくれるです」

「——否定を否定する。俺は、もう逃げない」

ふざけた調子は一旦やめにして、俺は真面目なトーンでチビチビの目を見つめた。

「ゆりなにも、お前にも、ダツシユにも、俺は守られ続けた。守られ……過ぎてしまったんだ。もう逃げるのはイヤなんだよ。チビたちが頑張ってる中、男の俺が背中を見せて逃げるなんざ、いささかに格好がつかねエ。体は女になっちゃっても、中身は男のままであり続けたいんだ。だから、頼む。力を貸してくれ」

第七十石：輝け、スノウシャイン！

「パパさん……」

そいつは、不安そうな表情で目を逸らしたが、すぐにこちらに向き直って、

「肯定。コロナはパパさんの言うこと聞くんです……っ！」

「いっひっひ、良い子良い子。そんじやま、いっちよ変身と行きますんで。ガツンとぶちかましてやろうぜ、コロ美！」

「肯定！ ガツンとぶちかましてやるんですっ！」

グツと握りこぶしをあげ、小さな蝶へ、そして宝石へと姿を変えたそいつを掴んで、

「試作型霊鳴石式、起動……イグリネイション！ 続けざまに、いつちまうぜえ？ アイシクルパワー、チェインジエメラルド……ピースト、インツ!!」

やがて変身を終えた俺は、矢継ぎ早にダツシユの背中に飛び乗った。

「だし子、ゆりなのもとまで駆けてくれ！ あいつには、もう無理をさせねエ……！」

甲高いサイレンのような鳴き声とともに、空を翔ける黄金鮫。

いやあ、快適快適。欲を言えば、もっと余裕のあるときに乗りたかったな。

俺の周りに漂う雪も相まってか、夜風がひんやりと気持ち良いぜ。

なんて。深呼吸をしてシャーウッドドライブを楽しんでいると、

『パ、パパさん、ど、どうしてダツシユが生きてるんです!?!』

「えっ。何をいまさら……って、そうかチビチビは知らなかったんだもんな」

とりあえず時間もねえし、これまでの経緯をかいつまんで説明すると、そいつは『時園』というワードが出た時点で何かを察したように口数を減らした。

まあ。なにを察したか分からないから、とりあえず最後まで説明しといたけれども。

『そうだったですか……。ダツシユ・ザ・アナナエルが融合したただなんて——コロナにはとても理解が出来ない模魔なんです』

「模魔、か。チビチビは模魔をあまり快く思っていないみたいだけれども、でもダツシユのヤツはお前さんが死んだ姿を見てボロ泣きしてたぜ」

『……………』

「俺だってコピーは心底ムカつくし、ホバーも苦手だ。だが、少なくとも、ダツシユだけは違うと思う。コピーや、ホバーも話せないだけで、口を開けばまた印象が違うのかもしれないし」

と言うと、そいつは複雑そうな声色で、

『パパさんまで、あの人と似たようなことを言うんですね……。ピース様は、だからパパさんを……』

「ん？ あの人がって——あ、チビ助だ！」

あの人とやらについて訊ねようとしたのだが、ゆりなを見つけたので俺は会話を中断してダツシユから飛び降りた。

電柱に手をかけ、よろめくチビ助。そいつが倒れそうになったところで、

「よつとと……、大丈夫かい？」

「あ、ありがとうございま……つて、しゃっちゃん!？」

突然現れた俺にビックリといった感じで人差し指を向けるゆりな。俺はその指をそつと下げて、

「これこれ。人様を指差しちゃあいけませんぜ、旦那ア」

「あつ、ごめんなさい」

ありやりや、それつきり顔を赤くして俯いてしまった。

ぎゅつと黒いドレススカートを掴んで、地面に視線を落とすゆりな。

まるで、俺が怒ってる先生みてーじゃねーか。

気まずいぜ、と鼻をかいてると、

「しゃっちゃん、ひつぐ、しゃ、っちゃん……」

「げげっ、お前さんまで泣くのかよオ」

「だって、だってえ、しゃっちゃんが、来てくれたあ……来てくれたん

だもん」

「……………」

大粒の涙を流して俺の名前を呼ぶそいつの姿に、

「ゆりなっ！」

俺はたまらず抱きしめた。

体が勝手に動いたとは——こんな時のためにある言葉なんだろう。

何か、テキストにからかってやろうかとも思ったのだけれども、それでもあの映像を見てしまったあとだ。

俺には、耐えられなかった——

「しゃ、っちゃん？」

まさか俺に抱きつかれるとは思ってもなかったのか、涙目のままキョトンと俺を見つめるそいつに、

「…………もうあんな恐い目には合わせねエから。俺がずっとそばにいて、お前を最後の最後まで守ってやる」

スカートを掴んでる手に両手をそつと重ねて言う俺に、ゆりなはますます顔を赤くした。

「…………えっ！ それって、えつと、えつと…………ふえええ!!」

プシューツと汽車のような湯気が頭から出てきたけど、それをアイズブレスで吹き飛ばして、さらに続ける。

「というか。こ、こんな恥ずかしいセリフ、勢いのまま言っちゃまわないと一生言えねーし…………」

「つ、つまりだな。チビ助が命がけで俺を守ってくれたように、これから俺もお前を命がけで守るっ。帰る帰らないで俺はもう悩まない。乗りかかった舟だ、宝石集めを最後まで手伝わせてもらうぜ」

「あつ、あのあの。クーちゃんがね、この舟、泥舟かもしれないよ、だって…………」

「おつと。それはそれは、いささかに恐ろしいこつて」

しかしながらと。俺はゆりなの涙を中指の腹で拭って笑う。

「恐縮だけれども、俺様を誰だと心得るんでえい。俺は水と氷の魔法使いだぜ？ 泥舟だろうが砂舟だろうが——」

言つて、指先を濡らす一滴の涙を一粒の雹へと変化させて、

「全部、ブツ凍らせてやるっ……!」

親指で弾丸よろしく弾き、はるか彼方で俺達を睥睨と見下ろしていたコピーの顔面にぶち当てる。

「いっひっひ。どうでエい、ゆりなの涙は痛かったかい?」

屈辱だとばかりに脚を蠢かして憤怒するカブト虫。

おーおー。頭上の光輪がピカピカと光って、まあ。

そんなお冠状態のそいつに向き直ると、俺は羽を広げて闇夜へと舞い上がる。

そして、杖を大きく振りあげ、

「俺は、俺たちは……もつと痛かったんだぜ、こんちくしょうおおがあッ!」

コピーにケリをつけるべく、飛翔した。

++

やつこさんの懐にサクツと近づいてアクアサーベルをブツ刺したところだけでも……とりあえずその前に遠距離魔法で牽制といくかねエ。

とくりやあ、やっぱりあの魔法の出番ってなワケで。

「コロナが魂よ、我に翡翠の水を宿せ! こいつを喰らいやがりなア……ぷくゆゆんぷゆん、ぷいぷいぷう! すいすい、『スノードロツプ』」

口早に水付与を施し、杖から氷マシンガンをぶつ放す。

もちろん、この魔法じゃあ傷一つつけることさえ出来ないのは百も承知だ。

俺は続けざまに左拳を引いて、

「ぶっ飛べ! すいすい『フリーズナックル』!」

勢い良く突き出す。

ぷによんと出てきたマスカットゼリーに吐息を吹きかけ、氷の鉄拳にしようとしたところで――

『わわっ。パパさん、コピーが瓦礫を投げてきたのです、高度を下げるんです!』

焦った様子のコロ美の声が頭に響く。

やけに前脚がダランとして無防備だなど思ったら、後脚でコツコツ瓦礫を掴んでやがったのか……小賢しいヤツめ。

「くそっ、もう少しでナツクルが完成したつつうのに。ちったあ待ちやがれってんでエイ」

そう言つて、羽に魔力を注ごうとした時。

突然、目の前に巨大な影が現れたかと思うと、俺の視界を全部覆つてしまった。

なんだなんだと目を丸くしていると、眩いフラッシュと共にその影が金髪の少女へと姿を変えて——というか、だし子だった。

「お前さんよオ、いきなり飛び出してくるたあどういう了見でイ」

驚かせやがってとブーたれようとしたのだが、そいつは後ろ姿のまま、

「ご主人様、そこを動かないで。あななの盾で、コピー様の攻撃を防ぐからー！」

「た、盾え?」

なんのこつちや。

そう眉をひそめていると、なにかが盛大に破裂する音が聞こえた。

「今の音って、もしかして……」

おそろおそろハチマキ娘の後ろから顔だけ覗かせてみると、なんと、そいつの両手から金色の巨大な盾が飛び出しているではないか。

それは、ひし形の金枠に半透明のオーロラフィルムが張られているかのような形状だった。

盾にしてはいささかに頼りないようだが、それでも瓦礫を完全防御したということは、かなりの強度があるみたいだな。

『まさか、GFシールド!? 盾を出せるなんて、本当にダッシュは過去の自分と融合したんですね……』

俺とはベクトルの違う驚きを見せるコロナ。

つか、なんでこの盾の名称を知ってるんだらう。盾を出せるイコール、融合した証明になるのもよく分からねエ。

まあ、どうでもいいことだけれども。

「いやあ、それにしてもだし子って凄いな。ランクEとは思え

ない働きっぷりだぜ。さっすが俺様の一番模魔」

なんて感心していると、そいつは振り返ってニヤリと笑った。

「むふーっ。おまえさん、融合したあななはもつと凄いの！　こんなもんじゃないしっ」

と。長い髪をかきあげて、くるんと一回転。金色の石へと姿を変えてしまった。

ふよふよ浮いてるその宝石を何気なく掴むと、

『そっか、その手があったんですっ！』

なにやらコロ美が興奮して俺にこう言った。

『パパさん、コスチュームの胸のところに宝石があるですよね？』

「は、はい。あるですけれども……」

確かに胸のところにハートマークのエメラルド宝石が埋め込まれている。

中々に大きいそれをペタペタ触っていると、

『その中にダツシユの宝石——ゴールデンベルルを入れるんです。呪文は、えつとたしか……』

「えっ、なんで入れるんだ？　呪文ってどういうこと？」

と、アホ毛を疑問符のようにひん曲げている俺の耳に、直接過去のダツシユの声が響いてきた。

その内容はどうやら呪文とやらについてなのだけれども……つて、おいおい、マジかよ。

『一か八か、やってみるんです！　このままの魔法では、どっちみちコピーを倒すことが出来ないんですっ』

「ううっ。わ、わかりましたんで」

いささかに恥ずかしいが、過去のだし子が言っていたようにやるしかないワケで。

俺はダツシユの石を空に向かって掲げると、

「行くぜ……シャイニングパワー！　トランス・ザ・ゴールデン！」

呪文を唱えて、

「ピースト……イン！」

力強く胸の宝石へと押し込む。

その途端、目の前に変身した状態のダツシユが現れた。

『ご主人様、お手て出して』

「あ、ああ………こうか？」

言われるがままに手を出すと、そいつは俺の指に自分の指を絡めて、

『雪と光の融合、私の力を全てご主人様に捧げます……』

そう呟き、俺の胸に顔をうずめる。

『その名は——』

「……スノウシャイン」

呼応するかのように俺がその名を呼んだ次の瞬間、ダツシユが光の輪へと姿を変え、俺を頭から包み込んだ。

第七十一石：脱皮

「うっ」

あまりの眩しさに、とつさに目を閉じる。

ダツシユが融合したときのように、俺のコスチュームがどんどんと脱がされていくのを感じた。

すぐに新しいコスチュームが装着されていつてるみたいだが——
やけにスースーするぞ。こいつは、もしかして……。

チラツとだけ確認。

「げげっ、あの衣装かイ……」

さつきまでの新魔法少女と似たような白を基調とした色だが、やはりというべきか、ダツシユのコスとデザインはまったく同じだった。

うむむむ。スカート丈は短いし、胸元はガバつと見せてるしで、なんつーかその……か、かなり恥ずかしい格好だぜ。

ダツシユを取り込んだからパワーアップはしているのだろうけれども。こんなに色々と露出が増えると、いささかに防御面が不安になってきたぞ。

目をつむりながらそんなことを考えていると、光輪が俺の髪をセツトし終えたらしく、ピカツとフラツシユした。

その光は変身終了の合図。そつと目を開けて、改めて自分の格好を確認してみる。

ううっ、やっぱりあの衣装だ……。

「このスカートと胸元よオ……どうにかならねエもんかね、チビチビ」と。コロ美の意見を聞いてみようとするど、

『そんなことを言ってる暇ないんです、その力は長くはもたないのですっ！』

「えっ！… そ、そうなのかい」

パワーアップと言っても、少しの間だけなのか。

まあ。長時間この格好でいるのもアレだし、むしろ良かったのかもな……。

とりあえず、とばかりに俺は杖を持ち直すと、

「オーケイ。そんじやま……とつとつと、やりますかかってなもんで！」

ぷゆゆんぷゆん、ぷいぷいふうつ、すいすい『エメラルドダスト』！
俺様、一番の大魔法をぶっ放してみる。杖から水蒸気が飛び出し、
やがて無数の細氷がコピートの全身へと降り注ぐ。

さてさて、威力はどんなもんかねエ。穴ボコだらけになって一瞬で
倒れちまったりして。

「ありや？　そこまで強くないような……」

コピートの羽や脚は若干凍っているし、動きもまあまあ鈍っている。
でも、ダメージはそれほどでもないみたいだった。

これじゃあ、今まで撃つたたダストと変わらねーじゃねえか。

『おまえさん、その呪文だとあななの力が入らないし』

「うおつ、だし子?!　お前さんどこから喋ってんだア」

キョロキョロと周りを見ていると、

『あなな、おまえさんの中に今いるしつ。ふかふかぽかぽかで暖かい
の!』

『パパさん、ダツシユとの融合魔法の場合『エメラルド』じゃダメなん
ですっ』

なんて、左右から聞こえてくるからたまつたもんじゃねエ。

「どわわ、わーつたからステレオで喋るな、チビども！」

『チビじゃないしつ、今はご主人様よりデツカいし!』

『コロナだって、元の姿になったらパパさんの百倍はおっきいんで
すっ』

「だ、だあら、うるせええっての!」

まったく。一人でもアレなのに、だし子まで俺の中に入ってるから、
なおさら騒がしいぜ……。

とにかく。今は漫才をしている場合じゃない。

このパワーアップモードが終わっちゃう前に、なんでもいいから魔法
を撃ちまわねえと。

「んで、コロ美さんよオ。エメラルドじゃダメなら何がいいんでえい」
『エメラルドだと、コロナの分しかプラスされないます。なので

……』

『あななの金色の力、『ゴールデン』を使うの！』

なーるほどね。

「オーケイ、翠じゃなくて金で行けってことね。じゃあ早速やってみますんで……すいすい『ゴールデンダスト』ッ！」

と。物は試しと、エメラルドダストと同じ要領で杖を振ってみたのだが——これがまた凄いのなんの。

霊鳴が金ピカオーラに包まれたかと思うと、エメラルドのときより素早く水蒸気が昇り、即座に大量の飴ちゃんがコピーの体を貫いちまった。

「うっわ……」

そりゃ引きもするって。

一瞬でカブト虫の巨体が金色の氷の中に埋まってしまったんだからな。

『パパさん！ 今なんですっ』

「お、おうっ！」

続けざまに、羽を開いてコピーへと近づこうとしたのだけれども。

「ちよちよ、ちよつと、速すぎるって！ ひえええ」

羽も強化されているのか、速すぎてコントロールが上手いかなえぞぞ！

手前で止まってアクアサーベルで斬りつけようと思っていたのに、あれよあれよとコピーの腹へと突っ込んで行ってしまう。

「ブレーキ、ブレーキ！ あれ、いつもどうやって止めてたっけ!? コ

ロ美、ちよつと運転代わってくれええ」

半ばパニックになると、

『コロナも止めてるですが、言うこと聞かないんですっ』

『うーっ、あななもやってみてるけど……ダメっ、全然この羽止まらな
いしー！』

二人も大パニック。

「ふんぎゅっ！」

あのスピードを制御出来るハズもなく、氷塊に大激突してしまっ

た。

「あいてて。しこたま鼻を打つちまったぜ……。無い胸もさらにへこんじまったような」

と。鼻と胸をさすつてると、ぽむっという乾いた音とともに、胸の宝石からダツシユの石が飛び出してきたではないか。

「うわ、とつと」

慌ててキヤツチしたはいいが……。まさかこれって。

ちよつち自分の姿を確認してみると——げげっ、新魔法少女の格好に戻つちまつてるじゃねーか！

『じ、時間切れなんです……。』

「えーっ!? もうパワーアップモードお終いかよー」

いくらなんでも早すぎるぞ。五分ももたなかつた気がするぜ。

そうガツクリ肩を落としていたそのとき、目の前の氷が急に輝き出したではないか。

おおっ、ゴールドンダストはまだ効いたままなんだな。

もしかして、この光は追加攻撃でもしようとしているのか？

と、期待していたのだけれども……。俺はコピーの頭上を見上げて愕然とした。

なぜなら、赤黒い光輪が急速回転を始めていたからだ。

次の瞬間。光輪から強力な赤い光が発せられる。

これは、ホバーが精神干渉波を繰り出したときの発狂モードと似ているような——

「この光……。う、嘘だろ、おい」

俺がシャオの言っていた『脱皮』というワードを思い出したのと同じ時に、

『肯定。ついに脱皮が始まってしまったんです……。』

コロナが静かに、しかしハッキリと呟いた。

脱皮——

その場合、かなり厄介なことになるとあいつは言っていた。

おそらくハチマキ娘と融合したさっきの俺みたいに強化されるのだろうか。

「くっ……」

ゴールデンダストの氷を穴だらけの羽で払いつつ、巨大な体軀をモゾモゾと動かすコピィ。

それにともない、黒の外殻が鈍い音を響かせて一つ二つと剥がれ落ちていく。

そして中から顔を覗かせたのは、白く濁った色をした柔らかそうな殻だった。

「これはこれは。ノンキに脱皮タイムかい。いやはや、いささかに舐められたもんだねエ。だがね、こちとら指を啜えて見ている程お人好しじゃなくってねえッ！」

言つて、俺は再びダツシユの宝石を胸に押し込んだ。

もう一度。少しの間だけでもいい。だし子の力とコロ美の力を融合させてあの姿に、『スノウシャイン』に変身することが出来たら——こんな無防備なヤツなんて一瞬で！

『あつ、ダメなんです、パパさんっ！』

コロナの止めようとする声と同時に、胸からダツシユの宝石が凄まじい勢いで飛び出す。

「!?」

それはすぐそばの電柱へぶつかると、二、三度ほどコンクリートの上を跳ねてドブの中に落ちてしまった。

「だ、だし子ー」

慌ててそれを拾い上げ、スカートの裾でゴシゴシ汚れを拭いてる俺に、

『ダツシユの力を借りるのは一日に一回が限度だと思っんです。普通に召喚するよりも、格段に魔力の消費が激しいのです』

「そうだったのか……ごめんな」

考えてみれば、今日一日だけで何回も召喚してるし、融合変身なんてのもやってるんだよな。

いくら、こき使ってもいいって言われても——さすがにこれ以上無理させるわけにはいかねエ。

そう思いながら拭き続けていると、石がするつと俺の手から抜け出

して光り輝いた。

その光の中から現れたのは、ショートカットの金髪に赤いハチマキ、そして体操服といった元の姿に戻ったダツシユだった。

フラフラのそいつは、ぺたんとその場に座り込むと、なんとも申し訳なさそうな顔でメモ帳の切れ端を俺に見せる。

それには、『あなな、ヘーキ、よゆう。だから、もいちど石になる。無理やり、おまえさんが入れれば、たぶん、変身、また出来るし』と書かれていた。

「無理やりつて……言われてもよオ」

『模魔なのに、どうしてそこまでパパさんのことを……』

唇を噛んでいる俺に、ニコッと微笑むハチマキ娘。

「……わかりましたんで。あいつを倒すには脱皮してる今しかないもんな。確実な方法は融合変身による魔法——そうだよな、だし子？」

俺の言葉に、コクリと頷く。

そいつの汗に濡れた金髪をグシグシ撫でて、俺は言葉が続けた。

「それしか方法が無いってんなら仕方がねエ。よし、さっそく石になってくれ」

『パパさん!? 無理やり押し込んだら今度こそ本当にダツシユが死んじゃうかもしれないですっ! ダメなのです、他に方法があるかもなのですっ』

「……いっひっひ。だし子、お前さんには聞こえねえかもしれないが、コロ美がかなり心配してるぜ。壊れちまうかもしれないねーからダメだ、他の方法を探せつてさ」

そう言うと、チビ鮫は少しだけ驚いた顔をした。

だがすぐに照れくさそうな笑顔に変えて、

『大魔宝石様は、あななみたいな模造魔宝石のことなんか、心配しないでいいし。そのぶん、ご主人様のことを、いっぱい、いっぱい、心配して欲しいなって、守って欲しいなって、あななは思うの』

『ダツシユ……』

たどたどしく言った後、宝石へと姿を変えるダツシユ。

熱くなっているその石をひよいつと掴んだ俺に、

『否定。ダツシユは、死ぬ気なんです！ 全ての魔力を使ってパパさんと融合するつもりなんですっ』

「あっちうち。いやー、石風邪ひいたコロ美レベルの熱さだねえ。ま、俺様の手はひんやりしているからすぐに冷やしてやんよ」

『否定、否定否定、ひていつ！ パパさん、ダメなのです！』

「だあああ！ うるせーなア、ちったあ落ち着けよバカチビ。誰がせっかく直ったダツシユを壊すような真似なんてするかよ」

と、俺は宝石をスカートの中のポケットに押し込んでポムポム叩く。そんなのもって、『ふへ？ 意味がわからんですっ』なんて言ってるコロ美に、

「無理しなくていいから宝石に戻れって言っても素直に聞くヤツじゃねーからな。だからああ言って手っ取り早く宝石になってもらったワケ。あとはそのままポケットに入れて休ませるだけ。お分かり？」

『……むーっ！ パパさんの言い方がとっても紛らわしかったんですっ！』

ぶんすこ怒ってるコロナに俺は少しだけ笑った後、

「わりイわりイ。でもよ、あいつの真っ直ぐな優しさを、他の模魔とは違うつてところを……チビチビに知っておいて欲しかったんだ。いささかに良い機会だと思ってるね」

『あ、う……』

「ヤーてきこと」

言葉を紡げずにいるそいつを尻目に、俺は未だに脱皮に夢中なコピーを見上げる。

もしこの場にシャオがいたら、またふざけやがってと罵倒されるかもしれないけれども——俺には一つ、策があった。

第七十二石：決着！黒白の魔法少女VS黒白の模魔・完

それは――

「しゅちゃん！」

突然、どこからか聞こえてくるゆりなの声。

「おお。チビ助エ？ どこにいるんでえい」

なんて周りを見渡していると、

「ボクはさっきのところにいるよっ」

あー。そういや、魔力を持つ者同士は遠く離れてても会話出来るんだっけか。

すつかり忘れてたぜ。

「あとはボクに任せて、そこから逃げてっ！」

「……逃げて、か。チビ助、お前さん大丈夫なのかい？ さっきフラフラだったじゃねーか」

念のため少しだけ声を張り上げてみる。

多分、普通に話していても聞こえるとは思うけれども。

「だいじょーぶ。しゅちゃんやんが戦ってたとき少し休んでたもん。もう平気だよっ！」

「ふーん……」

戦ってたつってもたつた数分だぞ。そんな短い時間で魔力が回復するワケねえのに。

「あのさア。ひよつとすると、なんだけれども」

「ふえ？」

俺は髪の毛をクルクルと指先で弄りつつ、

「アレだろ。霊冥を突き刺して育てたプラズマドームをコピーに振り下ろそう……とか思っちゃったりしてない？」

「えっ！ どーしてクーちゃんやんの作戦をしゅちゃんやんが知ってるの!？」

やっぱりな。

そいつの問いには答えず、

「でも、あの雷玉は相当アカくなってるハズ。ちよつと休んだだけで——いや、もし魔力が全回復していたとしても、チビ助にあれを振り下ろすほどの力は無いと思うのだけれども」

「そ、それは……えっと。にや、にやはは」

なんて曖昧な笑いでごまかすチビ助。

「……………」

考えるまでもない。また集束を試すつもりだな。

再点火やら裏束だか、よく分からん名称のそれらを使ってパワーアップするのだろう。ドームをぶん投げるには眼を使うしかない。

しかしながらと、俺は思う。

クロエが前に言っていた『霊獣は自在に集束出来るが、本来の発動とは異なるからやればやるほど体に障る』ってな言葉や、

シャオやコロ美の集束に対する反応を見るに、あの眼の光ばかりに頼るのはいささかに……いや、かなりヤバイ気がする。

多分。あいつはそれでも大丈夫だと言い張って、俺たちを守ろうとするだろう。

無理をすんなって言っても聞かないのは、ダツシュだけじゃない。チビ助も。そしてコロ美だってそうだ。

「あーあ。つたく、どいつもこいつもよオ」

時園に行く前の俺なら、それじゃ頼んだぜと、そそくさとこの場から退避していたかもしれないが——

「試作型ちゃん、飛ぶぞっ！」

俺はすぐさま杖に跨るとゆりなのもとへと翔けた。

夜景を眺めながら全身に風を感じている俺の耳に、

『あれれ、羽で飛ばないんです？』

と、コロ美。

「んー。俺自身の魔力の温存のため。霊鳴の霊薬が少し余ってるし、移動は杖でいいかなって」

『むむっ？。パパさんの言ってることが、さつきからちよくちよく分からないんです。時園に行ってからなんか変なのです』

「それは……」

フラッシュバックのように脳裏に描かれるコロナの死体。そして、腕を潰され、顔の半分を噛み砕かれたゆりな。

それらを振り払うかのように首をぶんぶん振って、俺は呟く。

「なあ、チビチビ」

『な、なんです？』

「……帰ったら、ご褒美にいっぱい高い高いしてやんよ。だから最後まで頑張ってくれ。おそらく、あいつを倒すには俺とチビチビの魔力を全部使わなきゃいけないからさア」

『やたっ！ 肯定なんですっ！ コロナ、ご褒美のためにいっぱいいっぱい頑張るのです!!』

「いっひっひ。頼りにしてるぜ」

やがて、ゆりなのもとへ帰ってきたのだけれども。

そいつは目を閉じて何かをしようとしているところだった。

いや。この浮き上がる髪の毛に、舞う火の粉といったこれは、おそらく裏集束とやらか。

……これ以上、眼の力を使わせてたまるかっつてんだ。

「よっ。ゆーりなちゃん何してんの」

俺はなるべく軽い調子でそいつの肩をポンッと叩いた。

「なあっつてば。おーい」

「……………」

ほっぺたをうにゅーって引っ張ってみたり。

「無視すんなよオ」

「……………」

今度はスカートをバサバサとめくったりしてみるが、どうにもこうにも無反応。

よっぽど集中しているのだろう。

むむむ……こうなったら。

「ほーら、たかいたかーい」

さつき言っていたコロ美のご褒美である高い高いの練習がてら、チビ助を持ち上げてみる。

これにはさすがのゆりなも気付いたようで、

「きゃっ?! わ、わわっ」

と。ビツクリ声をあげて目を開けた。

「あれれ。しゃっちゃん、いつの間にな？」

「いっひっひ。俺を無視した罪は重いぜエ」

俺は呆然としているゆりなを抱え上げたまま、

「ほれほれほれーい」

クルクルとその場で勢い良く回してやる。

いやはや。コスチュームの力のおかげか、いささかに軽いもんだぜ。ま、コスを脱いでも軽そうだけだな。

「ふにゃあああ!? 目、目が回るうううう! じゃっちゃん、どめでえええ」

「あい、わかりましたんで」

言われたとおりにピタリと止めてゆりなを下ろすと、そいつは目をグルグル回しながら、

「ふえええ、お月様がいっぱい見えるよおお」

「あんれま、なんてこった。やっぱりまだフラフラじゃねーか! まったく、テキトーなことばかり言いやがってからによオ」

「ひ、ひどいよお。ボク、テキトーなことなんて言っていないもん。フラフラなのはしゃっちゃんのせいだよっ」

やっとこさ落ちついたのか、むくれ面で俺を見つめるチビ助。

俺はそいつの頬をつんつん突きつつ、

「怒んな怒んなって。おっと。すでに投げるスタンバイは完了していらっしやるみたいだねエ」

と。手元の分銅を見る。

分銅つつても霊冥の寶石部分だけでも。

「そんじやま。それを引つ張つてコピーにぶちかまそうぜ。今なら脱皮中で雷玉にも気付かないだろうし」

そう言うと、そいつは困ったような表情になって、

「ダメだよっ、危ないからしゃっちゃんは遠くへ離れてて」「へ? 危ないって、なんでまた?」

「だって、クーちゃんがもし変に投げちゃったら、しゃっちゃんにぶつかるかもって……ボク、ちゃんと投げられるか不安だし」

なんて俯いてしまった。

やれやれと俺は肩をすくめて、その頭に手を乗せる。

「いちいちめんどくせえヤツ。だったら一緒に投げればいい話だろ。そうしたらぶつからねーし」

「で、でもっ、もしボクらの上に落ちてきたら……」

「でももすももねえっての。言っただろ、俺はもう逃げねーの。それに、二人で力を合わせれば絶対にコピーの方までブツ飛ばせるって」「しゃっちゃん……」

でもなあ。二人で投げるにしても……こうも宝石が小さいとねエ。掴む場所が無いっつうか。

と、ゆりなの手に握られている分銅をジッと見ていると、俺の周りを浮遊していた霊鳴がピカツと反応した。

「ん、どうしたんでえい？」

『パパさん、式式は二人で掴みやすいように零式と合体するつもりなんです』

「おお。なんてお利口さんなんでしょ！ てか、コロ美ってば霊鳴の言葉が分かるんだな」

『否定。言葉というか、やりたいことがなんとなく解るだけなんです。でも、多分当たってるのです……ほら』

チビチビ助の言葉どおり、霊鳴と霊冥がピッタリくっついたかと思うと、分銅部分が長く伸びたではないか。

オブシディアンの黒色とサファイアの蒼色が螺旋を描くように絡み合っている。

鎖の部分に流れていた黒い雷の周りに俺の翠色の雪がふよふよと漂い始めたところで、ゆりなが感嘆の声をもらす。

「ふわあ……とっってもキレイ」

「目がチカチカするけど、まあキレイっちゃキレイかもな」

「もーっ、しゃっちゃんってば素直じゃないんだから」

「ばーろお。お前さんが素直すぎんの」

そうお互い笑いつつ、俺たちは宝石を掴んだ。

「そんじやま、そろそろケリをつけようぜ」

「うんっ」

目を閉じ、手元へと全魔力を注ぐ。

『おっけ。コロナの力は全部。パパさんの手にいったんです』

「さんきゅ。こっちはもう準備出来てるぜ。チビ助はどうでエイ」

「あつ。クーちゃんがもうちよつとかかるって」

「わかりましたんで」

……ちよつとだけ暇だな。

何気なく隣のゆりなに視線が行ってしまう。目を閉じたまま、一生懸命に手元へと魔力を送っているチビ助。

そいつの顔を見ていると、また時園のあの光景が頭に浮かんでしまった。

「ゆりな……」

「ん、なあに？」

そいつが目を開けると、俺の目から涙が零れるのはほぼ同時だった。

「しゃ、しゃっちゃん、どーして泣いてるの？」

「しまっ……いや。あの、なんっーか、その、待ち時間が長いもんだから、いささかにあくびが出ちまつてさ」

くそっ。涙を拭こうにも今手を離したらまた一から魔力を注がなきゃいけないえ。

「にはは、待たせてごめんね」

そう言つて、スカートからハンケチを取り出し、俺の涙を拭うチビ助。

「わ、わりイな」

「いーの、いーのっ。さつきボクの涙拭いてくれたお返しだよ」

「なんじやそりや……」

「えへへっ」

っつて。ちよつと待て！

「あーっ、手を離したらもっかい溜めなきゃなんねーんだぞ！」

「ふえーん、今おんなじことクーちゃんにも言われちゃったよお」
なんて涙目でもう一度魔力を溜め始めるゆりな。

「おいおい。今度はお前が泣くのかイ、なんて思っていると、

「なんかさー。今日、ボクたち泣いてばっかりだよね」

「た、確かにそうだな」

『うっ。コロナもいっぱい泣いた気がするんです』

言われてみれば今日一日でどんだけ泣いちゃったことやら。

だし子もすげエ泣いてたし。ランクBのコピー一匹の襲来でこれだもんなあ。ランクAの模魔が来たらどうなっちゃうんだろう。

「明日はいっぱい笑えるといいなあ……」

不意にゆりながそんなことをぼそりと呟く。

明日、か。

コピーを倒さなければ、明日は来ない。たとえあいつを倒したとしても、次々に現れる模魔、そして大魔を全て倒して捕獲しないと——ゆりなに明日はない。

あんな目には、もう……。

俺はトホホと唇を尖らせているチビ助を見つめて、小さくこう呟いた。

「……笑えるさ、きつと」

すると、ゆりなは俺のほうを向いて、

「うんっ、しゃっちゃんと一緒に風呂に入る約束があるもんねっ。とっつても楽しみだよお」

と。八重歯を見せての満面の笑み。

「そ、そんな約束したっけ……」

「したもん！ 破ったら雷千発だよって言ったもんっ。あ、でも入るのって今日だったっけ。まいいや、毎日一緒に入れば同じだもんね」

「ははは……毎日勘弁してくれ」

相変わらずつつうか、なんっーか。

まあ、チビ助らしいけれども。

「あつ。クーちゃんが準備出来たって」

「オーケイ」

さて、そんじやま。風呂の約束もあるし、いい加減コピーさんには退場してもらいますかねエ。

「んじや、行くぜゆりな」

「うんっ、しゃっちゃん」

目配せをして、二人同時に頷く。

そして。

「よっこらっ……」

「いっせーの……」

分銅を大きく持ち上げ――

「せっ!!」

掛け声とともに振り下ろす。

途端、轟音とともに俺たちの頭上にとてつもなくデカイ雷玉が舞った。

「どえええ、あんなに大きかったのかよ!」

「ふわああ。本当だあ。わーい! すっごいすっごいっ」

『か、簡易変身なのにこれだけの魔法作っちゃうだなんて……。パパさんと同じ新魔法少女さんになったらどうなっちゃうんですか、これ……』

弧を描いてコピーに向かっていく大玉を見ながらそれぞれ感想をもらしていると、突然目の前がグラつと揺らいだ。

そしてすぐさま襲ってきた凄まじい眠気に、俺はその場に倒れこんでしまった。

「しゃ、しゃっちゃん大丈夫!」

「へ、平気平気……。魔法使い過ぎちまって少し眠いだけだから。それより、コピーを捕獲しに行ってくれ。このチャンス逃したら、もう二度と捕まえられる気がしねエ」

「……うんっ、わかった。すぐ戻ってくるからね!」

真剣な顔で頷き、大跳躍で飛び去っていくそいつの頼もしい後ろ姿に、俺はふうつと息をついた。

道路に大の字で寝っ転がり、満天の星空を見上げる。

「いつひっひ……やった、ぞ……。なあにが、最強のランクBだ……」

感動の言葉を並べまくりたいところだけれども、いささかに眠くて
それどころじゃねエ。

これで実は倒せてませんでした、なんてオチだけは勘弁してもらい
たいぜ。

ブイサインをしながら帰ってくるゆりなの笑顔を期待しつつ、少し
だけ眠ろうとしたそのとき。

なにか足音が近づいてきたかと思うと、俺を見下ろす黒い影が現れ
た。

「しゃ、シャオ……か？」

「……………」

黒いバイザーに黒いマント。肩には黒猫——いや、クロエが乗っ
かっていた。

「え……う？」

複雑な表情で俺を見下ろす黒猫に、

「な、なんで、クロが、そんなところ、に………」

訊ねてみようとしますが、あまりの眠気に言葉が途切れ途切れになっ
てしまう。

やがて眠りに落ちる寸前。シャオはバイザーを脱いで唇に微笑を
たたえた。

そして、

「長い永い三日目の終焉。次は三十日後……でも、今はゆっくりとお
やすみなさい」

そう呟くと、黒い指輪にそっと口づけをした。

++ ++

V S 第十四番模造魔宝石コピー・ザ・ヨムリエル編 完

第七十三石：V S 第貳番大魔宝石シロハ・ザ・チユー ズデイ編

「はふっ。……なんでえい、この匂いは」

むくりと上半身を起こして、俺は鼻をクンクン鳴らした。

なんか花のようなフルーツのような。やけに甘い香りが漂っているな。

親父のヤツ、まあた金の無駄遣いをしやがったのか。余計なモンは買ってくるなつってんによオ。

そんなことを考えつつ、ポーっと背中をかいて周りを見渡してみたのだけれども。

「……どこだア？」

はて。俺の寢床にしちやあ、いささかにベッドがふかふかすぎるよ
うな。

そもそもとして。俺ん家はこんな豪華なベッドじゃなくて、ポロポロのせんべい布団だったハズ……ダチん家に泊まりに来てたっけか？

ううむ。頭がハッキリしねエ。おまけに視界もぼんやり霞んでやがるぜ。

「ふわあくあ」

とりあえず大きく伸びをして、目をグシグシこすっておく。

「あつ、そうか……」

薄暗い部屋の片隅でひときわ目立つ暖色の灯り。

小さな学習机に伏せて眠っている一人の少女を見つけて、俺はようやく思い出す。

「チビ助の家、か」

そうだった。

俺は確かコンビニに買い物に行く途中に、このヘンテコな世界に飛ばされたんだ。

誰に、どうやって飛ばされたか。そこらへんの記憶は曖昧だけれど

も……。

いや。誰に、の部分は判明していたな。『ピース』とかいう婆さんだ。

なんでも自称最強の魔女とやらで、滅多に人前に姿を現すことはなく、稀に現れたとしても変な仮面をかぶっているというおかしな婆さん。

おかしいのは容姿だけじゃないようで、魔法使いは少女じゃないとダメだつうトンデモな理由で、俺様を小学生のようなガキンちよ娘の姿に変えちまいがった。

今はこんな真つ白肌にぷにぷになお腹つつう、あられもない姿になっちまっているが、元は筋骨隆々の中学二年生の男だ。

同学年どころか中三の奴らにもタメ張れるぐらい背が高い方だったのに……。今じゃそこで寝ている小学生のチビ助より背が低い有様だぜ。

髪もやけに伸びちまったしさア。今までと変わらないのは白髪だつてことくらいか。

トホホ、と肩を落としていると、

「……えへへ。しゃっちゃんを作ったホットケーキ美味しいよお」

なんともお間抜けな寝言が聞こえてきたではないか。

背後からそいつのツラを覗き込んでみる。

「あんれま。ヨダレ垂らしてやがる。にんまりと幸せそうな顔しちゃってらア」

「今度はボクがしゃっちゃんに作ったげるね。むにやむにや……」

なんて、面白そうないイベント……。もとい、寝言を勝手に終わらせようとしやがったので。

「ばーろオい。だあれがお前さんの作ったホットケーキなんぞ食うかってんでえい。俺様を作ったやつのほうが百倍は美味しいから、自分で作って食うぜ。一昨日きやがれってんだ」

と。意地悪く耳元で囁いてやると、

「ううっ……ごめんさあい」

笑顔から一転。悲しそうな顔で鼻をすするチビ助。

「いつひつひ。相変わらず、からかい甲斐のあるヤツだぜ」
「そういえば。こいつ、なんで机で寝てるんだろう。」

寝るならベッドで寝りゃあいいのに、俺をベッドで寝かせて自分は学習机で寝るって、さすがにドが付くほどに優しいチビ助でもおかしいような。

そう首を傾げていたのだが、そいつが今まさに枕にしている分厚い漢字ドリルを見てピンと来た。

「はーん、なるほどなるほど。宿題をやってる途中で寝ちまったってオチかい。」

「ベタだねえ、まったく」

その小学二年生の総復習漢字ドリルとやらをこっさり拝借してパラッとめくってみたのだけれども。

「うわっ、この世界の小学生ってこんな難しい漢字習ってるのかよ……」

自販機に俺が居た世界の金が使えたり、駅名が聞いたことある名前だったりと。

異世界とはいえ、いささかに俺の世界と似ているなと思っていたが……なんともまあ。

この漢字ドリルの難しさったらねーな。

そりゃ、勉強は一切してなかったケドよ。それでも小学二年生程度の問題なら余裕のよっちゃんなハズなんだが――

「……くしゅんっー」

「うおっと」

突然のクシヤミに、思わずドリルを落としてしまう。

あぶねえ、頭に落ちなくて良かったぜと安堵の息をついていると、不意にドリルの表紙――名前欄に目が行った。

「小学二年生、久樹上ゆりな……か」

窓の外で咲いてる夜桜や、掛けられている四月のカレンダーを見るに、これはおそらく春休みの宿題だろう。

んでもって、二年の総復習をやってるってことは、明日の学校は始業式。つまるところ、ゆりなは明日で三年生になるっばいな。

「ん？」

そういえばチビ助って、九才じゃなかったっけ。二年から三年だと八才くらいだったような……この世界じゃそこらへん微妙に違うのか？

まあどーでもいいか。

ドリルを机に置いた俺の目に、今度は花の凶鑑が飛び込んで来る。

「あー。そういや、これでシヤクヤクって名前に決めたんだけ」

つい数日前のことだが、なんとも懐かしく感じられるぜ。

本名を明かすまでも無い、と。テキトーに決めた名前にも関わらず、『しゃっちゃん』と可愛らしいあだ名で呼ぶゆりな。

……ホント、良い子過ぎるつつうか、人を疑うことを知らないヤツだぜ。

肩をすくめていると、

「へっくしゅっ」

本日二度目のクシヤミをぶっ放すゆりな。

机にある怪獣さん置時計を見てみると、針が午前二時半過ぎを指していた。

春とは言え、こんな夜中じやまだまだ肌寒いハズだ。

俺は氷と水の魔法使いだから寒さにはめっぽう強いケド、こいつにとつちやいささかにキツイだろう。

こんな薄っぺらいパジャマ姿だし、なおさらにな。

「ほれっ。風邪ひいちゃうぞ、っつ」

言いながらゆりなをお姫様抱っこしてベッドへ運ぶ。

やっぱ変身しなくとも軽く持てるな。

っーか、結構な大食いのクセに、細っちいよなアこいつ。

「ふあっ、宿題やらにやいと……」

ふわふわの羽毛布団をかけたところで、薄っすら目を開けるチビ助。

「いいから。寝てろって。俺がやっつといてやっつから」

安心させるようにポムポムと等間隔のリズムで肩を叩くと、

「……………うにゅ」

すぐにまた眠りの世界へと落ちていってしまった。

「いつひつひ。どうでえい、俺の寝かしつけテクは。いささかにチョロいもんだぜ」

おっと。宿題に取り掛かる前に、ゆりなの顔にかかっている長い黒髪をどうにかしねーと。

このままじゃ、髪が鼻に入ってたクシヤミをぶっ放しちまうぜ。

「……それにしてもスゲエ長い髪だな。ちったあ切れればいいのに。まあ、俺の髪も長いし、人のことは言えねエか」

んなことを呟きながら指で髪を払っていると、またまた悲しそうな表情になるチビ助。

「うー……」

「なあに。今度はどうしたんでえい?」

「しゃっちゃん、ホットケーキ……ぐすつ」

ああー。はいはい、さっきの夢の続きを見ているワケね。

あれっぽっちの意地悪でここまで悲しそうな表情をするとはね。なんとも面倒くせえヤツ。

まあ。とりあえずテキストに囁いておくか。

「めんごめんご。やっぱ腹減ったから作っとくれ」

「……ほい、了解うけたまわりい」

にへへーとすぐに笑顔を取り戻すチビ助。予想通り過ぎる反応に、ぽへっとチョップを額にかまして一言。

「ごおの、単純おバカめ」

しかし寝言は続かず、気が済んだのかそのままスヤスヤと眠ってしまった。

第七十四石：この温もりを、いつまでも

「ふう……まっ、こんなところかね」

ぱたむと漢字ドリルを閉じて俺は大きく伸びをした。

いやはや、中々に良い頭の運動になったぜ。

たまにはチビ助の勉強を手伝ってやるのも悪くねエかもな……ホントにたまになら、だけれども。

「それにしてもワケわかんねー漢字ばかり習いやがって。この世界のガキンちよどもはいささかに大変だねエ」

言いながらデスクライトを消すと、すぐそばにある窓のカーテン越しに外の明かりがぼんやりと漏れているのに気がついた。

「んん……っ!」

ふと、時計を見やると蛍光塗料の針は午前三時半あたりを指している。

「この明かりは街灯——じゃなくて隣の家だよな。こんな真夜中に何してんだア?」

ちよつとした好奇心つてやつで、カーテンをこっそりめくってみると、ゆりな家の屋根をはさんで隣家の部屋が見えた。

今さつき俺が座っていた学習机とは似ても似つかないほど豪華な机に、無駄にオシャレなスタンドライト。

「どうやら明かりはそこから漏れていたようなのだけれども……。」「ええっ!?!」

そこに座っている人物を見て俺は思わず声をあげてしまった。

窓を全開にして優雅にコーヒーをすする少女。桃色の眼鏡に手をかけ、つまらなそうに分厚いノートのようなものを眺めているそいつは——

「チ、チビ天じゃねーか! まさか隣に住んでいやがったとは……!」

チビ天——もとい、天使(あまつか)ももは。

ゆりなの幼馴染で、たしかお姉さんの話では四才の頃から毎日のようにこの家に遊びに来ているとか。

いやはや、なるほどねエ。隣に住んでいるんならすぐに来れるもん

な。

最初にあいつと出会ったとき、軽快な足音とともに窓から侵入してきたっけ。よくよく考えてみれば、あの音は自分の部屋から屋根をつたって来た音だったんだな。

「にしても、相変わらず特徴満載なヤツだぜ」

ミディアムストレートの桃色の髪もさることながら、花の模様が刻まれているエメラルドグリーン瞳も非常に目を引く特徴だ。

そして桃色フレームの眼鏡も印象的——ではあるのだけでも。

「やつぱり眼鏡かけてると雰囲気全然違うよなあ……」

俺は再び椅子に座り直すと、頬杖をついてももはの横顔を眺めた。

最初んときは派手なピンク色のワンピースに、白い羽のついたナツプサツクを背負っているつつう奇抜な格好だったし、喋り方も訛りまくりのおかしなヤツって感じだったんだが。

次に会ったときは上品な制服姿だし、髪型もツインテールじゃなくなっていたし、眼鏡はかけてるし、標準語になってるしで……ガラツと百八十度キャラが変わっていやがった。

なんか取り巻きのような奴らに、トーカさんだとか委員長だとか呼ばれていたっけ。

トーカだか、ももはだか、どっちが本当のあいつなのか知らねーけれども、俺は今の凛としたお嬢様チックなあいつはあまり好きじゃなかった。

……俺のことを『このような不躰な人知りません』って、無視しやがった恨みは今でも忘れちゃいねえかな。

そう、むくれつつジーツと見ていると、そいつは不意に眼鏡を外して目頭を押さえた。

「なんかすげエ疲れてそうだな……。もしかして今までずっと勉強していたのかねエ」

なんてことを呟いたそのとき。

急にももはがパツと顔を上げ——

「あつ……」

やべエ、目が合っちゃった！

絡み合う俺たちの視線の間に沈黙の三点リーダーが飛び交ったのも束の間、

「しゃくつちーっ！」

ガタンと椅子を倒して勢い良く立ち上がると、ぶんぶんと両手を振るももは。

ぴよんこぴよんこと飛び跳ねながら俺に満面の笑顔を向けるそいつは、最初に出会ったときのヘンテコ娘——『ももは』そのものだった。

「……………」

違和感つつうか。

クールな振る舞いのトーカーさんモードからいきなりヘンテコももはモードに切り替わったそいつに、どう反応したらいいものか戸惑っている、

「っー」

突然ビクツと身を震わせ、後ろを振り向くももは。

そしてすぐさま窓を閉めると、矢継ぎ早にカーテンも閉めてしまったではないか。

「ありやりや、一体全体どうしちゃったんでしょ？」

なにやら尋常じゃないほど焦っていたように思えたのだけれども。

お父さんかお母さんにでも怒られたのかねエ。まあ、こんな夜中にアホみたいに叫んでたらそりゃ怒られるか。

俺もカーテンを閉め、もう一度眠りにつこうかなと大きなあくびをしたところで、

「ふええっ……………」

今度はゆりなの泣き声が聞こえてきたではないか。

あー。でも、この泣き方にはいささかに覚えがあるぜ。昨日も似たようことあったもんな。

ぺらりと布団をめくると何かを求めるように手をグーパーと動かしているチビ助。

「だと思っただぜ。やっぱし、ぬいぐるみが無いからぐずってやがったのか」

クロエ曰く、何かを抱いてないと熟睡出来ないつつう面倒極まりない性質なよう。

まあ。とりあえず、そこらへんに転がってるテキトーなものを抱かせておけばすぐに泣き止むだろ。

「ええっと。なんかねーかなア……」

暗闇の中、ベッドの周辺で抱かせるものを手探りで探していると、何か温かくて柔らかいものが手に触れた。

「んん？　な、なんだこりや」

ギョツとしてデスクライトを点け、もう一度それを見てみると、

「パパさん、そんなことしちやメツなんです……」

お尻を高く上げてうつ伏せで眠る園児がそこにいた。

「チビチビのヤロウ、なんつー寝相の悪さでえい」

そいつは、やけに袖の長い園児服に身を包んだ四、五才くらいの子どもで、さらさらペリドットカラーの長い髪をオレンジ色のリボンでくくってツーサイドアップにしているつつう――

「つて、おい待て。寝てるときはこんな髪型ダメだつてーの」

ぱぱつとりボンを解いて、緩めに髪を結んでやる。こうすりや摩擦で髪が痛むことはねーからな。

まっ、こんな眠り方で摩擦うんぬんもないとは思っけれども。

「よーし、出来た出来た」

と。突き出したケツをペンペン叩くと、

「うーっ。否定……なんですう」

尻を振りながらのそりのそりと少しずつ前進していくチビチビ助。「いつひっひ、イモムシみてえなヤツだぜ。いや、ていうか……元は蝶々だったか。そりやイモムシっぽい動きするわな」

名前はコロ美――じゃなくてコロナ。

シャオメイが呼んでいた名前が本当なら、コロナ・ザ・ウエンズデイとかいう長つたらしいのが本名らしい。

なんかよくわからねーが、すげえヤバイと言われてる七大魔宝石のうちの一つで……えっと、確か参番石のエメラルドに封印されていた『水』と『氷』の霊獣だったハズ。

一メートルにも満たない小さい体だから俺はチビチビ助と呼んでいるが、元の姿は凄まじくデカイ蝶のバケモンで、初めてその姿を見たときはかなりビビったもんだぜ。

「……それがこんなちっこくなるんだもんなア。しかも、人間のガキんちよ姿になっちまうし。こいつらの体の構造は未だによくわからねーな。つか、一生理解出来る気がしねエ」

俺はそう肩をすくめると、指を啜えて丸くなっているチビチビをひよいつと抱っこして、

「ま。ちようどいいや。こいつを抱かせておこつと」
両手を彷徨わせているゆりなに押し付けた。

その途端、

「ふわあ……」

と、安心した様子の表情を浮かべるチビチビ助。
そんでもってそれとは対照的に、

「む、むぐう」

と、苦しそうな表情を浮かべるチビチビ助。

「えへへ。いいこいいいこさんにしてなきやダメだよお……むにやむにや」

チビチビをぬいぐるみと勘違いしているのか、サバ折りよろしく強烈な抱きしめで頬ずりをするゆりな。

しばらく小さなうめき声をあげていたコロ美だったが、こちらだつて負けてはいない。

一瞬の隙をつき、スルツと抜け出すと、寝相の悪さを活かした回し蹴りをゆりなの腰へと華麗にぶちかます。

「う、ううくん……」

数秒ほど痛そうな顔をしていたが、すぐにケロツとした様子で再びコロ美を抱きしめるチビ助。

そんなこんなで何回くらい同じ事を繰り返していたんだろうか。

どっちもどっちな二人のエンドレス睡眠バトルを見て、ついついプツとふき出してしまう。

「まーったく、見ていて飽きねエヤツらだぜ」

そして同時に、二人が助かって本当に良かったという安堵の念が心の底からこみ上がってくる。

「コロ美……」

布団をかけ直し、俺はコロナの背中にそっと手を置いた。

あつたかく、呼吸の度に上下する背中。

「ちゃんと動いてる、よな……」

次に、ゆりなのほっぺたに手の甲を当てる。

「……キレイな顔のままですよかったです。女の子、だもんな。こんな小さいうちから傷ついちまったらお姉さんに申し訳が立たねエ」

片腕をグチャグチャに潰され、顔面の半分をコピーに喰われたあの惨たらしい映像をイヤでも思い出してしまう。

忘れたくても忘れられねエ。クソツタレな未来——

目を閉じ、もう一度だけゆりなの温かい頬に手を乗せ、

「人生、楽しいことはこれからいっぱいあるんだ。くれぐれも死に急ぐんじやねエぞ、チビ助ども」

俺は唇を強く噛みしめた。

第七十五石：お化けなんて

「……や、やっちゃまったぜ」

ジャババーツと、水を流すトイレの音をバツクに、「はあ、なにやってんだか」

俺は後ろ手でドアを閉めて大きくため息をついた。

ううっ。頬が火照ってしようがねえ。きつと今の俺の顔はイチゴよろしく真っ赤っかになっちゃまってることだろうよ。

だって、まさかあんなに盛大にぶちまけるとは思いもしなかったもんで。

眠すぎてあくびをしながらパンツを下ろしたところまでは覚えてるんだけど……その後はあまり記憶にない。

気付いたらトイレの床がびっちょびっちょって有様だったぜ。

女の体だっつうことを忘れて男のノリでやった結果がコレだ。

というか、立ったまんま出来ないとかさア。いささかにありえねーだろ……」

「つくづく面倒クセエ体だぜ、ったくよオ」

言いつつ改めて自分の格好を見てみる。

羽のマークがついた白のキャミソールに、丈の短い水色のプリーツスカート。

そんな一張羅に加えて、コロナから特別に出してもらった白緑縞のオーバーニーソックスと似た感じの薄緑の縞パンツ。

どちらも変身したときのコスチュームなんだけれども――

「あれ？」

ニーソックスは暖かいからという理由だったけど、なんでパンツまで変身後のままなんだ？

たしか変身前は普通の白い綿パンツだったような。もしかしてコ口美のヤツ、また間違えたのかねエ。

まあ、無いよりはマシだけだよ……。

と、ダツシユ戦のときのアレをちよこっと思いついて、再び頬が熱くなる。

「はやく石を全部集めて男の体に戻りてエゼ……」

んなことをトイレの前で突っ立ちながらボヤいていると、

「……パパさん。ちゃんとキレイキレイしたですか？」

「げげっ、チビチビ!？」

いつの間にか、寝ぼけまなこのコロナが目の前に立っていた。

ただでさえ眠そうな目をしているそいつだが、もつとトロントロンの眼で、

「コロナもおトイレ入るんです。汚いまんまだと、ヤなんです」

ぽけーつと俺を見上げて言う。

「も、もしかして俺様の心の中を読みました？」

頬を引きつらせながら訊いてみると、

「……肯定」

小さくココリと頷くココ美。

そうなんだよなア。何故かこいつに限って俺の心の中を少しだけ読むことが出来るらしい。

「パパさん？」

「あ、いや……。そりや掃除したに決まってるだろ。俺の水魔法でちよちよいのちよいだっただぜ」

そう。俺の使える魔法は『氷』と『水』だから掃除自体は案外楽チンだった。

指をちよこつとクルクル回すだけで、水分をひとまとめに出来るかな。そいつを便器の中に入れて流せばそれでサクっとお終いだ。

もしパンツが濡れちまっていたらもつと大変だったろうケド。そこはなんとか奇跡的に無事だったようで……。

不幸中の幸いとはまさにこのことだな。

にしても。思いのまま水を操れる能力——やっぱりこれってかなり便利だよなア。

漫画やゲームの主人公だと火とか雷つつうのが主流だし、俺もガキんちよの頃は魔法が使えるなら絶対に火とか雷みたいなカツコイイのがいいぜ、なんて思っていたのだけれども。

いやはや。実際に魔法を使う側になってみるとそこら辺の考え方

がガラッと変わるな。

別にド派手で大迫力な魔法をブツ放したところで観客が沸くつてワケでもねーし。

俺たち魔法使い以外の目に映らないんじゃないやあ、見栄えうんぬんにこだわったところで空しいだけだ。

だったら地味な魔法だけど水道代が浮いたり、いちいち冷蔵庫で氷を作らなくて済む『水と氷』使いで良かったなという結論に――

「……っーか、お前さんいつまでそこにいるんだ？ トイレに入らねーのかイ」

いつまで経っても俺の前で棒立ち状態のコロ美。

まさかこのままずっと俺の心の中を読み続けるつもりじゃねーよな……。

そう眉をひそめていると、

「えっと。その……パパさん、コロナのおトイレが終わるまでそこで待ってて欲しいんです」

もじもじと長い袖をこすり合わせて恥ずかしそうに言うチビチビ助に、俺はニヤリと笑った。

ははーん。なるほどなるほど。

俺たちが寝ていたゆりなの部屋は二階だが、このトイレは一階にある。

それもかなり奥のほうにあるから、リビングの豆電球程度ではこちらまで明かりが届かないのだ。

俺は真っ暗でどんよりとした空気の廊下に目をやりながら、

「あー。お化けってこういうところが好きそうだよなア」

と。試しに言ってみると、

「ひ、否定っー」

ぶるぶると震えながら俺の足を両袖でギュツと掴むチビチビ。

予想以上のビビリっぷりだった。

というか……自分だってお化けと似たようなモンじゃねーか。

むしろお化けのほうに逃げ出すくらいにスペックをお持ちのクセによオ。

っーワケで。

「恐縮だけれども、冷えないうちにもう一度寝なおすつもりなんで。もしお化けさんが出て大丈夫さ。バケモン同士仲良くなれるハズだって」

なんてヒラヒラと手を振って立ち去ろうとしたのだが、

「ぐすん。コロナはバケモンじゃないのです……ひどいんです」

目に涙をためて俺を見上げるコロ美。

「……うっ。じよ、冗談だって」

そんな悲しそうなツラで言われちゃあ仕方があるめえ。

俺は舌打ち混じりにチビチビを抱っこし、

「ちよつとだけ待っててやんよ。でもちよつとだけだかな。早く出てこねーと上に行って寝ちまうんで。ほれ、よーいドンっ」

便座にちよこんと乗つけてそのままドアを閉めた。

閉めた——のだけれども。

「……おっせエ」

入ってから十分は経ってるぞ。

大か中か小か知らないけれども、いつまでやってるつもりなんだ。いい加減に待ちくたびれたぜ……。

「おーい、コロ美。まだかよお」

「……………」

「コロ美さんやーい」

「……………」

んん？ いささかに様子がおかしいな。

不思議に思った俺はドアに耳をくつつけて中の様子を窺ってみた。すると、中からグースカピースカとなんとも幸せそうな寝息が聞こえてきたではないか。

第七十六石：いかないで

「チツ、こいつめ」

ゆりなのベッドにチビチビを押し込んで、俺はそいつの頬を軽くつねった。

「人を待たせておいて熟睡たア、いい度胸してんな。こんにやろ」

「こうひえい……なんでひゅ」

なあにが肯定なんだか。

まったくこいつのせいで眠気がすっかり飛んじまったぜ。

まあ。半分は俺の立ちシヨン事件のせいでもあるんだけど。

「どーすっかなあ……朝までどうやって時間つぶそう」

ゆりなのアホな寝顔を見ながら、ベッドに腰掛けて足をぶらぶらさせること数分。

ぴよんと飛び降りて、

「来やがれ、霊鳴」

と、霊鳴を呼んだ。

もちろんチビどもを起こさないように小声で。

「おっ、来た来た」

そいつはすぐに飛んできて、窓をカチカチと鳴らしてノックする。少しだけ窓を開けると、俺の胸に軽い体当たりをかまし、周りをくるくると回りだした。

犬みたいにじやれてくるこの蒼い宝石には、試作型霊鳴石『式式』なんていう大層な名前がついていたりする。

コロ美から渡された手紙を読んだら、いきなり海の中から飛来してきた宝石。

見た目はサファイア宝石そのままだし、売ればかなりの金になりそうだが——いやはや、その正体を知ると金に換えちまうのはもったいないと誰しもが思うことだろう。

「式式……起動する、イグリネイシヨン！」

起動呪文を唱えると、たちまち蒼い杖へと変化する霊鳴。

普段でも指から一応魔法を出せるつちやあ出せるのだけれども、実

際に戦闘となると強力な魔法が必要になってくる。

その際には、やはり杖による魔力増幅が無いとどうにもこうにも魔法が弱すぎるのだ。

「試作型って頭についてるワリには式式って普通に凄い子ちゃんだな」

しげしげと杖を見ながら言うと、そいつは柄先のサファイアから蒸気をプシューと吐き出した。

まるでエツヘンと胸を張っているかのような反応。

「ゆりなの霊冥との違いがイマイチわからねーぜ」

ゆりなも俺と同じような宝石を持っているのだが、実はよく解っていないかったりする。

黒い宝石という色違いなところもそうなんだけれども、起動呪文も違うわ、杖になった姿も違うわで、名前は似ているがまったくの別物って感じた。というよりも類似品か。

たしか、シャオが言ってた名前は——霊冥石『零式』だったはず。試作型じゃないのか、単にシャオが言い忘れたのか知らないが、どっちにしろ名前的に俺の式式より優れていそうな感じがする。

「待てよ。零と式なら、もしかして間に『壺』もあるんじゃないのか？

っーか、霊鳴シリーズって何個あるんだろう」

その問いにピカピカと光って答えようとする霊鳴。

つつても、光ってるだけじゃあ何が言いたいのか分からないんだけどな。

通訳システムが欲しいもんだぜ。

「ま、いいや。そんじやまっつと」

言いながら杖に跨ると、ふわりと少しだけ浮きあがった。

むむ。ケツがちよつとムズムズするぜ。

一回立ち上がり、スカートを間に挟んでもう一度跨ってみる。

「あー、こっちのほうが乗り心地良いな」

杖を呼んだのは他でもない。ちよつくら空の散歩に出かけてみようかなと、ふと思立ったワケだ。

こんな真夜中なら、飛んでる姿を誰かに見られることもないだろう

し。

気分転換がてら、思う存分空を爆走しまくろうってな。

きつとバイクよりも（乗ったことねーけど）気持ちいいんだろうなア、と内心ニヤけていたのだが。

さっそく飛ぼうとしたところで前につんのめってしまった。

「な、なんだあ？」

なにやらスカートを引つ張られてるような気が……。

後ろを振り向いてみると、そこには俺のスカートの裾をギュツと掴んでるゆりなの姿があった。

「……………」

今にも泣きそうな顔で。

とても不安そうな顔で。

俺を、ジツと見つめている。

「あんれま。もしかして起こしちゃったかい？」

杖から降りて訊いてみるが、ゆりなは何も答えず、ただただ小さな唇を震わせている。

「なんでえい……怖い夢でも見ちゃったってか」

そう言って、ボサボサになってしまっているそいつの髪を撫で付けようと頭に手を置いたところで、

「……………いかないで」

ぽつりと。

それだけ呟いて、俺の胸の中に飛び込んでくるチビ助。

「……………!？」

な、なんだ、この感覚は。

突然、ぐわんぐわんと目の前が歪んでいく。

立ちくらみのようなフラつきと共に、頭の中に妙な映像が流れ込んできやがった。

こいつは。この麦わら帽子をかぶった子どもは誰だ……？

ぼろぼろと涙を零しながら、隣にいる少年の短パンを掴むモノクロ少女。

だ、誰だよ。こんなヤツら知らねエぞ……一体なんなんだこりや。

そう戸惑っていると、映像の中の少年が、麦わら少女を力強く突き飛ばした。

それはまるで。

振り払う、というよりも。

拒絶する、というような。

音無しの白黒映像だったのに、突き飛ばす音だけはやけにハッキリと聞こえた。

草むらに投げ出された少女は、泥で汚れた両手で涙をグシグシと拭い——走り去っていく少年に向かって、こう叫んだ。

『お兄ちゃん、いかないで』
と。

その途端、ぼやけていた視界が徐々に現実を映し出していく。

「どったの？　しゃっちゃん……とつても、苦しそうだよ」

やがて一番に目に映ったのは、心配そうなゆりなの顔だった。

俺に抱きついたままのそいつを——腰まで伸びている長い黒髪を見て、俺はあの麦わら少女を思い出していた。

「似てる……」

「ふえ？　似てるってなあに？」

「あ。い、いや何でもねエゼ。てか、行かないでってどういうことじゃ」

そう訊ねると、そいつはまたまた泣きそうな顔になって、

「あ、あのね……。夢の中でしゃっちゃんがね、時計がたくさんあるお花畑でね、杖に乗ってね、バイバイって言ってね、お空へ飛んで行って消えちゃったの」

言葉をつまらせながら言うそいつに、俺は眉を寄せた。

おかしい。どうして、ゆりなが時園のことを知ってるんだ。

そういえば時園にいる俺と目が合ったような……あの時、クロエからあの奇妙な花畑について教えてもらったのか？

「それで、それでね。びっくりして起きたらね、しゃっちゃんが杖に乗ってたからね、飛んでいっちゃうって。いなくなっちゃうって。だから、だからボク……」

言いつつ、俺の腰にまわした手を震わせるゆりな。

……なるほどねエ。怖い夢つつうのは、あながち間違いないやなかったわけね。

しかしながら、と。俺はチビ助の背中をぽんぽん叩いて、

「言ったじゃんか。最後まで宝石集めを手伝うって。もう忘れちゃったのかイ?」

「ううん。忘れてないもん。だって……しゃっちゃんがボクのことを最後の最後まで守るって言うってくれたとき、すっごく嬉しかったんだもん。絶対に忘れるわけないよ……」

鼻をすすりながらギュツと力を込めて抱きしめてくるチビ助に、俺は肩をすくめた。

「だったら少しは信じてくれないかねエ。散歩へ行こうとするたんびに掴まれちゃあ、いささかにしんどいぜ」

「ふええ!? お、お散歩に行こうとしたの?」

慌てて手を離れたそいつの頭に式式の先端をポコツと当てて、

「つたりめーだろオ。いまさら帰れるかってんでえい。はあ……俺様ってば信用が無いんだねエ。いやはや悲しいぜ、まったくもって」
なんて盛大にため息をついてみたりして。

「あわわわ。ち、違うもん! ボク、しゃっちゃんのこと信じてるもんつ。ホントだよっ!」
と。

顔を真っ赤にして意気込んでいるところ悪いのだけれども……。

「あのさア。信じてるんなら、スカートから手を離してくれない?」

片手どころか今度は両手で俺のスカートを掴んでいるゆりな。

よっほど力が入ってるのか、半分くらいずり落ちてしまっている。

「ううーっ」

「ううーって唸られましても……」

「だ、だってだってえ……!」

いくら寒さに耐性のある水の魔法使いとはいえ、さすがにパンツ丸出しで飛ぶのはどうかと思うし。

つーか、寒さに強かろうが弱かろうが、フツーにそれは恥ずかしい

事この上ないので、

「いい加減にしてくれよオ。あんまりワガ……」

言いかけて、ハツと俺は口をつぐんだ。

あ、あぶねえあぶねえ。チビ助にとつて『ワガママ』というワードは禁句だったんだ。

何故かは分からないが、言っちゃったら最後。発作というか、過呼吸になっちゃうようで——さすがにおいそれとは口に出せない。

あの黒猫だけはその理由を知っているようだが……。

そういえば——さつき『いかないで』つて言われた俺も似たような状態になったな。

トラウマなんて面倒なモンは今まで生きてきて一つも無かったはずなんだけれども……。

うーむ。あの息苦しさと手の震えは、トラウマじゃないというのなら一体なんだったんだろう。

「しやつちゃん？ 何を言いかけたの？」

「……えっ？ あー。そ、それはだなア」

きよとん顔で訊いてくるそいつに、俺はとつさにこう言ってしまった。

「あんまりワガハイを困らせるでない、と言いたかったんだ」

「……………」

口をぽっかり開けるといったハニワ状態で停止するチビ助。

ま、まあ。さすがに我輩は無いよな……なんていささかに後悔していると、

「ぶぶっ！ しやつちゃんがワガハイって言うの、めっちゃんこ似合ってるっ。漫画に出てくる魔王さんみたいで、かっくいー！」

いやいやいや……似合ってるねーよ。

ていうか、似合ってたまるかってんでいい。

「冗談に決まってるんだろ！ ったく、『ワガハイ』なんて実際に言うヤツいねえっての」

「……えっ。でも、しやつちゃんつてたまに『オレサマ』とか言ってたかったっけ。さつきも言ってたよーな」

うぐつ。また痛いところをピンポイントで突いてきやがって……。
「お、『オレサマ』は俺の居た世界じゃあ当たり前に使われてたからいいんだよ」

「えーっ、そうなの？」

「そうなのっ！」

唇を尖らせて首を傾げるといった、未だに納得がいつてない様子のゆりなだったが、このままグダグダ言い合ってたら朝になっちまうぜ。

なので。そいつがスカートから手を離れた今の際に、と。

俺は霊鳴に跨って窓を勢い良く開けた。

「んじゃ、俺様は空の散歩に行きますんで。チビ助は明日の学校に備えてちゃんと寝とくよーにっ。寝坊しちまっても起こしてやんねーからな」

そう言うと、そいつは意外にスッキリとした笑顔で、

「えへへー。ボク、お寝坊したこと一回も無いから大丈夫だもん。心配してくれてありがとねっ、しゃっちゃん。行ってらっしやい、だよ！」

と。あっさり手を振ってくれたもんだから、つつい、

「……い、行って来ますんで」

俺もちっちゃくバイバイを返して空へ舞った。

第七十七石：ニヤンちくししょうめ！

「うっひょーっ！ 気持ちいいーっ！」

おおよそ午前四時過ぎ。

未だ静寂に包まれたままの夜空を全力で翔け抜け、俺は月を仰いだ。

「こりゃあ、バイクなんざ目じゃねえぜ！ なあ、試作型ちゃんよオ」呼びかけに、青いフラッシュと大量の水蒸気で応える霊鳴。

そいつの宝石部分を一つ撫で、少しでもスピードを緩める。

「いやはや、しっかしまあ。この街も中々にノンキなもんだねえ。ホバーやダッシュ、コピーと立て続けに化け物どもが暴れたつづうのに、平気な顔してやがるぜ」

杖に跨ったまま夜景に彩られた街を見下ろしてみるが、どいつもこいつも今まで通りの生活を続けている。

ゆったりと往来する車。バイクを止めて缶コーヒーを飲んでる新聞配達のおんちゃん。せつせと作業着姿で玄関を掃除するジイさん。「へへっ。まさか自分たちの頭上で魔法使いとバケモンがドンパチを繰り広げていたなんて……夢にも思わないだろうねエ。それらしい被害も出てないみたいだし」

と、街をぐるりと見渡す。

クロエが言うには模魔のランクや攻撃タイプか否かで街への影響力が変わるらしい。

ええと、ホバーがCで、ダッシュがEだったか。どっちも低ランクだし、『停空飛翔』と『疾駆』つつう補助型の石だもんなア。

それくらいじゃあ、街へのダメージは無いに等しいようで。せいぜい強風が吹いた程度か。

と思ったら、コピーが投げまくった瓦の山を見て、ウォーキングに動しむバアさんが「あんれまあ」と驚くくらいには被害を受けていたみたいだ。

ま。これは単純にコピーのランクが高かったからと考えて間違い

ないだろう。

いくら能力が攻撃寄りじゃないとはいえ、ランクBの最強とくりやあ、それなりに影響するだろうし。

「……って、なにをマジメに考えてんだか。アホらし」

やれやれと軽いため息をついて、俺は長い髪をかきあげた。

ランクがどうのとか、影響力がうんたらかんたら。模魔、七大魔宝石、霊獣。魔気力、集束、裏束とやらに再点火——

そんなめんどくせエ造語たちのことを考えたくねーから空を爆走していたつつうのによオ。

「まったく……いつから俺はこんなマジメちゃんになっちまったんだか。」

「あーあ。やめだ、やめ。今日の散歩はココまでエイ」

頭の中でゴチャゴチャと組み立てていた『魔法少女のまとめ』と書かれた積み木の山に、十六文キツクをぶちかますようイメージして、俺はスイーつと降下した。

「よっこいしようち、ってな」

駅の屋根上に着陸して、大きく伸びをする。

「ふーっ。でもまあ、毎日の日課にしてもいいくらいスカつとしたぜ。めんどくせエことを忘れるには飛ぶのが一番だな。ちよいとばっかしケツが痛いけれども」

えーつと。この駅は、確かゆりなの家に一番近い駅だったよな。

屋根から身を乗り出して駅看板を見ると、そこには『南流山』と書かれていた。

おお、よかつたよかつた。調子に乗って全速力で飛びまわったせいか、霊鳴の中の霊薬が尽きそうだったんだよな……。

この駅からだったらゆりなの家まで歩いて五分くらいだから、飛べなくなってもなんとか家に帰ることが出来るぜ。

なんて安堵していると、妙にデカイ笑い声が聞こえてきた。

「だっはっはー！ マジかよ、それでそれで？」

「んでさー、そのセンチ顔真っ赤にして俺のこと睨んでくるワケ。あー、いいんですか？ 今のご時勢、生徒を叩いたらヤバイんじゃないな

いッスかって言ったらプルプル震えてやんの！」

「やつべー、超想像出来っしー！ ウケっしー！」

駅のそばにあるコンビニの前でヤンキー座りをしている三人組だった。

中学生なのか、男二人は学ランを着ていて、もう一人の女の子はブレザーを着ていた。

喋っては手を叩いて笑いあうそいつらに、俺はフツと頬を緩める。

「なんでえい。この世界にも俺と似たようなヤツらがいるのか」

制服の着崩し方のセンスやら髪型の流行りの違いはあれども、バカやってますってカンジは俺が居た世界と変わらないようだな。

そいつらに倅い、俺も久々にヤンキー座りをして、

「はあ……暇そうなあいつらが羨ましいぜ」

と。頭をポリポリかいた。

数日前までは俺様もあんな感じだったのによオ。いきなり異世界に飛ばされるわ、こんなガキンちよ姿に、しかも女の呪いをかけられるわで……。

そんなもって魔法少女になって敵と戦えつつーオマケつきだぜ。人生どうなるか分かったもんじゃねーよなア。

なんて月を見上げながらしみじみとそんなことを考えていると、

「お、おいいい！ 駅んところに女の子が座ってんぞー！」

げげっ、そいつらの一人が俺を見つけたらしい。

短髪の男が「アレ見ろよ、アレ！」と両隣の仲間の肩を揺すってる間に、俺は霊鳴に跨って脱兎の如く反対側へと飛んで逃げた。

「うつひゃあ、危なかつたぜ」

まさか、あいつらこっちまで追いかけてこないだろうな……。

一応まだ始発前らしく、駅のシャッターは閉まつてるから、こっち側には来られないとは思っただけれども。

そう息を切らしながら冷たいシャッターに頬を当てて聞き耳を立ててみると、

「マジだよマジ！ 看板の近くで白髪の外人みたいなメガ可愛い小学生くらいの子が座ってたんだって！ しかもパンツ丸出しのヤ

ンキー座りで！」

「はあ？ お前そういう趣味があったのかよ。マジ引くわー」

「ちげえよ、バカ！ 引く前に驚けよ！ こんな時間に、しかもあんな場所に子どもがいるワケねーだろっ」

「あ、そーいえば確かに……」

「や、やべっしー！ その子もしかして幽霊じゃね？」

「幽霊って、もしかして飛び込み自殺した霊とか!？」

「マジかよ!? 俺ら、その子にとり憑かれたんじゃね！ お、お、お祓いしてもらいに行こうぜ！」

「死にたくねっしー！」

「うわああっ!!」

大騒ぎして走り去ってしまったのはいいのだけれども……なんつーかスゲエ酷い言いようだな、オイ。

「ぼーろオイ。俺は幽霊じゃないっつーの……ちゃんとした人間でえい」

いささかに傷ついてトボトボと下を向いて歩いていると、肩にドンと何かがぶつかった。

「あら、お嬢ちゃん。大丈夫？」

「あ、すんません……」

そう言い、一歩退いて顔を上げたのだが――
「……うわわっ」

俺の目の前に二つの巨大過ぎる山があった。

どうやら、ぶつかったのは女性だったようで、ピチピチの白いタンクトップに黒いホットパンツという露出度の高い服を着ていた。

十代後半ないしは二十代前半だと思っただが、カジュアルな格好なものにも関わらず凄まじい色気を放っているお姉さん。

乱雑にセットされた黒髪のショートヘア（何故か左側だけやけに伸ばしている）に、ワインレッドのやや切れ長の目。口にはタバコを啜えている。

気だるそうに壁にもたれかかり、これまた気だるそうに煙を吐き出すその姿は、まさに俺の理想の女性像そのものだった。

「どうしたの、ポーっとして。熱でもあるのかしら」

「い、いえ、大丈夫です」

「あら、そう？」

「そ、それにしても……。俺はぐくりと唾を飲み込んで必死に目線を上げるよう踏ん張った。」

「なんせ気を抜けば、すぐに大きすぎる胸に吸い寄せられてしまうワケで——あの大きさ、ゆりなお姉さんよりも数段上回ってるぞ。」

「まあ。そんなにジューっと思つめちゃって。お嬢ちゃん、私の胸が気になるの？」

「や、やべえ。いつの間にか目線が釘付けになっちまっていたようだ。」

「うう。仕方あるめえ、これが男のサガってもんでエい。」

「え、あ、いや……」

「しどろもどろになって言葉を詰まらせていると、」

「ねえ……触ってみる？ 興味あるんでしよう？」

「なんて言つて、両手でギュッと寄せて胸を強調するお姉さん。」

「下着をつけていないのか、たゆんつと柔らかかそうに、しかしロケツトのように形良く突き出されたそれに、俺はただひたすらに困惑してしまう。」

「ひえええ。悩殺とは、まさにこのことだぜ……じゃなくて！」

「きよ、恐縮だけれども、俺はあの、男だから、そーいうのはダメっつうか、やっぱり好きな人同士で、ちゃんと順序を守らなきゃっつーか、親父が、えっと、あのその……」

「あわあわと手を振りながら、半泣きになっている俺に、」

「……にや、にやーっはっはっは！ もうダメだ、あーもう限界だぜ！」

「ひーっ、腹いてえ！」

「抱腹絶倒とばかりに、いきなり腹を抱えて大笑いするお姉さん。」

「へ……っ？」

「なにがどうしたもんだか。」

「状況が掴めずに、アホ毛をハテナマークにひん曲げた俺に、
「にっしっし。これを見てみそ」

そう言つて、俺のアホ毛に対抗するかのように頭のとっぺん、左右の髪の毛をつまむお姉さん。

その途端、一瞬のうちに髪の毛がふわふわの猫耳になつたかと思うと、今度はホットパンツのお尻部分からニユルリと黒い尻尾が飛び出したではないか。

「ま、ま、まさかお前さん……クロか!？」

口をパクパクして驚いている俺の鼻先に、尻尾の先をちよこんつと乗せると、

「にやつはー! ご明察つてね。いやー、シラガ娘があまりに可愛い反応するからさ、演技に力が入つちまつたぜ」

人型のクロエは、してやったりな憎たらしい顔でタバコを啜え直し、

「にゃはっ。オレに惚れんにゃよ〜?」

と。

わしやわしやと乱暴に俺の頭を撫でやがった。

くっそお……こんの、ニヤンちくしようめ!

第七十八石：シャオとクロエ

「なあ、機嫌直せつてば。オレが悪かったって」

そう言つて自販機から缶コーヒーを取り出すクロエ。

あつたかいそれを俺の頬にそつと当てて、

「ま。ま。これでもグイッと飲んでイヤな事はすっぱり忘れようぜ」

八重歯を見せて笑うそいつに、俺はフウッと息をついた。

「……つたく、しようがねーな」

喫煙所の近くにある鉄製のひんやりとしたベンチに腰かけ、俺たちは二人一緒にコーヒーを呷った。

甘いミルクの味が一瞬のうちに口の中に広がり、それと共にじんわりと体が温まっていく。

普段は缶コーヒーなんてもんは邪道だ、家で沸かしたほうが安いし美味いに決まってるってと親父に口うるさく言っていた俺だったが……。

「こりゃあ格別だぜエ」

寒空の下で飲むそれは、素直に美味いと思えた。

あのコピートを倒せたこともあいまつてか、甘くほろ苦いコーヒーが喉を通るたびに、言いようのない達成感が込みあがってくる。

……そういや、『一仕事を終えたあとに飲む缶コーシーの美味さをお前さんは知らねエだろう』と毎回親父に言い返されてたっけ。

さつき見た新聞配達のおんちゃんも美味そうに飲んでたし……こりゃあ帰つたら親父に謝らないといけねーな。

まあ、それはともかくとして。

「あのよオ。お前さんにちよいとばっかし訊きたいことがあるのだけれども」

見上げていた夜空から視線を外して、俺は隣でブラックコーヒーの香りを楽しんでいる黒猫に話しかけた。

「おー。なんだい子猫ちゃん。今、お姉さんはとっても良い気分だから、なんでも答えてあげちゃうぜ」

すつとんきような声で返すそいつに、

「時園のことについて何か知らねエか？」

魂を引っこ抜かれた際に迷い込んだ花畑。

時計が無数に浮かんでいる不気味な世界。

そこにはシャオとネムという似た格好の、しかし、似ても似つかぬ二人の少女が居た。

二人の話しぶりから察するに、その時園こそがピースの住んでいる世界みたいなのだけれども――

「へえ……そんなことがあったのか。あいにくだが、ネームレスなんてヤツも時園つてのも知らねえな」

時園で体験した出来事を話すと、そいつはそうぶつきらぼうに言い放ち、もう一度タバコに火をつけた。

煙を吐き出したその冷たい横顔に――先ほどの飄々とした気の良いお姉さんとは真逆のそいつに、俺は違和感を覚える。

積もり積もった違和感。

ところどころでこいつは言葉を濁したり、妙なことを呟いたりしているような……。

黒猫クロエ。正確には猫じゃなくて虎みたいだが、仮の姿だどう見ても猫にしか見えないから俺は猫ということにしてる。

ま。元の姿に戻ったら完全に黒虎さんだけでも。

シャオ曰く、こいつにもコロナと同じように『クロエ・ザ・マンデイ』という長つたらしい名前があるようで。

もちろん、これまたコロナと同じく、七大魔宝石の一つだったりする。

藍色の宝石――壱番石であるラピスラズリに封印されていた『雷』の厄災を司る霊獣。

どういった経緯があったか知らないが、俺がこの世界に来たときにはとつくにゆりなとコンビを組んでいた黒猫。

逃げ出した霊獣の一匹ではあるが、石の捕獲について色々と助言をくれたり、入って間もない俺に魔法使いの仕組みについて教えてくれたりと、かなり友好的な霊獣だ。

しかしながら、と。俺は心の中で首を傾げる。

どうも、こいつの言動にはいささかに不明瞭な点が多すぎる。

時園のことだつてピースが住んでるところなんだし、こいつがその存在自体知らないのはさすがにおかしい。

コロ美ならともかく、ピースにとって『特別』な存在であるクロエが知らないハズがない——

「ホントかい？ お前さんが知らないとは、いささかに思えないのだけれども」

なおも食い下がる俺に、

「だあら知らねーつて。ほら、死の間際に変な景色みるつて言うじゃん。臨死体験つての？ アレだろ、アレ」

と。冷たい表情のまま、タバコの灰を空いたコーヒー缶の中へ落とししたところで、

「じゃあ、別の質問だ。コピーを倒したあと、俺の目の前にシャオと一緒に現れたよな。……なんで、あいつの肩に乗ってたんだよ？」
そう。

時園について知らないならそれでもいいし、言いたくないつてんなら別にいい。

だが、俺が眠りに落ちる瞬間に現れたシャオに——そいつの肩に乗っていた理由はどうしても知りたかった。

なんとも言えない、複雑そうな表情で俺を見下ろしていた黒猫——
他はいいとしても、これだけは看過することが出来ない。

どうしても……答えてもらわねエと。

すっかり冷めてしまったコーヒーを両手で握りしめながら、俺は真剣な眼差しをそいつに向ける。

すると、そいつはピクツと猫耳を動かしたかと思うと、とても驚いた表情で、

「……なに、言つてんだあ？」

と、俺の目を見返した。

クロエは、長く伸ばしてる方の髪の毛を指先で弄るなどして少しだけ考える素振りを見せたのち、フツと自分の影に視線を落として、

「おい、ツン子。おめえはどう思うよ」

言つて、何故か影に向かってタバコの煙を吹きかけるクロ。

するとどうだろう、

「けほっ、けほっ！ な、なにすんのよ……っ！」

なんと。シャオが影の中から咽ながら、ひよっこりと頭だけ覗かせたではないか。

こいつ、まさかシャドーを使ってずっとクロエの影の中に潜んでやがったのか？

いや。待てよ……もしかしてこいつら、裏で手を組んでいたってオチじゃないだろうな。

「……………」

そう、怪訝なツラでクロエを睨むと、そいつはバツが悪そうに肩を一つすくませて、

「ううっ。そんなに怒った顔しないでくれよ……。ほれっ。ツン子、早く出て来て誤解を解いてくれっ」

と。未だにケホケホと咽ているシャオを引っ張り出した。

第七十九石：霊瞳

「はあ？ 知らないわよ。あんた、寝ぼけてたんじやないの？」

機嫌の悪さマックスといった、むくれ面で棒付きキャンディをペロペロ舐めているシャオメイ。

街灯にもたれかかっているそいつは続けざまに、

「大体さー。どうしてあたしが猫憑きの使い魔なんかと一緒にいなきゃなんなのよ。そんでもってバカてふの顔を見て、三日目なんちやらって言ったんでしょ？ 意味が分からないわよ」

ど、どうしてって言われてもよオ。

意味が分からないのはこっちの方なんだけれども……。

「じゃあ、あの装着してたバイザーはなんなんでもいい。あれも知らないのか？」

「バイザーって、霊瞳のこと？ なんであんたが霊瞳のこと知ってんのよ」

「れ、レイドウ？」

レイメイに続いて、今度はレイドウかよ。

これ以上変な造語が増えるのは勘弁してもらいたいところだけれども——あの黒いバイザーについては少しだけ気になるな。

「うーん……。アレを被るときー、はつきりくつきり見えるのよね」

「はつきりくつきり見えるってなんでエい。霊でも見えるのかイ？」

それとも服が透けて見えるとか」

そう言うと、シャオは少しだけ頬を赤くして、

「バ、バツカバカじゃん！ そーじゃなくて、ランクとかレベルとか相手の魔気力の数値が分かるようになるのよ。あと、例えばあんたとか魔力のある者が建物の中に隠れても、纏ってる魔気が建物越しに映ったりして丸見えとかさ」

「それは中々に便利そうだけれども……そんなの使わなくてもジユゲムなんたらの能力で相手の場所とか模魔の居場所が分かるんじゃないかかったか？」

「あら、あんた結構物覚え良いわね。そうよ、あたしは夜紅様だから

ねえ。あんな機械に頼らなくても平気なのよ……ていうか、アレを装着すると頭が痛くなるから逆に集中出来ないのよね。ピース様から貰ったときに一回だけ被ったくらいだわ」

食べ終えたキャンディの白い棒を振りながら唇を尖らせる赤いツインテールの少女——シャオメイ。

面倒だからジューゲムと言ってるが、本当は紗華夢 夜紅とかいうピースの片腕的存在らしく、相当な魔力を持っている第三の魔法少女。

第三とは言っても、俺とゆりなをかなり嫌っているらしく、一人で石集めをしている……のかは知らねえ。

だって、七大霊獣も憑いてなければ、霊鳴の封印も解いてないんだからな。

じゃあ何をしているのかって言えば、ただ俺たちにちよつかいを出してるだけだったりする。

杖も厄災の力も持っていないし、本来ならそこまで強くは無いらズなんだが……。

俺はチラつとシャオオの中指にはめている黒い指輪と、クネクネと動いてる尻尾を盗み見た。

何故か持っているランクAの模魔シャドーと縦横無尽に動き回る悪魔みたいな黒い尻尾——この二つが凄まじく厄介なんだよなア。

これで霊獣と契約、杖まで使えるとなったら……もはや手が付けられねーぞ。

かと言つて、俺たちと手を組んでくれそうにないし。つーか、俺もこんな性悪なんかと手を組みたくねえし。

こいつのファンであるチビ助だったら喜んで手を組むかもしれないけれど。

いや、あいつの場合たとえファンじゃなくても仲間に誘いそうだな……。

「おい、ツン子。本当にブラックでいいのか？」

そうシャオオにコーヒーを差し出すクロエ。

そいつはどつかりと俺の隣に座ると、今までの俺たちの会話を聞い

てたらしく、

「だとしたら、やっぱりシラガ娘の前に現れたのはオレたちじゃない別人だな。そもそもオレは最後までずっとポニ子の中に居たワケだし」

言つて、再び髪の毛を弄りだした。

「そりゃ、そうだよなあ。うーむ、じゃああいつらは一体……」

「だから寝ぼけてたんでしょ。あたしは途中で帰つてご飯の仕度をしてたもの。わざわざバカてふの寝顔なんて見に行くワケないじゃん」と。毒づきながら缶コーヒーを開けようとしているシャオメイだが、どうにもこうにも力が無いらしく一向に開く気配が無い。

カチツカチツと爪を入れて「うぐぐう」と格闘しているそいつの手から、ひよいっとコーヒーを奪い取つて、

「ったく。ほら」

片手で開けてやると、そいつはムスツツとしたツラで受け取った。

「別に一人で出来たのに……礼なんか言わないわよ」

「うるへー。てめえの心のこもつてない礼なんざ微塵もいらねーよ。いいから黙つて飲みねえ」

「……ふんー」

ぷいっとそっぽを向いて一口飲んだかと思うと、

「に、にがッ」

眉根を寄せて舌を出すシャオメイに、

「にっしし。ほらな、言つただろ？ だあらミルクコーヒーにしとけつて言つたのに」

けらけら笑いながら言う黒猫。

「う、うるさいわねっ！ だってそこにある黄色くて長細いコーヒーって凄く甘いよ。それよりは断然マシだわッ」

「じゃあ紅茶にすればいいのに……見栄張つてコーヒーがイイなんて言うからさあ。はーあ、ポニ子の可愛げを半分くらい分けてやりてーぜ」

「ふーん。貰えるモンなら貰いたいところね。でも、あたしが可愛げを貰ったら、猫憑きはどーなのよ」

「……うっ。やっぱりツン子はそのままが一番ツン子らしくて良いと思うぜ。にや、にやはは……」

「ちよつと、それどーゆう意味よっ」

そんな二人のやり取りを見つつ、俺は少し不思議に思った。

なんなのだろうか、このゆったりとした光景は。

つい数時間前までシャオとクロエは戦っていたハズなのに……。

「ごちそーさま。そろそろピース様も起きるようだし、あたしは帰って寝ることにするわ」

ゴミ箱に缶を入れて、シャドーを呼び出したそいつの後ろ姿に、

「毎週毎週オレの監視ご苦労さんだな。にしし。ま、ただの徒労だと思っケドねえ」

イヤな笑みを飛ばすクロエ。

「どういうこつてい？ 監視つて……」

「につしつし。ピースが起きているときはピースがオレの動きを監視している。寝ているときはツン子がシャドーの中で監視している……つてね」

監視だなんて、なんとも大げさな言葉にいささかに驚いていると、シャオは黒いマントを脱ぎながら、

「……ピース様に命令されたからしているだけよ。徒労だろうがそんなの関係ないわ」

「いやはや。いささかにキツそうな仕事だと思っただけれども」

「週に一回だけだから、別に大変じゃないわよ。どーして監視するか、意味がよく分かんないケド……。まあ、やれつて言うからね」

ツインテールを維持していた髪留めを外したかと思うと、マントと一緒にシャドーの中へ放り込むシャオメイ。

尻尾もスカートの中に仕舞い込んだし……こりゃあ、本当に寝る準備に入ってるのかもしれないな。

そんでもって、ワンピースの姿にロングストレートの髪型になったそいつはブラックホールの縁に手をかけた。

「あ……」

マントを脱いだその姿を——まるで普通の子どものようなその小

さな後ろ姿を見て、俺は思わず声を掛けてしまった。

「な、なあシャオ！」

「……なによ」

こちらを振り向くともせず、気だるげに答えるシャオメイ。

やっぱりあの厳かなマントとヘンテコな尻尾が無いだけで大分印象が変わるな。

これで目の下の濃いクマも消えれば……。

なんてボーっと見ていると、

「だから、なあに？」

イライラした口調のそいつに、俺は慌てて、

「い、いやア。週に一回でも、その……こんな朝まで毎回姿を消してたら親御さんとか心配するんじゃないのかなーって」

テキトーにそんなことを言ってしまった。

どうせ、バツカバカじゃんとかなんとか、いつもの罵倒で返されるのかと思いきや、

「いないわよ、そんなもの……」

シャオはそれだけ小さく呟くと、闇の中へと消えてしまった。

第八十石：仲良しさん記念日

「ふわあくあ」

うらかな春の日差しが差し込む部屋の中で、俺は大きなあくびをブツ放した。

「パパさん、今ので十八回目のあくびなんですっ」

「あー……違う違う。だから今のはあくびじゃねーって。ただの深呼吸でエイ」

言つて、ぺらりとマンガのページをめくると、

「むくっ、さつきから誤魔化してばっかなんです！ あと二回あくびしたらコロナと遊んでくれる約束なのですうー！」

チビ助のベッドの上——うつ伏せ状態で漫画を読みふけてる俺の背中で地団駄を踏むチビチビ。

その心地良いマッサージを受けながら、

「てやんでエイ、今いいところなんだよオ。やっと黒幕が判明するところなんだぜ」

ゆりなのお姉さんから頂いたチョコチップスコーンをほお張りつつ、ハラハラドキドキと俺はさらにページをめくる。

「……パパさんがそういうの好きだなんて、ちよつと意外なんです」

「そういうのって？」

「だって、もつと不良さんが出てくるマンガとかスポーツしてるマンガとかが好きそうないメージだったのに……」

チラリと枕の横にうず高く積まれたマンガを見るチビチビ。

朝から昼までの間に読破したそれには、不良だとかスポーツなどを題材にしたマンガは一つも無かった。

あるのはギャグものだったり、変身ヒーローや勇者が敵をなぎ倒すファンタジーものくらいだ。

というか、ほとんどギャグマンガばかりだったような気がするぜ。

「そりゃあ、そっちのほうが好きだけでもよオ。チビ助がそんなマンガ持つてるワケねーじゃん」

「旧魔法少女さんはスポーツとかあまり好きじゃないんですかね？」

運動神経バツグンそうなのです」

「たしかに運動神経は良いだろうが、それと好きなマンガはあまり関係ないと思うぞ」

むしろ、あいつの本棚に野球だとかプロレスのマンガがビツシリ入ってたらそれはそれでいささかに恐ろしいぜ。

「ま、なんつーか少女マンガが新鮮だからねエ。だから中身がギャグだろうがなんだろうが別に俺は楽しく読んでるけどな」

「今読んでるのもギャグ系なんです？」

俺の背中に跨ったまま覗き込んでくるコロ美に、

「いや、一応恋愛ものんだけど……」

と。マンガを手渡すと、

「ひ、否定。これはなんか違う気が、す、するんです……っ」

見開きいっぱい鬼の形相をした長い髪の女性が出てきたり、数ページにも渡って何も無いまな板の上で包丁をトントンしてる女性が出てきたり、と。

なんともまあ、恋愛とはほど遠い内容になっていた。

「いつひっひ。もはやホラーの領域だよなア、これ」

「旧魔法少女さん、こんなマンガを読んでるだなんて、こ、怖いんです……」

「まあまあ、これでも食いねエ」

すっかり威勢をなくしてしまったチビチビの口に、半分にしたスコーンをひよいっと放り込んだそのときだ。

「……なあに、ボクのこと呼んだ？」

後ろを振り向くと、ニヤリと意地悪そうな笑みを浮かべるチビ助の姿があった。

それを見た途端、

「むぐぐっ!!」

驚きのあまりスコーンを喉に詰まらせたのか、目を白黒させて飛び上がるコロ美。

「わわっ、コロちゃんごめんね！ これ飲んでっ」

きつとお姉さんから渡されたのだろうオレンジジュースの入った

コップを手渡すと、チビチビはそれを一気に飲み干し、「びつくりしたんですーっ!」

俺の背中に強烈なタツクルをかましてきやがった。

「あ、あのなあ。なんでびつくりしたからって俺を攻撃するんでエい」
「うう。パパさあん……」

ぎゅつと両手で俺のキャミソールを掴むもんだから、立とうにも立ち上がることが出来ねエ。

仕方なく、うつ伏せのままベッドの脇に立っているチビ助を見上げて、

「よっ、おかえり。結構早い帰りだったんだな」

そう言うと、そいつはベッドに腰掛けながら、

「うん。今日は始業式だけだったから……コロちゃん、ほんとにごめんなさい」

とてもすまなそうにコロ美の髪を撫でる。

「別に謝ることアねえって。スコーンを食わせたのは俺のほうなんだし。ほれほれ、めんどくせエことでイチイチ機嫌悪くすんなってコロ美さんよオ」

ケツをペしペし叩くとそいつはムクつと顔をあげて、

「……旧魔法少女さん、あのマンガに出てくる人みたいで凄い怖かったんです」

「ふえ? あのマングって?」

首を傾げるチビ助に、さっきのホラーマンガを見せると、

「にやはは、これのことかあ」

なんともあっけらかんと笑うチビ助。

「否定っ。にやはは、じゃないんです! 優しい旧魔法少女さんがこんな怖いマンガを読んでるだなんて……意外なんですっ、もう何も信じられないんですっ」

おいおい。いくらなんでも言い過ぎじゃねーのか?

別に誰がどんなマンガ読もうが関係ねエじゃんかよ。

勝手に人の本棚あさって勝手に幻滅してって……ダメだろうよ、それは。

いささかに叱ってやるべきだなと思っっていると、

「でへへー。それね、ボクのお友達の妹さんが貸してくれたんだよう」

何故かニヤけながらチビチビの髪を撫で続けるゆりな。

妹さんとやらも気になるが、その前になんでそんな締まりの無いツラになってるんだア？

やはりコロナも不思議に思ったようで、

「ど、どうしてそんな顔でコロナのことを見るですか？」

「だってだって、コロナちゃんがボクのことを優しい、って言ってくれたんだもん。なんだかとおつても嬉しくて……えへへ」

「……あ」

ああ、そういうことか――

最初は魔法少女はパパさんだけで十分だとか言っただけに宣戦布告してたっけ。

その後もモヤモヤするだとか、本気の魔力を確かめたら倒すとかなんとか言ってたな。

でも、本当のところもうそんな気は微塵もないんだろう。

その気持ちが無意に口について出てしまった……それを恥じるように耳を真っ赤にして俺の背中に顔を埋めるチビチビに、俺はフツと笑う。

「ゆりな、さつきチビチビさお前の机をせつせと片してたんだぜ。そんときなんて言っただと思っ？」

「パ、パパさん言っっちゃメツなんです！」

俺の口を塞ごうとしたのか、慌てて羽を広げて飛んで来たそいつを両手でキャッチして、

「はやく旧魔法少女さん帰ってこないかなって。学校行ってるつまらないんですって、さ」

「うう……」

さらに耳を赤くして俯くチビチビを差し出すと、ゆりなは本当に――本当に嬉しそうに抱きしめた。

「よかったあ。ずっと嫌われてるのかなーって思ってたんだよお。そっか、そうだったんだ……にはは、今日はボクとコロナちゃんの仲良

しさん記念日にしよーねっ」

しやつちゃん感謝デーに続いてまたよくわからん記念日が増えちまったな……。

このままではいずれ三百六十五日、毎日が記念日になっちまうぞ。なんて思っていると、

「記念日にするのは構わないんですけど……嫌いじゃないだけで、別にコロナは旧魔法少女さんのことが好きになったわけじゃないんです。フツーなのですっ」

ゆりなに抱きしめられたまま、ぷいっとなつぽを向くチビチビ。

「素直になれよなア、めんどくせーヤツ」

頬をプニプニ突きながら言うのと、ゆりなはコロ美を高い高いをするように持ち上げて、

「いいよ、フツーでも嬉しいもん。今度はフツーから好きって言ってもらえるように、ボク頑張るからねっ」

「……そんなこと頑張られても困るんです」

わーいわーい、と満面の笑みで高い高いしてるところ申し訳ないのだけれども、俺はさつきから……いや、結構前から引つかかっているコトがある。

それは――

「えーつと、あのさア。恐縮なんだけれども、チビ助って、いつからコロ美のこと『コロちゃん』って呼ぶようになったんだ？」

前はアイスウォーターちゃんとかなんとか長ったらしいあだ名で呼んでいたような気がするんだが。

そんな疑問に、ゆりなは何とも照れくさそうな表情で、

「だ、だって。そっちのほうが仲良しさんって感じだから。呼んじやダメって言われたら直そっかなーって思ってたんだけど、コロちゃんから何も言われないし、こっさりこのままでいいかなって……」

「だよ、さてはてコロ美さんはどう出るっ？」

「……えっ」

そんなことまったく気にしてなかったかのように、きよとん顔でゆりなを見るチビチビ。

しばらく口をモゴモゴしたのち、やがて小さくこう呟いた。

「肯定……そのままでもいいんです。でも、それじゃ不公平なんです」

その言葉に顔を見合わせる俺とゆりな。

「するってえと……つまり、どういうこつてエい？」

「ゴ、コロナも旧魔法少女さん、だなんて長い呼び方にはもうウンザリガニさんなんです……。だから、その、もっと違う呼び方をしたいのです」

違う呼び方ねエ。

俺的にはチビチビがゆりなのことを旧魔法少女さんって呼ぶのは結構気に入ってたんだケドな。

なんつーか、しつくりきてたし。

でも……そうだな。せつかくだし、なんか良いあだ名を考えた方がいいかもな。

と。いくつか候補をあげようかなと思ったところで、目をキラキラさせたゆりながズイツと身を乗り出してきた。

「しやつちゃんが『パパさん』なら、ボクは『ママさん』がいいっ！」「え……」

そいつが身を乗り出した分、いや——その倍は身を引いた俺に、「だってだって、パパさんって呼び方、めちゃくちゃ可愛いんだもん。ボクずっといいなーって思ってたんだもんっ」

両手を胸のところであぐらにして力説するチビ助には悪いが、さすがにそれは色々と誤解を生んでしまいそうなのだけれども……。

もし俺とコロ美とゆりなが三人一緒にスーパーに買い物に行ったとして、そこでチビチビが俺を『パパさん』って呼んで、その隣のゆりなにも『ママさん』って呼んでたら——

い、いささかにマズいだろ、コレ。

どう見てもワケありな三人組みに見られること必至だつて。

そう青ざめる俺を尻目に、

「肯定。それだったら呼びやすいんです。じゃあこれから旧魔法少女さんのことはママさんって呼ぶのです」

「わーいっ、ママさんだあ。かっちょいいー！」

「でもフツーから嫌いになったら、すぐに旧魔法少女さんに戻すんです。コロナの好感度ゲージは気まぐれなのです」

「ふえええ、好感度ゲージってなに!？」

「あ、今のでゲージがちよつと下がってしまいました、旧ママさん」

「ふええん！　なんかすつごく引つかかる呼び方になっちゃったよお」

「気にしないでください。深い意味は無いんです、旧ママさん」

「またゲージが下がった!」

「どうかしたんですか？　旧魔魔ママさん」

「ママママ!？」

勝手に話を進めてる二人。

とりあえずこれ以上『マ』が増える前に、と。

俺はキャツキャツと楽しそうにチビ助をからかっているコロナを抱っこして、

「ほれほれ。今日のお昼ご飯はみんなでファミレスですよー!　っ

て、お姉さん言ってたぜ。はやく着替えておくれ」

ランドセルに制服姿のまんまのゆりなに言った。

もちろん、ため息混じりに。

第八十一石：公園に佇む少女

小学校といえれば大体は私服であり、制服を着用して登校する様はあまり見たことがない。

俺もあの頃は（つつつても、二年前程度だが）テキトーな服に黒いランドセルという、どこにでもいる至って普通の小学生らしき格好で毎日通学路を闊歩していた。

黄色い通学帽子程度はあったかもしれないけれども、堅苦しい制服などとはもちろん無縁の生活。

……なのによオ。

「に、にはは。しゃっちゃん、そんなにジーンと見ないでよう。なんか恥ずかしいかも」

「いいじゃねーか減るもんじゃねーんだからよオ。なんつーかさ……いささかに珍しくてねエ」

「ふえ？ 珍しいって？」

と、小首を傾げるゆりな。

そいつを見ながら俺はベッドに座りなおして足をブラブラさせた。「いやあ。小学生つつうもんはフツー、私服で学校に通うモンだと思っていたからさ。お前さんの学校には制服なんて面倒くせエもんがあるんだな」

言うのと、チビ助はファッションショーのモデルよろしくその場でくるりと一回転して、

「そうだよ。えへへっ、これ可愛いでしょ。ボク、結構気に入ってたりっ！」

「まあ、確かに可愛らしいとは思うのだけれども……」

思うの、だけれども。

なんと言ったらいいものか……。

言葉を選ぶべきかなと思っただが、けっきょく面倒になって最初に頭に浮かんだワードを言い放った。

「お前さんの学校の校長はヘンタイさんなのかイ？」

「えっ、どーして!？」

当然びっくり顔のそいつに、

「だってよオ……そ、その制服はさすがに露出が激しいつつうか、なんつつうか」

そう。

いくらなんでもワキ丸出しというノースリーブな制服はどうかと思おうワケで。

朝はドタバタしてしたからあまりツツコめなかったが……。

やはり見れば見るほどデザインがガキんちよの制服らしくないのだ。

上は赤いリボンとフリフリの付いたゴージャスなデザインの白ブラウス。

反面、下の白いスカートは赤ラインが入ってるだけという、至ってシンプルなデザイン……なのだが、このスカートがまた短いものって。

俺がダツシユと融合したときのコスチュームに比べればまだ丈はある方だが——それにしても短すぎる気がするぜ。

うむう……っと。俺がどこぞの偏屈ジジイよろしく口をへの字にひん曲げて見つめていると、

「そっかなあ？　ボクはこれくらいサツパリしてた方が動きやすくて丁度良いけど」

再度くるっと回ってみせるチビ助。

そしてピタリと俺の正面で止まると、にっこり笑顔でダブルブイサインを繰り出し、チョコキチョコキと動かしだした。

「いやはや。お前さんの頭ん中も中々にサツパリしていらっしやるよ。うで。俺だったらそんな格好で学校に通うなんて、いささかに小っ恥ずかしくて無理だな」

「そんなことないよっ、しゃっちゃんだったら絶対に似合うと思うもん！」

「だから、似合う似合わないとかそういう話じゃなくてさア……恥ずかしいって言うてるの」

言いつつ、ゆりなの丸出しになっている肩にどうしても目が行って

しまう。

俺の視線に気付いたのか、ゆりなは自分の肩をチラつと見たのち、再度こちらへ向き直って、

「えーっ！　しゃっちゃんだったて、その服だどめっちゃんこ肩出てるじゃんっ」

「いやいや、これは一張羅だから仕方ないんだって。他の服持ってねーし、変身したまま過ごそうにもアレもアレで肩出てるしよオ。服の選択肢が多かったら、俺はゼツタイに露出の多い服は着ないぜ」

「ふーん……しゃっちゃんって、恥ずかしがり屋さんなんだ。なんかさー、ホントに女の子になっちゃったみたいだねっ」

なんでそんなに嬉しそうに言うのかよく分からないけれども。

とりあえず、からかわれた気がするので頭に軽い冷凍チョコップをかましておく。

「勘違いすんなよなア、別に女の姿になったから恥ずかしいってワケじゃなく、俺様は男のときから長袖派だったんでえい。まあ、せめて何か羽織るモンがありやあいんだけどねエ」

「ううっ、頭ちべたいよう……。あつ、だったらアレがあるよ」

そう言つてダンスの中をぐそそし始めるゆりな。

アレとは何だろう、と。腕を組みながら待っていると、やがて奥の方から新品の布のようなものを引っ張り出して、

「じゃっじゃじゃーん!!　これなあんだ？」

「……？」

自慢げに突き出されたはいいが、ただの真っ白い布に見えるぞ。

赤いライン模様が入ってるし、スカートか何かか？

「ぶっぶー。これはねー、こうやるんだよっ」

と。ふわりとその布を肩に巻いたところで、

「もしかしてケープみたいなのやっ？」

「あつたりー！　この制服はねー、春と夏用なの。でねでね、春はこのケープを付けるんだよっ。夏は外すんだってさ、凄いつしよー！」

金色のボタンを留めながら言うチビ助に、

「……おもいつきしダンスの奥から出したんです。新品みたいなんで

す」

いつの間にか俺の膝の上に陣取っていたコロナがぼそりと呟いた。そうなんだよなあ……。どう見ても使った形跡ゼロって感じた。

「まつ。どうせゆりなことだ、『ボクは寒さなんかへっちゃらだから、ケーブなんていらないんだもんね！』とか言ってる今更でずつと使わなかったんだろうさ」

「あ、ありえるんです……っ」

俺の言葉にコクコク頷いてるコロ美の鼻頭に、ゆりなが人差し指を突きつけた。

「ありえないんです！ あのさー、二人ともボクをなんだと思ってるのっ」

「えっ。なんだと思ってるのって言われましても……」

ついコロ美と目が合ってしまう。

うーむ、ここは正直に言うべきかねえ。

「夏でも冬でもランニングに短パンって格好で遊び回ってそうないメージ……かなあ。もちろん、常時虫取り網と虫カゴを小脇に抱えてよオ」

「です。コロナもパパさんと同じ意見なのです」

「ひっどーい！ ボクだって女の子だよ、そんな格好するの夏だけだもんっ！ 冬はちゃんとセーター着てるし、マフラーも巻いてるんだからねっ」

……夏だけとはいえ、マジでそういう格好してたんかい。

などというツツコみは心の中だけに留めておいて、そろそろどうでもいい会話に終止符を打つべく、

「まあまあ。それはともかくとして、はやく着替えに行っておくれ。いささかに腹がグーペコだぜ」

いつまでたつても制服姿——ましてやケーブという装備までプラサされたそいつに着替えを促すと、

「あつ、そうだった！ えへへ。お外でご飯食べるの久しぶりだよ。なに食べよつかない、この前はハンバーグ食べたから今日はナポリタンにしよつかなあ」

なんて。いそいそと目の前で着替えをおっぱじめやがったではないか。

いやはや、まったく……。俺は一つ肩をすくめて、

「ちよつとちよつとお前さんよオ。こんなところでいきなり着替えを始めないでくれよ。……つたく、これだからチビ助は——」

そう言いかけたところで、

「こんなところじゃないよつ、ここはボクのお部屋だもんっ！　いつもここで着替えてるの!!」

「……は、はい。ごもつともで」

ううっ。ガオーツと怒られてしまったぜ。

ぷいっその後ろを向いて着替えを進めるそいつの背中をみながら、俺は改めてゆりなが契約したのは猫じゃなく虎なんだなと思った。

だって、あのド迫力だけ。俺の全身がビリビリと痺れちまつてるほどだし……。まあ、これはただ単に、目に見えない怒りの放電を喰らっちゃまっただけかもしれないが。

「しゃっちゃんー！」

さっさと洋服に着替え終えたゆりながこちらに振り返った。

いつの間にかポニーテールへと結わえられた髪の毛の揺れる動きを、なんとなしに目で追っていると、

「……………」

無言で右拳をグーにして俺へと向けるチビ助。

なんだろう。腹パンでもされるのかな……。……。

そう、いささかにビリリ始めたところで、

「これ、最初にお店の人に見せてねっ」

言って開かれた手のひらにはファミレスのクーポン券が乗っていた。

「なんだこれ。……ドリンクバー半額う？」

「うん。それね、一人一枚ずつ最初の注文のときに出さないとダメなんだって。この前、お会計のときに出したらダメって言われちゃって、お姉ちゃんすつごくガツカリしてたの」

だから今度こそはゼツタイに半額にしてみようんだ、と。

鼻息荒くして意気込むゆりに、俺は思わずプツと吹き出してしまった。

「もーっ、笑い事じゃないんだよ！ ボクは真剣なんだからねっ。しやつちゃんもコロちゃんもみんなで力を合わせなきゃ！」

「オーケイオーケイ、わかりましたんで。半額と聞いちゃあ、俺だって黙っちゃられないぜ。なあ、チビチビ？」

「肯定なんです！ お金は大事大事だってお姉ちゃまが言ってたんです」

というワケで。

三人一様にクーポンを握り締めた俺たちは、いぎファミレスへと向かった——のだけれども。

その道中で、俺は思わず立ち止まってしまった。

「……あれは、まさか」

小さな公園の真ん中、簡素な一人用のブランコに乗っている少女。

紫色のショートカットに、印象的な赤紫の瞳。

漕いで遊ぶこともせず、つまらない楽しいなどの一切の感情を見せない無表情な顔で地面に視線を落としているそいつは——時園で出会ったネームレスという子どもと瓜二つだった。

というよりも。どう見てもネムにしか見えないのだが……。

「あつ」

ふと、その少女が顔を上げ、つい目が合ってしまう。

無表情なツラはそのままに、二回ほど無言で瞬きをするネム。

ん？ いや、待てよ。

ネームレスはもつと髪が短かったような気がするぞ。

確かにこの少女はショートカットだが……なんか微妙にあいつより長く感じるぜ。髪型が少し違うからかねエ？

と。そこまで考えて、俺はあるデカイ間違いに気が付いた。

そーいやネムって右目に黒い眼帯をしてたじゃねーか。この子は眼帯なんてもんつけてねえし。

い、いやはや。あやうく声をかけちまうところだったぜ……。

「しやつちゃんちゃん！ どうなされましたかーっ？」

はるか前方で俺を呼ぶ声。

その声のする方に顔を向けると、お姉さんが心配そうな顔で大きく両手を振っていた。

「あ、すんません！ いま行きますんでっ」

そう、駆け出そうとしたのだけれども。

やっぱり気になるモンで、もう一度だけブランコの方を振り返ってみる。

しかし——そこには誰も居なかった。

「あんれエ……う？」

かすかに揺れているブランコに後ろ髪を引かれたのも一瞬。

早くしろと騒ぎ立てる腹鳴にたまらず、俺はその場を立ち去った。

第八十二石：なずな

「わーい、飛行機のおもちやが付いてるんです！」

運ばれてきた洋風お子様ランチを前にして、コロナが目を輝かせて言った。

「パパさん、ほらほらっ」

よつぽど嬉しいのか、隣に座ってる俺に体当たりをぶちかましなが
ら飛行機を見せつけてくるそいつに、

「わーった、わーったって。ったく……他のお客さんの迷惑になるだ
ろうがよオ」

ペコンと一発デコピンをかましておく。

もちろん、周りにゆりなのお姉さんや他の客がいるため、今回ばか
りは氷魔法は付与されていない普通のデコピンだ。

……一般人に俺たちが魔法使いってバレるわけにはいかねーから
な。

「えへへ。よかったね、コロちゃん！ いいなく、ボクもおんなじお子
様ランチにすればよかったかも」

「あらあら、まあ。なんて可愛らしいのでしよう。ゆっちゃんと、
しやつちゃんちゃんところこつちゃんとお外でも一緒にこうしてご
飯を食べられるだなんて。愉快適悦なのです……っ！」

どうやらチビチビをたしなめるのは俺だけのようで、目の前に座つ
ている久樹上姉妹はニコニコ笑顔で俺たちのことを見ているだけ
だった。

相も変わらずというか、なんというか……。

俺は山菜ご飯と松前漬けと一緒に口の中へ放り込みながら、お姉さ
んをチラつと見た。

ゆりなよりもいささかに短い黒髪に、パツチリとした大きな瞳。

いつもは後ろで縛っているのだが、今日はお出かけ用の格好の為
か、髪を下ろしている。

といつても、ただそのまま下ろしてるだけじゃなく、青い鳥の羽の
ようなヘアピンで髪を留めていた。

そういえば縛っているときも似たようなヘアアクセを付けてたっけか。

にしても……この人は普通に髪を下ろしてたほうが可愛い気がするぜ。

後ろで縛っていると、どうも高校生というよりも若妻チックな感じがして——いや、待てよ。

と。俺は黒豆をつまむ手を止めて一つ思う。

考えてみりゃあ、セーラー服を着ていたから高校生なのだろうだと勝手に決め付けていたが、本当は違うのかもしれないエぞ。

実は二十歳過ぎていて、アレはただの趣味だという可能性も……。なんて、いささかに失礼なことを考えていると、

「はれっ？　しゃっちゃんちゃん、お口に合いませんでしたか？」

楽しげに今まで俺たちの食事を見ていたお姉さんが不思議そうに首を傾げた。

ううむ。この際だから、色々と訊いておいたほうがいいのかねエ。

これから同じ屋根の下で暮らす仲だつてエのに、名前もまだ知らないってのはさすがにどうかと思うし。

つつても、どう訊ねたらいいものやら……。家族の長に向かってあまりズケズケと質問するのも——

「パパさんが、ママお姉ちゃんのことを知りたがつてるんです」「えっ!？」

コロ美の突拍子も無い発言に、俺とお姉さんが同時に声を上げて驚いた。

こ、こいつ、まあ俺の心の中を勝手に読みやがったな。

ジトつと睨むと、そいつはオムライスの旗を引っこ抜きながら、「んーと。名前なんていうんだろうとか、歳はいくつだろうとか、きつ

と二十歳くらいかなーとか、だったらセーラー服は趣味なのかなーとか。いっぱい訊きたいことがあるみたいなんです」

お、おいおい！

「こるア！　失礼だろうがつ、このバカチビ！」

慌ててコロ美の口を塞いだのだが、そいつは俺の腕からスルツと器

用に抜け出して、

「むーっ。パパさんが訊きにくそうだからコロナが代わりに訊いてあげたんです」

と、頬を膨らませて反論しやがった。

「あ、あのなあ。訊き方ってモンがあるだろうよオ……」

「……………こっちゃん」

ぼそりと呟き、いきなりスクツと立ち上がるお姉さん。

げげっ。こりやあ、いささかにヤバイ雰囲気だぞ……。

こういう穏やかな人って、怒らせると凄まじく怖いイメージがあるんだが――

「もう一度、おっしやって頂けますか……？」

ひええ。恐怖に思わずゴクリと喉が鳴ってしまったところで、

「ママお姉ちやまつて、も、もう一度言ってください……っ！」

両手をギユツと握って全身からハートを振りまくお姉さんに、ずっこけそうになる俺とコロ美。

な、なんでエイ。びびって損したぜ……。

「だつてさ、コロちゃん。言つてあげなよう」

ナポリタンをもぐもぐしながら、のほほんと言うチビ助。

何がなんだか分からないといった様子のコロナだったが、お姉さんの期待の眼差しに押されるがまま、

「こ、肯定……。えっと、ママお姉ちやまつ？」

そう言った途端、

「はうっ!!」

へなへなとその場に座り込むお姉さん。

骨抜きとはまさにこのことだろうな……。

「嗚呼。なんて、なんて可愛らしい響きなのでしょう……っ」

ぽへっつと幸せいっぱいの顔で、運ばれてきたチーズドリアにタバスコをドバドバかけつつ、

「あ、しゃっちゃんちゃん。私の名前はですね、風蘭といいます。正真

正銘、十七歳の高校生なのですよー」

そういえばチビ天のやつ、お姉さんのこと『ふう姉ちゃん』とか言っ

てたっけか。

ふうらんだから、ふうねーちゃん——か。なるほどねエ。

胸につつかえていたものが取れたようで、なんかスッキリしたぜ。

「ね、ね。しゃっちゃんちゃんは私のことをなんて呼んでくれるのですか？」

「へ？」

なんて呼ぶも何も、フツーにお姉さんって呼ぶつもりなのだけれども……。

先程よりもさらに勢いを増したハート乱舞に戸惑っていると、

「うふふ。ママって、呼んでもいいのですよっ」

「い、いやいやー！ 今まで通りで勘弁してくださいませ」

こればかりは、さすがに即答してしまった。

いくらなんでも三つだけ年上の人に向かってママは無いぜ。

赤面しつつ、ご飯をガツガツ食べてると、

「あらあら、まあまあ。照れちゃって、可愛らしいのです……っ。あ、お弁当がついてますよっ」

ひよいっと俺の頬からご飯つぶを取って、そのまま自分の口に運ぶお姉さんに、ますます顔が熱くなってしまふ。

ううっ、この人には一生勝てる気がしねエぜ……。

と。そのときだった。

「……くっ！」

ピリツとした痛みがこめかみに走る。

なんだア？ と思っていると、隣のコロ美が俺のスカートを引つ張って真剣な顔で頷いた。

前を見ると、ゆりなも同じく眉根を寄せて俺に目配せをしている。

テレビの中のシャオと目が合ったときのような、奇妙な感覚。

さすがにあそこまで気分が悪くなったりはしないが……それでも、鳥肌が立つ程度の寒気はあった。

未だに笑顔でタバスコを一心不乱にかけてるお姉さんには悟られないように、そつと後ろを振り向こうとしたところで、

「あつ、なすなすだ！」

突然、そんなことを言つて両手をぶんぶん振るゆりな。

その先には、今まさに来店したばかりといった様子の少年が居た。なにか店員と話してゐるみたいだが、この盛況ぶりを見るに、おそらく満席だから少々お待ちくださいとでも言われてゐるんだろう。

しよんぼりとした様子のその子に、

「なずなず、こつちこつちー！」

「なずつちやーん、よろしければこちらでござい一緒しませんかっ」

姉妹揃つて親しそうな口調で呼びかけた。

第八十三石：どうして!? なずなの不思議なスケッチブック

「す、すみませんです……」

野球帽を目深にかぶったその少年は、とてもすまなそうに頭を下げた。

チビ助の隣に座っているのだけれども（なんかイヤがってた気がするが、ゆりなが強引に隣へ呼んだ）……なんというか、ちよつとおどおどしすぎじゃねエか？

俺とコロ美が二人してメロンジュースをチューつと吸いながら訝しげな視線をぶつける。

ガンガンと乱射されるその視線を避けるように、ますます帽子のつばを掴んで顔を隠したそいつに、

「とつても怪しいんですっ」

コロ美が言い放った。

それに続いて俺も、

「そーだ、そーだ。なんで顔を隠すんでエい？」

そう言った瞬間、手に持っていたスケッチブックで完全に自分の顔をガードしてしまいやがった。

こいつはア、やっぱり怪しいぜ。

あの寒気だ。もしかしたらこの子に模魔が憑いてるのかもしれないエ……いや、むしろこいつ自身が模魔であるという可能性も――

「……す、すみません」

その少年が完全に萎縮したところで、

「ごらごら。二人ともなずちゃんをイジメちゃ、めつですよ」

お姉さんに、つんつんと頬をつつかれる俺たち。

「だつてえ……」

と抗議の声を一緒に上げると、いきなりゆりながその少年をギユツと抱きしめたではないか。

「にやはは。なずなずーっ！ 今日もなずなず、明日もなずなずだ
ねっ」

「やっ、やめてください……っ」

そのやりとりに、ピクつとこめかみと眉が同時に動く俺。

な、なんなんデエい。こいつ、チビ助と随分と仲が良さそうじゃ
ねーか……。

「……ケツ！」

イラつきながらストローに息を入れてぶくぶくしていると、

「わ。パパさんお行儀悪いんです。いつもとなんか違うのです」

「うるへー、俺様はいつもこんなんデエい」

そっぽを向いてチェリーを口に入れたそのとき、

「や、やっぱり、わたしお邪魔ですよね……」

ブフツと、むせてしまった。

「しゃ、しゃっちゃんちゃん大丈夫ですか？」

「げほっ、ごほっ！ す、すみません、大丈夫ですっ」

お姉さんから差し出された水を一気に飲み干して、俺はもう一度野
球帽をかぶった少年を見た。

心配そうに俺の顔を見るその顔は――

「もしかして、お前さん女かア!？」

「えっ！ あ、はい……。一応、多分、そうですけど」

そう言っって頭を垂れて俯く少年……じゃなくて少女は、俺のことを
チラリと上目遣いで見上げたあと、観念したように帽子を脱いだ。

途端、ふわつと舞う髪の毛。それとともに甘ったるいシャンプーの
香りが鼻腔をくすぐった。

「……た、宝樹なずなといいますです。えっとえっと、お二人のことは
今日の学校でゆりり先輩からたくさん聞かされました」

たからぎ、なずな？

なんだろうか、この感じは。

この子、どこかで見たことがあるような――

「なずなずはね、とつても人見知り屋さんなのっ。だから二人とも優
しくしてあげてね」

「……ふゆう。すみません」

冬じゃなくて今は春だぞとツツコみたくなるところだけでも、人見知りと聞いちゃあ、おいそれとツツコめねーな。

というか。いささかに暗そうなヤツだけど、顔立ち自体はかなり整ってる気がするぜ。

少しだけ明るめの茶髪にミニツインテールといった髪型なのだが——ももはと違い、独特な結び方をしている。

長さはあいつよりはちよつとだけ長いかもしれないが……いかにせん、独特な髪型だからよくわからねエぜ。

にしても、綺麗な青い瞳だな。こういうのサファイアブルーって言うんだっけか。

ま、さすがに目の中に花は咲いてないようだけれども。

「あ、あのあの……」

ジーツと、メンチを切るようにコロ美と一緒に凝視していたのがマズかったのか、

「やつぱり、わたし……お、お先に失礼しますです！」

泣きそうな顔でなすが立ち上がったとき、手に持っていたスケッチブックがスルツとテーブルの上に落ちた。

「あつ、違う違う！ 怒ってるとかそういうんじゃないって、ごめんっ！」

「ふえーんっ！ なずなずう、行かないでえっ」

慌ててそれを拾い上げようとしたのだけれども。

開かれたその中身を見て、俺たちは固まってしまった。

「えっ！ これって……。なんで、なずなずが……」

「……あ、ありえないんです」

信じられないといった様子で二人が口々に言う。

もちろん——俺だって、信じられなかったさ。

だって、そのスケッチブックには俺たちが描かれていたワケで。

いや。正確には、俺とゆりなの変身した姿が——魔法少女となった姿が寸分違わずに描かれていたのだ。

髪型も、髪色も、胸の宝石の色も、コスチュームのデザインもまっ

たく一緒……。

「しゃっちゃん、こ、ここ見て!」

チビ助の指差したところには、その魔法使いの名称らしきものが書かれていた。

黒の魔法少女と赤ペンで書かれた文字の下には、『ラヴスパーク』と。

その隣で腕を組んでいる白の魔法少女の下には、『ラヴスノウ』……。

そして。その一番下には強調するような太文字で——こう書かれていた。

「魔法少女サクラヴィッツ……」

俺とゆりなが同時にそれを読み上げ、目を合わせる。

「しゃっちゃん……」

「ああ、わかってる」

さすがにここまで一致していると、偶然として片付けられるものじゃない。

一体これは、どうなつてやがるんだ……。

なずなを見ると、そいつは恥ずかしそうに視線を逸らした。

「あの、わ、笑わないでくださいね……。実は、これに応募しようかなと思って」

と。オーバーオールポケットから取り出されたのは、ピンク色の小さな箱だった。

可愛らしいパンダさんの色んな表情が印刷されているそれをパカッと開くと、

「わあっ、それ知ってますう!」

お姉さんが声をあげて目を輝かせた。

「えっ! ふーお姉ちゃん、知ってるの!?!」

続けて、さらに爛々と目を輝かせるなずな。

あまりの興奮からか、敬語をすっかり忘れたそいつは、

「これねこれねっ、さっきこのお店のカードダスから出たんだけど……」

鼻息荒くして箱から一枚のキラキラしたカードを出すと、自慢げにお姉さんへ見せた。

「やーっ、このカード懐かしいですねっ。私がやってた頃にもおんなじカードがありましたよっ」

「えへへ。それ、今月出たばっかの復刻版なのっ。なんか、第一弾のリメイクとかなんとかで」

「リメイクなのですかあ。あははーっ、私にはまったく同じに見えてしまいました。そういえばこれはキラカードじゃなかった気がしますね」

「そうそう、レア度も上がってるんだよ！ あとね、スキルも強化されてるのっ」

な、なんのこっちゃ。

うーむ。話についていけないぜ……。

そう、盛り上がる二人を見ながら、ゆりなと俺が目パチクリさせていると、

「あつ。す、すみません！ わたしったら魔女モンのことになると、つい……」

俺たちに気付いたなずなが、ペコリと頭を下げた。

そのとき、チビ助が両手をぱちんと合わせて、

「わかった！ それが、なずながハマってるっていう魔女モンだったんだねっ！」

そっかそっかど頷いて、テーブルの上に広げられたカードを楽しいに見える久樹上姉妹。

いよいよ分かっていないのは俺だけになってしまったようで……。
(コロ美は興味無さげにアイスと格闘しているから除いておくれ)

さすがに気になった俺は、

「ま、魔女モンってなんなんでえい」

と。なずなに訊いた。

すると、そいつは興味を持った俺に心底嬉しそうな顔をして、

「えつとですね、これは『魔女っ娘モンスター』ってカードゲームです——」

それから嬉々としてそのカードゲームの説明を延々と語り出すな
ずな。

何十分くらい聞かされたんだろう……。いや、一時間くらい経って
るのかもしれないねエな。

要は、よくある対戦型カードゲームみたいなヤツで、モンスターを
進化させて戦わせるゲームのようだ。

最初は思いつきり化け物の姿をしている低レベルのモンスターを、
敵と戦わせて、勝ったらそいつを喰らう。

それでストーンが溜まったら、魔法少女の姿へとレベルアップさせ
る。

最終的には、場にある敵を全て倒したり、捕まえたら、中央でふん
ぞりかえってる『魔女』（プレイヤーの分身）を倒すつうゲームらし
い。

なんか敵のモンスターを捕まえたらこっちが使えるとかいう将棋
みたいなシステムもあつたような気がするが……。まあ、別にやらねー
し、どうでもいいか。

長つたらしい説明をし終えて、満足気にホットコーヒーをすすするそ
いつに、

「ねーね。なずなずう、応募ってどーゆうこと？」

なずなのツインテールをぴよぴよこ弄りながら訊ねるチビ助。
すると、なずなはそれを気にする様子もなく、

「生誕十周年を記念して、プレイヤーのみんなが考えた魔法少女を
カード化してみたいなんです」

ぺらりとデツキホルダーの中から一枚の紙切れを掴んで俺たちに
見せた。

なるほどねエ……。だからスケッチブックに魔法使いを描いていた
のか。

ラヴスパークやらスノウとやらも、このカードゲームのイラストコ
ンテストに応募するためになずなが考えたオリジナルの魔法少女―

「……恐縮だけでも、もっかいスケッチブックを見せてくれ」

お姉さんがお手洗いに行ってる隙に、俺たちはもう一度イラストを見せてもらうことにした。

やはり自分の描いた絵を見られるのは恥ずかしいのか、真っ赤な顔でモジモジしているそいつに気付かれないよう、小声で俺たちは確認しあう。

「しゃっちゃん、何度見てもボクらにそっくりだよ……」

「だよなア。ここまで一致してるとなると、俺たちを見て描いたとしたか思えねエゼ」

「じゃあ、やっぱりなずなずつて——」

困ったような表情でなずなをチラリと見るゆりな。

そう。もし、俺らのことを見て描いたとするならば、こいつは『魔法関係者』となる。

変身したら一般人の視界には映らなくなるワケだから……。見えるのは関係者だけだ。

「あ、でも。変身しないで杖に乗って飛んでたりしてたから、それを見られちゃったのかも」

「いや。杖だけなら説明はつくが、それなら変身後のコスチュームをこんなに細かく描けるわけないじゃんか」

「でも、でも……」

ゆりなの動揺を見るに、なずなにはどうしても関わって欲しくなさそうだな。

ま、そりゃそーか。

あんな危険な石集めに関わったらロクな目に遭わないだろうし。

才能あるゆりなに、数多ある世界から選ばれた俺つつうコンビだからまだなんとか凌いでいるけれども。

……こんな臆病そうなガキんちよにはいささかに厳しい世界だよなア。

可愛がってる後輩みたいだし、なおさら巻き込むワケにはいかないか。

第八十四石：小さな一歩、大きな勇氣

とはいえ、関係者イコール魔法使いをやると決まったワケじゃないが――

「……なずなさんは、その二人のキャラをご自分で考えたですか？」

いつの間にかアイスを平らげたコロナが、カードの説明書を見ながらそんなことを訊ねた。

直球過ぎるその質問に、固唾を呑む俺とチビ助。

すると、なずなはコロ美の頬についたクリームを紙ナプキンで拭きつつ、

「うーん。一応わたしが考えたことになるの、かなあ……」

と。言葉を濁した。

「んん？ どういうことってエイ？」

「えと、本当はどっちのキャラも夢の中で出会ったのです」

ゆ、夢の中で出会ったあ？

「はい……。一年ぐらい前から、わたしの夢の中に二人が出て来るようになったんです。不安なことがあったときに出てきてくれて、素敵な魔法でいっつもわたしを励ましてくれるんです。だから、魔法少女というものにすっごく憧れちゃって。えへへっ、その勢いで魔女モンにもハマっちゃいました」

スラスラと言ったのち、そいつはハッと気付いたように、慌てて野球帽を被った。

「ご、ごめんなさい。わたし、ヘンですよ……。お兄ちゃんにも昨日バカにされたばっかりなのに……。ふゆっ」

「お兄ちゃんって……」

訊こうとしたとき、ゆりなが笑って言った。

「ほら、さっきしゃっちゃんか怖いって言ってたマンガあったじゃん。それ貸してくれたのなずなのお兄ちゃんトラジ君なんだよ」

「へー。でもあれって一応少女マンガじゃなかったっけか？」

そう疑問符を掲げたそのときだ。

頭を垂れているなすが、ジツとゆりなを見ているのに気付いた。いや。見ている、というよりも——睨んでいる、というような。

野球帽で目が半分隠れているからそう見えちゃったのかねエ……。トラジ君は男子のものとか女子のものとかそういうの気にしないタイプかも。なんかねー、雰囲気やしやつちゃんにちよつと似てるかもっ」

「ふーん。俺に似てる、ねエ……。ははっ、一度会ってみたいもんだぜ」

なんてテキトーな相槌を打ったつもりなのだが、

「じゃあ今度みんなと一緒に遊ぼうよっ！」

わーいと両手をあげて一人ではしゃぐゆりな。

「いやいや、そんないきなり遊ぶって言われましても……相手さんも困るだろうよ」

「えーっ、どうして？」

「だって見ず知らずの相手と遊ぶなんて、フツー気が進まねエもんだぜ」

「にやはは。トラジ君はフツーじゃないから大丈夫だよお」

いささかに失礼なことを言っただけのけるチビ助に、

「あのっ！」

ガタンと音をたてて、前のめりになるなすが、

「わ、わたしもそれに混ぜてください……っ！」

「うんっ、もちろんなすが一緒だよ」

「ぐぬう……！」

な、なんだろう、この妙な空気は。

なすが怒り顔で頬を膨らませているのに対し、ニコニコ笑顔でそのほっぺをつんつんしているチビ助。

うーん、この二人の関係性がイマイチわからねーぜ。

「あらあら、まあまあ。みなさんもうお食事は大丈夫ですか？」

やがて、お姉さんが小走りでやってきた。

「肯定。ママお姉ちやまのおトイレ結構長かったです」

「まあた、失礼なことを……」

「うふふ。実はこれをしてきたのですよーっ」

じやつじやじやーんと言つてミニバッグから取り出されたのは五枚のカードだった。

「わっ、お姉ちゃんこれって魔女モンカード？」

「はい！ さつきなずつちゃんのお話を聞いて、ついやりたくなくなつてしまいました」

てへへと頭をかくと、一枚ずつ俺たちに配つた。

ゆりなには黒いカード、コロ美には緑色のカード。なずなには桃色のカード。そして、俺には白いカード。

「このカードを持つてると、みんな仲良しさんになるのですっ」

「……魔女モンつうのにはそんなオカルト要素もあるのかイ？」

訊くと、なずなは首をぶんぶん振つて、

「な、ないハズですけど……でも、あつたらいいなつて思います」

と。大切そうに自分のカードを両手で握つた。

「ふふつ、私がそうなるように念じながらカードを出しましたので、効果絶大ですよーっ」

「……ママお姉ちやま、魔法使いさんみたいなんです」

「あははーっ、バレちやいました？」

なんて、青いカードを口元に当ててウインクするお姉さんに、俺たちはクスツと笑つた。

いやはや。なんとなくだけけれども、お姉さんがそう言うならそんな気がしてきたぜ。

さて、そんじやまそろそろ会計でもしようかと席を立つたときだ。

斜め奥の席から同じくして立ち上がった客が、ドンツと俺の背中にぶつかりやがった。

「……なんでえい？」

と、眉をひそめたのも一瞬。

すぐに俺のカードが無くなつていたことに気がついた。

も、もしかして……今ぶつかったヤツか!?

「ちよ、ちよつと待ちやがれっ！」

慌てて追いかけると、そいつは外のベンチにどっかりと座つてい

た。

だぼつとした黒いパーカーに、フードを被っているといった怪しき満載の姿に、いささか訝しんでいると、

「ははん。相も変わらず、隙だらけなバカてふ。そんなんじゃ、コピーの石もあたしに盗られちゃうわよお?」

イヤミな笑みを浮かべてフードを脱ぐ。パーカー少女——シヤオメイ。

赤く長い髪を片手でかき上げ、そいつは俺から盗んだ白いカードをしげしげと眺めた。

「……ふうん。このカードゲームって今すっごい流行ってるのよね。しかもこの『スノウプリズム』って結構なレアものよ。たしか、雪の結晶の盾で味方全体を護るカードだったはず」

そういえば、さつきなずが出したカードよりも更に派手だった気がするな。

キラキラした輝きは同じだが、傾けると立体化した星とかハートやらが浮かびあがるという具合で——というか、やけに詳しいじゃねエか。

「もしかしてお前さんもコレをやってるのかイ? 口は達者でも、所詮は子どもなんだねエ」

いつひつひと笑いつつ、そいつの手からカードを奪い返すと、

「はっ、バツカバカじゃん。こんなくだらなゲームなんか、このあたしがハマるワケないじゃん」

やれやれと首を振って、

「そのCMをずっとあたし達が担当してたからね。知りたくなくても勝手に情報が入ってくるのよ」

「CM……? ああ。そうか、そういえばお前さん、ハッピーラピッドだかのアイドルグループに入ってたんだっけか」

ハッピーラピッド。略してハピラピ。

ゆりな曰く、小学生たちにとってカリスマ的な存在の七人組のアイドルで、こいつはその中の一人……だった。

「入ってたっつーか、あたしがリーダーだったんだケド」

指先で右側のツインテールをクルクル弄りながら言い足すシャオメイ。

「そのリーダーさんがなんで辞めちまったんだア？ 超人気アイドルだったのによオ」

続けてりゃあ、大金持ち街道まっしぐらだったろうに。

それを放棄するなんざ……いささかに理解出来ないぜ。

「決まってるでしょ。散らばった七つの厄災の宝石を集めるためよ。そのためには忙しいアイドルなんてやってらんないの」

ため息混じりに言うと、スクツと立ち上がって背を向けちゃった。

「……もともとハピラピは五人組で、あたしは一番最後に入ったメンバーなの。だから、あんまり思い入れは無いのよね。それはきつと、ファンも他のメンバーも同じだと思うわ」

「そうかア？ たしかお前さんって一番人気だったような。他の面子はともかく、ファンは思い入れあるだろうよ」

すると、シャオは鼻で笑い、

「そりゃ最初は注目されて当たり前よ。ラストメンバーだからって周りの大人たちが色々と動いてくれてたみたいだしさ。でも、それも長くは続かないわ」

パーカーの腹ポケットに手を突っ込んで、そいつは隣のビルを見上げた。

「……ほら、もうあたしの代わりが出来たみたい」

つられて俺も見上げたのだけれども——そのビルを見て俺は驚いた。

いや。ビルそのものではなく、その大型液晶に映し出された人物

「ネ、ネム!？」

先日、時園で出会った少女。

先程、公園で見かけた少女。

そのどちらにも似ている紫髪のショートカット娘が画面に映っていた。

俺が思わず声をあげてしまうと、

「ネムう？ 誰よそれ。あの子は『ぼたん』よ？」

と、眉根を寄せてこちらを振り向くシャオメイ。

「あいつ、名前あったのか」

「トーゼンでしょ。苗字もちろんあるわよ。深柳っていうの」

「へえ。ミヤナギとはまた珍しい苗字だな……」

「……気の無い返事ねえ」

そりやあ空返事にもなってしまうさ。

なんせ、画面の中のネム——もとい、ぼたんとやらがマイクを握り締めて観客の前で歌ってるんだからな。

あの能面ヅラのあいつが、紫色のフリフリドレスを着てるってだけでも驚きモンなのによオ。

とはいえ……格好はアイドルしてるが、表情はやはり無いに等しい。

「なんつーか、まるでマネキンみたいだな。歌ってて楽しいのか、あいつは」

ぼそりと呟いた俺に、

「……ふうん」

と。シャオメイが、まじまじと俺のツラを覗き込んできやがった。

「な、なんでえい？」

「ぶえつつにく。……ま、あたしも結構前から同じこと思ってたのよ
ね」

「結構、前からって……お前さん、あいつと知り合いなのかイ？」

すると、シャオメイは呆れた顔でビルを指差した。

再度そのビルに顔を向けたのだけれども——

「えっ！ ハピラピのメンバーなのか!？」

「……知らなかったの？」

そう。ビルのでっぺんのボードにデカデカと『ハピラピ・ツートツプシングル発売間近!』と広告が掲げられていた。

それにはシャオとネムの二人が背中合わせで映っている写真が貼ってあったのだが……待てよ。シャオの顔だけ妙に色鮮やかなよ
うな。

「あたしのせいで発売が無しになったからね。あの子のファンの嫌がらせでしょ」

「嫌がらせて……わざわざビルに登ってか？」

「そーよ。わざわざ登って、ご丁寧にあたしの顔だけスプレーでグチャグチャにしたのよ。ご苦労様ってカンジ」

「言って、そいつが背を向けたそのときだ。」

「シャオちゃん！」

「ハアハアと息を切らしてゆりなが飛び出してきた。」

「あれ、会計済んだのかイ？」

「ううん。もうちよつとかかるから、お姉ちゃんが先帰っていいですよって」

店の中を見ると、お姉さんがなすなと談笑していた。

カードを見せ合いながら何やら楽しそうに話している二人を一瞥して、

「……猫憑き。あんたも魔法使いの端くれなら、とっくに気付いているハズよね」

背を向けたままシャオが低い声で言う。

「えっ。気付いてるって、なあに……？」

「とぼけたって無駄よ。それとも、気付きたくないだけかしら」
なにを言いたいのかわからねーぜ。

俺がアホ毛をハテナマークに変えて腕を組んでいると、

「……ピース様がクロエ・ザ・マンデイに、こう伝えろってさ。『あの子がダメなら、またあの子を使うしかない』ってね」

「ど、どういうこつてエイ？」

「さあね。あたしはただの伝言役だから。それじゃ」

さて自分の役目は終わったとばかりにフードを被ろうとしたそいつに、

「ま、待って!!」

チビ助がズイツと俺の前へ歩み出て叫んだ。

第八十五石：拒絶

「シャオちゃんもボクたちと同じで石を集めてるんだよね」

「あら。なあに、盗み聞きイ？ いい性格してるわねえ」

「……えっ、ち、違うもん」

一歩下がったゆりなを見て、俺はたまらず言い返した。

「盗み聞きって……魔法使い同士はどこにいても声が聞こえるんだろ？」

「そーいえばそうだったっけ」

なんて肩をすくめやがった。

こいつ、わざと意地悪を言ってるな。

にやるめが……何かガツンと言ってやりたいぜ。

そう拳を震わせていると、

「あ、あのっ………」

おずおずと、一歩前に踏み出すチビ助。

そいつの手も俺と同じく震えていた。

いや。同じじゃねエな。俺は怒りで震えていたが、ゆりなの場合は

「シャオちゃんもボクたちと一緒に宝石集めしようよっ」

「……一緒に？」

言った——か。

やはりというべきか、ゆりなのことだからいつかはシャオを誘うだろうなどは思っていたのだけれども。

しかしながら。他のヤツだったらまだしも、こいつはいささかに難しいんじゃないか？

なんて思っていたのだが。

「それって仲間に入って欲しいってこと？」

「う、うんっ」

「あたしを誘ってくれるんだ」

と、にっこり笑顔で振り返ったではないか。

まさかの展開に俺が啞然としていると、

「もちろんだよっ！ 三人一緒に力を合わせれば、絶対に全部集められるよ！ シャオちゃんが仲間に入ってくれたらもう怖いもの無しだもん」

「あははっ。そうね、みーんな仲良く協力し合えばすぐよね。……よかった。本当言うよね、あたし一人じゃ心細かったのよ」

笑顔のまま手を差し出すシャオ。

それを見たゆりなは、感動のあまりか今にも泣き出しそうな顔で、

「シャ、シャオちゃん……」

ギュツと両手でシャオの手を握った。

鼻水をすすりながら、

「えへへ！ 勇気出して言ってみて良かったよう。これから三人仲良しさんで頑張ろーね！」

満面の笑みを咲かせてチビ助が言った——次の瞬間。

「……つくづく反吐が出るわね」

小さく呟いたかと思うと、ゆりなの手を捻り上げて、

「仲良しい〜？ 一緒お〜？ 仲間あ〜？ 虫唾が走る言葉ばかりよく思いつくわね」

「あうっ。痛いよ、シャオちゃん……」

「きやはっ、あはは！ それとも、あたしをわざと怒らせようとしているのかしらあ？」

「ち、違うもん。ボクは本当にシャオちゃんと——」

「……………気安いのよ、猫憑き」

「きやつ!？」

ドンツとゆりなのお腹に蹴りをかましやがったところで、俺の怒りは最頂点まで達した。

もう見てられねえ……！

「ぎげんな、テメエ！」

胸倉を掴んだのだが——

「……………!？」

な、なんだこいつの目は。

黒い瞳が更に暗く淀んでやがる。

輝きという輝き全てを失ったその目に、いささか戸惑っている、

「なんだなんだ？」

「子ども同士のケンカみたいだけど……」

「あれ、もう一人のほうってシャオ様じゃない？」

「ウソだろ。こんなところに居るはずないって」

ぎわぎわと。

いつの間にか俺たちの周りに人だかりが出来てしまっていた。

「……目立ちすぎたみたいね。そろそろ手を離しなさいよ、バカてふ」

「ゆ、ゆりなに謝ったら離してやるよ」

「はっ。バツカバカじゃん。だあれが、謝るかってーのよ」

こいつ……！

もう我慢の限界だった。こういうヤツは殴らなきゃ分からねエんだ！

「このっ！」

俺が拳を振り上げた、その瞬間。

「ダメっ。ダメだよ、しゃっちゃん……」

倒れたゆりなが咳き込みながら、

「ボクがシャオちゃんを怒らせちゃったのがいけないだもん。殴っちゃダメだよ……」

「……でもよオ」

「けほっ、けほ！」

「お、おい」

慌ててチビ助のもとまで駆け寄り、

「大丈夫か？」

と。肩を貸すと、そいつは土まみれの顔でニコッと笑った。

「にやはは。めちゃんこ汚れちった。ちよっち早いけど、帰ったら一緒に風呂入ろーね」

「こんなときにお前さんはよオ……」

酷いことされたばかりだったのに。なんともノホホンとしてやがるぜ。

「ったく」

まあ、いいや。平氣そうで安心したぜ。

そう。笑い飛ばしてやろうかと思っただけれども。

「……約束だもん」

ギョツと。俺の胸の中で静かに泣きはじめるゆりなに、

「……………」

俺は何も言えなかった。

+ + +

「ごっしごっし、きれいきれい。洗おう、ぴっかぴかの〜ぴっかんこ」
ポニーテールを左右に振りながら、ゴシゴシの歌を歌うゆりな。
そいつの後ろで手洗いの順番待ちをしていたのだけれども。

「……なあ、チビ助よオ。お前さんもう大丈夫なのかイ？」

ひよこつと顔を覗き込むように訊ねてみる。

帰り道ずっと俺のスカートを掴んでシクシク泣いていたつっの
に、家に帰ってきた途端これだからさア。

「うん、もー大丈夫だよ。これからしやつちゃんとお風呂に入るんだ
もん。えへへ、楽しみのほうが勝っちゃったみたい」

「なんでえい。心配して損したぜ」

「にはは。心配かけちゃってごめんねつ。ほい、次しやつちゃんの番
だよ」

「へいへい。わかりましたんで」

と、交代したときに一瞬だけゆりなの横顔が見えたのだが。

気のせいかな、頬に涙が流れていたような――

「……………」

手を洗いながら背後のそいつをチラッとだけ窺ってみる。

グシグシと洋服の袖で涙を拭ってるそいつに、俺は小さくため息を
ついた。

はあ……。そんなこつたろうと思っただぜ。

つたくよオ。何が大丈夫なんだか。ちつとも大丈夫じゃねーじや
ん。

とりあえず口早にゴシゴシの歌を歌って、俺は早々に手洗いを切り
上げた。

そんでもって、

「おい、チビ助」

未だに涙を拭っているそいつの頭に手をぼむっと乗せる。

「ふえっ!? な、なあに?」

びっくり顔を上げたチビ助に、

「お前さんが俺様の胸でめそめそすっからよオ、一張羅が涙やら鼻水でグシヨグシヨだぜ」

自分のキャミソールを引っ張りつつ、ちよいちよいと指差す。

でろろーんとなっちまったそれを見て、

「…………、ごめんなさい」

申し訳無さそうに俯いたところで、俺はすかさずゆりなの頭をわしやわしやとしてやった。

「わっ、わっ! しやつちゃん、なにするのお」

ううーっと。困り顔で見上げたそいつに、

「だあらよオ、もう風呂に入っちゃまおうぜ。はやいところスッキリしたいぜ」

そう言ってみると、困り顔がすぐさま笑顔へ早変わり。

「わーいっ! 入ろっ、入ろっ!」

万歳の格好でくるくるとその場で回るゆりなに、俺は一つ肩をすくめて笑った。

まったくもって。なんとも扱いやすいヤツだぜ。

第八十六石：一緒にお風呂！

もしもこいつがクロエと合体して新魔法少女の格好になってたら、おそらく凄まじい勢いで尻尾が振られているんだろ？

と。俺の蝶羽みたいに猫耳に尻尾が生えた姿のゆりなを想像したのだが――

「……む？」

ちよつと待てよ。

そういえば、なんでこいつはいつまでも旧魔法少女つつう簡易型変身の格好で戦ってるんだ？

コロナが言うには、あの格好は昔のやり方で、変身自体は速いが力はあまり強くないハズだぜ。

だったら、余裕のあるときは新式の変身にした方が良くねーか？

大体にして。今までの模魔との戦いを思い返してみても、変身途中で邪魔されたことなんて一回もねエぞ。

ううーむ。旧式にこだわる理由が何かあるのかねエ……。

顎に手をあてつつ、そんなことを考えていると、

「ほらほらっ、しゃっちゃんも早く脱ごうよっ」

「ひえっ、な、なにしゃがるんでえい！」

ぐいぐいと俺のパンツを脱がそうとしてきたチビ助に、慌てて一歩下がる。

いつの間にか素っ裸になっていたそいつは、ぷくーつと頬を膨らませて、

「もーっ！ なにしやがるんでーいって、お風呂入るんだよっ」

ビシツと洗面所のすぐ隣――風呂場を指差した。

「とは言いますけれどもよオ……。まだ湯も張ってねエのに、いささかに気が早すぎるんじゃないかねえのか？」

そりゃ楽しみにしてらっしやるのは分かるのだけれども、溜まる前から脱いでたら風邪をひいちゃうぜ。

なんて言おうと思ったとき、ゆりながペタペタと小走りでお風呂の引き戸の前まで行くと、ガラツと勢い良く開けた。

途端、白い湯気が俺の視界を覆う。

「ふっふー。実はこんなこともあるーかと思つて、出かける前にお湯を入れといたのっ！」

素っ裸のまま自慢げにエツヘンポーズをかますそいつに、

「……ははっ。そりやまなんとも、準備のおよろしいこつて。わーつたよ、んじや早速入らせて頂きますかねエ」

観念してスカートのフアスナーを下げたとき。

すとん、と。それが落ちたと同時に、

「ほよお？」

ゆりなが不思議そうな声をあげて、俺のスカートの前にしやがみ込んだではないか。

「なにしてんの……？」

ポケット部分に手をつ突っ込んで、何やらごそごそとしているチビ助に怪訝な視線をぶつけていると、

「ほらっ、これ！」

と。一枚の小さな手紙を取り出して俺に見せた。

なんだ、なんだ？ そんな手紙知らねーぞ。

飯を食いに行く前には無かったはずだぜ。ポケットに手をつ突っ込んで歩いていたからな。

もし、そんなときに入つてたらすぐに気付くだろうし。

だったら、飯を食い終わった後つつうことに――

「えっと、『バカてふ達へ』って書いてあるよ。これ、もしかしてシャオちゃん？」

「あつ！ まさかカードを盗つたときに、入れやがったのか」

な、なんつー早業でえい。やつこさん、アイドルよりマジシヤンのほうが向いてるんじやねーのか……。

というか。油断しているとマジで模魔石を盗まれちまうかもしれねえな。

「あぶねーから、指輪は肌身離さずつけといたほうがいいぜ。特にコピの石はシャオが狙つてるかもしれねエし」

脱いだ服の上に置いたダッシュリングをもう一度小指にはめ直し

つつ言うと、

「う、うん……」

ゆりなも俺に続いて指輪をはめ直した。

しよんぼりと肩を落としているそいつに、一つ思う。

……自分の好きな人に拒絶された挙句、指輪を盗まれないように気をつけなければいけない。

ましてや、もしあいつが霊鳴を手にしたら今度は『どちらがピース様に相応しいか』なんて理不尽な理由で殺されるかもしれない。

そんなの——あまりに酷い話だ。

「しゃちゃん、このお手紙どうしよう？ お風呂あとにしてお部屋で読もつか。大事なお話かもしれないし……」

スツと手紙を俺に向けて差し出すチビ助。

にははと笑いながらも、残念そうなのは見え見えだった。

自分の『わがまま』よりも、他のことを優先……ってか。

まったくもって、めんどくせエ性格してやがるぜ。

「いささかに恐縮だけれども。そんな手紙なんざ風呂でも読めるんだから、とつとと入るぞ」

俺はそいつから手紙をひよいつと受け取ると、ぺちぺちとゆりなのケツを叩いて風呂場へ促した。

「ひやつ!? で、でもいいの?」

「いーよ別に。あいつの手紙なんざどうせロクなこと書いてねえつて。そんなのより、お前さんとの約束のほうが大事でエイ」

+ + +

「えへへーっ。しゃっちゃん見て見て！ クラゲさんっ」

凄いつしよーっと言いながら、タオルで作った風船のようなクラゲで遊んでいるチビ助に、俺は盛大なあくびで答えた。

「もーっ！ ちゃんと見ててよお。せっかく一番おつきく出来てたのにい」

「もーっ！ ちゃんと見ててよオ。せっかく一番でかいあくびしたのにイ」

ゆりなの声真似でテキトーに返しておく。

「むむつ。ボクの真似っこしたな〜っ！」

と。タオルクラゲよろしく頬を膨らませたところで、

「つーか。お前さんよオ。そろそろ髪を洗ったらどうなんでえい。さつきから遊んでばかりじゃねーか」

風呂場に散乱した数多のおもちやを見つつ、呆れ声で言ってやる。

湯船に入ってから何十分経ったことやら。

いい加減、足を伸ばしたいから髪を洗う作業へ移行してもらいたいぜ。

「えー……。しゃっちゃんともつと遊びたい」

「んな、うるうるな眼差しをされてもよオ。風呂は遊び場じゃねーんだぞ」

瞳からおねだり星マシンガンを連射しているところ申し訳ないのだけれども、いささかに眠くなってきてしまったぜ。

「ふえ？。しゃっちゃん、もう、おねむなの？」

「おねむって。中学生から小学生まで退化したつうのに、今度は赤ん坊にまで戻っちまったのかイ」

「にっしっし。どどん若返るねっ！。しょうがないにやー。赤ちやんしゃっちゃんに、子守唄でも歌ってあげようっ」

なんて、大口を開けた際に、

「……すいすい、口からアイスブレス」

「ふえあっ!?!」

ふうーつとちよつとした吹雪をぶち込んでやった。

「ぺっぺー！。ま、魔法でツツコむの禁止だよ……」

「いいじゃねえか。せつかく使えるんだし、ドンドン使っていかねーともつたいねーぜ」

言いながら俺は人差し指をチビ助の目の前に出した。くるくる小さく回すと、一瞬で雪を纏う。

いっひっひ。こんなおもしろいもの、石集めだけに使うなんてねエ。

「まあ、俺様はお前さんほど良い子さんじゃないんで。遊びに魔法をガンガン使っていくつもりだぜ」

もちろん一般人にバレない程度にだけけれども。

「……いいもん。じゃあボクだつて使うからっ！」

と、ゆりなが親指と人差し指をこすり合わせる。

その度に電気を帯びていく指先を見て、俺は慌てて立ち上がった。

「おいおい！ 待てっ、風呂でお前さんの魔法はマズイって！」

「あつ、そーだった！」

パツと両手を上げて電気を解くチビ助。

……うう。いささかに危ないところだった。

こんな風呂場で二人感電死なんてオチだけは勘弁してもらいた
いぜ。

いや、チビ助の場合耐性あるだろうから、きっと無事なのだろうが

——俺はおもいつきし弱点だから即昇天しちまうだろうな。

「にやはは……ちっばい、ちっばい」

ポリポリと頭をかきながら言うゆりなに、俺は首を傾げる。

「ちっばい？」

おそらく失敗のことを言ってるのだろうけれども。

しかしながら。ここは一つ、お返しがてらちよいとからかってやる
のが粋つてもんでさア。

「うんっ、ちっばいしちった」

いやーまいったまいった、と。

なおも笑顔で上半身を仰け反らせているそいつの胸を指差して、
「なるほど。ちっばい、だな」

ニヤリと、意地悪く笑ってやる。

「ふえ？ ボクのお胸がちっばいってなーに？」

「い、いや。小さいおっぱいだから、ちっばいっつう意味でだなア
……」

冗談の説明ほど恥ずかしいことはないぜ……。

そう顔を赤くしていると、ゆりなも俺と同じく顔を真っ赤にして
いた。

「しゃ、しゃっちゃんなんか、しゃっちゃんなんか……」

心なしか、ふるふると手が震えてらっしやるような——

あつ、これマジでヤバイ。

「うわわっ」

俺の危険センサーが瞬く間に反応し、慌てて湯船から飛び降りる。だが、このままだと多少なりとも電撃を喰らっちゃう可能性が——そうだ、お姉さんから貰ったあのカードに書いてあった魔法を真似してみるしかねえ！

「ぷ、ぷ〜ゆゆんぷゆん！　ぷいぷい、ぷう！　すいすい、『スノウプリズム』！」

「しゃっちゃんなんか……知らないもーんっ!!」

かざした手の平から透明な水晶のような小さい防御壁が出たと同時に、ゆりなの放電が始まった。

勢い良く放たれた電撃がプリズムに当たった瞬間、まるでブレーカーが落ちたときのようなバチンツツという音とともに激しい水音が聞こえた。

「……………」

なんの音だろうか。もう怒りの放電は収まったようで、電撃は飛び交っていない。

手の平の雪を払いつつ、そーっと顔を上げてみると、

「ふにゃああ……」

そこには湯船に浮かぶチビ助の姿があった。

おそらく俺のプリズムではね返された電撃を浴びてしまったんだろう。

「あっちゃー、まさかスノプリが反射魔法だったなんて……そんな想像で創ってねエハズなんだけれども」

グルグルと目を回しているそいつを抱き上げたとき、

「あらあら、まあまあ。しゃっちゃんちゃんとゆっちゃんったら。仲良くお風呂で遊ぶのもいいですが、程ほどにしないと風邪ひいちゃいますよーっ。ここにお着替え置いておきますねっ」

洗面台からなんともおっとりとした声が聞こえてきた。

仲良くどころか、わりとガチな魔法合戦をしていたワケで……。

とにもかくにも。俺は腕の中で未だに「ほへえ〜」っと目を回して

いるチビ助を抱え直して、
「なるべく水の多い場所では怒らせないようにしよう……」
トホホとため息をついて、そう強く心に決めた。

第八十七石：せめて、今日くらいは

そういえば。と、俺は手紙の存在をふと思い出した。

「こいつが目を覚ますまで暇だしな……」

風呂マットに寝かせたチビ助を見下ろして一人呟く。

ウチワで扇ぐみたいにな、弱いアイスブレスでゆりなの顔を冷やしているのだが、中々目を覚まさない。

まあ。時折すつとんきような寝言を言っているから大した事は無いと思うのだけれども。

とりあえず俺は氷の吐息はそのままに、そばに転がっていたおもちゃ——マジックハンドとやらに目をつけた。

ボタンを押せばロボットみたいな手がビョーンと伸びて遠くの物を掴むといったおもちゃ。

「よオし、これを真似てみるかねエ。ぷくゆゆん、ぷゆん。ぷいぷいぷう……：すいすい、『フロストハンド』っ」

人差し指から伸びた小さな氷の手が、風呂の窓辺に置かれた手紙を器用に掴む。

そんでもって、こつちへ来いと念じながらクイクイツと指を曲げると、雪を振りまきながらこちらへ戻ってくる。

「いっひっひ。初めてのおつかい良く出来ました、つと。いやあ、こりゃあ便利な魔法だぜ」

ハンドを一つ撫でて、魔法を解いたところで、
「にやはん。褒められちったあ……」

ころんと寝返りをうちながら新たな寝言をかますチビ助。

つたく、お前さんじゃないっつーの。気持ち良さそうに寝やがってからに。

額に一発デコピンをぶちかましておく。

「ふ、ふえええっ」

いつもの鳴き声をバツクに、俺は手紙をベリベリと乱暴に開けて中身を取り出した。

さてさて。何が書いてあるのやら。どうせ罵倒文だろうけれども。
えーつと、なにになに……。

『拝啓。これを読んでるのはどっちかしら。猫憑きかしら、それとも
バカてふの方かしら。ま、どっちでもいつか。今朝、東福森の中で霊
鳴石を発見したわ。緑色の宝石だからアレはおそらく壺式ね。夕方
の四時ぐらいに改めて取りに行く予定よ。もし、欲しければ力尽くで
あたしから奪ってみることね。まっ、時間過ぎてからコレを読ん
じやった場合は、ごしゅーしょー様って感じだケド。そんじゃま、か
しこ』

チツ、ぬわあにがご愁傷様でえい。ふぎけやがって。

俺は手紙を丸めてぶん投げると、一旦ブレスを止めて風呂に入りな
おした。

「……三本目の霊鳴シリーズ。俺の式式ちゃんよりも先輩な壺式さん
ねエ」

イチシキと読むのか、イツシキだか分からねエが。

どちらにしろ、霊鳴がシャオの手に渡るのはどう考えてもマズイだ
ろうよ。

ランクAのシャドーにジュゲムなんたら力、そんなもって霊鳴と
くりやあ、いささかに二人でも勝てる気がしねエぜ。

まだ霊獣と契約してないだけマシだけれども……。

「ふあっ。あれ、(ここのど)……？」

むくりと起き上がってキョロキョロ周りを見るチビ助。

はあ。やつと気がついたか。

「見りやあ分かるだろ、風呂だよ風呂」

「ふえ？。なんでボクお風呂で寝てたの？」

と、きよとん顔で首を傾げる。

うーむ……。正直に言わないほうがお互いの為だよなア。

とりあえずテキトーな理由を言ってみると、「にやるほどお」と言っ
てすぐさま笑顔で髪を洗い出した。

わしやわしやと長い黒髪を楽しそうに洗うゆりなの背中を見なが
ら、俺はさっすきの手紙を心の中で反芻する。

夕方の四時に東福森、か。

今はおそらく三時半あたりだから、風呂から上がったらすぐに行かないと間に合わないだろうな。

というか、何のためにこんな手紙を書いたのかよく分からないぜ。発見したならしたでその場で封印を解けばいいのによオ。わざわざ俺たちに知らせるたア、どういう了見でえい。

何か考えがあるのか、はたまた単なる思い付きか。

そんなことを考えながら、浴槽に浮かんでいるアヒル隊長のガー太くん（名付けたのはもちろんゆりなだ）のネジを巻く。

お尻を振りながら元気良くガー太くんが泳ぎ出したところで、

「ねーねー。しゃっちゃん」

浴槽にちよこんと両手をかけて、ゆりなが覗き込んできた。

「んー？」

「あのね。シャンプー終わったよ」

いや、終わったよと言われましたも。

「んじゃあ、次はリンスだな」

そう言うと、チビ助はちよつとだけ迷うような表情を浮かべて、

「えっと。たまにお姉ちゃんとお風呂入るんだけど、そんなときいつもボクの髪を洗ってくれるの」

「ふーん」

「でねでね、すっごく気持ちよくて、ふわあ〜って幸せな気持ちになるの」

「そりゃあ羨ましいこつて。……んで、何が言いたいんでえい？」

あくび混じりに言うと、そいつはぷるぷる首を振った。

「にやはは……そんだけー」

と。再び子ども用お風呂椅子へ座るチビ助。

なんとも寂しそうな背中を見つつ、俺は苦笑した。

まったく……本当に分かりやすいヤツだぜ。

どっこいせと浴槽から出て、

「ほら、リンス貸してみそ」

「ふえっ？」

びつくりしているゆりなの手からボトルを奪って髪を洗ってやる。つってもリンスだから、馴染ませるように揉み込んでやるだけだが。

「……えへへ。気持ち良いよう、しゃっちゃん」

「いつひっひ、あつたりめえだろ。なんてつたつて、俺はいつも——」
いつも。

いつも——なんだっけか？

「しゃっちゃん……？」

「あ、ああ。いや、なんでもねえぜ。ほら、あと一分ぐらい置いたら自分で流しなア」

「はーい！ ありがとねっ」

ニコニコと俺を見上げるチビ助だが、俺はそいつの手を見て驚いた。

盗まれるから付けてろと言った指輪がまた外されているのだ。

こいつ……やっぱり、まだシャオメイのことを信じてやがるのか。

あんだだけ酷い目にあつたつうのに、どーしてあんなヤツのことを……。

いくら好きな人でも、あそこまでされたら普通はキライになるハズなのに——

「あつ、今のうちにシャンプーの詰め替えしとこつと」

と。ゆりなが風呂場から出て、洗面台の下にある詰め替えを探し始めた隙に、俺は丸めた手紙を慌てて回収した。

「あつたあつた！ あれ、しゃっちゃん後ろに何持つてるの？」

「え？ 何も持ってないぞ。ただ、腰が凝ったから叩いてただけだぜ」

「にやはは、しゃっちゃんつたらお年寄りさんみたいっ」

赤ちゃん扱いされたかと思つたら、今度は年寄り扱いってか。

「うるへー。余計なお世話だつてえの。いいからさっさと流しやがれ」

「ほい、了解うけたまわりっ！」

ピシッと敬礼するそいつのアホ面を見ながら、俺は後ろ手に持った手紙を強く握り締めた。

……もし、こいつがこの手紙の内容を知ったら、シャオを説得しにすぐにでも飛んで行ってしまおう。

シャオから——好きな人から霊鳴を奪うなんて、絶対に無理な話だ。

罵声を浴び、拒絶されて……また傷つくだけに決まっている。

そうだ。別にチビ助の力を借りなくてもやれるさ。俺にはコロ美がいるし、だし子だっている。

——ゆりなが傷つく必要なんてない。傷つくのなんて、俺一人でない。

俺だけで、十分だ……。

「しゃっちゃん、ぼーっとして、どったの？」

「え？ あっ、お前さんが流し終わるまで待ってたんでえい……」

「もー。とつくに流しちゃったよ。さっきから出ようって言ってるのに、ずっと難しいお顔してるんだもん」

俺の顔真似のつもりなのか、眉間にシワを寄せるといった『難しいお顔』で俺を見つめるゆりな。

「元氣そうで何よりってね。もう泣き止んだようだな」

「それこそ、とつくのとう、だもんね。しゃっちゃんといっぱいお風呂で遊べたから悲しいことぶっ飛んじった！ 明日も入ろっ、入ろっ！！」

「おいおい。危ないっつーの」

びよんこびよんこと風呂場で飛び跳ねるチビ助に、俺は呆れと安堵が入り混じった溜め息をついた。

まったくもって涙とはおさらばしちまったようで。

まあ。バカっぼく笑ってる方がこいつらしくていいや。

「むっ。しゃっちゃん、今ボクのことバカにしたでしょ？」

「おっと、いささかにお察しのとおりで。よく分かったねエ」

「もーっ！ すぐに分かるもんっ！」

ぶんすこ怒るそいつに思わず笑ってしまう。

そのとき、フツと昨日のゆりなの呟きが俺の頭をかすめた。

『明日はいっぱい笑えるといいなあ……』

……そうだよな。昨日さんざん泣いたんだ。せめて、今日くらいは楽しく過ごして欲しいぜ。

チビ助に気付かれる前に森へ向かって、とつとつ壺式を奪ってこよう――

そう心に決めた俺は、ささつと着替えを済ませ、台所にいるお姉さんのもとまで走った。

第八十八石：おそろく、もう二度と

「お、お姉さんっ！」

「あらあら、まあまあ！　しゃっちゃんちゃん、ゆっちゃんのパジャマとても似合ってますですよーっ」

わざわざお姉ちゃんに見せに来てくれたのですか、と何故か鼻を押さえてるお姉さんに、

「あのっ、東福森ってどこですか？」

「あら？　それならさつき行つたファミレスのすぐ近くですよ。何かご用なんですか？」

「ええ、ちよつと今からどうしても行かないと……」

それなら、と。お姉さんが簡単な地図を書いてくれた。

いやー。なんとも分かりやすい地図だねエ。これなら俺でも分かるぜ。

「うふふ。しゃっちゃんちゃん、今日はシチューの日ですからね。五時までにはちゃんと帰ってくるのですよーっ」

「は、はい」

五時までにはちゃんと、か。

帰ってきたいのは山々なんだけれども。いかんせん、相手が相手だからなあ。

「……そうそう、まだ肌寒い季節ですからね、しゃっちゃんちゃんに私のコートとマフラーを貸しますですっ！」

パタパタと走つていったかと思うと、すぐさま帰ってきて俺に黒いコートとピンクのマフラーを着せた。

その早業に、目をパチクリさせていると、

「まあっ！　な、な、な、なんてチャーミングなんでしようっ！　はわわっ、円満具足……ですう！」

たらりと鼻血を出して倒れてしまった。

さつき鼻を押さえてた理由がやっと分かったぜ……。

「はえううー……」

「だ、大丈夫ですか？」

「私のことはお構いなくですう。むしろ、あまり近づかれるとシチューからボルシチへとメニューが変わってしまいます……っ」

それだけのご勘弁願いたいところなので、サクツと介抱すると、俺はそのまま二階にあがって寝ているコロ美のケツを叩いた。

「お昼寝しているところ申し訳ないのだけれども、いささかに仕事の時間だぜ」

「……うゆく、否定なんですう」

「ほらっ。ぐずってねーで起きなつて大将」

「否定。たいしょーさんじゃないので、あしからずう……むにゅむにゅ」

「ああ、もう面倒くせエー」

半分眠っているそいつを抱っこして玄関へ向かうと、いつの間にかお姉さんが立っていた。

「ころこっちゃんも連れて行くのですか？」

その顔はさつきまでのおふぎけモードではなく、まるで俺たちの母親のような優しい顔つきだった。

「え、ええ。ちよつとチビチビにも来てもらいたいんで」

「そう、ですか」

もしかしたら。

なにか感づかれたのかもしれない。

さつき五時までには帰れるかなアと思ったのが顔に出ちまったのかねエ。

「……しゃっちゃんちゃんところこっちゃんは、とても不思議で可愛らしいです」

と、突然どうしたんだろう。

とりあえず黙って聞いているしかないワケで。

「二人とも、何やら深い事情があつて家を出てらっしやるんですよね」
「……………」

何も答えられずにいると、

「いいのです。それはきつと、私が知ってもどうしようもないことなのかもしれないから……」

ギョツとエプロンの裾を掴んで、お姉さんは言葉を続ける。

「でも、でもですね。たった数日だけでも、私はお二人のことがとつても大好きになりました。このままずっと一緒に家族として過ごせたら、お二人を知ることが出来たら、もっと好きになれたのかなって……心から思います。もしお二人が私に遠慮なく、気兼ねなく接してくださいる日が来たのなら、とつても嬉しいなって……」

「なんで——なんで、そんなに優しいんスカ？」

「たまらず俺は言ってしまった。」

一度口をつけて出た言葉は止まらず、

「だってそうじゃねーか！ どの馬の骨ともわからないガキがふらつと来て、理由も言わねエでただの居候を決め込むなんざ、どう考えてもありえねーって！ 普通だったら怖くてぜってエ警察に通報するぜ！」

「……それが普通だというのなら、私は普通じゃなくていいです」

「え……？」

お姉さんはニコつと微笑んで、

「やつと、ゆっちゃんとお話しているときのようなしやつちゃんちゃんになつてくれましたね」

「あつ！ す、すみません」

「どうして謝るのですか？」

「だって……」

「だって。年上だし、他人だから。」

他人、だから——

「私は、お二人のことを家族だと思っています。可愛らしい妹が二人も増えて、幸せいっぱいです。しやつちゃんちゃん達が帰りたくないというのなら、いつまでも居て欲しいくらいです」

そう言うと、お姉さんは少し寂しそうな表情に変えて、

「いつか。いつか本当のお家に帰ってしまう日が、帰らないといけない日が来てしまうときは、必ず私に教えてください。豪華なパーティをしますです……っ！ でも、そのときまでは——」

ふわつと俺を抱きしめた。

柔らかくて甘い香りのするお姉さんに、ただただ緊張していると、
「……お二人の家族でいさせてください。たとえウソでも——家族
ごっこだと思っただけでも、構いません」

「は、はい。わかりましたんで」

真つ赤な顔で頷く俺に、

「よかった、です……っ」

ぽんぽんと子どもをあやすように、背中を優しく叩いて答えるお姉
さん。

「そのコートとマフラーはお貸しします。五時までには、ちゃんと返し
に来てくださいますよね？ 返して頂かないと、寒くて明日学校に行
けなくなっちゃいます」

「あつ、もしかしてそのつもりで……」

訊くと、お姉さんはうふふつと耳元で笑った。

「ごめんなさい。悪知恵、働かせちゃいました。ずるいですよね、私」

俺から離れて、ウインク一つ。

その可愛らしい仕草に、俺は慌ててそっぽを向いた。

「ず、ずるくないっす。とても優しいと思います……」

そう言うと、

「あらまあ……！ しゃっちゃんちゃんも、ですよっ」

よしよしと頭を撫でられてしまった。

「うう……っ」

た、確かにコロ美の言うように、撫でられるのって悪い気分じゃ
ねーな……。だし子もフロストナックルも喜んでた理由が分かった
気がするぜ。

つて、なにをアホなことを考えてるんだ俺は！

ともかくにも、時間がヤバイぜ。

俺は頭を勢い良く下げ、そそくさと玄関から飛び出した。

扉が閉まる間際、

「行ってらっしやいですーっ！」

とのお姉さんの声が聞こえたのだけでも。

振り返ると、すでに閉じられてしまっていた。

……なぜか、急に物悲しい気分になってしまう。

そのとき、一陣の冷たい風が俺の肌に突き刺さった。

「肌寒い季節とはよく言ったもんだぜ。いやはや、お姉さんの仰るとおりだな」

コートボタンを留めようとしたところで、

「ふわぁーあ……ですう」

大きなあくびをして、コロナが起きた。

目をゴシゴシ擦ってるそいつを下ろし、

「行つて、きます」

俺は玄関の扉に向かって深々とお辞儀をした。

寒さで震えているのか。

恐怖で震えているのか。

少しでも紛らわそうと、マフラーをギュツと握り締めるが、一向に震えが止まらない。

「……………」

薄々と——気付いていた。気付いて、しまっていた。

おそらく、もう二度と俺は……。

「——パパさん？」

不思議そうな顔で見上げるそいつの頭を一つ撫でて、俺は地図を広げた。

「待ってろよ……シヤオ」

第八十九石：シヤクヤクは正義の味方？

「絶対ワナなんですっ!!」

ファミレスの前まで来たとき、コロ美がそんなことを言って俺の手を引つ張った。

「……なんでえい。まあた勝手に俺様の心ン中を読みやがったなあ？」

「だつてだつて、パパさんずつと怖い顔して黙ってたんです。コロナが話しかけても無視するのです……」

「だからって、お前さんよオ」

そこまで言つて、俺はポリポリと頭をかいた。

両手で俺の手を掴み、ジツと不安そうな顔で見上げてくるそいつに、これ以上無視を決め込む自信が無かった。

「チツ。悪かったよ。こちとら、いささかに切羽詰つていてねエ」とりあえず。

手紙について簡単に説明すると、チビチビは「うぐぐう」と唸つて顔をしかめた。

「ん。腹でも痛いのか？ ここのいらにトイレあつたっけかなア。さいあく草むらでも——」

ひよいつと抱きあげてみると、

「く、草むら!? 否定なのです！ コロナは霊鳴石壺式のことについて考えていただけなんですっ」

「わわっ」
短い手足をパタパタ動かして暴れるもんだから、たまらず放り投げちまった。

だが器用なもので、くるりんと空中で一回転すると背中から緑色に光り輝く羽を生み出すコロナ。

今度は手足の代わりに羽をパタパタとはためかせて、

「……うーん、なんかおかしいんです」

と。俺の肩に着地し、またまた唸るチビチビ。

「何がおかしいんでえい。てか、そんな眩しい羽を出しちまったら他

の人にバレるだろ。早く仕舞っておくれ」

「こ、肯定」

羽を仕舞ったところで、俺は『おかしい』ことについて訊いてみることにした。

すると、コロ美は神妙な声色で、

「これはお姉ちやまから聞いた話なんですけど、霊鳴石は全部で四個あるみたいなんです」

あの宝石が四個……。

するつてえと、俺の試作型式ちゃんにゆりなの零式。

それと、シャオが見つけたという壺式に――

「その三つと、正式採用型霊鳴石・参式という石で全部のハズなんです。ただ……」

「ただ……どうしたんだ？ その参式に何かあるのかイ？」

「いえ、今は参式のことよりも壺式のことなんです」

しばらくコロナを肩車して歩きつつ、その壺式（どうやら読み方は、いつしきで当たっていたらしい）について話を聞いていたのだけれども。

そいつが言うには、霊鳴石はそれぞれある場所で眠っているらしい。

俺の式式が海の底で眠っていたように、壺式も森の奥底で眠っているのだという。

だったら東福森で見つかったのは壺式で確定だなと思いきや、それはありえないと首を振るチビチビ助。

「いつか、お姉ちやまがピース様のお膝の上で眠っていたときに、『シロが壺式を持ち出して壊してしまった』とぼやいていたみたいなんです」

「シロ……？」

「シロツキという白い狐さんなんです。お姉ちやまととても仲良しな幼馴染さんで、顔を合わせるたびにいつも殴る蹴るのケンカをしてました。コロナはお兄ちやまと呼んでいたんです」

……どこらへんが仲良しなのか理解に苦しむところだけでも。

「んで、そのお兄ちやまはどうして壺式を壊しちゃったんでいい」
「それが分からないんです——といいますか、そもそも壊せるハズがないんです」

壊せないとは、またえらく丈夫な石なんだねエ。

そう感心していると、俺のアホ毛を掴んでいたチビチビが小さな声で、

「……だって、お兄ちやまはその時とつくに亡くなっていたんです」
「な、亡くなっていた？　じゃあ、どうやって持ち出して壊したんだア？」

驚いて立ち止まった、そのときだ。

「おい、コロ助、余計なことをベラベラと喋るんじゃねえ！」

空から黒猫が降ってきて、俺の頭の上に着地しやがった。

そいつは、

「おめえなあ、ピースのヤロウに聞かれたらどうするつもりなんだよっ！　いくらおめえに甘いピースだって、限度ってモンがあるんだぞ、わーってんのかよ！」

怒涛の勢いでコロナにまくしたてる。

しかしながら、対するチビチビ助は、

「……肯定。でも、今日は『眠ってる日』だから大丈夫なんです」

意外にも冷静な口調で答えた。

「そうは言っても、最近のあいつは眠りがかなり浅くなってんだ。それに加えて、ツン子が監視してるってのに……」

「否定。お姉ちやまは、いささかに怖がり屋さんなんです。ちよつとくらい平気なのです」

「かっー！　これだから、成ったばかりのガキンちよは手に負えねえ」
「……っーかよオ。」

いつまで俺様の頭の上でピーチクパーチク言い合いしてるつもりなんでいい。

「ほれ、着いたからとつと降りねエ」

コロナとクロエの首根っこを掴んでポイツと放り投げ、俺は地図をスカートのポケットに仕舞った。

ここより東福森。関係者以外立ち入り禁ず、といったごく親切丁寧な看板と長つたらしい石階段を交互に眺めていると、

「シラガ娘。おめえ、本当に行くつもりなのか？ ツン子のヤロウだ、絶対に何か仕掛けてくるぜ」

「そりやま恐ろしいこつて。ともかく、ここまで来たんだから腹据えて行くしかねーつて。五時までには戻らないといけねエし……あれ、なんでお前さん手紙のこと知ってたんだア？」

あの手紙の内容は俺とコロ美しか知らないハズだぜ。

首を傾げると、そいつはあからさまに慌てた様子で、

「そ、そりや、オレくらいの霊獣になるとそれくらいまるっとお見通しだぜっ」

「……ふーん？」

「いやっ、まあそれは置いといて、今日は中々可愛らしい格好してるじゃねーか！ ただでさえ美少女なのに、一段と輝いて見えるぜ」

「まーた、ウソくせエお世辞を」

「ホントだつてホントホント！ もしオレが男だったら放っておかぬーぜ。学校に行ったら男子たちの憧れのアイドルになるかもな、につしし！」

「うええ。勘弁してくれよ……。俺は至ってノーマルな男だぜ」

ゲンナリと答えたところで、俺は改めて自分の格好を見てみた。

そうなんだよなア。お姉さんからコートとマフラーを借りたはいが、これからのことを考えると着たまんまってーのは、さすがにねエ。

俺は石段を途中まで早足で駆け上がると、脇の茂みの中に入って、辺りを見回した。

「よし、ここなら誰も見てねーな」

なにやら。

コソコソ隠れて変身しようとするなんぎ、アニメヒーローのお決まりな行動みたいで、いささかに抵抗を感じてしまう。

とはいえ、一般人に見つかったら面倒なことになるし、このまま森の中を歩いて服を汚したらお姉さんに悪いしな。

それに、相手は模魔じゃなく、シャオなんだ。あいつの性格を考えると、変身を邪魔される可能性もあるっつーワケで……。

「ま、待ってパパさんっ」

「おっ。丁度良いタイミングで」

おぼつかない足取りで俺のあとをついてきたコロナを抱き上げると、

「急に走ってくから、コロナはびっくりしたんです」

園児の足ではいささかにキツイ階段だったのか、ハアハアと息が上がってしまっているチビチビ助。

それでもクール顔を保ってるんだからさすがだぜ。

「わりイ、わりイ。変身するならなるべく見つかりにくいところでっ
て思ってたねエ」

と。コロナの背中をポンポン叩いてると、

「あのシラガ娘がマジメになったもんだなあ。最初はどーなることか
と思ったけど、ちゃんと正義の味方のヒーローしてるじゃねえか。
くーっ、オレは嬉しいぜ」

いつの間にかいたのか、俺の左肩の上で腕を組みながらしみじみと頷
いている黒猫。

正義——ねエ。

いささかに俺とは程遠く、ぞつとしない言葉に鳥肌が立つ。

……なにを勘違いしているのか知らねエが、俺はくだらない正義な
んぎの味方になった覚えは微塵も無い。

そう、クロエの満足そうなツラを横目で見ていると、

「パパさん、ほんとに変身するですっ」

腕の中のコロナが心配そうな声で訊ねてきた。

第九十石：あの子って誰？動揺するクロエ

「ああ。ワナだろうが何だろうが知ったこっちゃねエ。売られたケンカは買うのが礼儀ってモンだぜ」

「わ。なんだかパパさん自信まんまんなんです」

「いっひっひ、式式ちゃんの充電から、だし子の指輪、それにお前さんがた霊獣二匹つつう万全な状態なんだ。すぐに壺式を奪ってやんぜ」

それに、チビ助の腹に蹴りを入れた礼もしなきゃな。頭にゲンコツの一発でもかましてやらア。

「……肯定なのです！」

俺の言葉に決意したのか、頷いて小さな蝶の姿へと戻るコロナ。

そいつが俺の周りをクルクル回り出したところで、

「来やがれっ、霊鳴！」

飛来した青い宝石をパシッと掴む。

「うっし、霊薬はほとんど満タンまで回復してるな」

いつでも行けますぞ旦那とばかりに蒸気を出しているそいつを空に掲げて、俺は一つ深呼吸をした。

……さすがにもう慣れなきゃいけないとは思っただけけども、どうも緊張しちまうぜ。

「し、試作型霊鳴石式、起動っ！ イグリネイション！」

途端、四方八方から青い光が飛んできて、瞬く間に俺の手元を包み込む。

じんわりと暖かいそれを握りなおしたとき、すでにそれは蒼い杖へと変化していた。

「変身……っ！」

その声を合図に、今まで周りを回っていたそいつがピタリと俺の胸の前で止まり、すぐさまエメラルド宝石へと姿を変える。

やけに早鐘を打つ心臓を左手で押さえて、

「——アイシクルパワー！」

もう片方の手で杖を掲げた。

「くっ！」

さ、さつきから、なんだこの威圧感は……。

シャオのせいなのか、壱式とやらのせいなのか知らないが、どうも気分が優れねエ。

……しかしながら、今更引き下がるワケにはいかねエってなもんで！

俺は胸の前で浮いていた宝石を乱暴に掴むと、空へと放り投げ、

「チェンジ、エメラルド！ ビースト……インツ!!」

タイミングよく杖で叩き割った。

砕かれたエメラルドの破片がキラキラと舞い、俺の足元に緑色の魔法陣が浮かび上がる。

裸になった俺は、コスチュームを着せてくれる水流と雪に身を委ねるべく、拳をギュツと握る。

いつものタイミングで暖かいエメラルド色の水が俺の全身を包み、緑の縞パンツをはかせる。

下着が終わったら今度はドレスの番だとばかりに、水色の雪が慌ただしくコスチュームを生成し、着せていく。

黄色いラインの入った青いスカートに、ヘソ部分が丸出しの白いノースリーブなレオタード。

ちゃぽんつと。水溜りに足を突っ込んだときののような音を立てて次々に現れるそれらに、

「なんつーか、あらためて見ると中々に恥ずかしい格好だぜ。まあ、だし子の融合コスに比べればマシだけれども……」

少しだけ頬が熱くなってしまう。

コスチュームの力のおかげか、さつきまでの不快感がウソのように晴れちまったワケで。

いささかに余裕の出来た俺は、自分の変身をマジマジと見物してみることにした。

腰部分には薄い青紫の大きなリボン。スカート横には花のアップリケがついたピンクのポシエット。腕には白いアームカバー。

そして、青く明滅している蝶の形をしたリボンが胸に装着され、最後にそのリボンの中心からコロ美の宝石であろうハートマークのエ

メラルドが顔を出す。

さあ、服は終わった、今度は水滴型のイヤリングを作って髪形をセットして——なんて忙しそうに雪が舞っている様に、俺は小さく溜め息をついた。

「ごちやぐちやとまあ、よくやるぜ。やっぱりコレって、一分くらいかかってるよなア」

うーむむ。時と場合によっちゃ、俺もゆりなのように旧型変身にしたほうがいいのかもしれねエな。

そんなことを考えていると、俺の背中から緑色に光り輝く蝶の羽が生まれた。

——やっとなつたか。

「そーいや髪形ってどうなってるんだろ」

ちよいちよいと頭を触ってみていると、

「ポニ子が言うにはそれはワンサイドアップってヤツらしいな。シラガ娘によく似合ってるぜ」

「げっ!？」

やべえ、クロエが居ることすっかり忘れてた……。

「あんで、そんな恥ずかしそうな顔してんだよ? おめー、もう何回も変身やってんべ」

何を今更と言わんばかりに首を傾げる黒猫。

いやあ、だつてそりやお前さんよ……。

と。そこで俺は唐突にシャオからの伝言を思い出した。

「あ。そうだそうだ、なんかシャオからお前さんについて伝言があったぞ」

「へ? ツン子から?」

「つっ—か、正確にはピースからの伝言か」

ええと。なんだっけか。

「たしか、『あの子がダメなら、またあの子を使うしかない』とか何とか」

イマイチ意味が分からないけれども、と笑って言うど、

「……………」

今までの気の抜けたツラから一転。

ギリツと歯を食いしばり、険しい表情で地面へと視線を落とすクロエ。

「あつ、それと。言い忘れてたが、シャオに呼び出されたことはチビ助には言わないでおくれよ。今日はなるべくゆっくり休ませてやりたいんで」

「……ああ」

と、なんとも気の無い返事。

一体どうしたんだア？　なんて、思っていたときだ。

『パパさん、あつちのほうから強い魔気がムンムン出てるんですっ』
頭の中にコロ美の声が響いた。

——するつてえと、そこにシャオが居るっつーことだな。

なるべく気付かれないうようにと、こっそり茂みの中を進んでいくと、やがて古めかしい建物が見えてきた。

『あそこなんです』

「オーケイ、わかりましたんで」

草木をかきわけて顔だけ出してみる。

どうやらその建物はお寺らしく、なかなか年季の入った佇まいをしている。

「……見つけたぜ」

賽銭箱の前に座って、暇そうに足をブラブラさせている少女を見て、俺は霊鳴を強く握り締めた。

ツインテールを下ろしてストレートの髪型になってはいるが、あの赤髪に黒いマントはどう見てもシャオメイだ。

第九十一石：冷たい手

「あいつ、もしかして俺らを待ってんのか？」

「まったく。何を企んでやがるのか知らねーが、余裕たっぷりつてカンジじゃんか。」

『あれ？ 行かないんです？』

「と、とりあえずちよつと様子見でえい」

俺はその場に座り込むと、ゴクリと喉を鳴らしてシャオを注視した。

大きなあくびをしたり、髪をクルクル弄ったり。マントの中から棒付きキャンデーを取り出して、舐め始めたり。

……なんか、ここに来るまでビクビクしていた俺がアホらしくなるような行動ばかりをとってやがるぜ。

「あつ」

やにわに、シャオが声を上げた。

なんだろうと思っていると、そいつの周りにリスやら小鳥やらが集まってきたではないか。

「ちよ、ちよつと、なにあんた達。小動物のクセに人間様の食べ物をねだるつもり？ 浅ましいいったらありやしないわね」

いやいや、動物相手に悪態ついてどーすんだよ……。しかしながら。このままでは、リスどもが危ういな。

時園で見た光景——影達を尻尾で捕まえ、シャドーの中に引きずり込んでいくあのシーンを思い出し、いよいよ出て行こうかと思っただき。

「……もーつ、うっさいわねえ。わかった、わかったって。でも、こんな安物の飴なんてちつとも美味しくないわよ。三十円よ、さんじゅーえんっ」

そう言っつて、食べかけの棒をヒラヒラ振るシャオメイ。

すると、我先にとそいつらが棒に集まっつていく。

だが、当然ながら食べ方が分からないようで、クチバシでつついたり、持つ部分を前歯でかじつたりといったヘンテコな行動ばかりして

いる。

そんな様子に、シャオがプツと吹きだして笑った。

「バツカバカじゃん。なにしてんのよ、あんたら。ほら、食べられるのはココだつてば」

と。飴のかけらを手の平に取ってリスと小鳥たちに配り始めたではないか。

「言つとくケド、こんなの食べてお腹壊してもあたしは知らないからね。帰ったらママやパパに怒られちゃうんだから……って、どんだけ夢中で食べてんのよ。ったく、ちっこいクセに食い意地だけは立派ねえ」

「……………」

驚きの声すら出ない。

いつも怒っているか、それが笑っていても『不敵な笑み』といった憎たらしい表情ばかりのそいつが。

屈託のない笑顔で動物達に自分の飴を分け与えているだなんて――

『あんな楽しそうな顔、初めて見るんです……』

「けっ。騙されるなって。きつと、これもワナなんだろうよ」

そう。おそらく計算の内だろうって話さ。

俺の魔気とやらに気付いて、小芝居を打っているに違いねえ。

クソツたれめ。どこまでも小賢しいヤツなんだ……胸糞わりィ。

『パパさん……』

「いっひっひ。いささかに恐縮だけれども、俺はお優しいチビ助とは違うんでさア」

迷いの声色で俺の名を呼ぶチビチビにそう言い捨て、俺は草むらから飛び出した。

「お望みどおり来てやったぜ、シャオメイ……！」

杖を振り回してそいつに向けてやる。

……だがあれが、油断なんてするかってんでエィ。

俺は、ゆりなのようにお人好しじゃない。

そして、正義の味方になった覚えもない。

「——さあ、おとなしく壺式を俺様に渡しなア」

いつでも魔法をブツ放せるように、大量の魔力を手元に込め、俺はニヤリと笑った。

＋＋＋

「ぴいっ!?!」

急に出てきた俺に驚いたのか、一目散に樹の上へと逃げ出す小鳥たち。

そいつらをチラリと一瞥して、シャオは緩慢な動きで立ち上がった。

「……ふうん。ちゃんと、あの手紙を読んだみたいね」

さつきまでの無邪気な笑顔なんてとつくに消えちまっている。

そいつは、おそろしく冷たい表情で俺を睨みつつ、

「やっぱり猫憑きは居ない、か」

と。低い声で言い、続けて何かを呟いた。

やたらと小さな声だったもんで、上手く聞き取れなかったのだけども……一体なんて言ったんだア？

うーむと、俺が眉をひそめていると、

「来なさい、シャドー」

スツと指輪に口づけをして簡易召喚を果たすシャオメイ。

黒い粒子とともに背後へ現れるブラックホールに、俺は一步だけ後ずさる。

こいつ、シャドーなんて呼んで——まさか、ここで俺とやり合うつもりなのか？

……ああ、なるほどねエ。そういうことかい。

「わかったぜ。端から壺式なんてもん無かったんだろ。森におびき出して俺たちを始末しようって魂胆だったとはね。いやはや、まったく恐れ入るぜ」

まあ、そんなこったろうとは思っていたがな。

そう薄く笑ったとき、そいつのスカートの中から尻尾がニユルリと顔をのぞかせた。

「チツ。マジでやるつもりかよ」

無言でこちらへと近寄ってくるそいつに身構えていると、

「……ククク」

不気味な笑い声と同時に、尻尾が樹の上まで伸び、退避していた小鳥とリスを捕まえたではないか。

なにをされているのか解っていないのか、首を傾げてシャオを見上げている小鳥たち。

「な、何をするつもりなんでえい？」

そう訊くと、シャオは鼻で笑って、

「さつきからチヨロチヨロと目障りなのよねえ、このゴミ虫ども」

「……!？」

そのまま、ポイツとシャドーの中へ——ブラックホールへと放り込んでしまいやがった。

あっけなく葬られたそいつらに唾然としていると、

『酷過ぎるんです……』

悲しそうな声でコロ美が呟いた。

さつきまであんなに楽しそうにじゃれ合っていたのに。こんなに簡単に殺してしまうだなんて。

「クソが……ッ」

やっぱり、こいつは普通じゃねエ。

ゆりなには悪いが、こんなヤツと『仲良く』だなんて到底無理な話だ。

俺はキツとシャオを睨むと、

「どうでえい、チビチビ。これで解つただろ？ ああいうことを平然とやっちまうヤツなんだよ。だから、手加減や同情は一切なしで頼むぜ」

『……肯定なのです』

つーか、手加減もなにも。全力を出さないとハッキリ言つて勝ち目ないだろうな。

そもそも全ての魔力を出し切ったところで——

「あのさあ。さつきからなにブツブツ言ってるのよ。ほら、こっちだつてば」

いつの間に俺の横を通り過ぎていたんだろう。

呆れ顔で手招きをしているそいつに、

「……広い場所でやろうってか。まあ、俺はどこでも構わないんだがねエ」

霊鳴を曲刀——アクアサーベルへと変化させつつ言ってる。

「バツカバカじゃん。あんた如きがあたしに挑もうだなんて百万年早いだよ。それより、アレよ、アレ」

「アレ……？」

シャオが顎で指した方向に、なにやら白い霧がかかっていた。

なんだろうかと。頭に疑問符を掲げながら目を凝らしたときだ。

突然、森全体が暗闇に覆われたかと思うと、ポコポコと淡く光る緑色の玉のようなものが地面から湧いて出てきたではないか。

「な、なんでえい!!? シャオ、お前さんの仕業かア?」

「バーカ。そんなわけないでしょ」

一つ肩をすくめてから、ずんずんと草木をかきわけて進んでいくシャオメイ。

そのまま白い霧の中へと入っていくそいつに、俺は思わず喉をゴクリと鳴らした。

よくあんな危なそうなところにズカズカ入っていきけるな……紗華
夢なんたらさんの余裕なのか、はたまたただの命知らずか。

「おい、チビチビ。あの霧の中には何があるんでえい? それとこの
ヘンな緑の発光体はなんだア? いきなり夜になっちまうし、まった
くワケが分からねーぜ……」

と。俺は自分の胸にある寶石に手を当ててコロ美に訊ねてみた。

『コ、コロナも分からないんです。でも……式式の反応を見る限り、こ
の先に壺式があるかもしれないんです』

言われて気付いたが、確かに式式がおかしな反応を見せている。

サーベルに変えたハズなのに勝手に杖の状態へ戻ってるし、ピカピ
カ明滅したり、水蒸気を出したりと、いささかに興奮気味だ。

ううむ。もしかして霊鳴同士で『共鳴』でもしてるのかねエ。

でも、壺式はすでにシロツキとやらの壊されてるんだろ? するっ

てえと、残る霊鳴は参式つつうことに――

「ちよつと、なにボケツとしてんのよつ。あんたもはやく来なさいつてば」

「うわわっ!?!」

急に手を引つ張られたもんだから、盛大にずっこけてしまった。

口の中に入った土をペツペと吐き出しつつ顔をあげてみると、そこにはシャオメイがむくれ面で立っていた。

いわゆる仁王立ちというポーズで、

「……バカでふ。なんで猫憑きを呼ばなかったのよ。怖いんなら一緒に来れば良かったじゃん」

「へっ。チビ助を呼ぶまでもないってね。っーか、別に怖くなんかねエし。ただ考え事をしていただけでえい」

コスチュームについた葉っぱを払いながら立ち上がると、そいつは「ふうん?」とイヤミな笑みを俺に飛ばした。

「そーなんだ。あたしはてつきり猫憑きを庇っているのかと思っっていたわ」

「庇う?」

「だって。あの子がココに来たら、また酷い目にあっちゃうかもしれないじゃない。だから……猫憑きには秘密にして一人で来たのになつてさ」

「……………っ!」

凶星を突かれ、俺は思わず言葉を失ってしまった。

ただうろたえるばかりの俺に、シャオはフツと少しだけ表情を緩めて、

「あんたってホント分かりやすいわよね。ちよつとは隠す努力をしたほうがいいわよ。『目は口ほどに物を言う』なんてことわざがあるけど、バカでふの場合、目じゃなくてコレね」

と。俺の頭のでっぺんから飛び出しているアホ毛を指で弾きやがった。

どういう意味なんだろうかと、毛をちよいちよ引つ張っている

「まつ。猫憑き一人ならまだしも、あんたみたいな低レベルが一人で来たところであいつを鎮めることは無理だと思うケドね。ましてや壱式を奪うことなんて絶対に出来っこないわ」

「あ、あいつって誰のことを言ってるんだ？　というか、壱式はお前さんが持つてるんじゃないのか？　あ。でも、コロ美が言うには、とつくに壊れちまつてるみたいだけれども……」

そう言うと、シャオは再び真顔になってこちらに背を向けた。

そいつは自分の髪をクルクル弄りながら尻尾とシャドーを仕舞うと、

「……イチイチ答えてらんないってーの。直接見たほうが早いわよ。ほらっ」

なんて、手を差し出してきたではないか。

「あ、ああ……」

思わずその手を握ったのだけれども——あまりの冷たさに、俺はパツと手を離してしまった。

「なによ。別にあんたを取って喰うつもりなんてないわよ……今のところはね」

ううっ。いささかに不気味なことを言いやがるぜ。

「そういうワケじゃなくてよオ、なんかお前さんの手がやけに冷たくてさア」

少しだけ肩をすくめてもう一度手を握ると、

「バツカバカじゃん……あんたが、あたたか過ぎるだけよ」

ぼそりと小さく呟いて、霧の中へと歩を進めた。

第九十二石：壺式と咆哮

鈍重な黒い雲が空一面に広がり、その隙間から赤暗い光の柱が地上へと降り注いでいる。

小さいときに親父から教えてもらったのだけれども、こういった現象は薄明光線というものらしい。

しかしながら。強い太陽光じゃなく、弱つちい月の光でこの現象が起きるたア驚きだぜ。

少しだけ顔をのぞかせている赤い満月を見上げたのち、俺はくるりと周りを見渡した。

色という色を失った葉や木々。霧の中へ入るまではイヤというほど聞こえていた虫の声も、今は一切しない。

「や、やけに静かね……」

珍しく不安混じりの声に、俺はふと隣を見た。

キヨロキヨロとせわしなく辺りの様子をうかがっているシャオメイ。イ。

「これはこれは。まさか、お前さん怖いのかイ？」

「うっさいわねえ。あんたの方こそ、ぶるぶる震えてるじゃん。てか、あんた男なんだからあたしより先に進みなさいよ」

「い、いやはや。まことに残念ながら、今は女の子なんですア」

「チツ。女の子だったら、少しは可愛げつてもものを持ちなさいよね、まったく」

「……お前さんにだけは言われたくねエよ」

そんな言い合いをしていると、またまた緑の玉が地面から浮き上がってきたではないか。

「!？」

二人で声にならない悲鳴をあげ、ギョツと手を握りなおす。

ジツトリと汗ばむ手。一体、汗をかいているのはどちらなのか。

つーか、どっちもだろうな。いささかに情けない話だけれども

……。

「いつたい何が始まるのかねエ」

無数に現れた光の玉。それらがゆっくりと上昇していく様を固唾を呑んで注視していたとき。

「あら？…これなにかしら」

そう言つてその場に座り込むシャオ。

手を繋いだまんまだから、それに引つ張られるように俺も座つてみたのだが――

「もしかして……墓か？」

淡く光る玉のおかげか、薄っすらと照らされる墓石。

とはいえ。そこまでしつかりした物でもなかった。

手の平サイズの長細い墓石に、周りには葉っぱやら、ドングリやらが並べられている。

かろうじて墓と分かるレベルという感じか。そもそもなんでこんな森のど真ん中に墓があるんだ？

「ふくん。ちんちくりんな墓ねえ。死んだペットとかを埋めたのかしら」

「ああ、そうかもな。だったら、普通は墓石に何か名前が書いてあるはずだけれども」

「そうねえ。暗くてよく見えないわ……よいしょつと」

と。シャオが手をかけたとき、バランスが崩れたのだろうか、墓石が倒れてしまった。

「あーあ、なにやっつてんだか。罰当たりなヤツだねエ。こういうのはちゃんと戻しておいたほうがいいぜ」

そう、俺が石を立てようと手を伸ばしたところで、

「……あはっ！ 分かったわ、そういうことだったのね！」

いきなり大声をあげたかと思うと、墓石をむんずと掴んで立ち上がるシャオメイ。

お、おいおい……なにしてんだよコイツは。

そんな俺の非難の眼差しに、

「バツカバカじゃん。あんた、まだ気付かないの？」

ニヤリと、余裕たつぷりの笑みを返してきやがる。

「ご主人様より、あんたの霊鳴石のほうがよっぽど勘が鋭いみたいね」

「…………へ？」

ふと、立ち上がって右手を見てみると、いつの間にか式式が宝石状態へと戻っていた。

「ど、どうしたんだア？」

思わず手を開いてみると、嬉しそうに蒼い光を放ち、ぴよんぴよんと跳ね回る式式。

そいつを見て、俺はようやく気付いた。

「まさか…………それが？」

「そう——これよ、この墓石こそが式式だったのよ…………！」

と、シャオが自慢げに灰色の石を天に掲げたその瞬間、低い唸り声とともにいきなり地面が揺れだした。

「な、なんだ!?! シャオ、お前いつの間に式式の封印を解いたんだっ」

「えっ！ 違うわよ、あたしはまだ霊鳴と契約すら——きやあ!?!」

あまりの揺れに足を取られたのか、すってんと転んでしまうシャオ。

「…………ツ！」

そいつの手から零れ落ちた式式を俺は見逃さなかった。

今だ…………今しかねエ！ あいつには悪いが、霊鳴を奪ってとつとこの場から退散させてもらうぜ。

シャオより先に契約し、封印を解けば——式式は完全に俺のモノになる…………！

そう、地面に転がっている墓石へと手を伸ばしたときだ。

突然なにやらヘンなモノが視界に映った。

「…………足？」

白く、毛むくじやらかな巨大な足が、俺と墓石を遮るように音も無く置かれる。

おそろおそろ見上げてみると——

「うわああ!?!」

おそろしく巨大な白狐が俺を見下ろしていやがった。

未だに地面から生まれている蛍のような緑色の光が、どんどんとそいつの体に吸い込まれていく。

そのたびに巨体はますます凄まじい巨体へと成長していくワケで……。

「わわ……」

腰砕けになり、あわあわと後退している俺には目もくれずに、そいつは墓石へと振り返ると、白い尻尾で器用に石を掴みあげた。

そして——その石を自身の眼前まで持っていったかと思うと、青い瞳をスツと細める。

「い、一体何をしてるんだア？」

というか。この狐は何者なんだろう。

そういえばさつきシャオが、あいつを鎮めるとか言っていたが……まさか、あいつってこの白狐のことなのか？

微動だにしない狐を見上げながらそんなことを考えていると、

『お兄ちやま……！』

いきなりコロナが叫んだ。それと同時に目を見開く白狐。

「え、お兄ちやまって、あの死んだシロツキとかいう霊獣——」

言い終えるより前に、白狐……シロツキが甲高い遠吠えをあげた。途端、尻尾に巻きつかれていた灰色の墓石が淡い緑色の宝石へと色を戻し、続けざまに銃のような形へと変化した。

その銃口から緑色の火炎が噴出したかと思うと、瞬く間に白い巨体を覆っていく。

「こ、こんな化け物を鎮めろってか……ムチャ言ってくれませ」

やがて戦闘準備が整ったのか、シロツキは尻尾を——銃と化した壺式を振り上げると、とてつもない跳躍で俺に飛びかかってきた。

第九十三石：シャクヤク V S 墓守の白狐

「くっ……い！」

すんでのところで避けたはいいが——なんてスピードでえい。チツ。俺の羽だけじゃあ、いささかに心もとないぜ……。こうなったら、だし子呼んで加速するつきやねーな。とにもかくにも式式が無いと始まらないので、

「こつちに来い、霊鳴っ！」

右手を前方にかざして叫ぶ。

そんな俺の呼ぶ声に慌ててすっとなで来たサファイア宝石を掴み、「再会してすぐに壱式と戦わせてワリイな……試作型霊鳴石式式、起動。イグリネイション！」

杖へ変化させてすぐさま、

「コロナが魂よ、我に翡翠の水を宿せ！　ぷくゆゆんぷゆん、ぷいぷいー、ぷうっ！　すいすい——」

水付与とともに呪文を唱えつつ、俺は口をモゴモゴと動かした。

二、三回噛むと、口の中にメロンソーダ味のガムが現れる。

さらに噛み続けて、ぷくくつと巨大なフーセン状態まで膨らませると、その中にネバっこいシャボン玉をたくさん入れるようイメージする。

そのイメージ通りに緑色のフーセンガムの中に無数のシャボン玉が詰められたところで、俺はフーセンをちぎり、

「おらよ、受け取りやがれ！　『バブルガムフェロー』ッ！」

睨み上げているシロツキに向かって力まかせにぶん投げた。

後方へ飛び、尻尾をくねらせて壱式——散弾銃でバブルガムを打ち落とすそいつに、俺はニヤリと笑う。

「いつひっひ。予想通りつてねエー！」

そのまま杖を掲げて、

「すいすい、『エメラルドダスト』！」

杖先から凄まじい勢いで噴出る水蒸気。

それが空へと昇りかけたところで、シロツキが俺めがけて猛突進し

てきた。

「へっ。この大魔法のヤバさに気付いたのかもしれないが……阻止しようたって無駄だぜ」

言った直後、ガクンと勢いを落とす白狐。

そいつの足元にはさっきのフーセンガムが付着していた。

ネバネバと、まるで粘着シートに引つかかかってしまったネズミのように身動きが取れずにいる。

「いやはや。こうも上手くいくとはね。どうでえい、俺様のバブルガムは？」

唸り声をあげながら必死にもがくそいつに、俺はフウつと息をついた。

へへっ……溜め息が震えちまってるぜ。

ま、そりやそうか。シャオの手前、余裕ぶって見せてはいるが、正直言って本当に成功するとは思ってもいなかったもんで……。

『わわっ。パパさんの魔法面白いんです。なんか発想が凄いです。ワクワクするのですっ』

「……んな褒められるような魔法でもねエって。昼に行ったファミレスのレジ前にガムがあっただろ？あれとコロ美と飲んだメロンソーダをテキトーに組み合わせただけでえい」

『なるほど、なのです。じゃあ、次はコロナが貰った飛行機のおもちやで何か創って欲しいんです』

「あのなあ……。こちとら遊びで創ってるんじゃねーんだぞ」

というか。死んだお兄ちやまが襲ってきてるつつう、とんでもない状況なのに、なんでそんなにあっけらかんとしてやがんだア？

普通は少しくらい動揺しそうなものだけでも……。

なんて思っていると、霊鳴がピカッとフラッシュして発動準備完了の合図を俺に送った。

「おっ、もう雲が出来てるじゃねーか。早い、早いっ」

そろそろバブルガムの粘着効果も切れそうだし、これ以上魔力を込めてらんねーな。

よしっ、と。杖を振り下ろしたその瞬間、シロツキの尻尾に巻きつ

かかれていた壺式が散弾銃から拳銃のような形へと変化した。

『パパさん、デネブ——じゃなくて、リボルバーモードの壺式はショットガン時より飛距離が伸びるんですっ』

「言われなくなっちゃって……そんなことっ！ すいすい、口から泡マシンガンっ、『バブルガムフェロー』！」

もう一度口から小さなバブルガムを出しまくり、そのまま羽ばたいて後ろに飛び退る。

細氷を喰らいながら撃ってるためか、やたらめったらにぶつ放される銃弾。

ダストが氷を撃ちつくすのが先か。それとも、壺式の銃弾が切れるのが先か……。

『否定。霊鳴に銃弾の制限なんてないんです。無限なのです』

「そ、そりゃそーか。普通の銃じゃねエもんな……っつと、うわわっ」

目の前で弾けたバブルガムを見て、俺は慌てて大樹の後ろへと退避した。

……ふへえ。あぶねー、あぶねエ。

たまに来る流れ弾をガムがなんとか防いでくれてるつつう状況だからまだマシだが、狙いを絞られたら一瞬で蜂の巣だぞこりゃあ。

とにかく、ダストが時間を稼いでくれてるこの隙に！

「出番だぜっ、だし子！」

小指にはめられた金の指輪——ゴールデンベリルにキスをする。

……が、一向に出てくる気配が無い。

『パパさんの魔力レベルだと、簡易召喚はまだ出来ないのです……』
「うっ」

すっかり忘れてたぜ。呼ぶなら完全召喚じゃねーと俺の場合ダメなんだったな。

レベルが低いつつうんなら、どっかで効率の良いレベル上げでも教えて欲しいものだけでも。

とりあえず気を取り直し、

「我は欲す。汝が纏う忌むべき力を！ 来やがれ、ダツシユ・ザ・アナエルツッ!!」

呪文を最後まで唱え、キスをすると、

『おまえさん、あなな、会いたかったしっ!』

「うぐえっ!?!」

ギユツと、後ろからチョークスリーパーよろしく首に抱きつかれてしまった。

「な、なにしやがるんでえい、このバカ鮫! げほっ、ごほっ」

咳き込みつつ、背後のそいつの頭にフロストチョップをかましてやる。

『あうっつ、痛いしい。あなな、バカになっちゃうう』

「……大丈夫だって、お前さんはこれ以上バカになんねーよ」

『ほっ。良かったし!』

と。八重歯を見せて笑うこいつは、俺の第一の下僕であり、正式名称は確か……第八番模造魔宝石ダツシュ・ザ・アナエルとかだっけか?!

なんとも長ったらしい名前に加え、語尾によく「だし!」をつけているから、だし子というあだ名で呼ぶことにしている。

バカにされてるのも分からないほどのおバカなガキンちよだけれども、これが色々と凄かったりする。

巨大な鮫に変化してシャークドライブを楽しむことも出来れば、GFシールドつつう金色の盾を出したり、拳句の果てには俺と融合してパワーアップまでしてくれるっつう。

ランクEなのに、これがまた凄まじく頼りになる模魔なワケで。

まあ。ネム曰く、俺のために色々と無理して力を出しているみたいだけれども。

……うーむ。

「殴って、わりイ」

なんとなくフワフワの金髪を撫でておく。

すると、そいつは「えへへ」と言っつて照れくさそうに俯き、

『あなな、へーき、よゆう』

お決まりの文句が書かれたメモ帳を俺に突き出した。

ショートカットの金髪に、水色のおおきな瞳。人型時は、おそらく

七、八歳くらいだろうか。

それよりも特徴的なのは、どこかの運動会の帰りなのかと聞きたくなるほどの格好だ。

赤いハチマキに、赤いブルマ。白い体操服の端っこには、小さく『あなな』と書かれたゼッケンが縫われている。

「改めて見ると、ヘンテコな格好してるよなア、お前さん」

『……あうっ?』

指を咥えて首を傾げるチビ鯨を見てみると、

『パパさん、のんびりお話している暇ないんですっ！ 強い魔気が近づいて来るんです……!』

やにわにコロ美が叫んだ。

「オーケイ、わかりましたんで。だし子、相手は大霊獣様だけれども……戦えるか?」

『戦えるか、じゃなくて、戦えって命令していいし！ あなな、おまえさん、ゼツタイ守るっ』

「いつひっひ。頼もしい限りだねエ、まったく」

シロツキ——エメラルドダストから抜け出したか……。

だが、時間は稼がせてもらった。だし子さえ召喚出来てしまえば、こっちのモンだけ。

いつでも来いとばかりに身構えていると、いきなり上空にブラックホールが開いた。

そんでもって、その中からシャオメイがのっそりと現れた——のだけれども。

「うげっ。ここが東福の森い？ 薄気味悪いところねえ。本当にこんなところに霊鳴石壺式があるのかしら」

そう言いながら軽い身のこなしで地面へ着地すると、そいつは赤いツインテールを手で払い、

「あら、バカてふ。このあたしを呼び出すとはいい度胸してるじゃない。お望み通り来てあげたわよお？ ふふっ、夜紅様は逃げも隠れもしないんだから」

と。髪の毛を指先でクルクル弄りだした。

第九十四石：熱い手

な、何を言ってるんだこいつは……？

呼び出されたのは俺の方だし、壺式を見つけたのはテメエだろうに。

「おつかしいわねえ。いつの間に陽が落ちたのかしら。さっきまで明るかった気がするんだケド……。きやつ、なにコレ？」

と。おつかなびつくりといった様子で、浮遊している光の玉をつんと指でつついてるシャオメイ。

まるで初めてこの森に入ったと言わんばかりの態度に、俺はますます首を傾げる。

「……おい、お前さんよオ、一体全体どういうつもりなんでエい。そんな小芝居を打ってる暇があったら、あいつを鎮めるのに協力してくれよ」

そう言ってみると、

「はあく？　ぬわあんで、このあたしがあんななんか協力しなきゃいけないのよ！　っていうか、あいつって誰よ。よくわかんないケドさあ、沈めたければバカてふのお得意の水魔法で沈めたらいいじゃん」

これはこれは……。

どうやら、『しずめる』つつう言葉を勘違いしていらっしやるようだけれども。

「……いささかに笑えんギャグだな」

「なにそれ。ギャグなんか言ったつもりないわよ。まっ、あたしから言わせれば、あんたと二人つきりつつう、この状況のほうがよくほど笑えないギャグだけど」

凄まじく失礼なことを言って、大げさに肩をすくめるシャオ。

——なんつーか。どうも芝居を打ってるようには見えないぜ。

まさかとは思うが。滑って転んだときに頭を打って、森の記憶だけすっぽ抜けちまった——なんてオチかねエ。

「どちらにしろ、あいつが現れたのはお前さんが壺式を取ったせいな

んだから、おとなしく協力を——」

言いかけ、はたと動きを止める。

んん？ よーく見れば、さつきとちよつと違うぞコイツ。

さつきはツインテールじゃなくてストレートだったハズだし、それに目のクマもすっかり消えてやがるぜ。

いや、待った。クマは寺で見かけたときから消えてたような気も……。

「な、なによ。人の格好をジロジロ見て……。そういえばあんた、中身は男だったわよね？ うげつ。まさかこの森に呼び出した理由って……」

さきつとマントを着なおすと、中のスカートを押さえつつ一歩下がるシャオメイ。

何を勘違いしているのか知らないが、その不審者を見るような目は頂けないので、

「ばーろおい。ただ、お前さんの真っ黒い目のクマが無くなってるのがいささかに不思議でさア」

「……ああ、そういうコト」

あからさまにホツと胸を撫で下ろしたそいつは、目のクマについて少しだけ語り出した。

とはいえ。ジユゲムなんとやらという単語が出た時点で、ほとんど頭に入って来なかったのだけれども。

ええと、確か……魔力を使いすぎると目のクマが薄くなるみたいなのを言っていたような気がするぜ。

あとは寝不足のとき、だっけか。まあ、フツ―は逆にクマが出ると思うんだけどねエ。

「フ―ことは、今は寝不足ってことかい？ それとも魔力がすっからかん状態なのかね」

訊くと、そいつはいつもの不敵な笑みを浮かべて、

「クマが全部消えてるんなら、そのどっちもってことよ。ふふん、だからと言ってLevelⅡマイナーのあんた如きに負けるあたしじゃないケド」

いつでもシャドーの指輪にキス出来るように、と。ゆつくりと右手を口元に持つてくるシャオメイ。

「さあ、そろそろ壺式の在り処を教えてもらおうかしら。言っとくケド、ヘンな気は起こさない方が身の為よお？」

威嚇のつもりか。黒い尻尾がマントの下から顔を覗かせる。

蛇のようなそいつが鎌首をもたげたとき、

『ダメッ！ や、やらせないしっ！』

俺の肩を跳び箱のように飛び越えて、だし子が目の前に立ちはだかった。

手足を広げて、ジツと俺を見つめているダツシユ——って、待て待て。

「なんでコツチを向いてるんでえい。まさかお前さん、俺様を裏切るつもりかい？」

『あうっ!? 間違えたし……』

一瞬のうちにハチマキ娘の頬が真っ赤に染まる。

すぐさまそいつがシャオの方へと振り向いたその時、森の奥から甲高い遠吠えが聞こえてきた。

「な、なによこの声……野犬か何かかしら？」

「おっと。やつこさんが俺たちのことを探してらア。だし子、オートマモードで頼むぜっ」

『おっけ、了解だしー!』

俺の言葉に、力強く頷いて背後へと戻るダツシユ。

そしてそいつが目を閉じたと同時に俺の足が金色に光りだした。

やがてフワリと地面から数センチだけ浮き上がる。

「ちよつとちよつと、どこへ行くつもり？ まだ話は終わってないわよっ」

「いっひっひ。いやあ、丁度良いと思ってねエ。お望みとあらば壺式のところまで案内してやるよ、お姫サマ」

そう言つて、ギユツとシャオの手を掴んだのだけれども。

「やつ！ き、気安く触らないでよっ、エッチ！ スケベ！」
パツと手を振りほどかれてしまった。

あんだア？ さつきはテメエのほうから手を握ってきたじやねーかと抗議の声をあげようとしたのだが——それよりも不思議なことに気がついた。

「んん。冷たくねエぞ？」

霧の中に入る前は凄まじく冷たい手だったのに、今は逆に熱いくらいだった。

ふーむ。どう考えてもおかしな点が多すぎるんだよなア。

「……やっぱり、所詮はあんたも」

ギリツと俺を睨みつけながら吐き捨てるように呟くシャオメイ。

「俺も、なんでえい？」

言葉の続きを促してみたのだけれども、そいつはただ唇を震わせるばかりで何も喋ろうとしない。

さつきまでの威勢はどこへやら。

気のせいかな、どことなく怯えているようにも——

『おまえさん！』

『パパさんっ！』

突然、右と左からステレオでチビどもが俺を呼んだ。

「い、いきなり大きな声を出すなよなア……鼓膜が破れるかと思ったぜ」

と。耳の穴に小指を突っ込んだときだ。

それ以上にデカい破裂音と共に、背後の大木が引き裂かれたではないか。

振り返ってみると、銃から刀へと形を変えた壺式が深々と大木に刺さっていた。

第九十五石：三叉の槍

まさしく一刀両断といった具合。

時間差で大木から緑色の炎があがり、そして同時に壺式の刀身が巨大に膨れ上がっていく。

「まさか、周りの炎を吸っているのか？」

『肯定……。壺式は自分が燃やしたモノの魔気を吸えば吸うほど火力があがっていくんです』

「へえ。それはそれは。まさか、式式ちゃんにもそんな特別な仕様があつたりするのかい？」

『残念ですが、否定するです。あれは壺式だけなのです』

「……さすがは正式採用型大センセイといったところか」

『うーっ。確か、壺式は正式採用型じゃなかったはずなんです。でも式式のような試作型とかじゃなくって……ええつと』

それつきり考え込んでしまうコロ美。

とにもかくにも。今はそんなことはどうでもいいワケで。

「まずは、シロツキお兄ちやまをなんとかしねエと……」

一回りも二回りも大きくなってしまった眩いエメラルドソードを雑に引き抜き、その裂け目から顔を覗かせる巨大な白狐。

そいつを前にして、シャオは目を丸くして一人ごちた。

「これは……。チューズデイ？ いえ、でも確かピース様が言うには今のチューズデイは小さな女の子だったはず。それに、なに？ なんなのよ、この奇妙な感覚は——何者なのよ、コイツ」

酷く動揺している様子のシャオメイを見て、俺は一つ質問を試みる。

「おい、シャオ。あの化け狐の尻尾が挿んでいる刀。あれに見覚えねエか？」

「な、ないわよ……」

「……あれが霊鳴石壺式ってヤツでえい。さつきお前さんが見つけたんじゃないか。ほら、墓石を持ち上げてき」

「知らないってば！ あんた、なに言ってるのよ。夕方の四時くらいに取りに来るから、奪えるもんなら奪ってみろって言ったのバカでふでしょ？」

続けて、ファミレスから帰った後にパーカーの腹ポケットから手紙を見つけたことや、リスたちに飴をあげた覚えも無いことを俺に話すシヤオ。

「なるほどねエ、そういうことかイ……。ようやく合点がいったぜ」「ど、どーゆうことよ！ 一人で勝手に合点いつてんじゃないわよつ」と。その時、凄まじい咆哮とともにシロツキが尻尾を振り上げたではないか。

『来るんですつ、パパさん！』

「オーケイ、わかりまし——」

「ひゃつ!？」

大狐の迫力に驚いたのか、ペたんとその場に座り込んでしまうジュゲムなんとやらさん。

らしくない……。と言うほどこいつを知っているワケではないが、それでもやはりおかしいと思うもので。

「なにやってんだア？ とつとつシヤドーを召喚したらどうなんですかい」

「……………」

しかしながら、返答は無い。

ガタガタと震えながらシロツキを見上げているそいつに、俺は心中で大きく舌打ちをした。

なんなんだア？ 本当にどうしちゃったんだか。

『パパさん、あの人を心配してる場合じゃないんですつ！』

『おまえさん、回避はあななが頑張るから、今は攻撃に専念して欲しいしっ』

「わ、わーってるって」

そりゃあ、ここでこいつを見捨てるのは簡単だけれども。

簡単、だけれども——

次の瞬間、こめかみに鋭い痛みが走り、モノクロ映像が俺の頭の中

に入ってくる。

くそつ、またかよ。

ダツシユ戦でゆりなが捕獲呪文を唱えたときにも似たようなことがあった気がするぜ。

とりあえずその映像を観ていたのだが……なんだ、こりゃあ。

俺が槍みたいなのを持って巨大な狐と戦っている映像——いつも愛用しているアクアサーベルつつう曲刀じゃなく、まるで神話に出てくるような三叉の槍を振り回している。

それよりも。俺の背後で震えているツインテールの少女は……もしかしてシヤオか？

狐がその少女に近づこうとする度に、サイドテールを揺らして俺がそいつを撃退する。

無音で繰り返し広げられるその映像に、ただただ夢中になっていたとき、

「ウソ……知らないハズなのに、なによ、この懐かしい匂いのする魔気は。夜紅だからそう感じるの……？ それとも——」

にじり寄ってくる白狐を見つめながら呆然と呟くシヤオメイに、俺はハツと顔を上げた。

シロツキの放つ精神攻撃のせいなのか何なのか知らないが、まったくもって無防備な状態のシヤオ。

女の子座りのまま呆けているそいつと、全身を激しく燃やして威嚇するシロツキ……そいつらを交互に見て、俺は下唇をギュツと噛んだ。

「ちくしょう、どうすりゃいいんだ……」

シヤオは俺たちの敵だ。

こんなクソみてえな性格のヤツなんざ、生かしておいてもロクなことになんかならない。そんなのは百も承知の助だ。

しかし、映像の俺はこいつを庇っていた。

……あんな不可解な映像なんざに従うつもりは毛頭も無いが、もしもチビ助がこの場に居たら、きつとこう言うだろう。

『しゃっちゃん、一緒にシヤオちゃんを守ろうよっ！』

と。

そこまで考え、俺は頭をボリボリとかきむしった。

「だああ、クソめんどくせエー！」

言いながらシャオの前に羽ばたいて、上空へと杖をぶん投げる。

「……いいか、勘違いするんじゃないぞ。俺はテメエを守るんじゃない。テメエを守りたいっつう、ゆりなの気持ちを守るんだからなっ！」

手を掲げて杖を掴むと同時に、俺はあの映像を思い出すべく目を閉じた。

えくつと、あの槍の形はどんなんだっけか……。

まあいいや、とりあえずテキストにイメージしてそれっぽい名前をつけとけてなモンで！

「ぷくゆゆんぷゆん、ぷいぷい、ぷう！ すいすい、『ブルーランス』ッ！」

呪文を唱えた途端、慣れた動きで即座に三叉の槍へと変化する式。

な、なんつーか、アクアサーベルのときよりもスムーズに変わったような気が……あれ？

『わ、すっごいデカイ槍さんなのですっ』

『ホントだし……。なんか、剣よりもゴージャスでかつちよいいし！』
チビチビとだし子がキャッキヤと感想を言っている中に俺も加わりたいところだったけれども。

それよりも気になった点がある。

それは持ち直してみて気付いたんだが、槍の持ち手部分——柄が、まるでバイクのグリップのような感じになっているのだ。

もしかして、単純明快だったサーベル時とは違って、何かギミックみたいなものがあるのかねエ。

ううむ……いささかに不思議だぜ。そんなイメージなんかしていないハズなただけだな。

普通だったら自分の想像そのままに武器や魔法が創れるんだが、この槍の場合は——

『……来るっ！ おまえさん、はやく槍を構えて欲しいしっ！』

背後のだし子の声に慌ててシロツキの方へと視線を移すと、まさに口から炎を吐き出す寸前だった。

『パパさんっ、お兄ちやまのファイアブレスは威力よりも目くらましがメインなんです！ 炎だけだったら槍でなんとか防げると思うのですっ』

「オーケイ……わかりましたんでっ！」

そんなコロ美のアドバイスに一つ首肯し、俺は三叉槍——『ブルーランス』をぶんぶんとその場で大きく振り回した。

第九十六石：エンジンを掛ける！真の変化アクセルラ ンス

やけに眩しい緑色の炎。

口からのブレスだけではなく、そいつの体中に纏う炎までもが俺を襲ってきやがるが、槍を回転させるだけであつという間に霧散してしまつた。

「はあ、はあ……」

た、確かにコロナの言う通りだつたな。

あの炎をこんなにあつさり防げるとは思ってもみなかつたが……なんてブルーランスを眺めていたとき、

『あうっ！』

突然、俺の後ろに居るダツシユが悲鳴をあげた。

「なっ、どうしたんでえい!？」

『わ、わからないしっ。いきなりあなの背中が爆発したし……』

背中？

と。そいつの背後を見てみるとそこにはメラメラと熱そうに燃えるクリスタルのようなものが浮いていた。

白狐が纏っているような緑の炎。

霊鳴石壺式のような緑色の宝石。

「なんだ……ありやあ?」

もしかして霊鳴を飛ばして遠隔攻撃しているのか？

そう思つてシロツキの尻尾を見ってみるが、依然として剣となつた壺式をガツチリ掴んでいる。

するつてエと一体あれは――

『まさか、フアムルス!?!』

コロナ美がいささかに驚いた声で言う。

「ふあ、ふあむ……なんだつて?」

『多分ですが、あの炎石はフアムルスという高レベル魔法なんです。コロナもお姉ちゃまから少し聞いただけで詳しくは知らないのです。』

でも、あれは魔法使いだけが使える魔法だったような……それに色々な制限がかかっているとかなんとかか』

ふうむ。イマイチはつきりしねーな。

とりあえずスゲエ魔法だったのは分かったぜ。

だがね、と俺は炎のクリスタル——ファムルスとやらに向かって飛翔した。

槍を両手でギュツと握り、

「この俺様のブルーランスにかかれば一発だぜっ！」

横薙ぎ一閃。

「……やったか？」

確かな手ごたえを感じて振り向いた瞬間、

『おまえさん、危ないっ！』

目の前にダツシユが飛び出してきたかと思うと、俺を庇うようにバツと手を広げた。

「!？」

その行為に、俺は慌ててファムルスのほうへと目を向ける。

トライデントで真つ二つに割れたクリスタル。

……割れてはいるが、さつきより激しく燃えていやがるじゃねーか。

『パパさん、槍の物理攻撃ではファムルスを消すことは出来ないのです。完全にかき消すにはあの炎よりも強い水をかけるしかないのですっ』

「とは仰いますがねエ。あれを消せる水なんてそうそう出せねーぞ……」

さすがに俺でも分かるって。あれは見た目以上に強い魔力を持っている。

シャオやコロ美の言葉を借りれば、凄まじい魔気つつうものをピリピリ感じるぜ。

実際、俺の体全体に流れている緑色のオーラ——もとい、水のベールを簡単に突き破ってきている時点で相当ふざけた火力だ。

『あつうっ』

ファミルスに怯えているのか、広げた手を震わせながら俯くだし子。

背中にはさっきの爆発のせいだろう、体操服にぽっかりと穴が開いてしまっていた。

「……………」

攻撃の予兆。

キラツとクリスタルの先端が輝き始めたところで、

「……………来い」

俺は強引にダツシユの肩を抱き寄せた。

それでもって、そいつを抱きしめたまま槍を突き出して、

「ぶくゆんぶゆん、ぷいぷい、ぷう！ すいすい、『スノウプリズム』！」

ゆりなの放電を跳ね返したあの呪文を唱えてやる。

杖でなく槍のまま詠唱した為か、あの時よりもかなり小さなプリズム壁が三叉の先端に現れた。

それと同時にクリスタルの先から火炎が放射され――

「うわっちちー！」

な、なんて熱さでエイ！？

どうやらスノプリでは荷が重かったようで、炎を反射するどころか貫通しちまった。

まあ、ある程度は軽減出来たみたいだけれども――それにしても尋常じゃない熱さだぜ。

こんなの変身前に喰らってたら一瞬で灰になっていたな…………。

そう、涙目で氷の吐息を自分の体にフーフーと吹きかけていると、

『…………あうっ、おまえさん、どうして？』

俺の腕の中で金髪娘がきよとんとした顔を上げた。

「あのよオ。いくらなんでも無茶し過ぎだって。毎回俺を庇ってたら命がいくつあっても足りねエぞ」

『…………でもっ』

「でもも、すももも無いっーの。それに、どうせ守ってくれるならア

レのほうが良いだろ？」

『あれ？』

首を傾げているそいつの手を持ち上げると、

『ふあっ……あのっ、お、おまえさんー！』

何故かポツと頬を赤らめているチビ鯨に、金の指輪を見せる。

もちろん俺のダツシユリングじゃなく、だし子がはめている指輪の方だ。

「またあの融合変身……やってくれるか？」

そう訊くと、そいつは俺の腕から抜け出してぶんぶん赤いハチマキを揺らして首を振った。

否定の合図。

あんれま……。

「まあ、無理にとは言わないけれども——」

『おまえさん、忘れんぼさん。あなな、さつき言ったし。やってくれるか、じゃなくてやれって命令して欲しいし。あなな、おまえさんの命令だったら、なんでも言うこと聞くのっ！』

ああ。そーいやア、そんなこと言われたっけか。

『それに……』

と。ダツシユが指輪をこちらに向けて、

『過去のあななもやる気まんまんだしっ』

眩い輝きを放つゴールドンベリルに、俺は少しだけ笑ってしまった。

本当に——まったくもって頼もしい奴らだねエ。

「オーケイ……いささかに融合変身の時間だぜ、ダツシユ・ザ・アナナル！ シャインと成って俺様を守りがやれッ！」

そんな俺の命令を聞いた瞬間、

『我は——我は欲す。汝が纏う忌むべき力を！ お願い、過去のあなな……力を貸して！』

目を閉じて指輪を掲げるだし子。

『サクラヴィ、デュアルアゲインツ！』

瞬く間に姿を変えていくその様をポカンと眺めているワケにもい

かない。

そいつがコスチュームに着替えている今もファムルスがこちらを狙っていた。

「恐縮だけでも、融合の邪魔はさせねエゼ……！」

と、そいつへと跳躍したときだ。

『パパさんっ、式式のグリップを左に何度も回して欲しいんですっ』

「あん？ 突然なんでエい？」

『なんでも、ですう！』

「よ、よく分からねーが、分かりましたんで」

ふよふよと浮かびながら、とりあえず言われた通りにランスのグリップ部分を回してみる。

するとどうだろう、まるでエンジン音のような爆音と共に、槍先から大量の泡がブクブクと出てきたではないか。

「あんだこりゃ!? マジでバイクみてえじゃねーか」

グリップを回せば回す程、泡や水蒸気が槍から溢れ出てきやがる。

それに、ブルーランスの表面に流れていた薄緑色のオーラもどんどんとデカくなっているような――

『ファムルスの魔気……！ パパさん、上なんですっ！』

「チツ、色々試してやろうって時に……。少しくらい待ちやがれってエの！」

言って、空高く槍を掲げて俺はグリップを左へと強く回す。

その瞬間、明らかに音の質が変わり、槍全体が蒼く明滅しだした。

「も、もしかして完全にエンジンが掛かったってことか？」

……まあ、魔法さえ出りやあ何でもいいぜ！

「ぷくゆゆんぷゆん、ぷいぷい……ぷう！ すいすい『スノードロップ』！」

『はわわっ!!』

コロ美が驚くのも無理はない。

なんせ、出てきたのはいつもの小さな飴玉ではなく、巨大な水泡だったからだ。

勢い良く飛び出したそれは、ファムルスを包むとあつという間にか

き消してしまった。

炎が消えていく過程すらも無い——まさしく、一瞬。

「ひゃー、なんて凄いでしょ。スノードロップつつうより、ありやあアクアドロップって感じだねエ」

俺の想像や呪文をいささかに無視された気がするが、それでもあのファミルスサクツと葬ってくれたのなら上出来だ。

すっかり明滅が止まった式式を俺は改めて持ち上げてみる。

「すっげえなあ。アクアサーベル先輩には悪いけれども、ブルーランズさんがここまで強いとは思わなかったぜ」

そう感心していると、

『あつ、パパさんもう片方のファミルスの魔気がグングン上がっていつてるんです！　すぐ後ろなのですっ』

へ？　もう片方って……。

「し、しまった、そーいや俺が増やしちまったんだっ！」

慌てて羽ばたこうとした次の瞬間。

『……融合開花、ラヴシャイン！』

融合を終えたダツシユが長い金髪をなびかせて俺の背後に現れた。

第九十七石：壺式は誰の手に!?

『えっと、え〜つとお。キラツとピカツと、二つの光が……』

「おい、だし子！　そういうのいいから早く盾を出してくれっ、盾！　ぐわんぐわんと肩を揺らすと、

『あううっ、わかったし、わかったし！　じ、GFシールド展開ッ！』
両手を突き出した途端、そいつの目の前に金色の巨大な盾が展開される。

それと同時に炎を繰り出したファムルスだったが……おお、こりや
凄いや凄いや。

傷一つも付かないシールド。

俺のスノプリよりも硬い盾に羨ましく思っていると、

『ご主人様、もう一度アクセルランスのグリップを左に回して！』

「えっ。アクセルランス？　もしかしてこれブルーランスじゃなくて
――」

『充填始めた今がチャンス……早くして欲しいしっ！』

「あ、はい。わかりましたんで」

ダツシユの勢いに気圧されつつも、もう一度グリップを捻って魔法
を繰り出す。

これまたさつきと同じく勝手にスノドロがアクアドロップに変換
されてファムルスをかき消したワケなんだが……。

ううむ。やっぱり気になるよなア。

ふうつと息をついているダツシユの頭に乗っかっている光輪を
ちよいちよいとつまんで、

「なあ、だし子。お前さんもしかしてこの槍のこと知ってんのか？」

『……うん。ちよびつとだけ』
と。

ダツシユがこちらを向いたときだ。

『お兄ちやまつー！』

コロナの声。

そして、続けざまに白狐がこちらへと突進してきたではないか。

「くっ、本体様のお出ましってか！」

すんでのところでは避けると、俺はシロツキへと槍を——アクセルラ
ンスを向けた。

『ご主人様。今ちらりと見えただけけど、あの大霊獣様の眼が光って
たし』

「するってエと、集束してるってことかい？」

『でも……なんか体がちよつと小さくなってる気がするし』

そう言われれば、確かに……。

『おそらく、自分の体を削ってファムルスを射出したと思うのです。
だから、火力が弱まった分、眼を使って魔力を強化しているんです
……』

どこか辛そうに言うコロ美。

「だったら弱ってる今だねエ！ 全魔力を叩き込んで一気に決めてや
る……ッ」

一旦地上に降りると、俺は背後にいる金髪へと声を掛けた。

「あれをやるぞー！」

『……了解だしっ！』

パチン、と水色の瞳をウインクさせるダツシユ。

直後、ゴールドデンベリルへと姿を変えたそいつを掴んで、俺は苦し
そうにしているシロツキを睨みつけた。

「テメエが一体何なのか知らねーが……降りかかる火の粉は払わな
きゃいけないんだよ！」

ゆりなが居ない今、あいつを鎮めるにはあの力に頼るしかない——
雪と光の融合、スノーシャインに！

++++

とりあえず、変身する時間を稼がねエとな。

「ぷくゆゆんぷゆん、ぷいぷいーぷうっ！ すいすい〜」
軽くバックステップをして、

「口から大吹雪！ 『スノーブレス』ッ！」

前かがみの格好で力いっぱい雪を吐き出す。

……うしっ、こんだけ撒けばいいだろ。

「どわっ！」

ホワイトアウト状態になった為か、やたらめっぼうファイアブレスを放つシロツキ。

ううむ。いささかに危ねーぜ……。念のため退避しとこうかね。

ササツと木陰に隠れると、俺はゴールドンベリルを空に向かって掲げた。

「融合変身……ッ！」

俺の合図とともに、黄金色の光を宿す宝石。

——あの状態になれる時間はおそらく五分も無い。

なるべく余裕を持って三分以内にケリをつけねエとな……。

「シャイニングパワー！ トランス・ザ・ゴールドン！」

変身呪文を叫び、

「ビースト、インツ！」

胸のハート宝石にダツシユのベリルをぶち込む。

ふわりと暖かい風が俺の頬をくすぐり、そして融合後のダツシユが現れた。

そいつは優しく微笑むと、俺に向かって両手を差し出してくる。

「……………」

『あう？ ご主人様、お手々出して欲しいし』

「——あ、ああ」

以前やったように両手の指を絡めたのだけれども……。

「なんかよオ、いささかに恥ずかしいんだよな、この変身方法」

『えへへ。私は全然恥ずかしくないし』

クスクスと笑い、俺の胸に頬を寄せると、

『雪と光の融合、私の力を全てご主人様に捧げます。その名は……』

そこまで言っただけ俺を見上げるだし子。

最後の言葉を待つそいつに、俺はゆっくりと頷いてみせる。

「その名は——スノーシャイン」

途端、光の輪へと姿を変え、俺の全身を包み込んでいくダツシユ。

凄まじい輝きとともに俺のコスチュームを次から次へと脱がしていく。

光輪が足元からせり上がっていき、青を基調としたフレアスカートを黄色いミニスカートへと着替えさせる。

同じようにレオタード状の白いコスを黄色いチューブトップ衣装へと変化させ、そしてシャカシャカと俺の髪型を弄くって最後にフラッシュを放つ。

つまるどころの終了のお知らせ。

「……終わったか」

えーと。かかった時間は、おおよそ三十秒ぐらいか。いやはや、さすがに新式の変身よりかは短いようだねエ。

「おお、体が軽い軽い！」

びよんびよんとその場でジャンプし、

「さアて。そんなじゃま、とつとと消火作業しますかねエ」

勢いのまま羽を広げようとしたところで、

『ひ、否定。羽は、メツなのです。パパさんの魔気が凄すぎて制御出来ないのです。今の状態だとまたぶつかっちゃうんです』

そんな焦りの声に、俺はあのときの戦い——コピー戦を思い出した。

強化され過ぎちゃったせいか、羽をコントロールすることが出来なくてコピーに激突してしまったんだよな。

ううむ。じゃあ、どうやって近づこうかねエ……。

そう、腕を組みながら考えていると、

『むふーっ。おまえさん、なにか忘れてるし』

コロ美とは対照的に余裕の声をあげるチビ鯨。

「んあ。忘れてるって何のことかえい？」

『あななの能力！』

能力って……たしか疾駆だろう？

それが一体——

「あつー。そうか、羽がダメなら『疾駆』で走ればいいのか」

そうだった。空での移動を制限されても、俺の場合ダッシュユがいるから地上でもスピードが出せるんだよな。

「でも、だし子は俺と融合してるんだよな。そーなると、どうやって

『疾駆』を使えばいいんだ。ただ走ればいいだけとか？』

「ここら辺がややこしいっつーか、イマイチよく分からねーぜ。

あんまり時間が無いし、うだうだ考えてもいられないんだが。

『えっと、昔のあなながね、目的地の呪文を唱えれば瞬間移動出来るって言ってるし。さすがに空中じゃ使えないみたいだけど……』

も、目的地の呪文!？」

「あんだそりゃ。コロ美知ってるか？」

『うーっ。否定なんです……。模魔の能力のことは少しだけしか分からないのです。お姉ちゃまだったら何か分かるかもですが』

クロエ、か。

「そういやあいつまたどっかに行きやがったな。

俺たちがピンチってときに限って居ないんだもんア……。つたく、勘弁してもらいたいぜ。

と。心の中で嘆息したとき、いきなり聞いたこともない声が耳に入ってきた。

コロ美でもないし、ダツシユの声でもない。

キヨロキヨロと周りを見渡してみるが、未だに呆然と座っているシャオくらいしか居ない。

トーゼンあいつの声とはほど遠いし……。

そいつは目的地の呪文とやらを俺に教えてくれたようなんだが……いや、待てよ。

「そう言えば、チビチビが石風邪をひいたときにも不思議な声が聞こえたような——

『パパさん、多分ですが、融合変身の残り時間があと二分ちよつとしか無いんです。こうなったら羽で飛ぶしかないのですっ』

「げげっ、もうそんだけしか時間ねーのかよ！」

「ま、待て待て。その目的地の呪文とやらが分かったからそれをやってみるぜ」

「とりあえずとばかりに、俺はアクセルランスを肩に担ぐと、左手をグーの形で突き出した。

もう迷ってる時間は無いんだ。一か八か、あの声に従うしかねエ！」

「ぷーゆゆんぷゆん、ぷいぷいぷうっ！ すいすい……」

そう呟き、シロツキの全身——主に壺式が握られた尻尾部分を頭に浮かべる。

「駆ける、デイスティネーション——俺の、俺様の『目的地』はテメエの背後だア！」

左手をグーから指差す形へと変えた次の瞬間、まばゆい黄金色の粒子が俺の体を包み込んだ。

「どわっ!？」

突然、目の前にシロツキの巨大な尻尾が現れたもんだからたまらない。

一体なにがなんだか……。

目を丸くするばかりの俺に、

『むふーっ、さすがおまえさんだし！ あっさり成功させたしっ』

『こ、これが目的地の呪文ですか……本当に凄いスピードなんです』

二人の感嘆の声から察するに、どうやら『目的地』の呪文を唱えることに成功したみたいだ。

っーか、マジで瞬間移動じゃねーか。

こいつらの感覚じゃあ速いって認識らしいが、俺からしてみれば唱えてすぐにシロツキの背後に出たぜ。

スノーシャイン状態でしか使えないけれども、こりやあスゲエ魔法だぜ。

まあさすがに、どこでも行けるシャオメイのシャドーと比べたら地上限定って弱点はあるが……。

『パパさん、あと一分くらいなのですっ！』

「オーケイ、そんだけありやあ十分だ」

アクセルランスのグリップを左に力強く回す。

何度も回し、エンジンが掛かったところで、

「いささかに恐縮だけでも、壺式は頂くぜ……！！ すいすい、エメラルド——じゃなかった、ゴールドンダストオツ!!」

と。唱えたはいいものの、一向にダストを出す気配の無い壺式。

『おまえさん、アクセルランスは左に回したら水の魔法しか出せない

しっ。氷は出せなくなっちゃうんだって』

「な、なんでだア？」

『あうー。あななもよく分からないし。昔のあなながダメだって言うてるのっ』

ええい、ややこしい！

だったら水の魔法を出せばいいんだろ、水の魔法を！

「ぷくゆゆんぷゆん、ぷいぷい、ぷう！ すいすい、『スプラッシュユールデン』！」

その瞬間、槍先から黄金色の水流が勢いよく噴き出した。

あれよあれよという間にシロツキの炎を消していくスプラッシュ。

俺が背後に居たのに気付いてなかった為か、水しぶきの直撃を喰らった白狐はその場に崩れ落ちた。

槍の石突き部分の宝石をチラツと見てみる。

残りの霊薬は一割も無い、か。

多分だが、ランス状態だとかかなり霊薬の消費が激しい気がするぜ。

まあ……出る魔法すべてが加減知らずだからねエ。

「よし、あとは尻尾をぶった斬るだけだな」

言って、ランスからアクアサーベルへと式式を変化させたとき、

『…………お兄ちやま』

今にも泣きそうなコロナの声が聞こえてきた。

「……………」

サーベルを振り上げたまま、俺はすっかり小さくなってしまった白狐を見下ろした。

まるで普通の狐のような体になったそいつは、辛そうに息を吐きながら立ち上がろうとしている。

だが、もうすでに限界なのだろうか、たたらを踏んで再び地面へと倒れ込んでしまう。

「お前…………」

緑色に明滅する壱式。その中身——霊薬はすでに空っぽだった。

尻尾から転げ落ちる宝石に、俺はグツと唇を噛んだ。

『ど、どうして拾わないしっ？』

剣を振り上げたまま動けずにいる俺に、ダツシユが疑問を口にす
る。

たしかに、ここで霊鳴を拾うのは簡単だった。

こいつから……霊鳴を『奪う』のは。

「なあ、シロツキ。お前は何でそんなに壺式を守ろうとするんだよ
……こんな痛い目にあつてまで、なんでだよ」

それでもそいつは答えずに、壺式を口に啜えて立ち上がる。

よろよろとおぼつかない足取りで向かうその先には……シヤオメ
イが居た。

——まさか、あいつに渡すつもりか!?

「マズイ……!」

慌てて駆け出そうとしたとき、とてつもない頭痛と共に、俺の胸か
らダツシユの宝石が勢い良く飛び出した。

「ぐあっ!!」

同時に、コロナのエメラルド宝石も飛び出し、俺はあつという間に
元の姿へと戻ってしまった。

あまりの激痛に、その場に膝を付いてしまう。

ぼやける視界の中、シロツキはシヤオのもとへと辿り着いた。

呆けたままのそいつをジツと見て、匂いを嗅ぐ白狐。

そしてクルクル周りを回ったかと思うと、シヤオの前にちよこんと
座って小さく鳴き声をあげた。

「ひゃっ!」

ようやく気付いたのか、怯えたように身を引くシヤオだったが、傷
ついたシロツキの姿を見て複雑そうな表情になる。

「……パパさん」

いつの間にか俺の隣には園児の姿へと戻ったコロ美が居た。

そいつは拾ったダツシユリングを俺に渡して、

「ごめんなさい、コロナのせい……」

ペコリと頭を下げた。

「そういうの面倒くせーから、謝るのは禁止な」

痺れる手で頭を撫でながら言うと、そいつはギユツとスモツクの裾

を掴んで俯いてしまった。

……きつと、チビチビなりに色々思うところがあるのだろう。
シロツキ——お兄ちやまとの関係性はよくは分からないが、慕っていたことだけはよく分かる。

「もうコロナの声は届かないんです。お姉ちやまの言っていた通り、やっぱりお兄ちやまは……あの人を」

そう呟いて白狐のほうへと視線を向けるチビチビ。

その先にはシャオの膝の上で眠るシロツキの姿があった。

「……な、なんなのよ」

ワケも分からずといった様子で狐を見下ろすシャオメイ。

フワツ、と。シャオがそいつの背中を撫でた次の瞬間、いきなり無数の光の玉へと姿を変える白狐。

そしてそれは次々にシャオの体の中へと吸い込まれていく。

「どうなってんだ、こりゃあ?」

その様をただ呆然と見ていると、シャオの体が眩しく輝き始めたではないか。

同時に、そいつの胸の前に緑色の宝石——霊鳴石壺式が現れる。

「ま、まさか、これが壺式だっていうの?」

おそろおそろ手を伸ばしたシャオだったが、ゴクリと喉を鳴らすと意を決したように、一つ頷いた。

「……傀儡の石よ、今再び我が下へ蘇りなさい! 霊鳴ツ!」

おいおい、これって霊鳴の封印を解く呪文……だよな。

クソツ——止めようにも体が言うことを聞かぬエ!

「壺式封印解除の呪文をここに記す——イグレスレイヴ!」

呪文を唱え終えた瞬間、緑の閃光がシャオの手元へと降り注ぐ。

やがて現れたるはおぞましい造形の緑杖……それを掲げてゆつくりと立ち上がるシャオメイを見上げて、俺は深くうな垂れた。

第九十八石：目覚めたシロハ、見上げる先には

「ぎやはっ、あははは……っ！　なによコレ、杖を持っているだけで身体中に魔気力がみなぎってくるわ」

不気味な笑みと共に、目の下のクマが色濃く浮かび上がってくる。霊鳴を手にしたからか、完全に調子を取り戻しやがったようで。

そいつは錫杖に似たデカイ杖を下ろすと、それを俺に向けて、

「あんたに感謝しないとねえ。まさか本当に壺式があるとは思わなかったわよ」

ニヤリと口角を上げるシャオメイ。

「はあはあ……。だ、だから、手紙は俺が書いたんじゃねエっての……」

そう俺が胸を押さえながら言ったその時。

いきなり壺式の杖先——輪形部分に通してある六つの輪がシャンシャンと音を響かせ始めた。

「えっ……なによ、一体どうしたっていうの？　ねえ、バカてふ。この現象って何かしら？」

って、俺に言われましても。

持ち主のお前が分からないものを俺が分かるハズねエっての。

そもそも式式と全然形状が違うしよオ。

「あつ、あの人の後ろから光の糸が出てるんです」

と。コロ美がシャオオの黒い尻尾を指差す。

確かに言われてみれば薄っすらと糸つつうか線が出ているような気も……。

「……あれを辿って行けって言いたいのかしら」

その眩きに一度だけフラツシユして答える壺式。

この反応——式式のそれと同じだな。

おそらくはイエスって意味だと思っただけれども。

「ふうん。いいわ、今のあたしはとつても気分が良いのよね。……っつーこつて、行ってやるーじゃん！」

「ま、待ちやがれっ！」

慌てて立ち上がろうとしたが、未だ全身が痺れているため思うように足が動かせない。

「うわわっ」

よろけて盛大にずっこけてしまった俺に、

「なーにやってんだか。ま、あんたはココで大人しく待つてなさい。もしかしたら高ランクの模魔石があるかもしれないケドさ。そんなきは、ちゃんんとあたしが有り難く頂いておくから心配しなくていいわよ。ふふーん、この霊鳴石壺式みたいだねっ」

この世で一番ムカつくウインクを飛ばして森の奥へと消えていくシヤオメイ。

ちきしょう……やっぱりあんなヤツなんざ助けなきや良かったぜ。

そう溜め息をついたとき、

「あつ、しゃっちゃん見つけ！」

杖に跨ったゆりなが空からやってきたではないか。

そいつは俺を見つけると、

「ふええーん、しゃっちゃん無事で良かったよう」

すぐさま杖から飛び降りて抱きついてきた。

まあ抱きつかれるのはもう慣れっこだからいいのだけれどもよオ……。

問題はこいつが変身した姿だつてことだ。

つまるところの超怪力状態つうワケで――

「ぐえええ、苦しい、苦しいって！……降参でえい」

腰に回された腕に、俺は必死でタップを繰り返す。

「わわ、パパさんにトドメをさすつもりですかっ！ やめるですっつ」

コロ美も慌ててゆりなのスカートをグイッと引っ張り、

「ふわっ。あ、いつけない。ボク変身してたんだっつ」

ようやく解放された俺はその場にへなへなと倒れこんだ。

そんな俺の頭をよしよしと撫でながら、

「むく。旧魔法少女さんヒドイんですっ」

チビチビ助が抗議の声をあげた。

「ご、ごめんなさい……ホッとして、ついつい抱きついちゃった」

しょんぼりと肩を落としたところで、

「あつ！ コロちゃん、ボクの呼び方戻ってない……？」

「肯定。さっきのでコロナの旧魔法少女さんに対する好感度がマイナス一万ポイントになったんです」

「一万ポイントもっ!? そ、そんなにやあ……」

ますます肩を落とすゆりな。

このままでは地面にまで肩が埋まっちゃいそうな勢いなので、俺はコロ美との会話を止めるべくゆりなのケツに軽い頭突きをかました。

「ひゃんー！」

飛び跳ねて両手でケツを押さえるチビ助。

「もーっ、頭突きダメだもん。お尻が二つに割れちゃったよう……」

「ケツはもともと割れて——いや、面倒クセエからいいや。すまねエが、ちよいとこちとら切羽詰まってるんでえい。いささかに恐縮だけれども肩を貸してくれるとありがたいぜ」

「ほい、了解うけたまわりっ！」

チビ助の肩を借りたところで、俺はふと疑問に思った。

「そういや、こいつどうしてココへ飛んで来たんだ？」

模魔……じゃなかった、大霊獣シロツキの魔気とやらに気付いたのか？ いや、でもそんな能力なんて無いはずだしなあ……。

待てよ。まさかクロエのヤツが——

「あつ、もう変身は解いたほーがいいかな」

そんなことを考えていると、ゆりなが目を閉じて両手を自身の胸の前に差し出した。

チビ助の全身を包んでいる藍色の煌きが見る見るうちに失われていく。次いで、ふわりと浮き上がる黄色いネクタイ。

「変身解除……デイスコネクト！」

と。解除呪文を唱えた直後、ネクタイの裏に隠されていた藍色の寶石から黒猫が飛び出してきたではないか。

そいつは差し出されたゆりなの両手の平へと綺麗に着地すると、

「よつと。ひゃー、やっぱしシャバの空気は美味いぜえー！」

大きな伸びと共に、これまた大きなあくびをかましやがった。

そんなクロエの大口に俺はすかさず人差し指を入れる。

「おいおい、待ちねエ。お前さんよオ、俺様との約束覚えてるよなア……？」

「……………」

大口を開けたまま俺を睨み付けるクロエ。

そんな反抗的な目に、俺はなけなしの魔力——冷気を指先に込めて、

「シャオに呼び出されたことはチビ助に言うなって……そう約束したハズだぜ」

すると、黒猫はスルっとゆりなの頭の上へと移動し、

「にやつはっは。すまねーな、まさかシロの野郎が出てくるとは思わなくってさ。さすがにシラガ娘一人じゃあヤバいかもって、慌ててポニ子を呼びに行つちまつたぜ」

「そーだよ、しゃっちゃん一人じゃ危険だもんっ！ どーして、ボクに言ってくれなかったの？」

むーっ、と頬を膨らませるゆりなに俺は頭をボリボリかいた。

どうしてもこうしても。今日一日はゆっくり休んでいて欲しかった……なんて、言えるワケねーだろうよ。

なので、

「いやはや、俺一人でも十分だと思つてね。それと自分の力試しも兼ねてさア。まあ、ジユゲムなんたらさんだけなら余裕だったんだが、まさか大霊獣サマまで出てくるとは思わなかったもんで。……ん？」

テキトーなことを言っていたとき、不意にスカートが引つ張られた。

見てみると、コロナが足踏みをしながら何かを言いたそうにしている。

「なんでえい？ おしつこでもしたいのかイ？」

訊くと、ぶんぶんとツーサイドアップの髪を振って、

「ひ、否定。パパさんたち、お話は後なんですっ！ あの人が向かった先に、少しだけお兄ちゃまの魔気を感じるのです！」

森の奥へと指差すチビチビに、

「いや、違うぜ。これはシロツキの魔気じゃねえな……チビの方に完全に力が移ったか。なんであれツン子とくつつけちまうのはマズいな。こつちだ、ついてきなっ！」

ぴよんと、ゆりなの頭から降りて駆け出していく黒猫。それに続いてコロ美も羽を広げてすっ飛んでいく。

そんな二人の後ろ姿に、俺とゆりなは目を見合わせ、そして同時に頷いた。

＋＋＋

行き着いた先には洞穴があった。

とはいえ。それはとても小さい穴で、入口から見て全体が見渡せる程だったのだけれども……。

「あつ、クーちゃんと言ヤオちゃんだ！　ありやりや……二人ともどうしたんだろう?！」

ゆりなが首を傾げるのも当然だ。

なんせ先に着いていた二人が洞穴の中心で一緒に固まっちゃまっているんだからな。

二人とも何かを見ているみたいだが――

「とりあえず俺たちも行ってみようぜ」

「う、うんっ。でも、しゃっちゃん大丈夫……?！」

「おう。おかげさまで歩ける程度には回復したみたいだ。さんきゅーなチビ助」

ゆりなの肩から腕を下ろし、さっそくあいつらの居る洞穴へと向かうとしたのだが、

「ダメだもんっ、しゃっちゃんすぐ無理しちゃうんだから」

と言つて、ギョツと俺の手を握ってくるチビ助。

俺に魔力を分けてくれているのか、じんわりと温かさを増していくゆりなの手。

柔らかくて小さいそれに、俺は思わず歩みを止めてしまった。

「……えへへ。しゃっちゃんのお手て、相変わらずひんやりしてて気持ち良いねっ。さすが氷と水の魔法使いさんだよお」

「……………」

「あれ？ も、もしかして、まだどつか痛いのかな……？」

「い、いや、そうじゃないんだが。なんつーか、こんなこと前にもあったような……って」

「ふえ？」

なんてゆりながポニーテールを揺らして疑問符を掲げたとき、いきなり洞穴の中からとてつもない閃光が放たれた。

「な、なんでえい!？」

「しゃっちゃん、行ってみようっ！」

手を引かれて洞穴に入った瞬間、再び青い光が視界を覆った。

やけに眩しいそれが落ち着いていくと同時に、頭に何かが乗っかる感触がした。

「ひゃー、まいったぜ。まさか目の前で引き継ぎが始まるとはな……多分、シラガ娘とポニ子にもチャンスはあると思うんだけどなあ」

俺の頭上で意味不明なことを言うヤツは一匹しかいないワケで。

「引き継ぎ？ チャンス？ 一体なんのことを言ってるんでいい」

そう訊くと、クロエの代わりに隣に立っていたシャオメイが口を開いた。

「……引き継ぎはおそらく『チューズデイ』のこと。そしてチャンスはこのガキンちよ——新しいチューズデイが誰を選ぶかってこと。そうよね、マンデイ？」

苦々しい顔で黒猫に視線を飛ばすシャオ。

「にっしっし。ご明察のとおりってね」

「ええっ!?! まさか、この子が七大魔宝石のうちのひとつ……大霊獣さんなの？」

「そうさ。この狐っ子は第弐番大魔宝石シロハ・ザ・チューズデイ。前任のシロツキが完全に消滅した、たった今この瞬間から、あいつの妹であるシロハが弐番石の厄災を引き継ぐことになる……」

「コロナが感じたお兄ちやまの魔気はこの妹さんから出てたんですか……でも、見た目は全然似てないのです。不思議なんです」

なにやら皆さん盛り上がっていらっしやるようです。

閃光からやつとこき目が慣れてきた俺は、改めてみんなが取り囲んでいる洞穴の中心——切り株へと首を伸ばした。

「げげっ!？」

そのデカイ切り株の上には話題の渦中にあるシロハとやらが確かに居たのだけれども……。

グシグシと目を擦ってもう一度見てみる。

「おいおい。なんつー格好で寝てやがんだ……」

そこには素っ裸のまま、すやすやと気持ち良さそうに眠っている女の子が居た。

見た目的にはおそらく六、七才くらいだろうか。

雪のような白い肌に、淡い桜色のほっぺた。背中まで伸びているさらさらストレートのウォーターブルーの髪、と。

ここまですらでも相当インパクトのデカイ少女なんだが……もつと大きな特徴がある。

「わーいっ！ ふわふわ耳、もふもふ尻尾、めっちゃんこ可愛いようっ！」

そう。思わずゆりなも手を出して触ってしまう程の可愛い狐耳と太い尻尾がそいつに生えていた。

それらは髪と同じく青い色をしていたんだが——
「……へっくしゅー」

うおっと。いきなりシロハがクシャミをして寝返りを打ちやがった。自分の大きな尻尾を抱き枕代わりにして寝苦しそうに二回、三回と寝返りを繰り返す。

そんなシロハの動きにみんなで顔を見合わせていると、チビ狐の耳がピクピクと動き出したではないか。

「!？」

突如として俺たちの周りに緊張が走る。

「ふみゅっ」

人の姿をしているのに、ぐいーつと猫の伸びのような格好をするシロハ。

しばらくこちらに桃のようなケツを向けたまま尻尾をふりふり

振っていたのだが、ようやく異変に気付いたのか俺たちの方へと身体を向ける。

おそろおそろといった感じに。

「……………」

これまたおそろおそろ、ゆつくりと顔を上げたチビ狐だったが……あるところを見てふと止まった。

透き通るような青い瞳。ちよつとだけ垂れ目のそいつの視線の先には——赤い髪のツインテール娘が居た。

「な、なによ……」

ジーツと、一分くらいは見つめていた気がするぜ。

さすがのシャオも困ったように視線を逸らした次の瞬間、

「……マ、マ？」

シロハがシャオを見上げたまま小さく呟いた。

——沈黙。

ゴクリと誰かが生唾を飲む音が聞こえる。

ま、まさか俺の聞き間違いじゃないよな……。そう思っていると、隣のゆりなが俺に目配せをして、そつと指をさした。

その方向には今まで見たこともないような驚愕顔のシャオメイ。

そして、

「ママあー」

と。驚愕顔のまま石のように固まったそいつに抱きつく嬉しそう
なシロハの姿があった。

第九十九石：後ろ髪、引かれて

「お、お前さん、いったい何才のときに子どもを産んだんだア……？」
そう俺が顔を引きつらせながら訊ねると、シャオは顔を真っ赤にして、

「……バカっ！ あたしはまだ九才よっ!!」

すかさず壺式の先っぽで頭を殴られちまった。

いっててて。冗談だっつーのに……本気で殴りやがってよオ。

そう涙目で頭をさすつっていると、隣で目を点にしていたゆりなが口を開いた。

「えっ、えっ。シャオちゃんがこの子のママさんなの……？ で、でもお姉ちゃんが赤ちゃんは大人にならないと出来ませんよっつて言ってたような……」

まったくもって状況が飲み込めないといった感じでシャオとシロハを交互に見て言うチビ助に、

「だ、だから、あたしの子どもじゃないってばっ！」

「にやっ!?!」

再びポコツと杖で殴るシャオメイ。

振られる度に淡く発光する壺式を指を咥えながら見上げていたシロハだったが、ついに我慢の限界が来たのか、

「わー！ 綺麗、綺麗！ ママ、そのおもちゃ貸してくっ」

と。ぐいぐいシャオの腕を引っ張り始めた。

「ちよ、なによこいつ……！ あたしを誰だと思ってるのよ、あたしはね、ピース様に認められた紗華夢、やこ……きゃあ！」

いくら見た目は小一くらいの子どもでも、さすがは大霊獣様といったワケで。

凄まじい力で揺さぶられ、すってんとその場で転んでしまった。

あつという間にシャオから杖を奪って、楽しそうにぶんぶん振り回すチビ狐。

「……こ、こんちくししょう」

凄まじい形相で起き上がったが、追撃よろしくシロハがシャ

オの背中にドカツと跨り、

「きやつきゃー！ お馬さん、お馬さんっ！」

「ふぎゅっ!!」

なんとも情けない声をあげて潰れてしまった。

「……なんだかパワフルな子なんです」

「いっひっひ。こりゃあ愉快愉快」

腕を組みながらガキンちよ相手に苦戦するジユゲムなんとやらさんを見下ろしてクツクツ笑ってやる。

いやあ、大変そうで何よりだぜ。

寝起きのためか尻尾をふりふりさせながら全開パワーではしゃぐシロハを見つつ、

「いやはや。契約したのがチビチビ助で良かったぜ」

俺は傍らで呆気にとられてるコロ美のちっこい頭に手を置いた。

狐というよりもじゃじゃ馬といった感じの霊獣。

とてもじゃねエが、あんなのと契約したら身が持たないだろうな。チビチビもたまに手に負えないときがあるが、普段はほつといても一人で大人しく遊んでるし。

「な、なんで、このあたしがこんな目に……」

たった数分ですっかり疲弊したようで、目の下のクマがかなり薄くなっついていやる。

さすがに哀れになってきたところで、

「ふあっ。シャオちゃん大変そうだよ……。だ、だいじょーぶ？」

俺の隣に立っていたゆりなが心配そうに呟いた。

あんな事をされたつつうのに、こいつはよオ。

……まったく。相も変わらずお人好しが過ぎるぜ。

「だいじょばないわよっ！ 猫憑き、同情してる暇があるならこのバカガキを何とかしてっ」

「ほ、ほいつ、了解うけたま——」

シャオを助けようとシロに駆け寄った瞬間、

「……やあっ、来ないでっ!!」

いきなり尻尾と耳が青白く輝いたかと思うと、凄まじくデカい蒼炎

がシロハの全身から舞いあがった。

「こ、こりやあ、いささかにまずいぞ……！」

慌てて魔法を唱えようと人差し指を掲げたとき、

「危ないんですっ！」

「きやつ!?!」

ゆりなどシロハの間へとすっ飛んで、輝く羽を広げるチビチビ。

身の丈よりも何倍にも膨れ上がった羽でチビ助を包んだと同時に、

コロナの体に火炎が直撃した。

「コロ美！」

嫌な焦げる音に、俺が叫ぶと、

「ぶいっ。平気なのです。まだこの子は力の使い方が分かって無いみ

たいなんです」

クール面でブイサインを繰り返して羽を縮めるコロナ。

確かに少しだけ肩のところが焼けただけで、ダメージはそこまで無

いようだ。

なんでえい……心臓に悪いじゃねエか。

「ふええーん、びっくりしたよう。ありがとコロちやあんっ」

「てやんでい。余裕シャクヤクってなもんです」

ドヤ顔で俺の真似をしているコロ美を抱きしめ、トテトテと俺のと

ころまで逃げ帰ってくるチビ助。

そいつを庇いながら、警戒するように俺は改めてシロハへと人差し

指を向けた。

「つたく、こんなことなら式式を海に戻さなきゃ良かったぜ。まだ

ちよつとだけ霊薬が残ってたのによオ……。」

そう。ギリツとチビ狐を睨んでいると、

「………ひっぐ」

俺の顔を見るなりビクツと身体を震わせたかと思うと、たちまち青

い瞳がウルウルと涙ぐんでいく。

「えーんっ！ ママあっ!!」

ついにはびーびー泣いてシャオに抱きついてしまった。

しかしながら、

「きゃあつー！」

立ち上がろうとしたときに突進を喰らったため、またまた盛大にずっこけてしまうシャオメイ。

「なんなのよ、もうーっ！ 出てきなさい、シャドー!!」

なんとも無様な格好で黒い指輪にキスをすると、シャオの背後に巨大な暗闇が現れた。

その穴にマントごとシロハをぐいぐい押し込んで、

「……と、とにかく。このガキはあたしが頂いたわ。次までには躡けて、あんた達から石という石を全て奪ってやる……から」

と仰られましてもねエ……。

ゼーハーと肩で息をしてブラックホールの中へと消えていくシャオに、俺は肩をすくめた。

あれじゃあ当分はまともに使えないだろうよ。

「あーあ。せつかくのシロハを逃がしちゃった。厄介なことになってもおレは知らねーぞ？ にっしっし」

今まで黙っていた頭上の黒猫が面白そうに言う。

「あつ、そつか。あの子大霊獣さんだったんだっけ。もしシャオちゃんんと契約しちゃったらどうしよう……」

コロナを抱きつつ心配そうな顔をするチビ助に、呆れのポーズ——手を広げるようなジェスチャーをして、

「来やがれ霊鳴ー！」

海から飛来した式式を杖状態にして跨る。

それを見たゆりなも、俺に倣って零式に跨った。

ふわりと浮かび上がったところで、

「ねーねー。しゃっちゃん、いいの?」

「いいのものにも、今更どうしようも無いだろ。あいつの家を知ってるなら行ってもいいけれどもよ……。お前さん知ってるのかイ?」

「うっ。知らないかも」

「だったら、あーだーこーだ言ってもしょうがねエ。もうハラペコだからとつとと帰ろうぜ。今日はシチューって話じゃねーか」

お姉さんから借りたマフラーを巻き直しつつ言うど、

「うんっ！ ボクもおなかぺっこぺこだよお。にやはは。お姉ちゃん待ってるし、帰ろっか！」

「……………？」

びゅーんと元気良く俺の前を飛んでいくチビ助の背中に、

「ちよつち待った。なんかへんな感じしないか？」

声をかけると、そいつは後ろを振り向いて、

「ほよ？ へんな感じってなあに……………」

ポニーテールを揺らして頭に大きなハテナマークを浮かべた。

「何って言われるとアレなんだけれども」

うーん。なんっか、どうも引つかかるんだよなあ…………。

このままいつものようにお姉さんの家に帰っていいものか――

ん？ いつもものようにって、俺は何を考えてるんだ？

や、やべえ、腹が減り過ぎて頭が全然回らねエぞ…………。

「あー。えっと、いま何時くらい分かるか？」

チビチビを抱きなおして腕時計を見るゆりな。

「うーんと。四時四十分くらいかな？」

「そっか…………ちよつくら空の散歩してくるぜ。わりイが、こいつも頼んだぜ」

言って、頭上でノンキに鼻ちようちんを膨らませて寝ている黒猫をゆりなに渡して、俺は森に戻るべく方向転換する。

「しゃ、しゃつちゃん、ほんとに帰って来てくれるよね…………？」

「おうよ。あつたりめエーだろオ。シチューは俺様の大好物なんだぜ。好きなモンがもつと美味くなるように運動してくるだけでえい。

五時までには必ず戻ってくるぜ！」

「はーいっ！ じゃあ、みんな待ってるからねっ」

笑顔で手を振るゆりなにひらひらと手を振り返し、俺は杖を握ってスピードを上げた。

なんだか分からないが、さつきからモヤモヤが止まらない。

とりあえずさつきの場所へ戻らねエと……………！

第百石：ナミダ

「おっかしいなア。たしか、ここら辺だったよーな」

森に戻った俺は、墓石があった場所を探すことにした。

赤い満月は普通の三日月になっていたし、黒い雲もどこかへと消え去っている。

とつくに森は元の姿を取り戻していたのだけでも……さすがに時間が時間のためか、陽が落ちてきて視界が悪い。

うーん。なんとなく戻って見たはいいが……。あの場所が全然見つからねエな。

そろそろ時間がヤバイかなと腰を上げたとき、

「シヤクヤク……」

いきなり俺の名前を呼ばれたもんだからたまらない。

こんな不気味な森の中だ。しかも今はコロ美もチビ助も居ない、たった一人つつう状態。

……そりやさすがの俺だってビビっちゃうさ。ドキドキと早鐘を打つ胸を押さえて声のした方を見てみると――

「!?」

少しだけ離れた場所にシヤオメイが立っていた。

――あいつが俺の名前を呼んだのか？

でも、俺に気付いていないような……。それに、あいつは俺のことを名前じゃなくてバカてふって呼んでるハズだし。

訝しげな目でシヤオの横顔を見ると、そいつは自分の手へと視線を落として、

「温かった……」

その手を胸のところまでギュツと握ってポロポロと涙を流し始めた。

お、鬼の目に涙とはよく言ったもんで……。

そいつは涙を拭うこともせず、その場にしゃがみ込むと、輪を描くようにドングリを並べる。

まるでそれは壺式があつた墓のような――

「……どういふつたア？」

さつきから何がどうしたもんだか。

疑問符が頭の中を埋め尽くす前に、俺はそいつの後ろ姿に声を掛けることにした。

「おいおい。お前さん何をしてるんでえい？」

「……………」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしたシャオが振り返った。

そいつは俺の顔を見ると、明らかに動揺した様子で、

「な、なんで、ここに……。そんな、戻って来るハズなのに……」

「いやあ。俺もよく分からねエんだが、どうもあの墓が気になつてさア。なんとなく来てみたのだけれども」

……………ん？ 待った。

こいつ——目の下のクマも無ければ髪型もストレートだぞ。それにマントを羽織つてやがる。

さつきまで居たシャオは若干だがクマがあつたし、髪型もツイン、そしてマントはシロと一緒に闇の中へ放り込んでいたような。

『まさか』なんて言葉はすでに必要なかつた。

ここまで違えば、さすがに俺だつて解る——

「お前、寺の前で会つた方のシャオメイだろ……………」

「……………」

「へっ。だんまりを決め込むつもりかい？ なんとか言つたらどうなんでえい。なんのつもりか知らねーが、お前さんが俺とシャオに手紙をよこしたんだろ？」

壺式のある東福森に呼ぶため、俺の名とシャオの名を騙りそれぞれのポケットに手紙を入れた。

やったとするならば、こいつしかいない。

「手の込んだ真似をしゃがって。一体どういうつもりだア」

「……………」

「なんでシャオの格好をしてやがるんでえい。まさか偽者……姿を真似る模魔石でもあるのか？」

「……………」

迷った表情をした後、俯いて一步後ろに下がるシャオメイ。

どうして。どうして何も言わないんだよ、こいつ……ッ！
式式に魔力を注いで詰め寄ったそのとき、

「ぴいっ!!」

やにわに、木陰から飛び出してくる小鳥とリスたち。

「お、おい。なんだなんだア!?!」

突いたり、齧ったりして俺に襲い掛かってきたそいつらに魔法を使うわけにもいかず、必死で振り払っていると、

「やめなさい、あんた達……」

シャオが呟いた途端、猛攻が止んだ。

そいつの肩に戻っていくそいつらを見て、俺はハッと思い出した。
「バツカバカじゃん。今どき恩返しなんて流行らないわよ? それともまた飴をねだるつもりかしら? まったく……卑しい小動物たちね」

言ってリスの頭を撫でるシャオ。

——やっぱりそうだ。こいつら、寺の前でシャオが飴をあげていたリスと小鳥に違いない。

あのときは、シャドーの中へ放り込んで殺したかと思っただが……。

「……バカでぶ。そろそろご飯の時間でしょ。あんたは、もう帰ったほうがいいわ」

スツとマントで涙を拭い、その中から取り出した黒いバイザーを被るシャオメイ。

そいつは口を真一文字に結ぶと、さっきまでの動揺なんて無かったかのようにマントを翻した。

「か、帰ったほうがいいって……。なんなんだよ、少しくらい質問に答えやがれっ!」

「——これからピース様がここに来るわ。あんたはここで何も見なかった……そういうことにしておきなさい」

冷たく言い放ったその時、キイキイという耳障りな錆びついた音と共に、森の葉や木々が一瞬で朽ちていく。

一体何事かと木々を見渡していると、森の奥から車椅子に乗った老

婆が現れた。

「おお。ワシの可愛い紗華夢よ。心配しておったぞ。一体何をしていたのじゃ」

「すみません。微弱な魔気を感じたもので。調べに向かったところ、白の魔法少女に見つかってしまいました……」

「ほう、ほう。それはそれは、いささかに」

不気味な仮面を被った小柄な体格。黒いローブに全身を包んでおり、見えるのは皺くちやの大きな手だけだった。

ゆりなとクロエが言っていた『あいつ』と条件が全て合う。

——俺は確信した。

こ、こいつが、こいつが……！

「……ピースッ！」

「ああ……。威勢の良い小娘じやのう。いつひつひ、素晴らしい。スンバラシイ」

訊きたいこと、言っただけのこととは山ほどあった。

それなのに。何故か、俺は声を出すことが出来なかった。

第百壹石：ピースとシヤクヤク 終

喉を締め付けられるような感覚――

「お前さん、ワシに何か用かねエ。恐縮だけれども、ワシはいささかに忙しくてね……」

「あ……あぐっ……」

威圧感。

吐き気がするほどの強大な魔気。

そして――剥き出しの敵意。

「……ピース様。お戯れはそこまでにしたほうが宜しいかと」

ぼそりと呟いたのは車椅子を押している少女――ネームレスだった。

「いっひっひっひ……ああ、イサさか、イささか……に、いッひっひッ」

その眼帯娘は無表情のまま、俺に一瞥もくれずにピースの車椅子を押して森の奥へと進んでいく。

そしてシャオもまるで最初から俺が居なかつたかのように、無言でシャドーの指輪にキスをすると、闇の中へと消えていった。

何故か、ふっふつと怒りがこみ上がってくる。

なんの魔法か。金縛りよろしく動けずにいた俺だったが、右手に魔力を込めて式式を掲げた。

「……くそっ、がー」

力づくで金縛りを解いた瞬間、俺は杖を振り回してピースが去って行った方へと走り出した。

――だが、すぐに歩道に出てしまう。

おかしい。さっきまで森の中心に居たはずだぜ？　こんなにすぐ道に出るはずないんだが……。

前を向いても後ろを向いても華やかな桜並木道。

「まだそんなに遠くに行っていないはず――」

「わっちやー！」

キョロキョロ辺りを見渡していたとき、向こうから走ってきた人にぶつかってしまった。

「め、メガネメガネ……」

目が数字の3のようになっていている少女が、手探りでメガネを探している。

そいつのケツの方に転がっていた特徴的なピンク色のメガネを拾い、

「ほれ、チビ天」

と。それを手渡す。

「……あつ、しゃくつち!? こんなところで何してるつちや」

メガネをかけた途端、大げさな戦隊キャラのようなポーズで俺を指差すももは。

「つーか。それはこっちのセリフなんだけれども……それよりも、お前さん車椅子のバアさんを見てないか?」

訊くと、そいつは自分の頭に乗った桜の花びらや枯れ葉をわしやわしやと手で落としながら、

「だって、ここジョギングルートやけん。でも、さつきから走つとったけど、車椅子の人なんて見てないつちやよ? おじさんとかワンちゃん散歩してる人は見かけたつちやけど」

するつてえと、何かの魔法で撒かれたってことか。

くそつたれめ……。せつかくピースのヤツと会えたのによオ。

そう、俺が拳を握り締めていると、

「しゃくつち……恐い顔してるつちや。もしかしてあのこと怒ってる?」

「あのことつてなんでえい?」

すると、ももはが俯いて両手の指をイジイジと絡め出した。

「しゃ、しゃくつちに不躰な人って言ったこと……」

あー。そういや、確かにムカついていたけど……。でも、正直なところ今はピースのことで頭がいっぱいだった。

なので。

「……いやア、別に?」

つい、そっけない返しになってしまった。

そんな俺の答えを聞くや否や、たちまちももはの目が涙ぐんでい

く。

「ご、ごめんなさい……」

「えっ!? いや、全然怒ってないから! 頼むから泣かないでくれよオ」

俺があたふたとしたところで、やにわにチビ天の胸についている懐中時計が鳴りだした。

『十六時五十五分! 十六時五十五分!』

その途端、それをポチツと止めて、

「あつ。もう塾の時間っちゃ。しゃくつち、また遊ぼうねーっ!」

さっきまでの涙は一体なんだったのか。笑顔で俺の頭を撫でると、手をぶんぶん振って走り去っていくももは。

あ、あのヤロウ……やっぱり許してやんねー!

わなわなと拳を震わせる俺の後ろから、

「……白の魔法少女」

今度は無感情な声が掛かる。

騒々しい娘から、このギャップだ。

「こ、今度はなんだア?」

怒りの矛先が定まらず、いささかに素っ頓狂な声で振り返る俺。

すると、目の前には先ほど俺をさらつと無視した眼帯娘——ネームレスが立っていた。

俺よりもチビなそいつはジーツと無言で俺をしばらく見上げた後、

「……その怒り。今は抑えて」

震える拳を一瞥してそう言った。

チビ天へ向けられた怒りだったが、ネムはピースに向けられたものだど勘違いしたのだろう。

まあ。どちらにも怒りはあるのだけれども……。

「ピースはどこでえい? 色々と言ってやりたいことがあるのだけれども」

そう言うと、ネムは一つ瞬きをして、

「もうすぐ、十七時になる。貴女を待つ人たちがいる」

「……あん? なんでそんなこと知ってるんだア?」

五時までには帰るって約束はしたが、ネムが知ってるのはおかしくねーか。

また疑問が増えちゃったぜ……と内心溜め息をついたとき、目の前の眼帯娘が俺のマフラーに——お姉さんのマフラーにそつと手を置いた。

「……まだ、ダメ。貴女は黒の魔法少女の——いえ、みんなの希望」

「き、希望？俺様がア？」

アホ面で自分を指差しながら訊いてみると、ネムがコクンと小さく頷いた。

「白の希望……そう、私は判断する」

一体全体、何を言ってるんだこいつは。

俺が希望ってどういうこつた。

相も変わらず掴めないヤツだな……。

「……時間」

ネムが言った瞬間、どこからかチャイムが鳴り響いた。

多分、こりやあ五時のチャイムかね。

「お願い、白の魔法少女……」

能面のような無表情だが、どこか悲しげな表情にも見えてくる。

……おそらく気のせいだろうけど。

まあいいや、と。俺はそいつの頭をぐしぐし撫でた。

「わーった、わーった。わかりましたんで。大人しく帰ればいいんだろオ。ったく、どいつもこいつも、意味わかんねーぜ」

式式に跨って浮かび上がった俺に、小さくバイバイをする眼帯娘。そいつに、バイバイを返して俺は急いで家に帰ることにした。

「……あっ！しゃっちゃんちゃん!!」

俺を見つけた途端、玄関の前で待っていたお姉さんが嬉しそうな声をあげる。

エプロン姿のその人は小走りで俺に近づいてくると、

「おかえりなさい……ませっ」

ギュツと俺を力いっぱい抱きしめた。

ううっ。苦しいっいたらないぜ。この抱きしめ攻撃が無ければ良い

人なんだけれども……。

やけに甘ったるい香りと、シチューの良い香りが鼻腔をくすぐる。「ちゃ、ちゃんと約束どおり帰ってきましたんで……そ、そろそろ放していたけると助かるんですが」

ようやく声を絞り出したと同時に、腹がグーッと鳴ってしまった。

「げげっ、す、すんません」

恥ずかしさのあまり俺が顔を真っ赤にしていると、お姉さんはクスクス笑って玄関を開けた。

すると、ひよこつとゆりなが顔を覗かせて、

「あつ、しゃっちゃんお帰りなさいっ。もー、二分二十四秒の遅刻だもんっ」

妙に細かい指摘だった。

なんて言い返そうかと考えていると、チビ助の足元から今度はコロ美が顔を覗かせた。

「パパさんお帰りなさいなんです」

そして、そいつの頭に乗っかっているクロエも「にゃくん」と猫のフリをして俺を出迎える。

いやはや、まったく……。こちらら大変だったつーのに、なんともノンキそうな奴らだぜ。

「……はあ」

まあ、いつか。色々あったけれども——とりあえず飯を食ってとつとと休もうかね。

「にやはは。しゃっちゃん、帰ってきたときはなんて言うんだっけ？」

「コロナはちゃんと言えたです。パパさん、ふあいとっ」

そんなやり取りに思わず笑ってしまう。

「はいはい、わーってるって。……ただいま、チビ助ども」

と。俺はグーペコの腹を押さえながら、そいつらの待つ食卓へと向かった。

第百弍石：V S 第九番模造魔寶石　ウエザー・ザ・ザ
ザザエル編

開け放たれた窓から入り込んでくる暖かい風。

桜の香りを纏ったそれは、寝そべっている俺の頬を通り過ぎ、下半身へと流れてくる。

「……………んっ」

風がケツに当たったような……………。

漫画を読む手を止めて見てみると、スカートがペロリとめくれ上がってしまっていた。

ゆりなから借りてるパンツ——それには魔女っ娘モンスターのキヤラ達がプリントされているんだが。そいつらが揃ってアホ面で天井を見上げていた。

……………なんとも恥ずかしい下着だが、ゆりな家で世話になってる身としては選ぶ権利なんて無いも同然だった。

「つたく。トランクスとズボンが恋しいぜ」

ぱっぱとスカートを直して、俺はベッドの脇に置いてある怪獣さん時計へと視線を向ける。

午後三時ちよい過ぎ。

チビ助が学校から帰ってくるまであと一時間くらいか。

それまで暇だな……………。さすがに漫画にも飽きてきたし。

あくびまじりに伸びをして、俺はもう一度ゆりなのベッドに寝転がって枕を抱きしめた。

「はあくあ。やること無いのもこれはこれでキツイもんだぜ」

シロハと弍式をシャオに奪われたあの日から一週間ほど過ぎたあたりか。

いや、もつと経っているかもしれない。十日くらいか？

あまりに何も無い日々だったからあつという間に感じたな。

飯を食ってゆりなの部屋でゴロゴロする毎日——いつもあいつが帰って来るまで暇で暇で仕方が無いぜ。

こつちの世界へと召喚され、少女化の呪いをかけられた日。それからの数日は大忙しだったからなあ。

喋る黒猫に始まり、光る蝶々やら式式という杖の封印解除。

深緑色の蜂鳥ホバー、金色の鮫ダツシユ、漆黒のカブト虫コピーとの戦闘。この前の白狐シロツキも入れて四匹か。

たった数日でこんな大勢とやり合ったんだ。またすぐに何か現れるかと思うじゃねーか。

……それなのによオ、なんも起こる気配すらないってんだからさア。

「まったくもって……いささかに落ち着かないねエ」

ゆりなにそんなことを言ったら、「えー？　なにも起きないほーが いいじゃん！　それよりゲームの続きしよーよっ」なんてノンキなことを言っただけだ。

どうもねエ。嵐の前の静けさつつうか……イヤな予感がするもんで。そろそろ模魔の一匹でもひよこつと現れて欲しいぜ。

もちろんリンクはサクツと倒せる低ランクで、それでいてだし子のように使い勝手のイイ能力を持ったヤツで――

「しゃっちゃんちゃん」

そんな妄想を始めたとき、コンコンとドアがノックされた。

「は、はいっ」

ボサボサになっている髪を急いでヘアゴムで結って、がちやりとドアを開けると、

「あつ。起きてました？」

学校帰りなのか、セーラー服を着たままのお姉さんが立っていた。

……あれ？　いつもはこんなに早く帰ってこないような。

「えつと……お、おかえりなさい」

とりあえずそう言ってみると、

「にやはは。違うのですよー。実はラケットを忘れてしまいました、取りに一度戻ってきたのですっ」

ひよいつと取り出したのは使い古されたラケットだった。

ああ。そういえば、お姉さんはテニス部だったっけ。本人は謙遜し

ているが、ももは曰くプロ選手並みの腕前らしい。

「こんなほんわかした人がねエ……いささかに想像出来ないぜ。」

「わざわざそれを……。学校に予備のラケットとか無いんスか？」

「いやー。私はこのラケットじゃないとダメなんですよー。それはそうと……はいっ、これを！」

と。渡されたのはウサちゃんの刺繍が入ったお買い物バッグだった。

その中にはお姉さんの財布とポイントカード、そしてメモ帳が入っていた。

「実はとつても言いにくいのですが……今日は特別練習があるようで、帰りがかなり遅くなってしまおうのです」

「そこまで言ったところで、俺はメモ帳をめくりつつ、

「オーケー、わかりましたんで。これに書いてあるものを買ってくればいいんスね」

ふむふむ。

結構たくさん買うものがあるけれども、多分あそこのスーパーで全部揃うだろうな。

「まあっ!! 恐悦至極に存じます……っ! ああ、可愛いし気が利くし、可愛いし、それに加えて可愛いし……なんて素晴らしい子なのでしようっ!」

「う、うわっぶ」

むにゆうつと頬に当たる二つのデカイマシユマロのようなそれに、一瞬で顔が真っ赤になってしまう。

ううっ。あまりその技を多用しないでもらいたいぜ……。なんとか抱きつき攻撃から抜け出すと、

「それでは、申し訳ありませんがおつかいをお願いしますね……あつ、ちよつといいですか？」

言つて、俺の髪の毛を結い直すお姉さん。

「ふんふくん……はいっ! 今日はこちらこっちゃんとお揃いのツーサイドアップで決まりですっ!」

ま、まアた人の髪を勝手に……。

「あらあらまあまあ、なんとっ！ 普段のストレートもスペシャル可愛いですが、この髪型もとってもお似合いですよーっ！」
「……………」

むくれ面の俺の頭をぽむぽむと撫でて、
「くれぐれもお車には気をつけて行ってきてくださいねっ。あと、知らない人について行っちゃ絶対にダメですからね？」

「わ、わかってますって」
「うふふっ。よろしい……………のですっ！」

ハートマークが飛び出しそうなウインクをして階段を降りて行ってしまった。

う、うーむ。相変わらず凄まじい人だぜ。

まあいいや。どうせ暇をしていたんだ、気分転換がてら行ってくるとするかねエ。

というか、買い物は結構好きな方なんだよな。

安くて美味そうなモン見つけるとテンション上がるし。誰が買うんだコレ……………みたいなヘンテコな商品を探すのも楽しいし。

「えーと。なににな。はなまる牛乳に、しらたき、ウインナーにミートボール、イチゴとリングと……………」

メモ帳をもう一度見直していたとき。

くいつくいつとスカートの裾が引つ張られた。

「あん？」

「んにゅ……………パパさん、もしかしてお買い物行くです？」

寝ぼけまなこのコロナが俺を見上げていた。

「……………なんでえい、起きちまったのかイ」

あからさまに嫌そうに言っつてやると、俺のスカートを掴んだままコクリと頷くコロ美。

さつきまでベッドの下で転がりながら眠っていたのに……………ちやつかり俺とお姉さんとの会話を聞いていたよう。

ぶつちやけ、あんまりこいつを連れて行きたくないんだよなあ。

あつちこつち迷子になるし、ワイワイはしゃぐし、カゴにヘンな物入れてくるしで。疲れが倍増するだけだぜ。

「お前さんのことだ、ついて来んなって言ってもついて来るよな……」
「もちろん肯定なのですつ。パパさん、抱っこ、抱っこ」

バンザイのように両手をあげて抱っこをせがむチビチビをひよ
いっと持ち上げ、

「頼むから、あんまりうるさくしないでくれよオ。ちゃんと大人しく
して俺のそばから離れないように頼むぜ」

「えへへへ、肯定ですう」

嬉しそうな笑顔で抱きついてくるそいつに、俺は諦めの溜め息をつ
いた。

……ぜってエ大変な買い物になるなこりや。

第百参石：なずな、

やはりと言うべきか。どうやら俺の不安が的中したようだ。

「あのバカチビめ。どこに行きやがったんだ」

カートを押す手を止めて惣菜コーナー、鮮魚コーナーへと足を運ぶもまったくもってチビチビの姿が見えない。

カマボコを探して来いと命令したはいいが、あれから五分ほど経っても戻ってくる気配が無い。

命令を出した際の、「カマ、ボコ……？ 初めて聞く食べ物なんです。それ、どこらへんに売ってるんです？」との問いに、惣菜か鮮魚売り場辺りにあるだろうよと言っただけでも……そのどちらにも居ないってのはどういうこった。

こんなことだったらお姉さんが昨日チビチビの為に出してくれたゆりなお古——ピヨピヨと音が鳴る靴を履かせれば良かったぜ。

他の買い物客にとって耳障りになるだろう（俺自身もあまり好かねエ）からと、普通のサンダルを履かせたのがまずかったようで。マジで迷子になってしまった。

「あ、そうだ」

もしやと思い、お菓子及びおもちゃコーナーへと向かってみる。

「俺の命令を無視して遊んでやがったら……お尻ぺんぺんだけじゃ済まさねーぞ」

ぶんすかとカートを力強く押し、高く積まれたカップラーメン売りの場の角を曲がったとき、

「ぐっ！」

またもやあの鈍痛がこめかみに走った。

これは——魔気か？

鳥肌が立っている腕をさすり、俺は辺りを見回した。

このピリツとした痛み。

ファミレスでなずなと会ったときのような……。

お菓子コーナーへ進むにつれ、その奇妙な感覚が強まっていく。

「誰だ……誰かいるのか？」

やや警戒するように喉を湿らせてゆつくりと進んで行くと、
「ふゆゆう……決めらんないよう。どーしよう、早くしないとお兄ちゃんに怒られちゃう」

お菓子コーナーの一角で一人の少女が座り込んでいた。

やけに丈の短いオーバーオールを着て、うーんうーんと唸りながら茶髪のツインテールをぴよんこぴよんこと揺らしている。

「なずな、か?」

足早に近づいて、そいつの両手に持つ二つのおもちやを後ろから覗いてみる。

えーと、なになに。『魔女っ娘モンスターガムエッグファイギュア』
だア?

それはいわゆる食品玩具というヤツで、小さな卵型のガムの中に魔女モンの人気キャラの人形が入ってるものだった。

そこで俺は思い出し、メモをもう一度広げて見てみた。

……やっぱりそうだ。買い物リストにガムエッグを四個って書いてあるぜ。

おそらくお姉さんと、ゆりな、俺にコロ美の分で四個ってことだろうな。普通のガムの方が安くてたくさん入ってるのによオ……。まあ、買って頂けるなら文句なんて微塵も無いのだけれども。

それよりも、俺は未だに唸っているなずなの後ろに同じようにしやがみ込んで、

「なーずにゃん。なーにしてんの」

と。いささかにふざけた調子で、野球帽子から飛び出したなずなのツインテールを掴み、ぴよこぴよこ弄ってみることにした。

すると、そいつはバツと振り返って、

「ふゆゆえっ!?!」

新種の深海生物のような鳴き声をあげたかと思うと、ペタンとその場に尻餅をついてしまった。

「いっひっひ。良い反応だねエ。チビ助がからかうのも解る気がするぜ」

なんて笑いながら手を差し出すと、それをギュツと掴んで、

「ふゆう。知らない人かと思ってびっくりしちゃいましたよ……。も
っ」

立ち上がり、ちよこつとだけぷくぷくと頬を膨らませる。

ボーイッシュな格好をしたサファイアブルーの瞳をした少女――
名前は宝樹なずな。

三年生になったゆりなの後輩で、おそらくは二年生で歳は八つくら
いだろう。

……いや、ちよつと自信が無いな。

「ときになず代さんさア、お歳はいくつだっけ」

訊いてみると、そいつは「なずよ……。？」と少しだけ困り顔で首を
傾げたのち、

「えつと。わたしは八才です」

左手をパーにして、右手の三本指を突き出す。

そんな仕草に俺はホツと胸を撫で下ろした。

どうやら二年生の八才で当たってたらしいな。

うんうんと頷いている俺に、ますます疑問符をデカくしたなずな
は、

「あの一。シャクヤク……。さん。今日は何かお買い物ですか？」

困り顔のまま頑張って微笑んで訊ねてきたそいつに、俺はすかさず
チョップからのデコピンコンボをかました。

もちろん生身相手だから氷付与はしていない為、残念ながらあまり
点数は稼げない。

「ふゆうっ!?! い、痛いですーっ!」

ふゆふゆ言いながら頭を押さえてしゃがみ込んだなず代に、

「俺ア、ダチ公にそうやって他人行儀な呼び方されるのが一番嫌いな
んでえい」

「だ、ダチ公ってなんですかあ……」

「んなの決まってるだろオ、友達って意味だぜ」

そう言うのと、そいつは目を丸くして俺を見上げた。

「……え？」

「チビ助のダチは、俺のダチだ。不良つつうもんはそうやって人脈を

広げていくモンなんでいい」

しかし。そいつはしゃがみ込んだままジツと俺の顔を見上げるばかりだ。

なんだろう……俺、もしかしてすげーヘンテコなこと言っちゃったのか？

たちまちカーツと耳が熱くなったそのとき。

「あつ、あつ、あの。わたしなんかとお友達になってくれるんですか……？」

——わたしなんか？

気が弱そうだとは思っていたが……。

違和感を覚えた俺は、眉根を寄せつつ、

「友達つつうのは、なつてくれるとかそういうのじゃねーだろ」

「だ、だって、わたしは……」

「あんれま。もしかして俺と友達になるのはイヤってか。いやはや、それはそれは出すぎた真似を——」

いつひつひとテキトーに笑って誤魔化そうとしたのだが。

「い、いえっ！ わ、わ、わたし、嬉しいですっ！ お友達っ！」

「うおっ!？」

ずいっと大声をあげるもんだから、周りの客の視線が俺たちを集まる。

「ちよ、ちよっと、あの。少し静かにだな……」

「で、でも、ゆりり先輩と同じ歳だから、シヤクク先輩って呼ばせてくださいっ！」

なんとも律儀つつーか。八才にしては出来すぎた娘さんつつうか。

いや、まあ。この世界のチビどもはどいつもこいつも精神年齢が高めだからなあ。

「お友らち……こ、これから、よりよひくお願いしますっすっ！」

おい待て待てっ。なんで土下座をしてるんだこいつは!?

しかも、なんかすげエ噛みまくってるしっ！

「わ、わかりましたんで。あの、本当にもういいからさ……」

「ははーっ！ シヤルル先ぴゃい！」

いやいや。シャルルって誰だよ。フランス国王になんかなった覚えはないぞ。

ゆりなやももはと比べて結構まともなヤツかと思いきや、こいつもこいつでぶっ飛んでやがるぜ……。

周りの客からの訝しげな視線に、いよいよ耐え切れなくなってきたところで、

「おーい。おっせーぞ。なにしてんだよ、なずう」

気だるげにカートを押してきた金髪……いや、明るめの茶髪の少年は、俺たちを見るなり、

「うえ!? お、お前……本当になにしてんの?」

悪そうな見た目には似合わず、抜けた声で俺と土下座しているなずなを交互に見る少年。

まったくもって——本当に何してんだろうな、俺たちは……。